Oracle® Fusion Middleware

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition ユーザーズ・ガイド

12.2.1.3.0

E83138-03

2017 年 8 月

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition を使用してクリティカルでタイムリなビジネス上の決定を行うためのデータを構成して提示する方法を説明しています。

ORACLE

Oracle Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition ユーザーズ・ガイド、12.2.1.3.0

E83138-03

Copyright © 2015 年、2017 年、Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: Jenny Smalling

執筆協力者: Christine Jacobs、Stefanie Rhone

協力者: Oracle Business Intelligence development、product management, and quality assurance teams

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIX は The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。お客様との間に適切な契約が定められている場合を除いて、オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。お客様との間に適切な契約が定められている場合を除いて、オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに xvii

対象読者 xvii
ドキュメントのアクセシビリティ xvii
関連ドキュメントとその他のリソース xvii
表記規則 xviii

Oracle Business Intelligence ユーザー向けの新機能 xix

Oracle BI EE 12c (12.2.1)の新機能 xix

1 Oracle Business Intelligence Enterprise Edition についての序説

Oracle BI Enterprise Edition の概要 1-2
Oracle BI EE オブジェクトの格納と管理 1-3
Oracle BI Enterprise Edition へのサイン・イン 1-4
Oracle BI Enterprise Edition からのサイン・アウト 1-5
Oracle BI Enterprise Edition 内の移動 1-5
Oracle BI EE ホーム・ページとは 1-6
新規ホーム・ページとは 1-6
プロジェクトおよびビジュアライゼーションの検索 1-7
BI 質問でのデータのビジュアル化 1-8
検索のヒント 1-9
Oracle BI EE グローバル・ヘッダーとは 1-10
ヘルプや詳細へのアクセス 1-12
権限と許可について 1-13
他のユーザーの代理について 1-13
他のユーザーの代理 1-14
プリファレンスの設定 1-14
BI デスクトップ・ツールのダウンロード 1-15
Oracle Business Intelligence クライアント・ツールのインストール 1-16
Oracle BI EE と他の製品との対話方法 1-18
Oracle BI EE と Oracle BI Publisher の統合 1-18
Oracle BI EE と Oracle BI Mobile アプリケーション・デザイナの統合 1-19
Oracle BI EE と Oracle Business Intelligence Mobile の統合 1-19

Oracle BI EE と Oracle Enterprise Performance Management System の統合 1-20
Oracle BI EE と Oracle BI アプリケーションの統合 1-20
Oracle BI EE と Microsoft Office の統合 1-20
他のガイド内の関連トピック 1-21
システム要件と動作要件 1-21

2 分析の作成

分析とは 2-2
分析の操作方法 2-2
分析の処理方法 2-2
分析の最新結果を常に表示する方法 2-2
サブジェクト領域と列とは 2-3
列のタイプとは 2-4
列のビジュアル表示方法 2-5
二重列機能の理解 2-6
「分析」エディタとは 2-7
「分析」エディタのタブ内のペインの管理 2-8
分析を作成する工程とは 2-8
新規分析の作成 2-9
分析の基準の指定 2-9
Null 抑制の理解 2-12
例 1: 行エッジのメジャーへのフィルタの追加 - Null 値が含まれている場合 2-13
例 2: 行エッジのメジャーへのフィルタの追加 - Null 値が含まれている場合 2-14
例 3: 行エッジのメジャーへの「NULL でない」フィルタの追加 - Null 値が含まれている場合 2-14
列の式の編集 2-15
集合演算を使用した列の結合 2-16
「サブジェクト領域」ペインからのメタデータ情報の表示 2-19
カタログへの列の保存 2-19
サブジェクト領域およびサブジェクト領域フォルダのソート順の変更 2-20
サブジェクト領域のソート順が反映される場所 2-21
分析の結果の表示 2-22
追加複合レイアウトの作成 2-23
分析の結果にデータがないというアラートのユーザーへの発信 2-23
分析へのプロンプトの追加 2-24
分析用論理 SQL 文の確認 2-24
分析の保存 2-26
分析からのエージェントの作成 2-27
分析の編集 2-27
分析のダッシュボードへの埋込みについて 2-28
直接データベース・リクエストの使用 2-28
直接リクエストの権限の設定 2-28
直接データベース・リクエストの実行 2-28

直接データベース・リクエストの結果の表示 2-29
変数の使用 2-29
セッション変数とは 2-29
リポジトリ変数とは 2-30
プレゼンテーション変数とは 2-31
リクエスト変数とは 2-31
グローバル変数とは 2-32
変数を参照できる場所 2-33
変数を参照する構文とは 2-34
使用できる事前定義プレゼンテーション変数 2-38
タイトル・ビューでの変数の参照例 2-40

3 分析への外部データの追加

分析への外部データの追加について 3-1
外部サブジェクト領域へのアクセスおよび外部サブジェクト領域のデータを含む分析の共有 . 3-2
サブジェクト領域のアイコン 3-2
分析への外部サブジェクト領域の追加 3-3
分析からの外部サブジェクト領域の除去 3-3
外部サブジェクト領域データのダウンロード 3-4
Oracle BI EE からの外部サブジェクト領域の削除 3-4

4 ダッシュボードでの表示用のビューの追加

ビューとは 4-2
使用可能なビューのタイプ 4-2
使用可能なグラフのタイプ 4-5
使用可能なファンネル・グラフのタイプ 4-7
トレリス・ビューで使用可能なグラフのタイプ 4-8
使用可能なゲージのタイプ 4-8
使用可能な論理 SQL ビューのタイプ 4-9
使用可能なウォーターフォール・グラフの書式のタイプ 4-9
分析の結果へのビューの追加 4-10
推奨ビジュアライゼーション機能とは 4-11
ビューの編集 4-12
表ビューおよびピボット表ビューの編集 4-14
グラフ・ビューの編集 4-17
トレリス・ビューの編集 4-21
ゲージ・ビューの編集 4-28
マップ・ビューの編集 4-29
ナレーティブ・ビューの編集 4-37
列セレクタ・ビューの編集 4-38
ビュー・セレクタ・ビューの編集 4-39
凡例ビューの編集 4-39
パフォーマンス・タイル・ビューの編集 4-40

ツリーマップ・ビューの編集 4-42
ヒート・マトリックス・ビューの編集 4-46
ビューのデータのレイアウトの変更 4-49
値の変更とライトバックの実行 4-64
値と様々なタイプのユーザーの変更について 4-64
ライトバックのプロセス 4-65
列へのライトバック機能の追加 4-65
表ビューへのライトバック機能の追加 4-66
ビューでのライトバックのモードについて 4-66
ビューでの相互作用 4-67
ビューでのクリックの相互作用 4-67
ビューの右クリック相互作用 4-68
ビューでのドリル 4-68
ドリルできる列 4-68
列のドリルを許可する方法 4-68
フィルタおよび選択ステップに対するドリルの影響 4-69
ビューでのデータのソート 4-69
共通のソート機能 4-69
データのソート 4-70
ソートのクリア 4-71
表およびピボット表でのソート 4-72
例 1: 各エッジに列が 1 つある場合のソート 4-73
例 2: 行エッジに列が 2 つある場合のソート 4-74
例 3: 列エッジにメジャーが 2 つある場合のソート 4-74
右クリック・メニューを使用したグラフのソート 4-75
表ビュー、ピボット表ビューおよび拡張トレリス・ビューでの行および列のサイズ変更 4-77
ビューの保存 4-77
ビューまたは複合レイアウトの名前の変更 4-78
ビューの再配置 4-78
ビューの印刷 4-79
ビューの印刷およびエクスポート・オプションの変更 4-79
ダッシュボードに表示されるビューのプレビュー 4-80
ビューの削除 4-80
ビューの結果のリフレッシュ 4-80
エージェント・ユーザーへ配信するビューのカスタマイズ 4-81
ビューのマスター詳細リンクとは 4-81
マスター・ビューとは 4-82
詳細ビューとは 4-85
ビューのマスター詳細リンクの作用 4-86
マスター詳細関係でのビューのリンク 4-86
マスター・ビューの定義 4-87
詳細ビューの定義 4-87
マスター詳細関係でリンクされた表とグラフの例 4-89

5 ダッシュボードの作成と使用

ダッシュボードとは 5-2
ダッシュボードの作成と編集を行うユーザー 5-3
ダッシュボード・ビルダーとは 5-3
ダッシュボードのルック・アンド・フィールを制御する方法 5-4
ALTA スタイルについて 5-4
ダッシュボードの作成 5-4
ダッシュボードの編集 5-5
ダッシュボードへの新規ページの追加 5-6
ダッシュボードへのサブページの追加 5-6
ダッシュボードへのコンテンツの追加 5-7
拡張ページ・プロパティの設定 5-8
ダッシュボード・ページへの Oracle BI Publisher レポートの追加 5-9
Oracle BI Publisher レポートとダッシュボード・ページとの相互作用 5-9
ダッシュボード・ページへのレポートの追加 5-10
パラメータ化されたレポートでのプロンプトの使用 5-11
ダッシュボードとそのページのプロパティの変更 5-12
ダッシュボード・ページに追加されたオブジェクトのプロパティの変更 5-13
ダッシュボード・ページの実行の遅延 5-13
ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトの作成について 5-14
カスタム印刷レイアウトの使用時にサポートされないアイテム 5-15
ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトの作成 5-17
カスタム・レイアウトの編集、置換または削除 5-18
ダッシュボード・ページのオブジェクトの削除 5-19
ダッシュボードからのサブページの削除 5-19
ダッシュボード・ページの削除 5-20
現在のダッシュボード・ページの削除 5-20
1 ページ以上のダッシュボード・ページの削除 5-20
他の名前と他の場所でのダッシュボードの保存 5-20
ダッシュボードのオープンと使用 5-21
ダッシュボード・ページの保存済カスタマイズとは 5-22
保存済カスタマイズの作成と使用のサンプル・シナリオ 5-22
カスタマイズの保存 5-23
保存されたカスタマイズの適用 5-24
保存済カスタマイズの編集 5-24
現在のカスタマイズのクリア 5-25
新規ユーザーのダッシュボード・テンプレート・ページについて 5-25
ダッシュボード・テンプレート・ページの仕組み 5-25
Oracle BI EE でダッシュボード・テンプレート・ページを検索する場所 5-25
ユーザーによるダッシュボード・テンプレート・ページの使用方法 5-26
新規ユーザーのダッシュボード・テンプレート・ページの作成 5-26

ダッシュボード・ページの公開 5-27
ダッシュボード・ページへのリンクの作成について 5-27
ブックマーク・リンクとは 5-27
プロンプト・リンクとは 5-28
ダッシュボード・ページへのリンクの作成 5-32
ブリーフィング・ブックの使用 5-33
ブリーフィング・ブックとは 5-33
新規または既存のブリーフィング・ブックへのコンテンツの追加 5-34
ブリーフィング・ブックの編集 5-35
ブリーフィング・ブックのダウンロード 5-35
ダッシュボード・ページへのブリーフィング・ブックのリストの追加 5-36
エージェントを使用したブリーフィング・ブックの配信 5-37

6 分析用データのフィルタリングと選択

インラインまたは名前付きでのオブジェクトの保存 6-1
インライン・オブジェクトまたは名前付きオブジェクトとは 6-2
名前付きオブジェクトのフォルダ構造とは 6-2
インラインまたは名前付きでのフィルタの保存 6-2
インラインまたは名前付きでのグループおよび計算項目の保存 6-2
フィルタおよび選択ステップとは 6-3
フィルタと選択ステップの違い 6-4
階層列に影響する属性列へのフィルタの適用 6-4
データの選択の使用 6-4
選択ステップの作成 6-5
選択ステップの編集 6-6
グループ・オブジェクトとしての選択ステップの保存 6-6
選択ステップと二重列の使用 6-6
列フィルタの作成 6-7
列フィルタの編集 6-8
EVALUATE_PREDICATE 関数の使用 6-9
フィルタに EVALUATE_PREDICATE 関数を使用する方法 6-9
インライン・フィルタへの EVALUATE_PREDICATE 関数の追加 6-9
分析への名前付きフィルタの適用 6-10
列フィルタの組合せとグループ化 6-10
保存済分析のフィルタとしての使用 6-11
分析の列フィルタに対する SQL 文の作成または編集 6-11
計算済メジャーの使用 6-12
グループと計算項目の使用 6-13
グループとは 6-13
計算項目とは 6-13
グループと計算項目の作成 6-14
グループと計算項目の編集 6-15
別の分析へのグループの追加 6-16

グループと計算項目のネスト 6-17
計算項目の例 6-17

7 ダッシュボードと分析でのプロンプト

インライン・プロンプトとダッシュボード・プロンプトとは 7-1
列プロンプトとは 7-2
他のプロンプト・タイプ 7-3
列プロンプトまたは変数プロンプトに使用できるユーザー入力オプションのタイプ 7-3
Oracle BI Mobile でのプロンプトの動作方法 7-7
ダッシュボード・プロンプトと分析プロンプトとの相互作用 7-7
Oracle BI EE がデフォルト値で適用するプロンプトの順序 7-8
オートコンプリートとは 7-9
列プロンプトの作成 7-10
列プロンプトによる選択ステップのオーバーライド 7-12
イメージ・プロンプトの作成 7-13
通貨プロンプトの作成 7-15
変数プロンプトの作成 7-16
プロンプトの編集 7-18
ダッシュボードまたはダッシュボード・ページへのダッシュボード・プロンプトの追加 7-18
ダッシュボードまたはダッシュボード・ページへの非表示のダッシュボード・プロンプトの追加 7-19

8 分析、ビューおよびダッシュボード・ページの書式設定

書式設定可能なもの 8-1
分析の列への書式の適用 8-1
ビューへの書式の適用 8-2
ダッシュボード・ページへの書式の適用 8-2
分析の列の書式設定 8-2
適用可能な書式設定の種類 8-2
書式の列への適用 8-3
書式設定のデフォルトの保存 8-3
装飾的な書式とは 8-4
保存済分析を使用した他の分析の外観の変更 8-4
表、ピボット表、パフォーマンス・タイル、グラフ、ヒート・マトリックスおよびトレリスへの条件付き書式の適用 8-6
条件付き書式の適用方法 8-6
別の列に基づく条件付き書式 8-7
条件付き書式に影響を及ぼす要因 8-7
条件付き書式の適用 8-10
ランキングに対する条件付き書式設定の例 8-11
カスタム・ファイルをローカルに格納し fmap 関数を使用して参照する方法 8-11
カスタム書式設定マスク 8-12
カスタム書式設定文字列 8-15

日付と時間フィールドに対するカスタム書式設定文字列 8-16
数値フィールドに対するカスタム書式設定文字列 8-18

9 コンテンツの配信

エージェントとは 9-1
アラートとは 9-2
エージェントの仕組み 9-2
「エージェント」エディタとは 9-3
エージェントへのアクセスの制御について 9-3
エージェントでのカスタマイズの使用について 9-4
エージェントの作成 9-5
エージェントの設定のサマリーの表示 9-6
エージェントの保存 9-6
エージェントのサブスクライブ 9-6
サブスクライブまたは所有するエージェントのリストの表示 9-7
エージェントからのサブスクライブ解除 9-7
エージェント・サブスクライブのカスタマイズ 9-7
カスタマイズしたフィルタ値のエージェントの結果での表示 9-8
エージェントのスケジュールの無効化と有効化 9-8
デバイスと配信プロファイルとは 9-9
デバイスと配信プロファイルの構成 9-10
アラートへのアクセスおよび管理 9-12
アラート用の RSS フィードのサブスクライブ 9-12

10 条件の操作

条件とは 10-1
条件の使用目的 10-2
条件の要素とは 10-2
名前付き条件とは 10-2
インライン条件とは 10-3
条件の作成者 10-3
名前付き条件の作成 10-3
エージェントがコンテンツを配信するか、アクションを実行するかを決定するための条件の使用 10-4
アクション・リンクをダッシュボード・ページに表示するかどうかを決定するための条件の使用 10-4
セクションをダッシュボード・ページに表示するかどうかを決定するための条件の使用 10-5
条件の設定の指定 10-5
名前付き条件の編集 10-6
エージェントで使用される条件の編集、カスタマイズ、テスト、保存および無効化 10-6
ダッシュボード・ページのアクション・リンクで使用される条件の編集、テスト、保存および削除 10-7
ダッシュボード・ページのセクションで使用される条件の編集、テスト、保存および削除 ... 10-8

11 アクションの操作

アクションとは 11-2
アクション・リンクとアクション・リンク・メニューとは 11-3
使用可能なアクション・タイプ 11-4
　関連するコンテンツに移動するアクション 11-5
　外部システムで操作、関数またはプロセスを起動するアクション 11-5
アクションを作成できるユーザー 11-6
アクションを追加できる場所 11-6
名前付きアクションとは 11-7
インライン・アクションとは 11-8
アクション・パラメータとは 11-8
アクションの条件による有効化について 11-9
　分析に追加されたアクションの条件による有効化について 11-9
　ダッシュボード・ページに追加されたアクションの条件による有効化について 11-10
　エージェントに追加されたアクションの条件による有効化について 11-10
アクションの実行時にユーザーに表示される情報のカスタマイズについて 11-11
名前付きアクションの作成 11-11
新規アクションの設定の指定 11-11
分析へのアクションの追加 11-15
ダッシュボード・ページへのアクションの追加について 11-16
アクション・リンクを使用したダッシュボード・ページへのアクションの追加 11-16
　「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログの完了 11-17
アクション・リンク・メニューを使用したダッシュボード・ページへのアクションの追加 . 11-18
エージェントへのアクションの追加 11-18
KPI へのアクションの追加 11-19
スコアカードのイニシアチブおよび目標へのアクションの追加 11-20
既存の名前付きアクションに基づいた新規アクションの作成 11-20
名前付きアクションの編集 11-21
分析に追加されたアクションまたはアクション・リンクの編集 11-21
ダッシュボード・ページに追加されたアクション、アクション・リンクおよびアクション・リンク・メニューの編集 11-22
エージェントに追加されたアクションの編集 11-22
KPI に追加されたアクションまたはアクション・リンクの編集 11-22
スコアカードのイニシアチブおよび目標に追加されたアクションおよびアクション・リンクの編集 11-23
分析内のインライン・アクションのカタログへの保存 11-23
ダッシュボード内のインライン・アクションのカタログへの保存 11-24
名前付きアクションの実行によるテスト 11-25

12 KPI と KPI ウォッチリストの使用

KPI とは 12-1
KPI の評価方法 12-2

KPI の使用方法 ... 12-2
ディメンションおよび固定されたディメンション値とは ... 12-3
KPI の権限と許可について ... 12-4
KPI の作成方法 ... 12-4
KPI の作成 ... 12-5
KPI の編集 ... 12-8
カタログからの KPI の編集 ... 12-8
KPI ウォッチリストからの KPI の編集 ... 12-9
ターゲット設定とは ... 12-9
KPI のターゲット設定を設定するための前提条件 ... 12-9
KPI のターゲット設定の設定に関する概要 ... 12-10
ターゲット設定とのユーザー相互作用 ... 12-11
KPI からの分析の生成 ... 12-11
KPI からのエージェントの作成 ... 12-11
KPI のビジネス所有者への連絡 ... 12-13
KPI のステータスのオーバーライドについて ... 12-14
KPI へのコメントの追加について ... 12-14
KPI ウォッチリストとは ... 12-14
KPI ウォッチリストの作成 ... 12-15
KPI ウォッチリストの編集 ... 12-16

13 スコアカード

Oracle Scorecard and Strategy Management とは ... 13-3
バランス・スコアカードとは ... 13-3
「スコアカード」エディタとは ... 13-5
スコアカード・オブジェクトとは ... 13-6
スコアカードの作成方法 ... 13-7
スコアカードの権限と許可について ... 13-8
「スコアカード」エディタでの編集モードと表示モードの使用 ... 13-9
スコアカードの作成 ... 13-10
スコアカードのオープンと編集 ... 13-10
概要情報の表示 ... 13-10
視点領域について ... 13-12
視点コントロールの設定 ... 13-13
ビジョン・ステートメントとは ... 13-13
ビジョン・ステートメントの定義 ... 13-14
ミッション・ステートメントとは ... 13-14
ミッション・ステートメントの定義 ... 13-15
パースペクティブとは ... 13-15
カスタム・パースペクティブの作成 ... 13-16
キー・パフォーマンス・インディケータ(KPI)とは ... 13-17
目標とは ... 13-17
目標の作成 ... 13-18

目標またはイニシアチブの「分析」ペインの完了 ... 13-19
イニシアチブとは ... 13-20
イニシアチブの作成 ... 13-21
ビジネス所有者への連絡 ... 13-22
コメントについて ... 13-22
コメントの操作 ... 13-23
「コラボレーション」ペインでのコメントの操作 ... 13-24
ウォッチリストでのコメントの操作 ... 13-24
ビューの「図」タブでのコメントの操作 ... 13-25
イニシアチブや目標のパフォーマンス・アセスメントの理解 ... 13-26
アセスメント・マッピングについて ... 13-26
子目標に基づく目標のパフォーマンス・アセスメントの決定例 ... 13-27
子 KPI に基づく目標のパフォーマンス・アセスメントの決定例 ... 13-28
スコアカードに対するアセスメント・マッピングの定義 ... 13-29
子の目標、イニシアチブおよび KPI への重みの割当て ... 13-29
ステータスのオーバーライドについて ... 13-30
ステータスのオーバーライドの操作 ... 13-31
ウォッチリストのステータスのオーバーライドの操作 ... 13-31
ビューの「図」タブでのステータスのオーバーライドの操作 ... 13-32
戦略ツリーとは ... 13-32
戦略ツリー図の理解 ... 13-33
戦略貢献ホイール図の理解 ... 13-33
戦略ツリーの作成 ... 13-34
戦略マップとは ... 13-35
戦略マップの作成 ... 13-36
原因と結果マップとは ... 13-38
原因と結果マップの作成 ... 13-39
ウォッチリストの理解 ... 13-40
ウォッチリストのカスタマイズ ... 13-41
KPI ウォッチリストとは ... 13-43
KPI 詳細の使用 ... 13-43
スマート・ウォッチリストとは ... 13-44
スマート・ウォッチリストの作成 ... 13-45
カスタム・ビューとは ... 13-47
カスタム・ビューの作成 ... 13-47
スコアカード・オブジェクトのオープン ... 13-48
スコアカード・オブジェクトの編集 ... 13-49
スコアカード・オブジェクトの削除 ... 13-49
ダッシュボードへのスコアカード・オブジェクトの追加 ... 13-49
トラブルシューティング ... 13-50

14 Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトの管理

Oracle BI プレゼンテーション・カタログとは ... 14-2

カタログの使用者 14-2
ビジネス・インテリジェンス・オブジェクトの保存 14-3
オブジェクトの検索方法 14-4
基本カタログ検索 14-4
全文カタログ検索 14-4
カタログ内のオブジェクトの検索 14-5
オブジェクト固有のタスク 14-6
お気に入りとは 14-7
お気に入りへのオブジェクトの追加 14-7
お気に入りオブジェクトへのアクセス 14-7
お気に入りの編成 14-7
お気に入りからのオブジェクトの削除 14-8
分析、KPI および分析プロンプト・データのエクスポート 14-9
プロパティへのアクセス 14-10
Oracle BI EE のセキュリティのレベル 14-10
権限とは 14-10
オブジェクトの権限の割当て方法 14-11
アクセス制御リストと権限 14-11
権限定義 14-12
オブジェクト・タイプごとに使用可能な権限 14-14
権限の設定に関する推奨事項 14-14
権限の割当て 14-15
オブジェクトの所有者とは 14-16
オブジェクトの所有権の割当て 14-17
オブジェクトの所有権の取得 14-17
アーカイブとは 14-18
オブジェクトのアーカイブ 14-18

15 BI コンポーザを使用した分析操作

BI コンポーザとは 15-1
BI コンポーザを使用できる場所 15-2
Oracle BI Enterprise Edition での BI コンポーザの可用性 15-2
分析エディタと BI コンポーザの比較 15-3
BI コンポーザで作業可能なビューのタイプ 15-3
BI コンポーザでの分析の作成または編集の手順 15-4
BI コンポーザを使用した分析の作成 15-5
BI コンポーザを使用した分析の編集 15-6
BI コンポーザでの分析の表示 15-7
分析エディタを使用して作成した分析の編集 15-7

A エンド・ユーザーに必要な基本情報

結果のエクスポートについて A-1
結果のエクスポート A-2

ダッシュボードおよびダッシュボード・ページのエクスポートについて A-2
ヒート・マトリックス・ビュー、表ビュー、ピボット表ビュー、トレリス・ビューでの値のソートについて A-3
ビュー内の行および列のサイズ変更について A-3
結果のドリルについて A-3
ドリルとは A-3
ドリルできる場所 A-3
分析およびダッシュボードのアクション・リンクやアクション・リンク・メニューを使用したアクションの実行 A-5
分析およびダッシュボードのアクション・リンクに関連付けられているアクションの実行について A-6
グラフ、ゲージおよびファンネルでのセクション・スライダの使用方法 A-6
ダッシュボード・ページのマップ・ビューでの作業について A-7
マップ・ビューのパン A-7
マップ・ビューのズーム A-8
マップ・ビューのドリル A-9
マップ・ビューでのフォーマットのしきい値の変更 A-9
マップ・ビューでのフォーマットの表示および非表示 A-10
グラフのズームおよびスクロール A-10
マスター詳細関係でリンクされているビューでの作業について A-11
ダッシュボード・ページまたは分析の表ビューに表示されるデータの変更 A-12
ライトバックのエラーの処理について A-13
ダッシュボードでの Oracle BI Publisher レポートへのアクセス A-14
ダッシュボード・ページの Oracle BI Publisher ツールバーの使用方法 A-14
ブレッドクラムを使用したナビゲートについて A-14
ダッシュボード・ページの印刷 A-15
スコアカード・オブジェクトの操作について A-16
KPI の実際の値とターゲット値の変更 A-16

B アクセシビリティ機能

アクセシビリティ機能の使用 B-1
アクセシビリティ機能とは B-1
キーストロークを使用したサイン・イン B-2
アクセシビリティ・モードの変更 B-2
キーボード・ショートカット B-3
Oracle BI EE と Oracle BI Publisher のキーボード・ショートカット B-4
ホーム・ページでの移動 B-5
Oracle Business Intelligence ダッシュボードでの移動 B-6
アクセシビリティに対応した設計 B-7
一般的な情報の入手 B-7
よくある誤解の回避 B-7
推奨されるベスト・プラクティスの踏襲 B-8
アクセシブルなコンテンツに関する一般的なガイドラインの準拠 B-8

アクセシブルなダッシュボードの設計 B-9
アクセシビリティを高めるオブジェクトの使用 B-11
ビュー・セレクタを使用したコンテンツの切替え B-11
カスタム HTML マークアップ用の静的テキスト・オブジェクトの使用 B-12

はじめに

Oracle Business Intelligence Foundation Suite は、完全でオープンな統合ソリューションであり、レポート作成、非定型の問合せ、OLAP (オンライン分析処理)、ダッシュボード、スコアカード、What-If 分析など、企業のビジネス・インテリジェンス上のニーズすべてを対象にしています。

Oracle Business Intelligence Foundation Suite には、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition が含まれています。

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition(Oracle BI EE)は包括的な一連のエンタープライズ・ビジネス・インテリジェンス・ツールおよびインフラストラクチャであり、拡張性のある効率的な問合せおよび分析サーバー、非定型の問合せおよび分析ツール、インタラクティブ・ダッシュボード、プロアクティブ・インテリジェンスとアラート、エンタープライズ・レポート・エンジンなどが含まれます。

このガイドには、Oracle BI EE を使用してクリティカルでタイムリなビジネス上の決定を行うためのデータを構成して提示する作業に関する情報が含まれています。

対象読者

このドキュメントは、Oracle Business Intelligence を使用してクリティカルでタイムリなビジネス上の決定を行うためのデータを構成して提示するユーザー(中間層管理者、レポート・スペシャリスト、部門レポータ、情報コンシューマなど)を対象としています。

(このガイドでは、レポート・スペシャリストと部門レポータをまとめてコンテンツ設計者と呼び、情報コンシューマをエンド・ユーザーと呼びます。)モバイル・デバイスで分析を表示するユーザーも含まれます。

ドキュメントのアクセシビリティ

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト(http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc)を参照してください。

Oracle Support へのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は(http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info)か、聴覚に障害のあるお客様は(http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs)を参照してください。

関連ドキュメントとその他のリソース

この製品についての情報は様々な場所で得られます。

関連する Oracle Business Intelligence のドキュメントのリストは、Oracle Business Intelligence のドキュメント・ライブラリを参照してください。

さらに、次もあります。

- Oracle Business Intelligence に関連するオンライン・トレーニングのリソースについては、Oracle Learning Library を参照してください。
- 製品情報センターに関するサポート・ノート(記事 ID: 1267009.1)に My Oracle Support (`https://support.oracle.com`)でアクセスしてください。

表記規則

このドキュメントでは固有の表記規則が使用されます。

表記規則	意味
太字	太字は、アクションに関連付けられたグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素や、本文または用語集で定義されている用語を示します。
イタリック体	イタリック体は、ブック・タイトル、強調、またはユーザーが特定の値を指定するプレースホルダー変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、またはユーザーが入力するテキストを示します。

Oracle Business Intelligence ユーザー向けの新機能

アプリケーションに加えられた最新の機能について説明します。

この序章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 12*c* (12.2.1)の新機能について説明します。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- Oracle BI EE 12c (12.2.1)の新機能

Oracle BI EE 12*c* (12.2.1)の新機能

アプリケーションの新機能について説明します。

Oracle BI EE 12*c* (12.2.1)の新機能は次のとおりです。

- グラフの機能強化
- ビューの機能強化
- 分析の機能強化
- スコアカードの機能強化
- ダッシュボードの機能強化
- 新規ホーム・ページ

グラフの機能強化

このリリースでは、次のようにグラフが機能強化されました。

- コンテキスト・メニュー(右クリック)を使用したグラフ・ビューのソート機能。ダッシュボード・ページ上または「分析」エディタの「結果」タブのグラフ・ビュー内で右クリックすると、新しい「ソート」ダイアログが表示されます。凡例、データ・マーカーおよびグループレベル(X 軸)項目を右クリックすると、**「ソート」**や**「ドリル」**などのオプションを含む相互作用メニューが表示されます。ビューの右クリック相互作用を参照してください。

ビューの機能強化

このリリースには、コンテンツ設計者がより効果的な分析をより速く作成するのを支援する、次のような様々なタイプのビューの拡張機能が含まれています。

- ヒート・マトリックスという新規ビュー・タイプ。ヒート・マトリックスは、2 次元によるデータの表現であり、色のグラデーションで値を特徴付けます。単純ヒート・マトリックス・ビューは即時に情報のビジュアル・サマリーを提供するも

ので、大量のデータを分析して外れ値を確認する用途に適しています。ヒート・マトリックス・ビューの編集を参照してください。

- コンテキスト・メニュー(右クリック)を使用した、グラフ、ヒート・マトリックス、ピボット表、表、ツリーマップ、トレリスの各ビューのソート機能。ダッシュボード・ページ上または「分析」エディタの「結果」タブのデータ・ビュー内で右クリックすると、新しい「ソート」ダイアログが表示されます。ビューの右クリック相互作用を参照してください。

分析の機能強化

このリリースでは、分析に次の機能が加えられました。

- 列のプロパティの設定時に、パーセンテージで表示するためにデータを 100 倍するかどうかを指定できます。「列のプロパティ」ダイアログの「データ書式」タブの**「%のスケール(x 100)」**コンポーネントを参照してください。

- アップロードした外部ソースからデータを分析に追加できます。外部データの追加はマッシュアップと呼ばれることもあります。分析への外部データの追加を参照してください。

スコアカードの機能強化

このリリースでは、スコアカードに表示される KPI ウォッチリストとすべてのウォッチリストのスタイル設定およびカスタマイズを行うことができます。各ウォッチリストのカスタム・スタイルを設定し、ウォッチリストの列の順序や表示を名前変更したり変更することができます。ウォッチリストのカスタマイズを参照してください。

ダッシュボードの機能強化

このリリースでは、拡張ページ・プロパティを設定して、現在のダッシュボード・ページで設定する受信ナビゲーション・パラメータを指定することができます。これにより、ナビゲーション・アクションに関連するパラメータがどのように適用されるかを制御できます。拡張ページ・プロパティの設定を参照してください。

新規ホーム・ページ

今回のリリースでは、新規ホーム・ページにアクセスできるようになります。これにより、BI 質問、Visual Analyzer (VA)または OBI クラシック・インタフェースを使用して、ビジュアライゼーション、分析およびダッシュボードの検索、表示または作成が可能になります。新規ホーム・ページとはを参照してください

1

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition についての序説

この章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の使用を開始する方法および Oracle BI EE でサイン・イン、サイン・アウトおよびナビゲートする方法を説明します。また、ホーム・ページ、グローバル・ヘッダー、別のユーザーとして実行する方法、プリファレンスの設定方法、および Oracle BI EE と他の製品との対話方法も説明します。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- Oracle BI Enterprise Edition の概要
- Oracle BI EE オブジェクトの格納と管理
- Oracle BI Enterprise Edition へのサイン・イン
- Oracle BI Enterprise Edition からのサイン・アウト
- Oracle BI Enterprise Edition 内の移動
- Oracle BI EE ホーム・ページとは
- 新規ホーム・ページとは
- Oracle BI EE グローバル・ヘッダーとは
- ヘルプや詳細へのアクセス
- 権限と許可について
- 他のユーザーの代理について
- 他のユーザーの代理
- Oracle BI EE と他の製品との対話方法
- プリファレンスの設定
- BI デスクトップ・ツールのダウンロード
- 他のガイド内の関連トピック
- システム要件と動作要件

Oracle BI Enterprise Edition の概要

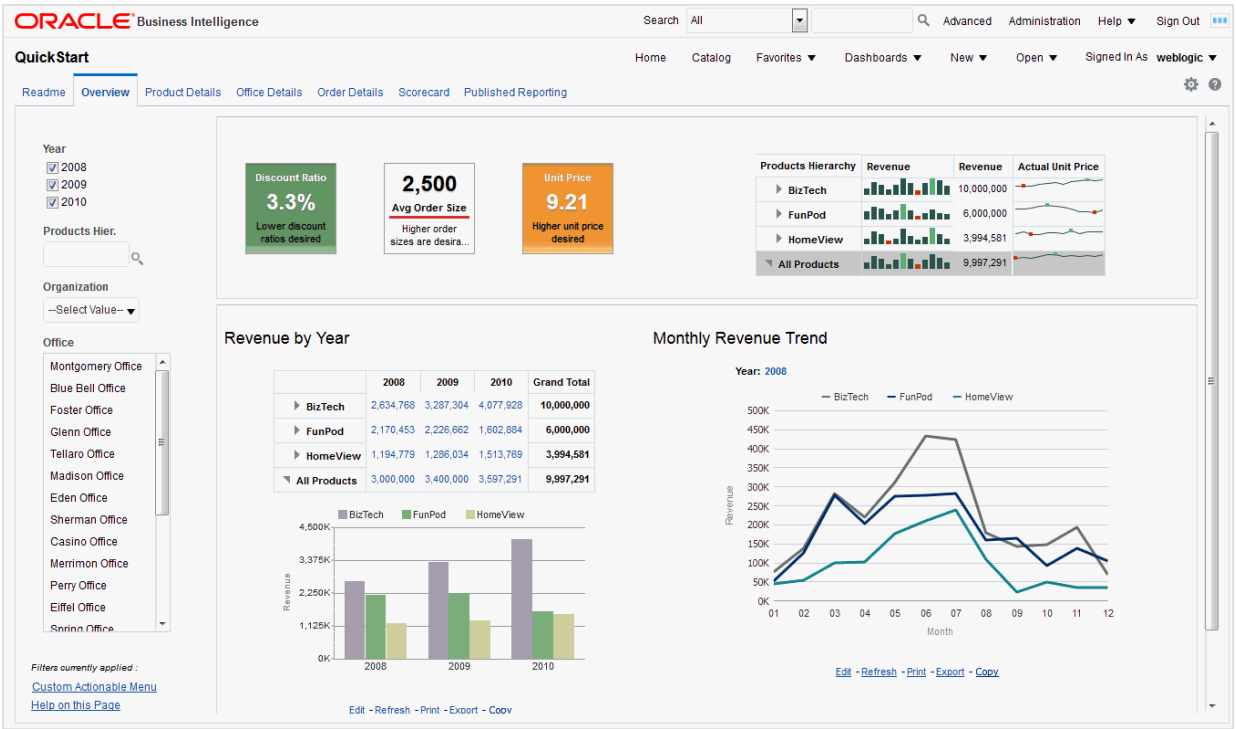
Oracle BI Enterprise Edition は、データを分析および表示するための強力なツールです。

Oracle BI Enterprise Edition (Oracle Business Intelligence と呼ばれることもあります)には、あらゆるビジネス・インテリジェンス機能が備わっており、次のことが可能です。

- 組織の最新データの収集
- わかりやすい形式(表やグラフなど)でのデータの表示
- 組織内の人々へのタイムリなデータの配信

これらの機能によって、組織では、よりよい決定、詳細な情報に基づいた措置、より効率的なビジネス・プロセスの実装が可能になります。

図に、わかりやすい形式(タイル、表、グラフなど)で組織のデータを表示したダッシュボードの一部を示します。



Oracle BI Enterprise Edition では、次のものを使用できます。

- **分析** - (Oracle BI EE のこの部分は、アンサーとも呼ばれます。)分析は、ビジネス上の疑問に対する回答を得るための、組織のデータに対する問合せです。分析では、データがわかりやすい形式(表、グラフなど)で表示されることにより、情報の探索や対話が行えます。分析の結果は、保存、編成および共有できます。

  あらかじめ作成された、業界に固有の分析を購入することもできます。ビジネスの情報の必要性に合った事前作成の分析を使用できます。

  分析の作成を参照してください。

- **ダッシュボード** - (Oracle BI EE のこの部分は、インタラクティブ・ダッシュボードとも呼ばれます。)ダッシュボードでは、企業や外部情報をパーソナライズして表

示できます。ダッシュボードは、分析、Web サイトへのリンク、Oracle BI Publisher レポートなどのコンテンツを含む 1 ページ以上のページで構成されます。ダッシュボードによって、エンド・ユーザーは分析情報にアクセスできます。

あらかじめ作成された、業界に固有の分析を含む事前構成済のダッシュボードを購入することもできます。

ダッシュボードの作成と使用を参照してください。

- **フィルタ、選択ステップおよびプロンプト** - フィルタ、選択ステップおよびプロンプトを使用すると、ダッシュボードや分析で表示するデータを制限したり、指定できます。

  分析用データのフィルタリングと選択およびダッシュボードと分析でのプロンプトを参照してください。

- **エージェント** - (Oracle BI EE のこの部分は、デリバーとも呼ばれます。)エージェントによって、ビジネス・プロセスを自動化できます。エージェントを使用して、イベント駆動型アラート、スケジュールされたコンテンツの公開および条件付きイベント駆動型アクションの実行を行えます。エージェントはスケジュールすることも、特定の条件でトリガーすることもでき、ユーザーにタイムリな情報を配信できます。

  コンテンツの配信を参照してください。

- **条件** - 条件は、分析またはキー・パフォーマンス・インディケータ(KPI)の評価に基づいて 1 つのブール値を返すオブジェクトです。条件を使用して、何かを行うかどうか(エージェントがコンテンツを配信するかどうか、など)を決定します。

  条件の操作を参照してください。

- **アクション** - アクションは、関連コンテンツへ移動したり、外部システムで操作、関数またはプロセスを起動する機能を提供します。アクションは、分析やダッシュボードのページなど、様々なオブジェクトに含めることができます。アクションによって、ユーザーは受け取ったデータから得られるビジネスの見通しに基づき、適切な行動をとることができます。

  アクションの操作を参照してください。

- **スコアカード** - (Oracle BI EE のこの部分は、Oracle Scorecard and Strategy Management とも呼ばれます)。スコアカードでは、企業の戦略を構成する目標や取組みのモデル化、指定された KPI による業績の評価、および全体的な業績の確認と表示を行えます。

  スコアカードを参照してください。

- **他の製品** - Oracle BI EE は、様々な方法で他の製品と対話します。たとえば、Oracle Hyperion Smart View for Office を使用すると、Oracle BI EE から Microsoft Office アプリケーション(Excel、Word および PowerPoint)内で分析にアクセスしたり、実行することができます。

  Oracle BI EE と他の製品との対話方法を参照してください

ノート: Oracle BI EE のこれらの領域(つまり、分析、エージェント、ダッシュボードなど)は、プレゼンテーション・サービスと呼ばれる場合もあります。

Oracle BI EE オブジェクトの格納と管理

Oracle BI プレゼンテーション・カタログには、Oracle BI EE を使用してユーザーが作成した分析、ダッシュボード、KPI などのオブジェクトが格納されます。

ユーザーは個人のフォルダ(マイ・フォルダ)を持ち、作成したオブジェクトを格納できます。個人フォルダ内のオブジェクトにアクセスし、そのフォルダにコンテンツを保存できます。ユーザーは、個人フォルダにサブフォルダを追加し、自分にとって最も理にかなった方法でコンテンツを編成できます。

他のユーザーやグループがオブジェクトにアクセスできる共有フォルダに、オブジェクトを格納することもできます。ビジネス・ロジック・セキュリティ、カタログ・オブジェクト・セキュリティおよびデータ・レベル・セキュリティの組合せによって、データやオブジェクトの表示、オブジェクトの編集およびカタログからのオブジェクトの削除を行えるユーザーが決まります。管理者は、カタログの共有フォルダ構造の作成および保守を行います。

Oracle BI プレゼンテーション・カタログとは、Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトの管理および *Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*の Oracle BI プレゼンテーション・カタログの構成と管理を参照してください。

Oracle BI Enterprise Edition へのサイン・イン

アプリケーションにサインインするにはいくつかの情報が必要です。

Oracle BI EE へのアクセスには、組織で定められた URL、ユーザー ID およびパスワードを使用します。サインイン済セッションを追跡できるように、Web ブラウザが cookie を受け入れる設定になっていることを確認してください。

シングル・サインオン(SSO)を使用してすでにサインオンしている場合は、≪サインイン | Sign In | Bifndn≫・ページのすべてのフィールドに値を入力するように求めるプロンプトは表示されない可能性があります。

1. ブラウザのアドレス・フィールドに、組織から指定された URL を入力します。
2. ≪サインイン | Sign In | Bifndn≫・ページで、使用する言語を選択します。

   このボックスへのデフォルトの入力は、「マイ・アカウント」ダイアログの「プリファレンス」タブの**「ユーザー・インタフェース言語」フィールド**で別の言語を選択することで変更できます。プリファレンスの設定を参照してください。

   Windows の場合、「地域と言語のオプション」ダイアログの「言語」タブで**「複合文字や右から左方向に書く言語 (タイ語を含む) のファイルをインストールする」**オプションを選択すると、ヘブライ語のフォントが右から左ではなく、左から右の間違った方向で表示されます。この問題を回避するには、**「複合文字や右から左方向に書く言語 (タイ語を含む) のファイルをインストールする」**オプションの選択を解除します。

   a. コントロール パネルで**「地域と言語のオプション」**ボタンをクリックし、「地域と言語のオプション」ダイアログを表示します。
   b. **「言語」**タブをクリックします。
   c. **「複合文字や右から左方向に書く言語 (タイ語を含む) のファイルをインストールする」**オプションの選択を解除します。
   d. **「OK」**をクリックします。
3. ユーザー ID とパスワードを入力します。
4. スクリーン・リーダーの使用を容易にする方法で、Oracle BI EE のコンテンツをブラウザでレンダリングする場合は、**「アクセシビリティ・モード」**ボックスを選択します。

このボックスを選択すると、分析エディタとしてアクセシビリティ・モードの BI コンポーザ・ウィザードが使用されます(「分析」エディタは使用されません)。BI コンポーザを使用した分析操作および「分析」エディタとはを参照してください

アクセシビリティ機能を参照してください。

5. **「サイン・イン」**をクリックします。次のいずれかのページ(構成によって異なる)が表示されます。

   - マイ・ダッシュボードと呼ばれる個人のダッシュボード。
   - ホーム・ページ。Oracle BI EE ホーム・ページとはを参照してください
   - 担当業務(コール・センター職員など)に固有のダッシュボード。

   ダッシュボード(マイ・ダッシュボードまたは業務に固有のダッシュボード)には、通常、業務に関する分析およびその他の情報が含まれます。Oracle BI Enterprise Edition の概要にダッシュボードの例を示します。

   これで、Oracle BI EE 内を移動できます。Oracle BI Enterprise Edition 内の移動を参照してください。

   サイン・イン後、以降のサイン・イン時に表示されるダッシュボードを選択できます。プリファレンスの設定を参照してください。

Oracle BI Enterprise Edition からのサイン・アウト

アプリケーションを完全に終了するには、正しくサイン・アウトする必要があります。

Oracle BI EE からサイン・アウトするためにブラウザ・ウィンドウを閉じないでください。

- グローバル・ヘッダーで、**「サイン・アウト」**をクリックします。

Oracle BI Enterprise Edition 内の移動

インタフェースからアプリケーションの様々な領域に簡単にアクセスできます。

Oracle BI EE にサイン・インすると、構成に応じて次のいずれかのページが表示されます。

- マイ・ダッシュボードと呼ばれる個人のダッシュボード
- ホーム・ページ
- 担当業務(コール・センター職員など)に固有のダッシュボード

このページを起点に、Oracle BI EE を使用します。分析、ダッシュボードおよびホーム・ページで頻繁にアクセスする他のものを見つけることができます。探しているものが見つからない場合、その項目の名前をページの上部にある「検索」ボックスに入力します。または**「カタログ」**リンクをクリックして、使用可能なコンテンツをすべて探索します。作業時には、Oracle BI EE 内をナビゲートする主な方法として、グローバル・ヘッダーとホーム・ページを使用できます。

- **グローバル・ヘッダー** - グローバル・ヘッダーは、Oracle BI EE インタフェースの上部に表示され、作業中いつでも使用できます。グローバル・ヘッダーでは、Oracle BI EE が提供する機能にアクセスできます。たとえば、ホーム・ページへのアクセス、ダッシュボードへのアクセス、オブジェクト(分析やダッシュボード・プロンプトなど)のオープン、新規オブジェクトの作成などを行えます。グローバル・ヘッダーで使用できる機能は権限によって決まります。管理者は、リンクの順序を変更したり、会社や業界特有のリンクを追加することでグローバル・ヘッダーを

変更できます。たとえば、Oracle Technology Network (OTN)へのリンクを追加できます。Oracle BI EE グローバル・ヘッダーとはを参照してください

- **ホーム・ページ** - ホーム・ページでは、Oracle BI EE の起動方法、オブジェクトの作成方法と変更方法、オブジェクトの参照方法と管理方法を知ることができます。Oracle BI EE ホーム・ページとはを参照してください

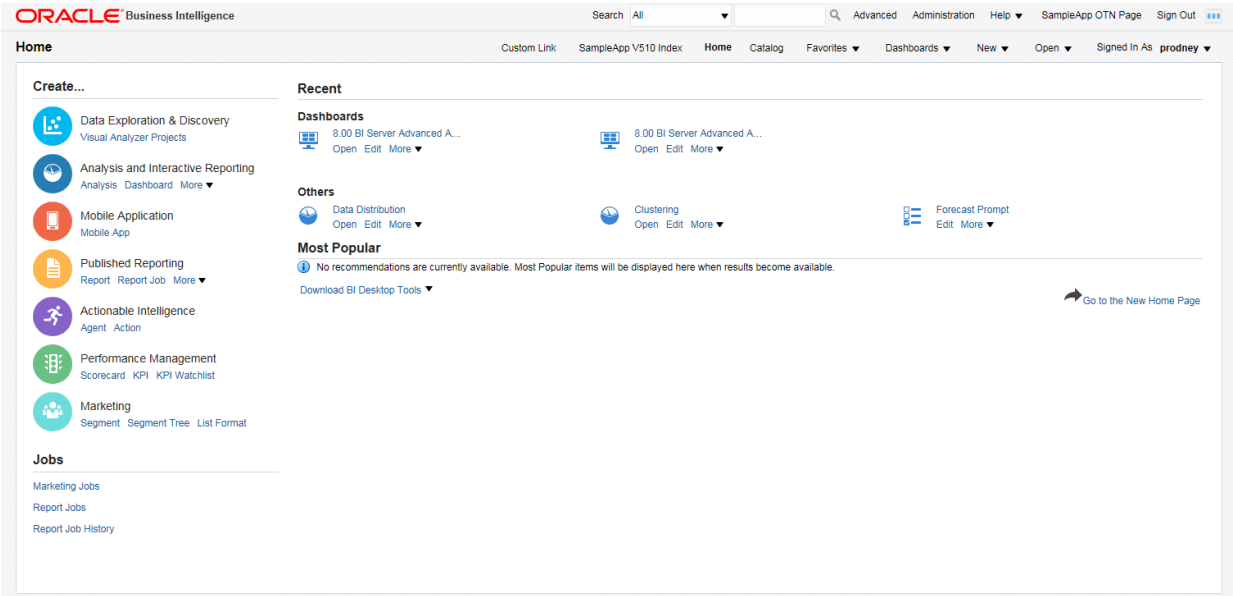
タスクの起点にアクセスすると、タスクの実行に必要なページ、ダイアログまたはエディタが表示されます。

他にナビゲーションの方法がない場合以外は、ブラウザの**戻る**ボタンを使用してOracle BI EE をナビゲートしないでください。ブラウザの**戻る**ボタンでは、戻ったときにダッシュボードの状態が保持されない場合があります。ブレッドクラムは推奨されるナビゲーション方法です。ブレッドクラムを使用したナビゲートについてを参照してください。

Oracle BI EE ホーム・ページとは

ホーム・ページは、Oracle BI EE でタスクを行う起点です。

ホーム・ページはセクションに分かれており、各セクションでは、個別のタスクを開始したり、オブジェクトを検索できます。このホーム・ページには、最近表示、作成または更新したオブジェクトや、所属するグループのユーザーが最も頻繁にアクセスするオブジェクトにアクセスできるセクション(たとえば、「最近」や「お気に入り」)もあります。



この図は、ホーム・ページの例を示します。

起点の構成によっては、Oracle BI EE へサイン・インすると、ホーム・ページが表示される場合があります。

そうでない場合、グローバル・ヘッダーの**ホーム**・ページのリンクをクリックして、いつでもホーム・ページに移動できます。グローバル・ヘッダーの詳細は、Oracle BI EE グローバル・ヘッダーとはを参照してください

新規ホーム・ページとは

新規ホーム・ページを使用すると、Visual Analyzer (VA)プロジェクト、分析およびダッシュボードを容易に使用できます。

新規ホーム・ページには、ビジュアライゼーション、分析およびダッシュボードの検索、表示または作成を可能にする BI 質問などの様々な機能が含まれています。

「OBI クラシックを開く」をクリックすると、**新規ホーム・ページ**から OBI クラシック・ページに切り替えることができます。OBI クラシック・ページを使用して、アラート、プロンプトおよび BIP レポートなどの他のオブジェクトを作成します。

新規ホーム・ページでは何を行うことができますか。

データ・ソースの作成および使用

データ・ソースには、分析および VA プロジェクトの作成に使用するデータが含まれています。データ・ソースはサブジェクト領域またはデータ・セットのいずれかにできます。Excel ファイルをアップロードするか、Oracle BI アプリケーションまたはデータベースへの接続を作成すると、データ・セットを作成できます。独自のデータの追加を参照してください。

カタログの使用

「表示」領域では、カタログに保存された分析、ダッシュボードおよび VA プロジェクトをすばやく特定できるいくつかのカテゴリを提供します。カタログを参照するには、**「マイ・フォルダ」**または**「共有フォルダ」**を使用します。あるいは、**「お気に入り」**、**「最近」**、**「VA プロジェクト」**、**「ダッシュボード」**または**「分析」**カテゴリをクリックして、最近表示したオブジェクトまたはタイプ別に特定のオブジェクトをすばやく検索します。

カタログ内のオブジェクトの検索

キーワードを使用すると、カタログ内のオブジェクトを検索できます。**「コンテンツの検索またはビジュアル化」**フィールドに検索用語を入力して検索基準に一致するオブジェクトのリストを表示し、(**「検索結果に次が含まれます」**セクションのドロップダウン・ウィンドウの上部にある)拡大鏡アイコンがある行をクリックします。プロジェクトおよびビジュアライゼーションの検索を参照してください。

BI 質問でのデータのビジュアル化

「BI 質問」を使用すると、既存のデータ・オブジェクトを分析にすばやく結合できます。**「コンテンツの検索またはビジュアル化」**フィールドに検索用語を入力して検索基準に一致するオブジェクトのリストを表示し、(ドロップダウン・ウィンドウの**「次を使用してデータをビジュアル化します」**セクションにある)オブジェクト・アイコンがある行をクリックします。BI 質問でのデータのビジュアル化を参照してください。

オブジェクトの作成

「作成」領域から様々なオブジェクトを作成できます。

- **≪VA プロジェクト | VA Project | Bi_Tech≫**。コンテンツを検索するための一般的なワークフローを参照してください。
- **≪ダッシュボード | Dashboard | Bifndn≫**。ダッシュボードの作成を参照してください。
- **分析**。分析の基準の指定を参照してください。

詳細情報の取得

「アカデミ」をクリックして Oracle BI EE ドキュメント・ライブラリにアクセスすると、新規ホーム・ページに関する詳細情報を確認できます。

プロジェクトおよびビジュアライゼーションの検索

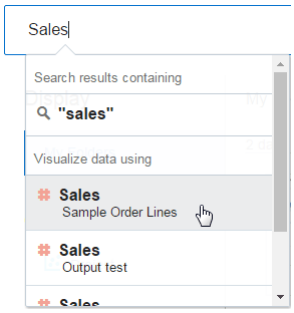
ホーム・ページで、保存されたオブジェクトをすばやく容易に検索できます。

最近作業したオブジェクトのフォルダおよびサムネイルがホーム・ページに表示されます。他のコンテンツを検索するには、検索フィールドを使用します。

検索フィールドでは、BI 質問を使用して自動的なビジュアライゼーションを作成することもできます。BI 質問でのデータのビジュアル化を参照してください。

1. ≪ホーム｜ Home ｜ Bifndn≫・ページで、**「≪コンテンツの検索またはビジュアル化｜ Find content or visualize ｜ Bi_Tech≫」**フィールドをクリックします。
2. キーワード、あるいはフォルダまたはプロジェクトなどのオブジェクトのフル・ネームを入力して検索基準を入力します。基準を入力すると、検索文字列がドロップダウン・リストに作成されます。検索のヒントを参照してください。

   保存されたオブジェクトと一致する結果がドロップダウン・リストに表示されますが、BI 質問の検索結果が含まれる場合もあります。オブジェクトの一致(フォルダまたはプロジェクトなど)を表示するには、(**「検索結果に次が含まれます」**セクションのドロップダウン・リストの上部にある)拡大鏡アイコンがある行をクリックします。BI 質問の一致は、ドロップダウン・リストの**「次を使用してデータをビジュアル化します」**セクションに表示され、異なるアイコンでフラグが付いています。



3. ドロップダウン・リストの**「≪検索結果に次が含まれます｜ Search results containing ｜ Bi_Tech≫」**セクションで、使用する検索語をクリックします。

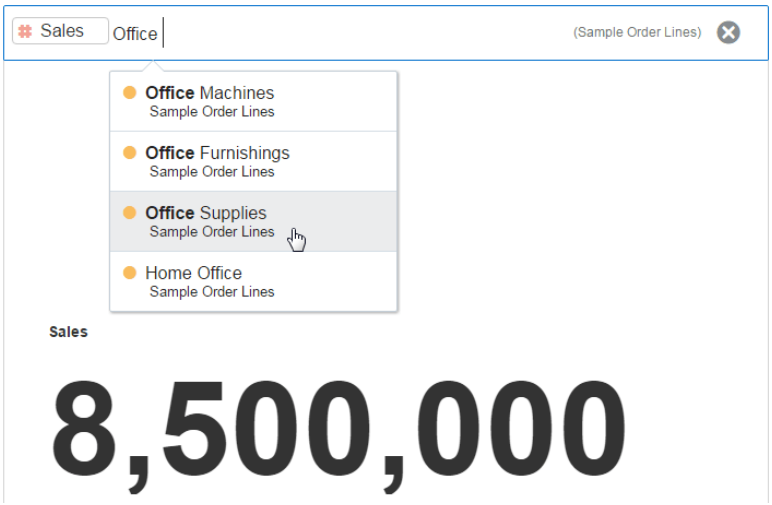
   検索に一致するオブジェクトがホーム・ページに表示されます。
4. 検索基準をクリアするには、**「コンテンツの検索またはビジュアル化」**フィールドで**「X」**アイコンをクリックします。

BI 質問でのデータのビジュアル化

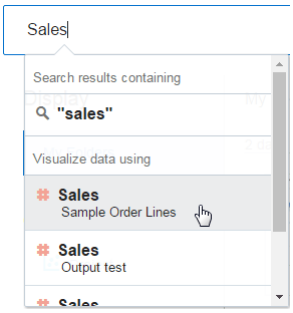
BI 質問を使用して、検索フィールドに列名を入力して列名を選択すると、それらの列を含むビジュアライゼーションが即座に表示されます。この機能を使用して、最初にプロジェクトを作成せずに、即時のビジュアライゼーションを実行できます。

1. ≪ホーム｜ Home ｜ Bifndn≫・ページで、**「≪コンテンツの検索またはビジュアル化｜ Find content or visualize ｜ Bi_Tech≫」**フィールドをクリックします。
2. 基準を入力します。情報を入力すると、検索結果がドロップダウン・リストに返されます。このドロップダウン・リストから項目を選択すると、ビジュアル化されたデータが表示されます。

   - 選択する内容によってビジュアライゼーションのデータ・ソースが決定され、入力する他のすべての基準が、そのデータ・ソースの列または値に限定されます。選択元のデータ・ソースの名前は**「コンテンツの検索またはビジュアル化」**フィールドの右側に表示されます。BI 質問の検索およびビジュアライゼーションの次の例に注目してください。



- **「コンテンツの検索またはビジュアル化」**フィールドを使用して、プロジェクトおよびビジュアライゼーションを検索したり、BI 質問を使用することができます。最初の検索基準を入力すると、ドロップダウン・リストの**「次を使用してデータをビジュアル化します」**セクションに BI 質問の結果が表示されます。最初の検索基準によって、プロジェクトおよびビジュアライゼーションを検索する検索文字列も作成されます。その検索文字列はドロップダウン・リストの**「検索結果に次が含まれます」**セクションに表示されて、拡大鏡アイコンのフラグが付きます。検索のヒントを参照してください。



3. 検索フィールドに追加基準を入力して、含める項目を選択すると、ビジュアライゼーションが作成されます。
4. オプションです。結果を表示するビジュアライゼーションの名前を入力します。たとえば、散布図にデータを表示するには「散布」と入力し、円グラフにデータを表示するには「円」と入力します。
5. オプションです。**「ビジュアライゼーション・タイプの変更」**をクリックし、異なるビジュアライゼーションをデータに適用します。
6. オプションです。**「Data Visualization で開く」**をクリックし、ビジュアライゼーションをさらに変更して保存します。
7. 検索基準をクリアするには、**「コンテンツの検索またはビジュアル化」**フィールドで**「X」**アイコンをクリックします。

検索のヒント

検索機能の動作および有効な検索基準を入力する方法を理解する必要があります。

ワイルドカード検索

検索時には、ワイルドカードとしてアスタリスク(*)を使用できます。たとえば、forecast という語が含まれるすべての項目を検索するには、**forecast* と指定できます。ただし、それ以上検索を制限するために 2 つのワイルドカードを使用すると、結果が返されません(***forecast***など)。

有効なキーワード

検索時には、有効なキーワードを使用します。*by*、*the* および *in* などのキーワードで検索した場合、結果が返されません。たとえば、Forecasted Monthly Sales by Product Category および Forecasted Monthly Sales by Product Name と呼ばれる 2 つのプロジェクトを検索するために検索フィールドに *by* を入力した場合、結果は返されません。

カンマを含む項目

検索基準にカンマを使用すると、結果が返されません。たとえば、四半期売上 665,399 ドルを検索する必要があり、検索フィールドに 665,399 と入力した場合、結果は返されません。ただし、655399 と入力すると結果が返されます。

日付検索

日付属性を検索する場合は、年-月-日の書式を使用して検索します。月/日/年の書式(8/6/2016 など)を使用して検索しても、直接一致とはなりません。かわりに、検索結果には 8 が含まれるエントリおよび 2016 が含まれるエントリが含まれます。

英語以外のロケールでの検索

検索フィールドに基準を入力したとき、候補のドロップダウン・リストの表示内容がロケール設定によって異なる可能性があります。たとえば、英語ロケールを使用して *sales* と入力した場合、候補のドロップダウン・リストには *sale* および *sales* という項目が含められます。しかし、英語以外のロケール(韓国語など)を使用して *sales* と入力した場合、候補のドロップダウン・リストには *sales* という項目のみが含められ、*sale* などの項目は候補のドロップダウン・リストに含められません。

英語以外のロケールでは、必要に応じてフルワードではなく語幹を使用して検索することをお薦めします。たとえば、*sales* ではなく *sale* を検索すると、*sale* および *sales* が含まれる項目が返されます。または、*custom* で検索すると、*custom*、*customer* および *customers* が含まれる結果リストが表示されます。

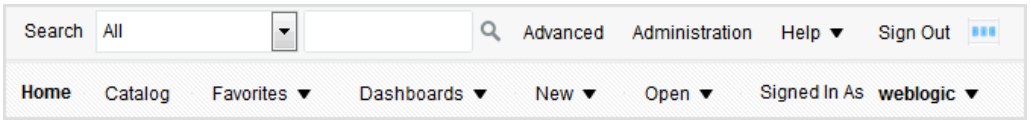
Oracle BI EE グローバル・ヘッダーとは

グローバル・ヘッダーは、よく使用される機能への簡単なアクセスを提供しており、ユーザー・インタフェースからいつでも使用できます。

たとえば、グローバル・ヘッダーを使用すると、≪ホーム｜ Home ｜ Bifndn≫・ページに戻ることなく、新規タスクの開始、Oracle BI プレゼンテーション・カタログの検索、製品ドキュメントへのアクセス、別のオブジェクトの表示を行えます。グローバル・ヘッダーには、他のページからホーム・ページにアクセスできるよう、**ホーム・ページ・リンク**も含まれています。

グローバル・ヘッダーの表示内容は、権限によって決まります。管理者は、リンクの表示順序を変更したり、Google または Oracle Technology Network (OTN)などの内部または外部の場所へのリンクを追加することで、グローバル・ヘッダーをカスタマイズできます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*の プレゼンテーション・サービスにおけるカスタム・リンクの提供 を参照してください。

次の図では、グローバル・ヘッダーの左端の部分を示します。



グローバル・ヘッダーには、次のコンポーネントが含まれています。

- **≪検索 | Search | Bifndn≫** - カタログを検索できます。オブジェクトの検索方法を参照してください
- **詳細設定** - カタログ・ページが検索モードで表示されます。ここでは、カタログ内のオブジェクトを検索できます。検索モードでは、ページ内に「フォルダ」ペインではなく、「検索」ペインが表示されます。
- **≪管理 | Administration | Bifndn≫** - 管理者としてログインしている場合に使用可能です。≪管理 | Administration | Bifndn≫ページが表示され、ここでマップの権限およびメタデータの管理などの管理タスクを実行します。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*の Oracle Business Intelligence の管理および *Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*の管理ページの理解を参照してください。
- **ヘルプ** - 次のオプションが表示されます。
  - ***xxx* ヘルプ**(*xxx* はページ、エディタまたはタブの名前) — 現在のページ、エディタまたはタブのヘルプ・トピックが表示されます。
  - **ヘルプの目次** - Oracle BI EE、BI Publisher およびマーケティングの目次へのリンク・オプションが備わったカスケード・メニューが表示されます。
  - **ドキュメント** - Oracle BI EE のドキュメント・ライブラリが表示されます。
  - **OTN** - OTN の Business Intelligence と Data Warehousing のテクノロジ・センター・ページが表示されます。
  - **Oracle BI EE のバージョン情報...** - Oracle BI EE のバージョンと著作権情報が表示されます。
- **サイン・アウト** - Oracle BI EE からサイン・アウトします。
- **アラート** - 1 つ以上のアラートが生成されている場合にのみ使用できます。「アラート」ダイアログが表示されます。ここでは、アラートを管理できます。アラートは、エージェントによって生成される通知であり、指定された受信者、およびそのエージェントのサブスクライブ者にパーソナライズされたアクショナブルなコンテンツを配信します。
- **≪ホーム | Home | Bifndn≫** - ≪ホーム | Home | Bifndn≫・ページが表示されます。Oracle BI EE ホーム・ページとはを参照してください
- **カタログ** - ≪カタログ | Catalog | Bifndn≫・ページが表示されます。ここでは、カタログ内のオブジェクトを検索して、それらのオブジェクトに固有のタスクを実行できます。
- **≪お気に入り | Favorites | Bifndn≫** - お気に入りオブジェクトおよびお気に入りオブジェクトを編成するために作成したカテゴリが表示されます。また、表示された**「≪お気に入りの管理 | Manage Favorites | Bifndn≫」**リンクをクリックすると、「≪お気に入りの管理 | Manage Favorites | Bifndn≫」ダイアログにアクセスすることができ、ここでお気に入りを編成するためのカテゴリを作成および管理できます。お気に入りとはを参照してください

- **ダッシュボード** - ユーザーのフォルダまたは共有フォルダ内の `Dashboards` サブフォルダに格納されているすべてのダッシュボードへのリンクが含まれています。`Dashboards` サブフォルダに保存されていないダッシュボードは、グローバル・ヘッダーのダッシュボード・リストから表示されません。
- **新規** - 作成可能なオブジェクトのリストが表示されます。オブジェクトを作成するには、オブジェクトをリストから選択します。オブジェクトの作成に適切なダイアログまたはエディタが表示されます。
- **開く** - 次のオプションが表示されます。
  - **開く** - 「開く」ダイアログが表示されます。ここでは、使用するオブジェクトを選択できます。
  - **最近使用したオブジェクト** - 最近表示、作成または更新したオブジェクトのリストが表示されます。このリストを使用して、使用するオブジェクトを選択できます。
  - **最も人気のあるオブジェクト** - 所属するグループのユーザーから最も頻繁にアクセスされているオブジェクトのリストが表示されます。このリストを使用して、使用するオブジェクトを選択できます。
- **≪次としてサインイン | Signed In As | Bifndn≫** ***username*** - 次のオプションが表示されます。
  - **≪マイ・アカウント | My Account | Bifndn≫** - 「≪マイ・アカウント | My Account | Bifndn≫」ダイアログが表示され、ここで「≪タイム・ゾーン | Time Zone | Bifndn≫」、「≪配信デバイス | Delivery Devices | Bifndn≫」および「≪配信プロファイル | Delivery Profile | Bifndn≫」などのプリファレンスを指定できます。プリファレンスの設定を参照してください。
  - **≪別ユーザーとして実行 | Act As | Bifndn≫** - 組織においてこの機能が有効になっており、自分に適切な権限が付与されている場合のみ使用できます。別のユーザーとして実行できます。他のユーザーの代理を参照してください。

ヘルプや詳細へのアクセス

Oracle BI EE では、Oracle BI EE の理解に役立つ概念および手順に関する情報が含まれるガイド、状況依存ヘルプおよびライブラリに直接アクセスできます。

具体的には、次のものにアクセスできます。

- **Oracle Business Intelligence Enterprise Edition ヘルプ** - Oracle BI EE ユーザー・インタフェースの各ページ、タグ、エディタ、ペインおよびダイアログには、ヘルプ・トピックが関連付けられています。これらの各ヘルプ・トピックには、概要、関連する概念や手順へのリンクおよび各コンポーネントの説明が含まれています。

  ページ、エディタ、タブまたはダイアログのオンライン・ヘルプにアクセスするには、その**「ヘルプ」**ボタンをクリックします。

  あるいは、ページ、エディタまたはタブの場合は、グローバル・ヘッダーにある**「ヘルプ」**メニューから**「*xxx* ヘルプ」**(*xxx* は、ページ、エディタまたはタブの名前)を選択します。たとえば、カタログ・ページの場合、**「カタログ・ページのヘルプ」**を選択します。Oracle BI EE グローバル・ヘッダーとはを参照してください
- **Oracle BI EE、Oracle BI Publisher およびマーケティングのヘルプの目次** - これらの目次を使用することは、製品の知識を得たり、特定のトピックにアクセスするよい方法です。

これらの目次のいずれかにアクセスするには、グローバル・ヘッダーで「**ヘルプ**」メニューの「**ヘルプの目次**」をクリックし、適切な目次を選択します。

- **Oracle Business Intelligence Enterprise Edition ドキュメント・ライブラリ** - Oracle BI EE ドキュメント・セット内のマニュアルは、OTN の Fusion Middleware ドキュメント・ライブラリに含まれています。

  Oracle BI EE ドキュメント・ライブラリにアクセスするには、グローバル・ヘッダーの「**ヘルプ**」メニューで「**ドキュメント**」をクリックします。

- **Oracle Technology Network(OTN)** - OTN には、Oracle Business Intelligence に固有の情報および他のすべての Oracle 製品に関する情報が掲載されています。OTN には、アプリケーションの設計、構築、デプロイ、管理および最適化の方法に関する専門的な情報やベスト・プラクティスを、開発者、データベース管理者(DBA)およびアーキテクトが共有および検索するのに役立つサービスやリソースが用意されています。OTN では、Java、Linux などの業界標準テクノロジに関する情報、すべての Oracle 製品のドキュメント、ディスカッション・フォーラム、Oracle ソフトウェア、ブログとポッドキャスト、他の OTN メンバーが書いた技術的な記事など、様々な情報を検索できます。

  OTN にアクセスするには、グローバル・ヘッダーの「**ヘルプ**」メニューで「**OTN**」をクリックします。

権限と許可について

ユーザー権限および許可により、アプリケーション内でのアクションおよびアクセスを許可または制限できます。

権限と許可により、分析の作成やスコアカードの編集などの特定のアクションを実行し、オブジェクトやアプリケーションなどにアクセスおよび管理するための資格を付与できます。ロールは特定の要件に関連する権限を 1 つにグループ化し、職責に基づいて継続性を有効にしてアクセスを制限します。

権限およびロールは、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition で参照およびアクセスできる内容を制御します。詳細は *Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のプレゼンテーション・サービス権限の管理を参照し、許可の詳細はカタログの使用者を参照してください。

他のユーザーの代理について

非管理者は別のユーザーとして実行することで、他のユーザーの機能を実行できます。

「別ユーザーとして実行」機能では、別のユーザーのかわりに Oracle BI EE の操作を行えます。この機能は、別のユーザーのダッシュボードやコンテンツを操作する必要がある場合や IT サポート・スタッフがユーザー・アカウントのトラブルシューティングを行う必要がある場合などに便利です。

「≪別ユーザーとして実行｜ Act As ｜ Bifndn≫」機能を使用するには、管理者がユーザーによる別のユーザーの代理を有効化する必要があります。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のユーザーによる他のユーザーの代理の有効化を参照してください。

別のユーザーの代理を認可する際、管理者は、他のユーザーのアカウントへのフル・アクセスまたは制限付きアクセスを付与します。

- **フル・アクセス** - フル・アクセスが付与されている場合、ターゲット・ユーザーの権限が継承され、ユーザーのデフォルト・ダッシュボードの変更およびユーザーのコンテンツとプリファレンスの変更を行えます。

- **制限付きアクセス** - 制限付きアクセスが付与されている場合、そのユーザー権限は保持されますが、データの表示に対してはターゲット・ユーザーの権限が継承されます。制限付きアクセスでは、ユーザーのデータの表示のみ行えます。

「≪マイ・アカウント｜My Account ｜ Bifndn≫」ダイアログ: ■委任されたユーザー ｜ Delegated Users□・タブを開いて、自分のアカウントへのアクセス権を持つユーザーのリストを表示できます。このタブには、自分のアカウントへのアクセス権が付与されたユーザーの名前のリストが表示されます。他のユーザーの代理を参照してください。

他のユーザーの代理

別のユーザーの代理として認可されている場合は、そのユーザーのかわりに操作を実行できます。

他のユーザーの代理についてを参照してください。

1. グローバル・ヘッダーで、**「次としてサインイン」**の *username* をクリックし、**「別ユーザーとして実行」**を選択します。
2. 「別ユーザーとして実行」ダイアログで、リストからユーザーの ID を選択するか、ボックス(ある場合)に ID を入力して、**「OK」**をクリックします。

   ユーザーのデフォルト・ダッシュボードが表示されます。管理者から付与されたアクセス・タイプ(フルまたは制限付き)に応じて、このダッシュボードからコンテンツを表示または変更できます。
3. 自分のアカウントに戻るには、「別ユーザーとして実行」ダイアログを表示し、**「停止」**をクリックして**「OK」**をクリックします。

プリファレンスの設定

エンド・ユーザーを含めたすべてのユーザーは、Oracle BI EE に関する個人のプリファレンスを設定できます。

Oracle BI EE の使用時に、アカウント・プリファレンスを設定できます。たとえば、開始ページの売上ダッシュボードに設定する売上ダッシュボードを指定し、タイムゾーンに太平洋標準時間を指定します。開始ページを指定することで、Oracle BI Enterprise Edition にアクセスしてすぐにダッシュボードを操作できるようになります。権限に応じて、「マイ・アカウント」ダイアログで次のことができます。

- 表示名やユーザー ID などのアカウント情報全般の表示。
- 言語、タイム・ゾーン、通貨などのプリファレンスの表示と変更。
- 場所やタイム・ゾーンなどの BI Publisher のプリファレンスの表示と変更。
- Oracle BI Mobile のプリファレンスの表示と変更。
- エージェントに対する配信オプションの表示と変更。
- 所属するロールとグループの表示。

1. グローバル・ヘッダーで、**「次としてサインイン」**の *username* をクリックし、**「マイ・アカウント」**を選択します。
2. 「マイ・アカウント」ダイアログで、適切な設定を入力します。
3. **「OK」**をクリックし、変更を保存します。

BI デスクトップ・ツールのダウンロード

自分がアクセスする権限を持つ BI デスクトップ・ツールをダウンロードできます。

ダウンロードできる製品に応じて、次のような様々な BI デスクトップ・ツールを、Oracle BI EE ホーム・ページからダウンロードできます。

- **Oracle Hyperion Smart View for Office (Smart View)** - このツールを使用して、Microsoft Office アプリケーションから Oracle BI EE 分析にアクセスして実行します。Smart View をダウンロードおよびインストールした後の使用方法の詳細は、*Oracle Hyperion Smart View for Office ユーザー・ガイド*および *Oracle Hyperion Smart View for Office 開発者ガイド*を参照してください。
- **Oracle Business Intelligence Client Tools インストーラ** — このツールを使用して、Business Intelligence 管理ツール、Oracle Business Intelligence ジョブ・マネージャおよび Oracle Business Intelligence カタログ・マネージャをインストールできます。
- **Template Builder for Word Add-in** - このツールを使用して、公開レポートで使用する RTF テンプレートを設計できます。

1. Oracle BI EE ホーム・ページに移動します。
2. 「はじめに」セクションで、**「BI デスクトップ・ツールのダウンロード」**リンクをクリックして、次のオプションの 1 つを選択します:
   - **Smart View for MS Office**
   - **Oracle BI クライアント・インストーラ**
   - **Template Builder For Word**
3. 開いているウィンドウで、**「ダウンロード」**タブを選択し、ライセンス契約に同意してから、ダウンロードするデスクトップ・ツールをクリックします。
4. 「開く」ダイアログで**「ファイルの保存」**をクリックします。
5. 保存先のファイル名の入力ダイアログで、実行可能ファイルのダウンロード先を指定して**「保存」**をクリックします。
6. ファイルをダウンロードしたら:
   - **≪Smart View for MS Office ｜ Smart View for MS Office ｜ Bifndn≫**。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*の第 IX 部、Oracle Business Intelligence での Essbase の使用を参照してください。その後、Windows のエクスプローラを表示し、ダウンロードしたファイルをダブルクリックして実行します。*Oracle Hyperion Smart View for Office ユーザー・ガイド*および *Oracle Hyperion Smart View for Office 開発者ガイド*も参照してください。
   - **≪Oracle BI クライアント・インストーラ ｜ Oracle BI Client Installer ｜ Bifndn≫**。Oracle Business Intelligence クライアント・ツールのインストールを参照してください。
   - **Template Builder For Word**。Windows のエクスプローラを表示し、ダウンロードしたファイルをダブルクリックして実行します。

     *Oracle Business Intelligence Publisher レポート・デザイナーズ・ガイド*の Template Builder for Word による RTF テンプレートの作成を参照してください。

Oracle Business Intelligence クライアント・ツールのインストール

Oracle Business Intelligence では、64 ビットの Windows オペレーティング・システムのクライアント・ツールをサポートしています。

次のツールがサポートされています。

- Oracle BI 管理ツール
- Oracle Business Intelligence ジョブ・マネージャ
- 64 ビットの Windows および Linux オペレーティング・システム上での Oracle Business Intelligence カタログ・マネージャ・クライアント・ツール。

Oracle Business Intelligence クライアント・ツールについて

Linux または UNIX オペレーティング・システムが動作するコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールする場合、インストールされるクライアント・ツールはカタログ・マネージャのみとなります。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のカタログ・マネージャのユーザー・インタフェースの起動を参照してください。ただし、Linux または UNIX オペレーティング・システムが動作するコンピュータに Oracle Business Intelligence をインストールした場合、あるいは Windows オペレーティング・システムにインストールしたが別の Windows コンピュータ上でクライアント・ツールを使用する必要がある場合は、Oracle Universal Installer を実行して、Oracle BI 管理ツール、ジョブ・マネージャおよびカタログ・マネージャをインストールする必要があります。

Oracle Business Intelligence クライアント・ツールのインストール時の考慮事項

クライアント・ツールをインストールする前に次の点を考慮します。

- Oracle BI EE Plus クライアント・インストーラでは、Oracle BI 管理ツール、ジョブ・マネージャおよびカタログ・マネージャをインストールします。

  Oracle BI EE Plus クライアント・インストーラでは、Oracle データベース・クライアントをインストールしません。Oracle データベースにアクセスするには、同じマシンにデータベース・クライアントを別途インストールする必要があります。同様に、IBM DB2 データベースにアクセスするには、同じマシンに IBM DB2 CLI をインストールする必要があります。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*のメタデータのインポートおよびデータ・ソースの使用についてを参照してください。

- Oracle BI 管理ツールには、Oracle Business Intelligence システムに接続するための専用のシステム DSN が必要です。クライアント・ツールをインストールした後で、システム DSN を作成および構成します。システム管理者は、システム DSN の作成に必要な詳細情報を提供する必要があります。

  Oracle BI EE Plus クライアント・インストーラを実行したときに、インストール・パスにマルチバイト文字が含まれていると、ジョブ・マネージャおよび Oracle BI 管理ツールを起動できません。この問題を回避するには、インストール・パスにマルチバイト文字が含まれていれば、そのパスを変更する必要があります。インストール・パスに含まれているのは ASCII 文字のみであることを確認します。

- Oracle Business Intelligence では、同一コンピュータにおける Oracle Business Intelligence クライアント・ツールの複数のインスタンスをサポートしています。つまり、組織が Oracle Business Intelligence の複数のインスタンスをインストールした場合、クライアント・ツールを複数回、または Oracle Business Intelligence の

インスタンスごとに 1 回ずつインストールおよび構成できます。ただし、Oracle Business Intelligence サーバー・インスタンスをホストする同一コンピュータでは、クライアント・ツールはすでに(Oracle Business Intelligence インストールの一部として)インストールされているため、インストールしないでください。

Oracle BI EE Plus クライアント・インストーラを実行する前に、次のすべてを実行します。

- Oracle Business Intelligence クライアント・ツールをインストールできるサポート済 64 ビット Windows オペレーティング・システムを実行しているコンピュータを特定します。
- クライアント・ツールをインストールするコンピュータが、Oracle Business Intelligence システムをホストする Linux、UNIX または Windows コンピュータにアクセスできることを確認します。
- システム管理者に連絡して、Oracle BI 管理ツール用のシステム DSN の作成に必要な情報を取得します。
- 次の方法のいずれかを使用して、Oracle BI EE Plus クライアント・インストーラ・ファイルを取得します。
  - **「BI デスクトップ・ツールのダウンロード」**リンクを選択して、Oracle BI EE ホーム・ページから Oracle BI EE Plus クライアント・インストーラ・ファイルにアクセスします。開いたページの**「ダウンロード」**タブから、Oracle BI EE バージョンを選択し、ライセンス契約に同意し、**Oracle Business Intelligence 開発者クライアント・ツール**をクリックします。次の URL から Oracle BI EE ホーム・ページを表示できます。

    `http://<host>:<port>/analytics/saw.dll?bieehome`

    例:

    `http://computer1:9704/analytics/saw.dll?bieehome`

  - OTN で Oracle BI EE Plus クライアント・インストーラ・ファイルにアクセスして、クライアント・ツールをインストールするコンピュータにこのファイルをダウンロードします。次のリンクの OTN に Oracle BI EE Plus クライアント・インストーラ・ファイルがあります。

    http://www.oracle.com/technetwork/middleware/bi-enterprise-edition/downloads/index.html

1. 前提条件を満たしていることを確認します。
2. 前提条件で取得した実行可能なインストール・ファイルにアクセスしてからこれをダブルクリックして、Oracle BI EE Plus クライアント・インストーラを起動します。

   現在のコンピュータに Oracle Business Intelligence クライアント・ツールをインストールした場合、かわりに■インスタンスの管理｜ Manage Instance□ウィンドウが開きます。**新規インスタンスのインストール**をクリックしてから、**「OK」**をクリックします。
3. 「概要」画面で**「次」**をクリックします。
4. 「インストール・フォルダの選択」ウィンドウで、デフォルトのインストール場所を受け入れるか、別の場所を指定します。**「次」**をクリックします。

5. 「ショートカット・フォルダの選択」ウィンドウで、インストーラが Oracle Business Intelligence クライアント・ツールの製品アイコンを作成する場所を指定できます。適切なオプションを選択し、「次」をクリックします。
6. 「インストール前のサマリー」ウィンドウで、インストール設定を確認します。
   - 設定を変更するには、「前」をクリックして、変更する設定が含まれる画面に戻ります。
   - インストールを開始するには、「インストール」をクリックします。
7. インストールが終了すると、「完了」をクリックします。
8. ■ODBC データ・ソース管理者｜ ODBC Data Source Administrator□ダイアログで、Oracle BI 管理ツール用のシステム DSN を構成し、Oracle Business Intelligence システムに接続します。

Oracle BI EE と他の製品との対話方法

Oracle BI EE は、他の様々な製品とともに動作できます。

Oracle BI EE は、様々な方法で他の製品と対話します。この項は次のトピックで構成されています。

- Oracle BI EE と Oracle BI Publisher の統合
- Oracle BI EE と Oracle BI Mobile アプリケーション・デザイナの統合
- Oracle BI EE と Oracle Business Intelligence Mobile の統合
- Oracle BI EE と Oracle Enterprise Performance Management System の統合
- Oracle BI EE と Oracle BI アプリケーションの統合
- Oracle BI EE と Microsoft Office の統合

Oracle BI EE と Oracle BI Publisher の統合

Oracle BI EE と Oracle BI Publisher は連携して完全なデータ分析とプレゼンテーションのツールを提供します。

ノート: このガイドでは、組織において Oracle BI EE および BI Publisher がインストールされ、統合されたコンポーネントとして実行されるよう構成されているものとします。そうでない場合、このマニュアルの BI Publisher についての記述の一部が当てはまらない可能性があります。BI Publisher の実行の詳細は、*Oracle Business Intelligence Publisher ユーザーズ・ガイド*を参照してください。

BI Publisher を使用すると、印刷に最適な書式に設定されたレポートが作成できます。BI Publisher レポートは、BI Publisher データ・モデルに基づいて作成されます。BI Publisher データ・モデルは、BI サーバーや分析からのサブジェクト領域、リレーショナル・データベースに対する SQL 問合せ、Essbase や他のオンライン分析処理(OLAP)ソースに対する MDX 問合せ、ライトウェイト・ディレクトリ・アクセス・プロトコル(LDAP)、Web サービス、Microsoft Excel、HTTP フィード、XML ファイルなどの広範なソースからのデータ・セットで構成されます。BI Publisher では、様々なレイアウト・タイプがサポートされるため、組織で必要なあらゆる種類のドキュメントを作成できます。Oracle BI EE 内で、BI Publisher レポートの表示、作成、編集およびスケジュールを行ったり、レポートをダッシュボード・ページに含めたりできます。

Oracle BI EE には、完全に統合された BI Publisher が含まれています。すべての BI Publisher 機能が Oracle BI EE アプリケーション内に表示され、すべてのレポートおよび関連オブジェクトが Oracle BI EE 内で作成され、Oracle BI プレゼンテーション・カタログに保存されます。*Oracle Business Intelligence Publisher レポート・デザイナーズ・ガイド*のレポートの作成およびレポートの作成: プロセスの概要を参照してください。

統合環境を使用する場合、統合によって次の領域が影響を受けます。

- エディタ - BI Publisher コンテンツを作成または編集できます。BI Publisher オブジェクトを使用する場合、適切な BI Publisher エディタが表示されます。たとえば、データ・モデルを使用する場合、「データ・モデル」エディタが表示されます。
- ≪ダッシュボード｜ Dashboards ｜ Bifndn≫ - BI Publisher レポートをダッシュボードに埋め込むことができます。また、ダッシュボード・ページを高い忠実度で印刷するためのカスタム印刷レイアウト、およびダッシュボード・コンテンツを Excel にエクスポートするためのカスタム・エクスポート・レイアウトを作成できます。ダッシュボードの作成と使用を参照してください。
- カタログ - Oracle BI プレゼンテーション・カタログには、レポート、テンプレートなどのすべての BI Publisher オブジェクトが含まれます。カタログ内の BI Publisher オブジェクトは、分析やフィルタなどのカタログ・オブジェクトと同様に扱うことができます。
- セキュリティ - シングル・サインオン機能が提供されます。リリース 11*g* のセキュリティ・モデルは、xmlp_template_designer などの BI Publisher 固有の権限が含まれるよう拡張されています。

Oracle BI EE と Oracle BI Mobile アプリケーション・デザイナの統合

モバイル・デバイスでの表示用に分析とプレゼンテーションを設計できます。

ノート: このガイドでは、Oracle BI EE と Oracle BI Mobile アプリケーション・デザイナがインストールされ、完全に統合されたコンポーネントとして実行されるよう構成されているものとします。そうでない場合、このマニュアルの Oracle BI Mobile アプリケーション・デザイナについての記述の一部が当てはまらない可能性があります。

Oracle Business Intelligence Mobile アプリケーション・デザイナは、携帯電話やタブレット向けに特化したアプリケーションを設計するツールです。

Oracle BI Mobile アプリケーション・デザイナで作成されたアプリケーションはプラットフォームおよびデバイスに依存しません。生成されたアプリケーションは最新の HTML5 標準に基づいており、ご使用のモバイル・デバイスの最新のブラウザ上で実行できます。クライアントのインストールは必要ありません。

Oracle BI EE と Oracle Business Intelligence Mobile の統合

Oracle Business Intelligence Mobile は、Oracle BI EE コンテンツをスマートフォンおよびタブレットで表示および操作できるようにするアプリケーションです。

Oracle Business Intelligence Mobile を介して、Oracle BI Enterprise Edition の分析およびダッシュボードに簡単にアクセスできます。同じコンテンツが表示され、モバイル・デバイスで表示するために最適化されています。Oracle Business Intelligence Mobile は、Apple の App Store または Google Play ストアからモバイル・デバイスにインストールできます。

Oracle Business Intelligence Mobile の詳細は、次の Oracle Business Intelligence Mobile 製品ドキュメント・ライブラリを参照してください。

http://docs.oracle.com/cd/E52471_01/index.htm

Oracle BI EE と Oracle Enterprise Performance Management System の統合

Oracle Enterprise Performance Management System は、ご使用のアプリケーション・スイートの効率的な動作を実現するのに役立ちます。

Oracle BI EE には、次のような Oracle Enterprise Performance Management System との統合機能が用意されています。

- Oracle Hyperion Smart View for Office を Oracle BI EE ホーム・ページからダウンロードできます。Oracle BI EE と Microsoft Office の統合を参照してください。
- EPM ワークスペース内で分析、エージェント、ダッシュボードおよび BI Publisher レポートを操作できます。Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace のドキュメントを参照してください。

Oracle BI EE と Oracle BI アプリケーションの統合

Oracle BI アプリケーションを Oracle BI EE と組み合せて使用すると、統合データ分析ツールの総合スイートになります。

Oracle Business Intelligence アプリケーションは、Oracle Fusion、Oracle E-Business Suite、JD Edwards、Peoplesoft、Siebel などの Oracle アプリケーションに使用できる、事前に構築されたビジネス・インテリジェンス・ソリューションです。Oracle Business Intelligence アプリケーションは、Oracle BI EE を基に構築されています。

Oracle BI アプリケーションは、組織内の主な業務分野に対応するために業界のベスト・プラクティスを使用して構築された業界固有のダッシュボードと分析で構成されます。ダッシュボードと分析は、組織の各エンド・ユーザーのロールに合ったものになっています。

通常、Oracle BI アプリケーションは、組織の事業や業界に照らした分析におけるビジネス・メトリックを提供するために、オラクル社の Siebel CRM アプリケーションなどの他の運用アプリケーションと統合され、これらのアプリケーションからアクセスできます。Oracle BI アプリケーションには、データの抽出、変換および Oracle Business Analytics Warehouse へのロードを行う ETL(抽出、変換、ロード)ルーチンが含まれています。Oracle BI アプリケーションには、Oracle Business Analytics Warehouse およびトランザクション・データベースへマップするメタデータも含まれ、組織のすべてのレベルに対する主なメジャーとメトリックが定義されます。これらのメジャーとメトリックは、Oracle Business Intelligence のコンテンツ設計者に使用できます。

Oracle BI EE と Microsoft Office の統合

Oracle BI EE 機能を Microsoft Office とリンクするアドイン・コンポーネントがあります。

Oracle BI EE には、Microsoft Office に対するアドインのセットが用意されており、ダウンロードしてインストールすると、Oracle Business Intelligence のコンポーネントと Microsoft Office との統合が可能になります。Oracle BI EE ホーム・ページの「はじめに」セクションに、次のアドイン・コンポーネントをインストールするためのリンクがあります:

- Template Builder For Word
- Oracle Hyperion Smart View for Office

BI デスクトップ・ツールのダウンロードを参照してください。

他のガイド内の関連トピック

他のガイドに、コンテンツ設計者と管理者に関係の深いトピックがいくつか取り上げられています。次の表にこれらのトピックをリストし、詳細の参照先を示します。

トピック	詳細の参照先
Oracle BI EE のインストール	*Oracle Business Intelligence のインストールと構成*の Oracle Business Intelligence のインストール
Oracle BI EE の構成	*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*の Oracle Business Intelligence の構成
Oracle BI EE の統合	*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレータ・ガイド*の Oracle Business Intelligence との統合の概要

システム要件と動作要件

システムが適切に動作するには、特定の証明書、ハードウェアおよびソフトウェアが必要です。

ハードウェアとソフトウェアの要件、プラットフォーム、データベースおよびその他の情報の詳細は、システム要件と動作要件のドキュメントを参照してください。いずれのドキュメントも Oracle Technology Network (OTN)から入手できます。

システム要件のドキュメントには、ハードウェアとソフトウェアの要件、ディスク領域とメモリーの最小要件、必要なシステム・ライブラリ、パッケージまたはパッチなどの情報が記載されています。

`http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-requirements-100147.html`

動作要件のドキュメントには、サポートされているインストール・タイプ、プラットフォーム、オペレーティング・システム、データベース、JDK およびサードパーティ製品が記載されています。

`http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html`

2

分析の作成

この章では、分析基準の指定方法、結果の表示方法、SQL 文の調査方法など、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition で分析を作成する方法について説明します。また、サブジェクト領域と列、二重列機能および変数についても説明します。

ビデオ

ビデオ

トピック

この章は次の項で構成されています。

- 分析とは
- サブジェクト領域と列とは
- 二重列機能の理解
- 「分析」エディタとは
- 分析を作成する工程とは
- 新規分析の作成
- 分析の基準の指定
- カタログへの列の保存
- サブジェクト領域およびサブジェクト領域フォルダのソート順の変更
- 分析の結果の表示
- 分析へのプロンプトの追加
- 分析用論理 SQL 文の確認
- 分析の保存
- 分析からのエージェントの作成
- 分析の編集
- 分析のダッシュボードへの埋込みについて
- 直接データベース・リクエストの使用
- 変数の使用
- 変数を参照できる場所

- 変数を参照する構文とは
- 使用できる事前定義プレゼンテーション変数
- タイトル・ビューでの変数の参照例

分析とは

分析は、ビジネス上の疑問に対する回答を得るための、組織のデータに対する問合せです。

分析では、表、グラフ、ピボット表などでデータをビジュアル表示することで、情報を探索して対処できます。分析の結果は、保存、編成および共有できます。

作成した分析は、Oracle BI プレゼンテーション・カタログへの保存および Oracle BI EE ダッシュボードへの統合が可能です。分析は、グラフ、結果のレイアウト、計算項目およびドリルなどの機能を使用して強化できます。

分析の操作方法

分析を操作するにはエディタを使用します。

分析を操作するには、次のエディタのいずれかを使用します。

- 「分析」エディタ - データが表、グラフ、ピボット表などでビジュアル表示され、情報の探索や対話を実行できる、機能に富んだエディタです。「分析」エディタとはを参照してください

  管理者によって「分析へのアクセス」権限が付与されている場合に、このエディタにアクセスできます。

- BI コンポーザ・ウィザード - 操作が容易なウィザードで、これを使用すると、分析の作成、編集または表示を行うことができます。「分析」エディタの複雑さはありません。BI コンポーザを使用した分析操作を参照してください。

  管理者によって「BI コンポーザへのアクセス」権限が付与されている場合のみ、このエディタにアクセスできます。

「マイ・アカウント」ダイアログの「プリファレンス」タブで使用するエディタを指定します。ただし、サイン・イン・ページまたは「マイ・アカウント」ダイアログの「プリファレンス」タブでアクセシビリティ・モードを有効にした場合、選択内容に関係なく、アクセシビリティ・モードの BI コンポーザ・ウィザードが分析エディタとして使用されます。

分析の処理方法

分析が処理される際、論理 SQL 文の形でリクエストが Oracle BI サーバーに送信されます。

次に BI サーバーで、適切なデータ・ソースに対する問合せが生成されます。BI サーバーでの受信時、問合せ結果は、ユーザーに返すのに適した形式ではまだありません。BI サーバーで結果をマージし、結果に対して適切な追加の計算とフィルタを適用します。その後、BI サーバーから Oracle BI プレゼンテーション・サービスへデータが送られ、結果に表示用の書式設定が行われます。

分析の最新結果を常に表示する方法

分析をダッシュボードに埋め込むと、ダッシュボードにアクセスするたびに分析が自動的に実行され、最新の結果が表示されます。

たとえば、売上データを毎日取り込む企業の販売担当重役の場合、その日に販売された製品の売上高をダッシュボードの最初のページに表示できます。

保存済分析は、「ダッシュボード」エディタを使用して埋め込むことができます。ダッシュボードへのコンテンツの追加を参照してください。

サブジェクト領域と列とは

サブジェクト領域と列は分析の構築ブロックです。

サブジェクト領域には、組織のビジネス分野に関する情報や組織のユーザーのグループを表すフォルダ、メジャー列、属性列、階層列および階層レベルが含まれます。サブジェクト領域には、通常、サブジェクト領域に含まれる情報の種類に対応する名前(マーケティング契約、サービス・リクエスト、注文など)が付けられています。

サブジェクト領域は、Oracle BI メタデータ・リポジトリのプレゼンテーション・レイヤーに相当します。リポジトリで、サブジェクト領域は、プレゼンテーション・レイヤーの最上位のオブジェクトで、分析の作成や編集時にエンド・ユーザーに表示されるデータのビューを表します。

関連サブジェクト領域は、分析内のプライマリ・サブジェクト領域に接続されている外部データ・ソースです。

メタデータ・リポジトリを設計および作成するユーザー(ビジネス・インテリジェンス戦略担当、メタデータ・プロバイダまたは ETL (抽出、変換、ロード)開発者など)は、Oracle BI 管理ツールを使用してサブジェクト領域を作成します。一般的に、会社のデータに対して 1 つの大きなサブジェクト領域を作成するのではなく、複数の小さいサブジェクト領域を作成します。これにより、特定のグループのユーザーまたは会社の特定のエリアに対して、必要とする最も重要なデータを 1 つの小さいサブジェクト領域で提供し、重要性の低いデータを同じビジネス・モデル・レイヤーから作成された 1 つ以上の関連サブジェクト領域で提供できます。こうした小さいサブジェクト領域を持つことで、ユーザーが必要とするデータを簡単に見つけられるようになります。また、データの保守も容易になります。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*のサブジェクト領域の作成を参照してください。

メタデータ・リポジトリを設計および作成するユーザーは、サブジェクト領域、フォルダ(およびその子)、または列(属性と階層の両方)を非表示にするように指定できます。非表示のサブジェクト領域、フォルダまたは列は、「サブジェクト領域」ペインには表示されませんが、分析や保存済フィルタ・コンテンツなど、他の部分には表示されます。(他の場所では引き続きオブジェクトが表示されるので、この方法でサブジェクト領域、フォルダまたは列を非表示にしても、セキュリティやアクセス制御に対する解決策にはなりません。)後で非表示になるサブジェクト領域、フォルダまたは列が既存の分析の基準に含まれている場合、分析には引き続きアクセスできますが、分析エディタの「基準」タブの「サブジェクト領域」ペインには、サブジェクト領域、フォルダまたは列が表示されなくなります。

列には、分析によって返された個々のデータが含まれています。列には、通常、列に含まれる情報のタイプを示す名前(アカウント、連絡先など)が付けられています。列とフィルタや選択ステップとの組合せによって、分析に含まれるデータが決まります。

分析、フィルタまたはダッシュボード・プロンプトを作成する場合、まず操作するサブジェクト領域を選択します。これはプライマリ・サブジェクト領域と呼ばれており、「≪サブジェクト領域 | Subject Areas | Bifndn≫」ペインに表示されます。操作時に、さらにデータが必要となった場合は、選択したプライマリ・サブジェクト領域に関連する追加サブジェクト領域を追加できます。(関連サブジェクト領域を追加できるのは、プライマリ・サブジェクト領域に使用可能であり、これらの領域にアクセスする権限がある場合のみとなります。)独自のデータを分析に追加することもできます。分析への外部データの追加を参照してください。

通常、単一のサブジェクト領域を問い合せる場合、そのサブジェクト領域で公開されているすべてのメジャー列は、同じサブジェクト領域で公開されているすべての属性列および階層列と互換性があります。ただし、複数のサブジェクト領域の列を結合する場合は、メジャー列と属性列および階層列の互換性のない組合せを含めていないことを確認する必要があります。

たとえば、あるサブジェクト領域のメジャー列は、プロジェクト属性列と関連付けられていない場合があります。別のサブジェクト領域のプロジェクト属性列と関連付けられているメジャー列が、プロジェクトと関連付けられていない列とともに分析に追加された場合は、問合せに失敗して結果が返されないか、BI サーバー・エラー「リクエストされた詳細レベル *XXXX* にはファクト表が存在しません。」が発生する可能性があります。

分析からデータが返されるようにするには、分析に含める列を 1 つ以上選択する必要があります。

列のタイプとは

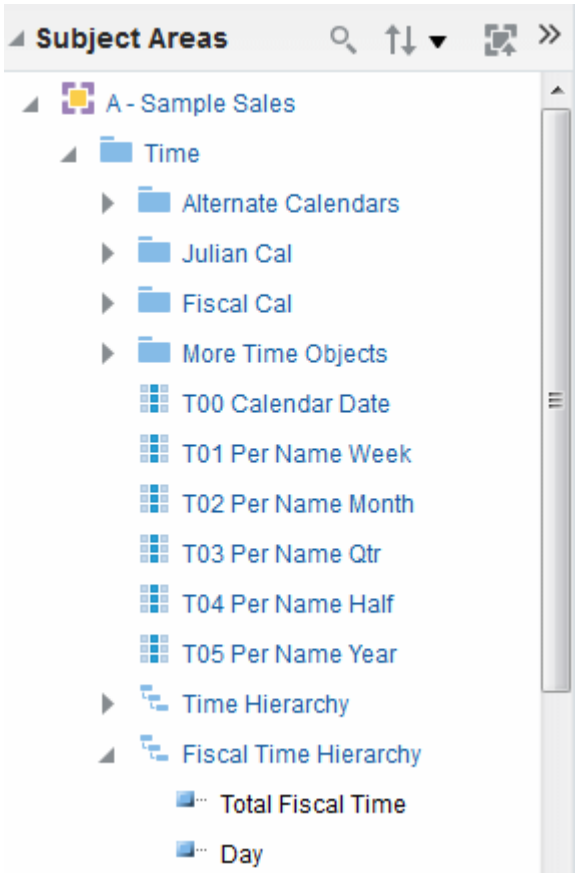
様々な状況で異なるタイプの列が使用されます。

サブジェクト領域には、次のタイプの列が含まれています:

- **属性列** - メンバーとも呼ばれる値のフラット・リストが含まれています。これらのメンバー間に、階層列のメンバーのような階層関係はありません。属性列は、以前のリリースでは、プレゼンテーション列と呼ばれていました。

  `ProductID` や `City` などがこの例です。

- **階層列** - 名前付きレベルと親子関係の両方を使用して編成されたデータ値が含まれています。この列は、ツリーのような構造を使用して表示されます。個々のメンバーは略示されます。階層を使用して下位のデータにドリルし、詳細な情報を表示できます。時間や地域などがこの例です。この図は、「サブジェクト領域」ペインで展開された時間フォルダ、時間階層および会計期間階層を示します。



階層列には、次の種類があります:

  - **レベル・ベースの階層** - 複数のレベルが順序付けられたセットです。たとえば、時間階層には、年、四半期および月の 3 つのレベルがあります。 レベル・ベースの階層には、親子関係も含まれます。
  - **親子階層** - 階層が親子関係で定義される値で構成され、名前付きレベルは含まれません。たとえば、従業員階層にはレベルがありませんが、かわりに他の従業員によって管理される従業員の名前が含まれます。従業員には、副社長などの役職があります。副社長が他の副社長の監督下にあったり、異なる副社長が階層内の異なる深さにあることもあります。

  レベル・ベースと親子以外に、次のような階層列があります:

  - **不規則** - すべての最下位レベルのメンバーの階層が同じ深さでない階層。たとえば、時間階層の場合、現在の月には日レベルのデータがあり、前月には月レベルの、過去 5 年間には四半期レベルのデータがあります。 この種の階層は、非バランス型階層とも呼ばれます。
  - **レベルのスキップ** - 特定のメンバーが特定の上位レベルの値を持たない階層。たとえば、米国で、コロンビア特別区のワシントン市は州に属していません。州がなくても、国レベル(米国)からワシントン以下にユーザーが移動できることが期待されます。

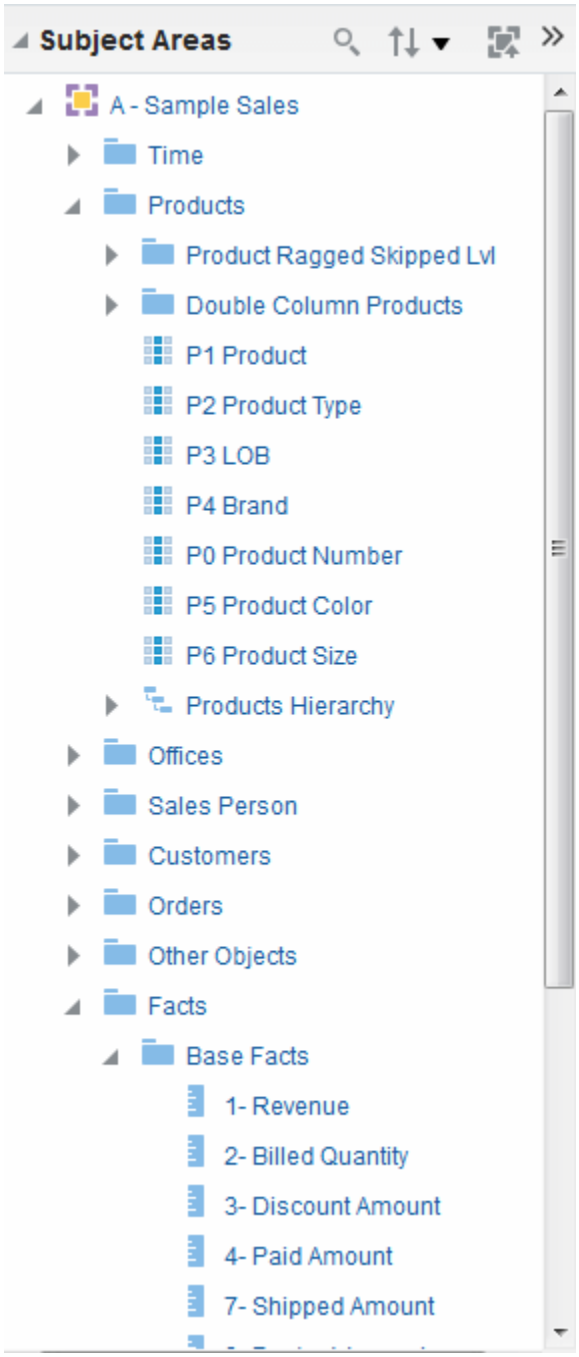
- **メジャー列** - データ値の単純なリストが含まれています。これは Oracle BI EE リポジトリ内(通常、ファクト表内)の列であり、レコードに応じて変わり、任意の方法で合計したり集計できます。収益や売上数量などがこの例です。

このガイド全体を通して、**列**という用語は、単独では 3 つのタイプすべてを指します。必要な場合は、列の特定のタイプの名前が含まれます。

列のビジュアル表示方法

「サブジェクト領域」ペインや「レイアウト」ペインなどで、列の各タイプは、独自のアイコンによって示されます。

レベル・ベースの階層を展開して、各レベルを表示できます。親子階層は、レベルのない階層列として表示されます。次の図に、アイコン、および様々な列の名前を示します。



二重列機能の理解

コード列を表示してデータの列を表示するためには、二重列を構成する必要があります。

Oracle BI EE には、二重列と呼ばれる機能があります。リポジトリが二重列用に構成されている場合、列データには、コード列がマップされた表示列が含まれます(つまり、二重に列を持っています)。**表示列**には、列データの表示値(優良、良、不可など)が含まれます。**コード列**には、表示値を一意に識別し、ユーザーまたはロケールによって変化しないコード値が含まれており、1 (優良を一意に識別)、2 (良を一意に識別)、3 (不可を一意に識別)などがあります。

Oracle BI EE で、分析の一部あるいはフィルタのベースなどとして二重列を処理する場合、表示値ではなく、コード値を使用する SQL 文を生成して Oracle BI サーバーに発行するため、フィルタ言語に依存しません。

二重列機能を使用すると、次のことが可能です:

- 言語に依存しないコードで自動的にフィルタ処理される国際化された分析を作成します。(以前のリリース(11*g* より前)では、フィルタは言語に依存していませんでした。)たとえば、フランス語のユーザーと英語のユーザーの両方とともに使用できる 1 つのフィルタ付き分析を作成できます。
- グループによって必要な表示値が異なる場合でもグループ間で共有できる共通分析を作成します。たとえば、あるグループには、ステータス・フィールドに優良、良、不可の値が表示され、別のグループには、最良、可、不可の値が表示される共通分析を作成できます。
- 既存の分析を壊さず、表示値を変更します。たとえば、優良という表示値でフィルタされる分析があるとします。二重列の場合、表示値の■優良 | `Excellent`□ではなく、■優良 | `Excellent`□のコード値で、コード列がフィルタされます。つまり、既存の分析を壊すことなく、優良という表示値を最良に変更できるということです。

また、組織で、Oracle BI EE 内でのコード値の表示が許可されている場合、「新規フィルタ」ダイアログなどの一部のダイアログで、表示値ではなく、コード値を使用できます。たとえば、フィルタの適用時に使用する値を指定する際、表示値ではなく、コード値を指定できるということです。

二重列機能を利用する前に、管理者は、コード列を表示列にマップすることでリポジトリを構成する必要があります。リポジトリが二重列用に構成されているかどうかは、管理者に確認してください。

「分析」エディタとは

「分析」エディタでは、データが表、グラフ、ピボット表などでビジュアル表示され、情報の探索ややり取りが可能です。

分析で作成したビューは、ダッシュボードでの表示に含めることができます。

「分析」エディタには、次のタブがあります:

- **「基準」タブ** - 列やフィルタなどの分析の基準を指定できます。結果が返される順序、書式設定(見出し、小数点以下の桁数、フォントや色などのスタイル、条件付き書式など)および列式(ランクやパーセンタイル関数など)を指定できます。さらに、サブジェクト領域およびサブジェクト領域フォルダのソート順を変更できます。サブジェクト領域およびサブジェクト領域フォルダのソート順の変更を参照してください。
- **「結果」タブ** - グラフ、ティッカ、ピボット表などの様々な分析結果のビューを作成できます。選択ステップの追加や変更も行えます。
- **「プロンプト」タブ** - ユーザーが、ダッシュボードで分析をフィルタする値を選択できるプロンプトを作成できます。プロンプトでは、ユーザーは、分析内のすべてのビューを動的にフィルタする値を選択できます。メンバー選択ステップと資格要件ステップの両方の選択ステップで使用するプロンプトも作成できます。
- **「詳細設定」タブ** - 分析用に生成された XML コードの編集や論理 SQL 文の確認を行えます。既存の SQL 文を、新しい分析を作成するベースとして使用できます。

「分析」エディタのタブは、様々なペインや領域に編成されています。作業時、ニーズに合うようこれらのペインを管理することが可能です。「分析」エディタのタブ内のペインの管理を参照してください。

「分析」エディタには、分析の作成(または編集)時にアクセスします。新規分析の作成を参照してください。

ノート: Oracle BI EE をアクセシビリティ・モードで使用し、分析を作成(または編集)した場合、「分析」エディタは BI コンポーザ・ウィザードによって置き換えられます。BI コンポーザの詳細は、BI コンポーザを使用した分析操作を参照してください。アクセシビリティ機能を参照してください。

「分析」エディタのタブ内のペインの管理

「分析」エディタの各タブは、多くのペインで構成されます。

たとえば、「結果」タブは、「サブジェクト領域」ペイン、「カタログ」ペイン、「ビュー」ペイン、「複合レイアウト」ペインおよび「選択ステップ」ペインで構成されます。

作業時、実行しているタスクにとって最も効率的な作業領域となるようこれらのペインを管理することが可能です。たとえば、「結果」タブの複合レイアウトに複数のビューを追加する場合、追加するビューの表示領域が最大となるように、「結果」タブの他のペインを非表示にできます。次のことができます:

- 左側と右側の間に表示されている横向きの三角形のボタンをクリックすることによって、「分析」エディタの左側に表示されているペインを表示または非表示にします。
- ペインのタイトルバーにあるプラスまたはマイナスのボタンをクリックすることによって、各ペインを展開または縮小します。
- スプリッタのドラッグによって、拡大されたペインのサイズを変更します。たとえば、「カタログ」ペインの上部のスプリッタを上にドラッグし、ペインの高さを増やすことができます。
- ツールバーでペインの表示/非表示ボタンが使用可能な場合、これをクリックすることによって、ペインを表示または非表示にします。たとえば、ツールバーの**「フィルタ・ページの表示/非表示」**をクリックして、「基準」タブの「フィルタ」ペインの表示/非表示を切り替えることができます。

分析を作成する工程とは

役立つ分析の作成には、いくつかの手順が必要です。

ノート:

Oracle BI EE をアクセシビリティ・モードで使用しているか、分析エディタとして**ウィザード(限定された機能)**を選択した場合、「分析」エディタではなく、BI コンポーザ・ウィザードを使用して分析を構築します。BI コンポーザを使用した分析操作およびアクセシビリティ機能を参照してください。

分析を作成するプロセスには、次の手順があります:

1. 新規分析の作成
2. 分析の基準の指定
3. カタログへの列の保存
4. サブジェクト領域およびサブジェクト領域フォルダのソート順の変更

5. 分析の結果の表示
6. 分析へのプロンプトの追加
7. 分析用論理 SQL 文の確認
8. 分析の保存

新規分析の作成

これは、分析を構成するプロセスの 1 ステップです。

分析を作成する工程とはを参照してください

分析を作成すると、その分析をダッシュボードに追加できます。

- グローバル・ヘッダーで、**「新規」**、**「分析」**の順にクリックした後、次のいずれかのオプションをクリックします:
  - サブジェクト領域を選択します。Oracle Business Intelligence Visual Analyzer を購入した場合、外部データ・ソース(アップロード済の Microsoft Excel ファイル)も選択できます。

    「分析」エディタが表示されます。これで、分析の基準を指定できます。
  - **直接データベース問合せの作成**

    直接データベース・リクエストの使用を参照してください。
  - **単純論理 SQL からの分析の作成**

    「分析単純 SQL 文」ダイアログが表示され、分析を作成するための SQL 文を入力できます。分析エディタで表示および操作し、その後、ダッシュボードおよびエージェントに取り込むことができます。

分析の基準の指定

この手順は、分析を作成する工程の 1 工程です。

分析を作成する工程とはを参照してください

「分析」エディタの「基準」タブを使用して、列、フィルタおよび選択ステップなどの分析の基準を指定します。また、次のものも指定します:

- 分析結果に表示される列のデフォルト順序
- ビューに表示される値のデフォルト・ソート
- デフォルト書式(見出し、小数点以下の桁数、条件付き書式、システム全体のデフォルトなど)
- 列式(ランクやパーセンタイル関数の追加など)
- 列合計の集計ルール
- 「サブジェクト領域」ペイン内のサブジェクト領域フォルダとフォルダ・オブジェクトのソート順

1. 「基準」タブで次のいずれかを行い、分析に含める列を選択します。
   - 「サブジェクト領域」ペインで列をダブルクリック。

- 「サブジェクト領域」ペインから「選択された列」ペインへ列をドラッグ・アンド・ドロップ。連続しない複数の列を選択する場合、[Ctrl]キーを押したまま、各列をクリックします。
- 保存された列を「カタログ」ペインからドラッグ・アンド・ドロップ。

選択された列は、「選択された列」ペインのボックス内に表示されます。各列ボックスには、2 つのセクションがあります。上のセクションには、列を含むフォルダの名前(顧客など)が表示されます。下のセクションには、列の名前(顧客名など)が表示されます。

必要に応じて、次のことを行います:

- 「サブジェクト領域」ペインに表示されるサブジェクト領域内で検索を開始するには、**「検索」**ボタンをクリックします。
- サブジェクト領域フォルダと各フォルダ内のオブジェクトのソート順を変更するには、**「サブジェクト領域のソート」**ボタンをクリックします。ボタンをクリックするとソートが実行され、プライマリ・サブジェクト領域以外のすべてのサブジェクト領域フォルダが閉じられます。
- 列を選択する関連サブジェクト領域を追加または削除するには、「サブジェクト領域」ペインで**「サブジェクト領域の追加/削除」**ボタンをクリックし、「サブジェクト領域の追加/削除」ダイアログを表示します。

  関連サブジェクト領域を追加し、そのサブジェクト領域から分析に列を追加しない場合、分析を閉じて再度開くと、そのサブジェクト領域は分析に関連付けられていません。
- サブジェクト領域の横にあるチェック・マークは、すでに追加されている関連サブジェクト領域を示します。グレー表示されたチェック・マークは、分析、名前付きフィルタまたは列プロンプトで現在データが使用されているプライマリ・サブジェクト領域または関連サブジェクト領域を示します。プライマリ・サブジェクト領域は削除できません。関連サブジェクト領域の削除は、そのデータが現在使用中でない場合のみ可能です。
- 「サブジェクト領域」ペインでコンテンツをリフレッシュするには、「サブジェクト領域」ペインで**「リフレッシュ」**ボタンをクリックするか、ボタンの横の矢印をクリックします。

  ボタンをクリックすると、**「表示のリフレッシュ」**のデフォルト動作が行われます。矢印をクリックすると、**「表示のリフレッシュ」**または**「サーバー・メタデータの再ロード」**を選択して、サブジェクト領域のメタデータをリフレッシュできます。

2. 必要に応じて「選択された列」ペインを使用し、階層列の列またはレベルを変更します:

   - 「選択された列」ペインの列名の右にある**「オプション」**ボタンをクリックし、次のオプションを表示します:
     - 列のソート順を指定します。(階層レベルのソート順は指定できません。)
     - 見出しのカスタマイズや集計ルールの指定を含む、属性列およびメジャー列の式を編集します。(階層列や階層レベルの場合、見出しのカスタマイズ、集計ルールの指定や式の編集は行えません。)
     - 書式設定や列と階層レベルの相互作用を制御する列プロパティを編集します。
     - 属性列およびメジャー列のフィルタを追加します。(階層列または階層レベルのフィルタは追加できません。)

– 分析から列を削除します。(階層レベルは削除できません。)

- 「選択された列」ペインで**「基準からすべての列を削除します。」**ボタンをクリックし、分析からすべての列を削除します。
- 「選択された列」ペインで**「union、intersection、および異なる演算子に基づいた結果を結合します。」**ボタンをクリックし、複数の分析の結果を結合して1つの結果にします。
- 「選択された列」ペインの**列をドラッグする**ボタンを使用し、列がデフォルト順に並んだ分析結果を表示します。

3. 必要に応じて、「フィルタ」ペインを使用してインライン・フィルタを追加および編集します。
4. 必要に応じて、「選択ステップ」ペインを使用して選択ステップを作成または編集します。
5. 必要に応じて、「カタログ」ペインを使用して Oracle BI プレゼンテーション・カタログから名前付きフィルタ、計算項目およびグループを追加します。
6. 必要に応じて、「基準」タブのツールバー上のボタンを使用して、「フィルタ」ペインの表示/非表示、「選択ステップ」ペインの表示/非表示、および結果がない場合に表示されるメッセージのタイプ(デフォルトまたはカスタム)などの分析のプロパティの編集を行います。

これで、分析にビューを追加できます。

次のガイドラインに留意してください。

- 通常、分析には、1つ以上のメジャー列を含める必要があります。メジャー列は、店舗ごとの売上金額や各日にオープンおよびクローズされたサービス・リクエストの数など、業績の主要な付加的測定法です。メジャー列を持たない分析は、通常無意味で、問合せのパフォーマンスの低下や予期せぬ結果を招くことがあります。メジャー列を持たない分析を構築する場合、まず管理者に相談してください。
- 分析内のデータを属性列と同じレベルのみに制限する選択ステップがある場合を除き、通常は階層列とその階層列の下位レベルでもある属性列を同じ分析に含めないでください。そのようにした場合、属性列と同じレベルより上位にあるすべてのレベルのデータが正しいものではなくなります。

  たとえば､次のレベルを持つ Merchandise Hierarchy という名前の階層列があるとします:

  ```
  Total Product
     Brand
        LOB
           Product Type
              Product
  ```

  また、Product Name という名前の別の属性列があり、これが Product レベルと同じレベルにあります。Merchandise Hierarchy と Product Name 属性列の両方を同じ分析に含めた場合、Product レベルの上位にあるデータは正しくなくなります。
- 分析結果の表示後、「サブジェクト領域」ペインから「選択された列」ペインに列を追加すると、その列は、(「分析プロパティ」ダイアログの「データ」タブの**「基準タブに追加された列の表示」**オプションの設定に応じて)既存のビューに含まれる(つまり、ビューに表示される)か、または既存のビューから除外されます。

  - **「基準タブに追加された列の表示」**オプションに対して、**「既存のビューおよび新規ビューで表示」**オプションを選択した場合、既存のビュー、およびユーザーが追加する新規ビューに列が表示されます。
  - **「基準タブに追加された列の表示」**オプションに対して、**「既存のビューから除外するが、新規ビューで表示」**オプションを選択した場合、列は既存のビューからは削除(つまり、「レイアウト」ペインの「除外」ドロップ・ターゲットに配置)されますが、ユーザーが追加する新規ビューには表示されます。ドロップ・ターゲットの理解を参照してください。

Null 抑制の理解

コンテンツ設計者は、null 値を表示するかどうかを指定する必要があります。

デフォルトで、null のメジャー値はすべての分析で抑制されます。コンテンツ設計者が null 値を分析に含めている場合、データの全体像を把握しやすくなることがあります。null 値の表示は分析レベルおよびビュー・レベルのデータの両方に対して設定することができ、**「Null 値を含める」**オプションを選択して設定します。

null 抑制をオフにすると、返されるデータの量が増加し、パフォーマンスに影響する可能性があります。詳細は管理者に問い合せてください。null 値が含まれる分析の結果が予想と異なる場合、ソースのデータに整合性があることを確認してください。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*の複数のソースのデータに整合性があることの確認を参照してください。

「Null 値を含める」オプションを選択した場合、分析またはビューは次のようになります。

- 列メンバーが表示されます。
- エッジの列(null 抑制はオフ)をドリルしたとき、そのエッジのすべての列で null 抑制がオフになります。
- エッジにメンバー選択と条件が適用され、最初にフィルタされます。適用されている条件によっては、Null が表示されない場合もあります。
- 計算項目、グループ、合計、総計、割合として表示されているデータおよびサーバーで実行される集計(累計)は、**「Null 値を含める」**設定の影響を受けません。
  - Oracle BI プレゼンテーション・サービスは、NQSConfig.INI ファイルの `NULL_VALUES_SORT_FIRST` 設定に基づいて null 値をソートします。
  - メジャーに基準フィルタが設定されている場合、表ビューでは Null 値は抑制されます。

次に対する null 抑制をオフにすることはできません:

- 直接データベース・リクエスト。直接データベース・リクエストの使用を参照してください。
- 結合された分析。集合演算を使用した列の結合を参照してください。
- ハンドコードされた論理 SQL 分析または拡張論理 SQL 設定を使用して変換された分析。分析用論理 SQL 文の確認を参照してください。

分析レベルで null 抑制をオフにするには:

1. 「基準」または「結果」タブで、**「分析プロパティ」**ボタンをクリックします。
2. すべてのビューの null 抑制をオフにするには、**「Null 値を含める」**オプションを選択します。

ファンネル、ゲージ、グラフ、表、ピボット表およびトレリスでは、ビュー・レベルで Null 抑制をオーバーライドできます。

ファンネル、ゲージ、グラフ、表、ピボット表およびトレリスのビュー・レベルで null 抑制をオフにするには:

1. 特定のビューの「≪結果 | Results | Bifndn≫」タブを表示します。ビューの編集を参照してください。
2. **「プロパティ」**ボタンをクリックします。
3. ビューで使用する適切な**「Null 値を含める」**オプションを選択します。たとえば、ピボット表の行と列の両方で null 抑制をオフにする場合は、**「Null 値のみの行を含める」**と**「Null 値のみの列を含める」**チェック・ボックスを選択します。この設定では、データを含むディメンションのみでなく、null 値を含むディメンションも表示されます。

   ビューにプロンプトやセクション・エッジが含まれている場合、それらは行または列エッジの null 抑制値を継承します。

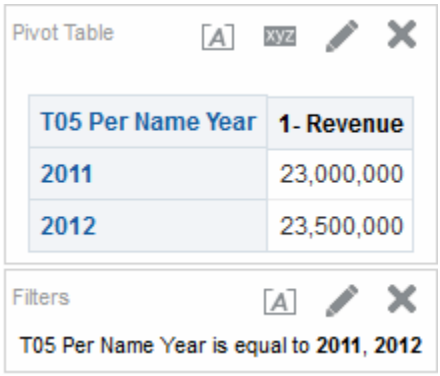
例 1: 行エッジのメジャーへのフィルタの追加 - Null 値が含まれている場合

この例では、別の行エッジ・フィルタ・オプションが適用されているピボット表を示します。

行エッジに Year を含むピボット表があり、「ピボット表のプロパティ」ダイアログで**「Null 値を含める」**を選択している(null を抑制しない)と仮定します。

次の図では、「T05 Per Name Year」が行エッジにあり、null 値が抑制されていない例を示します。

次の図では、「T05 Per Name Year」が行エッジにあり、null 値が抑制されておらず、基準フィルタが「2011」と「2012」に設定されている例を示します。属性列に基準フィルタが設定されていると、フィルタが適用され、該当する行は分析から削除されます。



例 2: 行エッジのメジャーへのフィルタの追加 - Null 値が含まれている場合

この例では、null を含む表データにフィルタが適用されているピボット表を示します。

前の例と同じような行エッジに Year を含むピボット表があり、「ピボット表のプロパティ」ダイアログで null 値が選択されていると仮定します(例 1: 行エッジのメジャーへのフィルタの追加 - Null 値が含まれている場合と同じ基準)。ただし今回は 1 - Revenue メジャーに、"23,000,000 より大きい"という値のフィルタが設定されています。

次の図に、結果の例を示します。Oracle BI サーバーは抑制されていないエッジ問合せに対してすべての年を返します(メジャー・フィルタは考慮しません)。T05 Per Name Year のメジャー値は 23,000,000 であるため、行の値はフィルタで除外されますが、行自体はそのまま表示されます。

例 3: 行エッジのメジャーへの「NULL でない」フィルタの追加 - Null 値が含まれている場合

この例では、「NULL でない」フィルタが null 値のあるピボッド表に適用されたときの表示内容を示します。

前の例と同じような行エッジに Year を含むピボット表があり、「ピボット表のプロパティ」ダイアログで**「Null 値を含める」**が選択されていると仮定します(例 1: 行エッ

ジのメジャーへのフィルタの追加 - Null 値が含まれている場合と同じ基準)。ただし今回は 1 - Revenue メジャーのフィルタを「*NULL* でない」に設定しています。

次の図に、結果の例を示します。Oracle BI サーバーはすべての値を返し、メンバーに対して「**Null 値を含める**」オプションを適用します。そのため、null 値の行がすべて表示されます。

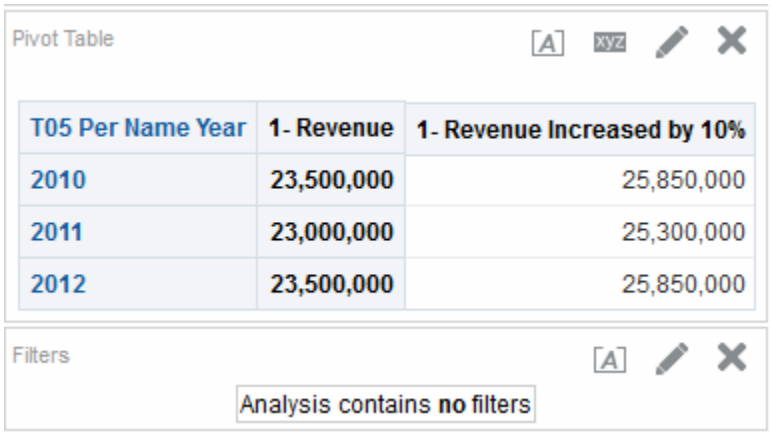
列の式の編集

分析の基準を指定する際、属性列とメジャー列の式を編集できます。

この編集は、分析と関係する場合にのみ列に作用し、サブジェクト領域の元の列の式は変更しません。表と列の見出しをカスタマイズしたり、列合計の集計ルールを指定することもできます。この機能は、階層列には使用できません。

式のすべての属性が SELECT リストに独立して(スタンドアロンで)投影されている場合を除き、単一の式に属性およびメジャーを混在させることはできません。

列式は、列値が何を表すかを指定します。"Base Facts"."1 - Revenue"などの最も基本的な形式では、列は、データ・ソースからのデータをそのまま値とします。式を編集して、関数や条件式などを追加できます。この編集によって、分析結果を様々な方法で表すことができます。たとえば、what-if 分析を行い、収益が 10%増えた場合の製品ごとの収益を表示するとします。これは、10%増の収益を示すよう 1 - Revenue 列の式を変更することで実現できます。この図は、1 - Revenue 列(データ・ソースの収益を示す)と、10%増の収益を示すよう 1 - Revenue 列の式が編集された 1 - Revenue Increased by 10%列を含むピボット表内の分析を示します。



1. 「選択された列」ペインで、編集する式の列の横にある**「オプション」**ボタンをクリックし、**「式の編集」**を選択します。
2. 「列式の編集」ダイアログの「列式」タブを使用して、カスタマイズされたヘッダーの作成、列の式の作成または編集など様々なタスクを実行します。演算子と文字のボタンを使用して、"Base Facts"."1 - Revenue"*1.10 などの単純な計算式を作成できます。
3. オプションで、「列式の編集」ダイアログの「ビン」タブを使用して列の値を結合し、セットにします。
4. **「OK」**をクリックします。

   列式が、使用される分析とともに保存されます。

集合演算を使用した列の結合

集合演算を使用して列を結合することで、データを異なる方法で表示できます。

分析のサブジェクト領域を選択したら、Union や Intersect などの集合演算を使用して 1 つ以上のサブジェクト領域からの列を結合できます。列を結合することにより、データを異なる方法で表示するための列を作成します。

結合する列を選択する場合のガイドライン

特定のガイドラインを満たしている場合、列を結合できます。

結合する列を選択する際、次のガイドラインに注意してください:

- 結合する列の数とデータ型は、同じである必要があります。各列に返される行の数は異なっていてもかまいません。
- 列は、同じサブジェクト領域からも異なるサブジェクト領域からも選択できますが、列に共通性がある必要があります。
- 1 つの基準には、1 つの集合演算のみ指定できます。たとえば、「A-サンプル売上」サブジェクト領域から基準を作成する場合、それらの列には 1 つの集合演算のみ適用できます。1 つの基準内の異なる列に異なる集合演算を適用できません。
- 基準を結合する場合、階層列、選択ステップやグループは使用できません。

集合演算を使用した列の結合と関連サブジェクト領域からの列の追加の違い

集合演算と列の追加には、決定的な違いがあります。

集合演算を使用した列の結合では、関連サブジェクト領域からの列の追加とは異なる結果が生成されます:

- 集合演算を使用して列を結合した場合、分析結果には、集合演算で制御された 1 つの新規結合列が表示されます。例: 1 つのサブジェクト領域からの列の結合を参照してください。
- 関連サブジェクト領域からの列を分析に追加した場合、結果には、追加された各列が個々に表示されます。たとえば、適切な権限がある場合、プライマリ・サブジェクト領域から 1 つの列を選択し、関連サブジェクト領域から別の列を選択して分析を作成できます。

サブジェクト領域と列とはを参照してください

例: 1 つのサブジェクト領域からの列の結合

1 つのサブジェクト領域の 2 つの列を組み合せて包括的なデータ・セットを作成できます。

「A-Sample Sales」サブジェクト領域には「Offices」フォルダが含まれ、このフォルダには「D1 Office」と「D2 Department」の列が含まれています。これらの 2 つの列を結合し、「Offices & Departments」という列を作成できます。Union All Set 操作を含め、この新しい列で、表内の 1 つの列に両方の列からのすべての値を表示することを指定します。

1 つ以上のサブジェクト領域からの列の結合

1 つ以上のサブジェクト領域からの列を結合できます。

ステップの一部で、「A-Sample Sales」サブジェクト領域を使用した「Offices & Departments」列の作成例が参照されています。

複数のサブジェクト領域の列を組み合せると、ユーザーに対してより意味のあるデータをブレンドできます。

システム全体のデフォルトとして保存された列のデータ書式は、結合された列では反映されません。結合された列にデータ書式が必要な場合、結合された列に対して再度データ書式を適用する必要があります。「列のプロパティ」ダイアログの「データ書式」タブを参照してください。

1. 「分析」エディタで、「A-Sample Sales」などのサブジェクト領域を使用する空の分析を作成します。
2. 「基準」タブで、分析に含める列を選択します。たとえば、「Offices」フォルダから「D1 Office」を選択し、「Base Facts」フォルダから「1 - Revenue」を選択します。
3. 「選択された列」ペインで**「union、intersection、および異なる演算子に基づいた結果を結合します。」**ボタンをクリックし、「サブジェクト領域の選択」メニューを表示します。
4. すでに含まれている列と結合する列を含むサブジェクト領域を選択します。たとえば、**「A-Sample Sales」**をクリックします。

   「検索条件の操作」エリアが「選択された列」ペインに表示されます。基準の下に表示された点線で囲まれたボックスは、以前に含めたものと組み合せる必要がある列の種類を示します。たとえば、ボックスに「列の追加(D1 Office)」および「列の追加(1 - Revenue)」が含まれているとします。これは、これらの各ボックスに含める列は、先に選択されている「D1 Office」および「1 - Revenue」の列と、設定操作を使用して結合され、新しい列が作成されることを表します。メジャー列を結合する場合、計算操作は行われません。

5. 「サブジェクト領域」ペインで、初めに選択した列と結合する列を選択します。たとえば、「Offices」フォルダから「D2 Department」を選択し、「Base Facts」フォルダから「1 - Revenue」を選択します。

   点線で囲まれていたボックスに、今選択した列が含まれるようになりました。これで、結合する列の指定が完了しました。

6. **「結果列」**リンクの下の**「結合」**ボタンをクリックします。列の結合に使用する演算タイプを選択します。たとえば、**「すべて結合」**タイプを選択します。

   派生列の集合演算の適用後、ビューに表示されている列が結果列です。

7. **「結果列」**リンクをクリックします。「選択された列」ペインが更新され、先ほど作成した新規結合列が表示されます。これらの列は、このペインの他の列と同様に操作できます。たとえば、次の手順を使用して最初の列(新たに結合された 1 つの列)の名前を変更できます:

   a. 「D1 Office」列の**「オプション」**ボタンをクリックします。

   b. **「列のプロパティ」**を選択します。

   c. **「列書式」**を選択します。

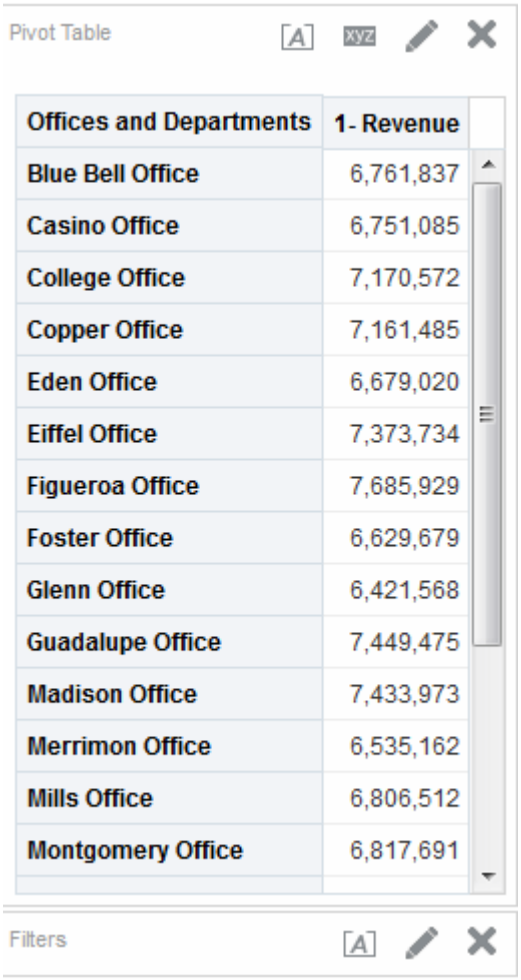
   d. **「カスタムの見出し」**が選択されていることを確認します。

   e. **「列見出し」**ボックスに `Offices & Departments` と入力します。

   f. **「OK」**をクリックします。

8. **「結果」**タブをクリックし、「複合レイアウト」の表に列を表示します。

   この図に、結合された「Offices & Departments」列が表でどのように表示されるかを示します。



「サブジェクト領域」ペインからのメタデータ情報の表示

サブジェクト領域、フォルダ、列および階層レベルのメタデータ情報を表示できます。

たとえば、分析の作成時にこれらのオブジェクトの詳細説明が必要な場合などに、メタデータ情報は役立ちます。

メタデータ情報は、メタデータ・ディクショナリに含まれています。メタデータ・ディクショナリは、静的な XML ドキュメントのセットです。各 XML ドキュメントには、列などのメタデータ・オブジェクトについて、そのプロパティや他のメタデータ・オブジェクトとの関係などが記述されます。

1. 「基準」タブまたは「結果」タブの「サブジェクト領域」ペインで、メタデータ情報を表示するサブジェクト領域、フォルダ、列または階層レベルを選択します。
2. ツールバーで**「他のボタンも表示」**をクリックしてから、**「メタデータ・ディクショナリを開く」**をクリックします。

   ブラウザの設定に応じて、新規ブラウザ・ウィンドウまたはタブのいずれかに、オブジェクトのメタデータ・ディクショナリ情報が表示されさます。メタデータ・ディクショナリ情報がブラウザに表示されない場合、ドメイン全体のデータ・ソース・アクセスに関するブラウザ設定を確認してください。

カタログへの列の保存

カタログに列を保存し、他の分析で再利用できます。

列を保存すると、保存しておき他の分析で再利用する列の式を編集したり、列プロパティを設定した場合などに役立ちます。

カタログに列を保存する場合:

- サブジェクト領域フォルダに列を保存することをお薦めします。サブジェクト領域フォルダが`/My Folders`フォルダまたは/Shared Foldersフォルダ内にない場合、Oracle BI EEによってサブジェクト領域フォルダが作成され、「名前を付けて保存」ダイアログのデフォルトの保存パスが`/My Folders/Subject Area Contents/<subject area>`に設定されます。サブジェクト領域フォルダに保存することで、同じサブジェクト領域に対して分析を作成する際、この列を使用できるようになります。
- 選択、フィルタ、条件付きアクション・リンクおよび条件付き書式設定は保存されません。
- 列への参照はサブジェクト領域からカタログに変更されます。
- 保存された列を「カタログ」ペインからドラッグ・アンド・ドロップして、別の分析で再利用できます。
- 保存された列を「カタログ」ペインから、カタログ・ページから、またはその列を再利用する分析内で編集できます。

  「カタログ」ペインおよびカタログ・ページから行った変更は、保存された列の全バージョンに適用されます。分析内で行った編集は、その分析のみに適用されます。

カタログに列を保存するには、管理者から「列の保存」権限を付与されている必要があります。

カタログに列を保存するには:

1. 「選択された列」ペインで、保存する列の横にある**「オプション」**ボタンをクリックし、**「名前を付けて列を保存」**を選択します。「名前を付けて保存」ダイアログが表示されます。
2. ダイアログを完成させ、列をカタログに保存します。

サブジェクト領域およびサブジェクト領域フォルダのソート順の変更

「サブジェクト領域」ペインのフォルダのソート順を変更できます。

サブジェクト領域フォルダはデフォルトで、「マイ・アカウント」ダイアログの「プリファレンス」タブで指定されたソート順で「サブジェクト領域」ペインに表示されます。すべての分析のサブジェクト領域、サブジェクト領域フォルダ、サブジェクト領域フォルダ内の列の(Oracle BI メタデータ・リポジトリによって確立され、管理者によって最初に設定された)このソート順は、「プリファレンス」タブの**「サブジェクト領域のソート順」**オプションを変更することで変更できます。サブジェクト領域およびサブジェクト領域フォルダのソート順の変更を参照してください。

作成中または変更中である現在の分析について、サブジェクト領域フォルダおよび各フォルダ内にあるオブジェクトのソート順を変更できます。

- **A から Z へソート**(昇順)
- **Z から A へソート**(降順)
- **保存した順序でソート**(分析で指定されたサブジェクト領域のソート順がデフォルトとして保存され、その後はデフォルトのソート順として使用されます。)

- **デフォルト - 保存した順序でソート**(サブジェクト領域のソート順はリポジトリで初めに定義されます。)

分析の作成時に指定されたプライマリ・サブジェクト領域は常に最上部に表示されます。つまり、「サブジェクト領域」ペインの最初のサブジェクト・領域として常に表示されます。たとえば、分析を構成する 3 つのサブジェクト領域(A - Sample Sales、B - Sample Quotas および C - Sample Headcount)があり、C - Sample Headcount がプライマリ・サブジェクト領域となっている場合、ソート順が昇順の場合のサブジェクト領域の表示は次のようになります。

- C - Sample Headcount
- A - Sample Sales
- B - Sample Quotas

サブジェクト領域のソートでは大文字と小文字が区別されません。

1. サブジェクト領域のソート順を変更するには、グローバル・ヘッダーで**「次としてサインイン」**の *username* をクリックし、**「マイ・アカウント」**を選択します。
   a. 「プリファレンス」タブで、**「サブジェクト領域のソート順」**リストをクリックし、ソート順を選択します。
   b. **「OK」**をクリックし、変更を保存します。
2. サブジェクト領域フォルダと各フォルダ内のオブジェクトのソート順を変更するには、「≪サブジェクト領域 | Subject Areas | Bifndn≫」ペインに適切なサブジェクト領域を追加します。
   a. **「≪サブジェクト領域のソート | Sort Subject Area | Bifndn≫」**ボタンをクリックし、ソート順を選択します。
   b. 分析を完了します。

サブジェクト領域のソート順が反映される場所

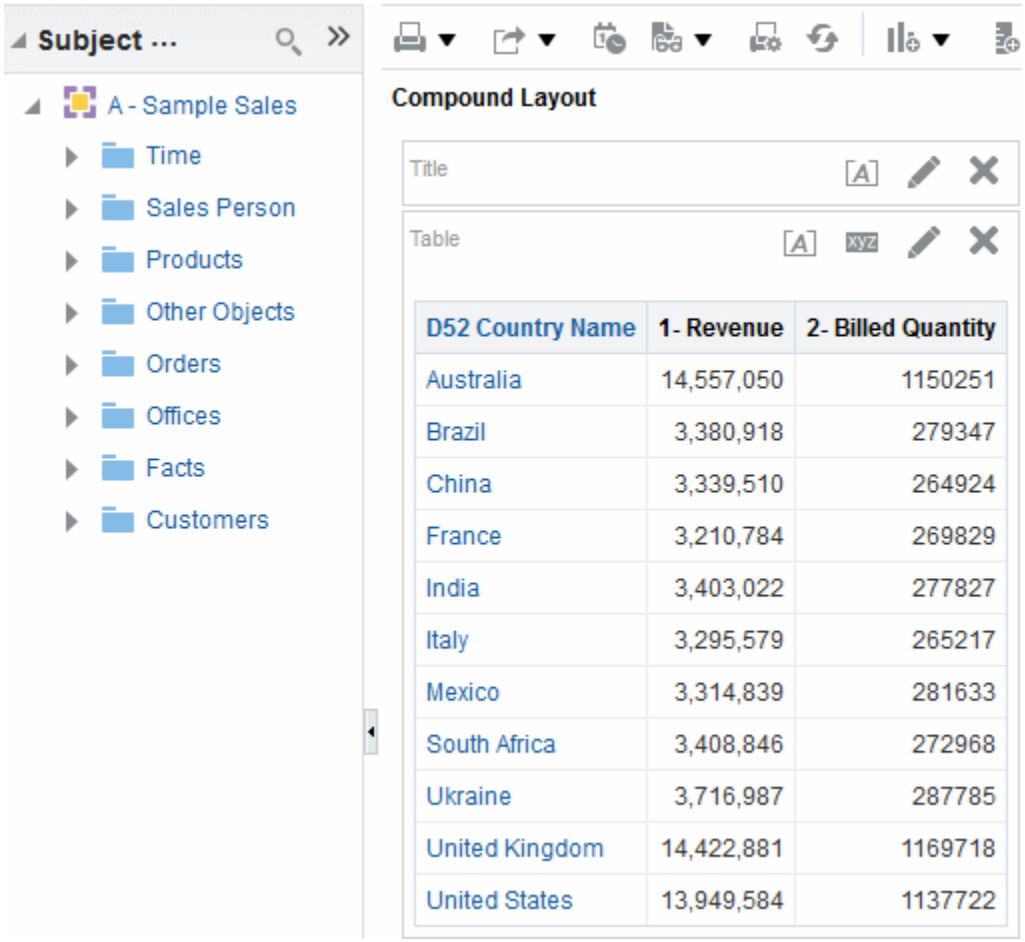
サブジェクト領域のソート順はインタフェースのいくつかの部分に表示されています。

サブジェクト領域のソート順は「サブジェクト領域」ペインの「基準」タブに反映されますが、「サブジェクト領域」ペインで構成したサブジェクト領域のソート順は次の場所にも反映されます。

- 「フィルタ」ペインで**「列を増やす」**オプションを選択すると、「列の選択」ダイアログが表示されます。列フィルタの作成を参照してください。
- 「フィルタ」ペインで**「詳細オプション」**オプションを選択して**「EVALUATE_PREDICATE 関数の追加」**を選択すると、「新規 EVALUATE_PREDICATE 関数」ダイアログが表示されます。EVALUATE_PREDICATE 関数の使用を参照してください。
- 「基準」タブの列で**「詳細オプション」**ボタンを選択すると、「使用可能」ペインが「列式の編集」ダイアログの「列式」タブに表示されます。列の式の編集を参照してください。
- 「基準」タブの列で**「詳細オプション」**ボタンを選択すると、「列式の編集」ダイアログの「列式」タブが表示されます。**「フィルタ」**ボタンをクリックすると、「フィルタの挿入」ダイアログが表示されます。列の式の編集を参照してください。

- 「分析」エディタの**「プロンプト」**タブを選択し、**「新規」**ボタンをクリックして**「列プロンプト」** - **「列を増やす」**を選択すると、「列の選択」ダイアログが表示されます。分析へのプロンプトの追加を参照してください。
- **「選択ステップ・ペインの表示/非表示」**ボタンをクリックすると「選択ステップ」ペインが表示されます。**「次に、新規ステップ」**をクリックして**「条件の適用」**を選択します。「新規条件ステップ」ダイアログで「条件タイプ」を選択し、「メジャー」ドロップダウン・リストを表示します。選択ステップの作成を参照してください。

サブジェクト領域のソート順は「サブジェクト領域」ペインの「結果」タブにも反映されます。「結果」タブにはサブジェクト領域のソート順が反映されますが、列の値はソートされません。図に、降順でソートされた A - Sample Sales の例を示します。D52 Country Name の値(たとえば、Australia、Brazil、China など)は降順でソートされます。



分析の結果の表示

この手順は、分析を作成する工程の 1 工程です。

分析を作成する工程とはを参照してください

分析エディタの「結果」タブを使用して、グラフ、ティッカ、ピボット表などの異なる結果のビューを追加します。使用可能なビューのタイプを参照してください

分析を作成し、「結果」タブに表示すると、複合レイアウトにタイトル・ビューと表またはピボット表のいずれかのビュー(次に基づく)がデフォルトで表示されます:

- 分析に属性列とメジャー列のみが含まれている場合、表がデフォルトで表示されます。
- 分析に 1 つ以上の階層列が含まれている場合、ピボット表がデフォルトで表示されます。

管理者が、別のビューがデフォルトで「結果」タブに表示されるよう構成してある場合があります。

ビューを組み合せて、複合レイアウトのいずれの場所にも配置できます。たとえば、データの異なるビューを反映した、隣り合ったピボット表、相互関係を探索できるグラフ、および結果を限定するフィルタを作成できます。

これらのビューはすべてまとめて複合レイアウトと呼ばれます。追加複合レイアウトの作成を参照してください。

1. **「結果」**タブをクリックします。

   分析の結果が表またはピボット表に表示されます。

2. (オプション)表またはピボット表を編集するか、ビューを追加します。

追加複合レイアウトの作成

分析の作業時、異なるビューの組合せを使用する複数の複合レイアウトを作成できます。

たとえば、あるレイアウトにはグラフとタイトルが含め、別のレイアウトにはグラフとナレーティブ・ビューを含めることができます。ダッシュボードのページに分析を追加する際、そのページに含めるレイアウトを選択できます。

1. 分析エディタの**「結果」**タブをクリックします。
2. 「結果」タブのツールバーにある次のいずれかのボタンをクリックし、別の複合レイアウトを作成します。
   - **複合レイアウトの作成** - 複合レイアウトの新規インスタンスを作成します。
   - **複合レイアウトの複製** - 現在の複合レイアウトのコピーを同じビューで作成します。

分析の結果にデータがないというアラートのユーザーへの発信

ユーザーに対する「結果なし」のデフォルト・メッセージを変更できます。

分析の結果でデータが返されない場合、次のデフォルト・メッセージがユーザーに表示されます:

結果なし 指定された基準に該当するデータはありませんでした。適用したフィルタまたは選択内容(あるいはその両方)の条件が狭すぎるか、値が間違っている可能性があります。分析フィルタを確認し、再試行してください。現在適用されているフィルタは下に表示されています。

デフォルト・メッセージを表示するかわりに、カスタマイズしたメッセージを作成してユーザーにアラートを発信できます。このメッセージには、分析でデータが返されなかった原因の説明を含めることができます。

1. カスタム・メッセージを追加する分析を編集します。
2. 分析エディタの**「結果」**タブをクリックします。
3. **「分析プロパティ」**ボタンをクリックします。

4. 「分析プロパティ」ダイアログの**「結果がない場合の設定」**ボックスで、**「カスタム・メッセージの表示」**を選択します。
5. **「ヘッダー」**フィールドに、カスタム・メッセージのヘッダーのテキストを入力します。
6. **「メッセージ」**フィールドに、説明のテキストを入力します。
7. メッセージの一部として HTML 書式設定コードを挿入した場合は、**「≪HTML マークアップを含みます | Contains HTML Markup | Bifndn≫」**を選択します。このオプションを選択せずにコードを挿入すると、コードがメッセージ内にテキストとしてそのまま表示されます。
8. **「OK」**をクリックします。

分析へのプロンプトの追加

この手順は、分析を作成する工程の 1 工程です。

「分析」エディタの「プロンプト」タブを使用してプロンプトを作成し、分析をフィルタする値をユーザーが選択できるようにします。プロンプトでは、ユーザーは、分析内のすべてのビューを動的にフィルタする値を選択できます。分析を作成する工程とはを参照してください

- **「プロンプト」**タブをクリックして、プロンプトを追加します。

分析用論理 SQL 文の確認

この手順は、分析を作成する工程の上級工程です。

分析を作成する工程とはを参照してください

「分析」エディタの「詳細設定」タブを使用して、分析用に生成された XML コードと論理 SQL 文を調べ、オプションで、その SQL 文に基づいた分析を作成できます。分析に使用する機能の大半はユーザー・インタフェースに用意されているため、通常、このタブの機能を使用する必要はありません。次のリストに、SQL 文を調べる必要がある状況の例を示します:

- 「接頭辞」セクションを使用して、更新に使用できるとマークされたユーザー変数またはセッション変数をオーバーライドできます。1 つのコード行で複数の変数の更新を指定できます。

  変数をオーバーライドするには、次の構文を使用します:

  ```
  SET VARIABLEvar-name=value
  ```

  たとえば、次のコード行に示すように変数を設定できます:

  ```
  SET VARIABLE "My Variable"=4, DISABLE_CACTHE_HIT = 1,
  LOGLEVEL = 2;
  ```

  変数の詳細は、変数を参照できる場所を参照してください。

- ロギングが分析に対して無効な場合でも、トラブルシューティング用に分析のロギング・レベルを一時的に変更できます。「詳細設定」タブの「接頭辞」セクションで、次のように指定します。

  ```
  SET VARIABLE LOGLEVEL=4;
  ```

  この指定によって、分析がレベル 4 で実行され、高度なトラブルシューティングに役立ちます。デフォルトのレベルは 0 で、ロギングされないことを表します。ログは、管理: セッションの管理ページの**「ログの表示」**リンクを使用して表示できます。

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド の管理ツールのオプションの設定を参照してください。

- 独自の論理 SQL 文を入力できます。独自の文を入力すると、Oracle BI EE の多くの機能(階層列、選択ステップ、グループ、書式設定など)が失われますが、集合演算などの機能を使用できます。
- 既存の分析の SQL 文を出発点として使用して、分析を作成できます。

「詳細設定」タブを使用する前に、次の重要な点に注意してください。

- この手順は、「≪詳細設定 | Advanced | Bifndn≫」タブにアクセスするための適切な職責を持つ上級ユーザーおよび開発者のみを対象としています。拡張 SQL 文を理解しており、Oracle BI サーバー・メタデータの操作について専門知識があり、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 論理 SQL リファレンス・ガイド* の SQL 情報に精通し、さらに基礎となるデータ・ソースのコンテンツおよび構造を理解していることを前提としています。
- このタブには、SQL 文に句を追加できる「高度な SQL 句」領域や同程度に高度なその他の機能が用意されています。接頭辞を指定する機能以外のこれらの機能は、階層列、メンバーの選択またはグループを含む分析では無効です。

ノート: 分析で使用している論理 SQL 文は、論理 SQL ビューを挿入すると表示できます。管理: SQL の発行ページを使用して SQL 文を入力することもできます。

---

1. 「分析」エディタの**「詳細設定」**タブをクリックします。
2. タブの上部の「結果の参照」領域にある分析名に対応するリンクを使用して、分析の結果を使用するためのリンクがあるページを表示します。
3. 「分析 XML」領域のフィールドを使用して XML コードを表示および変更し、**「XML の適用」**をクリックします。

   分析は Oracle BI プレゼンテーション・カタログに保存されているため、XML コードを変更すると、分析に影響を及ぼします。

   「一部更新」および**「Oracle BI プレゼンテーション・サービスキャッシュを無視」**ボックスの設定を適用するには、タブの下部にある**「SQL の適用」**ボタンもクリックする必要があります。
4. 「実行される SQL」領域の読取り専用ボックスを使用して、分析の実行時に Oracle BI サーバーに送信される SQL 文を調べます。

   現在の分析の SQL 文をベースに、新しい分析を作成する場合、**「新規の分析」**ボタンをクリックします。現在の分析で指定されている階層列、選択ステップ、グループまたは書式設定は削除されます。
5. 分析の内容に応じて「高度な SQL 句」エリアの使用可能なフィールドを使用し、サブジェクト領域の変更、GROUP BY または HAVING 句の追加および DISTINCT 処理と接頭辞の指定を行います。
6. **「SQL の適用」**をクリックして変更を適用します。

ノート: 「**SQL の適用**」ボタンのクリックは、注意して行ってください。クリックすると、Oracle BI Server で、追加または変更した SQL 文に基づいて新しい分析が作成されます。その結果、分析用にそれより前に作成したすべてのビューや書式設定などが失われます。新しい分析用に XML コードも変更されます。

分析の保存

この手順は、分析を作成する工程の 1 工程です。

分析を作成する工程とはを参照してください

分析は次のものに保存できます:

- 本人のみアクセスできる、個人フォルダ。

  最上位の個人フォルダはマイ・フォルダと呼ばれます。一意のユーザー名を持つ各ユーザーは、`My Folders` という名前のフォルダを持っています。これは、最も頻繁に実行する分析と、頻繁にアクセスするその他のコンテンツを保存するためのものです。

  ペインの最下部にある「**表示のリフレッシュ**」リンクをクリックすると、保存したフォルダ下に分析がリストされます。

- そのフォルダへのアクセス権を持つユーザーがアクセスできる、共有フォルダ。

- Lotus Notes データベース(次のいずれかによる):

  – 分析を Web アーカイブ・ファイル(ファイル拡張子は`.mht`)に保存し、ファイルを Lotus Notes データベースにアップロードします。

  – 分析を保存し、エージェントを使用して Lotus Notes サーバーの特定のアドレスに電子メールで自動的に送信されるようスケジュールします。Lotus Notes サーバーで電子メールが処理され、データベースに書き込まれます。

エージェントの作成を参照してください。

1. 「分析」エディタで、「**分析の保存**」ボタンをクリックし、分析を保存するダイアログを表示します。
2. 個人フォルダまたは共有フォルダに分析を保存する場合:
   a. 「**保存場所**」ボックスで、分析の保存先の個人フォルダまたは共有フォルダを選択します。
   b. 「**名前**」フィールドに、分析の名前(`forecasted_sales` など)を入力します。
   c. 「**OK**」をクリックします。
3. Web アーカイブ・ファイルを使用して Lotus Notes データベースに分析を保存する場合:
   a. 「**保存場所**」ボックスで、分析の保存先のフォルダを選択します。
   b. 「**名前**」フィールドに、`.mht` ファイル拡張子を含む分析の名前(`forecasted_sales.mht` など)を入力します。
   c. 「**OK**」をクリックします。
   d. .mht ファイルを Lotus Notes データベースにアップロードします。

4. エージェントを使用して Lotus Notes データベースに分析を保存する場合:
   a. **「保存場所」**ボックスで、分析の保存先のフォルダを選択します。
   b. **「名前」**フィールドに、分析の名前(`forecasted_sales` など)を入力します。
   c. **「OK」**をクリックします。
   d. エージェントを作成し、Lotus Notes サーバーの特定のアドレスに電子メールで送信されるようスケジュールします。

分析からのエージェントの作成

分析から直接エージェントを作成できます。

分析から直接エージェントを作成する場合、Oracle BI EE では次のことを行います。

- 分析に基づいて条件を作成し、条件を「エージェント」エディタの「条件」タブに追加します。
- 「エージェント」エディタの「配信コンテンツ」タブでコンテンツ配信として分析を追加します。

コンテンツの配信を参照してください。

1. 次のいずれかの方法を使用して、エージェントの作成元の分析を特定します:
   - 分析を開き、「分析」エディタの**「結果」**タブ、**「スケジュール」**ボタンの順にクリックします。分析が保存されます。
   - カタログ・ページの分析に移動し、**「詳細」**リストをクリックして**「スケジュール」**オプションをクリックします。
2. 「エージェント」エディタの次のタブを完成させます:
   - 「一般」タブ
   - 「スケジュール」タブ
   - 「条件」タブ
   - 「配信コンテンツ」タブ
   - 「受信者」タブ
   - 「送信先」タブ
   - 「アクション」タブ
3. エージェントを保存します。

分析の編集

アクセシビリティ・モードの場合を除き、分析はこのようにして編集できます。

ノート: Oracle BI Enterprise Edition をアクセシビリティ・モードで使用している場合、「分析」エディタではなく、BI コンポーザ・ウィザードを使用して分析を編集します。BI コンポーザを使用した分析操作およびアクセシビリティ機能を参照してください。

---

1. グローバル・ヘッダーで**「カタログ」**をクリックし、カタログ・ページを表示します。
2. 編集対象の分析に移動し、**「編集」**リンクをクリックします。
3. 分析エディタで、必要な変更を分析に加えます。
4. 分析を保存します。

分析のダッシュボードへの埋込みについて

埋込みにより、ダッシュボードに現在の分析を自動的に表示します。

分析をダッシュボードに埋め込むと、自動的に分析が実行され、ダッシュボードに結果が表示されます。これによって、現在の結果にアクセスできます。たとえば、売上データを毎日取り込む企業の販売担当重役の場合、その日に販売された製品の売上高をダッシュボードの最初のページに表示できます。

以前に作成した分析を、「ダッシュボード」エディタを使用して Oracle BI プレゼンテーション・カタログから埋め込むことができます。ダッシュボードへのコンテンツの追加を参照してください。

直接データベース・リクエストの使用

適切な権限を持つユーザーは、直接データベース・リクエストを作成し、物理バックエンド・データベースに発行できます。

リクエストの結果は「分析」エディタで表示および操作し、その後、その結果をダッシュボードおよびエージェントに取り込むことができます。この項は次のトピックで構成されています:

- 直接リクエストの権限の設定
- 直接データベース・リクエストの実行
- 直接データベース・リクエストの結果の表示

直接リクエストの権限の設定

管理者は、直接リクエストのアクセス権限を設定できます。

Oracle BI プレゼンテーション・サービス管理コントロールでの次の権限の設定によって、直接データベース・リクエストの変更や実行が行えるかどうかが制御されます:

- 直接データベース分析の編集

  この権限が設定されている場合、直接データベース・リクエストを作成および編集できます。

- 直接データベース分析の実行

  この権限が設定されている場合、直接データベース・リクエストを発行し、結果を表示できます。

*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のプレゼンテーション・サービス権限の管理を参照してください。

直接データベース・リクエストの実行

データベースに対して直接問い合せることができます。

データベースへの直接リクエストを Oracle BI EE から送信できます。

ノート:

直接データベース・リクエストが Oracle BI EE から送信される場合、Oracle BI サーバーのデータ・セキュリティ・ルールは無視され、適用されません。

1. グローバル・ヘッダーで、「**新規**」、「**分析**」、「**直接データベース問合せの作成**」の順に選択します。
2. 分析エディタの「基準」タブで、適切なオプションを指定します。
3. リクエストを発行して結果を表示する(ある場合)には、「**結果**」タブをクリックします。

直接データベース・リクエストの結果の表示

分析を作成する列を直接データベース・リクエストから取得したら、その分析を他の分析と同様に使用できます。

次のリストで、直接データベース・リクエストから列を生成した分析の違いを概説します:

- リポジトリからの列を使用していないため、「サブジェクト領域」ペインに列が含まれません。
- この分析のグループや選択ステップを作成できません。
- 条件付き書式を列に指定できません。
- ピボット表、表またはトレリス・ビューの見出しに含まれる列名の右の領域にマウスを合せたときに表示される「昇順ソート」(上向き三角形)および「降順ソート」(下向き三角形)はサポートされていません。

変数の使用

変数を使用することで、同じ情報およびテキストが複数の場所で正確に提供されるようになります。

分析、ダッシュボード、KPI、アクション、エージェントや条件など、Oracle BI Enterprise Edition の様々な領域で変数を参照できます。たとえば、現在のユーザー名をタイトルに表示する分析を作成するとします。これは、変数を参照することによって行えます。

使用できる変数は 5 種類あります:

- セッション
- リポジトリ
- プレゼンテーション
- リクエスト
- グローバル

セッション変数とは

セッション変数は、各ユーザーのログイン時に初期化される変数です。

ユーザーがセッションを開始すると、Oracle BI サーバーでセッション変数の新規インスタンスが作成され、初期化されます。

セッション変数のインスタンスの数は、Oracle BI サーバー上のアクティブなセッションと同じです。セッション変数の各インスタンスは、異なる値で初期化できます。

セッション変数は、初期化ブロック(INIT BLOCK)で指定された問合せによって移入されます。これらのセッション INIT BLOCK は通常、ログイン時に 1 回のみ実行されます。ただし、INIT BLOCK が遅延としてマークされている場合は、後で関連する変数が参照されたときに実行できます。

セッション INIT BLOCKS は通常、問合せ文に関連付けられますが、ライトウェイト・ディレクトリ・アクセス・プロトコル(LDAP)オブジェクトにも関連付けることができます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*の初期化ブロックの操作を参照してください。

セッション変数には 2 種類あります:

- **システム** - Oracle BI サーバーと Oracle BI プレゼンテーション・サービスが特定の用途で使用するセッション変数。

  システム・セッション変数には、他の種類の変数(静的または動的リポジトリ変数やシステム以外のセッション変数)に使用できない予約名が付けられています。

- **システム以外** - 管理者が作成して名前を付けるシステム変数。たとえば、管理者は、ユーザーの販売地域の名前を初期化する SalesRegion というシステム以外の変数を作成できます。

管理者は、Oracle BI 管理ツールを使用して、システム以外のセッション変数を作成します。

ノート: 特定のシステム・セッション変数(*USERGUID*、*ROLES* など)をリクエスト変数でオーバーライドすることはできません。*DATA_TZ*、*DATA_DISPLAY_TZ* (タイムゾーン)などのその他のシステム・セッション変数は、Oracle BI 管理ツールで構成されている場合、オーバーライドできます。

*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*のリポジトリ変数の操作を参照してください。

---

*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*のセッション変数についてを参照してください。

リポジトリ変数とは

リポジトリ変数は、どの時点でも 1 つの値を持つ変数です。

リポジトリ変数には 2 種類あります:

- **静的** - 管理者が変更するまで値が存続して変わらないリポジトリ変数。
- **動的** — INIT BLOCK で指定された問合せによって移入された値を持つリポジトリ変数。INIT BLOCK がリフレッシュされる間隔を指定できます。動的 INIT BLOCK は、指定された間隔で変数の値を自動的にリフレッシュします。

  動的 INIT BLOCK は、問合せにのみ関連付けることができます(つまり、SQL 文、ADF 問合せまたはサポートされている別のデータ・ソースを使用します)。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*の初期化ブロックの操作を参照してください。

管理者は、Oracle BI 管理ツールを使用して、リポジトリ変数を作成します。

*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*のリポジトリ変数についてを参照してください。

プレゼンテーション変数とは

プレゼンテーション変数は、ダッシュボード・プロンプトにより作成および使用されます。

プレゼンテーション変数は、次のいずれかのタイプのダッシュボード・プロンプトを作成する過程で作成できる変数です:

- **列プロンプト** - 列プロンプトの一部として作成されるプレゼンテーション変数は列と関連付けられ、とり得る値は列値からの値です。

  列プロンプトの一部としてプレゼンテーション変数を作成するには、「新規プロンプト」ダイアログ(または「プロンプトの編集」ダイアログ)の**「変数の設定」**フィールドで**「プレゼンテーション変数」**を選択し、***「変数名」***フィールドに変数の名前を入力する必要があります。

  列プロンプトの作成を参照してください。

- **変数プロンプト** - 変数プロンプトの一部として作成されるプレゼンテーション変数は列に関連付けられないため、ユーザーがとり得る値を定義します。

  変数プロンプトの一部としてプレゼンテーション変数を作成するには、「新規プロンプト」ダイアログ(または「プロンプトの編集」ダイアログ)の**「プロンプト対象」**フィールドで**「プレゼンテーション変数」**を選択し、***「変数名」***フィールドに変数の名前を入力する必要があります。

  変数プロンプトの作成を参照してください。

プレゼンテーション変数の値は、同時に作成された列プロンプトまたは変数プロンプトによって移入されます。つまり、ユーザーが列プロンプトまたは変数プロンプトで1つ以上の値を選択するたびに、プレゼンテーション変数の値が、ユーザーが選択した値に設定されます。

リクエスト変数とは

リクエスト変数は、プロンプト・データベース・リクエストを一時的に上書きします。

リクエスト変数を使用すると、セッション変数の値をオーバーライドできますが、オーバーライドできるのは、列プロンプトまたは変数プロンプトから開始されたデータベース・リクエストの間のみです。

ノート: 特定のシステム・セッション変数(*USERGUID*、*ROLES* など)をリクエスト変数でオーバーライドすることはできません。*DATA_TZ*、*DATA_DISPLAY_TZ* (タイムゾーン)などのその他のシステム・セッション変数は、Oracle BI 管理ツールで構成されている場合、オーバーライドできます。

*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*のリポジトリ変数の操作を参照してください。

次のいずれかのタイプのダッシュボード・プロンプトを作成する過程の一部として、リクエスト変数を作成できます。

- **列プロンプト** - 列プロンプトの一部として作成されるリクエスト変数は列と関連付けられ、とり得る値は列値からの値です。

  列プロンプトの一部としてリクエスト変数を作成するには、「新規プロンプト」ダイアログ(または「プロンプトの編集」ダイアログ)の**「変数の設定」**フィールドで

「リクエスト変数」を選択し、*「変数名」*フィールドに、オーバーライドするセッション変数の名前を入力する必要があります。

列プロンプトの作成を参照してください。

- **変数プロンプト** - 変数プロンプトの一部として作成されるリクエスト変数は列に関連付けられないため、ユーザーがとり得る値を定義します。

  変数プロンプトの一部としてリクエスト変数を作成するには、「新規プロンプト」ダイアログ(または「プロンプトの編集」ダイアログ)の**「プロンプト対象」**フィールドで**「リクエスト変数」**を選択し、*「変数名」*フィールドに、オーバーライドするセッション変数の名前を入力する必要があります。

  変数プロンプトの作成を参照してください。

リクエスト変数の値は、同時に作成された列プロンプトまたは変数プロンプトによって移入されます。つまり、ユーザーが列プロンプトまたは変数プロンプトで値を選択するたびに、リクエスト変数の値が、ユーザーが選択した値に設定されます。ただし、値が有効なのは、ユーザーがプロンプトの**「実行」**ボタンを押した時点から、分析結果がダッシュボードに返されるまでです。

ノート: 複数の値がサポートされるのは、文字列および数値のリクエスト変数のみです。その他のデータ型では最初の値のみが渡されます。

グローバル変数とは

グローバル変数は、特定のデータ型と値の組合せによって作成される列です。

値は、文字列、数値、日付、時刻、式などです。グローバル変数は、分析の作成過程で「列式の編集」ダイアログを使用して作成できます。グローバル変数はカタログに保存されるため、特定のテナント・システムに属する他のすべての分析で使用できます。

グローバル変数は、分析の作成過程で作成できます。

グローバル変数には、次のタイプがあります。

- 日付
- 日付と時間
- 数値
- テキスト
- 時間

1. 「基準」タブの「選択された列」ペインで、編集する式の列の横にある**「オプション」**ボタンをクリックし、**「式の編集」**を選択します。
2. 「列式の編集」ダイアログの「式の編集」タブで、**「変数」**ボタンをクリックしてから、**「グローバル」**を選択します。
3. 「グローバル変数の挿入」ダイアログで**「新規グローバル変数の追加」**ボタンをクリックします。
4. 「新規グローバル変数」ダイアログで一意の名前を入力します。
5. データ型を選択します。
6. 値を入力します。

- データ型として**「日付と時間」**を選択した場合、値は次の例のように入力します: `03/25/2004 12:00:00 AM`
- 式または計算を値として入力する場合は、次の例のようにテキストのデータ型を使用する必要があります: `"Base Facts"."1- Revenue"*3.1415`

7. **「OK」**をクリックします。新しいグローバル変数が「グローバル変数の挿入」ダイアログに追加されます。
8. 作成した新しいグローバル変数を選択し、**「OK」**をクリックします。

   「列式の編集」ダイアログが表示されます。「列式」ペインにはそのグローバル変数が挿入されています。
9. **「カスタムの見出し」**チェック・ボックスが自動的に選択されます。グローバル変数を割り当てた列に、変数をより正確に反映する新しい名前を入力します。
10. **「OK」**をクリックします。

グローバル変数は分析の実行時に評価され、グローバル変数の値が適切に置き換えられます。適切な権限を持つユーザーのみが、グローバル変数を管理(追加、編集および削除)できます。

変数を参照できる場所

多くの領域で変数を参照できますが、各領域ですべての変数を参照できるわけではありません。

次の領域で変数を参照できます(各領域で全種類の変数を参照できるわけではありません):

- タイトル・ビュー。
- ナレーティブ・ビュー。
- 静的テキスト・ビュー。
- フィルタ。
- 列式。
- 条件付き書式設定条件。
- 分析の表と列の見出し。
- 直接データベース・リクエスト。
- ダッシュボード・プロンプトおよびインライン・プロンプト。
- PDF 出力のヘッダーおよびフッター。
- ダッシュボードのリンクまたはイメージ・オブジェクト。
- ダッシュボードのテキスト・オブジェクト。
- グラフ・データの条件付き書式設定を指定するグラフ。
- ゲージのしきい値。
- ゲージの制限。

- エージェント。
- パラメータを指定するアクション。
- パラメータを指定する条件。
- ステップをオーバーライドする選択ステップ。
- しきい値を定義する KPI。
- KPI ウォッチリストに含まれる KPI。
- ダイアログの「URL」フィールド。

変数を参照する構文とはを参照してください

変数を参照する構文とは

変数は、分析、ダッシュボード、KPI およびエージェントで参照できます。変数の参照方法は、実行するタスクによって異なります。

フィルタ定義で変数を参照する場合など、ダイアログにフィールドが表示されるタスクの場合、(完全な構文ではなく)変数のタイプと名前のみ指定する必要があります。

タイトル・ビューでの変数の参照などの他のタスクの場合、変数の構文を指定する必要があります。使用する構文は変数のタイプによって異なります。

ノート: 構文で、アット・マーク(@)の後ろに中カッコ({)がない場合は、アット・マークとして処理されます。

変数を参照できる場所を参照してください

変数を参照する構文

この項では、各タイプの変数を参照する構文をリストし、説明します。

セッション

```
@{biServer.variables['NQ_SESSION.variablename']}
```

variablename は、セッション変数の名前です(*DISPLAYNAME* など)。

*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*のシステム・セッション変数についてを参照してください。

例:

```
@{biServer.variables['NQ_SESSION.USER']}
```

リポジトリ

```
@{biServer.variables.variablename}
```

または

```
@{biServer.variables['variablename']}
```

variablename は、リポジトリ変数の名前です(*prime_begin* など)。

例:

```
@{biServer.variables.prime_begin}
```

または

```
@{biServer.variables['prime_begin']}
```

プレゼンテーションまたはリクエスト

```
@{variables.variablename}[format]{defaultvalue}
```

または

```
@{scope.variables['variablename']}
```

ここで:

- *variablename* は、プレゼンテーション変数またはリクエスト変数の名前です(*MyFavoriteRegion* など)。
- (オプション)*format* は、変数のデータ型によって異なる書式マスクです(*#,##0*、*MM/DD/YY hh:mm:ss* など)。この書式はデフォルト値には適用されません。
- (オプション)*defaultvalue* は、*variablename* で参照される変数に値が入っていない場合に使用される値を示す定数または変数の参照です。
- *scope* は、変数の修飾子を識別します。変数が複数のレベル(分析ダッシュボード・ページおよびダッシュボード)で使用され、特定の値にアクセスする場合、有効範囲を指定する必要があります。(有効範囲を指定しない場合、分析、ダッシュボード・ページ、ダッシュボードの順に優先されます。)

> **ノート:** 複数の値を設定できるプレゼンテーション変数が指定されたダッシュボード・プロンプトを使用する際には、列タイプによって構文が異なります。複数の値がカンマ区切りの値に書式設定されるため、書式設定句は、カンマで結合される前に各値に適用されます。

例:

```
@{variables.MyFavoriteRegion}{EASTERN REGION}
```

または

```
@{MyFavoriteRegion}
```

または

```
@{dashboard.variables['MyFavoriteRegion']}
```

または

```
(@{myNumVar}[#,##0]{1000})
```

または

```
(@{variables.MyOwnTimestamp}[YY-MM-DD hh:mm:ss]{)
```

または

```
(@{myTextVar}{A, B, C})
```

グローバル

```
@{global.variables.variablename}
```

variablename はグローバル変数の名前です(例: *gv_region*)。グローバル変数を参照する場合は、例に示すように、完全修飾名を使用する必要があります。

ノート: グローバル変数の命名規則は、JavaScript の EMCA スクリプト言語仕様に準拠している必要があります。名前は 200 文字以内にする必要があります。埋込みスペース、予約語および特殊文字は使用できません。JavaScripting 言語要件に精通していない場合は、サード・パーティのリファレンスを参照してください。

例:

```
@{global.variables.gv_date_n_time}
```

式を参照する構文

変数は式で参照することもできます。式で変数を参照するためのガイドラインは、この項に記載されています。

セッション

- セッション変数を VALUEOF 関数の引数として含めます。
- 変数名を二重引用句で囲みます。
- セッション変数の前に NQ_SESSION とピリオドを付けます。
- NQ_SESSION の部分とセッション変数名の両方を丸カッコで囲みます。

例:

```
"Market"."Region"=VALUEOF(NQ_SESSION."SalesRegion")
```

リポジトリ

- リポジトリ変数を VALUEOF 関数の引数として含めます。
- 変数名を二重引用句で囲みます。
- 静的リポジトリ変数を名前で参照します。
- 動的リポジトリ変数を完全修飾名で参照します。

  動的リポジトリ変数を使用する場合、初期化ブロックの名前とリポジトリ変数を二重引用符で囲み、ピリオドで区切って丸カッコで囲む必要があります。たとえば、Region Security という名前の初期化ブロックに含まれる *REGION* という名前の動的リポジトリ変数の値を使用するには、次の構文を使用します。

  ```
  VALUEOF("Region Security"."REGION")
  ```

  Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド のリポジトリ変数についてを参照してください。

例:

```
CASE WHEN "Hour" >= VALUEOF("prime_begin") AND "Hour" < VALUEOF("prime_end") THEN
'Prime Time' WHEN ... ELSE...END
```

プレゼンテーション

- 次の構文を使用します。

  ```
  @{variablename}{defaultvalue}
  ```

variablename は、プレゼンテーション変数の名前で、*defaultvalue* (オプション)は *variablename* で参照される変数に値が入っていない場合に使用される値を示す定数または変数の参照です。

- 変数を文字列に型変換(つまり、変換)するには、次のように、構文全体を一重引用符で囲みます:

  ```
  '@{user.displayName}'
  ```

複数の値を設定できるプレゼンテーション変数を使用する際には、列タイプによって構文が異なります。

有効な SQL 文を生成するには、各列タイプの SQL で次の構文を使用します。

- **Text** — (@{*variablename*}['@']{*'defaultvalue'*})
- **Numeric** — (@{*variablename*}{*defaultvalue*})
- **日時** — (@{*variablename*}{timestamp *'defaultvalue'*})
- **日付**(日付のみ) — (@{*variablename*}{date *'defaultvalue'*})
- **時間**(時間のみ) — (@{*variablename*}{time *'defaultvalue'*})

例:

```
"Market"."Region"=@{MyFavoriteRegion}{EASTERN REGION}
```

または

```
"Products"."P4 Brand"=(@{myTextVar}['@']{BizTech})
```

または

```
"Products"."PO Product Number"=(@{myNumVar}{1000})
```

または

```
"Sales Person"."E7 Hire Date"=(@{myDateTimeVar}{timestamp '2013-05-16 00:00:01'})
```

または

```
"Time"."Total Fiscal Time"=(@{myDateVar}{date '2013-05-16'})
```

または

```
"Time"."Time Right Now"=(@{myTimeVar}{time '00:00:01'})
```

SQL 使用時の複数の値(指定されたデータ型内)について:

列タイプが**テキスト**で *variablename* から *val1*、*val2* および *val3* を渡された場合、結果は('val1', 'val2', 'val3')です。

または

列タイプが**日付**で *variablename* から *2013-08-09* および *2013-08-10* を渡された場合、結果は(date '2013-08-09', date '2013-08-10')です。

または

列タイプが**日時**で *variablename* から *2013-08-09 00:00:00* および *2013-08-10 00:00:00* を渡された場合、結果は(timestamp '2013-08-09 00:00:00', timestamp '2013-08-10 00:00:00')です。

使用できる事前定義プレゼンテーション変数

アプリケーションには、様々な出力で使用できる一連の事前定義プレゼンテーション変数があります。

この表には、分析、ダッシュボード、KPI およびエージェントで参照できる、事前定義プレゼンテーション変数のリストが含まれています。これらの事前定義プレゼンテーション変数の構文では、`variables.`修飾子を省略します。たとえば、`@{session.variables.locale}`ではなく、`@{session.locale}`とします。

ノート: タイム・ゾーン変数の場合、この変数を有効にするには、ユーザーのタイム・ゾーンをデフォルト以外の値に設定する必要があります。(ユーザーは、「マイ・アカウント」ダイアログの「プリファレンス」タブで優先的に使用するタイム・ゾーンを設定します。)

有効範囲	プレゼンテーション変数	例
システム	*productVersion*	`system.productVersion = 11.1.1.3 (Build 090619.0110.000)`
システム	*currentTime*	`system.currentTime = 6/29/2009 7:35:59 PM`
セッション	*locale*	`session.locale = en-us`
セッション	*language*	`session.language = en`
セッション	*rtl* これは、ログイン・ページで選択された言語が、右から左に記述する言語かどうかを示します。たとえば、選択した言語がヘブライ語の場合、この変数は true を返します。	`session.rtl = false`
セッション	*timeZone*	`session.timeZone = (GMT-06:00) Central America`
セッション	*timeZone.id* ローカライズされていない値を返します。	`session.timeZone.id = (GMT-06:00) Central America`
セッション	*timeZone.name* ローカライズされた値を返します。	`session.timeZone.name = (GMT-06:00) Central America`
セッション	*timeZone.value* ローカライズされた値を返します。	`session.timeZone.value = (GMT-06:00) Central America`
セッション	*loginTime*	`session.loginTime = 6/29/2009 7:12:01 PM`
セッション	*logoutTime*	`session.logoutTime = 6/29/2009 8:02:01 PM`
セッション	*lastAccessTime*	`session.lastAccessTime = 6/29/2009 7:35:59 PM`
セッション	*currentUser*	`session.currentUser = Administrator`

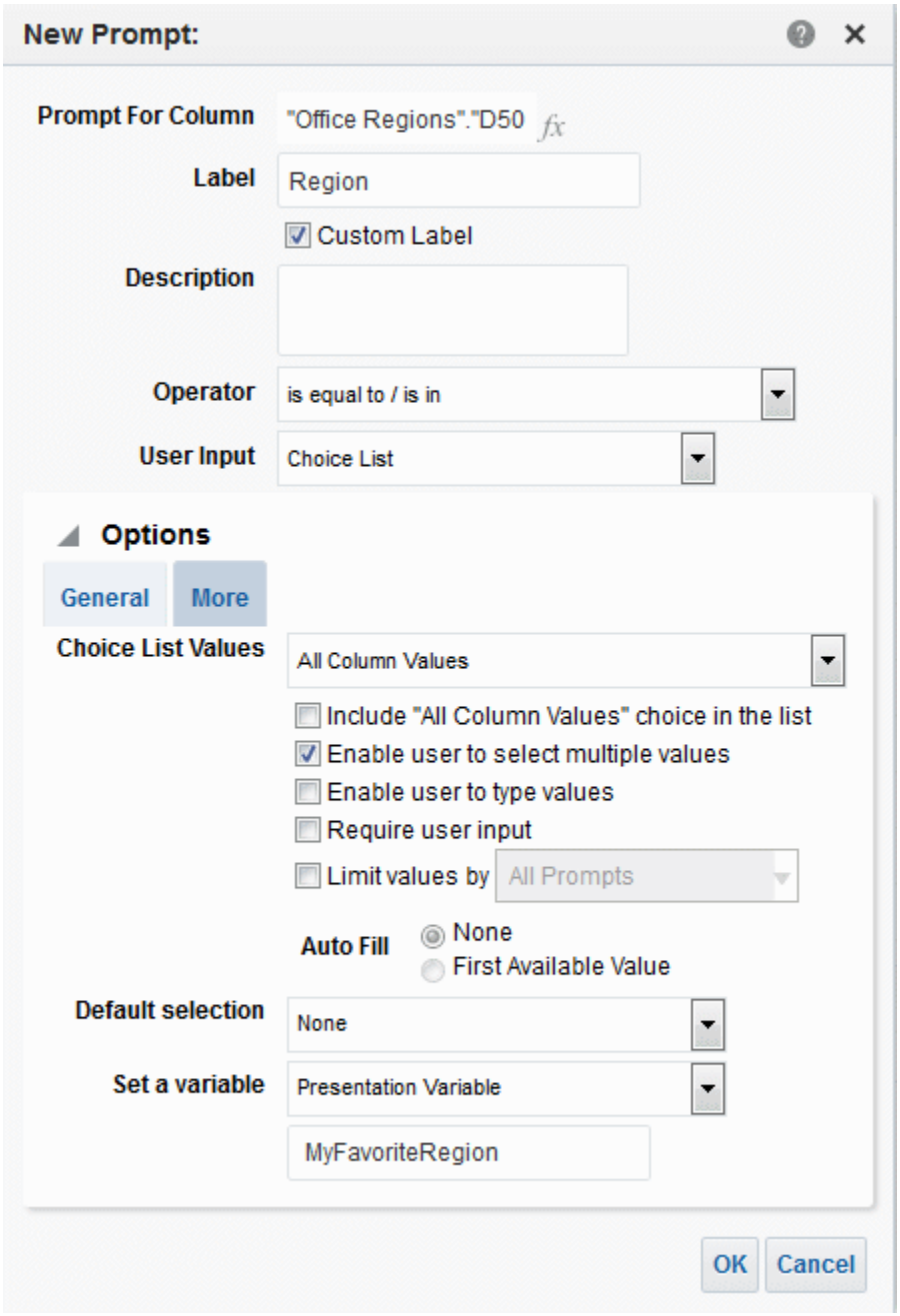
有効範囲	プレゼンテーション変数	例
セッション	*currency.name*	session.currency.name = $ English - United States
セッション	*currency.symbol*	session.currency.symbol = $
セッション	*currency.userPreference*	session.currency.userPreference = Global Currency 2
セッション	*accessibility* これは、現在のユーザー・セッションでアクセシビリティ・モードが有効かどうかを示します。	session.accessibility = true
ユーザー	*id*	user.id = Administrator
ユーザー	*displayName*	user.displayName = Administrator
ユーザー	*homeDirectory*	user.homeDirectory = /users/administrator
ダッシュボード	*currentPage*	dashboard.currentPage = page 1
ダッシュボード	*xml*	dashboard.xml = the dashboard XML
ダッシュボード	*dashboard.currency.name*	dashboard.currency.name = Euro
ダッシュボード	*dashboard.currency.symbol*	dashboard.currency.symbol = $
ダッシュボード	*dashboard.currency.userPreference*	dashboard.currency.userPreference = Global Currency 1
ダッシュボード	*dashboard.path* カタログのパスを返します。	dashboard.path = /users/administrator/_portal/Sales
ダッシュボード	*dashboard.name*	dashboard.name = MyDashboard
ダッシュボード	*dashboard.caption* ダッシュボードのローカライズされた名前を返します。	dashboard.caption = Sales
ダッシュボード	*dashboard.location* 場所の URL を返します。	dashboard.location = Dashboard&PortalPath=/users/administrator/_portal
ダッシュボード	*dashboard.description*	dashboard.description = Sales by region and district
ダッシュボード	*dashboard.author*	dashboard.author = Administrator
dashboard.currentPage	*dashboard.currentPage.name*	dashboard.currentPage.name = Sales page 1

有効範囲	プレゼンテーション変数	例
dashboard.currentPage	*dashboard.currentPage.path*	`dashboard.currentPage.path = /users/administrator/_portal/Sales/page 1`
dashboard. current Page	*dashboard.currentPage.currency.name*	`dashboard.currentpage.currency.name = USD`
dashboard.current Page	*dashboard.currentPage.currency.symbol*	`dashboard.currentPage.currency.symbol = USD`
dashboard. current Page	*dashboard.currentPage.currency.userPreference*	`dashboard.currentPage.currency.userPreference = Global Currency 2`
分析	*report.currency.name*	`report.currency.name = $ English - United States`
分析	*report.currency.symbol*	`report.currency.symbol = $`
分析	*report.currency.userPreference*	`report.currency.userPreference = Global Currency 2`

タイトル・ビューでの変数の参照例

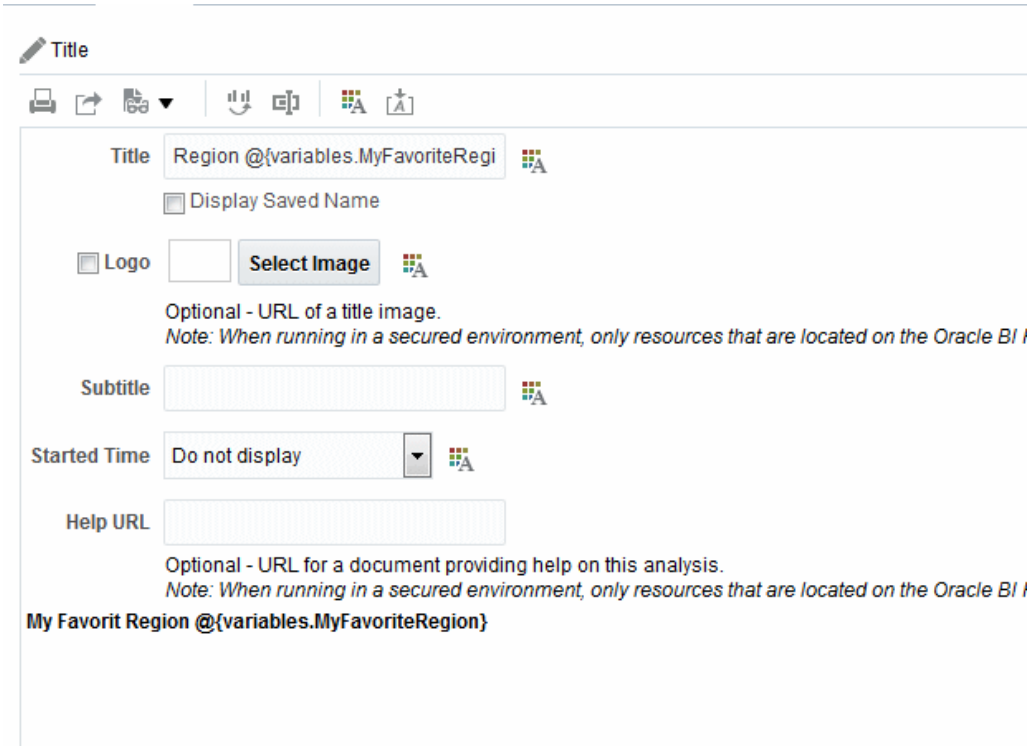
タイトル・ビューで変数を参照することにより、情報が正しいことが保証されます。

D50 Region 列に基づき、図に示すように、MyFavoriteRegion という名前のプレゼンテーション変数を作成する、Region という名前のダッシュボード・プロンプトを作成したとします。

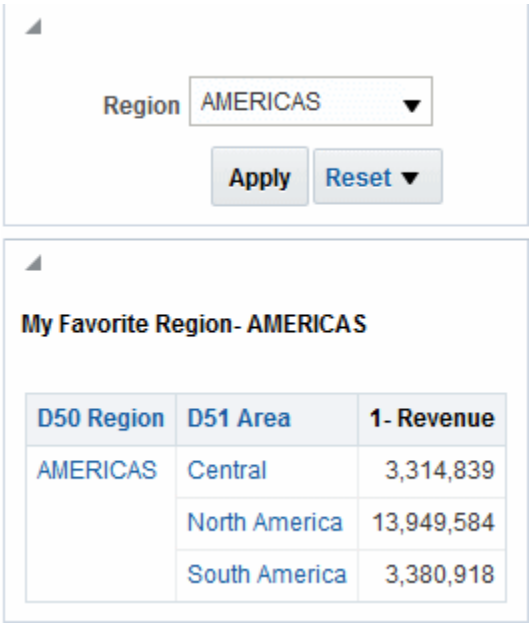


地域および地区ごとに収益を表示する分析を作成したとします。**「プロンプトで使用」**と設定されているフィルタを D50 Region 列へ追加し、この Region プロンプトを使用して、ユーザーに地域の入力を要求できるようにもしました。

Region プロンプトでのユーザーの選択が分析のタイトルに表示されるよう、タイトル・ビューで MyFavoriteRegion 変数を参照します。これを行うには、図に示すように、「タイトル」エディタの**「タイトル」**フィールドに、変数の構文 `@{variables.MyFavoriteRegion}`を入力します。



図に、ユーザーが Region プロンプトで「AMERICAS REGION」を選択した場合のダッシュボード・ページの結果を示します。分析タイトル内の変数が、ユーザーが選択した「AMERICAS REGION」に更新されていることに注意してください。



3

分析への外部データの追加

この章では、プレゼンテーション・サービスで作成した分析に外部データを含める方法について説明します。外部データはリポジトリの外部からのデータであり、このデータは、Visual Analyzer で作成され保存された外部サブジェクト領域に含まれます。外部サブジェクト領域を保存した後は、プレゼンテーション・サービスでの使用のためにそれらを使用できます。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- 分析への外部データの追加について
- 外部サブジェクト領域へのアクセスおよび外部サブジェクト領域のデータを含む分析の共有
- サブジェクト領域のアイコン
- 分析への外部サブジェクト領域の追加
- 分析からの外部サブジェクト領域の除去
- 外部サブジェクト領域データのダウンロード
- Oracle BI EE からの外部サブジェクト領域の削除

分析への外部データの追加について

プレゼンテーション・サービスで分析を作成または変更する場合、Visual Analyzer で作成および保存された外部サブジェクト領域のデータを含めることができます。

Visual Analyzer で作成および保存されたデータ・セットは、Oracle BI メタデータ・リポジトリのサブジェクト領域と照合され、モデル化されます。外部サブジェクト領域で分析を作成した場合、分析に列を追加することのみ可能で、データをモデル化することはできません。Visual Analyzer で行った外部サブジェクト領域に対する更新は、プレゼンテーション・サービスに表示されます。

新規分析を作成するか、既存の分析を変更した場合、Oracle BI メタデータ・リポジトリのサブジェクト領域と照合され、かつアクセス権限を持つ外部サブジェクト領域が、「サブジェクト領域の選択」ダイアログまたは「サブジェクト領域の追加/削除」ダイアログに表示されます。サブジェクト領域リストに含まれる外部サブジェクト領域の詳細は、外部サブジェクト領域へのアクセスおよび外部サブジェクト領域のデータを含む分析の共有を参照してください。

分析を作成または変更する際に、外部サブジェクト領域のデータを次の方法で使用できます:

- 外部サブジェクト領域を単独で使用する分析を作成します。

  外部サブジェクト領域にのみ基づく分析を作成できます。外部サブジェクト領域が照合されモデル化されるサブジェクト領域を使用する必要はありません。

- 外部サブジェクト領域と、外部サブジェクト領域が照合されモデル化されるサブジェクト領域を併用する分析を作成します。

たとえば、外部サブジェクト領域とされ保存された新規予算データに対する進捗レポートの更新など、エンタープライズ・データのメトリックをオーバーレイできます。人口統計などの外部サブジェクト領域内の属性で分析を強化すれば、教育レベルの違いが販売数量に与える影響に関する洞察を得ることができます。製品が再分類された場合、売上セグメンテーションがどのように変化するかを確認するなど、カスタム・ロールアップおよびセグメントを定義できます。

製品、ブランド、販売員など、販売に関するデータを含むサブジェクト領域があるとします。サブジェクト領域にはないターゲット売上という売上高を含む外部サブジェクト領域があります。サブジェクト領域の製品およびブランドの値を外部サブジェクト領域のターゲット売上の値と結合する分析を作成します。外部サブジェクト領域の製品およびブランド列がサブジェクト領域の列と照合され、ターゲット売上がメジャーとして追加されるように、外部サブジェクト領域がモデル化されています。照合により、外部サブジェクト領域がサブジェクト領域と関連付けられます。

外部サブジェクト領域へのアクセスおよび外部サブジェクト領域のデータを含む分析の共有

自分がアクセスする権限を持つ外部サブジェクト領域のみを分析に追加できます。

外部サブジェクト領域への権限は、Visual Analyzer で、またはその外部サブジェクト領域を使用する分析経由で付与されます。

外部サブジェクト領域は、Visual Analyzer でその外部サブジェクト領域を作成および保存したユーザーにより個人ユーザーまたは役割のメンバーとしてアクセス権限が付与されている場合に、「サブジェクト領域の選択」ダイアログまたは「サブジェクト領域の追加/削除」ダイアログに表示されます。

また、外部サブジェクト領域を含む分析を作成および保存したプレゼンテーション・サービス・ユーザーにより、その分析を表示または編集する権限が付与されている場合にも、その外部サブジェクト領域が「サブジェクト領域の選択」ダイアログまたは「サブジェクト領域の追加/削除」ダイアログに表示されます。次の点を考慮してください。

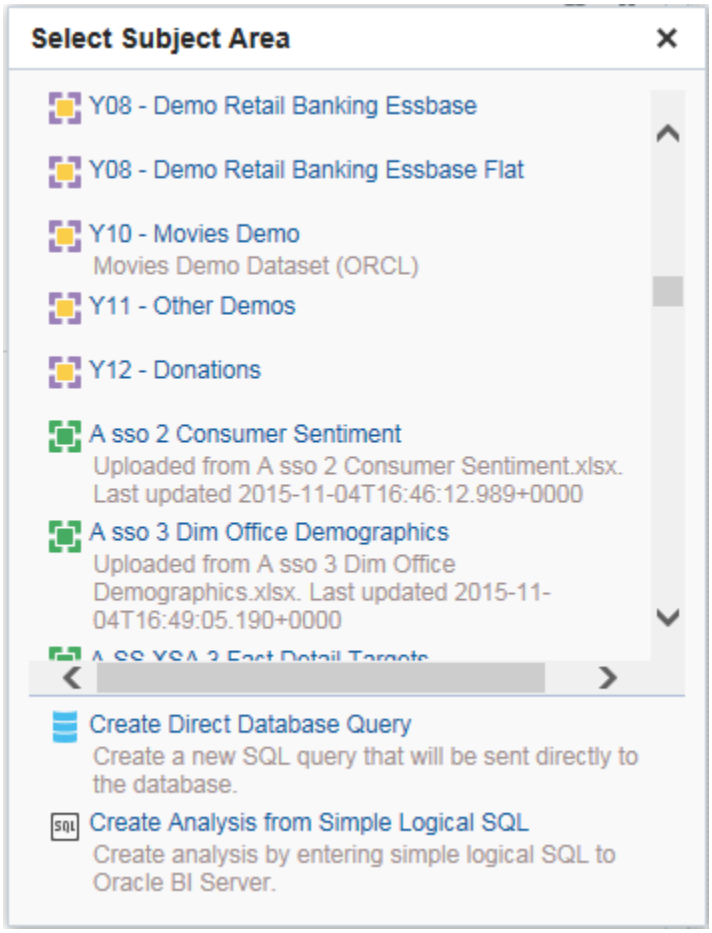
- ユーザーが外部サブジェクト領域を含む分析を保存すると、Oracle BI EE により、外部サブジェクト領域のデータが共有されることを確認するメッセージがユーザーに対して表示されます。
- 外部サブジェクト領域を使用する分析とともに保存されている権限は、その分析および外部サブジェクト領域に適用されます。
- 外部サブジェクト領域を使用する分析は共有カタログ・フォルダに保存する必要があります。これにより、その分析を表示または編集するユーザーが外部サブジェクト領域からのデータも表示できるようになります。
- 外部サブジェクト領域を使用する分析が共有フォルダ以外の場所に保存されていて、かつ外部サブジェクト領域にアクセスする権限が Visual Analyzer で与えられていないユーザーが分析を表示または編集する場合、外部サブジェクト領域のデータは分析に表示されません。

サブジェクト領域のアイコン

サブジェクト領域内のアイテムを異なる方法で示すアイコンが作成されます。

Oracle BI EE の「サブジェクト領域の選択」ダイアログと「サブジェクト領域の追加/削除」ダイアログでは、管理ツールで作成されたサブジェクト領域と Visual Analyzer で作成され保存された外部サブジェクト領域とを区別するために異なるアイコンが使用されます。

管理ツールで作成されたサブジェクト領域の場合は、紫色と黄色の四角形のアイコンが表示されます。Visual Analyzer で作成され保存された外部サブジェクト領域の場合は、緑色の四角形のアイコンが表示されます。次の図を参照してください。



分析への外部サブジェクト領域の追加

分析の作成時または既存の分析の変更時に、外部サブジェクト領域からデータを追加できます。

- 新規分析を作成する場合は、「サブジェクト領域の選択」ダイアログで、分析に使用する外部サブジェクト領域を選択します。
- 既存の分析を編集する場合は、「サブジェクト領域」ペインで**「サブジェクト領域の追加/削除」**をクリックし、追加する外部サブジェクト領域を選択して、**「OK」**をクリックします。

分析からの外部サブジェクト領域の除去

分析から外部サブジェクト領域を除去できます。

外部サブジェクト領域を除去すると、そのデータが分析から除去されます。外部サブジェクト領域とそのデータは、Oracle BI サーバー上に残ります。Oracle BI EE からの外部サブジェクト領域の削除を参照してください。

外部サブジェクト領域が一致してモデル化される場合にはサブジェクト領域は除去できません。

1. 外部データを追加した分析を編集用に開きます。

2. 「サブジェクト領域」ペインで、**「サブジェクト領域の追加/削除」**をクリックします。
3. 「サブジェクト領域の追加/削除」ダイアログで、除去する外部サブジェクト領域を選択して、**「OK」**をクリックします。

外部サブジェクト領域データのダウンロード

読取りアクセス権があるユーザーは、外部サブジェクト領域内のデータをダウンロードできます。

ダウンロードされたデータはすべてのワークシート、および各ワークシートのすべての列を含むファイルに保存されます。ダウンロードされたデータには、一番最近アップロードされたデータが反映されており、必ずしも外部サブジェクト領域にアップロードされた元データとは限りません。

外部サブジェクト領域の**読取り**、**変更**または**フル・コントロール**のいずれかの共有権限があれば、スプレッドシート・ファイル全体をダウンロードするアクセス権が与えられます。

外部データをダウンロードするには:

1. 「サブジェクト領域」ペインで外部サブジェクト領域を右クリックして、**「ダウンロード」**を選択します。
2. **「名前を付けて保存」**ダイアログで、デフォルト・ファイル名をそのまま使用するか、新しい名前をファイルに付けます。
3. **「保存」**をクリックします。

Oracle BI EE からの外部サブジェクト領域の削除

ストレージ制限を守るためにスペースを解放する必要がある場合は、Oracle BI サーバーから外部サブジェクト領域を恒久的に削除できます。

外部サブジェクト領域のみを削除できます。分析に含めた外部サブジェクト領域は削除できません。外部サブジェクト領域の削除は、分析からの外部サブジェクト領域の削除とは異なります。分析からの外部サブジェクト領域の除去を参照してください。

- 「サブジェクト領域」ペインで外部サブジェクト領域を右クリックして、**「削除」**を選択します。

4

ダッシュボードでの表示用のビューの追加

この章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition で分析の結果を有意義かつ直観的な方法で表示するために使用できるビューを説明します。ここでは、ダッシュボードの表示に対するビューの追加方法、ビューの値の変更(つまり、ライトバックの実行)方法、およびビューのマスター詳細リンクの設定方法を説明します。また、ビューの相互作用、ドリル、ソートおよび印刷も説明します。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- ビューとは
- 使用可能なビューのタイプ
- 分析の結果へのビューの追加
- 推奨ビジュアライゼーション機能とは
- ビューの編集
- 値の変更とライトバックの実行
- ビューでの相互作用
- ビューでのドリル
- ビューでのデータのソート
- 表ビュー、ピボット表ビューおよび拡張トレリス・ビューでの行および列のサイズ変更
- ビューの保存
- ビューまたは複合レイアウトの名前の変更
- ビューの再配置
- ビューの印刷
- ビューの印刷およびエクスポート・オプションの変更
- ダッシュボードに表示されるビューのプレビュー
- ビューの削除
- ビューの結果のリフレッシュ
- エージェント・ユーザーへ配信するビューのカスタマイズ

- ビューのマスター詳細リンクとは
- マスター詳細関係でのビューのリンク

ビューとは

ビューは、Oracle BI Enterprise Edition のプレゼンテーション機能を使用し、有意義かつ直観的な方法で分析の結果を表示します。

詳細情報にドリルダウンできるグラフやピボット表、説明テキスト、結果の限定に使用されたフィルタのリストなどの様々なビューを結果に追加できます。

新規分析の結果を表示する場合、分析エディタの「結果」タブの複合レイアウトにデフォルトで次のビューが表示されます。

- タイトル・ビューでは、保存された分析の名前を表示します。
- 表またはピボット表では、分析に含まれている列のタイプに応じていずれかに分析の結果を表示します。
  - 分析に属性列のみ、メジャー列のみ、または両者の組合せが含まれている場合、表がデフォルトのビューです。
  - 分析に 1 つ以上の階層列が含まれている場合、ピボット表がデフォルトのビューです。

分析の既存のビューのカスタマイズや削除、他のビューの追加、ビューの組合せやビューのペイン内への配置を行えます。

複数の結果のビューを用意することで、トレンドやデータの関係を確認できます。ダッシュボードに表示する結果をカスタマイズする場合、ダッシュボードに表示した際にビューの組合せや配置がどのように見えるかをプレビューできます。

その後、一連のビューとともに分析を保存できます。

使用可能なビューのタイプ

データの表示に使用できるビューのタイプは複数あります。

権限によって、すべてのビューにアクセスできるか、特定のビューのみにアクセスできるかが制御されます。表で、使用可能なビューのタイプについて説明します。

タイトル

タイトル、サブタイトル、ロゴ、カスタム・オンライン・ヘルプ・ページへのリンク、結果のタイムスタンプを表示します。

表

データを行と列に編成し、結果をビジュアル表示します。表はデータのサマリー・ビューで、ユーザーは行や列をドラッグ・アンド・ドロップし、データを異なるビューで表示できます。

ピボット表

ピボット表で結果を表示することにより、データのサマリー・ビューがクロス集計表形式で提供され、ユーザーが行や列をドラッグ・アンド・ドロップしてデータを異なるビューで表示できます。ピボット表では、列グループを含む通常の表と同様にデータが編成されますが、行と列の両方で複数レベルの見出しを表示できます。通常の表とは異なり、ピボット表の各データ・セルには一意の値が含まれます。このようにデータが編成されるため、ピボット表は行ベースの表より効率的です。ピボット表は、大量のデータの表示、データの階層的な表示、トレンド分析に最適です。

パフォーマンス・タイル

視覚的に単純かつ目立つ方法で 1 つの集計メジャー値を表示しながら、ダッシュボード・ビュー内に詳細に表示される可能性があるサマリー・メトリックをただちに示します。パフォーマンス・タイル:

- タイルに直接目立つように表示された、知っておく必要がある単純なファクトにユーザーの関心を向けさせます。
- 色、ラベルおよび限定されたスタイルを使用して、または背景色またはメジャー値の条件付き書式設定を使用して、単純な書式で視覚的に目立つようにステータスを通知します。たとえば、収益がターゲットを追跡していない場合、収益値は赤で表示することができます。
- プロンプト、フィルタ、ユーザー・ロールおよび権限を、ユーザーおよびそのコンテキストに関連付けることで応答します。
- 単一の集計値または計算された値をサポートします。

ツリーマップ

複数のレベルを持つ階層構造を、空間的制約の 2 次元でビジュアライゼーションして表示します。ツリーマップ:

- 事前定義済の領域によって制約され、2 つのレベルのデータを表示します。
- 長方形のタイルが含まれます。タイルのサイズは 1 つのメジャーに基づいており、タイルの色は 2 番目のメジャーに基づいています。
- マップ領域が制約されるという点で散布図グラフに似ています。このグラフでは、大量のデータをビジュアル化し、そのデータ内のトレンドと異常を迅速に識別できます。

ヒート・マトリックス

データを 2 次元で描画し、色のグラデーションで値を表現するため、大量のデータを分析して外れ値を特定する場合に適しています。ヒート・マトリックスでは、行と列のグループ化および交差で形成される点において、ピボット表と同様にデータが編成されます。

トレリス

多次元データが、グリッド内の一連のセルとして表示され、各セルは特定のグラフ・タイプを使用するデータのサブセットを表しています。データは、グラフ、マイクロチャートおよび数値で表されます。

トレリス・ビューには、単純トレリスと拡張トレリスの 2 つのサブタイプがあります。単純トレリスのビューは、類似を比較できるように複数のグラフを表示するのに最適です。拡張トレリスのビューは、トレンドを表示するスパーク・グラフを表示するのに最適です。

単純トレリスには、1 つの内部グラフ・タイプが表示されます(たとえば、複数の棒グラフのグリッド)。内部グラフには、共通の軸が常に使用されます。つまり、グラフのスケールが同期されます。

拡張トレリスには、メジャーごとに異なる内部グラフ・タイプが表示されます。拡張トレリスでは、ドリル、軸スケールなどに対して、各メジャー列が独立に動作します。たとえば、スパーク折れ線グラフとスパーク棒グラフが組み合されて、数値とともに表示されます。このような例では、スパーク折れ線グラフに一定期間の収益が表示され、スパーク棒グラフに販売数量が表示される場合があります。数値を表示するメジャー列をスパーク棒グラフの隣りに配置して、1 年の合計値として収益メジャーを表示する場合もあります。

マイクロチャートおよびスパーク・グラフの定義は、トレリス・ビューで使用される用語を参照してください

グラフ

数値情報をビジュアル表示することにより、大量のデータが理解しやすくなります。グラフを使用することで、テキスト・ベースの表示ではわからないパターンやトレンドが明らかになることが多々あります。ただし、厳密な値が必要な場合は、表などの他の表示方法でグラフを補完する必要があります。グラフは、グラフ・キャンバスと呼ばれる背景に表示されます。

使用可能なグラフのタイプを参照してください。

ゲージ

単一のデータ値を示します。サイズが小さいため、単一のデータ値を表示する場合、グラフよりゲージの方が通常効率的です。データのビジュアル表示に加えて、各ゲージには数値形式の結果も表示されます

ゲージはデータの問題点を示します。ゲージは通常、1 つのデータ・ポイントをプロットし、そのポイントが許容範囲内か許容範囲外かを表します。このため、ゲージは、目標に対する成果を表す場合に便利です。分析のデータによっては、ゲージ・ビューが複数のゲージのゲージ・セットで構成される場合があります。たとえば、過去 12 か月の売上データを表示するゲージ・ビューを作成する場合、各月 1 つずつ、12 個のゲージでゲージ・ビューが構成されます。総売上高を表示するゲージ・ビューを作成する場合、ゲージ・ビューは 1 つのゲージで構成されます。ゲージまたはゲージ・セットは、ゲージ・キャンバスと呼ばれる背景に表示されます。

使用可能なゲージのタイプについては、使用可能なゲージのタイプを参照してください

ファンネル

ターゲット値と実際の値を数量、レベルおよび色を使用して表す 3 次元のグラフで結果を表示します。通常、ファンネル・グラフは、期間や段階に伴って変化するデータを図表で表示する場合に使用されます。たとえば、ファンネル・グラフは、四半期を通した売上数量の表示にしばしば使用されます。

ファンネル・グラフは、販売パイプラインなど、ターゲットがステージごとに著しく減る(または増える)ことがわかっている場合のデータの実際とターゲットとの比較の表示に非常に適しています。ファンネル・グラフでは、しきい値は、ターゲット値のパーセンテージを示し、色は、各ステージにビジュアル情報を与えます。色の付いた領域のいずれかをクリックすると、詳細情報にドリルダウンできます。

使用可能なファンネル・グラフのタイプについては、使用可能なファンネル・グラフのタイプを参照してください

マップ・ビュー

結果をマップに重ねて表示します。データに応じて、イメージ、色による塗りつぶし領域、棒グラフと円グラフ、可変サイズのマーカーなどの書式で、結果をマップに重ねることができます。

フィルタ

分析に有効なフィルタを表示します。(選択ステップと同様に)フィルタを使用すると、分析を限定し、特定の質問への回答となる結果を得ることができます。フィルタは、問合せの集計前に適用されます。

選択ステップ

分析に有効な選択ステップを表示します。(フィルタと同様に)選択ステップを使用すると、特定の質問への回答となる結果を得ることができます。選択ステップは、問合せの集計後に適用されます。

列セレクタ

結果に列セレクタを追加します。列セレクタは、事前に選択された列を含む一連のドロップダウン・リストです。ユーザーは列を動的に選択し、分析のビューに表示されているデータを変更できます。

ビュー・セレクタ

結果にビュー・セレクタを追加します。ビュー・セレクタは、保存済ビューから特定の結果のビューを選択できるドロップダウン・リストです。

凡例

結果に凡例を追加すると、ゲージに適用されているカスタム色の意味など、結果に使用されている特別な形式の意味を記録できます。

ナレーティブ

1 段落以上のテキストで結果を表示します。結果の各列に対するプレースホルダを含む文を入力したり、行の区切りを指定できます。

ティッカ

インターネット上の多くの金融サイトやニュース・サイトで使用されている株式ティッカと同様の形式のティッカやマーキーで結果を表示します。表示する情報とページでのスクロール方法を制御できます。

静的テキスト

結果に静的テキストを追加します。HTML を使用して、バナー、ティッカ、ActiveX オブジェクト、Java アプレット、指示、説明、グラフなどを結果に追加できます。

≪論理 SQL ｜ Logical SQL ｜ Bifndn≫

分析用に生成された SQL 文を表示します。このビューは、トレーナや管理者に有用で、標準的なユーザー向けの結果には通常含まれません。コンテナの書式設定や削除以外の変更は、このビューに行えません。

セグメントの作成

結果に「セグメントの作成」リンクを表示します。ユーザーは、このリンクをクリックして、オラクル社の Siebel Marketing 運用アプリケーションに、結果データに基づいてセグメントを作成できます。このビューは、バージョン 7.7(以上)のオラクルの Siebel Marketing 運用アプリケーションのユーザー向けのものです。

詳細は、*Oracle マーケティング・セグメンテーション・ガイド*を参照してください。

ターゲット・リストの作成

結果に「ターゲット・リストを作成」リンクを表示します。ユーザーは、このリンクをクリックして、オラクル社の Siebel 運用アプリケーションに、結果データに基づいてターゲット・リストを作成できます。このターゲット・リストは、定義されている、このターゲット・セットに対するコール・アクティビティ情報の開始と記録のベースとして使用できます。このビューは、オラクル社の Siebel Life Sciences Analytics アプリケーションと統合された Siebel Life Sciences 運用アプリケーションのユーザー向けのものです。

使用可能なグラフのタイプ

様々なタイプのデータを表示するのに様々なタイプのグラフが用意されています。

表に、使用可能なグラフのタイプと、その使用方法を示します。ここでは、各タイプに使用できるスタイルも示します。散布図、レーダー・グラフおよびマイクロチャート以外のグラフ・タイプはすべて、2 次元(2D)にも 3 次元(3D)にもできます。すべてのタイプのグラフが、すべてのタイプのデータに適切というわけではありません。

グラフ・タイプ	グラフのサブタイプ	説明	スタイル
棒	垂直 曲線 水平 積上げ垂直 積上げ水平 100%積上げ垂直 100%積上げ水平	カテゴリに関連付けられている数量を示します。棒グラフでは、数量が棒の長さで示され、カテゴリが棒または棒のグループで示されます。 棒グラフは、競合製品の売上、同一製品の異なる期間での売上、同一製品の異なる市場での売上など、類似項目間での違いを比較する場合に便利です。 横方向または縦方向に棒を表示することで、メジャー列の比較に使用できます。	四角形 三角形 円柱 ひし形 グラデーション パターン塗り
折れ線	-	数量を時間の経過とともに、あるいはカテゴリ別に示します。 折れ線グラフは、時間に伴うトレンドを表示する場合に便利です。 複数のメジャー列のプロットに使用できます。	標準線 段付きの線 曲線
面	積上げ 100%積上げ	時間やカテゴリによる各値の割合のトレンドを示します。 面グラフは、線の間の領域が塗りつぶされた折れ線グラフです。領域が積み重なり、各期間またはカテゴリの合計になります。100%積上げグラフでは、各カテゴリが合計値に占める比率として表示されます。	単色塗り グラデーション塗り パターン塗り
円	-	全体に対するパーセンテージでデータ・セットを示します。 円グラフは、地域や地区ごとの売上のように、全体に対する各部分を比較する場合に便利です。	単色塗り グラデーション塗り パターン塗り
折れ線-棒	標準 積上げ	異なる範囲の 2 つのデータのセットを、一方は棒グラフで、他方はその棒グラフに折れ線グラフを重ねてプロットします。 折れ線-棒グラフは、データ・セット間のトレンド関係を示す場合に便利です。	四角形 三角形 円柱 ひし形 グラデーション パターン塗り
時系列折れ線	-	時系列データをプロットします。ここでは、データ・ポイント間を経過した時間に基づいて横軸を作成します。	標準線 段付きの線 曲線
パレート	-	基準を降順に表示する棒グラフと折れ線グラフの形式です。このグラフ・タイプでは、折れ線はパーセンテージの累計を示します。 パレート・グラフは、最良と最悪、最高と最低などの顕著な要素を特定する場合に便利です。	四角形 三角形 円柱 ひし形 グラデーション パターン塗り
散布	-	個別の点で各 x-y 値を示し、x-y グリッド内に点在させます。ここでは、依存関係のない 2 つの変数に基づいて、データ・ポイントをプロットします。多数のデータ・ポイントをプロットでき、データ・ポイントの分布を確認できます。 散布図は、大規模なデータ・セット内の関係とトレンドを把握する場合に便利です。	標準散布 散布と折れ線

グラフ・タイプ	グラフのサブタイプ	説明	スタイル
バブル	-	これは、散布図の一種で、データ要素を円(バブル)で示します。これは、3 つの変数を 2 次元で表します。値の 1 つは円の横軸での位置で表されます。もう 1 つは円の縦軸での位置で表されます。3 つ目の値は、円の大きさで表されます。 バブル・グラフは、3 つの変数を持つデータをプロットする場合および時間の経過に伴う財務データを表示する場合に便利です。	なし
レーダー	-	棒グラフと同じ情報をプロットしますが、グラフの中心から放射状にデータを表示します。各データ要素には、それぞれの値軸があります。 レーダー・グラフは、重なりや分布を調べる場合に便利です。	なし
マイクロ・チャート	スパーク折れ線 スパーク棒 スパーク面	トレリス・ビューのコンテキストでのみ表示され、トレンド情報の表示に適したテキストサイズ(付近のテキスト部分と同等のサイズ)のグラフィックです。 マイクロチャートのグラフ・タイプは拡張トレリスで使用すると便利で、スパーク・グラフと数値を組み合せてデータが表示されます。 マイクロチャートには列や凡例はありません。より大きなグラフと同様に、マイクロチャートのメジャー値は相対的なサイズの棒(または折れ線または面)として表示されます。各メジャー名は、その列ヘッダーに表示されます。メジャーの詳細は、データ・セルにマウスを合わせると、ツールチップ・テキストとして表示されます。	なし
ウォーターフォール	-	ウォーターフォール・グラフでは、連続的および累積的に値が増加または減少する状況をビジュアル化できます。ウォーターフォール・グラフには次の特性があります: • 各メジャーが総計に対してどの程度コントリビュートしているかにユーザーの関心を向けさせます。 • 色を使用して、単純な書式で通知します。 初期値は、合計に到達するまで後続の値(負と正の両方のデルタまたは変更)と合算されます。合計はウォーターフォール・グラフごとに 1 つのみであり、小計は加算できます。追加情報は、使用可能なウォーターフォール・グラフの書式のタイプを参照してください。	なし

使用可能なファンネル・グラフのタイプ

ファンネル・グラフにはタイプが複数あります。

使用可能なファンネル・グラフのタイプを表にリストし、説明します。各タイプのスタイルは、単色塗りまたはグラデーション塗りのいずれかです。

タイプ	説明
標準	各ステージの幅が等しい、標準の形状を使用します。
非標準	各ステージの幅が異なる、標準の形状を使用します。

タイプ	説明
最後のステージのみ	各ステージの幅が等しい、標準の形状を使用します。これは、最後のステージより前のすべてのステージのターゲット値が、最後のステージのターゲット値とターゲット係数と呼ばれる定数に基づいて算出される点以外は、標準のファンネル・グラフと同じです。

トレリス・ビューで使用可能なグラフのタイプ

トレリス・ビューで使用できるグラフ・タイプのリストは、トレリス・ビューのサブタイプが単純トレリスか拡張トレリスかによって異なります。

単純トレリスでは、次のタイプのグラフを使用できます。

- 棒(サブタイプ縦)
- 棒(サブタイプ横)
- 折れ線
- 面
- 折れ線-棒
- 円
- 散布
- バブル

拡張トレリスには、次のビジュアライゼーションの選択肢があります。

- 数値
- マイクロチャートまたは次のサブタイプ:
  - スパーク棒
  - スパーク折れ線
  - スパーク面

各グラフ・タイプの詳細は、使用可能なグラフのタイプを参照してください

使用可能なゲージのタイプ

様々なタイプのデータについて情報を表示するために、様々なゲージを使用できます。

次の表では、使用可能なゲージのタイプをリストし、説明します。2 次元(2D)にも 3 次元(3D)にもできる球ゲージ以外のゲージはすべて 2 次元です。サイズは、小、中、大、カスタム・サイズのいずれかです。

タイプ	説明
ダイアル	あらかじめ定義された限度内のデータを指す、1 つ以上のインジケータを持つダイアル型の弧を使用してデータを表示します。

タイプ	説明
横棒	色が変化する横棒を使用してデータを表示し、あらかじめ定義された限度内にデータがあるかどうかを示します。横棒の内側の四角形は、外側の四角形に印された範囲に対するデータの現在のレベルを示します。
縦棒	色が変化する縦棒を使用してデータを表示し、あらかじめ定義された限度内にデータがあるかどうかを示します。縦棒の内側の四角形は、外側の四角形に印された範囲に対するデータの現在のレベルを示します。
球	色が変化する円を使用してデータを表示し、あらかじめ定義された限度内にデータがあるかどうかを示します。 球ゲージは、ステータスを知る必要があり、特定の値の表示や他のしきい値の範囲についての関連情報は必要ない場合に便利です。

使用可能な論理 SQL ビューのタイプ

論理 SQL は複数の方法で表示できます。

表に、使用可能な論理 SQL ビューのタイプをリストし、説明します。

タイプ	説明
標準	論理 SQL のみを表示します。このビューは、生成された論理 SQL が正しいかどうかを確認する場合に便利です。
診断	不正なデータの問題がある場合にサービス・リクエストに含めるのに役立つ診断情報を表示します。

使用可能なウォーターフォール・グラフの書式のタイプ

ウォーターフォール・グラフの書式では、棒の色の組合せが事前に定義されています。

増加(正)と減少(負)のデフォルトの色はそれぞれ緑と赤です。書式によって、棒の色や表示する棒など、ウォーターフォール・グラフの外観が定義されます。

ウォーターフォール・グラフに使用できる書式のタイプを表にリストし、説明します。

書式タイプ	説明
増加、減少および合計	この書式は、増加メジャー、減少メジャーおよび合計(小計)を指定された色で表示する場合に使用します。合計と小計の両方を、関連付けられた同じ色で表示します。
最初、増加、減少および合計	この書式は、増加メジャー、減少メジャーおよび合計(または小計)を表示する場合に使用します。最初の棒と合計(小計)には、同じ色の棒が使用されます。
単一色	この書式は、すべての棒を同じ色で表示する場合に使用します。
二色	この書式は、最初の棒と合計(または小計)を 1 番目の色で表示し、正または負の値を 2 番目の色で表示する場合に使用します。
カスタム	この書式は、増加値と減少値、最初の棒および合計の棒に使用する固有の色を作成する場合に使用します。色ブロック・リストの 1 つから色を選択すると、書式は自動的にカスタムになります。合計と小計の両方を、関連付けられた同じ色で表示します。

デフォルトでは、ウォーターフォール・グラフには次の特性があります。

- 棒は累積してレンダリングされます。各棒は、前の棒の最上部からレンダリングを開始します(正の値は上に移動し、負の値は下に移動します)。累積合計は様々なポイントに(チャート・ベースラインから)レンダリングできます。
- **「増加、減少および合計」**の書式を使用して、グラフを 2D 棒グラフとしてレンダリングします。
- デフォルトの色は、緑(正)、赤(負)および青(合計)です。
- データ範囲にズームは、ウォーターフォール・グラフではサポートされていません。
- データ・ラベルは、定義されている仕様に従って表示されます。詳細は、「グラフのプロパティ」ダイアログの「タイトルとラベル」タブの**「縦軸のラベル」、「横軸のラベル」または「データ・マーカー」:「ラベルの書式設定」**ボタンを参照してください。
- ウォーターフォール・グラフのツールチップには、他のグラフ・タイプと同じ情報(メンバー名、ディメンション、実際の値など)が含まれていますが、小計値を含めることもできます。
- 左クリックの相互作用は、合計の棒または凡例には使用できません。

ウォーターフォール・グラフ・プロパティの編集の詳細は、「グラフのプロパティ」ダイアログの「スタイル」タブおよび「グラフのプロパティ」ダイアログの「タイトルとラベル」タブを参照してください。

分析の結果へのビューの追加

データがわかりやすくなるように、分析の結果に 1 つ以上のビューを追加できます。

次のガイドラインに留意してください。

- 結果に適さないグラフ・タイプやゲージ・タイプを選択すると、結果は表示されません。
- 負の値を含むデータのビジュアル化に円グラフを使用しないでください。分析をフィルタしてすべての値が 0 より大きいようにするか、別のグラフ・タイプを使用します。
- グラフ、ファンネル・グラフおよびゲージを設計する際には、グラフまたはゲージがデスクトップまたはモバイル・デバイスのどちらに表示されるかによって、グラフまたはゲージの凡例の表示が異なります。
  - デスクトップ(グラフまたはゲージの形式は Flash)では、凡例リストはスクロール可能になり、凡例テキストは折り返されません。
  - モバイル・デバイス(グラフまたはゲージの形式は PNG)では、凡例リストはスクロール不可になり、凡例テキストは折り返される場合があります。

  推奨ビジュアライゼーション機能とはを参照してください

1. 「分析」エディタの「結果」タブ(または「ビュー」ペイン)で、**「新規ビュー」**ボタンをクリックし、作成するビューのタイプを次のいずれかの方法で選択します。
   - 作成するビュー・タイプを把握している場合は、それをクリックします。
   - 分析のデータに基づいて、Oracle BI EE の推奨ビジュアライゼーション機能で最適なビューを自動作成する場合は、特定のビュー・タイプをクリックせずに、**「最良のビジュアライゼーション」**をクリックします。

- Oracle BI EE の推奨ビジュアライゼーション機能を使用して、分析のデータ、およびビューに表示する必要がある内容に基づいて、ランク付けされたビュー・タイプのリストを表示する場合は、**「推奨ビジュアライゼーション」**をクリックして、「ビジュアライゼーションの選択」リストで、**「パターンと外れ値を検出中」**などのプリファレンスを選択します。一部のビュー・タイプでは、推奨ビジュアライゼーション機能を使用して、推奨サブタイプを選択することもできます。

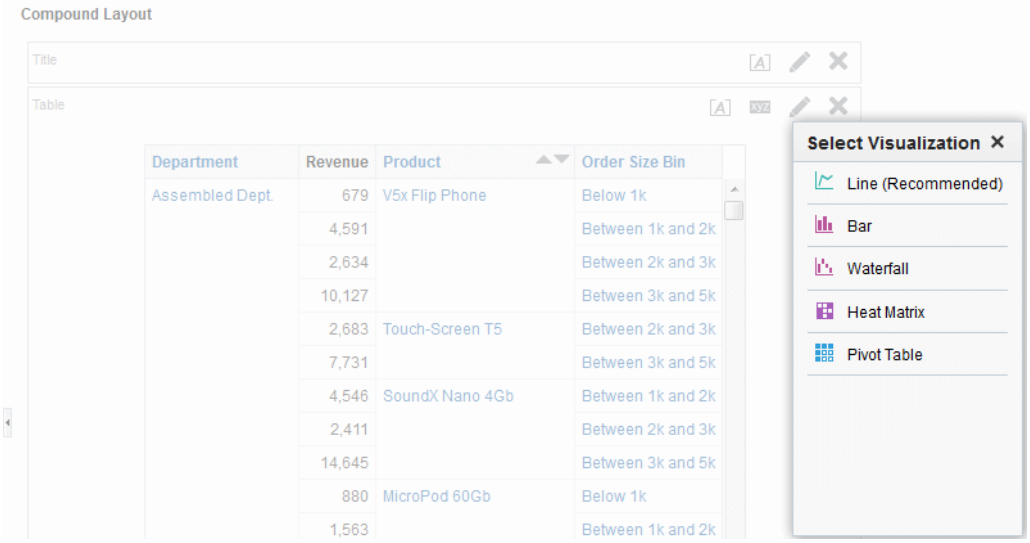
複合レイアウトのコンテナにビューが表示されます。このビューの生成には、デフォルト(デフォルトのビュー・タイプ、デフォルトの書式設定など)が使用されます。

2. ビューのコンテナを書式設定するには、ビューのコンテナの**「コンテナのフォーマット」**ボタンをクリックし、書式設定ダイアログを表示します。
3. ファンネル、ゲージ、グラフ、ヒート・マトリックス、マップ、パフォーマンス・タイル、ピボット表、表、ツリーマップまたはトレリス(単純または拡張)ビューのプロパティを設定するには、**「プロパティの表示」**ボタンをクリックします。
4. ビューを編集するには、ビューのコンテナの**「ビューの編集」**ボタンをクリックします。
5. ビューを保存します。

推奨ビジュアライゼーション機能とは

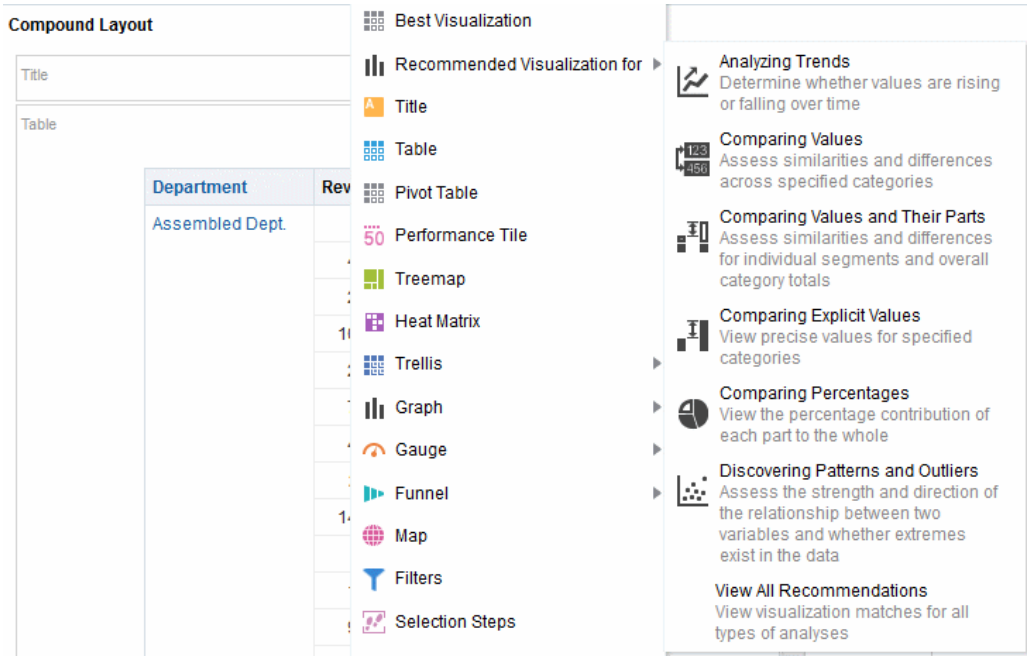
Oracle BI EE では、ビューを作成する場合は常に、推奨機能が提供されます。

分析エディタで新しいビューを作成しているとき、次の図に示すように、この機能によってビュー・タイプ提案のランク付きリストがダイアログに表示されます。



推奨ビジュアライゼーション機能は、ディメンション数やメンバー数などのビューに対する入力から情報を収集して動作します。その後、可能性がある各ビューに対して、最適なレイアウトが決定されます。

新しいビューが便利なのは、「トレンドを分析中」か。「値とその部分を比較中」か。「パターンと外れ値を検出中」か。次の図に示すように、「推奨ビジュアライゼーション」サブメニューでは、作成しようとしているビューを表示する目的を分析エディタに指示できます。



各ビューは、事前定義されたルール・セットに基づいたスコアを受け取ります。特定のビュー・タイプは、そのスコアに基づいた可能性に従って除外されます。特定のレベルを超えるスコアがあれば、ランク付けされた推奨ビューのリストが推奨ビジュアライゼーション機能によって作成されます。

提案されるビューのランキングから選択するステップをスキップする場合は、「ビューの作成」メニューから**「最良のビジュアライゼーション」**オプションをかわりに選択すれば、推奨リストが表示されずに最適なビューがすぐに作成されます。

ビューの編集

論理 SQL ビュー以外の各ビュー・タイプには、編集用のエディタがそれぞれ用意されています。

論理 SQL ビューは編集できません。コンテナの書式設定または削除のみ行えます。

各ビュー・エディタには、そのビュー・タイプに特有の機能が備わっていますが、他のビュー・タイプと共通の機能が含まれている場合もあります。

1. 編集対象のビューを含む分析を開きます。
2. **「分析」エディタ: 「結果」**タブをクリックします。
3. ビューの**「ビューの編集」**ボタンをクリックします(あるいは、「ビュー」ペインでビューを選択して**「ビューの編集」**ボタンをクリック)。

   次のいずれかのエディタが表示されます。

   - 「列セレクタ」エディタ
   - 「セグメントの作成」エディタ
   - 「ターゲット・リストの作成」エディタ
   - 「フィルタ」エディタ
   - 「ファンネル」エディタ
   - 「ゲージ」エディタ

- 「グラフ」エディタ
- 「ヒート・マトリックス」エディタ
- 「凡例」エディタ
- 「マップ」エディタ
- 「ナレーティブ」エディタ
- 「パフォーマンス・タイル」エディタ
- 「ピボット表」エディタ
- 「選択ステップ」エディタ
- 「静的テキスト」エディタ
- 「表」エディタ
- 「ティッカ」エディタ

  「分析」エディタのこのエディタを使用して、分析の結果をマーキーとして表示する(移動する結果がページを横切ってスクロールします)、ティッカ・ビューを編集します。スクロール領域のサイズ、結果のスクロールの速度と方向、およびその他の表示設定をカスタマイズできます。Web ブラウザで移動テキストがサポートされていない場合、結果は表示されますがページを横切ってスクロールしません。

- 「タイトル」エディタ
- 「ツリーマップ」エディタ
- 「トレリス」エディタ
- 「ビュー・セレクタ」エディタ

4. ビューのエディタを使用して、適切な編集を行います。

   詳細は、次のものを参照してください。

   - 列セレクタ・ビューの編集
   - ゲージ・ビューの編集
   - グラフ・ビューの編集
   - ヒート・マトリックス・ビューの編集
   - 凡例ビューの編集
   - マップ・ビューの編集
   - ナレーティブ・ビューの編集
   - パフォーマンス・タイル・ビューの編集
   - 表ビューおよびピボット表ビューの編集
   - ツリーマップ・ビューの編集
   - トレリス・ビューの編集

- ビュー・セレクタ・ビューの編集

5. 「完了」をクリックします。
6. ビューを保存します。

次の図では、「D50 Region」行エッジに小計が含まれており、コンテンツ・ページングが 1 ページ 10 行に設定されています。小計が行数に含まれています。

Pivot Table

		2010	2011	2012
D50 Region	R2 Order Type	31 # of Orders (Cnt Distinct)	31 # of Orders (Cnt Distinct)	31 # of Orders (Cnt Distinct)
AMERICAS	Express	1263	1358	1486
	Secure	3065	2895	2700
	Standard	2771	2594	2823
AMERICAS Total		7099	6847	7009
APAC	Express	1311	1373	1539
	Secure	3082	2944	2907
	Standard	2833	2668	2862
APAC Total		7226	6985	7308
EMEA	Express	1788	1848	2014
	Secure	4087	3945	3722

Rows 1 - 10

表ビューおよびピボット表ビューの編集

データの分析と表示によく使用される 2 つのビューは、表とピボット表です。

図に、ダッシュボード・ページで表示される表とピボット表のサンプルを示します。

D50 Region	R2 Order Type	31 # of Orders (Cnt Distinct)	T05 Per Name Year
AMERICAS	Express	1263	2010
		1358	2011
		1486	2012
	Secure	3065	2010
		2895	2011
		2700	2012
	Standard	2771	2010
		2594	2011
		2823	2012
APAC	Express	1311	2010

Rows 1 - 10

		2010	2011	2012
D50 Region	R2 Order Type	31 # of Orders (Cnt Distinct)	31 # of Orders (Cnt Distinct)	31 # of Orders (Cnt Distinct)
AMERICAS	Express	1263	1358	1486
	Secure	3065	2895	2700
	Standard	2771	2594	2823
AMERICAS Total		**7099**	**6847**	**7009**
APAC	Express	1311	1373	1539
	Secure	3082	2944	2907
	Standard	2833	2668	2862
APAC Total		**7226**	**6985**	**7308**
EMEA	Express	1788	1848	2014
	Secure	4087	3945	3722

Rows 1 - 10

これらのビューは同じタイプのエディタを使用し、ドラッグ・アンド・ドロップ、ソート、ドリル、条件付き書式設定など、多くの機能を共有します。次のリストに、2 つのタイプの違いを示します。

- **デフォルト・ビュー** - 分析を作成して結果を表示する際、分析内のデータによってデフォルトのビューが異なります。
  - **表** - 分析に属性列のみ、メジャー列のみ、または両者の組合せが含まれている場合、表がデフォルトのビューです。
  - **ピボット表** - 分析に 1 つ以上の階層列が含まれている場合、ピボット表がデフォルトのビューです。
- **ドロップ・ターゲット** - 列のレイアウトの変更に使用するドロップ・ターゲットは、2 つのビューで多少異なります。両方のビューに、「*<view-type>*」プロンプト、「セクション」および「除外」ドロップ・ターゲットがあります。図に、複数の列を「*<view-type>*」プロンプト・ターゲット(ページ・エッジ)に置くと、各列が個別のドロップダウン・リストでそれぞれの値を表示することを示します。
  - **表** - 表は、同じドロップ・ターゲットに列とメジャーを持ちますが、行は持ちません。

  - **ピボット表** - ピボット表は、行、列およびメジャーを別個のドロップ・ターゲットとして持ちます。

- **メジャー列のドラッグ・アンド・ドロップ** - メジャー列の動作は、表にドラッグ・アンド・ドロップされた場合とピボット表にドラッグ・アンド・ドロップされた場合で多少異なります。

  - **表** - 表では、メジャー列を表の中央にドラッグ・アンド・ドロップすると、メジャー列が列として機能します。

  - **ピボット表** - ピボット表では、メジャー列を中央にドラッグ・アンド・ドロップし、そのラベルを様々な場所に配置できます。

- **列名と見出し** - 表とピボット表の両方で列見出しの表示をオフにできます。ただし、列名については次の違いがあります:

  - **表** - 表では、列の名前が常に表示されます。

  - **ピボット表** - ピボット表では、列名の表示をオフにできます。

- **プロパティ** - 2 つのビューのプロパティは、ページ・コントロールや緑の塗りつぶし書式設定などの点で多少異なります。

表およびピボット表のエディタを使用して、ビューの外観と機能をカスタマイズできます。エディタでは、多くの機能が共有されます。

表またはピボット表を編集するには:

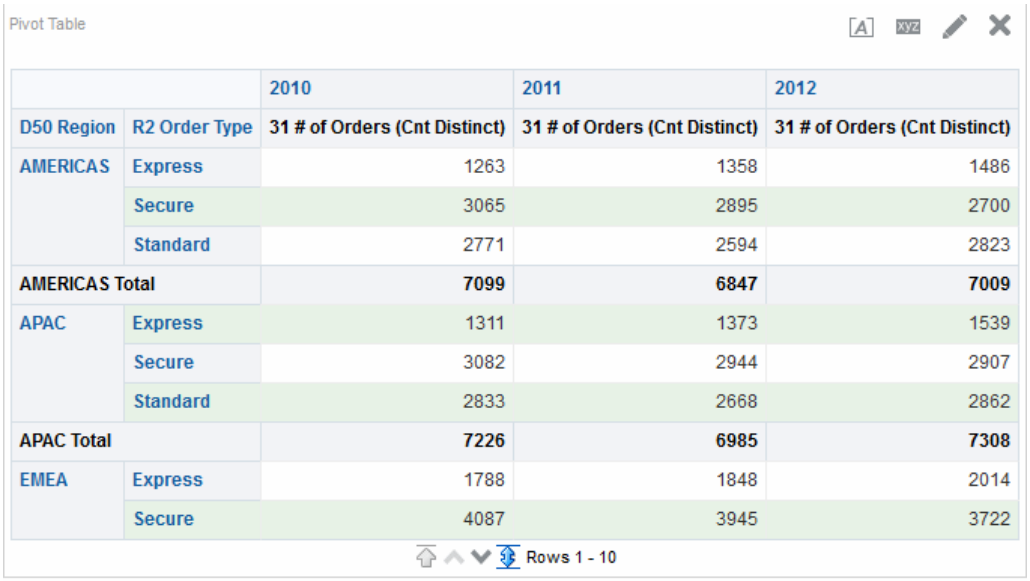
1. 「結果」タブの「表」エディタまたは「結果」タブの「ピボット表」エディタを表示します。
2. 表またはピボット表のプロパティを設定するには、ツールバーの**「表ビューのプロパティ」**または**「ピボット表ビューのプロパティ」** ボタンをクリックします。「表のプロパティ」ダイアログまたは「ピボット表のプロパティ」ダイアログが表示され、次のことができるようになります。
   - データの参照に使用する方法(スクロールまたはページ・コントロール)を指定します。
   - 表およびピボット表の書式設定プリファレンスを指定します。
   - マスター詳細リンクを指定します。
   - null 値の表示を指定します。
   - ライトバックと呼ばれる表の列値の変更を、ユーザーが実行できるように設定します。
3. エディタのツールバーのボタンを使用して、操作を実行します。
4. ビューのコンテンツを操作するには、次のペインを使用します。
   - 「サブジェクト領域」ペイン
   - 「カタログ」ペイン
   - 「レイアウト」ペイン
   - 「選択ステップ」ペイン
5. ビューの列のソート順を指定します。

6. ビューのデータをドリルして、詳細を表示します。
7. 右クリックして基本的なビューの相互作用を実行します。
8. 表のライトバック機能を有効にすると、ユーザーによるバックエンド・データベースの更新や書込みが可能になります(適切な権限がある場合)。たとえば、ユーザーは、「売上」ダッシュボードに現在の四半期の売上目標を入力できます。

表およびピボット表への書式の適用

読みやすくなるよう、表とピボット表を書式設定できます。

緑の塗りつぶしスタイルでは、行または列が 1 行おきに薄緑色で表示されます。装飾的な書式設定はビューの外観全体に作用し、緑の塗りつぶしのデフォルトの色を変更できます。次の図では、緑の塗りつぶしスタイルが適用されたダッシュボード・ページで表示されるピボット表を示します。


Pivot Table

		2010	2011	2012
D50 Region	R2 Order Type	31 # of Orders (Cnt Distinct)	31 # of Orders (Cnt Distinct)	31 # of Orders (Cnt Distinct)
AMERICAS	Express	1263	1358	1486
	Secure	3065	2895	2700
	Standard	2771	2594	2823
AMERICAS Total		7099	6847	7009
APAC	Express	1311	1373	1539
	Secure	3082	2944	2907
	Standard	2833	2668	2862
APAC Total		7226	6985	7308
EMEA	Express	1788	1848	2014
	Secure	4087	3945	3722

Rows 1 - 10

装飾的な書式とはを参照してください

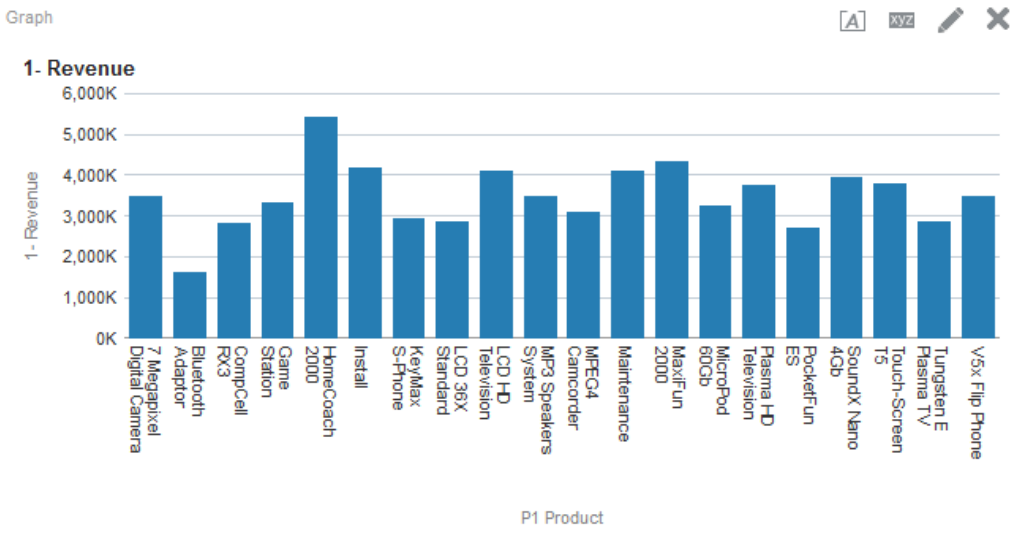
1. エディタのツールバーで**「プロパティの表示」**ボタンをクリックするか、「結果」タブの「複合レイアウト」から**「プロパティの表示」**ボタンをクリックします。

   「表のプロパティ」ダイアログや「ピボット表のプロパティ」ダイアログが表示されます。
2. 緑にするスタイルを追加するには、**「代替スタイル設定の有効化」**ボックスをクリックし、リストからスタイルを選択します。
3. 装飾的な書式設定を追加するには、代替書式設定ボタンをクリックし、「書式の編集」ダイアログで必要な変更を行います。
4. 緑の塗りつぶしのデフォルトの色を変更するには、セル書式の新しい背景色を選択します。他に必要な変更を行い、**「OK」**をクリックします。
5. 「プロパティ」ダイアログで他に必要な変更を行い、**「OK」**をクリックします。

グラフ・ビューの編集

様々なグラフの種類を使用してデータを分析または表示することができます。

次の図では、ダッシュボード・ページで表示される棒グラフのサンプルを示します。



1. 「結果」タブの「グラフ」エディタを表示します。
2. グラフのプロパティを設定するには、ツールバーの**「グラフ・プロパティの編集」**ボタンをクリックします。
3. 「グラフのプロパティ」ダイアログでは、次のプロパティを設定できます。
   - グラフ・キャンバスに関連するもの(幅や高さ、凡例の位置など)
   - グラフの外観を制御するもの(スタイルなど)
   - 軸の上下限と目盛マークに関するもの
   - グラフのタイトルとラベルの表示を制御するもの
4. エディタのツールバーのボタンを使用して、ビューの印刷やビューのエクスポートなどの操作を実行します。
5. ビューのコンテンツを操作するには、次のペインを使用します。
   - 「サブジェクト領域」ペイン
   - 「カタログ」ペイン
   - 「レイアウト」ペイン
   - 「選択ステップ」ペイン
   - (ファンネル・グラフおよびゲージのみ)しきい値を設定する「設定」ペイン
6. 右クリックして基本的なビューの相互作用を実行します。
7. ビューのデータをドリルして、詳細を表示します。

グラフの外観の書式設定

グラフを書式設定すると、表示されているデータがユーザーにとって理解しやすくなります。

2 つの設定に基づいて、グラフの外観を書式設定できます。

- グラフ要素の位置(線-棒グラフの線や棒、または円グラフのスライスなど)。

位置に基づいたグラフの書式設定を参照してください。

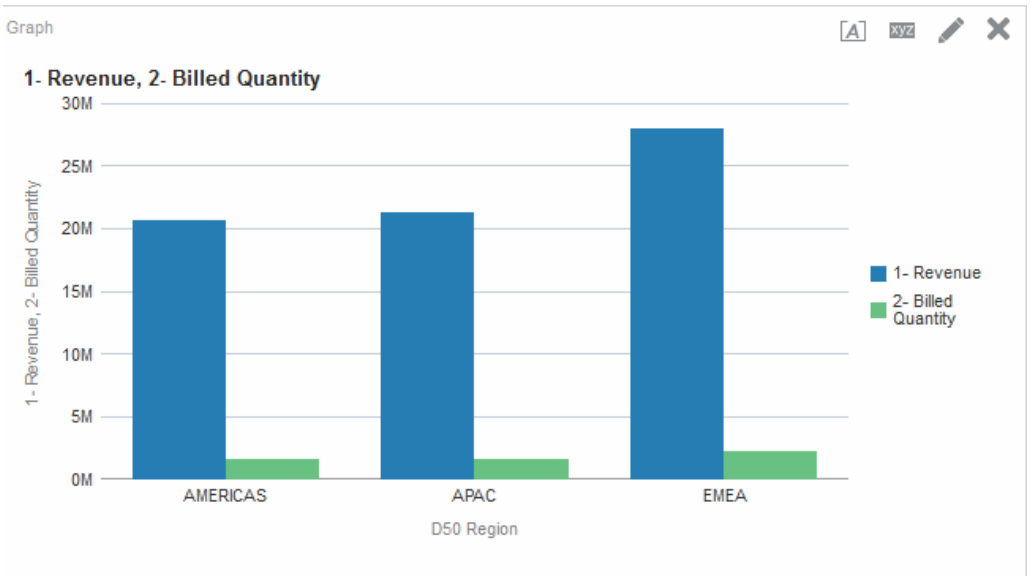
- 列に適用されている条件。列に基づいたグラフの書式設定を参照してください。

位置に基づいたグラフの書式設定

グラフ要素の位置は、その数値に基づいて指定できます。

位置の書式設定では、グラフ要素の位置(つまり、棒などのグラフ要素が表示されるグループ内での番号順)に基づいてグラフの外観をカスタマイズできます。グループは、「グループ化」ドロップ・ターゲット領域に表示される属性列によって決まります。ドロップ・ターゲットの理解を参照してください。

たとえば、D50 Region、1 - Revenue および 2 - Billed Quantity 列を含む棒グラフがある場合は、「メジャー」ドロップ・ターゲット・エリアに 1 - Revenue が最初に表示され、次に 2 - Billed Quantity が表示されます。D50 Region は「グループ化」ドロップ・ターゲットに表示されます。このグラフでは、図に示すとおり、1 - Revenue が各地域グループの位置 1 に、2 - Billed Quantity が位置 2 に配置されます。



色、線の幅、線記号に関するグラフの外観を、位置に基づいて書式設定できます。

ノート: 位置の書式設定は、ウォーターフォール・グラフではサポートされていません。

列に基づいたグラフの書式設定

条件付き書式設定では、列に適用されている条件に基づいてグラフの外観をカスタマイズできます。

書式設定は、条件を満たす列値に適用されます。

列に指定された条件を満たす特定の列値または列値の範囲に基づいて、グラフ・データが表示される色を指定できます。

例:

- 特定の列値に基づいた、グラフの色の条件付き変更。

  ユーザーが、レモネードとコーラという 2 つの飲料の売上を比較する棒グラフを作成します。棒グラフの作成時、レモネードの売上を表す棒は黄色、コーラの売上を表す棒は青色という 2 つの条件を指定します。

- 列値の範囲に基づいた、グラフの色の条件付き変更。

  営業部長が、2 つの営業ブランドについて営業担当者全員の売上を比較する棒グラフを作成したいと考えています。棒グラフの作成時、営業部長は、売上が$250,000 より少ないすべての担当者の棒を赤にし、売上が$250,000 より多いすべての担当者の棒を緑にするという 2 つの条件を指定します。

グラフに条件付き書式設定を指定する方法は、他のビューに使用される方法とは異なります。表、ピボット表、パフォーマンス・タイル、グラフ、ヒート・マトリックスおよびトレリスへの条件付き書式の適用を参照してください。

1. グラフ・エディタのツールバーで**「グラフ・プロパティの編集」**をクリックするか、または「結果」タブの「複合レイアウト」から特定のビュー・コンテナで**「プロパティの表示」**ボタンをクリックします。
2. 「グラフのプロパティ」ダイアログで、**「スタイル」**タブをクリックします。
3. **「スタイルと条件付き書式設定」**ボタンをクリックします。
4. 「スタイルと条件付き書式設定」ダイアログで、**「スタイルの書式設定」**タブをクリックし、グラフ要素の位置に基づいてグラフの外観を書式設定します。

   カスタム書式設定位置を追加するには:

   a. カスタム書式設定位置の追加先のグラフ要素(棒など)のタブを選択します。

   b. **新規位置の追加**ボタンをクリックします。

   c. 「カスタム書式設定位置」表で、新規位置エントリの書式を指定します。たとえば、位置に適用する色を選択するには、**「色」**ボックスの隣にある下向きの矢印をクリックし、「色の選択」ダイアログにアクセスします。書式設定オプションは、要素によって異なります。

5. 「スタイルと条件付き書式設定」ダイアログの**「条件付き書式設定」**タブをクリックし、列に適用されている条件に基づいてグラフの外観を書式設定します。

   列に条件を追加するには:

   a. **「条件付き書式の追加」**をクリックし、条件を適用する列を選択します。

   b. 「新規条件」ダイアログで、この条件に対する演算子と列値、または列値の範囲を入力します。

   c. 終了したら、**「OK」**をクリックします。

   d. 「条件付き書式設定」タブで、条件を満たす場合に列値に適用される色を選択するには、**「色」**ボックスの隣にある下向きの矢印をクリックし、「色の選択」ダイアログにアクセスします。

6. **「OK」**をクリックします。

グラフの条件付き書式の適用に関するルール

グラフの条件付き書式設定は、特定のガイドラインに従っている場合に有効です。

グラフで条件を作成または使用する場合、次のルールが適用されます。

- グラフで使用される列からのみ、条件を作成できます。
- 書式条件が互いに競合する場合、競合する条件は次の順序で優先されます。

  1. 属性に対する条件付き書式設定

2. メジャーに対する条件付き書式設定

3. グラフ要素の位置に基づいたスタイル書式設定

- 折れ線、折れ線-棒、レーダー、散布図、時系列折れ線グラフでは、条件付き書式設定および位置の書式設定のために指定されている記号および色が凡例に次のように表示されます。
  - 条件付き書式設定のみが適用されている場合:
    * ばらばらの点がないグラフの場合、記号は凡例マーカーには表示されません。色が系列全体に対して適用されている場合、色は凡例マーカーに適用されます。
    * (折れ線または散布図で)ばらばらの点があるグラフの場合、凡例にデフォルトで表示される元の記号は、折れ線グラフでは線記号、散布図では四角記号に変更されます。色が系列全体に対して適用されている場合、色は凡例マーカーに適用されます。
  - 位置の書式設定のみが適用されている場合、記号および色が凡例マーカーに表示されます。
  - 条件付き書式設定と位置の書式設定の両方が適用されている場合、位置の書式設定のために指定されている記号が表示されます。条件付き書式設定ルールによって色が系列全体に対して適用されている場合、記号が凡例マーカーに表示されます。色は記号と凡例マーカーの両方に適用されます。
- 条件付き書式が適用されているグラフでユーザーがドリルする場合、次のルールが適用されます。
  - メジャーに基づいた条件付き書式は、次のレベルに繰り越されません。(条件付き書式を地理的階層の地域から市などの異なるレベルへ繰り越しても意味がありません。)
  - 属性に基づいた条件付き書式は、ドリルされていない場合、次のグラフに繰り越されます。

    たとえば、`Lemonade = Blue` という条件付き書式があり、年でのみドリルした場合、`Lemonade = Blue` はそのままになります。
- 条件付き書式設定は、ウォーターフォール・グラフの小計および合計ではサポートされていません。

グラフの列に対する条件付き書式設定の例外

一部の条件付き書式設定は一部のグラフに対して使用できません。

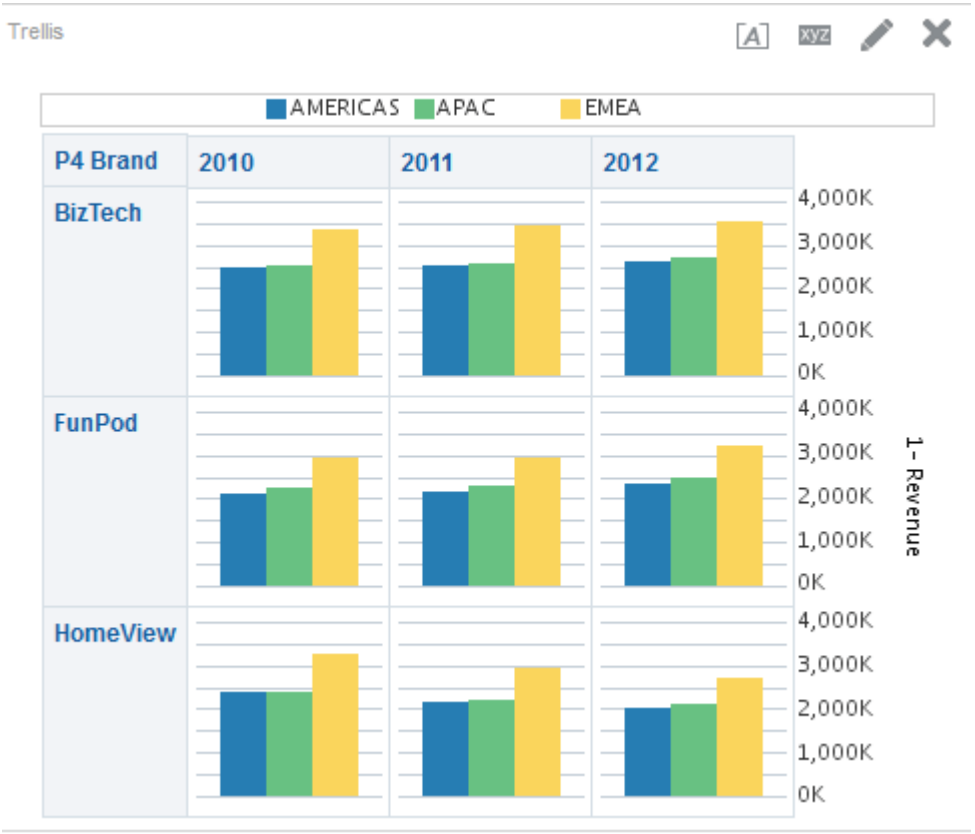
表に、グラフの列に基づいた条件付き書式設定に適用される例外をリストします。

グラフ・タイプ	例外
折れ線折れ線-棒レーダー時系列線	線の記号の書式設定のみ許可されています。
パレート	書式設定は棒にのみ適用され、パレート線には適用されません。

トレリス・ビューの編集

トレリス・ビューは、各データ・セルに 1 つずつの複数グラフのグリッドが表示されるようなグラフ・ビューです。

図に、サンプル・トレリス・ビューを示します。



トレリス・ビューは、次の 2 つのサブタイプに分類できます。

- **単純トレリス。**単純トレリスには、中核の内部グラフが行セットと列セット全体に複数表示されるので、多数の小さなグラフを複数表示して比較対照するのに最適です。この図は、単純トレリスを示しています。
- **拡張トレリス。**拡張トレリスには、小さなスパーク・グラフのグリッドが表示されるので、データ・セットのトレンドをモニタリングして、パターンを見つけるのに最適です。

1. 「結果」タブの「トレリス」エディタを表示します。
2. トレリスのプロパティを設定するには、ツールバーの**「トレリスのプロパティ」**ボタンをクリックします。「トレリスのプロパティ」ダイアログが表示され、次のプロパティを設定できます。
   - 凡例の場所など、グリッド・キャンバス関連(単純トレリス・ビューのみ)
   - トレリスに含まれるビジュアライゼーションのグラフ・サイズ関連
   - データの参照に使用する方法(スクロールまたはページ・コントロール)の指定
   - トレリスがマスター詳細イベントをリスニングするかどうかの制御
   - 様々なスタイルの選択肢および凡例の表示方法など、トレリスのグリッドおよびビジュアライゼーションの外観の制御
   - トレリスのビジュアライゼーションごとのスケールのタイプとスケール・マーカーの外観の制御(単純トレリス・ビューのみ)

- タイトルとラベルの表示制御(単純トレリス・ビューのみ)

3. エディタのツールバーのボタンを使用して、ビューの印刷やビューのエクスポートなどの操作を実行します。
4. ビューのコンテンツを操作するには、次のペインを使用します。
   - 「サブジェクト領域」ペイン
   - 「カタログ」ペイン
   - 「レイアウト」ペイン
   - 「選択ステップ」ペイン
5. ビューの列のソート順を指定します。
6. 右クリックして基本的なビューの相互作用を実行します。

ノート: トレリス・ビューの位置合せに問題がある場合は、構成ファイルを編集して位置合せを調整できます。 `config/OracleBIJavahostComponent/coreapplication_objh1` ディレクトリで `xdo.cfg` ファイルを見つけ、`fo-chunk-size` 設定の値を増やします。

トレリス・ビューで使用される用語

トレリス・ビューでは、ビューの外観を説明するのに固有の用語を使用します。

表に、トレリス・ビューで使用される用語を定義します。

用語	定義
ビジュアライゼーション	Oracle BI EE の場合、ビジュアライゼーションとは、トレリス・ビューのデータ・セル内に表示されるグラフの選択肢のことです。棒グラフ、散布図、スパーク・グラフなど、トレリス・ビューを作成する際には、多数のビジュアライゼーションの中から選択できます。
内部グラフ	トレリス・グラフのグリッド内のネストされたグラフ。各内部グラフには、「レイアウト」ペインの「ビジュアライゼーション」領域に指定された独自のディメンションがあります。
外部エッジ	外部エッジは、内部グラフの境界に使用されるトレリス・ビューの部品です。これには、列および行のヘッダー、セクション・ヘッダーなどが含まれます。
単純トレリス	すべてが散布図の場合のように、トレリス・ビューはすべて同じタイプで内部のビジュアライゼーションを表示します。内部のビジュアライゼーションには、共通の軸が常に使用され、同期されたスケールとも呼ばれます。
拡張トレリス	たとえばスパーク折れ線グラフ、スパーク棒グラフ、数字など、トレリス・ビューは複数のビジュアライゼーション・タイプをグリッド内に表示できます。各ビジュアライゼーション・タイプには異なるメジャーが表示されます。 拡張トレリスはピボット表と見なすことができますが、ピボット表に追加する各メジャーに対して、オプションでディメンションを関連付けて、そのディメンションをスパーク・グラフのビジュアライゼーションとして表示できる点が異なります。

用語	定義
同期されたスケール	(単純トレリス・サブタイプのみに該当) 同期されたスケールとは、トレリス内のすべてのビジュアライゼーションが同じスケールで表示される、つまり共通の軸を共有することです。共通の軸があれば、すべてのグラフ・マーカーを行と列で簡単に比較できます。
マイクロ・チャート	他のテキストサイズのグラフィックおよび数字とともにグリッドに表示されるテキストサイズのグラフィックで、拡張トレリス・ビューのデータ・セル・コンテンツを含みます。Oracle BI EE では、マイクロチャートは常にスパーク・グラフになります。
スパーク・グラフ	他のミニグラフおよび数値と組み合せて、1 つのトレンドを表す埋込みミニグラフ。スパーク・グラフは*スパーク*とも呼ばれます。 スパークには軸またはラベルは含まれず、周囲のコンテンツからコンテキストが取得されます。スパーク・グラフの各タイプには、1 つのメジャーのみが存在します。このメジャーは非表示で、自分のみに対して相対的なスケールになります。 スパーク・グラフには、スパーク折れ線、スパーク棒、スパーク面のいずれかのグラフ・サブタイプを指定できます。

トレリス・ビューがユニークである理由

トレリス・グラフとも呼ばれるトレリス・ビューは、ピボット表と同じですが、トレリス内のデータ・セルにグラフが含まれている点が大きく異なります。

単一の棒グラフや単一の散布図のようなスタンドアロン・グラフ・タイプが独立して動作するのに対して、トレリス・グラフは、内部グラフと呼ばれるネストされたグラフのグリッドを必ず表示して動作します。そのため、棒グラフのトレリス・ビューは、実際には複数の棒グラフで構成されています。

ビジネス分析の分野の一般的な意味では、ビジュアライゼーションとは、グラフ、ゲージ、マップなどでデータを表示することです。トレリス・エディタの「レイアウト」ペインには、「ビジュアライゼーション」というドロップ・ターゲットがあります。ここには、作成しようとしているトレリスを構成する内部グラフの列をドラッグします。

単純トレリス・ビューを構成するビジュアライゼーションにはすべてのグラフが含まれており、使用可能なグラフのタイプに説明されている多くのタイプの既存のスタンドアロン・グラフを使用できます。拡張トレリスを構成するビジュアライゼーションは常に、スパーク折れ線、スパーク棒またはスパーク面グラフ・サブタイプのマイクロチャートになります。理想的な状況では、拡張トレリス内のマイクロチャートは(同じメジャーを表す)数値の横に配置されます。マイクロチャートとはを参照してください

トレリス・ビューの機能とは

トレリス・ビューはほとんどピボット表のように動作しますが、トレリスとピボット表の主な違いはデータ・セルの表示方法です。

トレリスの行と列のラベル・セルでは、次のことを行えます:

- 右クリックして、メジャー・ラベルを移動する
- 右クリックして、データをソートする
- ドラッグして、行と列を再配置する

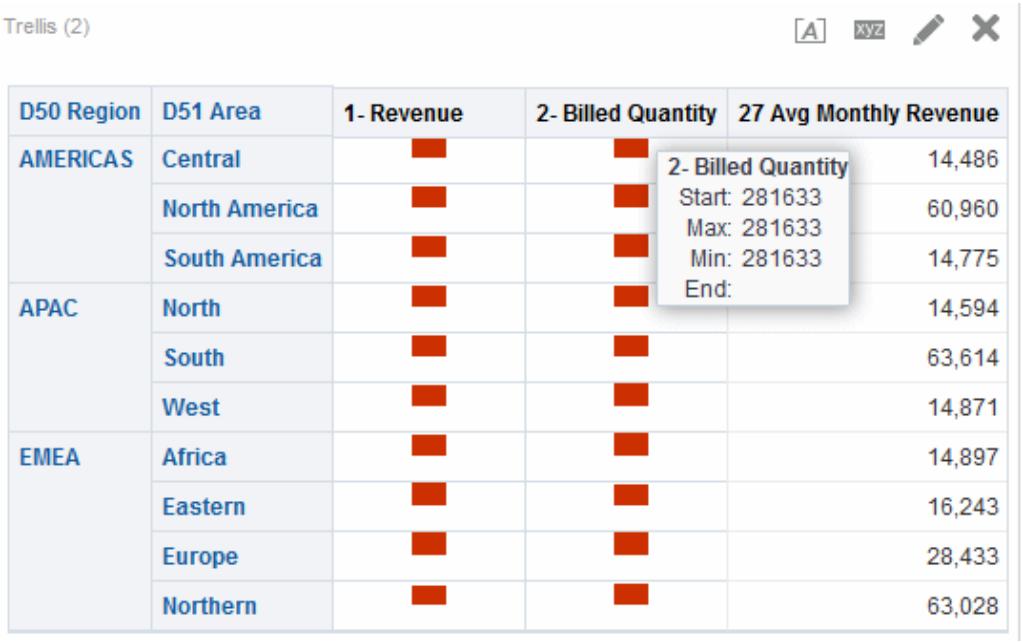
トレリスのデータ・セルでは、マウス・ポインタを合せると、関連するコンテキスト情報を表示できます。

トレリスの数値データ・セルは、ピボット表の数値データ・セルと同様に動作します。

トレリス・ビューの動作がピボット表の動作と異なるのは、次の点です:

- グラフ・データ・セル: 単純トレリスのデータ・セルには右クリック機能がなく、トレリス・グラフ・データ・セルにはドリルもありません(左クリック機能)。
- マイクロチャート・データ・セル: スパーク・グラフのデータ・セルにカーソルを合せると、ピボット表ビューでは表示されないコンテキスト情報(最初、最後、最小および最大の値など)が表示されます。

  図には、拡張トレリスが表示されており、マイクロチャートのデータ・セルにカーソルが合せてあるので、ツールチップが表示されています。マイクロチャートには、通常のチャートの場合のように軸ラベルが表示されないので、内部グラフのディメンションがすぐにはわかりません。マイクロチャートのツールチップを使用して、グラフ内に表されているデータ(個々の値のサンプリングおよび全体のディメンション)を把握しください。



マイクロチャートとは

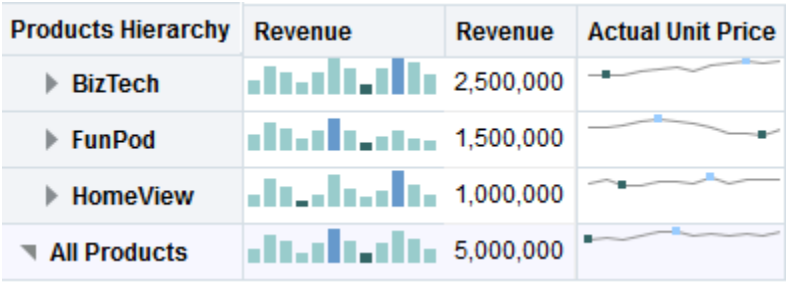
*マイクロチャート*は小さいチャートです。

マイクロチャートは、拡張トレリス・サブタイプのトレリス・ビューに表示されます。マイクロチャートは、独立したスタンドアロン・グラフになることはないという点でユニークなグラフ・タイプです。これは、トレリス・ビューのコンテキスト内のみで使用可能で、単に多数の小さな部分の 1 つであるという意味で、このように呼ばれています。

Oracle BI EE のスパーク・グラフ

マイクロチャートには、スパーク折れ線、スパーク棒、スパーク面など、いくつかのグラフ・サブタイプのいずれかを使用できます。

図に、スパーク折れ線サブタイプと数値で構成されるサンプル・トレリスを示します。



*スパーク*とも呼ばれるスパーク・グラフは、Oracle BI EE で使用できる折れ線グラフ、棒グラフおよび他のスタンドアロン・グラフとは異なるユニークなものです。スパーク・グラフは、1 つのトレンドを表す埋込みのミニグラフです。外観は簡単で軸またはラベルは含まれず、周囲のコンテンツからコンテキストが取得されます。スパーク・グラフの各タイプには、1 つのメジャーのみが存在します。このメジャーは非表示で、自分のみに対して相対的なスケールになります。

Oracle BI EE では、スパーク・グラフの外観は、トレンドおよびトレンド内の最高値と最低値を強調するものになっています。スパークではトレンドが凝縮して表示されるので、1 ページで多くのトレンドを(数値とともに)比較できます。

図の拡張トレリスでは、同じメジャー(1 - Revenue)が 2 回ビジュアル化されていることに注意してください。最初のインスタンスを数値に設定し、時間ディメンション(T02 Per Name Month)を 2 番目のインスタンス(Revenue Trend に名前変更された 1 - Revenue)に関連付けて、2 番目のインスタンスをスパークとして表示しています。この拡張トレリスには年の合計値が示され、その隣りに年の合計値のトレンドが示されています。

トレンドの概要を把握してパターンを見つける場合など、特定のタイプの分析にはスパークが便利ですが、より十分な機能を備えた大きなグラフと同じほど明確には表示できません。

スパーク・グラフの操作

スパーク・グラフでは、データのコンパクトなビューが表示されます。

スパークは小さく、非常に限られたスペースに多くの情報を表示できる特徴があります。Oracle BI EE のスパーク・グラフは、マイクロチャートとしてトレリス・ビュー内のみで使用できるという点でも、スタンドアロン・グラフとは異なります。

スパークのサイズは、完全な機能を備えたグラフの場合と同様に「グラフのプロパティ」ダイアログで変更できます。

トレリス・ビューおよびマイクロチャートの設計上の考慮事項を参照してください。

単純トレリスと拡張トレリスについて

トレリス・ビューを作成する際には、まず単純トレリスと拡張トレリスの 2 つのサブタイプから選択します。

単純トレリス・サブタイプは比較の表示に便利であり、1 つのタイプの内部ビジュアライゼーション、たとえば、すべての棒グラフを表示します。内部のビジュアライゼーションでは、常に共通の軸を使用して、すべての内部グラフが同じスケールで表示されます。(共通の軸を使用するこの概念は*同期されたスケール*とも呼ばれます。)共通の軸があれば、すべてのグラフ・マーカーを行と列で簡単に比較できます。

拡張トレリス・サブタイプはトレンドの表示に便利であり、グリッド内に複数のビジュアライゼーション・タイプを表示できます。販売トレンドを表す拡張トレリスでは、1 つの列(たとえば、収益)のセルの数値を含むグリッドを表示し、数値列の横の別の列のセルには≪スパーク折れ線｜Spark Line｜Bifndn≫グラフを表示し、数値で表されるのと同じメジャー(これも収益ですが、一定期間の収益)を、それらの≪スパーク折れ線｜Spark Line｜Bifndn≫グラフにビジュアル化することができます。その列の隣

りに、合計ユニット数などの別のメジャーをビジュアル化するスパーク棒グラフの列など、別のマイクロチャートを表示することもできます。

ビジュアル化される各メジャーには、別の内部グラフ・タイプが割り当てられます。グリッドの各セルには独立したスケールが設定されます。

拡張トレリスは、データ・セルにスパーク・グラフがあるピボット表と考えてください。しかし、追加する各メジャーに対して、オプションでディメンションを関連付けて、マイクロチャートとしてビジュアライゼーション表示できます。この点が、拡張トレリスと単純トレリスでは大きく異なります。単純トレリスでは、追加のディメンションとともに、*すべてのメジャー*が*同じ*ビジュアライゼーションで表示されます。

トレリス・ビューおよびマイクロチャートの設計上の考慮事項

トレリス・ビューおよびマイクロチャートでは多数のデータが伝達されるため、それらの設計は慎重に計画する必要があります。

トレリス・ビューに表示されるコンテンツを設計する際には、次のような点を考慮してください。

- 比較する場合は、単純トレリス・サブタイプを選択します。
- トレンドを分析する場合は、拡張トレリス・サブタイプを選択します。
- トレリスを構成する内部グラフは、読みやすく密集しすぎないようにしないと、トレリス・ビューで複数の系列また複数のグループを表示しても、あまり役に立ちません。(ツールチップを表示するために)データ・ポイントをマウスで簡単に指せない場合は、内部グラフが密集しすぎていて読みにくい可能性が高いといえます。
- 単純トレリス・サブタイプを使用する場合は、次の点を考慮してください。
  - 単純トレリスの設計はピボット表の設計に似ていますが、トレリスの場合は、表示できるセルの合計数がずっと少なくなります。
  - 単純トレリスとピボット表の設計の主な違いは、トレリスの場合、ビジュアライゼーションに関連付けることができるディメンションは 1 つか 2 つなので、外部エッジに追加する必要があるディメンションがずっと少なくなることです。
  - トレリスは、少数の外部エッジ・ディメンションで設計するのが最善です。(類似と類似を簡単に比較できるようにするために)スクロールしなくてもグラフ系列全体を一度に表示できるようにする必要があります。追加のディメンションを表示する必要がある場合は、グラフのプロンプトにディメンションを追加することを検討してください。
  - 列ヘッダーおよび行ヘッダーにどのデータを表示するかを決定する際には、列ヘッダーに 1 つか 2 つのディメンションを表示するようにします(各ディメンションのメンバーは少数にします)。多くの場合、列ヘッダーに表示されるディメンションは時間です。残りのディメンションは行ヘッダーまたはグラフのプロンプトに配置します。
- 拡張トレリス・サブタイプを使用する場合、次の点に注意してください。
  - 拡張トレリスの主なユース・ケースは、数値の横にトレンド・グラフを圧縮形式で表示する場合です。そのため、一般的な拡張トレリスでは、同じメジャーの数値表記の横にスパーク・グラフを組み合せます。
  - 列ヘッダーにはディメンションを配置せず、メジャーのみを配置するのが理想的です。
  - スパーク・グラフに一般的に関連付けられるディメンションは時間です。スパーク・グラフにはラベルを表示できないので、ビジュアル化されるデータが本

質的な順序で並んでいることが重要です。たとえば、(スパーク棒グラフの特定の棒になる)地域の順序は直感的には理解できないので、地域をスパーク・グラフにビジュアル化しても無意味です。

– ピボット表を設計する場合と同様に、一般に時間を横軸に表示し、もう 1 つのディメンションを縦軸に表示します。そうすれば、目を左から右に動かして、一定期間にディメンションがどのように変化したかを見ることができます。

トレリスをビジュアライゼーションに使用するのが最善ではない場合

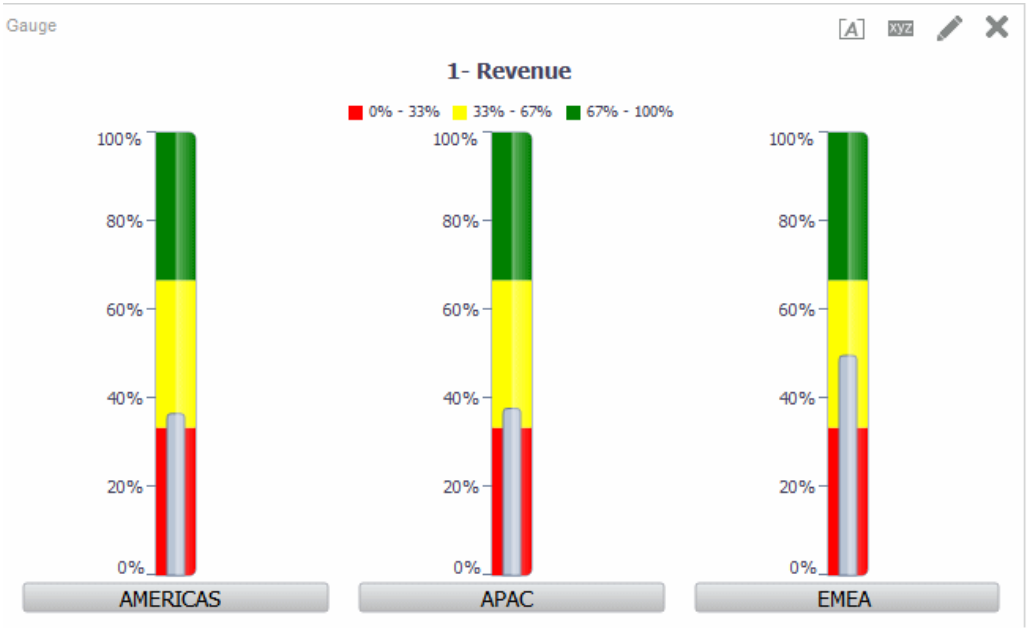
トレリス・ビューには特定のタイプのデータが適切に表示されます。

階層列が外部エッジに表示されると、デフォルトでは親と子(年と四半期など)が同じ軸スケールを使用して表示されるため、単純トレリスでは階層列をうまく処理できません。また、年と四半期では規模が異なるため、子グラフのマーカーが非常に小さくなって、親スケールに対しては読みにくくなる場合があります。(各データ・セルのスケールが異なるので、拡張トレリス・サブタイプでも階層列はうまく処理できません。)

ゲージ・ビューの編集

様々なゲージ・ビューの種類を使用してデータを分析または表示することができます。

次の図では、ダッシュボード・ページで表示されるゲージ・ビューのサンプルを示します。



1. 「結果」タブの「ゲージ」エディタを表示します。
2. ゲージ・ビューのプロパティを設定するには、ツールバーの**「ゲージ・プロパティの編集」**ボタンをクリックします。「ゲージのプロパティ」ダイアログが表示され、次のプロパティを設定できます。
   - ゲージ・キャンバスに関連するもの(凡例の位置など)
   - ゲージの外観を制御するもの(ゲージの幅や高さなど)
   - ゲージの上下限と目盛マークに関するもの
   - ゲージ・セット内のゲージのタイトル、フッターおよびラベルの表示を制御するもの

3. エディタのツールバーのボタンを使用して、ビューの印刷やビューのエクスポートなどの操作を実行します。
4. ビューのコンテンツの外観を変更するには、次のペインを使用します。
   - 「サブジェクト領域」ペイン
   - 「カタログ」ペイン
   - 「レイアウト」ペイン
   - 「選択ステップ」ペイン
   - しきい値を設定する「設定」ペイン
5. ビューのデータをドリルして、詳細を表示します。

マップ・ビューの編集

ビジネス・データをユーザーに提示するためのマップ・ビューを作成できます。

表、ピボット表、グラフなどのビューと同様に、マップ・ビューでは、ユーザーは様々な書式でマップ上にデータを表示し、データと対話できます。データをマップ上にビジュアル化すると、それ以前には明確でなかったデータ値間の関係を直観的に表すことができます。たとえば、郵便番号が売上高によって色分けされた市のマップをマップ・ビューに表示し、イメージ・マーカーに注文ごとの平均割引額を表示できます。

データへの変更はマップ・ビューに反映され、ユーザーは次のタスクを行うことができます。

- 空間属性を持つデータをマップに表示します。
  - 色分けされた地域をテーマ・マップとして表示します。
  - 線の幅を変更して、線ジオメトリを変更します。
  - 担当区域内の販売箇所などのポイント・ベースの情報を表示します。
  - ズーム、パンおよびその他のマップ詳細へのドリルを行います。
- マップ・ビューを使用して、ダッシュボードの他の要素と対話します。
  - ダッシュボードは、ドライブ・マップのコンテンツを要求します。
  - マスター詳細と他のビューとの対話など、マップ・ビューとの対話によって、ダッシュボードの他のコンテンツを更新します。
- マップの領域にマウス・ポインタを合せ、コンテキストに応じた追加関連情報を表示します。
- アクションを使用して、追加のタスクを完了します。
- 「マップ」エディタ(詳細は「結果」タブの「マップ」エディタを参照)を使用して、壊れたマップを修正します。

ノート: コンテンツ設計者が分析用にマップ・ビューを作成するには、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のマッピングと空間情報の構成の説明に従って、管理者が構成オプションを設定し、メタデータを管理する必要があります。

自動修正の使用

マップ・ビューで自動修正を使用して、エラーの自動的な解決を試みます。

マップ・ビュー・エラーは様々な理由で発生する可能性があります。問題が欠落しているレイヤー、マップまたはスタイルに関連していると思われる場合は、欠落しているマップ・ビュー・コンポーネントを、空間メタデータに存在する同様の項目に置き換えることで、マップを修正できる可能性があります。管理者に連絡する前に、自分で問題の修正を試みることができます。

1. 複合レイアウトでマップを編集します。「エラーの表示」メッセージ・ボックスが表示されます。
2. 「エラーの表示」メッセージ・ボックスで**「はい」**をクリックすると、マップ・ビュー・コンパイラはエラーを自動修正しようとします。**「いいえ」**をクリックすると、後で**「自動修正」**アイコンを使用してエラーの修正を試みることができます。コンパイラがエラーを修正できると、マップが表示されます。
3. 一部の修正のみが可能な場合もあります。その場合には、一部修正ダイアログが表示され、自動修正を続行するために削除する必要があるレイヤーに関する視覚的な手がかりが表示されます。**「はい」**をクリックして続行します。一部の書式は削除される可能性がありますが、元のマップの書式の大部分が保持されます。

> **ノート:** マップ・ビュー・コンパイラでは、発生する可能性があるエラーの限られた一部のみ修正できます。自動修正でマップ・ビューの修正に失敗した場合は、管理者に連絡してください。

マップ・ビューの機能とは

マップ・ビューは特定の理由で使用されます。

マップ・ビューには次の機能があります。

- 複数の属性列とメジャー列をマップ・ビューに表示できます。マップ・ビューでは、階層列はサポートされません。
- 色、棒グラフ、円グラフ、可変サイズのバブル、イメージ、線またはビン化やその他の書式設定オプションを備えた色付き形状を使用して、マップ・ビューを書式設定できます。
- 情報ウィンドウにドリルできます。値にカーソルを合せると、地理的地域(市、州、国)、列名と列値および書式設定メトリックの形式のメジャー、年などの地理以外のデータなどの情報を含むポップアップが表示されます。インタラクティブ・ペインでは該当する関連データも強調表示されます。値をクリックして、情報ウィンドウでのドリル用のアクショナブル・リンクを表示し、適切なリンクをクリックします。

マップ・ビューで使用される用語

マップ・ビューの各領域を説明するために、特定の用語が使用されています。

次の表に、マップ・ビューで使用される用語を定義します。

用語	定義
地物	市、河川、幹線道路などの空間属性と非空間属性を持つエンティティ。地物は、多角形、線または点で表されます。

用語	定義
書式	地物のレンダリング・プロパティを定義します。たとえば、地物が国を表す多角形の場合、書式で国の塗りつぶしの色を定義したり、国に重ねて表示する円グラフを定義できます。書式は、大陸、国、地域、州、市などの特定の地理レベルと関連付けられます。
レイヤー	共通の属性と位置のセットを持つ機能と書式のコレクション。たとえば、米国の州を示すレイヤーには、売上別の色分けや、その州のブランドごとの売上を示す円グラフを含めることができます。米国の州のレイヤー以外に、州内の店舗を、各店舗の売上を示すポップアップの注釈付きの点で示すレイヤーを使用できます。 レイヤーは、背景またはテンプレート・マップに表示できます。マップでズーム・インやズーム・アウトを行うと、様々なレイヤーが非表示になったり、表示されたりします。一部のレイヤーはデータと対応しており、マップに表示できます。その他のレイヤー(道路を表示するレイヤーなど)は、データと関連付けられていません。
マップ	ウィンドウ内に重ねてレンダリングされる背景またはテンプレート・マップおよびレイヤーのスタックで構成されます。マップには、そのマップのすべてのレイヤーが共有する座標系が関連付けられています。マップは、イメージ・ファイル、イメージ・ファイルのオブジェクト表現、またはイメージ・ファイルを指す URL です。

マップ・ビューのコンポーネントとは

マップ・ビューには、情報の領域がいくつかあります。

マップ・ビューには、次のコンポーネントが含まれています。

- メイン・コンテンツ - メイン・コンテンツは背景またはテンプレート・マップで、背景の地理データとズーム・レベルを提供します。メイン・コンテンツは、オフィス・ビルのフロアー・マップや国、市、道路などの外観やプレゼンスなど、MapViewer を使用して構成できるイメージです。

- レイヤー - 1 つ以上のインタラクティブ・レイヤーまたはカスタム・レイヤーをメイン・コンテンツにオーバーレイします。レイヤーとはを参照してください

- ツールバー - マップのコンテンツを直接操作できるボタンが用意されています。マップ・ビュー自体にツールバーがあります。コンテンツ設計者は、ダッシュボード・ページのマップ・ビューにツールバーを表示するかどうかを指定します。ダッシュボード・ページでは、ツールバーはマップの上に直接表示され、**「ズーム・アウト」**および**「ズーム・イン」**ボタンのみが含まれています。新しいマップ・ビューを作成した際、デフォルトではツールバーが表示されます。ツールバーの表示は、「マップ・プロパティ」ダイアログの「ツール」タブで制御できます。

  いずれかのズーム・モードになっていない場合、マップのコンテンツを操作するためのデフォルト・モードはパンです。マップ・ビューのコンテンツをパンするには、マウスをクリックしてドラッグします。

  「マップ」エディタのツールバーには、マップ・ビューを変更するためのその他のオプションが含まれています。

- ズーム・コントロール - マップ・ビューに表示される地理データの詳細を調整します。たとえば、国からズーム・インすると、州や市の詳細が表示されます。

  管理ページで、管理者は、どのズーム・レベルで各レイヤーを表示するかを指定します。1 つのレイヤーに複数のズーム・レベルを持たせたり、複数のレイヤーが関連付けられている 1 つのズーム・レベルを持つことができます。ズームすると、

そのズーム・レベルにマップ情報が変更されますが、そのレベルの Oracle BI データは影響を受けません。Oracle BI データの表示はドリルによって操作します。

ズーム・コントロールにはズーム・スライダもあり、マップ・ビューの左上隅に表示されます。ズーム・コントロールが最大限にズーム・アウトされると、ズーム・レベルは 0 に設定され、マップ・ビュー全体が表示されます。

「マップ・プロパティ」ダイアログの「ツール」タブによって、ズーム・コントロールの表示モードが決まります。デフォルトでは、マップは、最上位レイヤーのコンテンツ全体が収まる最上位ズーム・レベルに最初にズーム・インされます。たとえば、最上位のレイヤーにカリフォルニア州のデータのみが含まれている場合、マップはすべてのカリフォルニアを引き続き表示する最上位ズーム・レベルにズームします。

ズーム・スライダは、広域のズーム用のつまみと 1 レベルのズーム用のボタンで構成されます。プラスのボタンを使用すると、一度に 1 レベルずつズーム・インし、マイナスのボタンを使用すると、一度に 1 レベルずつズーム・アウトできます。つまみがスライダの下部にある場合、ズーム・レベルはゼロです。

- スケール・ツール - 距離インディケータとも呼ばれます。マップの距離を判断する手段で、マップ・ビューの左下隅、情報パネルと著作権表示の間に表示される 2 つの横棒で構成されます。上のバーはマイル(mi)を表し、下のバーはキロメートル(km)を表します。ラベルは、マイル・バーの上およびキロメートル・バーの下に[distance] [unit of measure]の形式で表示されます。ズーム・レベルの変更やマップのパンに応じて、バーの長さと距離の値が変わります。

- 凡例 - 凡例はマップ・ビューの右上隅にある半透明の領域で、表示/非表示を切り替えることができます。凡例には、現在のズーム・レベルに関連する情報が表示されます。凡例は、マップの記号、レイヤーおよび書式設定を視覚化した読取り専用の記号表で、次のものが表示されます。

  – マップに適用される表示可能なすべてのフォーマット。フォーマットがオフの場合は、対応する凡例項目も非表示になります。フォーマットがオンでも表示からズームアウトされている場合、その項目は凡例に表示されません。現在表示されているズーム・レベルにフォーマットを定義していない場合、凡例には「現行ズーム・レベルでのフォーマットが定義されていません。」などのテキストが表示されます。

  – スクロール・バー(必要に応じて)。

  マップで書式を選択すると、対応する凡例項目が強調表示されます。強調表示には選択した書式に応じて様々な粒度があります(たとえば、円グラフには色の塗りつぶしにある粒度のレベルがありません)。書式のレイヤーへの影響を参照してください

  右上隅の**「マップ凡例の表示」**および**「マップ凡例の非表示」**ボタンを使用して、凡例の表示を制御します。

- 概要マップ - メイン・マップの縮小ビューで構成され、メイン・マップの右下隅に表示されます。この概要マップによって地域コンテキストが提供され、メイン・マップの表示可能領域を変更できます。

  次のアイテムが、概要マップに含まれています。

  – **網線** : メイン・マップの縮小マップ全体を移動可能な小さいウィンドウとして表示します。縮小マップ内の網線の位置によって、メイン・マップの表示可能領域が決まります。網線を移動すると、メイン・マップが自動的に更新されます。網線を使用せずに概要マップでパンすることもできます。

    網線が表示できない場合、概要マップは自動的に非表示になります。この非表示は、通常、連続するズーム・レベル間の差が小さすぎて、概要マップに縮小ビューを表示できない場合に起こります。

  - **「表示」/「非表示」**ボタン: 概要マップが表示されている場合、左上隅に表示されます。**「表示」/「非表示」**ボタンをクリックすると、概要マップが非表示になり、ボタンのみがメイン・マップの右下隅に表示されます。

- インタラクティブ・パネル - ダッシュボードおよび「複合レイアウト」のビューに付属します。インタラクティブ・パネルの上部のセクションを使用すると、「分析」エディタで BI データの書式を作成および編集できます。書式に編集可能なしきい値がある場合、マップ・エディタにスライダが表示され、スライダをドラッグしてしきい値を編集できます。インタラクティブ・パネルでは、地理レイヤー内の書式を再配置できます。たとえば、州レイヤーに 3 つの書式がある場合、書式が表示される順序を選択できます。

  マップ領域にマウス・カーソルを合せてツールチップを表示すると、インタラクティブ・パネルの対応する詳細が更新および強調表示されます。

  コンテンツ設計者から許可されている場合、ダッシュボード・ユーザーは、書式の表示モードを制御(オン/オフ)したり、書式のしきい値を調整できます。

  パネルの下部のセクションには「機能レイヤー」エリアが含まれます。このエリアでは、マップに追加する BI 以外のレイヤーを選択できます。BI 以外のレイヤーとは、BI 列に関連付けられていないレイヤーです。典型的な例として、Google Maps(tm)タイル・レイヤーや Bing Maps(tm)タイル・レイヤー、幹線道路、公園、または現金自動支払機などがあります。BI 以外のレイヤーに書式を適用することはできません。

レイヤーとは

レイヤーは、共通の属性を共有するジオメトリのコレクションです。

レイヤーはあらかじめ定義されている場合もカスタムの場合もあります。

- 事前定義レイヤーは、ジオメトリが Oracle Database の空間表で定義されているレイヤーです。管理者は、管理ページを使用して事前定義レイヤーを使用可能にします。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のマップの管理を参照してください。

- カスタム点レイヤーは、マップ・ビューの編集時に定義するレイヤーです。

レイヤーのタイプは様々です。多角形レイヤーは、州などの地域を表します。コネチカット、メイン、マサチューセッツ、ニュー・ハンプシャー、ロード・アイランドおよびバーモントで構成される米国のニュー・イングランド・レイヤーがこの例です。

ポイント・レイヤーは、座標系に基づいて、マップに特定のポイントを示します。たとえば、ポイント・レイヤーで、マップに倉庫の場所を示すことができます。このレイヤーでは、倉庫の商品構成のタイプ(電子機器、家庭用品、園芸用品)によって異なるイメージを使用し、倉庫を区別することができます。

経度と緯度の座標を使用して、マップにポイントを配置するカスタム・ポイント・レイヤーを作成できます。たとえば、会社の本社がニューヨーク市にあるとします。会社のアイコンをニューヨーク市の上に表示し、ニューヨーク市を含むマップが表示される場合は常にアイコンが表示されるカスタム・ポイント・レイヤーを作成できます。カスタム・ポイント・レイヤーは常に、他のレイヤーより上に置かれ、ズーム・レベルの影響を受けません。カスタム・ポイント・レイヤーは、現在の分析の現在のマップ・ビューでのみ使用され、同じ分析であっても他のマップ・ビューで使用されません。

レイヤーをマップに表示するかどうかは選択できますが、事前定義レイヤーは変更できません。色付きの地域、バブル、ポイント、折れ線、棒グラフや円グラフなどの、レイヤーに適用する書式を作成することもできます。すべての書式がすべてのレイヤー・タイプに使用できるわけではありません。たとえば、ポイント・レイヤーは、色の塗りつぶし書式を持つことはできません。

マップ・ビューの作成

管理者がマップを構成済みである場合、コンテンツ設計者は、データがマップ・ビューに表示される分析を作成できます。

そのビューに表示する列を選択した後、マップ・ビューを作成します。管理者が複数の背景マップを指定してある場合、選択した列に関連付けられたレイヤーを 1 つ以上含む、管理者によって指定された最初の背景マップを使用して、マップ・ビューはまず表示されます。マップ・ビューの編集時、別の背景マップを選択できます。背景マップにレイヤーを適用したり、書式をレイヤーに適用できます。

1. マップ・ビューに表示する属性列とメジャー列を選択して分析を作成します。通常、市、州、地域などの地理に関連する属性列を選択します。

   管理者が管理ページを使用してレイヤーにマップした地理列のみ選択します。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のマップの管理を参照してください。

2. **「結果」**タブを選択します。

3. ツールバーで**「新規ビュー」**ボタンをクリックして、**「マップ」**を選択します。

   - マップのレンダリングに背景マップが必要なことを示すメッセージが表示される場合、マップに移入するメタデータがありません。管理ページの使用によるマップ用のメタデータの構成について、管理者に問い合せてください。
   - そうでない場合は、管理ページで指定された背景マップを使用したマップが表示されます。

4. **「ビューの編集」**ボタンをクリックすると、デフォルト・マップ・ビューを妥当なビンに分割して表示し、「結果」タブのマップ・エディタで色分けを適用できます。

5. 必要に応じてマップ・ビューとレイヤーを調整します。デフォルト書式が作成されていない場合、書式を作成する必要があります。

6. 「マップ・プロパティ」ダイアログを使用して、キャンバスのサイズやマスター詳細リンクなど、マップ・ビューのプロパティを指定します。

7. 書式をレイヤーに適用します。

書式のレイヤーへの影響

マップ・ビューは、Oracle BI EE データの列を使用します。

各列は、書式設定や相互作用などの特性を定義するプロパティのセットを持ちます。列に適用されている書式設定は、相互作用の設定以外、マップに適用されません。マップに含まれるしきい値が基となっている書式設定は適用されます。

様々な種類の書式をマップ・ビューに適用できます。次のリストに、BI レイヤーに適用する書式を定義するオプションを示します。BI 以外のレイヤーに書式を適用することはできません。

- **色の塗りつぶし** - 「色の塗りつぶし」(「レイヤー」)ダイアログが表示され、領域が特定の条件を満たすことを示す塗りつぶし色で領域をレンダリングできます。

  色の塗りつぶし書式は、地域や多角形に適用します。たとえば、色の塗りつぶし書式によって、ある地域の州の人口やある地域の州での製品の人気を表すための様々な色を識別します。マップ・ビューは、異なるズーム・レベルで表示可能な複数の色書式を持つことができます。たとえば、1 から 5 のズーム・レベルのレイヤーの色の塗りつぶし書式は州の人口を表し、6 から 10 のズーム・レベルのレイヤーでは、国の平均収入を表します。異なる色を指定して、様々なデータ値を識別することもできます。

- **棒グラフ** - 「棒グラフ」(「レイヤー」)ダイアログが表示され、これを使用して、一連のデータをエリア内に棒グラフとしてレンダリングします。グラフ書式では、州や国などの特定の地域に関連付けられた統計を示すことができます。たとえば、グラフ書式で、様々な製品の州での売上値を表すことができます。

  特定のレイヤーに複数のグラフ書式を作成できますが、書式がレイヤーで重なり合い、好ましくない表示結果になるため、お薦めできません。

- **円グラフ** - 「円グラフ」(「レイヤー」)ダイアログが表示され、これを使用して、一連のデータをエリア内に円グラフとしてレンダリングします。

- **形状** - 「可変形状」(「レイヤー」)ダイアログが表示され、領域内にマーカーや形状を描画し、領域に関連付けられているメジャー列をレンダリングするために使用できます。形状に異なる色を指定して、様々なデータ値を識別することもできます。

- **バブル** - 「バブル」(「レイヤー」)ダイアログが表示され、形状書式と同様に、領域内にバブルをレンダリングするために使用できます。

- **イメージ** - 「イメージ」(「レイヤー」)ダイアログが表示され、これを使用して、エリア内に形状書式と似たイメージをレンダリングします。異なるイメージを指定して様々なデータ値を識別することができます。管理者が指定しているイメージを選択します。

- **線** - 「線」(「レイヤー」)ダイアログが表示され、マップに線をレンダリングするために使用できます。

  マップに線を含めて、ハイウェイ、鉄道、出荷ルートなどのパスを表示できます。線の幅を指定し、「マップ・プロパティ」ダイアログ「キャンバス」タブの「マップ・ラップアラウンド」機能を使用すれば、サン・フランシスコから東京への航空会社の航空路を表示する場合のように、連続した線にすることができます。

  機能を目立たせるために、メジャーごとに線の幅を変更できます。

- **カスタム・ポイント** - カスタム・ポイントの*書式設定*(*「レイヤー」*)ダイアログが表示され、バブル、イメージ、形状などのポイント書式をレイヤーにレンダリングするために使用できます。カスタム・ポイントは、すべてのズーム・レベルで表示され、他のすべてのマップ書式設定の上に表示されます。カスタム・ポイント書式を作成する場合、経度と緯度を指定する列を選択します。

書式が表示される場合

書式は、複数のファクタによって表示または非表示となります。

書式の表示モードは、次のものに依存します。

- マップのズーム・レベルと書式のズーム範囲。たとえば、州の境界が表示され、州に対する色の塗りつぶし書式が有効な場合、この書式は表示されますが、マップが大陸レベルにズーム・アウトされると、書式は表示されません。

- データ・ポイント制限。通常、ビューにズーム・インされて書式が有効な場合、書式は表示されますが、特定のレイヤーがデータ・ポイントの最大数を超えている場合、書式が表示されない場合があります。

カスタム・ポイント書式は独特で、すべてのズーム・レベルで常にマップに表示されます。

書式データが有効で、ビューにズーム・インされている場合にのみ、書式データが凡例に表示されます。「マップ・フォーマット」領域で名前の横にあるボックスが選択されている場合、書式は有効です。

マップでは、一度に(1 つのズーム・レベルで)複数の非ポイント書式は表示できませんが、ポイント書式で同じ経度と緯度の位置を共有していない場合、複数のポイント書

式を同時に表示できます。複数のグラフ書式が同じ地理レイヤーで指定された場合、重なり合ってレンダリングされます。

書式が適用される場所

書式は特定の領域にのみ適用できます。

色の塗りつぶし、バブル、円グラフおよび棒グラフの書式は、多角形などの地理領域に適用されます。

バブル、可変形状、イメージおよびカスタム・ポイントの書式は、1 つの経度と緯度の位置(ポイント)に基づきます。

線の書式設定は、線ジオメトリが存在する場合のみに表示されます。線の書式は、線ジオメトリに対して作成できる唯一の書式です。

書式を定義する際、レイヤーで異なる書式を異なるメジャー列に適用するよう指定できます。

レイヤーへの書式の適用

マップ・レイヤーは、データをより簡単に解釈できるよう書式設定できます。

必要に応じて、各レイヤーに書式を適用できます。マップ・ビューでのフォーマットの表示および非表示を参照してください。

- 「マップ・フォーマット」リストにレイヤーが指定されていない場合、**「新規マップ書式の作成」**リンクをクリックします。
- 「マップ・フォーマット」タイトルバーまたはレイヤー名の隣で**「新しいマップ・フォーマットの追加」**ボタンをクリックします。

マップ・ビューの初期ビュー・ポートの設定

マップがブラウザに最初に表示される際、ビューは初期ビュー・ポートに基づいています。

「マップ・プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブのオプションを使用して、マップ・ビューがブラウザに最初にロードされるかリフレッシュされる際のビュー・ポート(マップの中心の初期位置とズーム・レベル)を指定します。この指定では、ユーザーに対するマップの初期表示を変更できます。

マップ・ビューの編集とダッシュボード・ページでのマップ・ビューの表示

マップ・ビューには、マップ・ビューの編集でも、ダッシュボード・ページでの表示でも使用できる機能が多くあります。

一部の機能は、マップ・ビューの編集時にのみ使用可能です。

- マップ・ビューを編集し、レイヤーを使用する場合、BI レイヤーに書式を作成します。書式の追加および編集用のダイアログを表示できます。レイヤーごとに書式の順序を指定することもできます。順序によって、レイヤーの書式の表示が左右されます。リストの上位に表示されている書式は、リストの下位の書式の上にオーバーレイされます。マップ・ビューを表示する際、書式の表示をオン/オフできますが、マップ・ビューに追加したり、削除することはできません。

  マップ・ビューを編集するコンテンツ設計者は、レイヤーの表示を制御できますが、管理者がこの背景マップに関連付けてあるレイヤーのみ制御できます。管理者は、BI レイヤーが BI 以外のレイヤーよりも上位にあることを確認する必要があります。非 BI レイヤーが BI レイヤーより上位の順序になっていると、マップでは、下位の BI レイヤーの上に非 BI レイヤーが表示されるので、BI レイヤーがインタラクティブでなくなります。

- マップ・ビューを編集する際、ダッシュボード・ページのユーザーが、スライダを使用して「色の塗りつぶし」フォーマットのしきい値を変更できるかどうかを指定します。マップ・ビューの表示時、「色の塗りつぶし」書式のしきい値を変更できます(変更が許可されている場合)。マップ・ビューを閉じて再度開くと、終了したときと同じ状態でしきい値またはスケール付きの線が表示されます。ダッシュボードの終了時にしきい値を保存するには、まずダッシュボードのカスタマイズを保存します。
- マップ・ビューの編集または表示時、凡例コンテンツには、アクティブで表示可能なすべての書式が表示されます。

ダッシュボード・ページのマップ・ビューでの作業についてを参照してください。

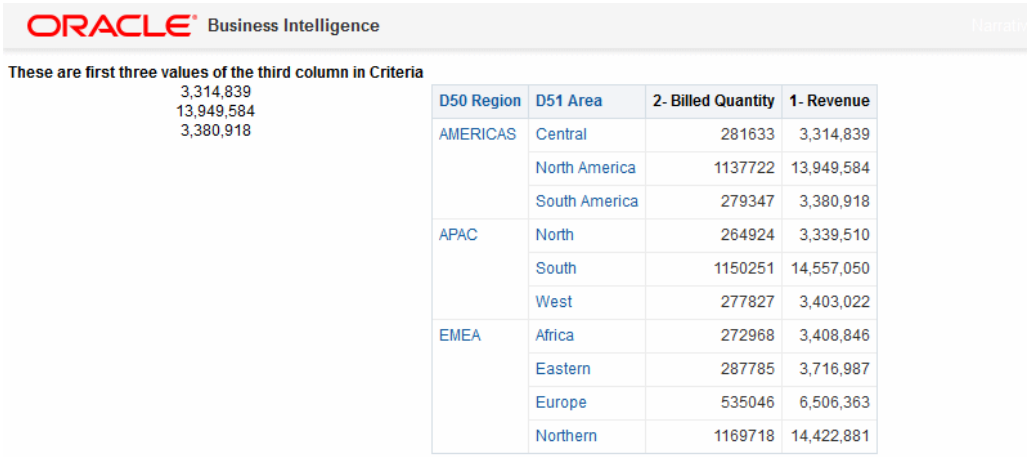
ナレーティブ・ビューの編集

ナレーティブ・ビューを使用して、コンテキスト、説明テキスト、詳細説明などの情報を列値に付加します。

ナレーティブ・ビューでは、1 段落以上のテキストでデータの結果が表示されます。ナレーティブ・ビューを使用して、コンテキスト、説明テキスト、詳細説明などの情報を列値に付加します。ナレーティブ・ビュー・エディタで様々なタスクを実行できます。

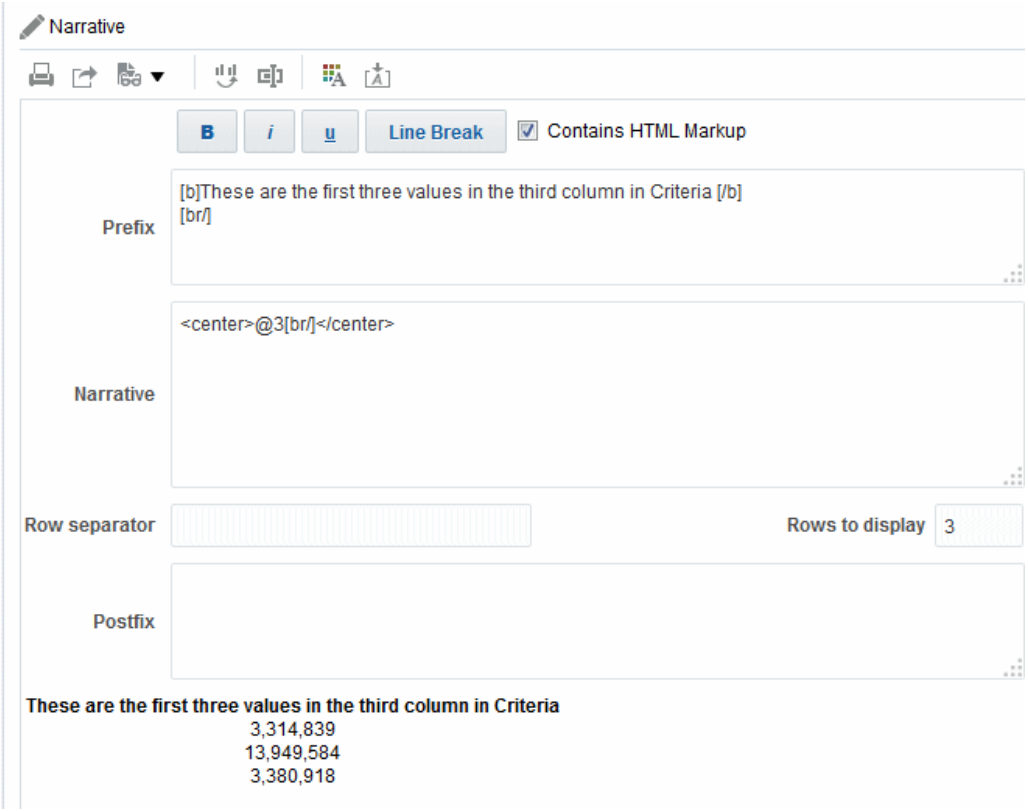
- 結果に含まれる各列に対して、プレースホルダを含む文を入力します。
- 行の区切り方を指定します。
- ナレーティブ・ビューで使用するフォントに外観の書式設定を適用するか、保存済のビューのフォント書式をインポートします。
- 変数の参照を追加します。

次の図は、表と、その左側にナレーティブ・ビューのサンプルを示します。



D50 Region	D51 Area	2- Billed Quantity	1- Revenue
AMERICAS	Central	281633	3,314,839
	North America	1137722	13,949,584
	South America	279347	3,380,918
APAC	North	264924	3,339,510
	South	1150251	14,557,050
	West	277827	3,403,022
EMEA	Africa	272968	3,408,846
	Eastern	287785	3,716,987
	Europe	535046	6,506,363
	Northern	1169718	14,422,881

前の図に示されているナレーティブ・ビューの表示を作成するためのナレーティブ・エディタのマークアップを次の図に示します。「ナレーティブ」テキスト・ボックスには、2 番目の列の 3 つの値を中央揃えにするための HTML マークアップ・コードが含まれています。ビューの編集を参照してください。



ナレーティブ・ビューでは、属性列、階層列およびメジャー列からの値を含めることができます。階層列の場合、選択ステップを使用して、階層レベルを階層列とともに表示できます。たとえば、階層に基づいてメンバーを選択するステップを作成し、指定されたレベルのメンバーを追加します。ナレーティブ・ビューはドリルできません。

ナレーティブ・ビューを編集するには:

1. 「結果」タブのナレーティブ・エディタを表示します。
2. **「ナレーティブ」**ボックスで、ビューに含める列を指定します。これを行うには、アット・マーク(@)を使用し、オプションで数字を続けます。たとえば、列基準の各順序の 3 番目の列を示すには、@3 を含めます。
3. 必要に応じて他のフィールドに入力します。

列セレクタ・ビューの編集

列セレクタ・ビューを編集して、ユーザーに関連のある値が分析に表示されるようにすることができます。

列セレクタは、事前に選択された列を含む一連のドロップダウン・リストです。ユーザーは列を動的に選択し、分析のビューに表示されているデータを変更できます。図に、列セレクタ・ビューのサンプルを示します。

分析の各列には1つのドロップダウン・リストをアタッチでき、各ドロップダウン・リストに複数の列をアタッチできます。ドロップダウン・リストは、属性列およびメジャー列に対して作成できます。列セレクタ・ビューで行った更新は、分析のすべてのデータ・ビューに作用します。

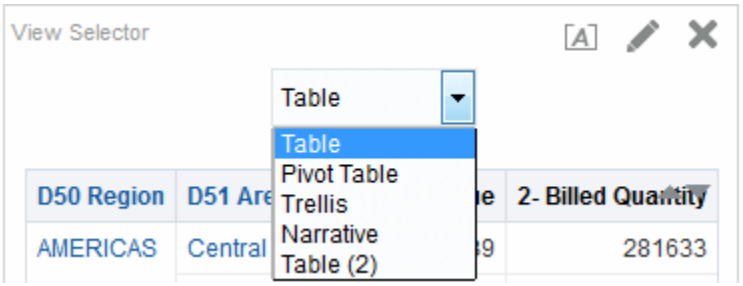
「サブジェクト領域」ペインからドロップダウン・リストに列を追加できます。この方法で列を追加した場合、列は分析の「基準」タブには追加されません。かわりに、「基準」タブを表示すると、列は列グループと呼ばれ、リストのデフォルト列も指定されています。デフォルト列は、ドロップダウン・リストの作成のベースになった列です。

1. 「結果」タブの「列セレクタ」エディタを表示します。
2. 列のドロップダウン・リストに含める列ごとに、**「セレクタを含む」**を選択します。エディタで列が強調表示されていることを確認します。
3. 新しい列をドロップダウン・リストに追加するには、「サブジェクト領域」ペインで追加する列をダブルクリックします。
4. 必要に応じて他のフィールドに入力します。

ビュー・セレクタ・ビューの編集

ビュー・セレクタ・ビューを使用すると、ユーザーは、保存されている分析のビューの中から、特定の結果のビューを選択できます。

ダッシュボードに配置した場合、ビュー・セレクタはリストとして表示され、セレクタの下に表示するビューをここからユーザーが選択できます。この図は、表ビューが直前に選択されたビューであるビュー・セレクタ・ビューのサンプルを示します。



通常、複合レイアウト・ビューに表示されないビューをビュー・セレクタに含めます。たとえば、分析に対し、表、グラフ、ゲージおよびビュー・セレクタの各ビューを作成し、複合レイアウト・ビューには、表ビューとビュー・セレクタ・ビューのみ含めます。分析をダッシュボード・ページに表示する際、ユーザーは、ビュー・セレクタ・ビューからグラフ・ビューまたはゲージ・ビューを選択できます。

1. 「結果」タブのビュー・セレクタ・エディタを表示します。詳細は、ビューの編集を参照してください。
2. **「使用可能なビュー」**リストでビュー・セレクタに含めるビューを選択し、**「含めるビュー」**リストに移動します。
3. 必要に応じて他のフィールドに入力します。

凡例ビューの編集

凡例ビューを使用し、分析に使用する特別な書式設定の意味(ゲージに適用するカスタムの色の意味など)を記録します。

図に、キャプションが色づけされたデータの意味を説明している凡例ビューのサンプルを示します。

1. 「結果」タブの「凡例」エディタを表示します。
2. ツールバーの**「キャプション」**ボックスで、凡例記号に関するキャプションの位置を選択します。
3. ツールバーの**「行ごとの凡例項目数」**ボックスで、1 行に表示する凡例項目の数を選択します。
4. 各凡例項目に対して:
   a. **「キャプション」**ボックスに、凡例記号の意味を入力します。
   b. **「サンプル・テキスト」**ボックスに、凡例記号内に表示されるテキストを入力します。
5. その他の凡例項目を追加するには、**「キャプションの追加」**をクリックします。
6. 必要に応じて他のフィールドに入力します。

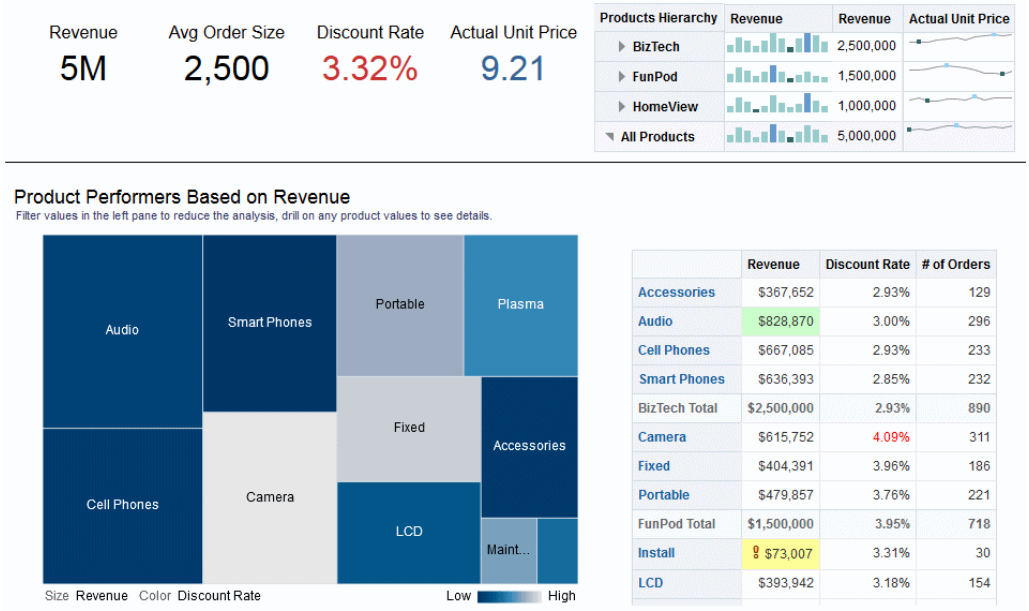
パフォーマンス・タイル・ビューの編集

パフォーマンス・タイルは、上位レベルの集計データの 1 つに単純かつ目立つ方法で関心を向けさせ、サマリー・メトリックを示します。

パフォーマンス・タイル・ビューでは、データの単一の集計にフォーカスが適用されます。デフォルトでは、「基準」タブの分析内の最初のメジャーがパフォーマンス・タイル・メジャーとして選択されています。正しいメジャー値がタイルに表示されるように、「基準」タブで集計およびフィルタを設定する必要があります。このメジャーを変更するには、パフォーマンス・タイル・ビューを編集します。分析内のメジャーごとに追加のパフォーマンス・タイル・ビューを含めるには、メジャーごとに個別のビューを追加します。

たとえば、パフォーマンス・タイル・ビューを編集して、メジャーとして「Revenue」を使用する場合です。値およびラベルでの使用可能なスペースの利用を指定できます。

図に、ダッシュボード・ページで表示される 4 つのパフォーマンス・タイルの例を示します。



デフォルトでは、「基準」タブの分析内の最初のメジャーがパフォーマンス・タイル・メジャーとして選択されています。正しいメジャー値がタイルに表示されるように、「基準」タブで集計およびフィルタを設定する必要があります。このメジャーを変更するには、パフォーマンス・タイル・ビューを編集します。分析内のメジャーごとに追加のパフォーマンス・タイル・ビューを含めるには、メジャーごとに個別のビューを追加します。分析の結果へのビューの追加を参照してください。

パフォーマンス・タイルをカスタマイズする際、5 つのペイン(領域)を使用できます。

- 「レイアウト」ペイン - ラベルおよびメジャーの書式設定を制御します。パフォーマンス・タイルに対するドロップ・ターゲットのガイドラインを参照してください。
- 「スタイル」ペイン - タイル・メジャーのサイズやテーマなど、共通の属性を管理します。
- パフォーマンス・タイル結果ペイン - パフォーマンス・タイル・ビューの結果を表示し、カスタマイズをただちに反映します。
- 「パフォーマンス・タイルのプロパティ」ダイアログ - カスタム・サイズ、背景色や境界色、ラベル・テキストの位置合せ、値圧縮のカスタマイズなど、高度なプロパティを管理します。
- 「条件付き書式設定」ダイアログ(「パフォーマンス・タイルのプロパティ」ダイアログの**「条件付き書式設定の編集」**リンクから起動) - タイルに関連付けられたメジャーのプロパティを編集し、タイルの外観を制御します。表、ピボット表、パフォーマンス・タイル、グラフ、ヒート・マトリックスおよびトレリスへの条件付き書式の適用を参照してください。

1. 「結果」タブの「パフォーマンス・タイル」エディタを表示して、パフォーマンス・タイルを編集するか、デフォルトのメジャーを変更します。
2. パフォーマンス・タイルのプロパティをカスタマイズまたは設定するには、ツールバーの**パフォーマンス・タイルのプロパティ**・ボタンをクリックします。「パフォーマンス・タイルのプロパティ」ダイアログが表示され、次のプロパティを設定できます。

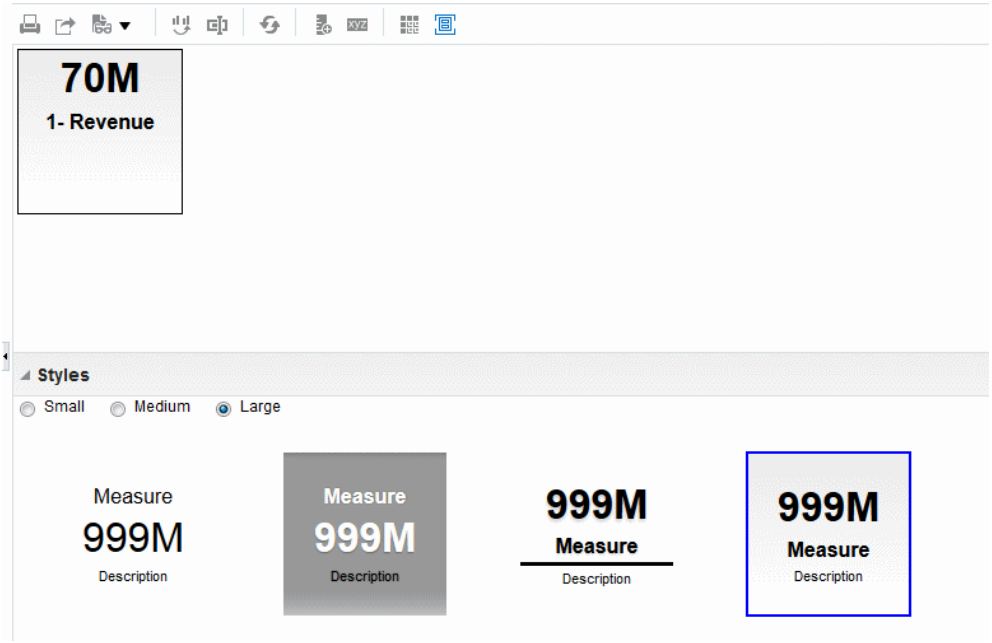
- タイルのサイズ関連
- ラベルを表示する位置、および値を表示する方法を示すもの
- 背景色や境界色など、タイルの外観を制御するもの

「条件付き書式設定の編集」リンクをクリックして「条件付き書式設定」ダイアログを開き、基準ページから引き継がれたデフォルトを変更したり、条件付き書式設定を追加することもできます。条件付き書式設定により、ユーザー定義スタイルはオーバーライドされます。高度なプロパティの詳細は、「パフォーマンス・タイルのプロパティ」ダイアログを参照してください。

3. エディタのツールバーのボタンを使用して、ビューの印刷やエクスポートなどの操作を実行します。
4. 「スタイル」ペインで**「小」**、**「中」**または**「大」**オプション・ボタンを選択して、タイルのサイズを変更します。「パフォーマンス・タイルのプロパティ」ダイアログを使用してサイズを入力した場合、**「カスタム」**が表示されることがあります。

   タイルのサイズオプション・ボタンの下にあるテーマ(またはスタイル)設定されたタイルを選択して、パフォーマンス・タイルのテーマを変更します。下の図に、パフォーマンス・タイルの「スタイル」ペインで使用できるテーマを示します。この図の「スタイル」ペインでは、グラデーション・テーマが選択および強調表示されており、図に示すようにパフォーマンス・タイル結果ペインにも反映されています。

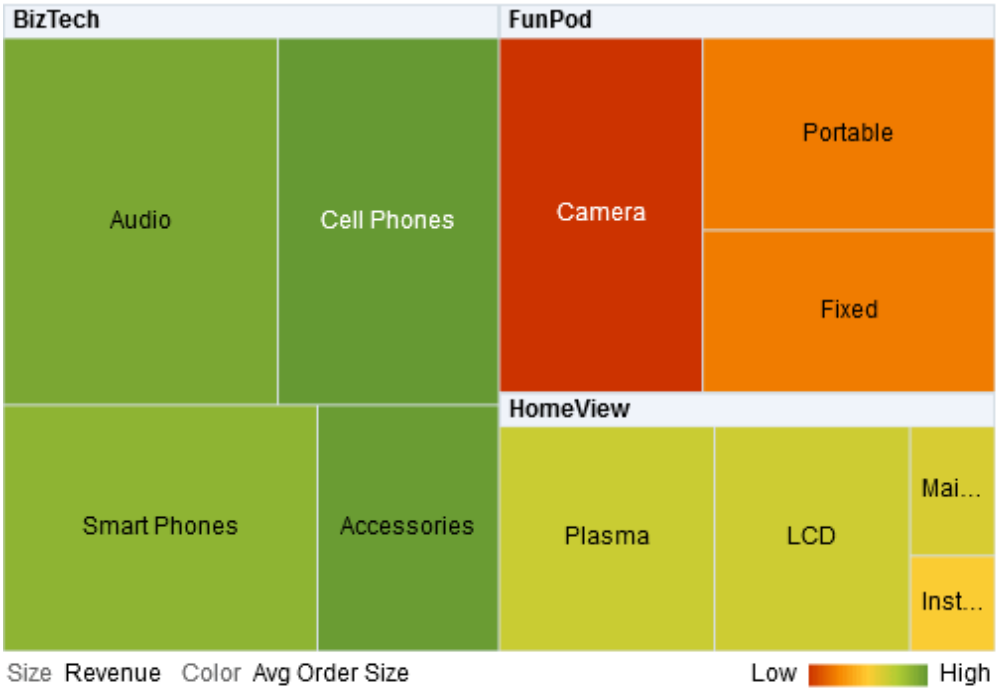
   スタイル属性の詳細は、「スタイル」ペインを参照してください。



ツリーマップ・ビューの編集

ツリーマップでは、データを(タイルとも呼ばれる)四角形にグループ化し、それから 1 つのメジャーのサイズおよび 2 番目のメジャーの色に基づいてタイルを表示することで、階層型データを編成します。

次の図では、ダッシュボード・ページに表示されたツリーマップ・ビューの例を示します。このツリーマップには、収益と平均オーダー・サイズの相関関係が表示されます。各タイルのサイズは各製品の収益を計測し、各タイルの色は各製品の平均オーダー・サイズを計測します。



デフォルトでは、「基準」タブ内の分析の最初のメジャーとして「サイズ基準」メジャーが選択され、2 番目のメジャーとして「色の基準」メジャーが選択されます。分析内のメジャーが 1 つのみの場合、このメジャーは「サイズの基準」と「色の基準」の両方のオプションのデフォルトになります。また、「スタイル」要素のデフォルトは、ビン数の値が「四分位数」である「百分位数によるビン化」に設定されます。

ツリーマップには次の特性があります。

- タイルは、百分位数によるビン別または連続的に色付けされます。
- 最初の「グループ化基準」ディメンションはグループ(ヘッダー)ラベルとして表示されます。
- 「グループ化基準」ディメンションの順序は、ツリーマップ内のネストの順序を示しています。「グループ化基準」の最後のディメンションは最下位レベルで、このディメンションの名前がタイル・ラベルとして表示されます。ラベルが長すぎてタイルに収まらない場合は切り捨てられます。ラベルの完全な値は、ツールチップに表示されます。

ツリーマップ・ビューの理解

使用されるメジャーに応じてツリーマップ・ビューが表示されます。

デフォルトでは、「基準」タブ内の分析の最初のメジャーとして「サイズ基準」メジャーが選択され、2 番目のメジャーとして「色の基準」メジャーが選択されます。分析内のメジャーが 1 つのみの場合、このメジャーは「サイズの基準」と「色の基準」の両方のオプションのデフォルトになります。また、「スタイル」要素のデフォルトは、ビン数の値が「四分位数」である「百分位数によるビン化」に設定されます。詳細は、「ツリーマップ・プロパティ」ダイアログを参照してください。

ツリーマップには次の特性があります。

- 色付きのタイルは、「プロンプト」、「セクション」、「グループ化基準」、サイズ基準および「色の基準」ドロップ・ターゲットに配置された列のグループ化および交差で形成されます。

- データのレベルは、2 つのメジャーに対して事前に定義された長方形の限定スペースに表示されます。
- 属性列および階層列がサポートされています。レベル・スキップ階層は、ツリー・マップの「グループ化基準」エリアではサポートされていません。
- タイルは、百分位数によるビン化または連続的な色として表示されます。
- 凡例(非表示可)はツリーマップの下に表示され、次のものが含まれます。
  - 2 つのメジャー(サイズ基準および「色の基準」のリストで選択されたメジャー)および対応するラベル。
  - 指定されたビンの数(四分位数など)、色分けとラベル付け、または連続的な色の塗りつぶしとして表示され、`low` から `high` にラベル付けされたグラデーション・バー。
- 最初の「グループ化基準」ディメンションはグループ(ヘッダー)ラベルとして表示されます。
- 「グループ化基準」ディメンションの順序は、ツリーマップ内のネストの順序を示しています。「グループ化基準」の最後のディメンションは最下位レベルで、このディメンションの名前がタイル・ラベルとして表示されます。ラベルが長すぎてタイルに収まらない場合は切り捨てられます。ラベルの完全な値は、ツールチップに表示されます。
- ストライプの「透過な」対角線パターンは null 値に対して表示されます。
- モバイル・デバイスでは読取り専用モードで使用できます。

「ツリーマップ」エディタは、ツリーマップ・ビューのカスタマイズに使用できる 3 つのペイン、つまり領域で構成されています。この 3 つのペインは垂直方向に配置されます(水平方向に配置される表、ピボット表などとは区別されます)。これらのペインは次のとおりです。

- **「レイアウト」ペイン** — タイル、セクション、プロンプトおよびグループ化として表示される列、およびラベルとメジャーの書式設定を制御します。ツリーマップに対するドロップ・ターゲットのガイドラインを参照してください。
- **ツリーマップ結果ペイン** — ツリーマップ・ビューの結果を表示し、カスタマイズをただちに反映します。
- **「選択ステップ」ペイン** — 分析およびツリーマップに有効な選択ステップを表示します。データの選択の使用を参照してください。

ツリーマップ・ビューの操作

ツリーマップ・ビューでは、データの関係をグラフィカルに表すことができます。

次のことができます:

- タイルまたはグループをドリルするには左クリックします。複数レベルの階層をドリルすると、最下位レベルのすべてのメンバーがタイルとして表示され、現在のデータが詳細レベルのデータで置き換えられます。たとえば、国名(米国など)にドリルダウンすると、ツリーマップには国自体ではなくその国の州のデータが表示されます。
- **ドリル**、アクションの起動、**保持のみ**、**削除**、特定のタイルにフォーカスなど、アクションのコンテキスト・メニューを表示するには右クリックします。追加情報は、ビューの右クリック相互作用を参照してください。

- ツールチップを表示するには、グループまたはタイルにカーソルを合せます。グループのツールチップには、その交差、ヘッダー・ラベルおよびヘッダー値で集計されたメジャー値が表示されます。タイルのツールチップには、タイル・メンバーと、サイズ基準および「色の基準」のラベルと値が表示されます。
- ツリーマップ・ビューが含まれる分析をダッシュボードにドラッグ・アンド・ドロップします。ダッシュボードへのコンテンツの追加を参照してください。ダッシュボードに追加した後、次のことを実行できます。
  - PDF への出力
  - HTML への出力
  - Excel にエクスポート
  - Powerpoint にエクスポート
- ツリーマップ・ブレッドクラムを使用してナビゲートします。ツリーマップ・ブレッドクラムは、ツリーマップ・ビューの上に表示されます。元のビューおよびツリー内の前のレベルに戻るには、ツリーマップ・ブレッドクラムを使用します。
  - コンテキスト・ドリル・パスを反映します。
  - 上矢印アイコンをクリックすると元のビューに戻り、すべてのコンテキスト・ドリルが削除されます。これは、ページレベル・ツリーマップ・ブレッドクラム、つまり「ホーム」(上矢印)です。
  - 「ホーム」リンクではないリンクをクリックしたときには、特定の項目に関連付けられたコンテキスト・ドリルが削除されます。
- メジャー、プロパティなどを変更するには、ツリーマップ・ビューを編集します。

1. 「結果」タブの「ツリーマップ」エディタを表示します。ビューの編集を参照してください。
2. ツリーマップのプロパティをカスタマイズまたは設定するには、ツールバーの**「≪ツリーマップ・ビュー・プロパティ | Treemap View Properties | Bifndn≫」**ボタンをクリックします。「≪ツリーマップ・プロパティ | Treemap Properties | Bifndn≫」ダイアログでは、次のプロパティを設定できます:
   - ツリーマップのサイズに関連するもの(「一般」タブを参照)
   - 凡例の表示または非表示(「一般」タブを参照)
   - 背景色と境界色、ラベルなど、タイルの外観を制御するもの(「スタイル」タブを参照)
3. エディタのツールバーのボタンを使用してビューの印刷やエクスポートなどの操作を実行するか、またはコンテキスト・メニューを使用して同様の機能を実行します。
4. ビューのカラー・パレットを変更するには、「レイアウト」ペインの「スタイル」の下で、**「百分位数によるビン化」**または**「連続的な色の塗りつぶし」**を選択します。
   - 百分位数によるビン化 — ツリーマップ内のタイルの色を百分位数によるビンとして表示するように指定します。**「ビン」**リストで、ツリーマップに表示するビンの数を選択します。整数、「四分位数(4)」または「十分位数(10)」を選択できます。値の範囲は 2 から 12 までです。選択されるビンの数は、ツリーマップ内の色の数に対応します。

たとえば、地域とエリアのツリーマップを作成するとします。「サイズ基準」メジャーとして「Revenue」、「色の基準」メジャーとして「Avg Order Size」を指定します。次に、スタイルとして「百分位数によるビン化」を選択し、ビン数は 4(四分位数)を指定します。「4 分の 1 番目」は、売上別の平均オーダー・サイズを下回る地域内のエリアを表します。

「ビン化プロパティ」領域は、100%の合計に基づいてビンの割合が表示され、選択したビンの数に基づいて計算されます。各割合は色コード化され、「色」の選択に対応します。

- 連続的な色の塗りつぶし — ツリーマップ内のタイルがグラデーション色スキームとして表示されるように指定します。下位値のグラデーション色は、選択した「色の基準」メジャーの最小値です。上位値のグラデーション色は、選択した「色の基準」メジャーの最大値です。

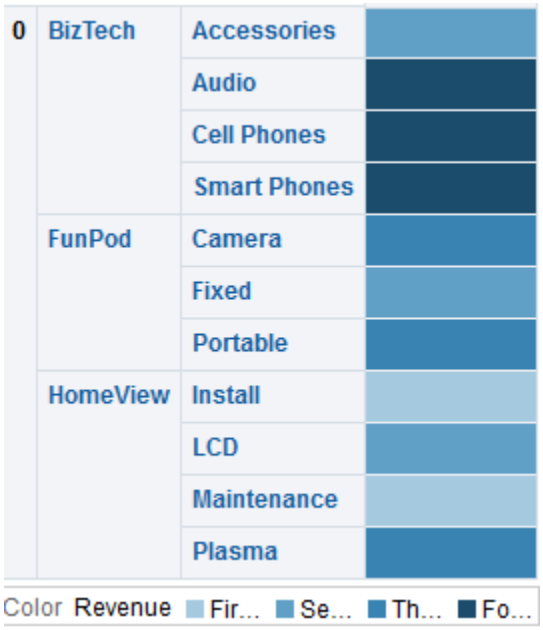
5. **「グループ化基準」**、**サイズ基準**および**「色の基準」**オプションを使用して新しいデータをわかりやすくビジュアル化するには、メジャーおよび属性列と階層列(レベル・スキップ階層を除く)を変更します。

6. 右クリックして基本的なビューの相互作用を実行します。

ヒート・マトリックス・ビューの編集

ヒート・マトリックスは、データを 2 次元で描画し、色のグラデーションで値を表現します。

単純ヒート・マトリックスは即時に情報のビジュアル・サマリーを提供するもので、大量のデータを分析して外れ値を確認する用途に適しています。次の図では、ダッシュボード・ページに表示されたヒート・マトリックス・ビューの例を示します。各製品の収益が四半期ごとに表示されます。このヒート・マトリックスでは、各四半期の製品収益の外れ値が示されます。たとえば、第 4 四半期のオーディオ、携帯電話およびスマートフォンの売上が多い一方、第 1 四半期の設置およびメンテナンスの売上は少なかったなどです。



ヒート・マトリックス・ビューの理解

ヒート・マトリックス・ビューは単一のメジャーについてのビジュアル解析を提供します。

デフォルトでは、「基準」タブの最初の分析メジャーが「色の基準」メジャーとして選択され、これがメジャーの値を表します。また、「スタイル」要素のデフォルトは、ビン数の値が「四分位数」である「百分位数によるビン化」に設定されます。詳細は、「ヒート・マトリックス・プロパティ」ダイアログを参照してください。

ヒート・マトリックスには次の特性があります:

- 色付きのセルは、「プロンプト」、「セクション」、「行」、「列」および「色の基準」ドロップ・ターゲットに配置された行と列のグループ化および交差で形成されます。追加情報は、ヒート・マトリックスにおけるドロップ・ターゲットのガイドラインを参照してください。
- ビジュアル化されるメジャーは 1 つのみです。
- 属性列および階層列がサポートされています。
- セルは、百分位数によるビン化または連続的な色として表示されます。
- セルは、同じ幅および同じ高さで一律に表示されます。セルの幅および高さは同じである必要はありません。
- 凡例(非表示可)はヒート・マトリックスの下に表示され、次のものが含まれます。
  - 1 つのメジャー(「色の基準」リストで選択)と対応するラベル。
  - 指定されたビンの数(四分位数など)、色分けとラベル付け、または連続的な色の塗りつぶしとして表示され、「低」から「高」にラベル付けされたグラデーション・バー。
- ストライプの「透過な」対角線パターンは null 値に対して表示されます。

「ヒート・マトリックス」エディタは、ヒート・マトリックス・ビューのカスタマイズに使用できる 3 つのペイン、つまり領域で構成されています。この 3 つのペインは垂直方向に配置されます(水平方向に配置される表、ピボット表などとは区別されます)。これらのペインは次のとおりです。

- 「レイアウト」ペイン - セクション、プロンプト、行および列として表示されるセルのグループ化を制御したり、ラベルとメジャーの書式設定や凡例の表示/非表示を制御します。ヒート・マトリックスにおけるドロップ・ターゲットのガイドラインを参照してください。
- ヒート・マトリックスの結果ペイン - ヒート・マトリックス・ビューの結果を表示し、カスタマイズをただちに反映します。
- 「選択ステップ」ペイン - 分析およびヒート・マトリックスに有効な選択ステップを表示します。データの選択の使用を参照してください。

ヒート・マトリックス・ビューの操作

ヒート・マトリックス・ビューには様々なデータ表示オプションが用意されています。

次のことができます:

- 左クリックでセルにドリルします。複数レベルの階層をドリルすると、最下位レベルのすべてのメンバーがセルとして表示され、現在のデータが詳細レベルのデータで置き換えられます。たとえば、国名(米国など)にドリルダウンすると、ヒート・マトリックスには国自体ではなくその国の州のデータが表示されます。
- 外部エッジを右クリックすると、オプションのコンテキスト・メニュー(**ドリル**、アクションの起動、**保持のみ**、**削除**、または指定したセルにフォーカスなど)が表示されます。ビューの右クリック相互作用を参照してください。

- ヒート・マトリックスの**「メジャー値の表示」**オプションが**「ロールオーバー時」**に設定されている場合は、カーソルをセル上に移動すると値が表示されます。このオプションの管理の詳細は、「ヒート・マトリックス・プロパティ」ダイアログの「タイトルとラベル」タブを参照してください。
- ヒート・マトリックス・ビューが含まれる分析をダッシュボードにドラッグ・アンド・ドロップします。ダッシュボードへのコンテンツの追加を参照してください。ダッシュボードに追加した後、次のことを実行できます。
  - PDF への出力
  - HTML への出力
  - Excel にエクスポート
  - リフレッシュ
  - ブリーフィング・ブックへの追加
  - ブックマーク・リンクの作成
  - プロンプト・リンクの作成
- メジャー、プロパティなどを変更するには、ヒート・マトリックス・ビューを編集します。
- マスター詳細リンク、ソート、アクションの追加およびヘッダーの固定を使用します。詳細は、ビューのマスター詳細リンクとは、ビューでのデータのソート、アクションとはおよび「ヒート・マトリックス・プロパティ」ダイアログの「一般」タブの対応するコンテンツを参照してください。

1. 「結果」タブの「ヒート・マトリックス」エディタを表示します。
2. ヒート・マトリックスのプロパティを設定するには、ツールバーの**「プロパティの表示」**ボタンをクリックします。「ヒート・マトリックス・プロパティ」ダイアログが表示されます。ここで、次のようなプロパティを設定できます。
   - セル幅、コンテンツ・ページング、マスター詳細リンク、null 値、凡例の表示と非表示に関連するもの(「一般」タブを参照)
   - セクションの外観(背景色や境界色など)や PDF 印刷を制御するもの(「一般」タブを参照)。
   - セル上のメジャー値の表示/非表示を制御するもの、プロンプト、セクション、行、列などのタイトルやラベルの外観を変更するもの(「タイトルとラベル」タブを参照)。
3. エディタのツールバーのボタンを使用して、ビューの印刷やエクスポートなどの操作を実行します。
4. ビューのカラー・パレットを変更するには、「レイアウト」ペインで**「百分位数によるビン化」**または**「連続的な色の塗りつぶし」**オプションを選択します。

   「行」、**「列」**および**「色の基準」**ドロップ・ターゲットを使用して新しいデータをわかりやすくビジュアル化するには、メジャーおよび属性列と階層列を変更します。
5. 右クリックして基本的なビューの相互作用を実行します。

ビューのデータのレイアウトの変更

マップ・エディタ以外のデータ・ビューの各エディタには、「レイアウト」ペインが含まれています。

「レイアウト」ペインは、グラフ、パフォーマンス・タイル、ピボット表などのビュー・タイプごとに表示が若干異なります。「レイアウト」ペインでは、ドロップ・ターゲットを使用してビューのデータの配置を示します。ドロップ・ターゲットの理解を参照してください。

「レイアウト」ペインを使用して、ビューでのデータの配置を変更します。具体的には、次のことができます。

- ビューのデータを編集します。ビューでの列の追加と再配置を参照してください。
- プロパティを設定します。ビュー本体とドロップ・ターゲットのプロパティの設定を参照してください。
- 合計を追加します。表およびピボット表への合計の追加を参照してください。
- 合計値および相対値を表示します。ピボット表でのメジャー列の累計と相対値の表示を参照してください。
- グラフ、ゲージおよびファンネルのセクション・スライダを定義します。グラフ、ゲージおよびファンネルのセクション・スライダの定義を参照してください。
- 「レイアウト」ペインで**「凡例で表示」**ボックスを選択することで、グラフに凡例を追加します。

ドロップ・ターゲットの理解

「レイアウト」ペインで、データ・ビューの列はドロップ・ターゲットに表示されます。

ドロップ・ターゲットは、列を挿入、移動またはドロップできる場所を示します。列の有効な位置を表します。

ドロップ・ターゲットを使用(ビュー内の別のターゲットに列をドラッグ・アンド・ドロップ)して、データ・ビュー内のデータの配置を変更できます。

次のビューの「レイアウト」ペインは大きく異なっています。

- ヒート・マトリックス・ビュー。ヒート・マトリックスにおけるドロップ・ターゲットのガイドラインを参照してください。
- パフォーマンス・タイル・ビュー。パフォーマンス・タイルに対するドロップ・ターゲットのガイドラインを参照してください。
- ツリーマップ・ビュー。ツリーマップに対するドロップ・ターゲットのガイドラインを参照してください。
- トレリス・ビュー。トレリスに対するドロップ・ターゲットのガイドラインを参照してください。

データ・ビューには、ビューのタイプに応じて1つ以上の次のドロップ・ターゲットを含めることができます。

- ***「<view-type>」プロンプト*** - 表示するデータをユーザーが選択できるインタラクティブな結果セットを提供します。このドロップ・ターゲットに表示される列からの値は、初期基準として使用されます。ビューで、これらの値は、選択用のドロップダウン・リスト(ページ・エッジとも呼ばれる)に表示されます。

- **「セクション」** - ビューをセクションに分ける領域を挿入します。このドロップ・ターゲットで**「スライダとして表示」**オプションを選択した場合、このセクション・ドロップ・ターゲットにドロップされる列の値は、一意のビューとしてではなく、セクション・スライダとして表示されます。
- ***「<view-type>」* 領域** - 描画領域またはビュー本体自体をシミュレートし、ビューがどのように表示されるかの確認に役立ちます。

  表の場合、この領域には**「列とメジャー」**ドロップ・ターゲットが含まれ、ビューの列がすべて含まれます。表では、メジャーはすべて列として処理されます。

  その他のすべてのビューの場合、この領域には、次のドロップ・ターゲットが含まれます。

  – **「メジャー」ドロップ・ターゲット** - ビューのサマリー・データを含む部分が挿入されます。ビューのタイプに応じて、この領域には、1 つの**「メジャー」**ドロップ・ターゲット(ピボット表など)が含まれたり、サブドロップ・ターゲット(折れ線-棒グラフの場合、**棒(Y1 軸)**、**線(Y2 軸)**など)が含まれたりします。これらのドロップ・ターゲットにメジャー列をドラッグ・アンド・ドロップします。

  – **その他のドロップ・ターゲット** - メジャー・ドロップ・ターゲットの列のサマライズに使用されます。通常、これらのドロップ・ターゲットに属性列および階層列をドラッグ・アンド・ドロップします。

    ビューに表示される他のドロップ・ターゲットは、ビューのタイプによって異なります。

ビュー	ドロップ・ターゲット
ピボット表	次のドロップ・ターゲットが含まれます。 – **列** - 列方向に列を表示します。ピボット表には、複数の列を含めることができます。 – **行** - 行方向に列を表示します。ピボット表には、複数の行を含めることができます。
≪ゲージ｜Gauge｜Bifndn≫	**行** - ゲージに表示される列を示します。
棒グラフ、折れ線グラフ、面グラフ、折れ線-棒グラフ、時系列線グラフ、パレート・グラフ、散布図、バブル・グラフ	メイン・ドロップ・ターゲット(棒、折れ線、面、棒と折れ線、点またはバブル)内に次のサブ・ドロップ・ターゲットが含まれます。ターゲット名は、グラフ・タイプによって異なります。たとえば、グループ化は、バブル・グラフの場合はバブルで、散布図の場合は点です。 – **グループ化** - 軸ラベルをグループにクラスタ化します。たとえば、基準に地域、地区および売上金額の列が含まれる縦棒グラフでは、このドロップ・ターゲットに地域列が含まれる場合、横軸でデータは地域ごとにグループ化されます。 – **色変更基準** - (パレートに対しては無効です。)各列値または列値の組合せを別の色で表示します。
レーダー・グラフ	**レーダー・セクション** - 円の半径に沿った各線上の点で列値を表示します。
円グラフ	次のドロップ・ターゲットが含まれます。 – **円** - 各列値または列値の組合せを個別の円で表示します。 – **区分** - 各列値または列値の組合せを個別の円の区分で表示します。

ビュー	ドロップ・ターゲット
ウォーターフォール・グラフ	次のドロップ・ターゲットが含まれます: – **グループ化** - 軸ラベルをグループにクラスタ化します。属性および階層列が「グループ化」領域に配置されます。 – メジャー階層を使用している場合、一般的なメジャー列は「≪棒 | Bars | Bifndn≫」ドロップ・ターゲットに置かれ、メジャー・ディメンションは「≪グループ化 | Group by | Bifndn≫」ドロップ・ターゲットに置かれます。(メジャー階層は Essbase データ・ソースに適用されます。)*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*のメジャー階層のモデリングを参照してください。
ファンネル・グラフ	**ステージ** - 各列値をファンネルのステージで表します。
トレリス	次のドロップ・ターゲットが含まれます。 – **列** - 列方向に列を表示します。トレリスには、複数の列を含めることができます。 – **行** - 行方向に列を表示します。トレリスには、複数の行を含めることができます。 単純トレリス・ビューのメイン・ドロップ・ターゲットである**「ビジュアライゼーション」**内には、次のサブドロップ・ターゲットが含まれます。 – **グループ化** - メジャーをグループにします。 – **色の基準** - 各メジャーが異なる色で表示されます。たとえば、トレリスの棒グラフの縦棒では、収益のすべての棒が青で表示され、請求済数量が赤で表示されます。散布図では、このドロップ・ターゲットを使用して、点の色を変更します。バブル・グラフでは、このドロップ・ターゲットを使用して、バブルの色を変更します。 – **棒の軸** - 収益と請求済数量を地域ごとに比較する折れ線-棒グラフでは、収益などの 2 つのメジャーのどちらかが表示されます。 – **折れ線の軸** - 収益と請求済数量を地域ごとに比較する折れ線-棒グラフでは、請求済数量などの 2 つのメジャーのどちらかが表示されます。 – **円** - 円グラフでは、ここにディメンションを追加すると、複数の円グラフが作成されます。 – **スライス** - 円グラフで、色の異なるスライスとしてメジャーが表示されます。 – **点** - 散布図では、点としてディメンションが表示されます。各ディメンション・メンバーが 1 つの点として表示されます。 – **横軸** - このメジャー値によって、メンバーの水平方向の位置が制御されます。散布図では、このターゲットに 1 つのメジャーをドロップできます。バブル・グラフでは、このドロップ・ターゲットの各メジャーが 1 つのバブルとして表示されます。 – **縦軸** - 散布図で、2 つのメジャーのどちらかが点として表示されます。バブル・グラフでは、3 つのメジャーのいずれかがバブルとして表示されます。 – **バブル** - バブル・グラフで、サイズの異なるバブルとしてメジャーが表示されます。 – **サイズ** - バブル・グラフで、3 つのメジャーのいずれかがバブルのサイズとして表示されます。 拡張トレリス・ビューのメイン・ドロップ・ターゲットである**「ビジュアライゼーション」**内には、次のサブドロップ・ターゲットが含まれます。 – **面** - スパーク面マイクロチャートで、面として列が表示されます。 – **棒** - スパーク棒マイクロチャートで、棒として列が表示されます。 – **折れ線** - スパーク折れ線マイクロチャートで、折れ線として列が表示されます。
パフォーマンス・タイル	次のドロップ・ターゲットが含まれます: – **≪メジャー | Measure | Bifndn≫** - タイルに表示される列の特定の値が表示されます。追加情報は、パフォーマンス・タイルに対するドロップ・ターゲットのガイドラインを参照してください。
ツリーマップ	次のドロップ・ターゲットが含まれます。 – **グループ化基準** — 集計値のコンテナを生成または記述するためにスライスされた階層データの最上位レベルを表します。集計値は長方形のタイルとして表示されます。 – **サイズ基準** — 親内でのタイルの分布を表します。子のサイズは、親のサイズと常に等しくなります。 – **色の基準** — 同じレベルにあるすべてのタイルでの値の分布を表します。

ビュー	ドロップ・ターゲット
≪ヒート・マトリックス｜Heat Matrix｜Bifndn≫	次のドロップ・ターゲットが含まれます。 – **行** - 行方向に列を表示します。ヒート・マトリックスには、複数の行を含めることができます。 – **列** - 列方向に列を表示します。ヒート・マトリックスには、複数の列を含めることができます。 – **色の基準** - メジャー値を表します。値が高ければ高いほど、セルの色が濃くなります。

- **≪除外｜Excluded｜Bifndn≫** - ビュー結果から列を除外しますが、列は分析の一部のままとなります。「除外」ドロップ・ターゲットの列を参照してください。

また、「表」領域、「ウォーターフォール・グラフ」領域、「パレート・グラフ」領域、「ツリーマップ」領域、「ヒート・マトリックス」領域および「トレリス(単純)」領域以外の各*<view-type>*領域には、メジャー・ラベル要素が含まれます。「メジャー・ラベル」要素は、「メジャー」エリアのドロップ・ターゲットのすべてのメジャー列のラベルを表します。ビューでのメジャー・ラベルの表示方法は、あるドロップ・ターゲットから別のターゲットへドラッグ・アンド・ドロップすることで変更できます。たとえば、縦棒グラフでは、「メジャー・ラベル」要素を「色変更方法」ドロップ・ターゲットへドラッグ・アンド・ドロップすることで、各メジャー・ラベルを異なる色で表示できます。

ピボット表では、メジャー・ラベルの書式を編集したり、非表示にできます。

「除外」ドロップ・ターゲットの列

「除外」ドロップ・ターゲットの列はビュー結果には含まれませんが、分析の一部であることに変わりありません。

分析のビューを様々な方法で作成した後、列を「除外」ドロップ・ターゲットに置くことができます。一般に、1 つのビューまたはすべてのビューに明示的に追加されていない場合、列は「除外」ドロップ・ターゲットに置かれます。

列を「除外」ドロップ・ターゲットに置くには、いくつかの方法があります:

- 表またはピボット表などのビューの右クリック・メニューから**「列の除外」**オプションを選択します。
- 次に示すように、「サブジェクト領域」ペインから列を選択して分析のビューに追加します:
  - 「基準」タブ - 分析結果を表示した後で「サブジェクト領域」ペインから「選択された列」ペインに列を追加したときに、「分析プロパティ」ダイアログ: 「データ」タブの**「基準タブに追加された列の表示」**プロパティに対して**「既存のビューから除外するが、新規ビューで表示」**オプションが選択されている場合、その列は既存のビューの「レイアウト」ペインの「除外」ドロップ・ターゲットに置かれますが、追加した新規ビューには表示されます。
  - 「結果」タブ - 列をビュー・エディタに追加するか、複合レイアウトに追加するかで動作が異なります。
    - 「ビュー」エディタ - 「サブジェクト領域」ペインからビューに列を追加すると、そのビューに列が配置されます。列は、分析のその他のすべてのビューの「除外」ドロップ・ターゲットに置かれます。
    - 複合レイアウト - 「サブジェクト領域」ペインで列をダブルクリックすると、現在の複合レイアウト内のすべての既存のビューの「レイアウト」ペインのデフォルト・ドロップ・ターゲットに列が配置されます。列は、分析のその他のすべてのビューの「除外」ドロップ・ターゲットに置かれます。

「サブジェクト領域」ペインから表形式のビューに列をドラッグ・アンド・ドロップすると、そのビューのドロップ・ターゲットに列が配置されます。列は、分析のその他のすべてのビューの「除外」ドロップ・ターゲットに置かれます。

「除外」ドロップ・ターゲットにある列をビューに表示する必要がある場合は、その列を移動できます。ビューの「レイアウト」ペインを表示し、「除外」ドロップ・ターゲットから、希望する場所に列をドラッグ・アンド・ドロップします。

列の除外は、列の削除とは異なります。分析から列を完全に削除するには、ビューの「レイアウト」ペインの**「詳細オプション」**ボタンから**「列の削除」**オプションを使用します。

集計と「除外」ドロップ・ターゲット

「除外」ドロップ・ターゲットに列を含むピボット表またはグラフでは、集計ルールが適用され、ビューのデータ本体のメジャーが 1 つの値に集計されます。

たとえば、「選択された列」ペインに次の列があるとします。

```
Region    City    Dollars
East       NY     1000
East      Boston   500
```

City 列が「除外」ドロップ・ターゲットに置かれると、ビューは通常次のように表示されます。

```
East    1500
```

集計ルールが適用され、1,000 と 500 が 1,500 に集計されます。ピボット表またはグラフでは、「列式の編集」ダイアログで指定された集計ルールが適用されます。ピボット表の場合、「レイアウト」ペインの「詳細オプション」メニューを使用して特定の集計ルールを選択できます。

次の値を表示する表、ピボット表またはグラフが必要だとします。

```
East    1000
East     500
```

この集計を実現するには、ビューのレイアウトに「地域」と「市」の両方の列を含め、「列のプロパティ」ダイアログの「列書式」タブを使用して「市」列を非表示にします。

グラフおよびファンネル・グラフに対するドロップ・ターゲットのガイドライン

ドロップ・ターゲットは、列を挿入、移動またはドロップできる場所を示します。

グラフおよびファンネル・グラフで、あるドロップ・ターゲットから別のターゲットへ列をドラッグ・アンド・ドロップする場合、次の制限とガイドラインが適用されます。

- バブル・グラフには、3 つ以上のメジャーが必要です。1 つのメジャーを横軸にプロットし、別のメジャーを縦軸に、3 つ目のメジャーをバブル・サイズ軸にプロットします。
- バブル・グラフ、折れ線-棒グラフ、散布図またはファンネル・グラフでは、メジャー・ラベルをドラッグ・アンド・ドロップできません。
- パレート・グラフは、メジャーを 1 つのみ持つことができます。

  別のメジャーを「メジャー」ドロップ・ターゲットにドロップすると、メジャーが入れ替わりますが、既存のメジャーが新たにドロップしたメジャーに置き換えられ、自動的に「除外」ドロップ・ターゲットに移動されるということです。

- 時系列折れ線グラフは、横軸に 1 つの日付または日時データ列が選択されている必要があります。これは、1 つの縦軸を持ちますが、複数のデータ系列がサポートされます。
- 散布図には、2 つ以上のメジャーが必要です。たとえば、1 つのメジャー列を横軸にプロットし、別のメジャー列を縦軸にプロットします。これらのメジャーは、「グループ化」軸の値としてプロットされます。
- ファンネル・グラフでは 2 つのメジャーが使用されますが、1 つのみ必須です。2 つ目のメジャーを選択しない場合、1 つ目のメジャーが 2 つ目のメジャーとして使用されます。2 つのメジャーが選択されている状況で新たにメジャーを選択すると、実際のメジャーのドロップ・ターゲットにある現在のメジャーが新規メジャーで置き換えられます。
- 積上げ棒グラフには、値の比較ができるように 2 つ以上のメジャーが必要です。
- マスター詳細関係のグラフの場合に、詳細列を表示するために作成されたスライダを非表示にする場合は、「セクション」ドロップ・ターゲットで、**「スライダとして表示」**チェック・ボックスを選択解除します。

トレリスに対するドロップ・ターゲットのガイドライン

トレリス・ビューは、各データ・セルに 1 つずつの複数グラフのグリッドが表示されるようなグラフ・ビューです。

トレリスのドロップ・ターゲットを操作する際には、次のガイドラインが適用されます。

- **トレリスのドロップ・ターゲットの拡張** - トレリス・エディタの「レイアウト」ペインは、横方向ではなく縦方向になっていて異なります。この幅の狭い「レイアウト」ペインに表示できる数より多くのデータがドロップ・ターゲットに含まれている場合は、マウスを合せるとドロップ・ターゲットのコンテナが拡張されます。つまり、満杯を超えたドロップ・ターゲットにマウスを合せると、メジャーと列の完全な選択内容が表示され、マウスを合せる前には表示できなかったメジャーと列も移動および順序変更できるようになります。選択したアイテムをドラッグすると少し透明に表示されます。
- **メジャーの配置** - トレリス・ビューのメジャー列を操作する際には、次の点に注意してください。
  - メジャーを左または右にドラッグすれば、メジャー・ドロップ・ターゲット内で順序変更できます。
  - 単純トレリス・ビューでは、「色の基準」または「グループ化」のメジャー・エッジのみにメジャー列を配置できます。
  - 一部の単純トレリスのビジュアライゼーション(散布図、バブル・グラフおよび折れ線-棒グラフ)では、メジャーを入れ替えることができます。既存のメジャーを 1 つの軸からドラッグして別の軸のターゲットにドロップすると、ビューの 2 つのメジャーの位置が入れ替われます。
  - 散布図、バブル・グラフおよび折れ線-棒グラフでは、軸ごとに 1 つのメジャーが許可されます。次に例を示します。
    * 散布図のドロップ・ターゲット: 横軸、縦軸
    * バブル・グラフのドロップ・ターゲット: 横軸、縦軸、サイズ
    * 折れ線-棒グラフのドロップ・ターゲット: 棒軸、折れ線軸

- 拡張トレリス・ビューでは、トレリスの一番内部の列ヘッダーでメジャーが構成されています。
- 「色の基準」ドロップ・ターゲットおよび「グループ化」ドロップ・ターゲットからメジャーを双方向に移動する際には、次のようになります。
  * 1 つのメジャーをドラッグすると、それとともにすべてのメジャーが移動されます。(これを*スティッキな*動作といいます。)
  * 新しいメジャーをビューにドラッグすると、新しいメジャーを配置した場所にすべての既存のメジャーが移動されます。
- ビジュアライゼーションの非メジャー・エッジ、「行」ターゲットまたは「列」ターゲットにメジャーを配置するには、メジャーを属性列にまず変換する必要があります。これは、「列式の編集」ダイアログの「列式」タブで行います。
- 属性列を「メジャー」ドロップ・ターゲットからドラッグしても、ドロップ・ターゲットまたはその中のメジャーが属性とともに移動されることはありません。

パフォーマンス・タイルに対するドロップ・ターゲットのガイドライン

ドロップ・ターゲットは、列を挿入、移動またはドロップできる場所を示します。

パフォーマンス・タイルの「レイアウト」ペインには、**「メジャー」**ドロップ・ターゲットと**「ラベル」**領域の 2 つの領域があります。この 2 つの領域により、パフォーマンス・タイルでは、目立つようにタイルに表示された、知っておく必要がある単純なファクトにユーザーの関心を向けさせて、単純な書式でステータスを通知できます。

パフォーマンス・タイル・ビューのこの 2 つの領域を操作する際には、次のガイドラインが適用されます。

「メジャー」ドロップ・ターゲット

- デフォルトでは、「基準」タブの分析内の最初のメジャーがパフォーマンス・タイル・メジャーとして選択されています。「メジャー」リストから異なるメジャーを選択し、メジャーを「メジャー」ドロップ・ターゲットにドラッグ・アンド・ドロップするか、またはサブジェクト領域から新しいメジャーをダブルクリックして「メジャー」リストに追加できます。
- 「レイアウト」ペインのメジャーの名前にカーソルを合せると、フォルダ名が表示されます。
- **タイルの書式設定**ボタンをクリックして、メジャー列の書式を編集できます。このボタンを使用して、「列のプロパティ」ダイアログの「スタイル」タブを表示します。

ノート: 「基準」タブからメジャーが削除されても、タイルは引き続き表示されます。タイルの表示は**メジャー未定義**になります。

「ラベル」領域

- ***名前***: デフォルトでは、メジャー名がタイルに表示されます。
  - メジャー名(使用可能な場合)をラベルに自動的に関連付けるには、**メジャー名の使用**チェック・ボックスを選択します。
  - **タイルの書式設定**ボタンをクリックして、メジャーのラベル名の書式を編集します。このボタンを使用して、「列のプロパティ」ダイアログの「スタイル」タブを表示します。ラベル名が長すぎる場合は、省略記号を使用して切り捨てられます(「パフォーマンス...」など)。

- *説明*:
  - 列の説明(使用可能な場合)をラベルに自動的に関連付けるには、**メジャーの説明の使用**チェック・ボックスを選択します。
  - タイルの説明を入力するには、ラベルの**「説明」**テキスト・ボックスをクリックします。テキストの行数は、タイルのサイズによって異なります。たとえば、小さいタイルには1行しか収まらないのに対して、大きいタイルには3行収まることがあります。タイルが非常に小さい場合、テキストを入力する余地がないこともあります。説明にすべてのテキストが収まらない場合は、省略記号を使用して切り捨てられます(「四半期の売上予測...」など)。
  - **タイルの書式設定**ボタンをクリックすると、ラベル名のラベルの説明の書式を編集できます。このボタンを使用して、「列のプロパティ」ダイアログの「スタイル」タブを表示します。

ノート: パフォーマンス・タイル・ビューには**「除外」**ドロップ・ターゲットが含まれていません。

「ラベル」領域では、プレゼンテーション変数はサポートされていません。

ツリーマップに対するドロップ・ターゲットのガイドライン

ツリーマップでは、データを(タイルとも呼ばれる)四角形にグループ化し、それから1つのメジャーのサイズおよび2番目のメジャーの色に基づいてタイルを表示することで、階層型データを編成します。

ツリーマップの「レイアウト」ペインは、**「プロンプト」**、**「セクション」**、**「グループ化基準」**、**サイズ基準**、**「色の基準」**および**「除外」**の6つのドロップ・ターゲット領域で構成されています。

ツリーマップ(制約のある階層型データ)をビジュアル化するには、「レイアウト」ペイン領域を使用します。大量のデータのトレンドと異常を確認し、個別の値を調査できます。

ツリーマップ・ビューでこれらのドロップ・ターゲットを操作する際には、次のガイドラインが適用されます。

- **プロンプト** — ツリーマップのフィルタに使用する属性列または階層列(不規則な階層とレベル・スキップ階層を除く)を選択します。「グループ化基準」領域、「セクション」領域または「サブジェクト領域」ペインから「プロンプト」領域に1つ以上の列をドラッグ・アンド・ドロップできます。
- **セクション** — ツリーマップの区分に使用する属性列または階層列(不規則な階層とレベル・スキップ階層を除く)を選択します。たとえば、年でグループ化された地域を、収益でサイズ設定し、1年前の収益で色付けするツリーマップを表示するコンテナにできます。「グループ化基準」領域、「プロンプト」領域または「サブジェクト領域」ペインから「セクション」領域に1つ以上の列をドラッグ・アンド・ドロップできます。
- **グループ化基準** — 集計値のコンテナを生成または記述するためにスライスされた階層データの最上位レベルを表します。集計値はタイルとして表示されます。
  - グループ領域では、「サイズの基準」および「色の基準」領域で指定されたメジャー列のヘッダーまたはグループが作成されます。ツリーマップに複数のデータ列が表示される場合、グループ化用にタイトル・バーが表示されます。たとえば、年でグループ化された地域を、収益でサイズ設定し、1年前の収益で色付けするツリーマップを表示するコンテナにできます。地域がタイトル・バーに表示されます。

  - 「基準」タブで定義されているすべての属性列と階層列は、最初は「基準」タブに追加された順序で「グループ化基準」領域に表示されます。レベル・スキップ階層は、ツリー・マップの「グループ化基準」エリアではサポートされていません。
  - 「サブジェクト領域」ペインから「グループ化基準」ドロップ・ターゲットに1つ以上の列をドラッグできます。
  - 分析結果を表示した後に属性列または階層列をツリーマップ・ビューに追加する際に、「分析プロパティ」ダイアログの「データ」タブの**基準タブに追加された列**プロパティの表示について**既存のビューと新しいビューに表示**オプションが選択されている場合、新しい列は下位列として「グループ化基準」ドロップ・ターゲットに追加されます。

- **サイズ基準** — 親内でのタイルの分布を表します。子のサイズは、親のサイズと常に等しくなります。
  - 四角形の各領域は、適用されたフィルタ(プロンプト、地域によるフィルタ処理など)に基づく関連メジャーの集計値です。
  - 「基準」タブに追加された最初のメジャーがサイズ基準メジャーとして表示されます。
  - **サイズ基準**リストからメジャーを選択できます。このリストには、最初は「基準」タブの分析に追加されたすべてのメジャーが含まれています。
  - 「サブジェクト領域」ペインからサイズ基準ドロップ・ターゲットにメジャー列をドラッグ・アンド・ドロップできます。現在のサイズ基準メジャーが新しいメジャーで置換され、新しいメジャーを反映するようにツリーマップが再描画されます。新しいメジャー列は、選択用に「色の基準」リストにも配置されます。
  - 分析結果を表示した後、メジャー列をダブルクリックしてツリーマップ・ビューに追加すると、新しいメジャーはサイズ基準および「色の基準」リストの両方に配置され、選択できるようになります。
  - 「基準」タブのサイズ基準メジャー列を削除すると、次のエラー・メッセージが表示されます:「メジャーの数が不足しています。このビューには、サイズの基準メジャーが必要です。」

- **色の基準** — 同じレベルにあるすべてのタイルでの値の分布を表し、分析にツリーマップに対する「質的な」パースペクティブを提供する付加的なスコープを追加します。
  - 「基準」タブに追加された2番目のメジャーが「色の基準」メジャーとして表示されます。
  - **「色の基準」**リストからメジャーを選択できます。このリストには、最初は「基準」タブの分析に追加されたすべてのメジャーが含まれています。
  - 「サブジェクト領域」ペインから「色の基準」ドロップ・ターゲットにメジャー列をドラッグ・アンド・ドロップできます。現在の「色の基準」メジャーが新しいメジャーで置換され、新しいメジャーを反映するようにツリーマップが再描画されます。新しいメジャー列は、選択用にサイズ基準リストにも配置されます。
  - 「基準」タブの「色の基準」メジャー列を削除すると、サイズ基準メジャーが新しい「色の基準」メジャーとして表示されます。

    「色の基準」ドロップ・ターゲットは、次の2つのオプションに分かれています。

    * **スタイル** — ツリーマップのスタイルを選択します。「スタイル」には、「百分位数によるビン化」と「連続的な色の塗りつぶし」の 2 つのオプションが含まれています。オプションとして「百分位数によるビン化」を選択すると、ビンの数を入力し、カラー・パレットを選択して、ビンのカスタム・ラベルを入力できます。「連続的な色の塗りつぶし」を選択した場合、ツリーマップ・タイルはグラデーション色スキームとして表示されます。

    * **色** — ツリーマップのカラー・パレットを選択します。色ドロップダウン・リストに表示される色の順序を逆にするには、色リストの右側にある矢印をクリックします。

- **除外** — ツリーマップ・ビューに関与しない列が含まれます。

ヒート・マトリックスにおけるドロップ・ターゲットのガイドライン

データ・ビューには、ビューのタイプに応じて 1 つ以上のドロップ・ターゲットを含めることができます。

ヒート・マトリックスの「≪レイアウト | Layout | Bifndn≫」ペインは、**「≪プロンプト | Prompts | Bifndn≫」**、**「≪セクション | Sections | Bifndn≫」**、**「≪行 | Rows | Bifndn≫」**、**「≪列 | Columns | Bifndn≫」**、**「≪色の基準 | Color By | Bifndn≫」**および**「≪除外 | Excluded | Bifndn≫」**の 6 つのドロップ・ターゲット領域で構成されています。

ヒート・マトリックスをビジュアル化するには、「≪レイアウト | Layout | Bifndn≫」ペイン領域を使用します。大量のデータの異常を確認し、個別の値を調査できます。

ヒート・マトリックス・ビューでこれらのドロップ・ターゲットを操作する際には、次のガイドラインが適用されます。

- **プロンプト** - ヒート・マトリックスのフィルタに使用する属性列または階層列を選択します。「プロンプト」領域は最初は空です。「セクション」領域、「行」領域、「列」領域または「サブジェクト領域」ペインから、「プロンプト」領域に 1 つ以上の列をドラッグ・アンド・ドロップできます。

- **セクション** - ヒート・マトリックスのセクション化に使用する属性列または階層列を選択します。「セクション」領域は最初は空です。「プロンプト」領域、「行」領域、「列」領域または「サブジェクト領域」ペインから、「セクション」領域に 1 つ以上の列をドラッグ・アンド・ドロップできます。

- **行** - 行位置に表示される列を表します。

  – 「基準」タブで定義されているすべての属性列と階層列は、最初は「基準」タブに追加された順序で「行」領域に表示されます。

  – 属性列また階層列を「サブジェクト領域」ペインから「行」ドロップ・ターゲットにドラッグするか、または属性列また階層列をダブルクリックする方法で、1 つ以上の属性列また階層列を「行」ドロップ・ターゲットに追加できます。1 つ以上の属性列または階層列を「列」領域、「プロンプト」領域または「セクション」領域からドラッグ・アンド・ドロップすることもできます。

  – 分析の結果を表示した後に、属性列または階層列をヒート・マトリックス・ビューに追加した場合、新しい列が下位列として「≪行 | Rows | Bifndn≫」ドロップ・ターゲットに追加されます。

- **列** - 列位置に表示される列を表します。

  – 「列」ドロップ・ターゲットは最初は空の状態です。

  - 1 つ以上の属性列または階層列を「サブジェクト領域」ペインから「列」ドロップ・ターゲットにドラッグできます。1 つ以上の属性列または階層列を「行」領域、「プロンプト」領域または「セクション」領域からドラッグ・アンド・ドロップすることもできます。

- **色の基準** - グループ化および行と列の交差のメジャー値を表します。
  - 「基準」タブに追加された最初のメジャーが「色の基準」メジャーとして表示されます。
  - **「色の基準」**リストからメジャーを選択できます。このリストには、最初は「基準」タブの分析に追加されたすべてのメジャーが含まれています。
  - 「サブジェクト領域」ペインから「色の基準」ドロップ・ターゲットにメジャー列をドラッグ・アンド・ドロップできます。現在の「色の基準」メジャーが新しいメジャーで置換され、新しいメジャーを反映するようにヒート・マトリックスが再描画されます。

    ノート: 分析の結果を表示した後に、メジャー列をヒート・マトリックス・ビューに追加した場合、ビジュアライゼーションおよび「色の基準」ドロップ・ターゲット内の既存の列が新しい列で置き換えられます。

  - 「基準」タブの「色の基準」メジャー列を削除すると、「色の基準」リストからも削除されます。「色の基準」リストの新しいメジャー値は、分析に最後に追加されたメジャー値にデフォルト設定されます。

    「色の基準」ドロップ・ターゲットは、次の 2 つのオプションに分かれています。

    * **スタイル** - ヒート・マトリックスのスタイルを選択します。「スタイル」には、**「百分位数によるビン化」**と**「連続的な色の塗りつぶし」**の 2 つのオプションが含まれています。オプションとして「百分位数によるビン化」を選択すると、ビンの数を入力し、カラー・パレットを選択して、ビンのカスタム・ラベルを入力できます。「連続的な色の塗りつぶし」を選択した場合、ヒート・マトリックス・タイルはグラデーション色スキームとして表示されます。
    * **色** - ヒート・マトリックスのカラー・パレットを選択します。

- **除外** - ヒート・マトリックス・ビューに関与しない列が含まれます。追加情報は、ドロップ・ターゲットの理解を参照してください。

ビューでの列の追加と再配置

ビューで列をいくつかの方法で追加および再配置できます。

ビュー・エディタおよび「レイアウト」ペインを使用して、次の方法で列の順序を変更できます。

- ハンドルとドロップ・ターゲットを使用して、エディタ内の希望の位置に表およびピボット表の列をドラッグ・アンド・ドロップします。たとえば、ピボット表の「行」セクションに 2 つの列がある場合、最初の列を 2 番目の列の後にドラッグ・アンド・ドロップすることで、列の順序を逆にします。表では、列をドラッグ・アンド・ドロップできますが、ピボット表のように列を積み上げることはできません。

  複合レイアウトでも、この方法で列をドラッグ・アンド・ドロップできます。

ノート: 「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブの**「列の移動」**を選択解除した場合、実行時にビューの列を移動することはできません。

- 「レイアウト」ペインで列をドラッグ・アンド・ドロップします。ターゲットが強調表示されている場合、ターゲットはアクティブで、ドロップ可能です。「レイアウト」ペインで列にマウス・ポインタを合せると、列をつかんでドロップ・ターゲットに移動できる場合、カーソルの状態がポインタから移動カーソルに変わります。たとえば、ピボット表の列を「行」ドロップ・ターゲットから「セクション」ドロップ・ターゲットに移動し、列の値ごとに一意のピボット表を作成できます。トレリスに対するドロップ・ターゲットのガイドライン、ツリーマップに対するドロップ・ターゲットのガイドラインおよびヒート・マトリックスにおけるドロップ・ターゲットのガイドラインを参照してください。
- グラフまたはゲージに列を追加します。これを行うには、ビュー・エディタの適切な場所または「レイアウト」ペインのドロップ・ターゲットに、「サブジェクト領域」タブから列をドラッグします。
- 「レイアウト」ペインで列を削除します。たとえば、**「詳細オプション」**ボタンから、**「列の削除」**を選択して、列を削除できます。列の削除は列の除外とは異なります。ドロップ・ターゲットの理解を参照してください。

このリストは、ドラッグ・アンド・ドロップが使用できる場所のサマリーの一部にすぎません。「サブジェクト領域」ペインおよび「カタログ」ペインが表示されている場所では、列とカタログ・オブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップできます。ダッシュボードでビューのアイテムをドラッグ・アンド・ドロップすることもできます。「除外」ドロップ・ターゲットの列を参照してください。

ビュー本体とドロップ・ターゲットのプロパティの設定

ドロップ・ターゲットやビュー本体の書式設定プロパティを設定できます。

「レイアウト」ペインで**「プロパティ」**ボタンをクリックし、ビュー本体(ピボット表など)またはドロップ・ターゲット(セクションなど)のプロパティを指定するダイアログを表示します。たとえば、見出しを表示するかどうか、背景色を設定するかどうか、また改ページを挿入するかどうかを指定できます。

1. ビュー・エディタで、「レイアウト」ペインを表示し、ビュー本体(表およびピボット表)またはドロップ・ターゲットの名前の横にある**「プロパティ」**ボタンをクリックします。
2. 「プロパティ」ダイアログで適切なフィールドに入力し、**「OK」**をクリックします。

   - **改ページの挿入** - セクションの前に改ページを作成するかどうかを指定し、セクションのドロップ・ターゲットの値が変わるたびに、その列の新しいセクションが新規ページに表示されるようにします。改ページは、分析を PDF にエクスポートする際に表示されます。これは、データ駆動の詳細分析に役立ちます。

     次の中から選択できます。

     - **ページ区切りなし** - ページは区切られません。
     - **最下層列** — 最下層列で区切られます(各セクションの間に改ページが挿入されます)。
     - **最も外側の列** - 最上層列で区切られます(最も外側の列のセクション・ラベルが変わると改ページが挿入されます)。

       最上層列の値が変わると、下層列の値も変わったとみなされます。そのため、最下層列での改ページを設定すると、各セクション間に手動改ページが挿入されます。

  - **フォルダ.列** - Markets.Region や Products.Brand など。指定された列のセクション・ラベルが変わると改ページが挿入されます。このオプションは、「セクション」ドロップ・ターゲットに列が含まれる場合のみ使用できます。

- **空白行を表示** - セクションにデータがない行を表示するかどうかを指定します。行が空のテキスト文字列で値が含まれない場合でもすべての行を表示するには、このオプションを選択します。結果が表示されていない行を非表示にするには、このオプションの選択を解除します。

  このオプションは、空のアドレス行を非表示にする場合などに便利です。

- **セクション・スライダ値の最大数** — グラフの場合は、セクション・スライダ・バーに表示する値の最大数(システムの最大数を超えない範囲)を指定します。システムの最大数は管理者によって構成されます。システムの最大数を超える値を入力した場合、その値は無視されます。

表およびピボット表への合計の追加

「レイアウト」ペインで、表およびピボット表に列の合計を追加できます。

合計は、ビュー内の様々な位置に配置できます。様々なエッジに表示される列の合計を追加できます。各メジャーの集計ルールが合計に使用されます。メジャー列のデフォルト集計ルールは、Oracle BI リポジトリで指定されているか、分析の元々の作成者によって指定されています。

ピボット表の「行」または「列」ドロップ・ターゲットに合計を指定すると、「メジャー」ドロップ・ターゲットに指定された列の結果が合計として表示されます。合計値は、ピボット表の「列」または「行」エッジではなく、ピボット表の中心のデータに表示されます。

1. ビューの「レイアウト」ペインを表示します。
2. ビュー全体に合計を追加するには:
   - 表の場合、「列とメジャー」ドロップ・ターゲットで**「合計」**ボタンをクリックし、**「前」**などの位置をクリックします。
   - ピボット表の場合、「行」または「列」ドロップ・ターゲットで**「合計」**ボタンをクリックし、**「後」**などの位置をクリックします。
3. ドロップ・ターゲット内のすべての値に適用される合計の有効/無効を切り替えるには、「セクション」などのドロップ・ターゲット名の横にある**「合計」**ボタンをクリックします。その後、データ項目の**「前」**などの合計の位置を選択します。合計領域がビューに追加されます。
4. 表およびピボット表の合計の見出しに挿入するカスタム・テキストを指定するには、**「キャプション」**ボックスにテキストを入力します。
   - @ - データの値が表示されます。「Region」列に対して合計が指定されており、合計の見出しの**「キャプション」**ボックスに次のテキストを入力するとします: `- All values in the @`。西部地域の合計の見出しには、次のテキストが表示されます: `- All values in the Western Region`
   - "@" - @記号が表示されます。
   - "\" - 二重引用符が表示されます。二重引用符の構文は、単一の文字以外にも使用できます。一般的に、バックスラッシュでエスケープする文字列を二重引用符の内側に使用できます。たとえば、`"1234567890\\abc\\d\"x\"yz!@#$%^&*()-+=_{}[];:'|?/><,.` ~"は `1234567890\abc\d"x"yz!@#$%^&*()-+=_{}[];:'|?/><,.` ~のように表示されます。

- "\\" - \ 記号が表示されます。
- \ - \記号が表示されます。

ピボット表でのメジャー列の累計と相対値の表示

累計および相対値により、最新のデータおよび比較データを表示できます。

「レイアウト」ペインを使用して、ピボット表にメジャー列の合計や相対値を表示できます。

ピボット表でのメジャー列の累計の表示

ピボット表で数値メジャーを累計で表示すると、メジャーの連続する各列は、そのメジャーのそれより前のすべてのセルの合計を表示します。

数値メジャーの表示は表示機能のみであり、実際のピボット表結果に影響はありません。

通常、累計は、複製された属性列または、データを列のパーセンテージで表示するオプションが選択されているメジャー列に対して表示され、最後の値が 100 パーセントになります。累計はすべての合計に適用されます。各詳細レベルの累計は別々に計算されます。

累計オプションが選択されている場合、列見出しは影響を受けません。累計オプションが有効であることを示す必要がある場合、列見出しを書式設定できます。

次の使用上のルールが累計に適用されます。

- 累計は、SQL RSUM 関数と非互換です(結果は、累計の累計になります)。
- すべての累計は、新規セクションごとにリセットされます。累計は、セクション内の区切りでリセットされることはなく、セクションをまたがって続くこともありません。
- メジャーが 1 つの列または 1 つの行に表示されない場合、メジャーは、左から右、上から下の順に合計されます。(右下のセルに合計が含まれます。)累計は、行ごとまたは列ごとにリセットされません。
- 「レイアウト」ペインで移動最小、最大、平均は指定できません。管理者がメタデータ・リポジトリにこれらの式を作成してある場合、これらを含めることができます。
- メジャー・ラベルを配置する場所によって、累計の方向が決定されます。たとえば、メジャー・ラベルを行エッジに配置すると、合計が横方向に実行されます。

  メジャー・ラベルを行のエッジに配置して合計を横方向に実行する場合は、値がすべての列に存在すると、合計が正しく計算されます。しかしながら、いくつかの値が不足している(疎データ)場合に合計を横方向に実行すると、合計は正しく計算されません。
- ピボット表の「レイアウト」ペインの「メジャー」領域で、合計する行または列の**「詳細オプション」**ボタンをクリックし、**「累計として表示」**を選択します。

ピボット表でのメジャー列の相対値の表示

ピボット表で、格納済または計算済のメジャーをパーセントまたは指数に動的に変換できます。

ピボット表に項目の合計に対する相対値が表示されるため、明示的に計算項目を作成する必要はありません。0.00 から 100.00 までのパーセンテージ、または 0 から 1 までの指数でメジャーを表示できます。

たとえば、ピボット表を使用して製品別の売上を調べる場合、売上メジャーを複製し、合計に対するパーセンテージで表示できます。これによって、各製品の実際の売上と、売上に占めるパーセンテージを表示できます。

1. ピボット表の「レイアウト」ペインで、相対値で表示する項目の**「詳細オプション」**ボタンをクリックします。
2. (オプション)メジャー列を複製するには、**「レイヤーの複製」**を選択します。

   ピボット表でメジャー列を複製すると、メジャーの合計と、その相対値の両方を表示できます。これによって、ピボット表に合計と相対値を表示するために、「基準」タブで列を 2 回追加する必要がなくなります。

   メジャーがピボット表に表示されます。
3. **「詳細オプション」**ボタンをクリックして**「データを次として表示」**を選択し、**「パーセント」**または**「索引」**を選択して、適切なオプションを選択します。

   「データを次として表示」オプションは、格納済または計算済のメジャーである項目のみに使用できます。
4. 新しい列の名前を変更するには、**「詳細オプション」**ボタンをクリックして、**「見出しの書式設定」**を選択し、「書式の編集」ダイアログで**「キャプション」**フィールドに値を入力します。

グラフ、ゲージおよびファンネルのセクション・スライダの定義

セクション・スライダは、1 つ以上の属性列または階層列のメンバーを長方形の棒上の値として表示し、値を選択するメカニズムを提供します。

セクション・スライダを使用して、グラフ、ゲージまたはファンネルに表示されるデータを限定します。

次の図では、セクション・スライダの例を示します。ここでは、Product Type 列のメンバーが表示されます。たとえば、このスライダを使用して、グラフ、ゲージまたはファンネルに表示されるデータを、Cell Phones などの特定の製品タイプに限定できます。

セクション・スライダは、次のコンポーネントで構成されます。

- **スライダ・バー** - 1 つ以上の属性列または階層列のメンバーを、長方形の棒上の値として表示します。

  管理者は、スライダ・バーに表示できる値の最大数を構成します。ただし、「セクションのプロパティ」ダイアログで**「セクション・スライダ値の最大数」**フィールドを設定することで、最大値をシステムの最大値より小さい値に設定できます。
- **スライダのつまみ** - セクション・スライダの現在の値を示します。図中のつまみは、現在の値が「Cell Phones」であることを示しています。任意の値につまみをドラッグできます。
- **減少ボタン** - 現在の値の左の値にスライダのつまみを移動します。たとえば、この図では、**「減少」**ボタン(スライダの左から 2 番目のボタン)をクリックすると、スライダのつまみが値「Camera」に移動します。
- **増加ボタン** - 現在の値の右にスライダのつまみを移動します。たとえば、この図では、**「増加」**ボタン(スライダの一番右のボタン)をクリックすると、スライダのつまみが値「Fixed」に移動します。

- **再生ボタン** - スライダの値全体をつまみが続けて移動します。たとえば、この図では、**再生**ボタン(スライダの一番左のボタン)をクリックすると、スライダのつまみが値「Fixed」、「Install」と続けて移動します。クリック後、**再生**ボタンは**「一時停止」**ボタンに変わり、特定の値で停止できます。

スライダ値の間でつまみを移動すると、軸の最小値および最大値はすべてのスライダ・セクション間のデータに基づき、変化しません。この例外はパレート・グラフの場合です。パレート・グラフでは、軸は 0%から 100%まで描画されます。

グラフ、ゲージまたはファンネルにセクション・スライダを定義するには:

1. セクション・スライダを定義するグラフ、ゲージまたはファンネルを含む分析を開きます。
2. 分析エディタの**「結果」**タブをクリックします。
3. グラフ、ゲージまたはファンネル・ビューで**「ビューの編集」**ツールバー・ボタンをクリックします。

   「グラフ」エディタ、「ゲージ」エディタまたは「ファンネル」エディタが表示されます。
4. セクション・スライダに表示する列ごとに、「グラフ」エディタ、「ゲージ」エディタまたは「ファンネル」エディタの「レイアウト」ペインで、「セクション」ドロップ・ターゲットに列をドラッグ・アンド・ドロップします。
5. **「スライダとして表示」**を選択します。
6. エディタを閉じて、「結果」タブのスライダを調べます。
7. **「分析の保存」**ボタンをクリックして変更を保存します。

値の変更とライトバックの実行

ダッシュボード・ページまたは分析のユーザーは、表に表示されているデータを変更する機能を使用できる場合があります。

このようにデータを操作する機能は通常、ライトバックと呼ばれます。ユーザーは、ビュー内の値を更新でき、これが、データ・ソース内のレコードにライトバックされたり、分析の他のビューで使用されます。

たとえば、販売ノルマがライトバック・フィールド、売上高がデータ・ウェアハウスからのフィールド、そしてノルマのパーセンテージが計算フィールド(売上高/販売ノルマ)として定義される分析を作成します。販売ノルマは分析を表示しながら変更可能であり、ノルマのパーセンテージのフィールドは適切に再計算されます。

ログオンしたユーザーがすでに表示しているダッシュボードに、ライトバックを使用して変更されたデータの分析が含まれる場合、ダッシュボードのデータは自動的にはリフレッシュされません。更新されたデータを表示するには、ユーザーが手動でダッシュボードをリフレッシュする必要があります。

リレーショナル・ソースは、分析とダッシュボードにおけるライトバックのための構成で説明しているとおり、「ライト・ライトバック」メソッドに対してサポートされます。アクション・リンクが含まれるダッシュボードから Essbase ソースにデータをライトバックできます。このタイプのライトバックの例は、Oracle BI EE サンプル・アプリケーションを参照してください。

値と様々なタイプのユーザーの変更について

値は、権限に基づいてユーザーが変更できます。

値の変更機能によって、次のタイプのユーザーが影響を受けます。

- リポジトリの管理者は、ライトバックを考慮に入れてリポジトリの列を構成します。
- 管理者はライトバック用に権限を設定してライトバック・テンプレートを用意し、管理者とコンテンツ設計者はダッシュボードおよび分析の表ビューからライトバック用に構成を行います。
- エンド・ユーザーは、表ビューのレコードを変更します。

ライトバックのプロセス

ユーザー機能にライトバックを組み込むには、このプロセスに従う必要があります。

次に、ライトバック・プロセスのステップを示します。

1. コンテンツ設計者は、リポジトリの管理者と協力して組織でのレポートのニーズを評価し、必要なライトバック列とそれを表示する分析のリストを作成します。

   階層列では、ライトバック機能はサポートされませんが、属性列、メジャー列および二重列では、ライトバック機能はサポートされます。二重列では、表示列にライトバックできます。コード列は自動的には解釈されません。

2. リポジトリの管理者は、ライトバックに使用可能である必要がある Oracle BI サーバーおよび列を構成します。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*を参照してください

3. 管理者は、次のタスクを行います。

   a. ライトバックのテンプレートとして使用する SQL コードのファイルを準備します。

   b. ライトバックの設定および使用のための適切な権限を付与します。たとえば、管理者は、ユーザーが値を変更できるビューを設定するための権限を付与します。

   *Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*の分析とダッシュボードにおけるライトバックのための構成を参照してください。

4. コンテンツ設計者は、ライトバックについて 1 つ以上の列を有効にします。列へのライトバック機能の追加を参照してください。

5. コンテンツ設計者は、ライトバックについて表ビューを有効にします。表ビューへのライトバック機能の追加を参照してください。

6. コンテンツ設計者は、ライトバックの使用に関する情報をユーザーに提供します。ダッシュボード・ページまたは分析の表ビューに表示されるデータの変更を参照してください。

7. ユーザーは、必要に応じてビューの値を変更します。

列へのライトバック機能の追加

列に対してライトバック機能を有効にするために、管理者とコンテンツ設計者は「列のプロパティ」ダイアログの「ライトバック」タブを使用します。

適切な権限を設定し、属性列、メジャー列または二重列を、リポジトリで書込み可能として設定する必要があります。列と、管理者が用意したライトバック・テンプレートを必ず関連付けます。その列を含むすべての表ビューで、ライトバック可能として列を表示できます。

1. 「基準」タブで、編集する分析を開きます。

2. ライトバック機能を有効にする列の横の**「オプション」**ボタンをクリックし、**「列のプロパティ」**を選択します。
3. 「列のプロパティ」ダイアログで、**「ライトバック」**タブをクリックします。

   リポジトリで、列に対してライトバックが有効になっている場合、**「ライトバックの有効化」**ボックスが使用可能です。
4. **「ライトバックの有効化」**ボックスをクリックします。

   ライトバックの他のオプションが表示されます。

   - リポジトリでライトバックに対して列が有効化されている。
   - 列のデータ型がメジャー、テキストまたは日時である。

   ユーザーに 10 進値の入力を許可する場合は、注意が必要です。ユーザーが入力する値は、プレゼンテーション・サービスによってそのまま Oracle BI サーバー(ロケールごとにユーザーを処理できるように構成されていることが必要)に送信されます。たとえば、Oracle BI サーバーは、ピリオドまたはカンマのどちらかを小数点記号として含む 10 進値を適切に処理できるように、各ユーザーのロケールを認識する必要があります。
5. **「テキスト・フィールドの幅」**ボックスで、列の幅を指定します。
6. **「OK」**をクリックして「列のプロパティ」ダイアログを閉じます。

表ビューへのライトバック機能の追加

表ビューに対してライトバック機能を有効にするには、「表のプロパティ」ダイアログの「ライトバック」タブを使用します。

ライトバックによって、データをインタフェースに入力してデータベースを上書きできるようになります。

1. 「分析」エディタで、編集する表ビューを開きます。
2. **「プロパティの表示」**ボタンをクリックします。
3. 「表のプロパティ」ダイアログで、**「ライトバック」**タブをクリックします。
4. **「ライトバックの有効化」**ボックスが選択されていることを確認します。
5. **「テンプレート名」**ボックスを選択し、値のライトバックに使用するテンプレートの名前を入力します。

   テンプレート名が適切かどうかを管理者に確認します。
6. **「OK」**をクリックします。

ビューでのライトバックのモードについて

ライトバックが有効になっている場合は、ユーザーは複数のモードで作業できます。

ビューでライトバックを有効にし、システム・デフォルトを受け入れた場合、ユーザーが値を操作できるモードは 2 つあります。

- 表示モード: このモードでは、ユーザーは値を表示します。**「更新」**ボタンをクリックして編集モードに入るまで、ユーザーは値を変更できません。

  ログオンしたユーザーがすでに表示しているダッシュボードに、ライトバックを使用して変更されたデータの分析が含まれる場合、ダッシュボードのデータは自

動的にはリフレッシュされません。更新されたデータを表示するには、手動でダッシュボードをリフレッシュします。

- 編集モード: このモードでは、ユーザーは値を変更します。編集モードに入るには、ユーザーは、ビューで**「更新」**ボタン(使用可能な場合)をクリックします。編集モードでは、ユーザーは列にデータを入力し、次のボタンをクリックできます。
  - **元に戻す:** ユーザーがまだデータ・ソースにライトバックしていない変更を元の値に戻します。ユーザーは編集モードのままです。
  - **適用:** ユーザーが行った変更をデータ・ソースにライトバックし、ビューをリフレッシュして、これらの変更に基づいた最新のデータを表示します。ユーザーは編集モードのままです。
  - **完了:** ユーザーが行った変更をデータ・ソースにライトバックし、ビューをリフレッシュして、これらの変更に基づいた最新のデータを表示してから、ユーザーを表示モードに戻します。

これらのボタンのラベルは、ビューの「プロパティ」ダイアログの「ライトバック」タブでオプションを使用して変更できます。**「表モードの切替え」**ボックスを使用して、ユーザーが表示モードと編集モードを切り替えられないようにすることもできます。かわりに、常に編集モードのままになります。切替えが無効な場合、**「更新」**ボタンはビューに表示されません。

ビューでの相互作用

ユーザーのビューでの相互作用を構成できます。

ユーザーが次の操作を実行したときに使用できる相互作用を指定できます。

- データ・ビューでクリックします。
- グラフ、ヒート・マトリックス、ピボット表、ツリーマップ、表またはトレリス・ビューを実行時に右クリックします。

ビューでのクリックの相互作用

ユーザーがデータ・ビュー内をクリック(つまり左クリック)したときに使用できる相互作用を指定できます。

次のタイプの相互作用を使用できます。

- **なし** - ユーザーが列見出しまたは値をクリックしたときに、何も起こらないことを指定します。このオプションによって、属性列のドリルが無効になりますが、階層列のドリルは無効になりません。
- **ドリル** - ユーザーは詳細情報にドリルダウンできます。ビューでのドリルを参照してください。
- **アクション・リンク** - ユーザーは、データ・ビュー内のホット・スポットをクリックし、保存済分析へのナビゲートや Enterprise Java Bean (EJB)の起動などのアクションを実行するアクション・リンクを選択できます。アクションの操作を参照してください。
- **マスター詳細イベントの送信** - マスター詳細関係のマスター詳細イベントを送信します。ビューのマスター詳細リンクとはおよびマスター詳細関係でのビューのリンクを参照してください。

「列のプロパティ」ダイアログの「相互作用」タブを使用して、基準レベルで使用できる左クリック相互作用を指定します。これらの左クリック相互作用はすべてのデータ・ビューで有効です。

「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブを使用してビューの実行時の相互作用(ソート、移動など)を指定します。

ビューの右クリック相互作用

実行時にグラフ、ヒート・マトリックス、ピボット表、表、ツリーマップまたはトレリス・ビューで右クリックしたときに使用できる相互作用を指定できます。

たとえば、右クリックで**「ソート」**または**「ドリル」**ができます。各ビュー・タイプに対して一部の右クリック相互作用を実行時に使用できない場合があることに注意してください。

ノート: グラフでの右クリックによる相互作用は、HTML5 グラフにおいてのみサポートされます。

「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブを使用して、分析レベルで使用できる右クリック相互作用を指定します。これらの右クリック相互作用は、実行時にグラフ、ヒート・マトリックス、ピボット表、表、ツリーマップおよびトレリス・ビューで有効になります。

ほとんどの右クリック相互作用は、トレリス・ビュー(単純トレリスと拡張トレリス)のグラフに対して使用できません。ただし、トレリス・ビューのグラフに対して、右クリック相互作用としてアクション・リンクを設定することはできます。さらに、テキストに対する右クリックは可能です。つまり、トレリス・ビューのテキストをピボット表ビューの場合と同じように右クリックできます。これには、「ビジュアライゼーション」を「テキスト」に設定した詳細トレリスのデータ・セルも含まれます。

どのステップおよび制約が適用されているかを追跡するために右クリック相互作用を使用する場合は、選択ステップ・ビューを含めます。データの選択の使用を参照してください。

ビューでのドリル

管理者がサブジェクト領域のドリル用に列を構成した場合は、ゲージ、グラフ、ヒート・マトリックス、マップ、ピボット表、表、ツリーマップおよびトレリスのデータのユーザーによるドリルを許可できます。

ドリルは、ビュー内のデータ間を素早く簡単に移動する方法です。この項では、ドリルに関する次の情報を提供します。

- ドリルできる列
- 列のドリルを許可する方法
- フィルタおよび選択ステップに対するドリルの影響

ドリルできる列

属性列および階層列をドリルできます。

結果のドリルについてを参照してください。

列のドリルを許可する方法

コンテンツ設計者は、ユーザーが、ダッシュボードのビューの特定の列をドリルできるかどうかを指定します。

特定の列をドリルできるかどうかは、「列のプロパティ」ダイアログの「相互作用」タブでオプションを指定して制御します。

プライマリ相互作用では、ドリル、マスター詳細の送信など、列に対して行える内容が制御されます。ドリルが特定の列のプライマリ相互作用として設定されていない場合(つまり、「列のプロパティ」ダイアログの「相互作用」タブの**「列見出し」:「プライマリ相互作用」**または**「値」:「プライマリ相互作用」**ボックスの値として**「ドリル」**が指定されていない場合)は、実行時にグラフ、ヒート・マトリックス、表およびピボット表のビューの右クリック相互作用としてドリルを許可できます。これを行うには、「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブの**「ドリル(プライマリ相互作用でない場合)」**オプションを選択します。

フィルタおよび選択ステップに対するドリルの影響

フィルタおよび選択ステップが適用されている場合のドリルの動作には違いがあります。

列をドリルすると、そのフィルタおよび選択ステップに作用します。分析用データのフィルタリングと選択を参照してください。

- **階層列:** 階層列のメンバーを展開または縮小しても、選択内容にステップは追加されません。つまり、展開と縮小によって、列のデータの選択内容は変更されません。

  たとえば、時間ディメンションの唯一のメンバーとして 2008 を選択したピボット表を作成し、この唯一の時間メンバーがピボット表の列ヘッダーとなるようデータを配置するとします。2008 を展開して四半期を表示し、第 4 四半期を展開して月を表示します。この時点で、ピボット表には、2008、2008 Q1、2008 Q2、2008 Q3、2008 Q4、2008 年 10 月、2008 年 11 月および 2008 年 12 月の子メンバーがあります。しかし、「選択ステップ」ペインを表示すると、時間ディメンションの選択内容には、依然としてメンバー 2008 のみが含まれています。

  階層列の展開および縮小は、その特定のビューのみに作用します。その他のビューには影響しません。

- **属性列:** 行見出しまたは列見出しから、あるいは属性列のメンバーからドリルダウンできます。見出しをドリルすると、ビューに下位レベルが追加されます。メンバーをドリルすると、下位レベルが追加され、フィルタと選択ステップの両方に作用します。

  – メンバーのドリルは現在のメンバーにフィルタを追加し、それによって結果を制限します。たとえば、P1 Product 列を含む表の Game Station メンバーをドリルした場合、E1 Sales Rep Name 列が追加され、これによって P1 Product が Game Station と等しいことを指定するフィルタが追加されます。

  – メンバーのドリルによって分析に下位レベルの列が追加され、設計時のステップの更新を提供せずに、「選択ステップ」ペインの列が更新されます。

ビューでのデータのソート

ビュー内のデータのソート方法を変更できます。

分析を作成する場合、ファンネル、ゲージ、グラフ、ヒート・マトリックス、ピボット表、表およびトレリスに表示された結果についてソートを指定できます。

共通のソート機能

ソート機能の一部は、グラフ、ヒート・マトリックス、ピボット表、表およびトレリスに共通しています。

グラフ、ヒート・マトリックス、ピボット表、表およびトレリスには、属性列および階層列について「≪基準 | Criteria | Bifndn≫」タブの「≪選択された列 | Selected Columns | Bifndn≫」ペインで指定したソートが反映されます。列に対して**「≪オプション | Options | Bifndn≫」**ボタンから使用できる「≪ソート | Sorting | Eids

≫」メニュー・オプションを使用します。これらのソート・オプションでは、単一列または複数列を基準として、それぞれ昇順または降順でソートできます。複数列のソートを作成することで、データの第 2 および第 3 レベルのソートなど、複数レベルのソートを指定できます。これらのソート・レベルは、「≪基準 | Criteria | Bifndn≫」タブの列に対して数値およびソート・アイコンで示されます。

「基準」タブで指定したオプションは、分析の初期ソート状態として機能します。後で分析を使用する際、ソートを変更できます。

階層列の項目をソートする場合、常に親の内部でソートします。つまり、子は、親の外部でソートされません。子は、親の下に適切なソート順で表示され、親は子と一緒にソートされません。

ビューに合計が含まれる場合、それらの値はソートされません。ソートに関係なく、配置した場所のまま、場所は変わりません。

グループを含む属性列または階層列をソートすると、そのグループは、常にリストの最下部に表示されます。複数のグループがある場合、グループは、対応するステップが「選択ステップ」ペインで指定された順序でリストされます。

ビューでは、様々なオプションを使用してソートできます。たとえば、列をソートする場合は、次のオプションから選択できます。

- **昇順ソート** — 第 1 レベル・ソートとして、列の値を昇順でソートできます。たとえば、文字列のアルファベット順(A から Z へ)のソート、数値の低いものから高いものへのソート、日付の古いものから新しいものへのソートなどです。
- **降順ソート** — 第 1 レベル・ソートとして、列の値を降順でソートできます。
- **昇順ソートの追加** - この列の昇順ソートが分析の別のソートとして追加されます。
- **降順ソートの追加** - この列の降順ソートが分析の別のソートとして追加されます。
- **ソートのクリア** - 指定された列のソート指定を削除します。このオプションの効果は、「選択された列」ペインと他の場所で異なります。「選択された列」ペインとビュー自体の両方でソート指定を行い、「選択された列」ペインに戻って**「ソートのクリア」**をクリックすると、「選択された列」ペインで指定したソートのみが削除されます。ビューで指定したソートは維持されます。
- **すべての列におけるすべてのソートのクリア** — 適用したすべてのソート指定を削除します。このオプションの効果は、「選択された列」ペインと他の場所で異なります。**≪ソートのクリア | Clear Sort | Bifndn≫**を参照してください。

次の方法により、値をソートできます。

- ビューの見出しで右クリックし、**「列のソート」**をクリックして適切なオプションを選択します。
- 「基準」タブの「選択された列」ペインから、列の横の**「オプション」**をクリックし、**「ソート」**をクリックして適切なオプションを選択します。
- 列見出しにある上向きおよび下向きの三角形を使用して、ビューの値をソートすることもできます。

データのソート

ソートによって、最小のデータ値から最大のデータ値へ、または最大から最小へ、ビューの行や列をソートできます。

すべてのソートをクリアすることで、データ・ソースの順序に戻すこともできます。ヒート・マトリックス、ピボット表、表およびトレリスのビューの行エッジおよび列エッジで、英数字のソートを指定できます。

ノート:

ピボット表に直接ソートを適用するときにユーザーのロケールは考慮されません。かわりに、バイナリ・ソートが実行されます。ユーザーのロケールが考慮されるようにするには、「基準」タブでソートを適用します。

次に記載したソートも含め、ソートの仕様は様々な方法で設定できます:

- 「基準」タブの「選択された列」ペインで、列の横の**「オプション」**ボタンをクリックし、メニューから適切なソート・オプションを選択します。
- ヒート・マトリックス、ピボット表、表またはトレリスで右クリックし、**「ソート」**または**「列のソート」**(いずれか使用可能なもの)を選択します。**「ソート」**を選択した場合、「ソート」ダイアログが表示され、ここでソート・オプションを選択します。**「列のソート」**を選択した場合、続けてメニューから適切なソート・オプションを選択します。

  「分析プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブの**「列のソート」**を選択解除した場合、実行時にビューの列をソートすることはできません。
- グラフ・ビューでデータ・マーカー(グラフのタイプによって、棒、折れ線、区分など)、凡例項目、グループレベル(X 軸)項目、「プロンプト」ラベルまたは「セクション」ラベルを右クリックし、**「ソート」**を選択してから、「ソート」ダイアログで適切なソート・オプションを選択します。グラフのソートの例は、右クリック・メニューを使用したグラフのソートを参照してください。

  「グラフのピボット結果」ボタンを使用してピボット表が作成されている場合、右クリック・メニューのオプションはグラフには使用できません。
- ヒート・マトリックス、ピボット表、表またはトレリスのビューの見出しに含まれる列名の右の領域にマウス・ポインタを合せてから、列の上向き三角形(**昇順ソート**)または下向き三角形(**降順ソート**)をクリックします。これらのソート指定は、右クリック・メニューで行ったソート指定をオーバーライドします。

  列見出しまたは行見出しのソート・ボタンが影付きで表示されている場合、その列にはプライマリ・ソートが含まれています。別の最下層の列見出しまたは行見出しにマウスを合せて、該当するソート・ボタンまたはマウスの右ボタンをクリックすると、第 2 または第 3 レベルのソートを追加できます。

ビューで指定したソート・オプションは、「選択された列」ペインでの指定をオーバーライドします。

ソートのクリア

ソート順をクリアして、データのソート方法を変更できます。

ソートのクリアには様々な方法を使用できます:

- 「選択された列」ペインで適用したソートには、**「すべての列におけるすべてのソートのクリア」**をクリックします。「選択された列」ペインで適用したソート指定が削除されます。ビューで指定したソートは維持されます。
- グラフ、ヒート・マトリックス、ピボット表、表またはトレリス・ビューの「プロンプト」ラベルまたは「セクション」ラベルから適用したソートの場合、「プロンプト」ラベルまたは「セクション」ラベルにマウス・ポインタを合せて右クリックして**「ソート」**を選択します。「ソート」ダイアログで、各ソート領域から**「エッジ内のすべてのソートのクリア」**ボタンをクリックしてから、**「OK」**をクリックします。
- ヒート・マトリックス、ピボット表、表またはトレリスで直接適用したソートは、次のようにしてクリアします:

  - 未ソートの列でソート・ボタンをクリックし、現在プライマリ・ソートが適用されている列からプライマリ・ソートを削除し、ボタンをクリックした列に適用します。
  - 右マウス・メニューから**「ビュー内のすべてのソートのクリア」**オプションを選択します。

- ヒート・マトリックス・ビューで適用したソートの場合、外部エッジ、列ラベルまたは行ラベルにマウス・ポインタを合せて右クリックして**「ソート」**を選択します。「ソート」ダイアログで、各ソート領域から**「エッジ内のすべてのソートのクリア」**ボタンをクリックしてから、**「OK」**をクリックします。
- グラフ・ビューで適用したソートの場合、任意のデータ・マーカー、凡例項目、グループレベル(X 軸)ラベルを選択し、右クリックして**「ソート」**を選択します。「ソート」ダイアログで、各ソート領域から**「エッジ内のすべてのソートのクリア」**ボタンをクリックしてから、**「OK」**をクリックします。
- 「基準」タブからソートをクリアする場合は、**「列のオプション」**メニューから定義したソートのみをクリアします。特定のビュー内で実行されるソートはクリアしないでください。
- 現在プライマリ・ソートが適用されている列からプライマリ・ソートを削除して、ボタンをクリックした列にソートを適用するには、未ソートの列でソート・ボタンをクリックします。

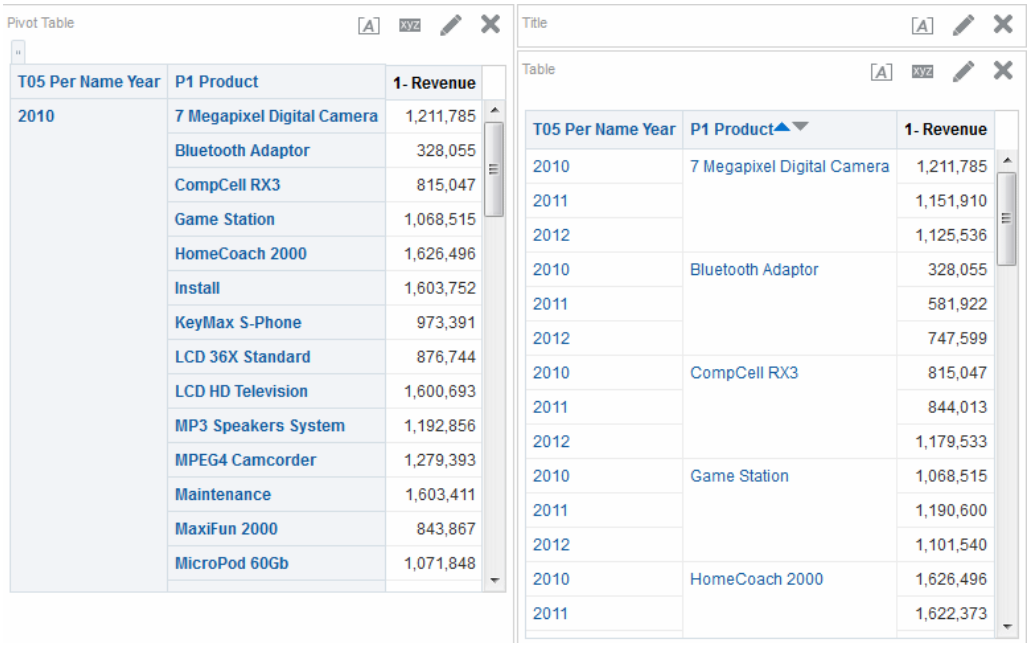
分析で列に適用したソートをクリアするには:

1. 「基準」タブの「選択された列」ペインを表示します。
2. 列の横にある**「オプション」**をクリックします。
3. **「ソート」**を選択し、次に**「ソートのクリア」**を選択します。

表およびピボット表でのソート

表およびピボット表には、その構成に基づくデフォルトのソート順があります。

デフォルトでは、ピボット表の各エッジは常に外側から内側のレイヤーにソートされます。これは、基準列に指定されたソートによって決まる表形式のソートをピボット表に対するデフォルト・ソートとして使用していた以前のリリース(11*g* より前)とは異なります。

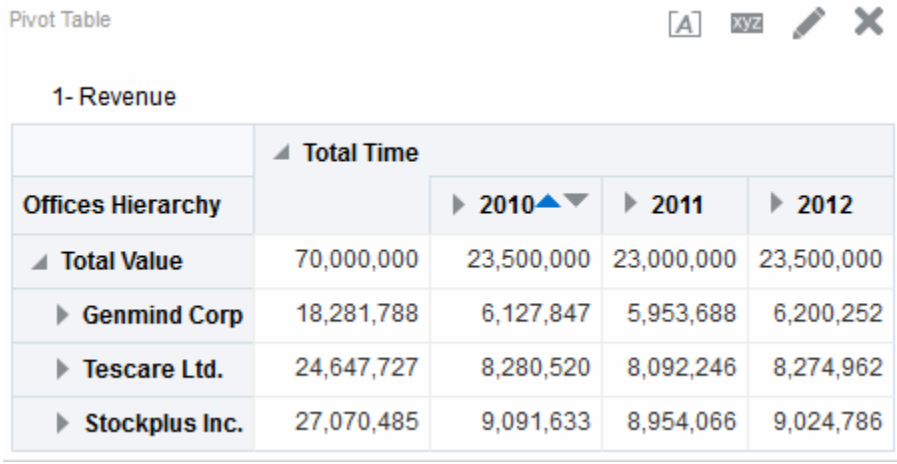


例 1: 各エッジに列が 1 つある場合のソート

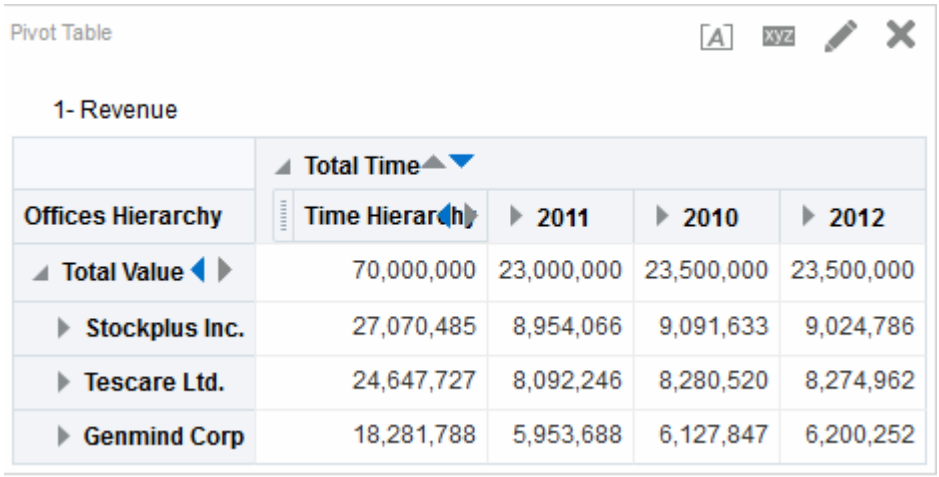
この例では、列でソートされたピボット表を示します。

列エッジに時間階層、行エッジに Offices 階層が配置されたピボット表があるとします。つまり、両方とも階層列です。1 - Revenue (ドル単位)はメジャーで、ピボット表に表示されています。特定の年について、Offices 階層を 1 - Revenue の最高収益から最低収益の順または最低収益から最高収益の順にソートすることも、ソートしないこともできます。

次の図では、Offices 階層を 2010 年の 1 - Revenue で昇順にソートした例を示します。親 Corporate Total は、常に子の上に表示されます。2010 年のみが選択されたため、他の年の値は数値でソートされていない場合があります。



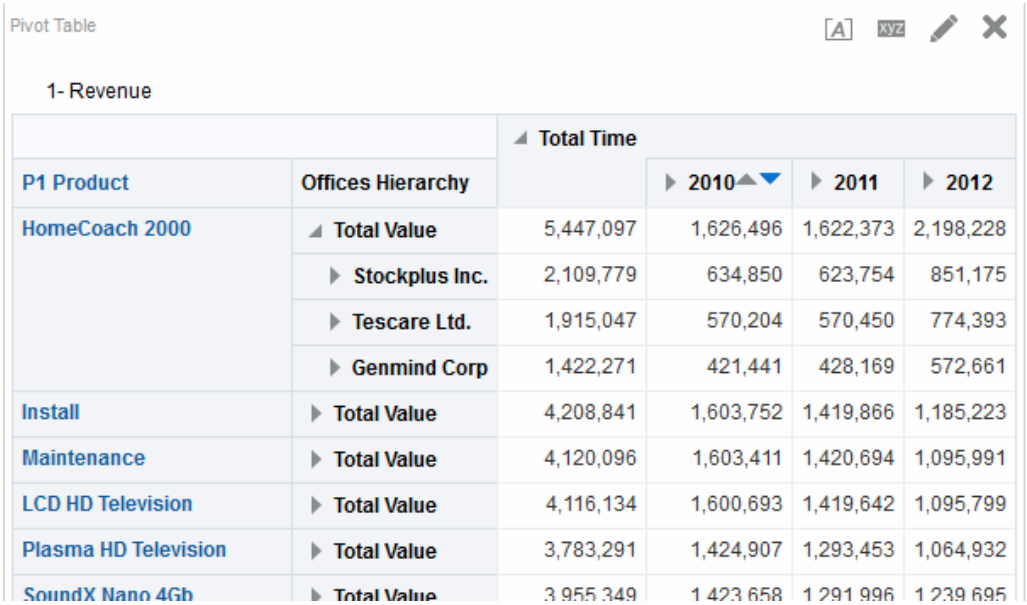
次の図では、Corporate Total の 1 - Revenue で時間階層をソートした例を示します。年が、2011、2010 および 2012 の順に並び替えられています。Corporate Total の値は、2011 年が最も低く、2010 年と 2012 年が最も高いものでした。



例 2: 行エッジに列が 2 つある場合のソート

このピボット表には 2 つの行があり、1 つの行によってのみソートされます。

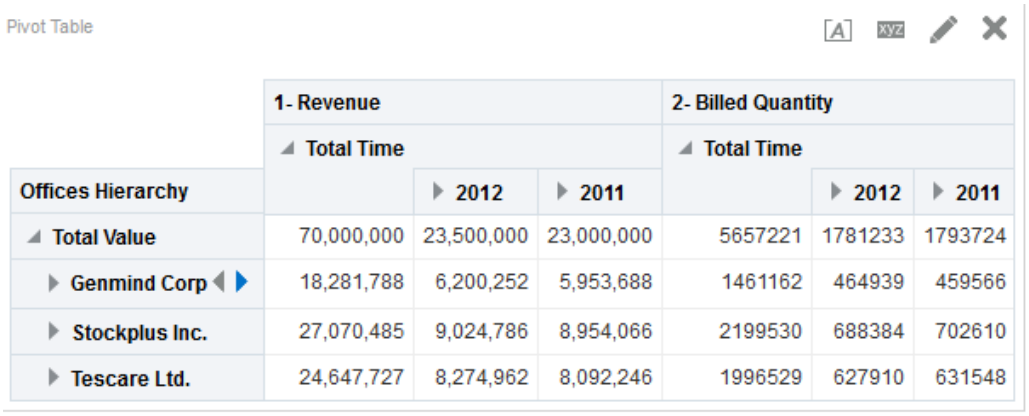
列エッジに時間階層が、行エッジに P1 Products と Offices 階層(Offices の外側に製品)が配置されたピボット表があるとします。1 - Revenue (ドル単位)はメジャーで、ピボット表に表示されています。行エッジは、2010 年の 1 - Revenue で降順にソートできます。Offices は例 1 と同様にソートされていますが、製品は一番外側のレイヤーのためソートされていません。



例 3: 列エッジにメジャーが 2 つある場合のソート

メジャーが 2 つあるピボット表をソートできます。

列エッジに時間階層があり、行エッジに Offices 階層があるピボット表があるとします。図に示すように、1 - Revenue および 2 - Billed Quantity の両方が、ピボット表にメジャーとして表示されています。GenMind Corp のリーフ・ノードで左向き三角形(**昇順ソート**)を使用して年をソートしようとすると、列エッジの(左から右に数えて)1 つ目のメジャーが、ソート対象として選択されます。エッジの 1 つ目のメジャーが 1 - Revenue の場合、ピボット表は図に示すようにソートされます。


Pivot Table

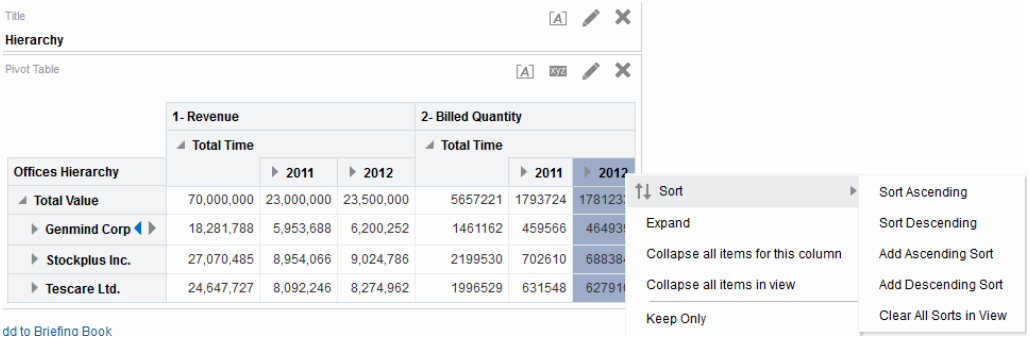
Offices Hierarchy	1- Revenue			2- Billed Quantity		
	Total Time			Total Time		
		2012	2011		2012	2011
Total Value	70,000,000	23,500,000	23,000,000	5657221	1781233	1793724
Genmind Corp	18,281,788	6,200,252	5,953,688	1461162	464939	459566
Stockplus Inc.	27,070,485	9,024,786	8,954,066	2199530	688384	702610
Tescare Ltd.	24,647,727	8,274,962	8,092,246	1996529	627910	631548

Pivot Table

Offices Hierarchy	1- Revenue			2- Billed Quantity		
	Total Time			Total Time		
		2011	2012		2011	2012
Total Value	70,000,000	23,000,000	23,500,000	5657221	1793724	1781233
Genmind Corp	18,281,788	5,953,688	6,200,252	1461162	459566	464939
Stockplus Inc.	27,070,485	8,954,066	9,024,786	2199530	702610	688384
Tescare Ltd.	24,647,727	8,092,246	8,274,962	1996529	631548	627910

メジャーが行エッジにあり、年でソートする場合、最も上にあるメジャーがソートに使用されます。

ピボット表、表またはトレリスでソートの右クリック相互作用を使用してソートする場合は、ソートに使用するメジャーを選択できるオプションが表示されます。詳細は、ソート・オプション・メニューを参照してください。



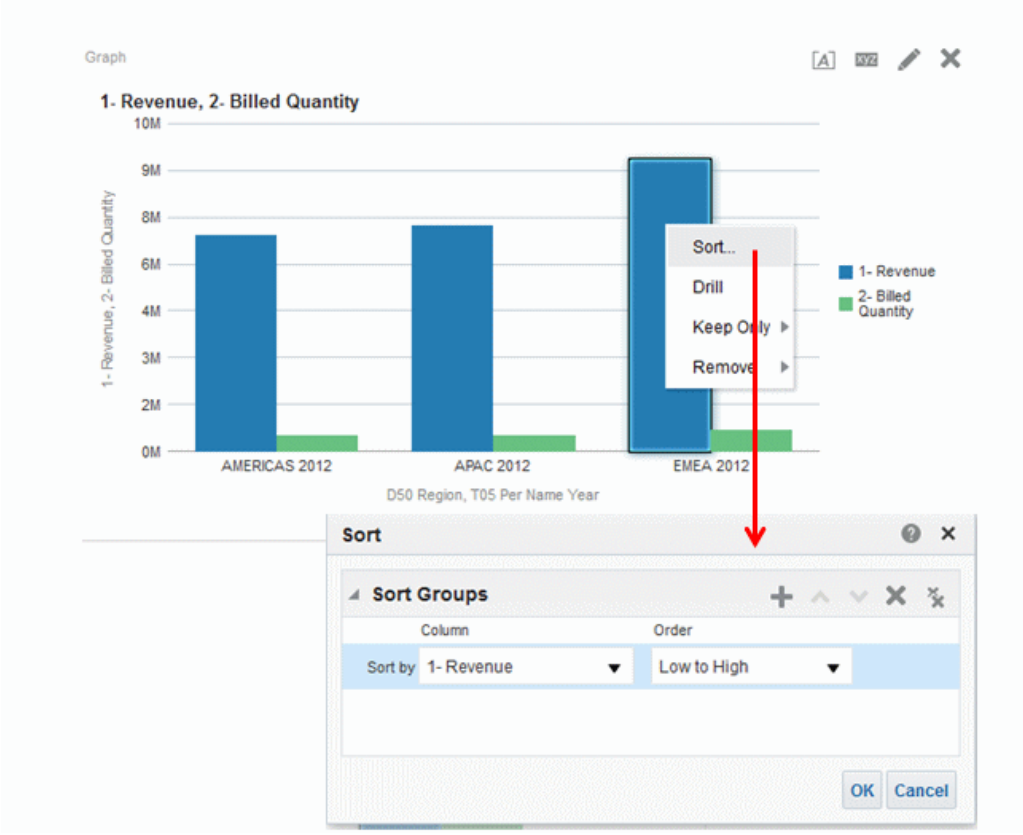
右クリック・メニューを使用したグラフのソート

グラフを右クリックすると様々なソート・オプションを使用できます。

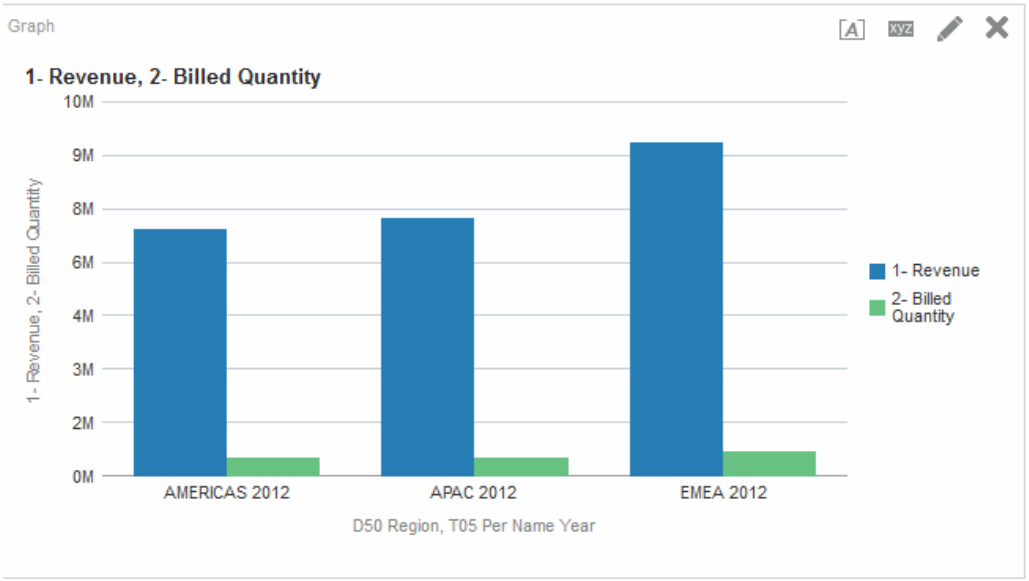
ファンネル、ゲージまたはグラフ・ビューでは、データ・マーカー(グラフのタイプによって、棒、折れ線、区分など)、凡例項目、グループレベル(X 軸)項目、「プロンプト」ラベルまたは「セクション」ラベルを右クリックできます。**「ソート」**を選択し、「ソート」ダイアログで適切なソート・オプションを選択します。

2 つのメジャー(1 - Revenue および 2 - Billed Quantity)を持つ縦棒グラフがあり、これらのメジャーが T05 Per Name Year 別にグループ化されており、D50 Region でプロンプトされているとします。棒グラフを収益で昇順にソートするとします。

次の図に、「ソート」ダイアログの例を示します。ここでは、1 - Revenue が**ソート基準列**として選択されており、**「順序」**に**「低から高」**(昇順)が選択されています。



次の図に、2 つのメジャー(1 - Revenue および 2 - Billed Quantity)を持つ縦棒グラフのソート結果を示します。これらのメジャーは T05 Per Name Year 別にグループ化され、D50 Region でプロンプトされ、1 - Revenue で**「低から高」**の順にソートされています。



表ビュー、ピボット表ビューおよび拡張トレリス・ビューでの行および列のサイズ変更

データを参照する方法としてスクロールを使用するように設定されている表ビュー、ピボット表ビューおよび拡張トレリス・ビューの行エッジおよび列エッジのサイズを変更できます。

プロパティ・ダイアログ(「表のプロパティ」ダイアログの「スタイル」タブ、「ピボット表のプロパティ」ダイアログまたは「トレリスのプロパティ」ダイアログの「一般」タブ)でデータを参照する方法としてスクロールを使用するように、表、ピボット表または拡張トレリスを設定します。

行および列のサイズ変更については次の点に注意してください。

- 永続的ではありません。たとえば、表から一度離れて再度表示すると、サイズ変更の効果は失われます。
- 表、ピボット表または拡張トレリスを PDF にエクスポートする場合は無視されます。

1. 列または行エッジの境界線にマウス・ポインタを合せます。サイズ変更カーソルが表示されます。
2. マウス・ボタンをクリックして押したままの状態にします。点線が表示されます。
3. 目的のサイズになるまで点線をドラッグし、マウス・ボタンを放します。

ビューの保存

使用しているビューはいつでも保存できます。

ビューを保存するには、分析を保存する必要があります。たとえば、ブランド売上分析を作成し、その表ビューを編集した後、最初にそのビューを保存できます。

- 次のようにビューを保存します。
  - 新規分析または既存の分析の場合、「分析」エディタの**「分析の保存」**ボタンをクリックします。
  - 既存の分析を別の名前で保存する場合、「分析」エディタの**「名前を付けて保存」**ボタンをクリックします。

分析を初めて保存する場合、または既存の分析を別の名前で保存する場合、「名前を付けて保存」ダイアログが表示され、分析の保存に関する情報を指定します。

ビューまたは複合レイアウトの名前の変更

ビューまたは複合レイアウトを作成した場合は、エンド・ユーザーにわかりやすい名前にビューまたは複合レイアウトの名前を変更できます。

ビューまたは複合レイアウトの名前を変更するのは簡単です。

1. 名前変更を行う場合:
   - ビューの場合は、ビューのエディタのツールバーで**「ビューの名前変更」**ボタンをクリックします。
   - 複合レイアウトの場合は、分析エディタの「結果」タブのツールバーで**「複合レイアウトの名前変更」**ボタンをクリックします。
2. 「ビューの名前変更」ダイアログで、ビューまたは複合レイアウトの新しい名前を入力します。
3. **「OK」**をクリックします。

ビューの再配置

マウスを使用して、複合レイアウト内でビュー(タイトル、凡例、表、グラフなど)を再配置できます

次のようにビューを再配置できます。

- 別のビューの境界に並べて配置。
- 複合レイアウトの外側の境界へ配置。ビューは、複合レイアウトの縦横いっぱいに表示されます。

たとえば、ブランド売上分析のビューを再配置できます。実績売上の折れ線グラフの前に、予測売上の棒グラフを表示するように再配置できます。

ビューを再配置するには:

1. 再配置するビューの上端の少し内側にカーソルを置きます。
2. ビューで左マウス・ボタンをクリックしたままにします(構成されている場合)。

   ビューが移動可能なオブジェクトとして透明に表示されます。
3. マウスを使用して、希望の位置までビューをドラッグします。

   ビューは、次のように再配置できます。

   - ビューの境界。

     各ビューには 4 つの境界(上、下、左、右)があり、分析の他のビューの境界に沿って再配置できます。ビューをドラッグ・アンド・ドロップして、別のビューの境界に沿って表示できます。
   - 複合レイアウトの外側の境界。

     各複合レイアウトには、正方形または長方形に配置された 1 つ以上のビューが含まれています。複合レイアウトには、4 つの境界(上、下、左、右)があります。複合レイアウトの外側の境界にビューをドラッグ・アンド・ドロップできます。このアクションによって、複合レイアウトの縦横いっぱいにビューが表示されます。

4. マウス・ボタンを放します。

   複合レイアウト内の青の棒で示された位置に、ビューが再配置されます。

5. ビューの再配置をさらに行うには、前述の手順を繰り返します。

ビューの印刷

標準のレイアウト・ファイル形式を使用してビューを印刷できます。

HTML または Adobe PDF(Portable Document Format)を使用してビューを印刷できます。Adobe PDF を使用して印刷するには、Adobe Reader 6.0 以上が必要です。

PDF と、ヘッダーやフッターの追加などの印刷オプション指定することもできます。ビューの印刷およびエクスポート・オプションの変更を参照してください。

> **ノート:** HTML での印刷方法は、ブラウザの印刷処理機能に依存します。希望する結果が得られない場合、PDF を選択して開き、分析を印刷してください。

次を印刷できます。

- ビューのエディタから 1 つのビュー
- 複合レイアウトに表示されているビューの組合せ

1. 次のように印刷します。
   - 1 つのビューの場合、ビューのエディタのツールバーで**「この分析を印刷します」**ボタンをクリックします。
   - 複合レイアウトに表示されているビューの組合せの場合、「分析」エディタの「結果」タブのツールバーで**「この分析を印刷します」**をクリックします。
   - 標準のページ・サイズに収まらないゲージは、ゲージを分割する必要があります。
2. **「印刷可能 HTML」**または**「印刷可能 PDF」**を選択します。
   - HTML の場合、新しいウィンドウに、印刷するビューが表示されます。**「ファイル」**メニューから**「印刷」**を選択します。
   - PDF の場合、Adobe PDF ウィンドウに、印刷するビューが表示されます。Adobe PDF ウィンドウで使用できるオプションを使用して、ファイルを保存または印刷します。

ビューの印刷およびエクスポート・オプションの変更

ビューの印刷方法とエクスポート方法を変更できます。

印刷およびエクスポート・オプションを変更すると、エクスポートおよび印刷された次のようなユーザー出力をカスタマイズできます。

- ヘッダーおよびフッターなど、出力に含める項目を指定します。
- 印刷およびエクスポートで使用可能にするレイアウトを選択します。
- カスタム印刷レイアウトを作成、編集、置換および削除します

1. 「分析」エディタの「結果」タブのツールバーで、**「印刷とエクスポートのオプション」**ボタンをクリックします。

2. 「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログで適切なオプションを指定し、**「OK」**をクリックします。

ダッシュボードに表示されるビューのプレビュー

ビューがダッシュボードでどのように表示されるかをプレビューできます。

次をプレビューできます。

- ビューのエディタから 1 つのビュー
- 複合レイアウトに表示されているビューの組合せ
- 次のようにプレビューします。
  - 1 つのビューの場合、ビューのエディタのツールバーで**「ダッシュボードでの結果の表示方法を示します」**ボタンをクリックします。
  - 複合レイアウトに表示されているビューの組合せの場合、「分析」エディタの「結果」タブのツールバーで**「ダッシュボードでの結果の表示方法を示します」**ボタンをクリックします。

  ノート: **「ダッシュボードでの結果の表示方法を示します」**ボタンが使用できない場合は、管理者によってこのボタンの表示が抑制されています。

ダッシュボードのプレビューは、新しいウィンドウに表示されます。プレビューには任意のプロンプトが表示され、適用されます。

ビューの削除

ビューを、そのビューを含む要素から削除できます。

次のものからビューを削除できます。

- 複合レイアウト。

  複合レイアウトからビューを削除すると、ビューは複合レイアウトからのみ削除され、分析からは削除されません。
- 分析。

  分析からビューを削除すると、ビューが含まれていた複合レイアウトからも、分析からも、ビューが削除されます。
- ビューを次から削除するには:
  - 複合レイアウトの場合、複合レイアウトのビューで**「複合レイアウトからビューを削除」**ボタンをクリックします。
  - 分析の場合、「ビュー」ペインでビューを選択し、**「分析からビューを削除」**ボタンをクリックします。

ビューの結果のリフレッシュ

表やピボット表などの結果データを表示するビューの使用時、現在の分析の結果をリフレッシュできます。

結果のリフレッシュは、結果を限定するフィルタの追加などの変更を行い、変更の効果を確認する場合に便利です。

- 「分析」エディタの「結果」タブのツールバーで、**「現在の分析の結果をリフレッシュします」**ボタンをクリックします。

エージェント・ユーザーへ配信するビューのカスタマイズ

配信コンテンツは、「エージェント」エディタの「送信先」タブで指定した送信先に基づいて自動的に書式設定されます。

特定の送信先に送信するビューは、複合レイアウトにビューを含めることにより、手動で制御できます。たとえば、携帯電話に配信する場合、大部分がテキストのビューを作成し、そのビューを複合レイアウトに追加します。以前のリリース(11*g* より前)では、この機能は、カスタマイズされたビューと呼ばれていました。

1. 適切な分析に対し、配信されるコンテンツに使用するビューを作成し、保存します。
2. 「分析」エディタの「結果」タブのツールバーで、**「複合レイアウトの作成」**ボタンをクリックします。
3. 作成したビューを複合レイアウトに追加します。
4. 「分析」エディタの「結果」タブのツールバーで、**「分析プロパティの編集」**ボタンをクリックします。
5. **「テキスト配信用のビュー」**ボックスで、ビューを追加した複合レイアウトを選択します。
6. **「OK」**をクリックします。

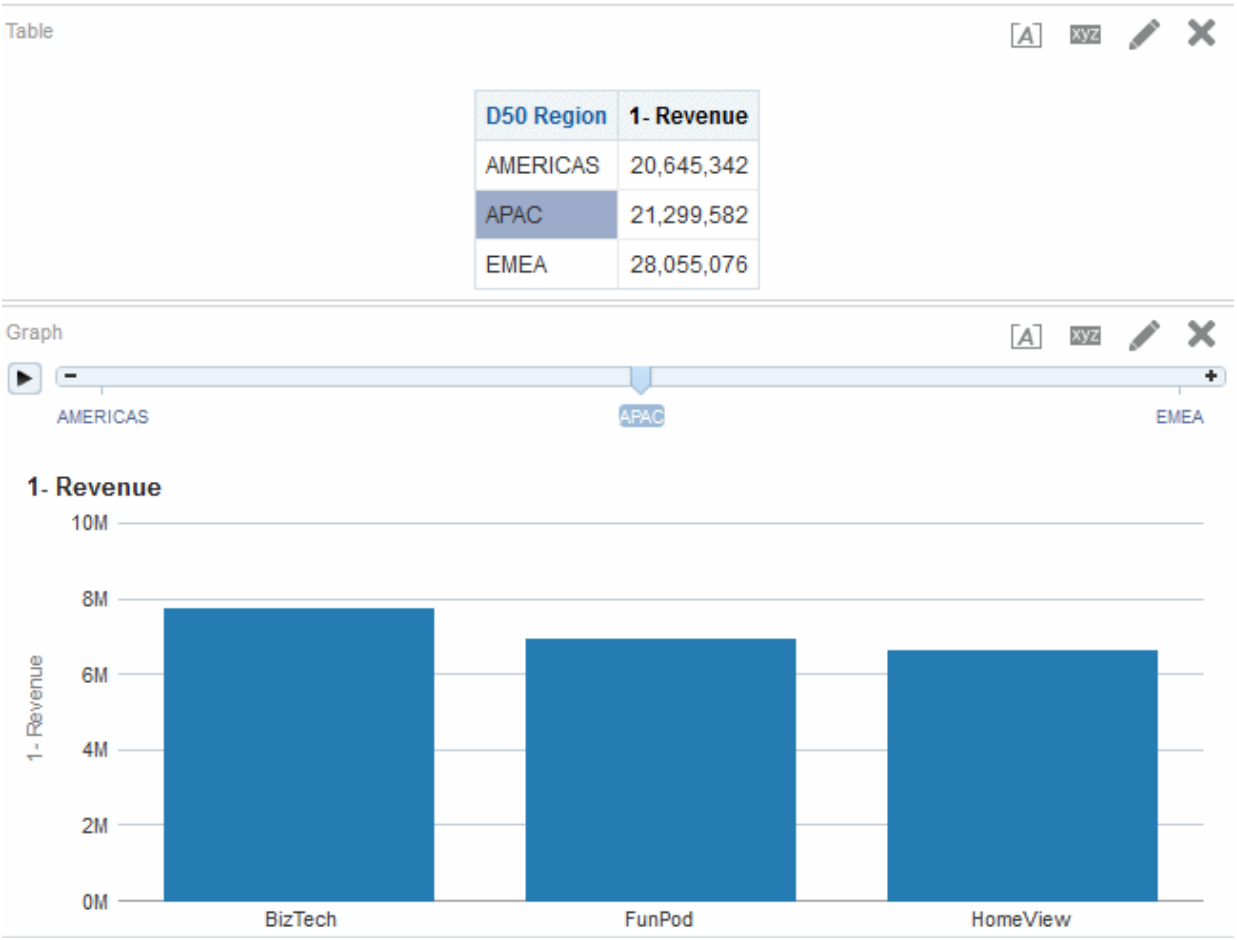
ビューのマスター詳細リンクとは

ビューのマスター詳細リンクでは、複数のビューの間に関係が確立され、マスター・ビューと呼ばれる 1 つのビューによって、詳細ビューと呼ばれる 1 つ以上の他のビューでデータの変更が誘発されます。

たとえば、次の 2 つのビューがあるとします。

- 地域ごとの売上金額を示す表
- セクション・スライダに地域を表示し、ブランドごとの売上金額を示すグラフ

マスター詳細リンク機能を使用すると、2 つのビューがリンクされ、表で特定の地域をクリックすると、グラフのセクション・スライダの地域とグラフのデータの両方が、表でクリックされた地域を反映して変更されます。図の例の場合、D50 Region 列の表で「APAC」をクリックすると、セクション・スライダのつまみが APAC に置かれ、グラフのデータが APAC のデータに更新されます。



マスター・ビューとは

マスター・ビューによって、1 つ以上の詳細ビューでデータの変更が誘発されます。

指定したチャネルでマスター詳細イベントを送信するようビューの列の相互作用を設定すると、ビューはマスターになります。この列は、マスター列と呼ばれます。

マスター列の列では、値がクリックされると、マスター詳細イベントを送信し、詳細ビューのデータを更新する情報を渡します。

次のタイプのビューがマスター・ビューです。

- ファンネル・グラフ
- ≪ゲージ｜ Gauge ｜ Bifndn≫
- ≪グラフ｜ Graph ｜ Bifndn≫
- ≪ヒート・マトリックス｜ Heat Matrix ｜ Bifndn≫
- マップ
- ピボット表
- 表
- トレリス(内部のビジュアライゼーションではなく外部エッジのみ)

マスター・ビューは、詳細ビューと同じ分析内にあっても、別の分析内にあってもかまいません。マスター・ビューによって、1 つ以上の詳細ビューでデータが更新されます。

グラフまたはゲージの行または列エッジにある列に構成されているマスター詳細イベント(つまり、凡例またはグループ・ラベル)は、(クリック時に)ビューの対応するデータ項目から、そのデータ項目に対応するメジャーのイベント設定とともに公開されます。

マスター列にできる列のタイプ

任意のタイプの列(階層、属性またはメジャー)をマスター列にできます。

ただし、マスター列は、マスター・ビューのページ・エッジまたはセクション・スライダに表示できません。これは、ビューの本体に表示される必要があります。

ノート: 階層列はマスター列としてサポートされますが、ユーザーが階層レベルをクリックすると、レベルが詳細ビューでも展開されている場合にのみ、変更が詳細ビューで有効になります。

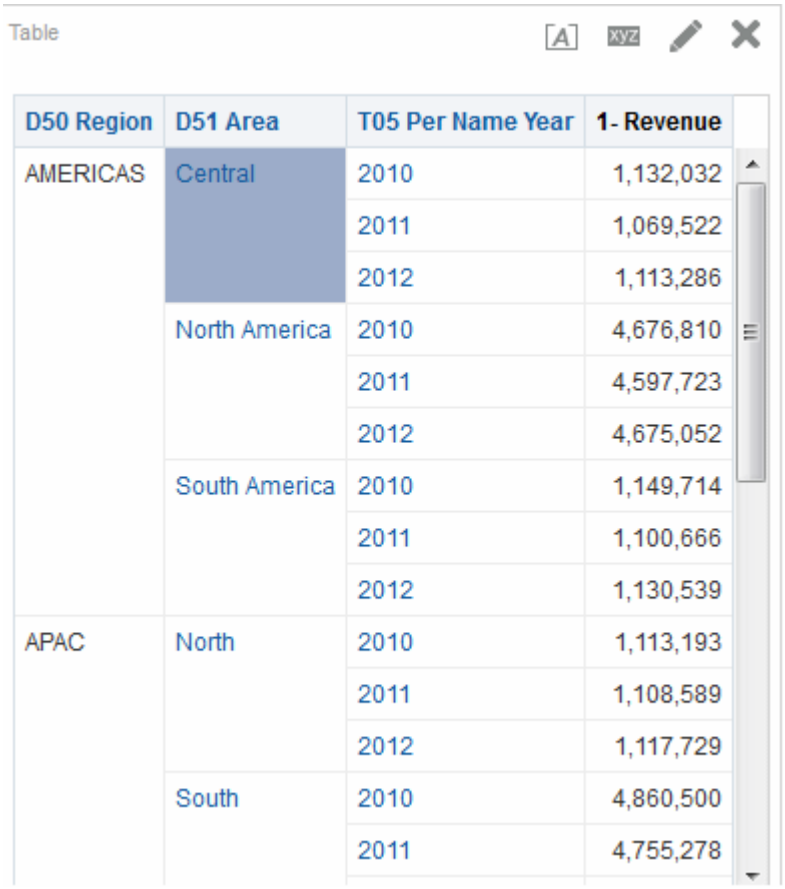
マスター詳細イベントで渡される情報

マスター詳細イベントが発生すると、クリックされたマスター・ビューのセル(項目)の定義が渡されます。

マスター詳細イベントで渡される特定の情報は、列のタイプによって異なります。

- 属性列の場合、クリックされた値と、軸メンバーの左と上のコンテキスト情報が渡されます。

  図の例の場合、属性列 *D51* Area がマスター列の場合に「Central」(青で強調表示)をクリックすると、渡されるマスター詳細イベント情報は `D50 Region =` *AMERICAS* および `D51 Area =` *Central* になります。



- メジャー列の場合、データ値のすべてのコンテキスト情報が渡されます。

  次の図の例の場合、メジャー列 1 - Revenue がマスター列の場合に「1,113,286」(青で強調表示)をクリックすると、渡されるマスター詳細イベント情報は `D50 Region` = *AMERICAS*、`D51 Area` = *Central* および `T05 Per Name Year` = *2012* になります。

Table

D50 Region	D51 Area	T05 Per Name Year	1- Revenue
AMERICAS	Central	2010	1,132,032
		2011	1,069,522
		2012	1,113,286
	North America	2010	4,676,810
		2011	4,597,723
		2012	4,675,052
	South America	2010	1,149,714
		2011	1,100,666
		2012	1,130,539
APAC	North	2010	1,113,193
		2011	1,108,589
		2012	1,117,729
	South	2010	4,860,500
		2011	4,755,278

マスター詳細イベント情報によって、詳細ビューでのページ・エッジまたはセクション・スライダの位置が定義されます。

チャネルとは

チャネルは、マスター・ビューと詳細ビューをリンクします。

これは、マスター・ビューから詳細ビューへマスター詳細イベントを送る手段です。マスター詳細関係では、マスター・ビューと詳細ビューの両方で同じチャネル(Channel1 など)を使用する必要があります。チャネル名では大文字と小文字が区別されます。

詳細ビューとは

詳細ビューは、指定されたチャネルでマスター・ビューによって送信されたマスター詳細イベントをリスニングし、これに応答するビューです。

マスター詳細イベントをリスニングするよう設定すると、ビューは詳細ビューになります。

詳細ビューには、マスター詳細イベントで渡された情報によって値が直接変更される 1 つ以上の列が含まれます。これらの列は、詳細列と呼ばれます。詳細列の要件は次のとおりです。

- 詳細ビューのページ・エッジまたはセクション・スライダにあります。詳細列がページ・エッジに表示されるかセクション・スライダに表示されるかは、ビューのタイプによって異なります。
  - ピボット表および表の場合、ページ・エッジにある必要があります。

– グラフおよびゲージの場合、ページ・エッジにあっても、セクション・スライダにあってもかまいません。

ノート: 詳細列がセクション・スライダにあり、ページ・エッジが存在する場合、詳細列は、マスター詳細イベントの情報で更新されません。たとえば、イベントの情報が `D50 Region=`*AMERICAS* および `T05 Per Name Year=`*2009* で、詳細ビューのページ・エッジに Region が含まれ、セクション・スライダに Years が含まれる場合は、Region のみが更新されます。

- マスター・ビューの列と一致します

詳細ビューに複数の詳細列が含まれる場合、複数のチャネルでマスター詳細イベントをリスニングし、応答します。

次のタイプのビューを詳細ビューにできます:

- ファンネル・グラフ
- ≪ゲージ｜ Gauge ｜ Bifndn≫
- ≪グラフ｜ Graph ｜ Bifndn≫
- ≪ヒート・マトリックス｜ Heat Matrix ｜ Bifndn≫
- マップ
- ピボット表
- 表
- トレリス(内部のビジュアライゼーションではなく外部エッジのみ)

詳細ビュー:

- 複数のマスター・ビューからのマスター詳細イベントをリスニングできます
- マスター・ビューと同じ分析内にあっても、別の分析内にあってもかまいません
- 別のビューのマスターとして機能しません

ビューのマスター詳細リンクの作用

マスター・ビューと詳細ビューがリンクされている場合、ユーザーがマスター列のセル(項目)をクリックすると、指定されたチャネルでマスター詳細イベントが生成され、マスター詳細イベント情報が詳細ビューに渡されます。

詳細ビュー(指定されたチャネルでマスター詳細イベントをリスニングしている)は、イベントとマスター詳細イベント情報を受け取ります。これは、マスター詳細イベント情報を確認し、この情報内のどの列が詳細列と一致するかを判断します。一致が見つかると、マスター詳細イベント情報の列値を使用して詳細列を更新し、詳細ビュー全体をリフレッシュします。

マスター列がセクション・スライダにある場合、ブラウザに当初表示されていない詳細ビューは、スクロール・ダウンしてビューを表示するまで更新もリフレッシュもされません。グラフ、ゲージおよびファンネルのセクション・スライダの定義およびマスター詳細関係でリンクされた表とグラフの例を参照してください。

マスター詳細関係でのビューのリンク

マスター詳細関係でビューをリンクするには、マスター・ビューと詳細ビューを定義する必要があります。

ビューのマスター詳細リンクとはを参照してください

マスター・ビューの定義

マスター・ビューによって、1 つ以上の詳細ビューでデータの変更が誘発されます。

次のタイプのビューをマスター・ビューにできます: ファンネル・グラフ、ゲージ、グラフ、ピボット表、表およびトレリス。トレリス・ビューでは、外部エッジのみがマスター・ビューになり、内部のビジュアライゼーションはマスター・ビューにはできません。

マスター・ビューは、詳細ビューと同じ分析内にあっても、別の分析内にあってもかまいません。マスター・ビューによって、1 つ以上の詳細ビューでデータが更新されます。

マスター・ビューにはマスター列があり、この列にチャネルでマスター詳細イベントを送信する相互作用を設定します。チャネルは、マスター詳細イベントを詳細ビューに送信します。マスター列は、ページ・エッジまたはセクション・スライダには表示できません。これは、ビューの本体に表示される必要があります。

1. マスター・ビューとして定義するビューの分析を作成または編集します。
2. マスター列となる列に対し、分析エディタの「基準」タブで**「オプション」**ボタンをクリックし、**「列のプロパティ」**を選択します。

   「レイアウト」ペインの**「詳細オプション」**ボタンをクリックし、**「列のプロパティ」**を選択して、「列のプロパティ」ダイアログを表示することもできます。
3. 「列のプロパティ」ダイアログで、**「相互作用」**タブをクリックします。
4. **「値」**領域の**「プライマリ相互作用」**ボックスで、**「マスター詳細イベントの送信」**を選択します。**「チャネルの指定」**フィールドが表示されます。
5. **「チャネルの指定」**フィールドに、マスター・ビューがマスター詳細イベントを送信するチャネルの名前を入力します。「Sales Analysis Channel」、「Channel 1」、「channel 1」など、適切な名前を使用できます。
6. マスター・ビューとして使用するビューを追加します。マスター列を含む追加したビューは、マスター・ビューとして使用できます。
7. 分析エディタの**「結果」**タブをクリックして、デフォルトの表またはピボット表ビューを表示します
8. **「OK」**をクリックします。

詳細ビューの定義

詳細ビューは、指定されたチャネルでマスター・ビューによって送信されたマスター詳細イベントをリスニングし、これに応答するビューです。

詳細ビューは、マスター・ビューの表での値のクリックなど、マスター詳細イベントに応答します。

次のタイプのビューを詳細ビューにできます: ファンネル・グラフ、ゲージ、グラフ、ピボット表、表およびトレリス。トレリス・ビューでは、外部エッジのみが詳細ビューになり、内部のビジュアライゼーションは詳細ビューにはできません。詳細ビュー:

- 複数のマスター・ビューからのイベントをリスニングできます
- マスター・ビューと同じ分析内にあっても、別の分析内にあってもかまいません
- 別のビューのマスター・ビューとして機能しません

1. 詳細ビューとして定義するビューの分析を作成または編集します。
2. 詳細ビューとなるビュー(グラフなどの)を作成します。
3. ビューを編集します。
4. ビューのエディタのツールバーにあるビューの**「プロパティ」**ボタンをクリックします。たとえば、グラフの場合、「グラフ」エディタで**「グラフのプロパティ」**ボタンをクリックします。ビューのプロパティ・ダイアログ(グラフの場合は「グラフのプロパティ」ダイアログなど)が表示されます。
5. 「ゲージのプロパティ」ダイアログの「一般」タブ(ゲージの場合)、「グラフのプロパティ」ダイアログの「一般」タブ(グラフまたはファンネル・グラフの場合)、「ヒート・マトリックス・プロパティ」ダイアログの「一般」タブ(ヒート・マトリックスの場合)、「マップ・プロパティ」ダイアログの「相互作用」タブ(マップの場合)、「ピボット表のプロパティ」ダイアログ(ピボット表の場合)または「表のプロパティ」ダイアログの「スタイル」タブ(表の場合)で、**「マスター詳細イベントのリスニング」**ボックスを選択します。

   マップ・ビューでマスター値を含む詳細機能が見つからない場合は、「`ID` に表示するデータがありません: *nnn*」という警告メッセージが表示されます。
6. **「イベント・チャネル」**フィールドに、詳細ビューがマスター詳細イベントをリスニングするチャネルの名前を入力します。名前では、大文字と小文字が区別され、マスター・ビューがマスター詳細イベントを送信するチャネルの名前と一致する必要があります。

   このフィールドは、「マスター詳細イベントのリスニング」チェック・ボックスを選択した場合のみ有効です。このフィールドを使用して、1 つ以上のマスター・ビューによって生じたマスター詳細イベントをマップがリスニングするためのチャネルを 1 つ以上入力します。チャネル名の大文字/小文字は区別されるため、マスター・ビューで指定したチャネル名と完全に一致させる必要があります。複数のチャネルは、channel a, channel b のようにカンマで区切ってください。
7. **「OK」**をクリックします。
8. 「レイアウト」ペインで、次のとおり、「プロンプト」ドロップ・ターゲットまたは「セクション」ドロップ・ターゲットのいずれかに詳細列とする列をドラッグします:

   - 詳細ビューがピボット表または表の場合、「プロンプト」ドロップ・ターゲットに列をドラッグします。
   - 詳細ビューがグラフまたはゲージの場合、グラフまたはゲージが「プロンプト」ドロップ・ターゲットに列を含んでいないかぎり、「プロンプト」ドロップ・ターゲットまたは「セクション」ドロップ・ターゲットのいずれかに列をドラッグします。その後、「プロンプト」ドロップ・ターゲットに列をドラッグする必要があります。
   - すべての詳細列を同じドロップ・ターゲットにドラッグ・アンド・ドロップする必要があります。一部を「プロンプト」ドロップ・ターゲットに含め、残りを「セクション」ドロップ・ターゲットに含めるということはできません。
9. (オプション)1 つ以上の詳細列を「セクション」ドロップ・ターゲットにドラッグ・アンド・ドロップした場合は、**「スライダとして表示」**ボックスを選択します。

   グラフの場合、マスター詳細イベントをリスニングするには、詳細列を「セクション」ドロップ・ターゲットに配置する必要があります。そうすれば、分析またはダッシュボードにスライダが作成されます。マスター詳細関係の一部であるグラフ・ビューで、分析またはダッシュボードの外観を簡単にする場合は、**「スライダとし**

て表示」を選択しないでください。このようにすれば、詳細列を表示できるようにするために作成されるスライダを非表示にできます。

マスター詳細関係でリンクされた表とグラフの例

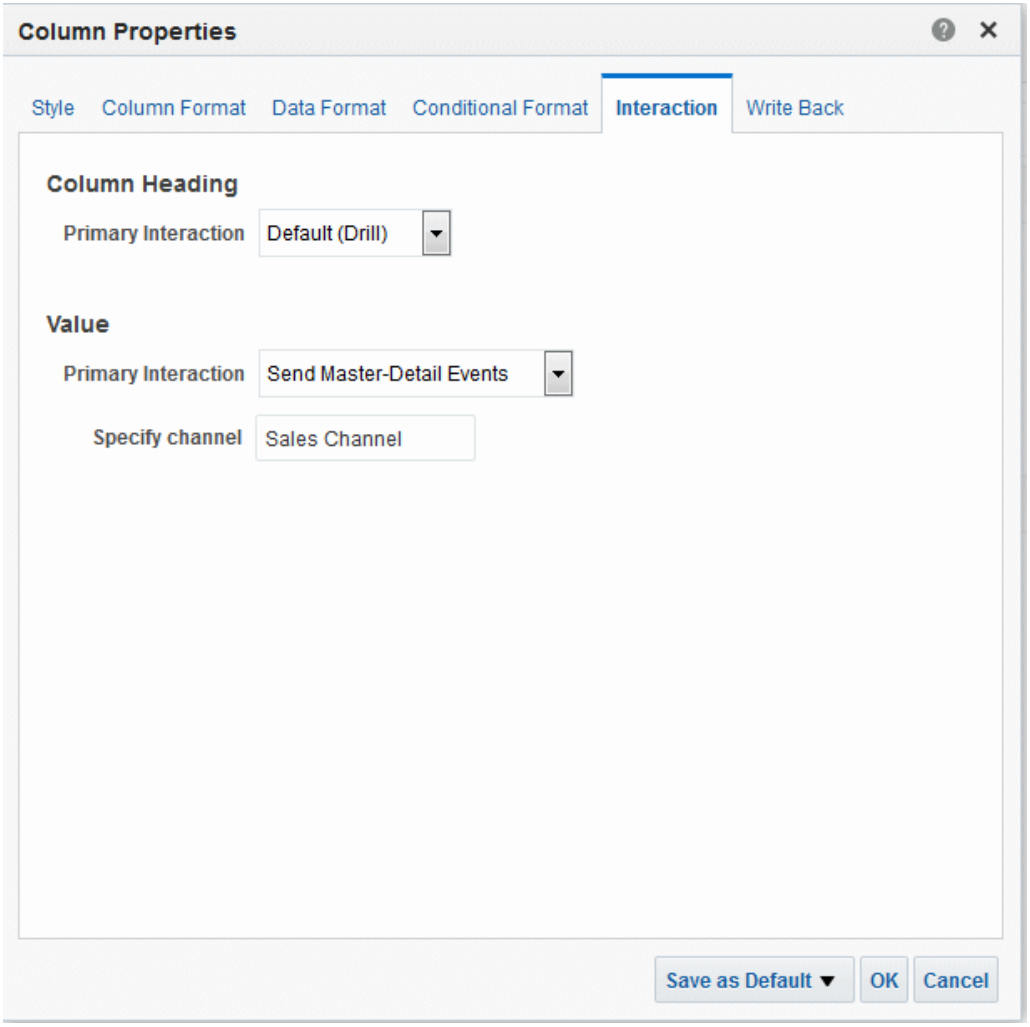
表とグラフをリンクさせることができるため、それらのデータ・ポイント間の関係が明らかになります。

この例では、表 Regional Sales Master View はグラフ Regional Sales View Detail View とマスター詳細関係でリンクされています。

Regional Sales Master View について

Regional Sales Master View には一連の列が表示され、地域の売上情報を分析できます。

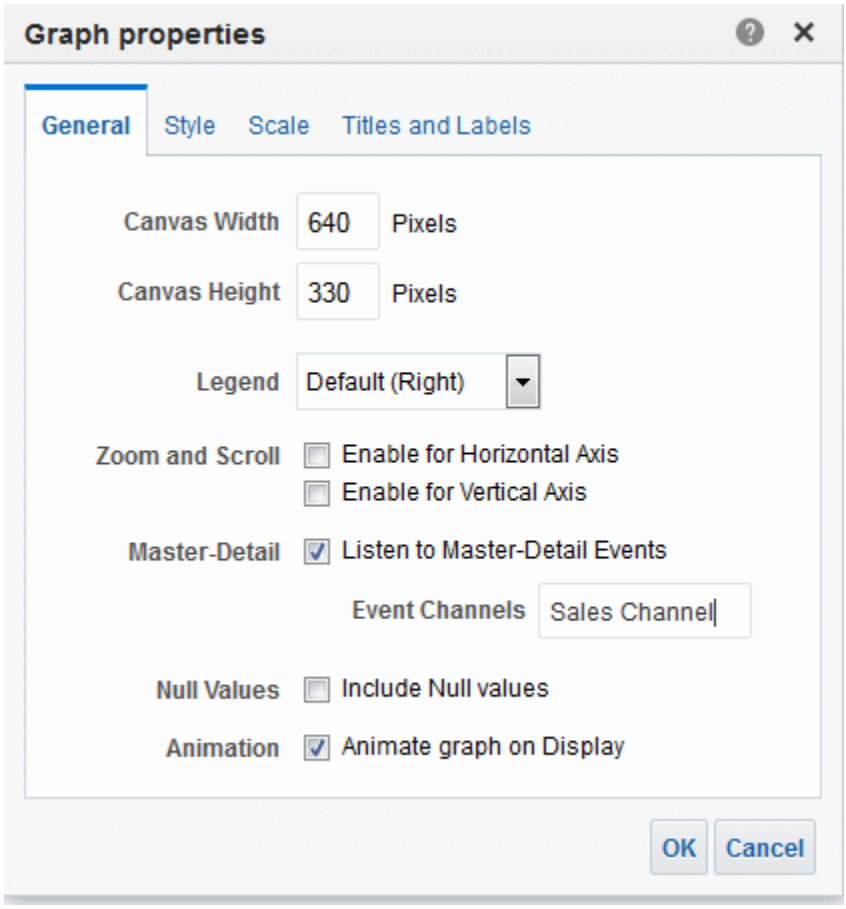
マスター・ビューの分析には、D50 Region 列と 1 - Revenue 列が含まれています。次の図に示すとおり、1 - Revenue 列はマスター列として設定されています。マスター・ビューに追加されたビューは表です。



Regional Sales Detail View について

Regional Sales Detail ビューには、地域の売上詳細を分析できる一連の列があります。

詳細ビューの分析には、D50 Region 列、P4 Brand 列および 1 - Revenue 列が含まれています。詳細ビューに追加されたビューは横棒グラフであり、次の図に示すとおり、Sales Channel でマスター詳細イベントをリスニングするよう設定されています。



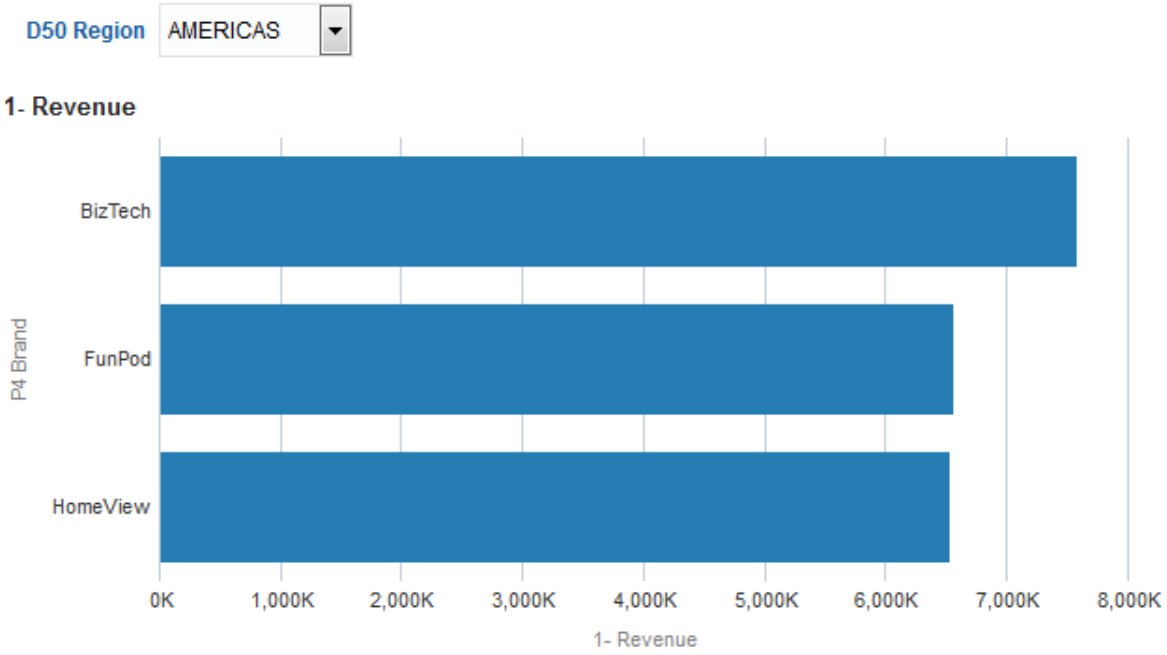
D50 Region 列は詳細列として設定されています。これは、図 4-36 に示すとおり、「レイアウト」ペインの「グラフのプロンプト」ドロップ・ターゲットに D50 Region 列をドラッグ・アンド・ドロップすることで行われました。(D50 Region 列が表のページ・エッジに表示されていることに注意してください。)

Regional Sales Master View と Regional Sales Detail View に対するマスター詳細リンクの作用

マスター詳細リンクにより、マスター・ビューと詳細ビューのデータ・ポイントを単一の計算に結合できます。

ユーザーが、Regional Sales Master View で AMERICAS 地域の収益を含むセルをクリックすると、ビューは、Sales Channel を使用してマスター詳細イベントを送信し、D50 Region = AMERICAS というマスター詳細イベント情報を渡します。

Sales Channel でリスニングしている Regional Sales Detail View は、マスター詳細イベント情報を受け取り、確認します。「D50 Region」列がページ・エッジの列に一致すると判断し、図に示すとおり、ページ・エッジを「AMERICAS」に更新して、ビュー全体をリフレッシュします。



D50 Region	1- Revenue
AMERICAS	20,645,342
APAC	21,299,582
EMEA	28,055,076

5

ダッシュボードの作成と使用

この章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のダッシュボードの作成および使用方法について説明します。また、保存されたカスタマイズの使用、ダッシュボード・テンプレート・ページの作成、ダッシュボードの公開、ダッシュボード・ページへのリンクの作成、およびブリーフィング・ブックの操作についても説明します。

ビデオ

トピック

この章は次の項で構成されています。

- ダッシュボードとは
- ダッシュボードの作成と編集を行うユーザー
- ダッシュボード・ビルダーとは
- ダッシュボードのルック・アンド・フィールを制御する方法
- ALTA スタイルについて
- ダッシュボードの作成
- ダッシュボードの編集
- ダッシュボード・ページへの Oracle BI Publisher レポートの追加
- ダッシュボードとそのページのプロパティの変更
- ダッシュボード・ページに追加されたオブジェクトのプロパティの変更
- ダッシュボード・ページの実行の遅延
- ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトの作成について
- ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトの作成
- カスタム・レイアウトの編集、置換または削除
- ダッシュボード・ページのオブジェクトの削除
- ダッシュボードからのサブページの削除
- ダッシュボード・ページの削除
- 他の名前と他の場所でのダッシュボードの保存

- ダッシュボードのオープンと使用
- ダッシュボード・ページの保存済カスタマイズとは
- カスタマイズの保存
- 保存されたカスタマイズの適用
- 保存済カスタマイズの編集
- 現在のカスタマイズのクリア
- 新規ユーザーのダッシュボード・テンプレート・ページについて
- 新規ユーザーのダッシュボード・テンプレート・ページの作成
- ダッシュボード・ページの公開
- ダッシュボード・ページへのリンクの作成について
- ダッシュボード・ページへのリンクの作成
- ブリーフィング・ブックの使用

ダッシュボードとは

ダッシュボードでは、企業や外部情報をパーソナライズして表示できます。

ダッシュボードは、1 つ以上のページで構成されます。

ページには、次のような Web ブラウザでアクセスまたは開くことのできるものを表示できます:

- 分析の結果

  分析の結果は、分析の基準に一致して Oracle BI サーバーから返される出力です。表、グラフ、ゲージなどの様々なビューに表示できます。ユーザーは、結果の確認や分析、PDF や HTML での印刷、PDF での保存、およびスプレッドシートへのエクスポートを行えます。

- エージェントからのアラート
- アクション・リンクとアクション・リンク・メニュー
- イメージ
- テキスト
- Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のフォルダーのビュー
- Web サイトへのリンク
- ドキュメントへのリンク
- 埋込みコンテンツ(Web ページやドキュメントなど)
- Oracle BI Publisher レポート

ダッシュボードを開くと、ダッシュボードのコンテンツが 1 つ以上のダッシュボード・ページに表示されます。ダッシュボード・ページは、ダッシュボードの上部にあるタブで識別します。右上のツールバーには、次のことが可能なボタンが含まれています。

- 適切な許可および権限がある場合、ダッシュボードを編集します。ダッシュボード・ビルダーとはを参照してください

- 現在のページの印刷など、ダッシュボード・ページを操作するための様々なオプションを表示します。ダッシュボードのオープンと使用を参照してください。

ダッシュボードを作成するための一般的なワークフロー

ダッシュボードの作成を開始するには、次のリストで説明する一般的なワークフローを参照してください。

- 複数の分析の作成 — ダッシュボードに表示するビューの作成が可能な分析を作成します。
- ダッシュボードの作成 — ダッシュボードを作成して、分析からのデータを表示します。
- ダッシュボード・ページへのコンテンツの追加 — コンテンツをダッシュボード・ページに追加して、ビューやプロンプトなどの項目を表示します。
- ダッシュボード・ページへのプロンプトの追加 — ダッシュボード・ページにプロンプトを追加して、ページ上にコンテンツを誘導します。
- ダッシュボードへのページの追加 — オプションで、1 つ以上のページをダッシュボードに追加して、データを様々な方法で表示します。
- ダッシュボードの個人設定の呼戻し — 現在の状態で、またはあらかじめ選択した方法でページを表示できるように、カスタマイズを作成します。

ダッシュボードの作成と編集を行うユーザー

ダッシュボードを作成できるかどうかは、管理者によって管理されるダッシュボードの管理権限で制御されます。

ダッシュボード・ビルダーで実行されるダッシュボードの編集は、ダッシュボードおよびダッシュボード・ページに追加できるオブジェクトに対して適切な許可および権限を持つユーザーに許可されています。権限の割当ておよび *Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のプレゼンテーション・サービス権限の管理を参照してください。

ダッシュボード・ビルダーとは

ダッシュボード・ビルダーを使用すると、ダッシュボードにダッシュボード・ページを追加したり、ダッシュボードのページを編集できます。ダッシュボード・ページにオブジェクトを追加したり、レイアウトを制御できます。

ページには、列やセクションがあり、ダッシュボードのコンテンツが含まれています。各ダッシュボードには 1 つ以上のページがあり、ページは空でもかまいません。ダッシュボード・ページは、ダッシュボードの上部にあるタブで識別します。複数のページを使用してコンテンツが構成されます。たとえば、各日を参照する分析の結果を含むページ、業者の Web サイトへのリンクを含むページ、および会社のイントラネットへ接続するページを持つことができます。

ダッシュボード・ページに追加できるオブジェクトには次のものがあります。

- **ダッシュボード・オブジェクト** - ダッシュボードのみで使用される項目。コンテンツを含めるセクション、アクション・リンク、ダッシュボードのフレームに表示される埋込みコンテンツが、ダッシュボード・オブジェクトの例です。
- **カタログ・オブジェクト** - Oracle BI プレゼンテーション・カタログに保存されていて、適切な権限を持つオブジェクト(分析、プロンプトなど)。

ダッシュボードでは、分析の結果は、表、グラフ、ゲージなどの様々なビューに表示できます。(分析の結果は、分析の基準に合い、Oracle BI サーバーから返される出力です。)ユーザーは、結果の確認、分析、保存、印刷やスプレッドシートへのエクスポートを行えます。

ダッシュボードのルック・アンド・フィールを制御する方法

ダッシュボードの見た目は様々な方法でカスタマイズできます。

ダッシュボードのルック・アンド・フィールは高度にカスタマイズ可能で、複数の属性によって制御されます。

- **スキン** - スキンでは、表示されるグラフィック機能を定義し、背景色、企業のロゴやスタイル・シートなど、Oracle BI EE ユーザー・インタフェースの表示方法を制御します。スキンは、ユーザーのログイン時に自動的に割り当てることができます。管理者は、デフォルト・スキンをカスタマイズしたり、スキンを新たに作成できます。

- **スタイル** - スタイルでは、ダッシュボードの外観および様々なビューを制御します。つまり、スタイルは、テキストやリンクの色、テキストのフォントやサイズ、表の枠、グラフの色や属性など、結果の表示用の書式設定を制御します。

  スタイルおよびスキンは、カスケーディング・スタイル・シート(`.css` 拡張子のファイル)を含むフォルダに編成されます。Oracle Business Intelligence 内のすべてのオブジェクトをカスケーディング・スタイル・シートで制御できます。管理者は、スタイル・シートをカスタマイズしたり、スタイル・シートを新たに作成できます。「結果」タブで結果を書式設定する際には、スタイル・シートの一部の要素(表の枠、テキストのサイズなど)をオーバーライドできます。

  特定のダッシュボードのスタイルは、「一般プロパティ」領域の「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログで「スタイル」リストを使用して指定できます。

- **■装飾的な書式｜ Cosmetic formatting□** - 装飾的な書式は、列と階層レベルのデータ、ビューおよびダッシュボード・ページの列とセクションの外観に影響を与えます。装飾的な書式とはおよびダッシュボード・ページへの書式の適用を参照してください。

ALTA スタイルについて

Oracle BI EE には、ALTA などの複数のスタイルが含まれます。

このスタイルは、Oracle Business Intelligence 製品全体の外観をクリーンで一貫性のあるものとし、明るい色や、控えめなグラデーションおよび枠のサイズなど、鮮明なビジュアル・トレンドを提供します。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*の Oracle BI Web ユーザー・インタフェースのカスタマイズを参照してください。

ノート: 新しいカスタム・スタイルの作成を計画する場合は、ALTA を出発点として使用することをお薦めします。

ダッシュボードの作成

ダッシュボード・ビルダーを使用して、ダッシュボードを作成(および編集)します。

ダッシュボードとはを参照してください

1. グローバル・ヘッダーで、**「新規」**をクリックし、**「ダッシュボード」**を選択します。
2. 「新規ダッシュボード」ダイアログで、ダッシュボードの名前と説明を入力します。

3. ダッシュボードの場所を選択します。

   - ダッシュボードを/Shared Folders/*第1 レベルのサブフォルダ*の下の「ダッシュボード」サブフォルダに保存した場合、ダッシュボードはグローバル・ヘッダーの**「ダッシュボード」**メニューに表示されます。それ以外のレベル(例: /Shared Folders/Sales/Eastern)の Dashboards サブフォルダに保存した場合は、表示されません。

   - ダッシュボードが保存されていない/Shared Folders/*第1 レベルのサブフォルダ*の直下の「ダッシュボード」サブフォルダのフォルダを選択すると、新規ダッシュボードの保存先のフォルダに新規**「ダッシュボード」**フォルダが自動的に作成されます。たとえば、ダッシュボードが保存されていない/Shared Folders/Sales という名前のフォルダを選択すると、新規 Dashboards フォルダが自動的に作成され、場所のエントリが/Shared Folders/Sales/Dashboards に変わります。(他のレベルのフォルダを選択すると、新規 **Dashboards** フォルダは自動的に作成されません。)

4. 新規ダッシュボードにコンテンツを今追加するか、後で追加するかを指定します。

5. **「OK」**をクリックします。

6. コンテンツの追加の指定に応じて、次のようになります。

   - 今を指定した場合、編集用の空のページを 1 ページ含む新規ダッシュボードが、ダッシュボード・ビルダーに表示されます。

   - 後でを指定した場合、後でコンテンツを追加できる空のダッシュボードが作成されます(表示はされません)。

ダッシュボードの編集

適切な許可および権限を持つダッシュボードを編集できます。

ダッシュボード・ページの追加または削除、列やセクションなどのコンテンツの追加、プロパティおよび設定(印刷オプションなど)の編集を実行できます。たとえば、カタログからブランド売上分析を追加することで、チームの進捗を追跡するためのコンテンツを販売業績ダッシュボードに追加できます。

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。

2. カタログ・ページで編集対象のダッシュボードに移動し、**「編集」**リンクをクリックします。

3. ダッシュボード・ビルダーで、必要に応じて、次のタスクを 1 つ以上実行します。

   - ダッシュボード・ページを追加します。

   - ダッシュボード・ページを削除します。

   - コンテンツを追加します。

   - ダッシュボード・ビルダーの**「ツール」**ボタンで使用可能なオプションを使用して、次のことを行います。

     – ダッシュボードとダッシュボード・ページのプロパティを設定します。

     – ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするための設定を指定します。

     – ダッシュボード・ページにレポート・リンクを設定します。

- ページでの個人の保存済カスタマイズの作成をユーザーに許可するかどうかを指定します。
- ページを他のユーザーと共有できるよう、共有のダッシュボードの場所にページを公開します。
- 拡張ページ・プロパティを設定して、ダッシュボード・ページまたはダッシュボードのナビゲーション・パラメータを設定できるようにします。

4. 次のいずれかのステップを任意のタイミングで行います。
   - ダッシュボード・ページをプレビューするには、**「プレビュー」**ボタンをクリックします。
   - 変更を保存するには、**「保存」**ボタンをクリックします。
   - ダッシュボード・ビルダーを終了してダッシュボードに戻るには、**「実行」**をクリックします。

ダッシュボードへの新規ページの追加

新規ページをダッシュボードに追加できます。

たとえば、最初に、表および棒グラフに地域の売上データが含まれる新しいダッシュボード・ページを追加できます。次に、様々な競合相手の Web サイトへのリンクが含まれる別のページを追加できます。

1. ダッシュボードを編集します。
2. ダッシュボード・ビルダーの**「ダッシュボード・ページを追加」**ボタンをクリックし、**「ダッシュボード・ページを追加」**を選択します。
3. 「ダッシュボード・ページを追加」ダイアログで、ページの名前と説明を入力して**「OK」**をクリックすると、ダッシュボード・ビルダーのタブとしての新しいページが表示されます。
4. **「保存」**ボタンをクリックします。

新規ページの追加後、コンテンツを追加できます。

ダッシュボードへのサブページの追加

新規サブページをダッシュボードに追加できます。

サブページを追加すると、第 2 レベルの情報をユーザーに表示できます。たとえば、最初に、表および棒グラフに地域の売上データが含まれる新しいダッシュボード・ページを追加できます。次に、様々な競合相手の Web サイトへのリンクが含まれるサブページを追加できます。

1. ダッシュボードを編集します。
2. サブページを作成するダッシュボード・ページを選択します。
3. ダッシュボード・ビルダーの**「ダッシュボード・ページを追加」**ボタンをクリックし、それから**「サブページの追加」**を選択します。
4. 「サブページの追加」ダイアログで、ページの名前と説明を入力し、**「OK」**をクリックします。

   ページが、ダッシュボード・ビルダーにダッシュボードのサブページとして表示されます。

5. **「保存」**ボタンをクリックします。

新規サブページの追加後、コンテンツを追加できます。

ダッシュボードへのコンテンツの追加

ダッシュボードにコンテンツを追加すると、ユーザーは様々なデータを 1 つの場所に整理して表示できます。

次のコンテンツをダッシュボードに追加できます。

- 列やセクションなど、コンテンツの配置に使用できるオブジェクト、およびテキスト、フォルダ、アクション・リンクなどのオブジェクトなどを含む、ダッシュボード・オブジェクト。
- 分析やプロンプトなど、プレゼンテーション・カタログに保存されていて、適切な権限を持つオブジェクト。

たとえば、新しく作成した販売業績ダッシュボードに、チームの進捗を追跡するためのコンテンツを追加できます。これを実行するために、カタログからブランド売上分析を追加できます。

ノート: ダッシュボードの変更は、適切な許可および権限を持つユーザーに限定されます。

ダッシュボードへのパフォーマンス・タイルの追加は、プロンプトの動作など、他のビューの追加と同じ方法で行われます。パフォーマンス・タイル・ビューを含む分析をカタログから列にドラッグ・アンド・ドロップし、ダッシュボードを保存した後、ダッシュボードを実行してタイルを表示します。パフォーマンス・タイルのグループの間隔が密になるようにするには、各パフォーマンス・タイルをダッシュボード・セクションまたは列に配置してから、そのセクションまたは列に固定サイズを割り当て、タイルが広がらないようにします。

1. ダッシュボードを編集します。
2. ページに含めるオブジェクトを追加します。「ダッシュボード・オブジェクト」ペインまたは「カタログ」ペインからオブジェクトを選択し、ページ・レイアウト領域にオブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップします。

   ヒント:

   「カタログ」ペインでオブジェクトを特定するには、オブジェクトが含まれているカタログ・フォルダ、またはオブジェクトが表示されているダッシュボードで検索します。

   Oracle BI Publisher レポートの追加の詳細は、ダッシュボード・ページへの Oracle BI Publisher レポートの追加を参照してください。

   ページ・レイアウト領域にスコアカード・オブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップすると、「ディメンション固定」ダイアログが表示され、スコアカード・オブジェクトに関連付けられている KPI ディメンションの値を設定できます。

3. 必要に応じて、各オブジェクトのプロパティを設定します。これを行うには、ページ・レイアウト領域でオブジェクトにマウス・ポインタを合せてオブジェクトのツールバーを表示し、**「プロパティ」**ボタンをクリックします。

   表示内容は、オブジェクトのタイプによって異なります。一部のオブジェクトでは、プロパティ・ダイアログが表示されます。その他のオブジェクトでは、オプションのメニューが表示されます。

4. **「保存」**ボタンをクリックします。

ダッシュボード・ビルダーのページ・レイアウト領域へのオブジェクトのドラッグ・アンド・ドロップ

ドラッグ・アンド・ドロップにより、ダッシュボードのページ・レイアウトを構築できます。

ダッシュボード・ビルダーのページ・レイアウト領域へオブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップする場合、次の点に注意してください。

- ページ・レイアウト領域にオブジェクトをドラッグする際、青色の棒が表示され、他のオブジェクトを基準としたドロップ位置が示されます。オブジェクトのドロップ先として有効なターゲットにポインタを合せると、ターゲット・コンテナの枠がオレンジに変わります。
- 名前がないオブジェクトをページ・レイアウト領域にドロップすると、セクション 1、リンク 1 などのデフォルト名が割り当てられます。一部のオブジェクトは、意味のある説明的な名前に変更できます。
- ページ・レイアウト領域にドロップされているオブジェクトにマウス・ポインタを合せると、オレンジの枠で強調表示され、ツールバーが表示されます。
- 列はコンテンツの配置に使用され、列内のセクションに実際のコンテンツが含められます。空のページ・レイアウト領域にオブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップしたり、先にセクションを追加せずにオブジェクトを列にドラッグ・アンド・ドロップすると、適切なコンテナが自動的に作成されます。たとえば、空のページ・レイアウト領域にセクションをドラッグ・アンド・ドロップすると、列が自動的に作成されます。分析をドラッグ・アンド・ドロップすると、列とセクションの両方が自動的に作成されます。
- 分析をページ・レイアウト領域にドラッグ・アンド・ドロップすると、複合ビューがデフォルトで表示されます。別のビューを表示する場合、分析の**「プロパティ」**ボタンをクリックして**「ビューの表示」**を選択し、ビューを選択します。
- 2 つ目のオブジェクトをセクションにドラッグすると、セクション内の水平方向、垂直方向のいずれにもドロップ可能であり、セクションのレイアウトが設定されます。その後ドラッグ・アンド・ドロップするオブジェクトには、そのレイアウトが使用されます。設定後にレイアウトを変更するには、セクション・ツールバーの**「水平方向レイアウト」**および**「垂直方向レイアウト」**ボタンを使用します。

  ノート: 異なるセクションからのテキストが適切にレイアウトされるように、システム・フォントを小さく保持してください。

- ある列から別の列にセクションをドラッグすると、そのセクションのコンテンツも含まれます。

拡張ページ・プロパティの設定

拡張ページ・プロパティを設定して、現在のダッシュボード・ページで設定する受信ナビゲーション・パラメータを指定することができます。

拡張ページ・プロパティの設定により、ナビゲーション・アクションに関連するパラメータがどのように適用されるかを制御できます。たとえば、ナビゲーション・リンクにプロンプト値が含まれる場合に、ダッシュボードに関連付けられたすべてのページに適用される受信ナビゲーション・リンクのコンテキストを選択したり、受信ナビゲーション・リンクのコンテキストの範囲を到着ページに制限することができます。

1. ダッシュボードを編集します。

2. 受信ナビゲーション・パラメータの範囲を設定するページにナビゲートします。
3. 「**ツール**」をクリックし、「**拡張ページ・プロパティ**」を選択します。
4. 「拡張ページ・プロパティ」ダイアログで、ダッシュボードまたはダッシュボード・ページへのアクセスに使用するナビゲーション・タイプを決定します。
   - プロンプト URL
   - Go URL
   - BI コンテンツにナビゲート
5. 次のアクションのいずれかを実行します。
   - このダッシュボード・ページにアクセスしたときに、渡されたパラメータとコンテキストの範囲を到着ページに限定するように受信ナビゲーション・パラメータとコンテキストを設定するには、「**ページ**」を選択します。
   - ダッシュボードの受信ナビゲーション・パラメータを設定するには、「**ダッシュボード**」を選択します。
6. ダッシュボードに関連付けられているすべてのナビゲーション・タイプについて繰り返します。
7. 「**OK**」をクリックします。

ダッシュボード・ページへの Oracle BI Publisher レポートの追加

Oracle BI Publisher レポートにより、構成済の分析がダッシュボード・ページに追加されます。

この項では、Oracle BI Publisher レポートをダッシュボード・ページに追加する方法について説明します。次のトピックが含まれています:

- Oracle BI Publisher レポートとダッシュボード・ページとの相互作用
- ダッシュボード・ページへのレポートの追加
- パラメータ化されたレポートでのプロンプトの使用

Oracle BI Publisher レポートとダッシュボード・ページとの相互作用

どうすれば Oracle BI Publisher レポートとダッシュボード・ページが相互作用できるようにできるかを説明します。

この項は次のトピックで構成されています。

- Oracle BI Publisher レポートとダッシュボード・ページについて
- ダッシュボード・ページへのレポートの追加について

Oracle BI Publisher レポートとダッシュボード・ページについて

Oracle BI Publisher およびダッシュボード・ページの詳細は、次の各トピックを参照してください。

この項は次のトピックで構成されています。

- ダッシュボード・ページでのレポートとの相互作用
- ブリーフィング・ブックと BI Publisher レポートの印刷について

BI Publisher の一般情報は、Oracle BI EE と Oracle BI Publisher の統合を参照してください。

ダッシュボード・ページでのレポートとの相互作用

ダッシュボード・ページで BI Publisher レポートの実行や表示、および BI Publisher レポートとの相互作用を行えます。

BI Publisher レポートをダッシュボード・ページに含めると、レイアウト・テンプレートの選択、BI Publisher レポートの出力書式の変更、BI Publisher レポートのエクスポート、使用可能な送信先(プリンタ、ファックス、電子メール、FTP など)への BI Publisher レポートの送信、BI Publisher レポートのスケジュールおよびデータの分析を行うためのオプションを持つツールバーを、BI Publisher レポートに含めることができます。

ブリーフィング・ブックと BI Publisher レポートの印刷について

BI Publisher レポートを含むブリーフィング・ブックまたはダッシュボード・ページを限られた形式で印刷できます。

BI Publisher レポートを含むダッシュボード・ページを印刷する場合、またはブリーフィング・ブックにページを含める場合、次の点に注意する必要があります。

- PDF 形式のブリーフィング・ブックを印刷する場合および BI Publisher レポートの出力書式が PDF の場合、BI Publisher レポートは、ページの他のオブジェクトの後に印刷されます。PDF 形式の BI Publisher レポートを含むダッシュボード・ページを印刷するが、そのダッシュボード・ページがブリーフィング・ブックの一部ではない場合、BI Publisher レポートは印刷されません。
- MHTML 形式のダッシュボード・ページまたはブリーフィング・ブックを印刷する場合、BI Publisher レポートは印刷されません。

ダッシュボード・ページへのレポートの追加について

レポートをダッシュボード・ページに追加すると、レポートを他のユーザーと共有できるようになります。

1 つ以上の既存のレポートをダッシュボード・ページに追加できます。この利点は、他のユーザーとレポートを共有したり、エージェントを使用してダッシュボード・ページをスケジュールできる点です。エージェントは、レポートが参照するすべてのデータ・ページを含む、ダッシュボード全体をユーザーに送信します。

BI Publisher レポートを含むダッシュボード・ページに対してエージェントを構成する場合、次の基準を満たしているか確認してください。

- BI Publisher レポートの出力書式は PDF である必要があります。
- エージェントは PDF を配信するよう設定されている必要があります。

レポートは、埋込みコンテンツまたはリンクとしてダッシュボード・ページに追加できます。埋込みとは、レポートがダッシュボード・ページに直接表示されることです。リンクは、Oracle BI EE 内で BI Publisher のレポートを開きます。

BI Publisher でレポートを変更して変更を保存した場合、変更を表示するには、ダッシュボード・ページをリフレッシュします。

ダッシュボード・ページへのレポートの追加

レポートをダッシュボード・ページに追加すると、ユーザーがレポートに簡単にアクセスできるようになります。

レポートによって情報が 1 箇所に統合されるため、ユーザーは必要な情報に簡単にナビゲートできます。

1. ダッシュボードを編集します。
2. レポートの追加先のページに移動します。
3. 次のいずれかの方法でレポートを選択します。
   - 「カタログ」ペインからレポートを選択し、ダッシュボード・ページのセクションにドラッグ・アンド・ドロップします。
   - ダッシュボード・ページからレポートを追加するには、「カタログ」ペインでダッシュボードを含むフォルダからレポートを選択します。
4. オブジェクトのプロパティを設定します。これを行うには、ページ・レイアウト領域でオブジェクトにマウス・ポインタを合せてオブジェクトのツールバーを表示し、**「プロパティ」**ボタンをクリックします。
5. 「BI Publisher レポートのプロパティ」ダイアログのフィールドにすべて入力します。
6. **「OK」**、**「保存」**の順にクリックします。
7. 必要に応じて、プロンプトをダッシュボード・ページに追加し、パラメータ化された埋込みレポートの結果をフィルタします。
8. エージェントでダッシュボードをスケジュールすることもできます。

パラメータ化されたレポートでのプロンプトの使用

プロンプトを使用して、パラメータ化された埋込み BI Publisher レポートの結果をフィルタし、プロンプトの基準に合う結果のみを表示できます。

オンラインで表示するためにパラメータ化された埋込み BI Publisher レポートを構成できる場合、パラメータは分析から、またはサブジェクト領域への直接接続から適切な値を表示します。ただし、同じレポートをスケジュールすると、分析からパラメータを渡すことができず、レポートは分析のパラメータからデフォルト値を表示します。スケジュールされたレポートへの直接接続の場合、パラメータが渡され、値はレポートに正しく表示されます。

BI Publisher レポートは、次のいずれかになります:

- Oracle BI EE の分析からデータを受け取る BI Publisher レポート。このレポートの場合、フィルタ処理するレポート列の分析に**「プロンプトで使用」**を設定する必要があります。この種のレポートでは、様々なプロンプト式がサポートされます。
- サブジェクト領域への直接接続を使用して作成された BI Publisher レポート。*Oracle Business Intelligence Publisher レポート・デザイナーズ・ガイド*のサブジェクト領域への直接接続の使用によるレポートの作成を参照してください。

1. BI Publisher でレポートを開き、使用されているパラメータを特定します。必須パラメータごとにデフォルト値を設定し、ユーザーとの対話がなくてもレポートが正しく表示されるようにします。
2. 次の手順を使用して、パラメータごとに新規列プロンプトを作成します。
   a. グローバル・ヘッダーで、**「新規」**、**「ダッシュボード・プロンプト」**の順にクリックします。
   b. レポートからの列が含まれるサブジェクト領域またはレポートの列と厳密に一致する列を含むサブジェクト領域を選択します。
   c. 「定義」ペインで**「新規」**ボタンをクリックし、**「列プロンプト」**を選択して、プロンプトに使用する列を選択します。サブジェクト領域への直接接続を使用し

て BI Publisher レポートを作成した場合は、BI Publisher レポートで選択した列と同じ列を選択していることを確認してください。

プロンプトの作成の詳細は、ダッシュボードと分析でのプロンプトを参照してください。

3. 「新規プロンプト: 列」ダイアログにすべて入力し、**「OK」**をクリックします。次の設定を確認します。

   - 「演算子」フィールドが**「次と等しい/次に存在する」**に設定されています。
   - レポートからのパラメータと完全に同じ名前でプレゼンテーション変数を定義します。プロンプトで変数名を使用する場合、スペルと大文字/小文字が正しいことを確認します。パラメータと列が同じデータベース列に基づいていない場合、データ型が一致することを確認します。
   - サブジェクト領域への直接接続を使用して BI Publisher レポートを作成した場合は、次の形式で変数値を指定します:

     ```
     "Subject Area Name"."Folder Name"."Column Name"
     ```

     例:

     ```
     "Sample Sales Lite"."Time"."Per Name Year"
     ```

     ネストされたフォルダに列がある場合は、すべてのフォルダをリストします。例:

     ```
     "Sample Sales Lite"."Time"."More Time Objects"."Day of Week"
     ```

4. **「プロンプトの保存」**ボタンをクリックし、共有フォルダのカタログにプロンプトを保存します。
5. パラメータ化されたレポートが含まれるダッシュボードに移動し、**「≪ダッシュボードの編集 | Edit Dashboard | Bifndn≫」**をクリックします。
6. ダッシュボード・ビルダーの「カタログ」ペインで、追加するプロンプトが含まれているフォルダに移動します。
7. レポートが含まれるダッシュボード・ページのセクションにプロンプトをドラッグ・アンド・ドロップします。
8. **「≪保存 | Save | Bifndn≫」**をクリックします。

ダッシュボードとそのページのプロパティの変更

ダッシュボードとそのページのプロパティを変更できます。

具体的には、次のことができます。

- ダッシュボードのスタイル(または外観)と説明を変更します
- 非表示の名前付きプロンプトをダッシュボードとそのページに追加します。
- ダッシュボード・レベルの分析に含めるリンク(**「分析」**、**「編集」**、**「リフレッシュ」**、**「印刷」**、**「エクスポート」**、**「ブリーフィング・ブックへの追加」**および**「コピー」**)を指定します。これらのリンクは、ダッシュボード・ページ・レベルおよび分析レベルで設定し、ダッシュボード・レベルで設定したリンクをオーバーライドできます。「レポート・リンク」ダイアログを参照してください。
- ページの名前変更、非表示、並替え、権限の設定および削除を行います。

- 共有カスタマイズを保存できるアカウントおよびページのデフォルトのカスタマイズを割り当てられるアカウントを指定し、アカウント権限を設定します。
- ページの「ページ・オプション」メニューに**「ブリーフィング・ブックへの追加」**オプションを含めるかどうかを指定します。
- ダッシュボード・ページの実行を遅延するかどうかを指定します。

ダッシュボードとそのページのプロパティを変更するには:

1. ダッシュボードを編集します。
2. **「ツール」**ボタンをクリックし、**「ダッシュボードのプロパティ」**を選択します。

   「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログが表示されます。
3. プロパティの変更を行い、**「OK」**をクリックします。
4. **「保存」**ボタンをクリックします。

ダッシュボード・ページに追加されたオブジェクトのプロパティの変更

「ダッシュボード・オブジェクト」ペインおよび「カタログ」ペインからダッシュボード・ページに追加されたオブジェクトのプロパティを変更できます。

ダッシュボードを編集して、プロパティを変更します。

1. ダッシュボードを編集します。
2. オブジェクトが含まれているページに移動します。
3. ページ・レイアウト領域でオブジェクトにマウス・ポインタを合せてオブジェクトのツールバーを表示し、**「プロパティ」**ボタンをクリックします。

   表示内容は、オブジェクトのタイプによって異なります。一部のオブジェクトでは、プロパティ・ダイアログが表示されます。その他のオブジェクトでは、オプションのメニューが表示されます。
4. プロパティを変更します。
5. **「保存」**ボタンをクリックします。

ダッシュボード・ページの実行の遅延

データを最新のときまたはユーザーとの対話によってのみ表示するなど、様々な理由でダッシュボード・ページの実行を遅らせる必要がある場合があります。

組織で許可されている場合、ダッシュボード・ページの実行を遅延できます。これは、たとえば次のことを行う場合に便利です。

- 実際のデータが必要な場合にのみ問合せを生成してパフォーマンスを高める
- (デフォルトのプロンプト値を使用せずに)分析内容がダッシュボード・ページに表示される前にエンドユーザーがプロンプト値を指定できるようにする

ダッシュボード・ページの実行を遅延すると、分析の実際のコンテンツはロードされません。かわりに、次のようになります。

- ページの最上部に、ページが完全にロードされていないことを示すメッセージが表示されます。さらに、プロンプト値を選択して**「≪続行 | Continue | Bifndn ≫」**をクリックするようエンド・ユーザーが指示されます。**「≪続行 | Continue | Bifndn≫」**をクリックすると、エンド・ユーザーが指定したプロンプト値を使

用してページのコンテンツが再ロードされます。エンド・ユーザーがプロンプト値を指定しない場合、デフォルトのプロンプト値が使用されます。

- オブジェクト名、オブジェクト・ビューを表すアイコン、ビュー名およびオブジェクトの説明(使用可能な場合)など、ロードされなかったオブジェクトに関する静的情報が表示されます。
- 「ページ・オプション」メニュー(ダッシュボード・ページ・ツールバーの**「ページ・オプション」**ボタンから表示)の**「ダッシュボードの編集」**オプション以外のすべてのオプションが無効になります。
- ダッシュボード・プロンプトの**「適用」**ボタンは表示されません。かわりに、エンドユーザーが**「続行」**ボタンをクリックすると、すべてのプロンプト値が自動的に適用されます。

分析のコンテンツはダッシュボード・ページにロードされませんが、他のオブジェクト(ダッシュボード・プロンプト、埋込みコンテンツ、テキストなど)はロードされます。

Oracle BI EE は過去にページの実行が遅延されかどうかを記憶しています。ユーザーが同じコンテキストで同じページに再びアクセスすると、以前にロードしたことのあるページであれば、(実行を遅延せずに)ページ全体がロードされます。

管理者は、**≪開く前にプロンプト | Prompt before Opening | Bifndn≫**・ボックスの表示を制御できます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のプレゼンテーション設定のデフォルトの手動変更を参照してください。

ダッシュボード・ページの実行を遅延するには:

1. ダッシュボードを編集します。
2. **「≪ツール | Tools | Bifndn≫」**をクリックし、**「≪ダッシュボードのプロパティ | Dashboard Properties | Bifndn≫」**を選択します。
3. 「≪ダッシュボードのプロパティ | Dashboard Properties | Bifndn≫」ダイアログの「≪ダッシュボード・ページ | Dashboard Pages | Bifndn≫」領域でページを特定し、**■開く前にプロンプト | Prompt before Opening□**を選択します。
4. **「OK」**をクリックします。
5. **「≪保存 | Save | Bifndn≫」**をクリックします。

ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトの作成について

ダッシュボード・ページのレイアウトは、印刷用やエクスポート用に指定できます。

ユーザーの組織で許可されている場合、ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトを作成できます。

- カスタム印刷レイアウトを使用すると、ダッシュボード・コンテンツの高品質な印刷ができるようになります。ダッシュボード・ページの印刷を参照してください。
- カスタム・エクスポート・レイアウトでは、Excel 用にカスタマイズされたダッシュボード・コンテンツをエンド・ユーザーがエクスポートできます。ダッシュボードおよびダッシュボード・ページのエクスポートについてを参照してください。
- ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトの作成を参照してください。

カスタム・レイアウトを作成すると:

- ダッシュボード・ページが BI Publisher にエクスポートされて、次の項目が自動的に生成されます:
  - エクスポートされたダッシュボード・レイアウトに基づくレイアウトが設定された BI Publisher レポート
  - ダッシュボード・ページ・コンポーネントのデータを取得するデータ・モデル
- BI Publisher レポート・エディタが新しいブラウザ・ウィンドウで開き、自動生成されたレイアウトがサムネイルとして表示されます。レポート・エディタでは、レイアウトの編集または削除、新規レイアウトの追加を行えます。

BI Publisher でカスタム・レイアウトを保存すると、そのダッシュボード・ページで使用でき、「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログの「印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト」領域に表示されます。

次に、作成したカスタム・レイアウトを「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログの「印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト」領域で選択することで、(ダッシュボード・ページの「印刷」メニューまたは「Excel にエクスポート」メニューで)エンド・ユーザーが使用できるようにします。

次に、作成したカスタム・レイアウトを「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログの「印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト」領域の次のオプションを使用してエンド・ユーザーが使用できるようにします。

- **PDF** - このオプションを使用すると、ダッシュボード・ページの「印刷」メニューでカスタム・レイアウトを使用できるようになります。
- **Excel** - このオプションを使用すると、ダッシュボード・ページの「Excel にエクスポート」メニューでカスタム・レイアウトを使用できるようになります。

  分析およびダッシュボードのフォント・サイズはピクセル単位であるのに対し、Excel のフォント・サイズはポイント単位です。そのため、分析またはダッシュボードから Excel にエクスポートすると、フォント・サイズは分析またはダッシュボードのフォント・サイズの 75%に減少します。

  Excel のデフォルトの表見出しの書式は、「テキストの折返し」が設定されています。表見出しの折返し設定を変更するには:

  1. 「タイトル」で**「ビューの編集」**をクリックします。
  2. 「タイトル」フィールドの右側にある**「タイトル」**をクリックします
  3. ≪タイトルの書式設定 | Format Title | Bifndn≫ページで**「テキストの折返し」**の選択を解除し、**「OK」**をクリックします。

データ・モデルまたはレイアウトを Oracle BI プレゼンテーション・カタログから手動で削除すると、関連付けられた BI Publisher レポートは機能しなくなり、カスタム・レイアウトは使用できなくなります。分析を削除すると、データ・モデルとレイアウトは使用できますが、実行時に失敗します。

カスタム・レイアウトを作成するときには、一部のカスタマイズと一部のビューが BI Publisher でサポートされていない場合かあることに注意してください。サポートされていないアイテムには、階層列、パフォーマンス・タイル、マップ・ビュー、トレリス・ビュー、ダッシュボード・プロンプトなどがあります。アイテムがサポートされていない場合は、レイアウトから削除されて、サポートされていない理由に関するメッセージが表示されます。

カスタム印刷レイアウトの使用時にサポートされないアイテム

カスタム印刷レイアウトでサポートされる項目は限定的です。

カスタム印刷レイアウトを使用してダッシュボード・ページを印刷する場合、次のアイテムは BI Publisher でサポートされません:

- 列セレクタ・ビュー
- セグメントの作成ビュー
- ターゲット・リストを作成ビュー
- ファンネル・グラフ・ビュー
- 凡例ビュー
- 論理 SQL ビュー
- マップ・ビュー
- ナレーティブ・ビュー
- パフォーマンス・タイル・ビュー
- ティッカ・ビュー
- トレリス・ビュー(マイクロチャートを含む)
- ビュー・セレクタ・ビュー
- 次のタイプのゲージ・ビュー:
  - 球
  - 縦棒
  - 横棒
- 次のタイプのグラフ・ビュー:
  - 複数のメジャーを持つ円グラフ。かわりに個別の円グラフがメジャーごとに表示されます。
  - 時系列折れ線グラフ。
  - 散布図。
  - ウォーターフォール・グラフ。
- 「グラフのプロパティ」ダイアログの次のグラフ設定:
  - 「一般」タブ: **「ズームとスクロール」**。
  - 「スタイル」タブ: 「条件付き書式設定」の設定。
  - 「スケール」タブ: すべての設定。
  - 「タイトルとラベル」タブの次の書式設定:
    * グラフ・タイトルおよび軸タイトルに関する、フォント書式項目ダイアログの「表示オプション」タブの**「切捨て」**。
    * 縦軸のラベルおよびデータ・マーカーに関する項目の書式設定ダイアログの「数値書式」タブの**「数値の取扱い」**、**「負の数値の書式」**および**「3 桁**

ごとに区切る」、および横軸のラベルに関する*項目*の書式設定ダイアログの「数値書式」タブの**「小数点以下桁数」**。

  * 縦軸のラベルおよび横軸のラベルに関する*項目*の書式設定ダイアログの「表示オプション」タブの**「ラベルの向き」**と、縦軸のラベルに関する*項目*の書式設定ダイアログの「表示オプション」タブの**「省略形」**。

- 階層列。
- ダッシュボード列書式設定。
- ダッシュボード・プロンプト。
- ピボット表または表のプロンプト。
- ビューのプロンプト・エッジ。
- 固定されたダッシュボード列。

  「列のプロパティ」メニューの「列の固定」オプションを使用して、列をダッシュボード・レイアウトのエッジ(上または左)に固定できます。
- ダッシュボード列またはセクションに指定された固定サイズ。

  固定サイズを指定するには、「セクションのプロパティ」ダイアログおよび「列のプロパティ」ダイアログの「追加の書式設定オプション」領域の**「サイズ」**オプションを設定します。
- 表またはピボット表の行と列の固定ヘッダー。

  固定ヘッダーを指定するには、データの参照に使用する方法として**「スクロール・コンテンツがある固定ヘッダー」**を選択します。「表のプロパティ」ダイアログの「スタイル」タブ、「ピボット表のプロパティ」ダイアログおよび「トレリスのプロパティ」ダイアログの「一般」タブを参照してください。
- バブル・グラフ、散布図および円グラフのグループ化機能(それぞれ、「バブル」ドロップ・ターゲット、「点」ドロップ・ターゲット、「円」ドロップ・ターゲットにより実現)。

BI Publisher で、ピボット表が展開されると予想されるオブジェクトの動作にも注意する必要があります。

ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトの作成

ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトを作成できます。

ダッシュボード・ページを印刷またはエクスポートするときに、1 つ以上のカスタム・レイアウトをダッシュボード・ページに作成できます。ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトの作成についてを参照してください。

管理者は、**「≪印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト | Custom Print & Export Layouts | Bifndn≫」**コンポーネントの表示を制御できます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のダッシュボード・ページを Oracle BI Publisher にエクスポートする機能の有効化を参照してください。

1. ダッシュボードを編集します。
2. ダッシュボード・ページにナビゲートします。

3. **「ツール」**ボタンをクリックして、**「印刷とエクスポートのオプション」**を選択します。
4. 「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログで、**「印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト」**ボタンをクリックして、**「レイアウトの作成」**を選択します。BI Publisher レポート・エディタが新しいブラウザ・ウィンドウで開き、自動生成されたレイアウトがサムネイルとして表示されます。
5. BI Publisher で:
   a. 必要に応じてレイアウトを編集して保存します。
   b. 必要に応じて追加レイアウトを作成します。
   c. BI Publisher を終了します。
6. カスタム・レイアウトをダッシュボード・ページに対してエンド・ユーザーが使用できるようにする場合は、**「ツール」**ボタンをクリックして「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログを表示し、**「印刷とエクスポートのオプション」**を選択します。
7. 使用できるようにする「印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト」領域にある各カスタム・レイアウトに対して、次のものを選択します。
   - **PDF**: ダッシュボード・ページの「印刷」メニューでそのレイアウトを使用できるようにします。
   - **Excel**: ダッシュボード・ページの「Excel にエクスポート」メニューでカスタム・レイアウトを使用できるようにします。
8. **「OK」**をクリックします。
9. ダッシュボードを保存します。

カスタム・レイアウトの編集、置換または削除

作成したカスタム・レイアウトは編集、置換または削除できます。

たとえば、レイアウトが関連付けられているダッシュボード・ページが変更された場合は、カスタム印刷レイアウトを削除できます。

1. ダッシュボードを編集します。
2. ダッシュボード・ページにナビゲートします。
3. **「ツール」**ボタンをクリックして、**「印刷とエクスポートのオプション」**を選択します。「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログが表示されます。
4. **「印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト」**ボタンをクリックして、次のオプションのいずれかを選択します:
   - **レイアウトの作成と編集** - ダッシュボード・ページが変更された場合、既存のレイアウトが正しく動作しないレポートに警告が表示されます。次のように警告に応答します:
     – **「既存レイアウトを保持」**を選択すると、既存のレイアウトを保持できます。BI Publisher レポート・エディタが開いて、レイアウトを編集できるようになります。
     – **「既存レイアウトを削除して新規レイアウトを作成」**を選択すると、既存のレイアウトを削除して新しいレイアウトを作成できます。BI Publisher レ

ポート・エディタが開いて、新しいレイアウトを作成できるようになります。

- **レイアウトの置換** - 既存のレイアウトが置換されるという警告がレポートに表示されます。既存のレイアウトを置換することを確認します。「**OK**」をクリックすると、既存のデータ・モデルと BI Publisher レポートが削除されて新しいものが自動生成され、BI Publisher レポート・エディタが開いて、新しいレイアウトを作成できるようになります。
- **レイアウトの削除** - 警告が表示されます。すべての既存のレイアウトを削除することを確認します。「**OK**」をクリックすると、すべてのレイアウト(および関連付けられた BI Publisher レポートおよびデータ・モデル)が削除されます。

5. カスタム・レイアウトの編集、置換または削除が終了した後、「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログの「**OK**」をクリックしてダイアログを閉じます。
6. ダッシュボードを保存します。

ダッシュボード・ページのオブジェクトの削除

オブジェクトの追加後、オブジェクトが不要になった場合、オブジェクトを削除できます。

たとえば、前年度のブランド売上分析を、現行年度の分析に置き換えるために販売業績ダッシュボードから削除できます。

オブジェクトを削除する場合、次の点に注意してください。

- 列やセクションなどの他のオブジェクトを含むオブジェクトを削除すると、そのコンテナ内のオブジェクトも削除されます。
- 列を削除すると、列の配置を整えるためにページの他の列が自動的にサイズ変更される場合があります。
- カタログに保存されているオブジェクトの場合、オブジェクトはダッシュボード・ページからのみ削除されます。カタログからは削除されません。適切な権限を持つユーザーは、カタログのコンテンツを編集できます。Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトの管理を参照してください。

1. ダッシュボードを編集します。
2. 削除するオブジェクトが含まれているページに移動します。
3. ページ・レイアウト領域でオブジェクトにマウス・ポインタを合せてオブジェクトのツールバーを表示し、「**削除**」ボタンをクリックします。

ダッシュボードからのサブページの削除

ダッシュボードからサブページを削除できます。

ダッシュボードからサブページを削除すると、サブページとそのすべてのコンテンツが削除されます。

1. ダッシュボードを編集します。
2. サブページを削除するダッシュボード・ページを選択します。
3. ダッシュボード・ビルダーで「**ツール**」ボタンをクリックし、「**ダッシュボードのプロパティ**」を選択します。
4. 「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログの「ダッシュボード・ページ」領域で削除するサブページを選択し、「ダッシュボード・ページ」領域のツールバーで「**削除**」をクリックします。

5. 「削除の確認」ダイアログで、**「はい」**をクリックします。
6. 「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログで**「OK」**をクリックして、ダッシュボード・ページからサブページを削除します。

ダッシュボード・ページの削除

ダッシュボード・ページの作成をもう一度やり直すかダッシュボード・ページを削除する必要がある場合は、それを削除できます。

次の内容を削除できます。

- 現在のダッシュボード・ページ
- 「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログから 1 ページ以上のダッシュボード・ページ

現在のダッシュボード・ページの削除

現在表示されているダッシュボード・ページを削除できます。

ダッシュボードで作業をしている間に、ダッシュボードを削除できます。

1. ダッシュボードを編集します。
2. 削除するページに移動します。
3. **「現在のページの削除」**ボタンをクリックします。
4. 削除を確認します。

1 ページ以上のダッシュボード・ページの削除

1 ページ以上のダッシュボード・ページを一度に削除できます。

ダッシュボード・ページを削除すると、ユーザーと最も関係があるダッシュボードのみを保持できます。

1. ダッシュボードを編集します。
2. **「ツール」**ボタンをクリックし、**「ダッシュボードのプロパティ」**を選択します。
3. 「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログで、削除する各ページに対して次を実行します。
   a. **「ダッシュボード・ページ」**領域でページを選択します。
   b. 「ダッシュボード・ページ」ツールバーで**「削除」**をクリックします。
   c. 削除を確認します。
4. **「OK」**をクリックします。

他の名前と他の場所でのダッシュボードの保存

ダッシュボードは異なる名前で、また複数の場所に保存できます。

ダッシュボードを保存できます:

- 別の名前による

  ダッシュボードの新しい名前が保存先のフォルダに存在しないことが必須であり、そうでないと、保存操作が失敗します。

- Oracle BI プレゼンテーション・カタログの任意の場所

  ダッシュボードを/Shared Folders/*第1 レベルのサブフォルダ*の下の「ダッシュボード」サブフォルダに保存した場合、ダッシュボードはグローバル・ヘッダーの**「ダッシュボード」**メニューに表示されます。それ以外のレベル(例: /Shared Folders/Sales/Eastern)の Dashboards サブフォルダに保存した場合は、表示されません。ダッシュボードを Dashboards サブフォルダのサブフォルダ(例: /Shared Folders/Sales/Dashboards/Eastern)に保存した場合は、そのダッシュボードも表示されません。

  ダッシュボードが保存されていない/Shared Folders/*first level subfolder* の直下の Dashboards サブフォルダのフォルダを選択すると、新規ダッシュボードの保存先のフォルダに新規 **Dashboards** フォルダが自動的に作成されます。たとえば、ダッシュボードが保存されていない/Shared Folders/Sales という名前のフォルダを選択すると、新規 Dashboards フォルダが自動的に作成され、場所のエントリが/Shared Folders/Sales/Dashboards に変わります。(他のレベルのフォルダを選択すると、新規 **Dashboards** フォルダは自動的に作成されません。)

1. ダッシュボードを編集します。
2. **「ダッシュボードに名前を付けて保存」**ボタンをクリックしてダイアログを表示し、保存条件を指定します。

ダッシュボードのオープンと使用

ダッシュボードは、ユーザーが様々な形式のデータ分析にアクセスするための手段を提供します。

ほとんどすべてのオブジェクトをダッシュボードに追加できます。

1. グローバル・ヘッダーで**「カタログ」**をクリックし、カタログ・ページを表示します。
2. オープンするダッシュボードに移動し、**「開く」**リンクをクリックします。

   最初のダッシュボード・ページにダッシュボードが開きます。コンテンツが何も追加されていない場合、ダッシュボード・ページが空であることを通知するメッセージが表示されます。
3. (オプション)次のいずれかのタスクを行います。

   - 編集用に、ダッシュボード・ビルダーにダッシュボードを表示します。
   - ページのタブをクリックして、ダッシュボード・ページ間を移動します。
   - ページを印刷します。ブリーフィング・ブックと BI Publisher レポートの印刷についてを参照してください。
   - ページをリフレッシュします。

     このタスクを行うことによって、Oracle BI プレゼンテーション・サービス・キャッシュに保存されている情報が無視され、リフレッシュ操作が Oracle BI サーバーに発行されて処理が行われることを確認します。

     特定のダッシュボードまたは分析を選択した場合、プレゼンテーション・サービスは、同一の結果が最近リクエストされたかどうか、キャッシュを確認します。その場合、プレゼンテーション・サービスは最新の結果を返すため、BI サーバーとバックエンド・データベースによる不必要な処理を回避することができます。そうでない場合、分析が BI サーバーに発行され、処理されます。分析が BI サーバーのキャッシュを無視するよう強制することはできません。

管理者は、キャッシュ内容および期間を制御するキャッシュ設定を構成できます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のパフォーマンス・チューニングと問合せキャッシュの管理を参照してください。

- ブリーフィング・ブックにページを追加します。詳細は、新規または既存のブリーフィング・ブックへのコンテンツの追加を参照してください。
- ページへのブックマーク・リンクまたはプロンプト・リンクを作成します。ダッシュボード・ページへのリンクの作成についておよびダッシュボード・ページへのリンクの作成を参照してください。
- 保存済カスタマイズを適用します。ダッシュボード・ページの保存済カスタマイズとはおよび保存されたカスタマイズの適用を参照してください。
- 保存済カスタマイズを編集します。ダッシュボード・ページの保存済カスタマイズとはおよび保存済カスタマイズの編集を参照してください。
- 現在のカスタマイズを保存します。ダッシュボード・ページの保存済カスタマイズとはおよびカスタマイズの保存を参照してください。
- 現在のカスタマイズをクリアします。ダッシュボード・ページの保存済カスタマイズとはおよび現在のカスタマイズのクリアを参照してください。

ダッシュボードでキーボード・ショートカットを使用できます。Oracle BI EE と Oracle BI Publisher のキーボード・ショートカットを参照してください。

ダッシュボード・ページの保存済カスタマイズとは

保存済カスタマイズを使用すると、最もよく使用するアイテムや好みのアイテム(フィルタ、プロンプト、列のソート、分析でのドリル、セクションの展開と縮小など)を使用した現在の状態でダッシュボード・ページを保存し、後で表示できます。

カスタマイズを保存することで、ユーザーは、ダッシュボード・ページにアクセスするたびにこれらを手動で選択する必要がなくなります。

適切な権限とダッシュボードのアクセス権を持つユーザーは、次のアクティビティを行えます。

- 個人で使用するため、あるいは他のユーザーが使用するために、様々な選択の組合せを保存済カスタマイズとして保存します。
- 個人で使用するため、あるいは他のユーザーが使用するために、保存済カスタマイズをダッシュボード・ページのデフォルト・カスタマイズに指定します。
- 保存済カスタマイズを切り替えます。

保存されたカスタマイズの適用、現在のカスタマイズのクリア、カスタマイズの保存および保存済カスタマイズの編集を参照してください。

保存済カスタマイズの作成と使用のサンプル・シナリオ

保存されたカスタマイズの作成が必要になる状況はいくつかあります。

この項に、保存済カスタマイズの作成と使用について説明する 2 つのサンプル・シナリオを示します。

- シナリオ 1: 他のユーザーが使用するためにグループごとに作成される保存済カスタマイズ
- シナリオ 2: 個々のユーザーが使用するために作成される保存済カスタマイズ

シナリオ 1: 他のユーザーが使用するためにグループごとに作成される保存済カスタマイズ

他のグループまたはユーザーが使用できるようにグループのカスタマイズを保存したいという場合があります。

消費財企業の IT グループが、様々な製品グループで表示する必要のあるコンテンツを含むマスター・ダッシュボードを作成します。ダッシュボードにはフィルタとプロンプトが含まれ、製品グループのメンバーが、関係する結果を表示するために通常カスタマイズに使用します。

マスター・ダッシュボードには 2 つの分析が含まれており、1 つは東部、西部、北部および南部の地域の売上を示し、もう 1 つはこれらの地域で出荷されたすべての製品を示します。地域ごとの売上の分析にはプロンプトが含まれ、ユーザーが特定の地域を選択できます。集荷されたすべての製品の分析にはフィルタが含まれ、ユーザーが製品を選択できます。

IT コンサルタントが、各地域の Fizzy ブランド製品グループ向けにビューをカスタマイズします。コンサルタントは、まず、ダッシュボードでフィルタとプロンプトから東部地域と Fizzy ブランド製品を選択し、他のユーザーと共有できるようこれらの選択をカスタマイズとして保存します。次に、コンサルタントは、Fizzy ブランド製品を販売する東部地域グループのメンバーに、このカスタマイズをデフォルト・ビュー・カスタマイズとして割り当てます。コンサルタントは、このプロセスを西部、北部および南部地域について繰り返します。

西部地域の Fizzy ブランドの営業担当が Oracle Business Intelligence にサイン・インし、ダッシュボードを表示すると、まず、そのグループのデフォルト・ビュー・カスタマイズとして割り当てられている地域と製品に基づいた売上と出荷の情報が表示されます。そのグループのすべての営業担当は、通常同じ地域と製品を選択しますが、もうその必要がありません。

シナリオ 2: 個々のユーザーが使用するために作成される保存済カスタマイズ

独自の必要がある特定のユーザーによるカスタマイズの使用が可能です。

ビジネス・ユーザーのダッシュボードに、2 つのレポートが含まれていますが、1 つはすべての地域の売上を示し、もう 1 つは出荷されたすべての製品を示します。各レポートにはプロンプトが含まれ、ユーザーが特定の地域と製品を選択できます。ユーザーは、東部地域と Fizzy ブランド製品を選択します。ダッシュボードがリフレッシュされ、このデータのビューがユーザーに表示されます。ユーザーはこのビューをカスタマイズとして保存し、カスタマイズが個人の使用であることと、ダッシュボードが表示される際のデフォルト・カスタマイズであることを指定します。次に、ユーザーは、最も興味のある製品と地域の組合せを作成し、後で取得できるよう保存します。ユーザーは、IT グループが共有カスタマイズとして保存したカスタマイズにもアクセスできます。Fizzy ブランドの西部地域での売上を表示するには、ユーザーは、**「ページ・オプション」**ボタンをクリックし、**「保存されたカスタマイズの適用」**を選択して、Fizzy ブランドの西部地域での売上金額という名前のビューを選択します。データの新しいビューでダッシュボードがリフレッシュされます。

カスタマイズの保存

自分または他のユーザーが使用するカスタマイズを保存できます。

カスタマイズを自分または他のユーザーのダッシュボード・ページのデフォルト・カスタマイズにするかどうかも指定できます。ダッシュボード・ページの保存済カスタマイズとはを参照してください

1. カスタマイズを保存するダッシュボードを開きます。
2. カスタマイズを保存するページに移動します。

3. カスタマイズを行います。
4. ダッシュボード・ページで**「ページ・オプション」**ボタンをクリックし、**「現在のカスタマイズの保存」**を選択します。
5. 「現在のカスタマイズの保存」ダイアログで、カスタマイズのわかりやすい名前を入力します。
6. カスタマイズの保存対象を指定します。
   - 個人で使用するカスタマイズを保存する場合は、**「自分」**を選択します。
   - 他のユーザーが使用するカスタマイズを保存する場合は、**「その他」**を選択して**「権限の設定」**をクリックし、「保存されたカスタマイズ権限とデフォルト」ダイアログを表示して、ここでカスタマイズを使用する権限を持つアカウントと、カスタマイズをそのアカウントのデフォルト・カスタマイズにするかどうかを指定します。
7. オプションで、このカスタマイズを自分のデフォルト・カスタマイズにするには、**「これをこのページのマイ・デフォルトにします。」**を選択します。
8. **「OK」**をクリックします。

保存されたカスタマイズの適用

個人で使用するために自分で保存したカスタマイズまたは他のユーザーが保存したカスタマイズを適用できます。

他のユーザーが保存したカスタマイズを自分用に適用することもできます。たとえば、営業チームのメンバー別ブランド売上分析のカスタマイズ・ビューに対して作成された、共有の営業チーム・カスタマイズを適用できます。ダッシュボード・ページの保存済カスタマイズとはを参照してください

1. 保存済カスタマイズを適用するダッシュボードを開きます。
2. 適用するカスタマイズを含むページに移動します。
3. **「ページ・オプション」**ボタンをクリックして、**「保存されたカスタマイズの適用」**を選択します。

   自分で保存したカスタマイズがある場合は、それがリストの先頭に表示されます。共有の保存済カスタマイズが次にリストされます。現在のデフォルト・カスタマイズが太字で表示されます。
4. リスト内の保存済カスタマイズをクリックし、ダッシュボード・ページに適用します。

保存済カスタマイズの編集

カスタマイズの名前の変更、デフォルトとして使用するカスタマイズの変更、他のユーザーと共有しているカスタマイズに対する権限の変更、カスタマイズの削除を行えます。

ダッシュボード・ページの保存済カスタマイズとはを参照してください

1. カスタマイズを編集するダッシュボードを開きます。
2. 編集するカスタマイズが含まれているページに移動します。
3. ダッシュボード・ページで**「ページ・オプション」**ボタンをクリックし、**「保存済カスタマイズの編集」**を選択します。

4. 「保存済カスタマイズの編集」ダイアログで、必要に応じて、カスタマイズの名前の変更、デフォルトとして使用するカスタマイズの変更、他のユーザーと共有しているカスタマイズに対する権限の変更、カスタマイズの削除を行います。

5. 「**OK**」をクリックします。

現在のカスタマイズのクリア

フィルタ、プロンプト、列のソート、分析でのドリル、セクションの展開と縮小などのアイテムの選択が、希望のものと異なる場合、現在のカスタマイズをクリアできます。

たとえば、ブランド売上分析の表示を縮小するカスタマイズをクリアできます。

ダッシュボード・ページの保存済カスタマイズとはを参照してください

- ダッシュボード・ページで「**ページ・オプション**」ボタンをクリックし、「**マイ・カスタマイズのクリア**」を選択します。

新規ユーザーのダッシュボード・テンプレート・ページについて

新規ユーザーに表示される最初のダッシュボード・ページは、ダッシュボート・テンプレート・ページです。

ダッシュボード・テンプレート・ページは、新規ユーザーが初めてログインする際に個人のダッシュボード(マイ・ダッシュボード)への移入に使用されるダッシュボード・ページです。これによって、ユーザーが初めてログインしたとき、空のダッシュボードではなく、コンテンツが含まれた 1 ページ以上のダッシュボード・ページが表示されます。また、ユーザーは、これをベースに、自分のダッシュボード・ページを作成できます。

ダッシュボード・テンプレート・ページの仕組み

指定された名前(名前の指定のデフォルトは **default**)で`/Shared Folders` のサブフォルダに保存されているダッシュボードに、ユーザー用のダッシュボード・テンプレート・ページを作成します。

ユーザーが初めてログインすると、Oracle BI EE は、指定された名前のすべてのダッシュボードでダッシュボード・テンプレート・ページを検索し、ユーザーに権限が付与されているすべてのダッシュボード・テンプレート・ページをユーザーのマイ・ダッシュボード・フォルダにコピーして、ユーザーのマイ・ダッシュボードに表示します。

複数のダッシュボードのダッシュボード・テンプレート・ページに対してユーザーに権限が付与されている場合、Oracle BI EE は、それらのダッシュボードからすべてのテンプレート・ページをユーザーのマイ・ダッシュボード・フォルダにコピーし、ユーザーのマイ・ダッシュボードに名前のアルファベット順に表示します。同じ名前のページが 2 つある場合、いずれかのページの名前の先頭に、ダッシュボードが保存されたフォルダの名前が付加されます。

Oracle BI EE でダッシュボード・テンプレート・ページを検索する場所

デフォルトにより、Oracle BI EE では、`/Shared Folders` のサブフォルダに保存された「**≪デフォルト | default | Bifndn≫**」という名前のすべてのダッシュボードで、ダッシュボード・テンプレート・ページが検索されます。`/Shared Folders` の下のサブフォルダ(`/Shared Folders/Finance` など)のみが検索され、階層全体(`/Shared Folders/Finance/Div1` など)は検索されません。

組織がダッシュボード・テンプレート・ページを含むダッシュボードの名前について「**≪デフォルト | default | Bifndn≫**」以外の名前を指定した場合、Oracle BI EE では、`/Shared Folders` のサブフォルダ内の「**≪デフォルト | default | Bifndn≫**」

ではなく、その名前(「**≪テンプレート | Templates | Bifndn≫**」など)を持つダッシュボードでダッシュボード・テンプレート・ページが検索されます。

ダッシュボード・テンプレート・ページを含むダッシュボードの名前について「**≪デフォルト | default | Bifndn≫**」以外の名前を指定するには、管理者が`instanceconfig.xml`ファイルの■**DefaultName | DefaultName**□要素を設定する必要があります。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のプレゼンテーション設定の手動による変更を参照してください。

ユーザーによるダッシュボード・テンプレート・ページの使用方法

ダッシュボード・テンプレート・ページは、カスタム・ダッシュボート・ページを作成するための事前作成済の開始点となります。

ユーザーは、ダッシュボード・テンプレート・ページを次のように使用できます。

- 自分のダッシュボード・ページを作成するベースとして。

  ユーザーは、これらのダッシュボード・テンプレート・ページの任意のコンテンツを変更できます。コンテンツに加えた変更によって、マイ・ダッシュボード・フォルダ内のダッシュボード・テンプレート・ページのローカル・コピーが変更され、元のダッシュボード・テンプレート・ページは変更されません。

- 作成する追加ページの例として。

ユーザーが、ダッシュボード・テンプレート・ページをマイ・ダッシュボードから削除した場合、マイ・ダッシュボードにページを再度移入できません。ただし、マイ・ダッシュボード全体を削除した場合、再ログインするか、マイ・ダッシュボードに再度移動すると、すべての最新のダッシュボード・テンプレート・ページを使用してマイ・ダッシュボードが再作成されます。

新規ユーザーのダッシュボード・テンプレート・ページの作成

ユーザー用のダッシュボード・テンプレート・ページを作成し、ユーザーが初めてログインしたときに空のダッシュボードではなく、コンテンツが含まれた1ページ以上のダッシュボード・ページが表示されるようにできます。

ダッシュボード・テンプレート・ページの詳細は、新規ユーザーのダッシュボード・テンプレート・ページについてを参照してください。

ユーザーは、適切な権限を持つコンテンツにのみアクセスできます。後でダッシュボード・コンテンツやダッシュボードに対する権限を変更した場合、変更は、初めてログインする新規ユーザーにのみ適用され、マイ・ダッシュボードにダッシュボード・テンプレート・ページが移入されているユーザーには適用されません。

1. ダッシュボード・テンプレート・ページを含める1つ以上のダッシュボードを作成します。ダッシュボードごとに、次の指定を行います。

   - ダッシュボード・テンプレート・ページを含めるダッシュボードに指定する名前が組織で決まっていない場合は、「**名前**」フィールドに`default`と入力し、決まっている場合は、その名前を入力します。

   - 「**場所**」ボックスで、`/Shared Folders`のサブフォルダ内のDashboardフォルダ(`/Shared Folders/Finance/Dashboards`など)を選択します。

2. ダッシュボード・ページを1ページ以上作成し、コンテンツをページに追加します。

3. ダッシュボードに権限を割り当て、ダッシュボード・ページが移入されるマイ・ダッシュボードを持つすべてのユーザーに、読取りアクセスを許可します。

ダッシュボード・ページの公開

ダッシュボード・ページを共有のダッシュボードの場所に公開して、ページを他のユーザーと共有できます。

ダッシュボード・ページを公開する場合、次のようになります。

- 個人のコンテンツ(分析、プロンプトなど)は指定した場所にコピーされ、必要に応じて参照が更新されます。
- 共有コンテンツへの参照は保持されます。
- ページに変更を加え、保存していない場合、未保存の変更が保存済の変更とともに公開されます。
- 公開されたダッシュボード・ページを表示する他のユーザーが、ページのオブジェクトに対して適切な権限を持っていることを確認します。たとえば、ページにBI Publisher レポートが含まれる場合、ユーザーがそのレポートの表示に必要な権限を持っている必要があります。

1. ダッシュボードを編集します。
2. 公開するページに移動します。
3. **「ツール」**をクリックし、**「ダッシュボードへのページの公開」**を選択します。
4. 「ダッシュボードへのページの公開」ダイアログで、**「ダッシュボード」**に宛先ダッシュボードの名前を指定します。
5. コンテンツ(ページ、分析、プロンプトなど)が公開先に存在することを示す「ダッシュボード・ページの公開」警告が表示される場合、次のボタンをクリックします。
   - 公開操作を続け、既存のコンテンツを置き換える場合は、**「OK」**。
   - 公開操作を中止し、既存のコンテンツを置き換えない場合は、**「取消」**。
6. **「OK」**をクリックします。

   ダッシュボード・ページが宛先の場所にコピーされます。

ダッシュボード・ページへのリンクの作成について

ダッシュボード・ページへのリンクにより、他のユーザーがデータにアクセスしやすくなります。

組織で許可されている場合、ダッシュボード・ページへのリンクを作成できます。これによって、たとえば、リンクをブックマークとして保存したり、リンクをコピーして他のユーザーに電子メールで送信できます。ダッシュボード・ページへのリンクの作成を参照してください。

ブックマーク・リンクとプロンプト・リンクという 2 種類のリンクを作成できます。次の項で、これらのリンクについて説明します。

- ブックマーク・リンクとは
- プロンプト・リンクとは

ブックマーク・リンクとは

ダッシュボード・ページおよびページの状態へのリンクを作成できます。

ブックマーク・リンクは、次のように、ダッシュボード・ページのパスとページの状態の全側面を表した URL です:

```
http://localhost/10.1.3.2/saw.dll?Dashboard&_scid=7ndOC-SjmWo&PortalPath=%2Fusers
%2Fadministrator
%2F_portal&Page=p2&PageIdentifier=7fsg0r2sdssvgen4&BookmarkState=r78an1mbj0fj4lmqhdjf
ndvvai
```

ブックマーク・リンクを作成すると、次のことができます。

- リンクをブックマークとして保存し、後でまったく同じページ・コンテンツに戻ることができます。
- リンクをコピーして他のユーザーに送信できますが、そのユーザーに同じ権限とページへのアクセス権が付与されている場合、まったく同じコンテンツが表示されます。

ブックマーク・リンクを作成すると、ダッシュボード・ページの状態が、組織で指定された期間非表示のブックマーク・オブジェクトとしてカタログに保存されます。デフォルトは 30 日です。組織で指定された期間については、管理者に確認してください。ブックマーク・リンクを作成したときのダッシュボード・ページの状態が保存されるため、リンクの作成後、ページ・コンテンツの変更を続けることができます。

プロンプト・リンクとは

プロンプト・リンクを使用すると、ダッシュボードを簡素化して表すことができます。

プロンプト・リンクは、次のように、ダッシュボード・ページのパスと簡素化したダッシュボード・プロンプトを表したものです。

```
<Content Path>&Action=Navigate&col1="Products"."P1  Product"&val1="Bluetooth
Adaptor"&psa1="A - Sample Sales"
```

プロンプト・リンクを作成すると、プロンプトに対する別の値の追加など、リンクを手動またはプログラムで操作できます。プロンプト・リンクでは、ブックマーク・リンクと同じようにページの状態の全側面を表すことはできません。これは、非プロンプト・パラメータの正確な状態をレプリケートできないためです。

ダッシュボード・ページのパスと簡素化したダッシュボード・プロンプトを表した URL は、プロンプト・リンクで作成するのではなく、手動で作成することもできます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレータ・ガイド*の Oracle BI EE Web サービスのサービスおよびメソッドの説明を参照してください。

プロンプト・リンクの基本構文、プロンプト・リンクのパラメータおよびプロンプト・リンクの操作に関するガイドラインを参照してください。

プロンプト・リンクの基本構文

プロンプト・リンクは、基本的な構文ルールに従う必要があります。

プロンプト・リンクの基本構文は次のとおりです。

```
<Content Path>&Action=Navigate&col1&op1&val1&col2&op2&val2&var3&op3&val3…
```

ここで、Content Path は次の基本 URL のいずれかになります:

```
http://<obiee url path>/saw.dll?Dashboard&PortalPath=<dashboard path>
http://<obiee url path>/saw.dll?Dashboard&PortalPath=<dashboard path>&Page=<page
name>
http://<obiee url path>/saw.dll?PortalGo&path=<analysis or prompt path>
http://<obiee url path>/saw.dll?Go&path=<analysis or prompt path>
```

プロンプト・リンクのパラメータ

パラメータを使用してプロンプト・リンクを変更できます。

プロンプト・リンクの変更には次のパラメータを使用できます:

- **&Action=** - プロンプト・リンクで実行されるアクションを指定します。有効な値は:
  - **Navigate** - ダッシュボード・ページにナビゲートします。
  - **Print** - ページ・コントロールやホット・リンクなどなしで、PDF への印刷用に結果をフォーマットします。
  - **Download** - 結果を Microsoft Excel にダウンロードします。

  viewState 引数が存在する場合、「**≪印刷 | Print | Bifndn≫**」および「**≪ダウンロード | Download | Bifndn≫**」は使用できません。詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレータ・ガイド*の Oracle BI プレゼンテーション・サービスの Go URL のオプション・パラメータを参照してください。
- **&col#=** - 列プロンプトに使用する列を識別します。

  例:

  ```
  &col1="EASTERN REGION"
  ```
- **&var#=** - 変数プロンプトに使用される変数または列プロンプトによって設定される変数を識別します。

  変数を明示的に参照しない場合、デフォルトでは、すべての変数の有効範囲がダッシュボード・ページになります。

  オプション・パラメータ*&P1=*で制御されるデフォルトの有効範囲を使用する例:

  ```
  &var1="myRegion"
  ```

  ダッシュボードの有効範囲を明示的に設定する例:

  ```
  &var1=dashboard.variables['myRegion']
  ```

  ダッシュボード・ページの有効範囲を明示的に設定する例:

  ```
  &var1=dashboard.currentPage.variables['myRegion']
  ```

  ダッシュボードの有効範囲とダッシュボード・ページの有効範囲の両方を設定する必要がある場合は、両方の変数を URL に含めます。

  このパラメータでセッション変数を設定することはできません。ただし、リクエスト変数を設定してセッション変数をオーバーライドすることはできます。たとえば、次のようにリクエスト変数を設定すれば *NQ_SESSION.REGION_VAR* をオーバーライドできます。

  ```
  &var1=requestVariables['REGION_VAR']
  ```
- 次の値パラメータ:
  - **&val#=** - プロンプトの値を指定します。

    例:

    ```
    &val1="EASTERN REGION"
    ```

  - **&valgrp#=** - カスタム・グループのカタログ・パスにプロンプトの値を設定します。

    例:

    ```
    &valgrp1="/shared/folder/myCustomGroup"
    ```

  - **&valsv#=** - サーバー変数にプロンプトの値を設定します。

    例:

    ```
    &valsv1="SALESREGION"
    ```

  *val#*および*valgrp#*パラメータは相互に共存可能ですが、*valsv#*パラメータとは共存できません。つまり、プロンプトでは*val#*と*valgrp#*の任意の組合せが可能ですが、*valsv#*と*val#*の両方を指定することはできません。

- **&cov#=** - 自分も変数を設定する列プロンプトの変数を設定します。

  例:

  ```
  &var1=myRegion&cov1="Markets"."Region"&val1="EASTERN.REGION"+"WESTERN REGION"
  ```

- **&op#=** - (オプション)等しい(eq)などの演算子を指定します。

  Go URL と同じ演算子を使用します。これらの演算子のリストは、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレータ・ガイド*のナビゲーション・パラメータを参照してください。

  例:

  ```
  &col1="Markets"."Region"&val1="EASTERN REGION"+"WESTERN REGION"&op1=in
  ```

- **&psa#=** - (オプション)プロンプトのプライマリ・サブジェクト領域を指定します。

  値のデータ型がサブジェクト領域によって正しく指定される必要があるプロンプトの場合は、このパラメータを使用します。

  例:

  ```
  &var1=myRegion&cov1="Markets"."Region"&val1="EASTERN REGION"+"WESTERN
  REGION"&psa1=Paint
  ```

  プロンプト・リンクに複数のサブジェクト領域が含まれている場合は、サブジェクト領域を指定しないプロンプト(たとえば、`&psa1="Products"."P1 Products"`)を最初に指定し、サブジェクト領域を指定するプロンプト(たとえば、`&psa2="B-Sample Target"."Products"."P1 Products"`)を最後に指定します。

- **&formulause#=** - プロンプト値が、(二重列機能用に構成されたリポジトリの)コード値か表示値かを指定します。

  このパラメータを使用しない場合、値は表示値であると見なされます。

  例:

  ```
  &var1=myRegion&cov1="Markets"."Region"&val1="2"+"3"&formulause1=code
  ```

- 階層列を使用するプロンプトの場合:

  - **&hierid#=** - (必須)階層 ID を識別します。
  - **&dimid#=** - (必須)ディメンション ID を識別します。
  - **&tblnm#=** - (必須)表名を識別します。

例:

```
&col1="Products"."Products Hierarchy"&hierid1=Products Hierarchy&dimid1=H1
Products&tblnm1="Products"&val1="*"+"all"&psa1="A - Sample Sales"
```

複数のレベルにまたがる複数の値がある場合は、値の構文を拡張する必要があります。値の構文の拡張を参照してください。

- **&P1=** - すべてのプロンプト・リンクのパラメータの有効範囲を定義します。有効な値は:
  - **dashboard**
  - **dashboardPage** (有効範囲が指定されていない場合のデフォルト)
  - **report**

  このパラメータはプロンプト・リンクのフィルタと変数の両方に影響します。

  例:

  ```
  &P1=dashboard
  ```

値の構文の拡張

階層列を含むプロンプト・リンクに、複数のレベルにまたがる複数の値がある場合は、値の構文を拡張する必要があります。

値の構文を拡張するには、levelID を追加し、各配列を連結します。

1. levelID に基づいて値をグループ化します。
2. 次に示すように、同じレベルに属するすべての値を 1 つの配列に配置して、対応する levelID を各配列の前に追加します:

   ```
   "Detail Product"+"7"+"4"
   ```

3. 各配列を連結して、+*で区切ります。
4. 連結した文字列全体を&val#=パラメータに指定します。例:

   ```
   &col1="Products"."Products Hierarchy"&hierid1=Products Hierarchy&dimid1=H1
   Products&tblnm1="Products"&val1="LOB"+"Digital"+*"Brand"+"HomeView"+*"Detail
   Product"+"7"+"4"&psa1="A - Sample Sales"
   ```

プロンプト・リンクの操作に関するガイドライン

プロンプト・リンクは、いくつかの方法で変更できます。

プロンプト・リンクの操作に関するガイドラインは次のとおりです:

- &col#=と&var#=の任意の組合せを使用できますが、1 から *N* の番号を順番に付けます。たとえば、var1、col2、col3 や col1、var2、col3 のように使用できます。
- プラス記号(+)を使用して値を区切ります。
- 日付、時間およびタイムスタンプに対して、ロケールに依存しない次の書式を使用します:

  日付書式の場合:

  ```
  YYYY-MM-DD
  ```

  時間書式の場合:

```
hh24:mm:ss
```

タイムスタンプ書式の場合(タイム・ゾーン UTC を想定):

```
YYYY-MM-DD hh24:mm:ss
```

- URL が正しくエンコードされていることを確認してください。エスケープされていない URL を使用できないブラウザやプラットフォームもあります。たとえば、二重引用符(")は%22 に、空白文字は%20 にエスケープします。
- サポートされる URL 文字の長さがブラウザによって異なることに注意してください。サポートされる長さより URL が長い場合は切り捨てられます。この問題は、ブックマーク・リンクを使用するか、もっと長い長さをサポートする別のブラウザを使用すれば回避できます。
- オプションで、値に空白が含まれていない場合、二重引用符を省略します。

ヒント: プロンプト URL を手動ですばやく正確に作成するには、対応するプロンプトが設定されているダッシュボードにナビゲートして、目的のプロンプト値を適用し、プロンプト URL を生成するプロンプト・リンクを作成して、その URL をテンプレートとして使用します。

ダッシュボード・ページへのリンクの作成

組織で許可されている場合、ダッシュボード・ページへのリンクを作成できます。

管理者は、`instanceconfig.xml` ファイル内の設定および権限の設定により、**「≪ブックマーク・リンクの作成｜Create Bookmark Link｜Bifndn≫」**および**「≪プロンプト・リンクの作成｜Create Prompted Link｜Bifndn≫」**オプションの表示を制御できます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のダッシュボード・ページへのリンクの作成機能の有効化および *Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のプレゼンテーション・サービス権限の管理を参照してください。

新しい結果でダッシュボードを置き換える(新しい結果をダッシュボードに直接表示するのではなく)よう設定されている分析でドリルすると、**「ブックマーク・リンクの作成」**オプションが、「ページ・オプション」メニューのオプションとしてではなく、新しい結果の下のリンクとして表示されます。(分析でのドリルの作用を指定するには、セクションの「プロパティ」メニューの**「その場でドリル」**オプションを使用します。

ダッシュボード・ページへのリンクの作成についてを参照してください。

1. ダッシュボード・ページへのリンクを作成するダッシュボードを開きます。
2. リンクの作成対象のページに移動します。
3. ダッシュボード・ページで**「ページ・オプション」**ボタンをクリックし、次のようにします。
   - ブックマーク・リンクを作成する場合、**「ブックマーク・リンクの作成」**を選択します。
   - プロンプト・リンクを作成する場合、**「プロンプト・リンクの作成」**を選択します。

   リンクがブラウザのアドレス・バーに表示されます。
4. リンクが次の場合:
   - ブックマーク・リンクの場合、ブックマークとして保存するか、コピーして他のユーザーに送信できます。

- プロンプト・リンクの場合、手動またはプログラムでリンクを操作できます。

ブリーフィング・ブックの使用

ブリーフィング・ブックにより、データのプレゼンテーションを整理してユーザーに配布できます。

次のトピックで、ブリーフィング・ブックとその使用方法について説明します。

- ブリーフィング・ブックとは
- 新規または既存のブリーフィング・ブックへのコンテンツの追加
- ブリーフィング・ブックの編集
- ブリーフィング・ブックのダウンロード
- ダッシュボード・ページへのブリーフィング・ブックのリストの追加
- エージェントを使用したブリーフィング・ブックの配信

ブリーフィング・ブックとは

ブリーフィング・ブックは、ダッシュボード・ページ、個々の分析および BI Publisher レポートの静的または更新可能なスナップショットの集まりです。

次のことができます:

- ダッシュボード・ページ(BI Publisher レポートを含むページなど)または個々の分析の内容を、新規または既存のブリーフィング・ブックに追加します。新規または既存のブリーフィング・ブックへのコンテンツの追加を参照してください。
- ブリーフィング・ブックを編集して、コンテンツの並替えや削除、およびコンテンツ・タイプ、ナビゲーション・リンクのプロパティとコンテンツの説明の変更を行います。ブリーフィング・ブックの編集を参照してください。
- ブリーフィング・ブックを PDF または MHTML 形式でダウンロードし、印刷または表示します。ブリーフィング・ブックのダウンロードを参照してください。

  PDF 版のブリーフィング・ブックには、自動生成された目次が含まれます。PDF 版のブリーフィング・ブックの目次についてを参照してください。
- ブリーフィング・ブックのリストをダッシュボード・ページに追加します。ダッシュボード・ページへのブリーフィング・ブックのリストの追加を参照してください。
- 組織に Oracle Business Intelligence Delivers のライセンスが供与されている場合、エージェントを使用して、ブリーフィング・ブックの更新、スケジュールおよび配信を行います。エージェントを使用したブリーフィング・ブックの配信を参照してください。

PDF 版のブリーフィング・ブックの目次について

PDF 版のブリーフィング・ブックには、自動生成された目次が含まれます。

目次には、ブリーフィング・ブック内の各ダッシュボード・ページ、分析およびレポートに対するエントリが含まれます。これらの各エントリには、タイムスタンプと、PDF ファイル内のページ番号が含まれます。タイムスタンプ値は、コンテンツのブリーフィング・ブックへの保存方法によって異なります。コンテンツが更新可能として保存された場合、タイムスタンプは現在のものです。コンテンツがスナップショットとして保存された場合、タイムスタンプはスナップショットの時間です。

ダッシュボード・ページの各エントリの下に、そのページに含まれているブリーフィング・ブック・リンクが最大 9 個インデントされて表示されます。これらのエントリにはタイムスタンプは含まれません。例:

```
Table of Contents

My Dashboard Page 7/11/2008 9:15:20 AM . . . . . .1
Years to Dollars Dashboard . . . . . .2
```

管理者は、目次のテンプレートを変更して、ブリーフィング・ブックに生成される目次の外観を変更することができます。

ノート: 目次は常に英語で生成されます。他の言語はサポートされていません。したがって、ブリーフィング・ブックに生成された目次を翻訳する必要があります。

ブリーフィング・ブックとともに BI Publisher レポートを含める方法の詳細は、ブリーフィング・ブックと BI Publisher レポートの印刷についてを参照してください。

新規または既存のブリーフィング・ブックへのコンテンツの追加

ダッシュボード・ページ(BI Publisher レポートを含むページなど)または個々の分析の内容をブリーフィング・ブックに追加できます。

コンテンツは、既存のブリーフィング・ブックまたは新たに作成するブリーフィング・ブックに追加できます。

1. ブリーフィング・ブックに追加するコンテンツを含むダッシュボードを開きます。ダッシュボードのオープンと使用を参照してください。
2. 追加するページまたは追加する分析を含むページに移動します。
3. 次のアクションのいずれかを実行します。
   - ダッシュボード・ページのコンテンツをブリーフィング・ブックに追加するには、ダッシュボード・ページで**「ページ・オプション」**ボタンをクリックし、**「ブリーフィング・ブックへの追加」**を選択します。

     「ブリーフィング・ブックへの追加」オプションは、ダッシュボード・ページが空の場合、または「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログの**「「ブリーフィング・ブックへの追加」の表示」**ボックスがページに対して選択されていない場合、使用できません。
   - 個々の分析の結果をブリーフィング・ブックに追加するには、ダッシュボードで分析を特定し、**「ブリーフィング・ブックへの追加」**リンクをクリックします。

     リンクは、分析のダッシュボードへの追加時に「レポート・リンク」ダイアログで**「ブリーフィング・ブックへの追加」**オプションが選択された場合にのみ表示されます。**「ブリーフィング・ブックへの追加」**オプションの設定の詳細は、「レポート・リンク」ダイアログを参照してください。
4. 「ブリーフィング・ブックのコンテンツの保存」ダイアログで、**「参照」**をクリックして「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。
5. 「名前を付けて保存」ダイアログで、コンテンツを次のように保存します。
   - 新規ブリーフィング・ブックの場合、ブリーフィング・ブックの保存先を**「保存場所」**フィールドに指定し、ブリーフィング・ブックの名前を**「名前」**フィールドに入力し、オプションで、説明を**「説明」**フィールドに入力し、**「OK」**をクリックします。

- 既存のブリーフィング・ブックの場合、ブリーフィング・ブックを選択し、「**OK**」をクリックします。

6. 必要に応じて「ブリーフィング・ブックのコンテンツの保存」ダイアログの残りのフィールドに入力し、「**OK**」をクリックします。

ブリーフィング・ブックの編集

ブリーフィング・ブックを編集して、コンテンツの並替えや削除、およびコンテンツ・タイプ、ナビゲーション・リンクのプロパティとコンテンツの説明の変更を行えます。

ブリーフィング・ブックを定期的にレビューおよび編集して、継続的に更新します。

1. ブリーフィング・ブックを編集するには:

   - カタログのグローバル・ヘッダーで、「**カタログ**」をクリックします。
   - ダッシュボード・ページで、ブリーフィング・ブックを含むダッシュボード・ページを開きます。

2. 編集対象のブリーフィング・ブックに移動し、「**編集**」をクリックします。
3. 「ブリーフィング・ブックの編集」ダイアログで、次のようにコンテンツを変更します。

   a. コンテンツを選択します。

   b. 「**ページの編集**」をクリックします。

   c. 「ページのプロパティ」ダイアログで、コンテンツ・タイプ、更新可能なコンテンツに対するナビゲーション・リンクの数またはコンテンツの説明を、必要に応じて変更します。

   d. 「**OK**」をクリックします。

4. コンテンツを並び替えるには、コンテンツを選択して、目的の場所にドラッグ・アンド・ドロップします。
5. コンテンツを削除するには、コンテンツを選択して、「**削除**」をクリックします。
6. 「**OK**」をクリックします。

ブリーフィング・ブックのダウンロード

ダッシュボード・ページ、個々の分析および BI Publisher レポートの静的または更新可能なスナップショットの集まりを、ブリーフィング・ブックの形式でダウンロードできます。

次のことができます:

- コンピュータにブリーフィング・ブックを MHTML 形式でダウンロードし、共有してオフラインで表示します。
- ブリーフィング・ブックを PDF 形式でダウンロードし、印刷します。

  ブリーフィング・ブックの PDF ファイルを表示または印刷するには、Adobe Reader アプリケーションが必要です。

  ブリーフィング・ブックに含まれている BI Publisher レポートは、レポート自体が PDF 出力に対応している場合にのみ、PDF ファイルに含まれます。

分析やダッシュボードの「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログでの**「印刷行」**リストの設定により、PDF に分析のすべての行を表示するかそれとも表示されている行のみを表示するかが決まります。

PDF 版のブリーフィング・ブックには、自動生成された目次が含まれます。PDF 版のブリーフィング・ブックの目次についてを参照してください。

1. グローバル・ヘッダーで**「カタログ」**をクリックし、カタログ・ページを表示します。
2. ダウンロードするブリーフィング・ブックに移動します。
3. 次のアクションのいずれかを実行します。
   - ブリーフィング・ブックを PDF 形式でダウンロードするには、**「PDF」**をクリックし、ファイルを開くか保存します。
   - ブリーフィング・ブックを MHTML 形式でダウンロードするには、**「Web アーカイブ(.mht)」**をクリックし、ファイルを開くか保存します。ダウンロードしたブリーフィング・ブックは`.mht`ファイル拡張子で保存され、ブラウザで開くことができます。ブリーフィング・ブックを電子メールで送信したり、共有できます。

ダッシュボード・ページへのブリーフィング・ブックのリストの追加

ブリーフィング・ブックのリストをダッシュボード・ページに追加できます。

ブリーフィング・ブックをリストすることで、ユーザーがダッシュボードに関連した情報に簡単にアクセスできるようになります。

1. ダッシュボードを編集します。
2. ブリーフィング・ブックのリストの追加先のページに移動します。
3. 「ダッシュボード・オブジェクト」ペインから、フォルダ・オブジェクトをセクションにドラッグ・アンド・ドロップします。
4. ページ・レイアウト領域でフォルダ・オブジェクトにマウス・ポインタを合せてオブジェクトのツールバーを表示し、**「プロパティ」**ボタンをクリックします。
5. 「フォルダ・プロパティ」ダイアログの**「フォルダ」**フィールドに、リストするブリーフィング・ブックを格納するフォルダを入力します。
6. **「展開」**ボックスで、フォルダを展開して表示するかどうかを指定します。
7. **「RSS リンクの表示」**ボックスで、RSS フィード・オプションをフォルダに追加するかどうかを指定します。
8. **「OK」**をクリックし、**「保存」**をクリックしてダッシュボードを保存します。

   フォルダがダッシュボードに追加されます。ダッシュボード・ページで次のようにします。

   - フォルダが展開されていない場合、ブリーフィング・ブックのリストを表示するには、フォルダをクリックします。
   - ブリーフィング・ブックを編集するには、**「編集」**リンクをクリックします。
   - ブリーフィング・ブックを PDF 形式でダウンロードするには、**「PDF」**リンクをクリックします。
   - ブリーフィング・ブックを MHTML 形式でダウンロードするには、**「Web アーカイブ(.mht)」**リンクをクリックします。

エージェントを使用したブリーフィング・ブックの配信

エージェントを構成してブリーフィング・ブックをユーザーに配信できます。

エージェントによってブリーフィング・ブックを配信して、最新のブリーフィング・ブックを受信するようにします。

1. ブリーフィング・ブックの配信に使用するエージェントを作成または編集します。
2. 「エージェント」エディタの「配信コンテンツ」タブで、**「参照」**をクリックしてブリーフィング・ブックを選択します。

   エージェントが稼働すると、ブリーフィング・ブックが配信されます。

6

分析用データのフィルタリングと選択

この章では、フィルタ、選択ステップ、グループおよび計算項目を Oracle Business Intelligence Enterprise Edition で作成する方法を説明します。ここでは、これらのオブジェクトを使用して、分析およびダッシュボードに表示されるデータを指定する方法を説明します。

ビデオ

ビデオ

トピック

この章は次の項で構成されています。

- インラインまたは名前付きでのオブジェクトの保存
- フィルタおよび選択ステップとは
- データの選択の使用
- 列フィルタの作成
- 列フィルタの編集
- EVALUATE_PREDICATE 関数の使用
- 分析への名前付きフィルタの適用
- 列フィルタの組合せとグループ化
- 保存済分析のフィルタとしての使用
- 分析の列フィルタに対する SQL 文の作成または編集
- 計算済メジャーの使用
- グループと計算項目の使用

インラインまたは名前付きでのオブジェクトの保存

この項では、オブジェクトのインラインまたは名前付きでの保存について説明します。次のトピックが含まれています:

トピック

- インライン・オブジェクトまたは名前付きオブジェクトとは
- 名前付きオブジェクトのフォルダ構造とは
- インラインまたは名前付きでのフィルタの保存

- インラインまたは名前付きでのグループおよび計算項目の保存

インライン・オブジェクトまたは名前付きオブジェクトとは

特定のオブジェクトを使用する際、他のオブジェクトを作成して、そのオブジェクトとともに保存できます。

他のオブジェクトとともに保存される場合、そのオブジェクトはインラインで保存されます。フィルタ、グループおよび計算項目をインラインで保存できます。たとえば、分析の一部としてグループを作成できます。分析を保存すると、グループはインラインで、つまり分析とともに保存されます。

これらのオブジェクトは、インラインで保存する以外に、個別のオブジェクトとしてOracle BI プレゼンテーション・カタログにサブジェクト領域とともに保存できます。オブジェクトを単独で保存すると、オブジェクトは名前付きオブジェクトになります。1 つのオブジェクトを作成し、名前付きオブジェクトで指定された列を含む分析、ダッシュボード(フィルタの場合)やダッシュボード・ページ(フィルタの場合)に複数回使用できるため、名前付きオブジェクトによって再利用性が得られます。名前付きオブジェクトを更新および保存すると、名前付きオブジェクトが使用されているすべてのオブジェクトに更新がただちに適用されます。

たとえば、グループを分析にインラインで保存した後で、単独のオブジェクトとしてカタログに保存できます。その名前付きグループを「カタログ」ペインから他の分析に適用できます。

名前付きオブジェクトのフォルダ構造とは

名前付きフィルタ、グループおよび計算項目は、関連するサブジェクト領域フォルダに通常保存されます。

サブジェクト領域フォルダに保存することによって、同じサブジェクト領域に対して分析を作成する場合にオブジェクトが使用可能であることが保証されます。

/My Folders に保存されている名前付きオブジェクトは、そのユーザーのみが使用できます。`/Shared Folders` フォルダに保存されているオブジェクトは、フォルダにアクセスする権限を持つ他のユーザーも使用できます。サブジェクト領域フォルダが`/My Folders` フォルダにも`/Shared Folders` フォルダにもない場合、サブジェクト領域フォルダが自動的に作成されます。オブジェクトを保存する際、「名前を付けて保存」ダイアログにはデフォルトの保存パス`/My Folders/Subject Area Contents/<subject area>`が表示されます。ただし、ダイアログの「フォルダ」領域には、カタログ内のサブジェクト領域フォルダのすべてのインスタンスが表示され続けます。

インラインまたは名前付きでのフィルタの保存

フィルタはインライン・フィルタまたは名前付きフィルタとして保存できます。

「分析」エディタの「基準」タブの「フィルタ」ペインでインライン・フィルタを作成する際、オプションでインライン・フィルタを名前付きフィルタとして保存できます。名前付きフィルタは、分析レベルで作成することも、グローバル・ヘッダーからスタンドアロン・オブジェクトとして作成することもできます。

名前付きフィルタは、ダッシュボードに埋め込まれている分析または同じダッシュボード・ページに埋め込まれている分析のすべてまたは一部をフィルタできます。

インラインまたは名前付きでのグループおよび計算項目の保存

グループおよび計算項目を保存すると、アプリケーション全体でこれらの関数を再使用できます。

グループまたは計算項目をインライン・オブジェクトまたは名前付きオブジェクトとして保存できます。

- ビューの編集や保存の際、または複合レイアウトでの操作の際にグループまたは計算項目を作成すると、グループまたは計算項目は分析にインラインで保存されます。
- 「選択ステップ」ペインでの操作時は、次のようになります。
  - カタログ内の名前付きオブジェクトとしてステップ内にあるグループまたは計算項目を保存できます。
  - ステップのセットまたは列に対する結果のメンバー・リストを名前付きオブジェクトとして保存できます。ステップの 1 つに計算項目が含まれる場合、ステップのセットをグループとして保存できません。

別の分析へのグループの追加を参照してください。

計算項目またはグループを名前付きオブジェクトとしてカタログに保存するには:

1. 「選択ステップ」ペインを表示します。
2. 計算項目またはグループのリンクをクリックし、**「計算項目を次の名前で保存」**または**「グループを次の名前で保存」**をクリックして「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。
3. ダイアログを完成させ、オブジェクトをカタログに保存します。

ステップのセットをグループとしてカタログに保存するには:

1. 「選択ステップ」ペインを表示します。
2. 列名の一番右にある**「選択ステップの保存」**ボタンをクリックします。
3. 「選択ステップの保存」ダイアログを完成させ、グループをオブジェクトとしてカタログに保存します。

フィルタおよび選択ステップとは

フィルタと選択ステップの 2 つを使用して、分析を実行すると表示される結果を限定し、結果が特定の質問に対する解答となるようにします。

フィルタと選択ステップの両方を使用して、分析の実行時に表示される結果を限定します。これは、結果が特定の質問に対する回答になることを意味します。分析に対して選択した列とフィルタと選択ステップによって、結果に何が含まれるかが決まります。フィルタの選択ステップに基づき、基準に合う結果のみが表示されます。たとえば、所属する業界によっては、フィルタと選択ステップを使用して、業績が最もよい 10 人を確認できます。また、特定のブランドの売上金額や最も収益性の高い顧客も確認できます。

フィルタと選択ステップは列レベル・ベースで適用し、分析でデータを限定する 2 つの方法を提供します。フィルタは常に、選択ステップが適用される前に列に適用されます。ステップは指定された順序で適用されます。フィルタと選択ステップは様々な点で異なります。

- フィルタは、問合せの集計前に列に直接適用されます。フィルタは、問合せおよびメジャーの結果値に影響を与えます。たとえば、集計すると 100 になるメンバーのリストがあるとします。時間の経過とともに、フィルタ基準に合うメンバーが増え、集計が 200 になります。
- 選択ステップは問合せの集計後に適用され、表示されているメンバーにのみ作用し、結果の集計値には作用しません。たとえば、集計すると 100 になるメンバーのリストがあるとします。選択ステップを使用してメンバーの 1 つを削除した場合、集計は 100 のままです。選択ステップは列ごとで、列をまたぐことができません。

分析に対して選択した列とフィルタと選択ステップによって、結果に何が含まれるかが決まります。フィルタの選択ステップに基づき、基準に合う結果のみが表示されます。たとえば、所属する業界によっては、フィルタと選択ステップを使用して、業績が最もよい 10 人、特定のブランドの売上金額、最も収益性の高い顧客などを確認することが考えられます。

プロンプトと呼ばれる別の種類のフィルタは、ダッシュボードのすべてのアイテムに適用できます。実行時にプロンプトを使用して、選択ステップおよびフィルタを完了できます。ダッシュボードと分析でのプロンプトを参照してください。

Oracle BI Enterprise Edition にはフィルタ・ビューと選択ステップ・ビューがあり、これらを分析に追加すると、その分析に適用されているフィルタや選択ステップが表示されます。これらのビューを追加すると、分析内の情報に対するユーザーの理解度が高まります。ダッシュボードでの表示用のビューの追加を参照してください。

フィルタと選択ステップの違い

フィルタと選択ステップは列レベル・ベースで適用し、分析でデータを限定する 2 つの方法を提供します。

フィルタは常に、選択ステップが適用される前に列に適用されます。ステップは指定された順序で適用されます。フィルタと選択ステップは様々な点で異なります。

フィルタ

フィルタは、属性列およびメジャー列に直接適用できます。フィルタは、問合せの集計前に適用され、問合せとその結果のメジャーの値に反映される必要があります。たとえば、集計すると 100 になるメンバーのリストがあるとします。時間の経過とともに、フィルタ基準に合うメンバーが増え、集計が 200 になります。

選択ステップ

選択ステップは問合せの集計後に適用され、表示されているメンバーにのみ作用し、結果の集計値には作用しません。たとえば、集計すると 100 になる階層メンバーのリストがあるとします。選択ステップを使用してメンバーの 1 つを削除した場合、集計は 100 のままです。

選択ステップは、属性列と階層列の両方に作成できます。選択ステップは列ごとで、列をまたぐことができません。属性列には集計メンバーがないため、属性列に対しては選択ステップを使用してもフィルタを使用しても階層列ほど違いは出ません。メジャー列が「選択ステップ」ペインに表示されている場合、ステップによって影響を受けないようステップを作成できません。メジャーは、属性列および階層列に対する条件ステップ($1 百万より多い売上など)の作成に使用されます。

階層列に影響する属性列へのフィルタの適用

関係する属性列にフィルタを使用し、階層列のメンバーの表示に影響を及ぼすことができます。

たとえば、階層列に、年、四半期および月のレベルがあるとします。年の階層レベルに対応する属性列にフィルタがあるとします。年を 2008 と 2009 に限定するフィルタを年に作成した場合、階層列をビューに表示すると、それらの 2 年のみが表示されます。この機能は、Oracle BI 管理ツールで、論理列がサブジェクト領域のビジネス・レイヤーにどのように定義されているかに依存します。

データの選択の使用

分析に含めるデータ・メンバーを指定すると、データ・ソースからのデータの選択が作成されます。

選択ごとに、特定の列(製品、地理など)に対するメンバー・セットの基準を指定します。各選択は 1 つ以上のステップで構成されます。ステップは、選択に影響を与える

指示(テキスト ABC を値に含む製品メンバーの追加など)です。ステップが実行される順序は、データの選択に影響を及ぼします。各ステップはその列のすべてのメンバーに作用するのではなく、前のステップからの結果に増分的に作用します。

これらの選択ステップは、「選択ステップ」ペインに表示できます。ステップは、次の方法で作成されます。

- 列を分析に追加すると、特定のメンバーを明示的に追加しないかぎり、すべてのメンバーで開始する選択ステップが自動的に作成されます。「結果」タブで列メンバーをドラッグ・アンド・ドロップして分析に追加することでも、ステップが自動的に作成されます。たとえば、年の階層列からメンバー FY2007 と FY2008 をピボット表にドラッグ・アンド・ドロップするとします。**「FY2007, FY2008 を追加」**という選択ステップが作成されます。
- グループと計算項目を追加すると、ステップが自動的に作成されます。
- 特定の階層列または属性列に対するデータの選択を絞り込むために、右クリックの相互作用(**「関連項目の追加」**や**「保持のみ」**など)を使用すると、ステップが自動的に作成されます。これらの選択ステップを削除するには、**「グループの削除」**や**計算項目の削除**などの右クリック相互作用を使用します。ビューの右クリック相互作用を参照してください。
- 「選択ステップ」ペインを使用してステップを直接作成し、特定の階層列または属性列に対するデータの選択を詳細に指定できます。「選択ステップ」ペインは、「結果」タブ、「基準」タブおよび一部のビュー・エディタなどの様々な場所から表示できます。

選択ステップのタイプは次のいずれかです。

- 明示的なメンバーのリスト - ステップに、列のメンバーのリスト(ボストン、ニューヨーク、カンザス、南部など)を含めることができます。階層列の場合、メンバーの階層レベルは異なっていてもかまいません。属性列の場合、メンバーの列はその列のみです。
- 条件ステップ - ある条件に基づいて列からメンバーを選択することを指定できるステップで、メジャーや上位/下位の値に基づく場合も含めた様々なタイプの 1 つです。このメンバー・リストは動的で、実行時に決まります。

  選択ステップを操作する際に、テキスト以外の階層列(たとえば、日付や時間など)でメンバーを検索している場合、検索結果は得られません。
- 階層に基づいたステップ - メンバーの選択に使用する関係のタイプを選択できるようにする階層列用のステップです。家族関係(子、親など)、特定の階層レベル(レベル・ベースの階層の場合のみ)またはレベル関係(レベル・ベースの階層の場合のみ)を選択できます。
- グループと計算項目 - ステップにグループまたは計算項目を含めることができます。グループと計算項目は追加ステップにのみ使用でき、保持のみステップまたは削除ステップでは使用できません。

  グループと計算項目の使用を参照してください。

選択ステップの作成

ステップは、様々な場所で表示できる「選択ステップ」ペインで作成します。

データ・ソースからのデータの選択基準を指定する際の指示を提供する選択ステップを作成します。分析に列を追加すると、暗黙的な**「すべてのメンバーで開始」**ステップが追加されます。「すべて」とは、フィルタ適用後の列のすべてのメンバーを意味します。

たとえば、「Office」列のメンバー(Baltimore、Austin および Athens)の基準を指定するステップを作成できます。

「結果」タブで選択ステップを作成すると、ユーザーが自分にとって最も重要なデータを選択できます。

1. 分析エディタの「結果」タブを表示します。
2. 「選択ステップ」ペインが表示されない場合、ツールバーの**選択ステップ・ペインの表示**ボタンをクリックしてペインを表示します。

   ペインは、「結果」タブの下部に縮小表示される場合もあります。プラス記号のアイコンをクリックして展開します。
3. ステップを定義する対象の列に対し、**「次に、新規ステップ」**リンクをクリックします。
4. メニューから、作成するステップ・タイプのオプションを選択し、表示されたダイアログを完成させます。

ビューの特定の階層列または属性列に対するデータの選択を絞り込むために、右クリックの相互作用(**「関連項目の追加」**や**「保持のみ」**など)を使用すると、選択ステップが自動的に作成されます。ビューの右クリック相互作用を参照してください。

分析に選択ステップを追加した後、「分析」エディタの「結果」タブに移動して、「選択ステップ」ビューを分析に追加します。選択ステップ・ビューを追加すると、その分析に適用された選択ステップをユーザーが実行時に表示できるようになります。「結果」タブの「選択ステップ」エディタを参照してください。

選択ステップの編集

分析の既存の選択ステップを編集できます。

「選択ステップ」ペインを使用して、選択ステップを変更します。

- 「選択ステップ」ペインでステップにマウス・ポインタを合せ、表示されたツールバーのボタンをクリックします。

  ステップを編集するダイアログの表示、ステップの削除、ステップのリスト内のステップの順序の変更など様々なタスクを行えます。

  グループまたは計算項目の場合、名前をクリックして、編集や保存のオプションが含まれたメニューを表示します。

グループ・オブジェクトとしての選択ステップの保存

選択ステップをグループ・オブジェクトとして保存すると、それらを複数の場所で再利用できます。

選択ステップのセットを作成した場合、セットをグループ・オブジェクトとして保存し、再利用できます。インラインまたは名前付きでのグループおよび計算項目の保存を参照してください。

選択ステップと二重列の使用

リポジトリが二重列用に構成されている場合、二重列に選択ステップを作成できます。

二重列上に選択ステップを作成するには、その列の表示値を選択します。その表示値に対応するコード値を使用してステップが自動的に評価されます。

二重列を使用する場合、注意して「新規計算項目」ダイアログを使用してください。計算項目のカスタム式に、データ・セットの最初の行からの列を指定する$1 などの位置の演算子を含めることができます。位置の演算子を含める場合、式の評価時、表示値はコード値にマップされません。

二重列機能の理解を参照してください。

列フィルタの作成

列に名前付きまたはインライン・フィルタを作成して特定のデータを表示できます。

列フィルタの編集を参照してください。

リポジトリが二重列用に構成されていて、**次と等しい/次に存在する**、**次と等しくない/次に存在しない**または**次の間にある**以外の演算子を使用し、表示値ではなくコード値を指定する場合、表示列ではなく、コード列を明示的に選択する必要があります。二重列機能の理解を参照してください。

1. 名前付きフィルタを作成するには:

   a. Oracle Business Intelligence ホーム・ページで、**「新規」**メニューにポインタを合せ、メニューから**「フィルタ」**を選択すると、グローバル・ヘッダーに移動します。

   b. 「サブジェクト領域の選択」ダイアログから、フィルタの作成対象のサブジェクト領域を選択します。

   c. フィルタ・エディタの「サブジェクト領域」ペインで、フィルタを作成する列をダブルクリックします。

2. インライン・フィルタを作成するには:

   a. 新規分析を作成するか、フィルタの作成対象の既存の分析にアクセスします。**「基準」**タブをクリックします。

   b. 「フィルタ」ペインに移動し、フィルタ」ペインのツールバーで**「現在のサブジェクト領域のフィルタを作成」**ボタンをクリックします。分析の選択された列がカスケード・メニューに表示されます。

   c. メニューから列名を選択します。あるいは、**「列を増やす」**オプションを選択して、サブジェクト領域から列を選択できる「列の選択」ダイアログにアクセスします。

      別のサブジェクト領域にある列のフィルタを追加する場合、「サブジェクト領域」ペインの**「サブジェクト領域の追加/削除」**ボタンをクリックし、まず、そのサブジェクト領域を分析に追加する必要があります。

3. 「新規フィルタ」ダイアログの**「演算子」**フィールドで、フィルタの演算子を選択します。選択した列のタイプに基づいて値が移入された演算子リストから選択します。**「プロンプトで使用」**や**「別の分析の結果に基づく」**演算子オプションなどの各演算子の詳細は、演算子の項を参照してください。

4. **「値」**フィールドに、フィルタまたは条件を適用する際に使用する 1 つ以上の価を指定します。次のことができます:

   - 値の区切りにセミコロンを使用して、値を入力します。
   - リストまたはカレンダから値を選択します。

     特定の値を検索するには、リスト・ボックスで**「検索」**をクリックします。「値の選択」ダイアログが表示され、値を検索して選択できます。

   リポジトリが二重列用に構成されていて、表示列にフィルタを作成する場合、デフォルトでは表示値を指定します。ただし、組織によってコード値の表示が許可されている場合は、次に示す演算子のいずれかを使用した場合にかぎり、表示値ではなくコード値を指定できます。

   - **次と等しい/次に存在する**

- **次と等しくない/次に存在しない**
- **次の間にある**

コード値を指定するには、**「*コード列*による選択」**チェック・ボックスを選択し、値を指定します。

5. リポジトリが二重列用に構成されていて、表示列にフィルタを作成し、コード値ではなく表示値をフィルタする場合、**「*コード列*によるフィルタ」**チェック・ボックスを選択解除します。
6. **「詳細オプションの追加」**ボタンをクリックし、フィルタに SQL 式、セッション変数、リポジトリ変数、プレゼンテーション変数またはグローバル変数を追加します。SQL 式または変数を使用してフィルタの値を設定する場合は、**「値」**フィールドを空のままにします。
7. **「フィルタの保護」**チェック・ボックスを選択して、一致するプロンプトの値によって、あるいはユーザーが分析内の別のレポートに移動した際、フィルタの値がオーバーライドされないようにします。分析内のあるレポートから別のレポートに移動すると、最初のレポートで指定したプロンプト値が 2 つ目のレポートに転送されることがあります。
8. フィルタを SQL 文に変換するには、**「このフィルタを SQL に変換する」**チェック・ボックスを選択します。「高度な SQL フィルタ」ダイアログが表示されます。

   これは、1 方向の変換です。**「このフィルタを SQL に変換する」**ボックスを選択した後は、「フィルタの編集」ダイアログでフィルタを表示または編集できなくなります。フィルタを SQL 文に変換した後は、フィルタ・アイテムは「高度な SQL フィルタ」ダイアログで SQL 文としてのみ表示および編集できます。分析の列フィルタに対する SQL 文の作成または編集を参照してください。
9. フィルタの基準の指定が終わったら、**「OK」**をクリックします。
10. 次のいずれかの方法でフィルタを保存します。
    - 「分析」エディタから**「分析の保存」**をクリックし、フィルタをインライン・フィルタとして保存します。
    - 「フィルタ」エディタから**「フィルタの保存」**をクリックし、フィルタを名前付きフィルタとして保存します。

    インラインまたは名前付きでのオブジェクトの保存を参照してください。

列フィルタの編集

保存済フィルタをオープンおよび編集する手順は、次のとおりです。

名前付きフィルタを編集して保存した場合は、フィルタが使用される場所にフィルタに対する変更が伝播されます。

1. 名前付きフィルタを開くには:
   a. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。
   b. カタログ・ページで編集対象のフィルタに移動し、**「編集」**リンクをクリックします。
2. インライン・フィルタを開くには:
   a. 分析で**「基準」**タブをクリックします。

b. 「フィルタ」ペインで、編集対象のフィルタを見つけて、その**「フィルタの編集」**ボタンをクリックします。

3. フィルタ・エディタで、必要な変更を行います。

4. フィルタを保存します。

EVALUATE_PREDICATE 関数の使用

この SQL 関数により、標準以外のフィルタを追加できます。

この項には、EVALUATE_PREDICATE 関数の使用に関する次のトピックが含まれています。

- フィルタに EVALUATE_PREDICATE 関数を使用する方法
- インライン・フィルタへの EVALUATE_PREDICATE 関数の追加

*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 論理 SQL リファレンス・ガイド*を参照してください。

フィルタに EVALUATE_PREDICATE 関数を使用する方法

EVALUATE_PREDICATE 関数は、インライン・フィルタ句として追加できます。

この関数は、階層列には使用 *できません*。Oracle BI EE のフィルタ演算子で適切なフィルタ句を作成できない場合にこの関数を使用します。この関数は、ブールを戻り型とするデータベース関数用で、SQL 関数にのみ使用できます。EVALUATE_PREDICATE のサポートは、多次元のデータ・ソース全体には及んでいません。また、EVALUATE_PREDICATE を XML データ・ソースに使用できません。

インライン・フィルタ句として EVALUATE_PREDICATE 関数を追加するには、管理者から EVALUATE_PREDICATE 関数の追加権限を付与されている必要があります。

例

EVALUATE_PREDICATE 関数の使用方法の例は、次のとおりです。この例では、Products.P4 Brand 値は、6 文字より長い必要があります。実行後、この例では、P4 Brand 列のデータの長さが 6 文字より長い(`BizTech` や `HomeView` など)行を返します。

```
SELECT
0 s_0,
"A - Sample Sales"."Products"."P3 LOB s_1,
"A - Sample Sales"."Products"."P4 Brand" s_2,
"A - Sample Sales"."Base Facts"."1- Revenue" s_3
FROM "A - Sample Sales"
Where EVALUATE_PREDICATE('length(%1)>6',"A - Sample Sales"."Products"."P4 Brand").
ORDER BY 1,2,3
```

インライン・フィルタへの EVALUATE_PREDICATE 関数の追加

この手順では、EVALUATE_PREDICATE 関数をインライン・フィルタに追加する方法について説明します。

この関数は、階層列には使用できません。詳細は、フィルタに EVALUATE_PREDICATE 関数を使用する方法および *Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 論理 SQL リファレンス・ガイド*を参照してください。

1. 「分析」エディタの「フィルタ」ペインに移動して**「詳細オプション」**ボタンをクリックし、**「EVALUATE_PREDICATE 関数の追加」**オプションを選択します。

2. 「新規 EVALUATE_PREDICATE 関数」ダイアログに関数の式を入力します。

   フィルタに EVALUATE_PREDICATE 関数を使用する方法を参照してください

3. **「OK」**をクリックして「フィルタ」ペインに EVALUATE_PREDICATE 関数を表示します。

分析への名前付きフィルタの適用

分析でデータをフィルタしたい場合、名前付きフィルタを適用できます。

次の手順を使用して、名前付きフィルタを分析に適用します。

1. 名前付きフィルタの追加先の分析を作成するか、開きます。
2. 「分析」エディタの「基準」タブ内で「カタログ」ペインに移動し、名前付きフィルタが含まれている適切なフォルダに移動します。フィルタは通常、サブジェクト領域サブフォルダに保存されています。たとえば、`Shared Folders/2. Functional Examples/Filters/A - Sample Sales/Demo` です。
3. 名前付きフィルタを選択し、**「詳細オプションの追加」**ボタンをクリックして「保存済みフィルタの適用」ダイアログを表示します。
4. 名前付きフィルタの分析への追加方法を指定します。次のオプションのいずれか、あるいは両方を選択できます。
   - 名前付きフィルタを追加する前に既存のすべてのフィルタを分析から削除する場合、**「≪適用する前に既存のすべてのフィルタをクリアする | Clear all existing filters before applying | Bifndn≫」**ボックスを選択します。
   - 実際のフィルタの内容を分析にコピーする場合、**「フィルタの参照の代わりにフィルタの内容を適用する」**ボックスを選択します。内容をコピーすると、保存済フィルタを変更せずにフィルタ基準を操作できます。**「フィルタの参照の代わりにフィルタの内容を適用する」**ボックスを選択解除すると、フィルタへの参照が分析に追加されます。分析から、名前付きフィルタの内容は表示できますが、変更できません。
5. **「OK」**をクリックします。

列フィルタの組合せとグループ化

列フィルタを AND や OR ブール演算子と組み合せ、グループ化することにより、SQL 文を知らなくても複雑なフィルタを作成することができます。

グループ化または列フィルタの組合せにより、Oracle BI EE が分析をフィルタする優先順を定めることができます。

フィルタをグループ化する場合、フィルタには 3 つ以上のフィルタ・アイテムが含まれている必要があります。

1. 名前付きフィルタ、またはインライン・フィルタを含む分析を作成するか、開きます。
2. 名前付きフィルタを使用する場合、「保存済みフィルタ」ペインに移動し、フィルタに 2 つ以上のフィルタ・アイテムが含まれていることを確認します。インライン・フィルタを使用する場合、「フィルタ」ペインに移動し、フィルタに 2 つ以上のフィルタ・アイテムが含まれていることを確認します。

   2 つ目のフィルタ・アイテムを追加すると、2 つ目のフィルタ・アイテムの前に**「AND」**演算子が表示されます。

3. **AND** 演算子を **OR** 演算子に変更するには、「**AND**」をクリックします。このようにして、**AND** と **OR** を切り替えることができます。次の点に留意してください。

   - **AND** 演算子は、各フィルタに指定されている基準を満たす必要があることを表します。これが、列フィルタを組み合せるデフォルトの方法です。
   - **OR** 演算子は、1 つ以上の列フィルタに指定されている基準を満たす必要があることを表します。

4. フィルタ・アイテムの追加後、必要に応じて「**AND**」演算子と「**OR**」演算子クリックし、適切なフィルタの組合せを作成します。

5. 次のいずれかの方法でフィルタを保存します。

   - 「分析」エディタから「**分析の保存**」を選択し、フィルタをインライン・フィルタとして保存します。
   - 「フィルタ」エディタから「**フィルタの保存**」を選択し、フィルタを名前付きフィルタとして保存します。

   詳細は、インラインまたは名前付きでのオブジェクトの保存を参照してください。

保存済分析のフィルタとしての使用

別の分析から返された値に基づいてフィルタを作成できます。

値の列を返す保存済分析はどれでも、分析内の一致する列のフィルタに使用できます。

1. 名前付きフィルタ、またはインライン・フィルタを含む分析を作成するか、開きます。
2. 名前付きフィルタを使用する場合、「保存済みフィルタ」ペインに移動し、「サブジェクト領域」ペインからフィルタの作成対象の列を選択します。

   インライン・フィルタを使用する場合、「フィルタ」ペインに移動し、「フィルタ」ペインのツールバーで「**現在のサブジェクト領域のフィルタを作成**」ボタンをクリックしてフィルタの作成対象の列を選択します。
3. 「新規フィルタ」ダイアログの「**演算子**」フィールドで、「**別の分析の結果に基づく**」を選択します。

   「**保存済分析**」、「**関係**」および「**次の列の値を使用**」フィールドが表示されます。
4. 「**保存済分析**」フィールドに、保存済分析の完全なパスを入力するか、「**参照**」ボタンをクリックして、フィルタのベースとする分析を特定します。
5. 「**次の列の値を使用**」フィールドから保存した分析の列名を選択し、「**関係**」フィールドで、結果とフィルタされる列との適切な関係を選択します。
6. 「**OK**」をクリックします。

分析の列フィルタに対する SQL 文の作成または編集

フィルタとして使用する論理 SQL WHERE 句を作成または編集できます。

この機能は通常は必要ありませんが、高度なフィルタ機能を必要とするユーザーが使用します。SQL 句の説明は、*Oracle Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition LogicalSQL リファレンス・ガイド*を参照してください。

フィルタを SQL 文に変換した後は、フィルタ・アイテムは「高度な SQL フィルタ」ダイアログで SQL 文として表示および編集できます。「フィルタの編集」ダイアログでは、フィルタの表示および編集ができなくなりました。

1. 名前付きフィルタ、またはインライン・フィルタを含む分析を作成するか、開きます。
2. 名前付きフィルタを使用する場合、「保存済みフィルタ」ペインに移動し、「サブジェクト領域」ペインからフィルタの作成対象の列を選択します。

   インライン・フィルタを使用する場合、「フィルタ」ペインに移動し、「フィルタ」ペインのツールバーで**「現在のサブジェクト領域のフィルタを作成」**ボタンをクリックしてフィルタの作成対象の列を選択します。
3. 「新規フィルタ」ダイアログでフィルタの基準を指定し、**「このフィルタを SQL に変換する」**を選択します。
4. **「OK」**をクリックします。
5. 「拡張 SQL フィルタ」ダイアログで、変更を**「SQL」**フィールドに入力して**「OK」**をクリックします。

   フィルタを SQL 文に変換した後は、「フィルタの編集」ダイアログでフィルタを表示したり、編集できなくなります。

計算済メジャーの使用

計算済メジャーは他のメジャーから導出され、式を使用して作成されます。

直接データベース問合せまたは組合せリクエストには計算済メジャーを追加できません。

計算済メジャーを作成するには:

1. 次のアクションのいずれかを実行します。
   - 複合レイアウト内の列を含むデータ・ビューに計算済メジャーを作成するには、分析エディタ: 「結果」タブの**「新規計算済メジャー」**ボタンをクリックします。
   - 複合レイアウト内の特定のデータ・ビューに計算済メジャーを作成するには、特定のデータ・ビューを編集して、「結果」タブのデータ・ビュー・エディタの**「新規計算済メジャー」**ボタンをクリックします。
2. 「新規計算済メジャー」ダイアログの操作を完了します。
3. **「OK」**ボタンをクリックします。

計算済メジャーを編集するには:

計算済メジャーは、分析エディタの「基準」タブから編集できます。

1. 「基準」タブで、計算済メジャーの列名の右にある**「オプション」**ボタンをクリックします。
2. 必要に応じて列を変更します。
   - 列のソート順を指定します。(階層レベルのソート順は指定できません。)
   - 見出しのカスタマイズや集計ルールの指定を含む、属性列およびメジャー列の式を編集します。(階層列や階層レベルの場合、見出しのカスタマイズ、集計ルールの指定や式の編集は行えません。)
   - 書式設定や列と階層レベルの相互作用を制御する列プロパティを編集します。

グループと計算項目の使用

ヒート・マトリックス、表、ピボット表、トレリスまたはグラフにデータを表示する方法として、グループまたは計算項目を作成できます。

グループや計算項目を使用すると、データ・ソースに存在しない新規メンバーを列に追加できます。これらのメンバーは、カスタム・メンバーとも呼ばれます。

- グループは、選択したメンバーの静的リストまたは選択ステップによって生成される動的リストです。グループはメンバーとして表されます。階層列に対して作成されたグループはドリルできますが、属性列に対して作成されたグループはドリルできません。

  グループでは、一緒に表示されるメジャー列の既存の集計関数が使用されます。集計は、Oracle BI サーバーの最下位詳細レベルから上方に行われますが、値が二重に集計されることはありません。

- 計算項目はメンバー間の計算で、ドリルできない 1 つのメンバーとして表されます。計算項目を作成する際、選択した集計方法(合計、平均、カスタム式など)に新規メンバーを追加します。計算は集計レベルで行われ、最下位詳細レベルでは行われません。

グループまたは計算項目の作成時に**「すべてのビュー」**オプションを選択すると、グループと計算項目の両方が分析全体の選択ステップになります。したがって、その分析のすべてのビューに使用されます。これらのグループおよび計算項目は、インライン・オブジェクトとしても、名前付きオブジェクトとしても保存できます。詳細は、インラインまたは名前付きでのオブジェクトの保存を参照してください。

「現在のビュー」オプションを選択して特定のビューに対するグループまたは計算項目を作成する場合、グループまたは計算項目は特定のアクティブなビューにのみ適用されます。

グループとは

グループ(他の製品では「保存済選択」とも呼ばれます)は、列のユーザー定義メンバーです。

グループはメンバーのリストの場合も、メンバーのリストを生成するために実行する選択ステップのセットの場合もあります。すべてのメンバーは同じ属性列または階層列に属し、階層列内の階層レベルは異なっていてもかまいません。グループは常に、列リストの最下部に、追加された順(「選択ステップ」ペインに表示される順)に表示されます。グループには、メンバーまたは他のグループを含めることができます。カスタム・グループを作成して、ビュー内の列にカスタム・グループを追加できます。

グループはカタログに保存して再利用できます。たとえば、グループを分析およびダッシュボードの列プロンプトまたは変数プロンプトに適用できます。グループをプロンプトに適用すると、実行時、プロンプトでは、グループまたはグループのメンバーが選択リスト・オプションとしてユーザーに示されます。ユーザーがグループまたは列メンバーを選択した場合のプロンプトによる選択ステップのオーバーライドの詳細は、列プロンプトによる選択ステップのオーバーライドを参照してください。

計算項目とは

計算項目はメンバー間の計算で、1 つのメンバーとして表されます。

計算項目を使用すると、Oracle BI リポジトリで指定されているデフォルトの集計ルール、および設計者によって選択されている集計ルール(既存の分析の場合)をオーバーライドできます。計算項目は、カスタム式を使用して(デフォルト)または選択したメンバーと関数(SUM など)を組み合せて定義できます。

計算項目は、ユーザーが定義した列のメンバーです。計算項目には、メンバーまたは他の計算項目を含めることができます。計算項目は常に、列リストの最下部に、追加

された順(「選択ステップ」ペインに表示される順)に表示されます。計算項目はカタログに保存して再利用できます。

計算項目は、メンバーのセットを 1 つのエンティティとして表示したり操作する場合に便利です。たとえば、次のものに対して計算項目を定義できます。

- 地理的地域の主要な取引先
- ハイエンドの製品
- 標準的でない期間(9 月の最初の 3 週間など)

計算項目は、様々な場所で列に対して作成できます。計算は、メジャーに適用されるデフォルトの集計ルールとは異なります。表およびピボット表への合計の追加を参照してください。内部では、計算項目は、SQL の SELECT 文として処理され、指定された関数が結果セットに対して実行されます。*Oracle Fusion Middleware Oracle Business Intelligence Enterprise Edition LogicalSQL リファレンス・ガイド*を参照してください。

グループと計算項目の作成

グループまたは計算項目を使用して、新しいメンバーを列に追加します。

たとえば、モバイル・デバイスに対して生成された売上金額をレビューし、その数字を他の製品タイプと比較できます。「Product」列に対して、折り畳み式携帯電話とスマートフォンが含まれる「Mobile Devices」というグループを作成できます。次の手順を使用して、計算項目またはグループを作成します。

1. 次のアクションのいずれかを実行します。
   - 計算項目またはグループを作成するボタンをクリックします。

     ボタンは複数の場所にあります。次のリストに、それらの場所の一部を示します。

     – ビュー・エディタのツールバーで、**「新規計算項目」**ボタンまたは**「新規グループ」**ボタンをクリックします。すべてのビューに対して新しい計算項目またはグループが作成されます。

     – 「レイアウト」ペインの*<view-type>*行または「列」領域で、列名の右にある**「詳細オプション」**ボタンをクリックし、**「新規計算項目」**を選択します。この計算項目またはグループを現在のビューまたはすべてのビューに追加することを選択できます。
   - 「選択ステップ」ペインの**「次に、新規ステップ」**リンクをクリックします。
   - (外側エッジの)ヒート・マトリックス、表、ピボット表またはトレリスで、含める列や列ヘッダー、メンバー、グループまたは計算項目を選択し、右クリックして**「グループの作成」**または**「計算項目の作成」**を選択します。
2. 「新規計算項目」ダイアログまたは「新規グループ」ダイアログのいずれか適切な方を完成させます。
3. 計算項目またはグループを追加する場合、次の点を考慮してください。
   - 複合レイアウト内から:

     – 右クリック・メニューを使用している場合、**「現在のビュー」**または**「すべてのビュー」**オプション・ボタンのいずれかを選択し、複合レイアウト内の特定のアクティブなビューまたはすべてのビューにグループまたは計算項目を追加します。

  - ツールバー・ボタンまたは選択ペインを使用している場合、グループまたは計算項目は複合レイアウト内の**「すべてのビュー」**に追加されます。

- ビュー・エディタ内から**「現在のビュー」**または**「すべてのビュー」**オプション・ボタンのいずれかを選択し、複合レイアウト内の特定のアクティブなビューまたはすべてのビューにグループまたは計算項目を追加します。
- **「詳細オプション」**ボタンを使用してピボット表または表エディタ内から**「現在のビュー」**または**「すべてのビュー」**オプション・ボタンのいずれかを選択し、複合レイアウト内の特定のアクティブなビューまたはすべてのビューにグループまたは計算項目を追加します。
- 右クリック・メニューを使用してダッシュボード内のビューに計算項目またはグループを追加する場合、計算項目またはグループは**「現在のビュー」**にのみ追加されます。
- **「すべてのビュー」**オプション・ボタンを使用してグループまたは計算項目を追加すると、追加する新しいビューにもそのグループまたは計算項目が追加されます。
- **「現在のビュー」**オプション・ボタンを使用してグループまたは計算項目を追加すると、追加する新しいビューには、そのグループまたは計算項目が追加されません。

4. 計算項目またはグループが完成したら、**「OK」**をクリックします。

   エラーが検出された場合、メッセージが表示されます。エラーを修正し、**「OK」**を再度クリックします。

Oracle Online Analytical Processing (OLAP)が分析のデータ・ソースである場合、グループを使用するとエラーになる可能性があります。ビューにグループが含まれている状態でエラー・メッセージが表示された場合、その分析のメジャー列が外部集計を使っていることが問題の原因である可能性があります。

次のソリューションのいずれかを実装することについて、管理者に確認してください。

- リポジトリのメジャーに対し、集計ルールを明示的に指定します。
- Oracle OLAP 分析ワークスペースのディメンション・メンバーとして適切な値のグループを作成します。

グループと計算項目の編集

グループおよび計算項目は、ユーザーに対して最も役立つ情報を表示するように更新できます。

グループや計算項目は、様々な方法で編集できます。

- 「選択ステップ」ペインで計算項目またはグループのリンクをクリックし、**「編集」**をクリックして適切なダイアログを表示します。
- オブジェクトをカタログに保存してある場合、「カタログ」ペインでオブジェクトを選択し、**「編集」**をクリックして適切なダイアログを表示します。
- (外側エッジの)ヒート・マトリックス、表、ピボット表またはトレリスで、グループまたは計算項目を右クリックして**「グループの編集」**または**「計算項目の編集」**を選択します。

グループまたは計算項目の値は、次に示すように、フィルタや選択ステップの影響を受けることがあります。

- フィルタ - グループまたは計算項目は、フィルタを使用して削除されていないメンバーのみを使用して評価されます。たとえば、SUM (EAST + WEST)という計算項

目がある場合、フィルタで WEST を削除すると、 EAST の合計のみが計算項目として含められます。すべてのメンバーを削除すると、null 値が返され、ヒート・マトリックス、表、ピボット表またはトレリスでは空のセルとして表示されます。

- 選択ステップ - 選択ステップを作成すると、ステップにグループまたは計算項目を追加できます。後続の保持のみステップまたは削除ステップで、グループまたは計算項目に含まれていたメンバーを参照する場合があります。
  - グループ・リストは、後続のステップで保持または削除されたメンバーの影響を受けますが、グループ・アウトライン値は同じままになります。たとえば、MyNewYork グループに Albany と Buffalo が含まれ、その値が 100 とします。後続のステップで Albany が削除されるとします。MyNewYork グループの値は 100 のままですが、Albany はグループのリストには含まれません。
  - 計算項目は、後続のステップで保持または削除されたメンバーの影響を受けません。

「現在のビュー」オプション・ボタンを使用して作成したすべてのビューからグループまたは計算項目を削除すると、グループまたは計算項目は残りますが、その後追加する新しいビューには追加されなくなります。

「すべてのビュー」オプション・ボタンを使用して作成したすべてのビューからグループまたは計算項目を削除すると、グループまたは計算項目は残り、その後追加する新しいビューに追加されます。

右クリック・メニューを使用してグループまたは計算項目を削除する場合は、次の点を考慮してください。

- ダッシュボード・ページ内のビュー — 計算項目またはグループは、現在のビューからのみ削除されます。
- ビュー・エディタ内のビュー — 計算項目またはグループは、すべてのビューからのみ削除されます。

別の分析へのグループの追加

別の分析で作成された列と同じ列にグループを追加できます。

分析に追加されるグループは、メンバーのリスト、または選択ステップのセットのいずれかとなります。これらのグループについては、グループ・オブジェクトとしての選択ステップの保存を参照してください。

グループを追加するには、「結果」タブを使用するか、「カタログ」ペインを使用して追加できます。次の方法でもグループを追加することができます。

- 「メンバー・ステップの編集」ダイアログの**「アクション」**ボックスで**「グループまたは計算項目で開始」**を選択し、「カタログ」ペインの「使用可能」リストからグループを選択します。
- 「選択ステップ」ペインで、適切な列に対する**「次に、新規ステップ」**をクリックして**「グループまたは計算項目の追加」**を選択し、**「既存のグループおよび計算項目の選択」**を選択してから表示されたダイアログでグループを選択します。

1. 「結果」タブで、グループからの選択内容を適用する列と同じ列が含まれている分析を表示します。
2. 「カタログ」ペインに移動し、保存済グループを含む適切なフォルダに移動します。
3. グループを選択し、「カタログ」ペインのツールバーで**「詳細オプションの追加」**ボタンをクリックします。
4. 次のいずれかを選択します:

- グループ自体を追加する場合は**「追加」**を選択すると、グループのアウトライン値が生成されます。ヒート・マトリックス、表、ピボット表またはトレリスではグループ名が表示され、グループ名を展開すると、メンバー値が表示されます。(デフォルト)
- グループ・メンバーのみを分析に追加する場合は**「メンバーの追加」**を選択します。アウトライン値は表示されません。

グループまたはグループのメンバーは、「選択ステップ」ペインの「追加」ステップに含められます。必要に応じてステップを並べ替えることができます。

グループと計算項目のネスト

グループや計算項目を使用していて、それらをネストする必要が生じる場合があります(ネストとは、グループの内部にグループを作成することなどを意味します)。

次のリストに、グループおよび計算項目をネストする様々なシナリオを示します。

- グループはネストする(グループに他のグループを含める)ことができます。ネストしたグループはフラット化されています。たとえば、my_favorite_countries グループに my_favorite_cities グループが含まれているとします。表に my_favorite_countries グループを表示して展開すると、my_favorite_cities グループは表示されません。かわりに、my_favorite_cities グループのメンバー値が表示されます。
- 計算項目はネストする(計算項目に他の計算項目を含める)ことができます。
- グループに計算項目を含めることはできず、計算項目にグループを含めることもできません。
- 選択ステップを使用する場合、次のようになります。
  - グループまたは計算項目を含む選択ステップは、結果が実行時に生成される一連のステップとして、または静的で毎回再表示される結果として保存できます。
  - ステップの保存済選択であるグループは「カタログ」ペインを使用して適用できます。保存済選択に計算項目に対するステップが含まれている場合にこれを行うと、グループのメンバーのみが追加されます。グループ自体は追加されません。

計算項目の例

計算項目について理解するには、SQL についての基本的な理解が必要です。

この項の例と説明は、SQL 文と構文に対する基本的な知識があることを前提としています。これらの例に示される構文は、「新規計算項目」ダイアログのカスタム式関数に適用されます。例は仮定のものです。すべての計算項目が示されているわけではありません。

例 6-1 現在のメジャーの値の取得

この例は、`SoftDrinkA`、`SoftDrinkB`、`SoftDrinkC` の各製品の現在のメジャーの値(売上金額など)を取得し、値を合計するコードを示します。

これは、「関数」リストから「SUM」を選択し、'`SoftDrinkA`'、'`SoftDrinkB`'、'`SoftDrinkC`'を入力またはクリックして、「関数」フィールドに追加するのと同じです。

```
sum('SoftDrinkA','SoftDrinkB','SoftDrinkC')
```

例 6-2 現在のメジャーの最小値の取得

この例は、SoftDrinkA または SoftDrinkB の現在のメジャー(売上金額など)の最小値、つまりいずれか小さい方を取得するコードを示します。

```
min('SoftDrinkA','SoftDrinkB')
```

この例と前の例では、各関数計算項目は、製品レイヤーなどの外側のレイヤーの各メンバーに対して実行されます。たとえば、軸に年と製品があり、先行する計算項目の 1 つが製品レイヤーに基づく場合、結果は年ごとに計算されます。

例 6-3 外側のレイヤーの各アイテムの値の取得

この例は、年や製品などの外側のレイヤーの各アイテムの値を取得し、合計するコードを示します。

SoftDrinkA などの属性列の名前付きアイテムを指定するかわりに、$n や$-n(n はアイテムの行位置を示す整数)と指定できます。$n と指定した場合、メジャーは n 番目の行から取得されます。$-n と指定した場合、メジャーは最後から n 番目の行から取得されます。

たとえば、売上金額の場合、$1 でデータ・セットの最初の行からメジャーが取得され、$-1 でデータ・セットの最後の行からメジャーが取得されます。

```
sum(*)
```

例 6-4 メジャーの値の取得と合計

この例は、売上金額などの現在のメジャーの 1 番目、2 番目および 3 番目の行からアイテムを取得し、合計するコードを示します。

```
sum($1,$2,$3)
```

例 6-5 売上値の追加

この例は、SoftDrinkA、SoftDrinkB および SoftDrinkC の売上を合計するコードを示します。例に示す 2 つの計算項目は同じです。つまり、Sum はデフォルトの関数であるため、省略できます。

```
'SoftDrinkA' + 'SoftDrinkB' + 'SoftDrinkC'
sum('SoftDrinkA','SoftDrinkB','SoftDrinkC')
```

例 6-6 売上値の合計と最大値の戻し

この例は、SoftDrinkA の売上と diet SoftDrinkA の売上を合計し、SoftDrinkB の売上と diet SoftDrinkB の売上を合計して、2 つの金額のうち大きい方を返すコードを示します。

```
max('SoftDrinkA' + 'diet SoftDrinkA', 'SoftDrinkB' + 'diet
SoftDrinkB')
```

7

ダッシュボードと分析でのプロンプト

この章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition でのプロンプトの作成方法、およびプロンプトを使用して、ダッシュボードおよび分析に表示されるデータを指定する方法を説明します。ここでは、オートコンプリート機能についても説明し、ダッシュボードおよびダッシュボード・ページにダッシュボード・プロンプトを追加する方法も説明します。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- インライン・プロンプトとダッシュボード・プロンプトとは
- 列プロンプトとは
- 他のプロンプト・タイプ
- 列プロンプトまたは変数プロンプトに使用できるユーザー入力オプションのタイプ
- Oracle BI Mobile でのプロンプトの動作方法
- ダッシュボード・プロンプトと分析プロンプトとの相互作用
- Oracle BI EE がデフォルト値で適用するプロンプトの順序
- オートコンプリートとは
- 列プロンプトの作成
- 列プロンプトによる選択ステップのオーバーライド
- イメージ・プロンプトの作成
- 通貨プロンプトの作成
- 変数プロンプトの作成
- プロンプトの編集
- ダッシュボードまたはダッシュボード・ページへのダッシュボード・プロンプトの追加
- ダッシュボードまたはダッシュボード・ページへの非表示のダッシュボード・プロンプトの追加

インライン・プロンプトとダッシュボード・プロンプトとは

インライン・プロンプトとダッシュボード・プロンプトの違いは、格納場所と実行時の動作の 2 点です。

分析レベルで作成されるプロンプトは、プロンプトが分析に埋め込まれて、Oracle BI プレゼンテーション・カタログに格納されず、他の分析に追加できないため、インライン・プロンプトと呼ばれます。エンド・ユーザーはインライン・プロンプトを使用して、分析の内容を決定するデータ値を指定できます。インライン・プロンプトは、列プロンプト、変数プロンプト、イメージ・プロンプト、通貨プロンプトのいずれかです。インライン・プロンプトを作成する際、プロンプトに対する列と演算子を選択し、ユーザーへの表示方法とユーザーによる値の選択方法を指定します。ユーザーの選択によって、ダッシュボードに埋め込まれる分析の内容が決まります。インライン・プロンプトは初期プロンプトであり、分析のレンダリング時にのみ表示されることを意味します。ユーザーがプロンプト値を選択すると、プロンプト・フィールドが分析から消えてしまうため、別のプロンプト値を選択する唯一の方法は、分析を再実行することです。

ダッシュボード・レベルで作成されたプロンプトは、特定のダッシュボードの外部で作成され、オブジェクトとしてカタログに保存されるため、ダッシュボード・プロンプトと呼ばれ、プロンプトに指定されている列があるダッシュボードまたはダッシュボード・ページに追加できます。エンド・ユーザーは、ダッシュボード・プロンプトを使用してダッシュボード上のすべての分析およびスコアカード・オブジェクトの内容を判断するデータ値を指定できます。ダッシュボード・プロンプトは、列プロンプト、変数プロンプト、イメージ・プロンプト、通貨プロンプトのいずれかです。1 つのプロンプトを作成して何度も使用できるため、ダッシュボード・プロンプトは再使用可能です。プロンプト・オブジェクトを更新して保存すると、更新内容は、そのプロンプトを使用しているすべてのダッシュボードに即時に表示されます。ダッシュボード・プロンプトは特定種類のフィルタで、ダッシュボードまたはダッシュボード・ページに対する作成、保存および適用時に、ダッシュボードに埋め込まれている分析およびスコアカード・オブジェクトや、同じダッシュボード・ページに埋め込まれている分析およびスコアカード・オブジェクトのすべてまたは一部をフィルタリングできます。ダッシュボード・プロンプトは対話形式のプロンプトで、ユーザーがダッシュボードを再実行せずに異なる値のプロンプトを表示できるように、常にダッシュボード・ページ上に表示されます。ユーザーは、ダッシュボード・プロンプトを作成し、非公開フォルダまたは共有フォルダのいずれかに保存できます。

ビジネス・モデルで名前が変更された列をダッシュボードで使用する場合、名前が変更された列に基づく既存のダッシュボード・プロンプトは、新しく作成された分析では動作しません。この問題を回避するには、カタログ・マネージャを使用してカタログの列の名前を変更します。

列プロンプトの作成を参照してください。

列プロンプトとは

列プロンプトは最も一般的で、柔軟性の高いプロンプト・タイプです。

列プロンプトを使用すると、ダッシュボードまたは分析に固有の値プロンプトをスタンドアロンで作成したり、既存のダッシュボードと分析フィルタの展開または調整を行うことができます。列プロンプトは、階層列、メジャー列および属性列に対して分析レベルまたはダッシュボード・レベルで作成できます。

ユーザーが、ビジネス上の重要な決定を行うために必要なデータを簡単かつ正確に見つけることができるよう、ユーザーのビジネス・ニーズと役割に特化したインテリジェント・プロンプトを作成できます。

Oracle BI Enterprise Edition では、コンテンツ設計者は、通貨プロンプト、イメージ・プロンプトおよび変数プロンプトも作成できます。他のプロンプト・タイプを参照してください。

列プロンプトと選択ステップの相互作用

選択ステップを使用すると、ユーザーは、属性列およびメジャー列からのデータの指定や精選を行ったり、ある種のフィルタを階層列に設定できます。選択ステップは、データの集計後に適用されます。列に対して選択ステップを作成する際、選択の 1 ステップをダッシュボードまたは分析の列プロンプトでオーバーライドするオプションがあります。オーバーライド・ステップの前後の選択ステップはすべて指定されたと

おりに処理され、オーバーライド・ステップは、列プロンプトによって収集されたユーザー指定のデータ値を使用して処理されます。階層列に対して作成される列プロンプトには、「選択リスト」入力オプションのみ含めることができます。

フィルタおよび選択ステップとは、データの選択の使用および列プロンプトによる選択ステップのオーバーライドを参照してください。

他のプロンプト・タイプ

列プロンプト以外に、通貨プロンプト、イメージ・プロンプトおよび変数プロンプトを作成できます。

次のリストで、これらのプロンプト・タイプについて説明します。

列プロンプトの詳細は、列プロンプトとはを参照してください。

- **≪通貨プロンプト | Currency Prompt | Bifndn≫** - 通貨プロンプトによって、ユーザーは分析またはダッシュボードの通貨列に表示される通貨タイプを変更できます。たとえば、分析にカナダの特定の地域の売上合計がカナダ・ドル単位で含まれるとします。しかし、分析を表示するユーザーは米国に居住しているため、通貨プロンプトを使用して、売上合計をカナダ・ドルから米ドルに変更できます。プロンプトの通貨選択リストには、ユーザーの「≪マイ・アカウント | My Account | Bifndn≫」ダイアログ: 「≪プリファレンス | Preferences | Bifndn≫」タブからの通貨プリファレンスが移入されます。「≪通貨プロンプト | Currency Prompt | Bifndn≫」オプションは、管理者が `userpref_currencies.xml` ファイルを構成した場合のみ使用できます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*の通貨オプションの構成を参照してください。通貨プロンプトの作成を参照してください。
- **≪イメージ・プロンプト | Image Prompt | Bifndn≫** - イメージ・プロンプトにより表示されるイメージをユーザーがクリックして、分析またはダッシュボードの値を選択します。たとえば、販売組織において、ユーザーはマップのイメージから自分の担当区域をクリックして売上情報を参照したり、製品イメージをクリックしてその製品に関する売上情報を参照できます。HTML <map>タグの使用方法がわかる場合は、イメージ・マップ定義を作成できます。イメージ・プロンプトの作成を参照してください。
- **≪変数プロンプト | Variable Prompt | Bifndn≫** - 変数プロンプトによって、ユーザーは変数プロンプトで指定された値をダッシュボードに表示するよう選択できます。変数プロンプトは列に依存しませんが、列を使用することはできます。たとえば、変数プロンプトを使用して、ユーザーが既存のデータを指定して販売予測を実行できるようにします。たとえば、販売予測という変数プロンプトを作成し、変数プロンプトの値に 10 パーセント、20 パーセントおよび 30 パーセントを指定できます。地域と売上金額の列を含む分析を作成します。売上金額の列式に乗算の演算子を選択し、販売予測変数を挿入します。ユーザーは、この分析を実行する際、売上金額の列の再計算に使用するパーセンテージを選択します。変数プロンプトの作成を参照してください。

列プロンプトまたは変数プロンプトに使用できるユーザー入力オプションのタイプ

設計時、プロンプトのユーザー・インタフェース・コンポーネントを指定する必要があります。

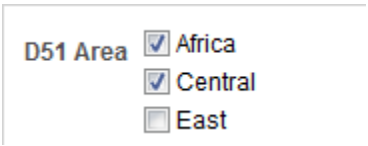
このユーザー・インタフェース・コンポーネントによって、ユーザーが実行時にプロンプト値を入力できます。いくつかのユーザー入力オプションから選択できます。**ラジオ・ボタン**・オプションでは、ユーザーはプロンプト値を 1 つのみ指定できます。**チェック・ボックス**、**選択リスト**、**リスト・ボックス**および**テキスト・フィールド**の各オプションでは、ユーザーは 1 つまたは複数のプロンプト値を選択できます。**スライダ**・オプションでは、ユーザーは、値の範囲を指定して複数の値を選択したり、指

定した値より小さい、または大きいすべての値を選択(200 以上のすべての値を含めるなど)できます。使用できる入力オプションのタイプは、使用する列タイプによって異なります。

チェック・ボックス

チェック・ボックス入力オプションでは、全プロンプト値が表示されたリストが、各値の前に選択可能な小さなボックスを表示した状態でユーザーに提供されます。この入力オプションは、小規模なデータ・セットを含むプロンプトに適しています。**「≪リスト・ボックス｜List Box ｜ Bifndn≫」**入力オプションは、大規模なデータ・セットを含むプロンプトに適しています。このユーザー入力タイプによって、ユーザーが 1 つ以上のプロンプト値を選択することが自動的に可能になります。特定のプロンプト値を選択するには、ユーザーは、リストにざっと目を通し、特定のアイテムに対応するボックスをクリックします。

次の図に、列プロンプトまたは変数プロンプトに対する**「チェック・ボックス」**ユーザー入力オプションの例を示します。入力要求される列は「D51 Area」で、各値オプション(「Africa」、「Central」および「East」)は、小さなボックスの横に表示されます。値を選択するには、ユーザーは、プロンプト値の横にある小さなボックスをクリックします。この例では、「Africa」と「Central」が選択されており、ユーザーが複数のプロンプト値を選択できることがわかります。

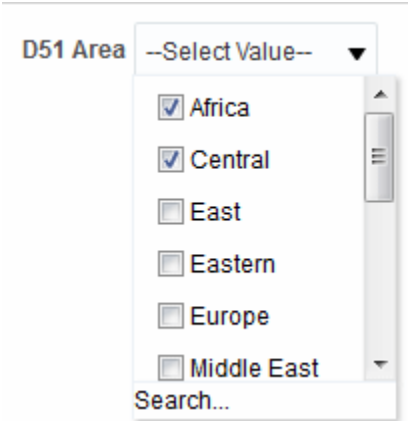


選択リスト

選択リスト・入力オプションでは、すべてのプロンプト値の縮小されたリストがユーザーに提供されます。このオプションは、特定の値を検索する機能をユーザーに提供する、値の長いリストに有用です。このユーザー入力タイプは、プロンプト値を 1 つのみ受け入れるように設定することも、複数のプロンプト値を受け入れるように設定することもできます。

この入力オプションでは、フィールドとリストが提供され、ユーザーが下向きの矢印ボタンをクリックすると、すべてのプロンプト値が含まれたリストが展開されます。展開されたリストから特定のプロンプト値を選択するには、ユーザーはリストをスクロール(または、リストを検索)し、特定の値に対応するボックスをクリックします。この入力オプションを階層列に使用する場合、ユーザーがプロンプト値を検索できる検索ダイアログが表示されます。

次の図に、列プロンプトまたは変数プロンプトに対する**「選択リスト」**ユーザー入力オプションの例を示します。入力要求される列は D51 Area です。ユーザーは、「D51 Area」フィールドの横の下向きの矢印ボタンをクリックして、値のリストにアクセスします。値のリストにアクセスすると、各値オプション(「Africa」、「Central」、「East」、「Eastern」、「Europe」および「Middle East」)が、小さなボックスの横に表示されます。値を選択するには、ユーザーは、プロンプト値の横にある小さなボックスをクリックします。この例では、「Africa」と「Central」が選択されており、ユーザーが複数のプロンプト値を選択できることがわかります。ユーザーは、値のリストの最後にある「検索」をクリックして、特定の値を検索することもできます。

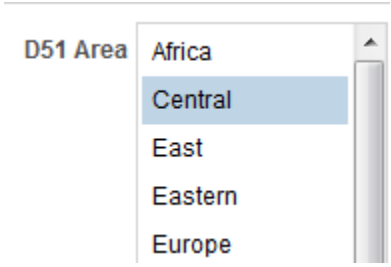


リスト・ボックス

リスト・ボックス入力オプションでは、すべてのプロンプト値が表示されたリストがユーザーに提供されます。この入力オプションは、大規模なデータ・セットを含むプロンプトに適しています。**「≪チェック・ボックス | Check Boxes | Bifndn≫」**入力オプションは、小規模なデータ・セットを含むプロンプトに適しています。このユーザー入力タイプは、ユーザーがプロンプト値を 1 つのみ選択できるように設定することも、[Ctrl]とマウス・クリックまたは[Shift]とマウス・クリックを使用して複数選択できるように設定することもできます。

特定のプロンプト値を選択するには、ハイパーリンクをクリックする場合と同様に、ユーザーはリストにざっと目を通し、プロンプト値名(Chicago など)を選択します。**リスト・ボックス**・オプションは**チェック・ボックス**・オプションに非常によく似ていますが、**リスト・ボックス**・オプションの場合、各値の前にボックスはありません。

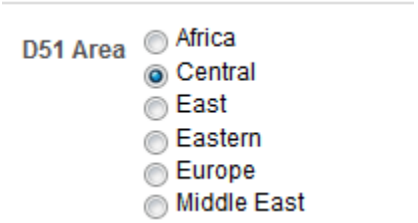
次の図に、列プロンプトまたは変数プロンプトに対する**「リスト・ボックス」**ユーザー入力オプションの例を示します。入力要求される列は D51 Area です。リストには、各値オプション(「Africa」、「Central」、「East」、「Eastern」および「Europe」)が含まれています。値を選択するには、ユーザーは値をクリックします。この例では「Central」が選択されています。



ラジオ・ボタン

ラジオ・ボタン入力オプションでは、全プロンプト値が表示されたリストが、各プロンプト値の前に**ラジオ・ボタン**を表示した状態でユーザーに提供されます。このオプション・タイプは、ユーザーがプロンプト値を 1 つのみ選択する、値の短いリストに有用です。プロンプト値を選択するには、ユーザーは、リストにざっと目を通し、特定のアイテムに対応するラジオ・ボタンを選択します。

次の図に、列プロンプトまたは変数プロンプトに対する**「ラジオ・ボタン」**ユーザー入力オプションの例を示します。入力要求される列は D51 Area です。リストには、各値オプション(「Africa」、「Central」、「East」、「Eastern」、「Europe」および「Middle East」)が含まれています。値を選択するには、ユーザーは、値に対応するラジオ・ボタンをクリックします。この例では、「Central」ラジオ・ボタンが選択されています。



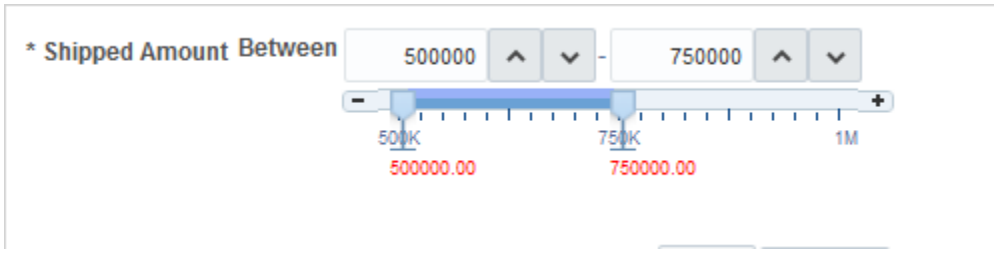
スライダ

このオプションは、「変数プロンプト」には使用できません。

ノート: プロンプトのフィールド・サイズを設定する**「プロンプト幅」**オプション、および**「ラベルをラップして合せる」**プロンプトのページ設定オプションは、スライダには指定できないか、適用できません。

スライダ入力オプションは、数値データ値にのみ使用できます。このオプションでは、ユーザーは、選択した演算子に応じて、値の範囲を指定して複数の値を選択したり、指定された値より小さい、大きいまたは等しいすべての値を選択できます。数直線で表された、ある範囲のプロンプト値をユーザーに提供する場合、**スライダ**・オプションを選択します。数直線には、ある範囲(10,000 から 20,000 など)のプロンプト値が表示されます。プロンプト値を選択するには、ユーザーは、数直線上の値をクリックするか、つまみをクリックしてドラッグし、希望の値を選択します。ユーザーがクリックして値を選択できる上向きまたは下向きの矢印ボタンを持つスピナー・ボックスも提供されます。プロンプトに**スライダ**・オプションと**次の間にある**演算子を選択した場合、ユーザーは 2 つのつまみをクリックしてドラッグし、プロンプトに対する値の範囲を選択します。2 つのスピナー・ボックスが提供され、入力または上向きと下向きの矢印ボタンを使用して値の範囲を指定できます。

次の図に、列プロンプトに対する値の範囲を受け入れる**「スライダ」**ユーザー入力オプションの例を示します。入力要求される列は 7-Shipped Amount です。スライダ自体は数直線であり、最も左側には数値ラベル 500K、中央には数値ラベル 750K、そして最も右側には数値ラベル 1M があります。数直線の上に、2 つのスピナー・ボックスもあります。ユーザーは、これらのスピナー・ボックスから 1 つの値を選択する(1 つ目のスピナー・ボックスでも 2 つ目のスピナー・ボックスでも 500000 を選択するなど)ことも、2 つの値を選択して値の範囲を指定する(1 つ目のスピナー・ボックスで 500000 を、2 つ目のスピナー・ボックスで 750000 を選択するなど)こともできます。スピナー・ボックスに値を指定するには、値を入力するか、ボックスの上向きおよび下向きの矢印を使用して希望の値までスクロールします。数直線から値を選択するには、つまみをクリックして希望の値までドラッグするか、両方のつまみをクリックおよびドラッグして値の範囲を指定します。この例では、500000 から 750000 までの範囲の値が選択されています。

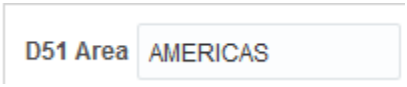


テキスト・フィールド

テキスト・フィールド入力オプションは、ユーザーが特定のプロンプト値を入力できるフィールドをユーザーに提供します。このオプションは、複数のプロンプト値に使用できません。このオプションでは、フィールドとフィールド・ラベルのみが表示されます。このオプションは、ユーザーがプロンプト値を知っていて検索する必要がな

い場合、または数値のプロンプトに有用です。入力するプロンプト値は列の値に一致する必要があります。たとえば、列のデータ値が AMERICAS(すべて大文字)の場合、ユーザーは、テキスト・フィールドに AMERICAS と入力する必要があります。数値にはカンマを含めることはできません。リポジトリが二重列用に構成されている場合、表示列にプロンプトを作成して**「テキスト・フィールド」**を指定すると、コード値ではなく表示値に対してフィルタリングが行われます。

次の図に、列プロンプトまたは変数プロンプトに対する**「テキスト・フィールド」**ユーザー入力オプションの例を示します。入力要求される列は D52 Area です。「D51 Region」ラベルの隣のフィールドは空です。このフィールドに、ユーザーは地域の名前(「AMERICAS」、「APAC」および「EMEA」など)を入力します。この例は、AMERICAS がテキスト・フィールドに入力されたことを示しています。



Oracle BI Mobile でのプロンプトの動作方法

モバイル・デバイスでも、同じような機能のプロンプトが Oracle BI Mobile アプリケーションに表示されますが、表示方法およびユーザーの操作方法が異なります。

デスクトップ版の Oracle Business Intelligence で行ったプロンプト・ラベルのカスタマイズは、Oracle Business Intelligence Mobile で表示されるプロンプトには影響しません。Oracle BI Mobile では、プロンプトの書式設定に関するすべてのプロパティが無視されます。

ダッシュボード・プロンプトと分析プロンプトとの相互作用

プロンプトを様々に組み合せて関連付け、的確で意味のあるデータをユーザーがリクエストできるダッシュボードおよびレポートを作成できます。

プロンプトの組合せや関連付けによって、ダッシュボード・プロンプトと分析プロンプトとの対話方法を指定できます。通貨プロンプトと変数プロンプトは組合せや関連付けに使用できません。

たとえば、地域ごとの製品の売上高に関する情報を含む分析 A を作成し、地域列に**保護**オプションを追加し、地域プロンプトを追加します。次に、地域ごとの営業担当者に関する情報を含む分析 B と、地域ごとの市の情報を含む分析 C を作成します。地域に対するダッシュボード・プロンプトを作成し、保存します。ダッシュボードを作成して、分析 A、B、C と地域ダッシュボード・プロンプトを追加し、ダッシュボードを実行すると、ダッシュボード・プロンプトの入力は、分析 B と C にのみ作用します。このシナリオでは、分析 A の地域列フィルタ値を**保護**に設定したため、分析 A ではダッシュボード・プロンプトで指定されている地域値は使用されません。つまり、分析 A でプロンプト値を受け入れる唯一の方法は、ユーザーが地域 A のプロンプト・フィールドにプロンプト値を指定するかどうかです。

プロンプトの組合せと関連付けには様々な方法があります。この表では、各方法を説明します。

関連付け方法	説明
自動関連付け	Oracle BI Enterprise Edition の自動関連付け機能では、列に対して機能するプロンプトを作成すること、つまり、プロンプトをアクティブ化して適用することを前提としています。Oracle BI EE では、分析を作成して列プロンプトまたはイメージ・プロンプトを追加すると、自動関連付け方法が適用されます。この自動関連付け方法には、**「プロンプトで使用」**フィルタ演算子は必要ありません。任意の保護されていないフィルタが使用されます。 フィルタ演算子を**「プロンプトで使用」**に設定すると、自動関連付け方法より精密なレベルで、プロンプトとフィルタ間の制御を実行できます。詳細は、この表の*フィルタの演算子を**「プロンプトで使用」**に設定*行を参照してください。
制約付きプロンプト	この方法をプロンプト内のいくつかの列に使用し、ユーザーのプロンプトの選択肢が後続の選択肢に基づくよう強制します。制約付きプロンプトはプロンプト・オプションのダイアログで設定でき、選択肢を絞るプロンプトを指定します。たとえば、ある列は地域をフィルタし、次の列は市をフィルタする場合、市の列は、選択した地域内の市のみを表示するよう強制されます。
フィルタの演算子を**「プロンプトで使用」**に設定	この方法を使用して、フィルタと相互作用する複雑なプロンプトを作成します。この方法を使用すると、ダッシュボード・プロンプト、インライン・プロンプトおよびフィルタが埋込み分析にどのように適用されるかを完全に制御できます。
「選択ステップ」の「プロンプトでオーバーライド」オプション	この方法を使用すると、分析またはダッシュボードの列プロンプトを使用して、階層列または属性列に対する特定の選択ステップにデータの選択肢が提供されます。フィルタは階層列に使用できないため、選択ステップが、階層列にプロンプトを使用できる唯一の方法です。列の選択ステップ・セットごとに 1 つの選択ステップのみをプロンプトでオーバーライドできます。オーバーライド・ステップの前後のすべてのステップは指定どおりに処理されます。 フィルタおよび選択ステップとは、データの選択の使用および列プロンプトによる選択ステップのオーバーライドを参照してください。
保護されたフィルタと保護されていないフィルタ	この方法を使用して、該当する列のフィルタ値が**「プロンプトで使用」**以外に設定されている場合にダッシュボード・プロンプトがインライン・プロンプト値を提供するかどうかを決定します。保護されていないフィルタと保護されたフィルタの設定は、ダッシュボード・プロンプトとインライン・プロンプトが同じダッシュボードにあり、両方のプロンプトが同じ列に対して作成されている場合に使用されます。 列のフィルタ値が保護されていない場合、ダッシュボード・プロンプト値によって分析の結果が決まります。フィルタ値が**「プロンプトで使用」**以外(**「次と等しい/次の範囲内にある」**など)に設定され、フィルタが保護されたフィルタに設定されている場合、ダッシュボード・プロンプトではレポートの結果は決まりません。 「フィルタ」ペインを参照してください。

Oracle BI EE がデフォルト値で適用するプロンプトの順序

プロンプトによって柔軟性の高いダッシュボードや分析を作成できるため、複雑なダッシュボードのプロンプトの Oracle BI EE での開始方法を理解することは重要です。次のリストに、Oracle BI EE が実行時にデフォルト値で適用するプロンプトの順序を示します。

1. そのダッシュボード・ページを有効範囲とする非表示のプロンプト。ダッシュボードまたはダッシュボード・ページへの非表示のダッシュボード・プロンプトの追加を参照してください。

2. そのダッシュボード全体を有効範囲とする非表示のプロンプト。
3. そのダッシュボード・ページを有効範囲とするプロンプト。ダッシュボード・ページ・プロンプトの優先順位は特にありません。
4. そのダッシュボード全体を有効範囲とするプロンプト。
5. その分析を有効範囲とするインラインまたは名前付きのプロンプト。

オートコンプリートとは

オートコンプリート機能は特定のタイプのプロンプトに対して使用可能です。

Oracle BI EE には、プロンプトのオートコンプリート機能が用意されており、この機能を有効化すると、プロンプト選択フィールドへのユーザー入力時に、一致するプロンプト値が提示および強調表示されます。

オートコンプリートは、「新規プロンプト」ダイアログでプロンプト設計者が**「値の入力をユーザーに許可」**オプションを選択した場合に、選択リスト・タイプのプロンプトに対してのみ有効になります。オートコンプリートは、階層プロンプトには使用できません。

管理者は、大文字/小文字の区別の有無、および照合レベルを指定して、オートコンプリート機能を構成します。照合レベルは、ユーザーが入力する値と列の値を Oracle BI EE でどのように照合するかを決定します。管理者は異なる 3 つの方法でオートコンプリートの照合を設定できます:

- **次で始まる** - ユーザーが入力すると、そのユーザーが入力している文字またはテキストで開始する列値が提示されます。たとえば、大文字小文字の区別なし、照合レベルが「次で始まる」のオートコンプリートを管理者が構成した場合、ユーザーが `m` と入力したときに、`Micropod` と `MP3 Speakers System` が候補として提示されます。
- **次で始まる語** - ユーザーが入力すると、そのユーザーが入力した文字と最初の文字が一致する語が含まれている列値が提示されます。たとえば、大文字小文字の区別なし、照合レベルが**次で始まる語**のオートコンプリートを管理者が構成した場合、ユーザーが `c` と入力したときに、`ComCell`、`MPEG Camcorder` および `7 Megapixel Digital Camera` が候補として提示されます。
- **すべてに一致** - ユーザーが入力すると、そのユーザーが入力している文字を含む列値が提示されます。たとえば、大文字小文字の区別なし、照合レベルが**すべてに一致**のオートコンプリートを管理者が構成した場合、ユーザーが `l` と入力したときに、`LCD 36X Standard`、`LCD HD Television`、`7 Megapixel Digital Camera` および `Plasma HD Television` が候補として提示されます。

管理者が Oracle BI EE インスタンス構成ファイルでプロンプト設定を正しく構成している場合、ユーザーが「値の選択」ダイアログにアクセスしてプロンプト値を検索するときに、オートコンプリート機能によって一致する値が強調表示されます。ただし、照合レベルは、管理者が設定したプリファレンスでは判断されません。かわりに、ユーザーが「値の選択」ダイアログで照合レベルを選択します。

プロンプトのオートコンプリート機能は、管理者がシステム・レベルで有効にしますが、ダッシュボード設計者は、ダッシュボードからオートコンプリート機能を除外でき、ユーザーは、「マイ・アカウント」ダイアログを使用してオートコンプリートをオフにできます。オートコンプリートの各設定では、次の関連を考慮してください。

- **システム設定** - 管理者は、システム構成ファイルを変更して Oracle BI EE のオートコンプリート機能を有効にします。この機能がオンの場合、すべてのユーザーがプロンプトのオートコンプリート機能にアクセスできます。この機能がオフの場合、Oracle BI EE ユーザー・インタフェースのオートコンプリート・フィールドは

すべて無効になります。詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のプロンプトの構成を参照してください。

- **ダッシュボード設定** - Oracle BI EE のオートコンプリートが有効化されている場合、ダッシュボード設計者は、「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログで**「オートコンプリートのプロンプト」**フィールドを**「オフ」**に設定することで、個々のダッシュボードのオートコンプリート機能を削除できます。ただし、**「オートコンプリートのプロンプト」**設定が**「ユーザー・プリファレンス」**に設定されている他のダッシュボードについては、プロンプトのオートコンプリート機能は有効です。
- **ユーザー・プリファレンス設定** - Oracle BI EE および個々のダッシュボードでオートコンプリートが有効である場合、ユーザーは「≪マイ・アカウント | My Account | Bifndn≫」ダイアログの「≪プリファレンス | Preferences | Bifndn≫」タブに含まれる**「≪オートコンプリートのプロンプト | Prompts Auto-Complete | Bifndn≫」**フィールドを**「≪オフ | Off | Bifndn≫」**に設定して、自分のアカウントに対してプロンプトのオートコンプリート機能を無効にできます。このオプションを**「≪オフ | Off | Bifndn≫」**に設定すると、システム設定およびダッシュボード設定がオーバーライドされ、オートコンプリート機能がユーザーに表示されなくなります。

列プロンプトの作成

列プロンプトを使用すると、ユーザーは、ダッシュボードまたは分析の列に移入する値を選択できます。

次の手順を使用して、1 つ以上のダッシュボードに適用できる名前付き列プロンプトを作成したり、分析に埋め込まれるインライン列プロンプトを作成します。この手順には、選択ステップまたは階層列に関する情報は含まれていません。列プロンプトによる選択ステップのオーバーライドおよびプロンプトの編集を参照してください。

1. 列プロンプトを作成するには:
   a. Oracle BI Enterprise Edition ホームページに移動し、グローバル・ヘッダーでマウス・ポインタを**「新規」**メニューに合せてメニューにアクセスし、**「ダッシュボード・プロンプト」**を選択します。「サブジェクト領域の選択」メニューから、プロンプトの作成対象のサブジェクト領域を選択します。
   b. 「定義」ペインで**「新規」**ボタンをクリックして、プロンプト・タイプの選択リストにアクセスします。リストから**「列プロンプト」**を選択します。「列の選択」ダイアログが表示されます。
   c. 列を選択し、**「OK」**をクリックします。「新規プロンプト」ダイアログが表示されます。
      - リポジトリが二重列用に構成されている場合、適切な表示列を選択していることを確認します。二重列機能の理解を参照してください。
      - プロンプトに含める列の数は、パフォーマンスに影響します。通常、列の数は、可能なかぎり少なくします。
      - ダッシュボード・プロンプトを作成し、関連するサブジェクト領域を追加または削除する必要がある場合、「列の選択」ダイアログで**「サブジェクト領域の選択」**ボタンをクリックし、「サブジェクト領域の追加/削除」ダイアログを表示します。
2. インライン・プロンプトを作成するには:
   a. 新規分析を作成するか、プロンプトの作成対象の既存の分析にアクセスします。**「プロンプト」**タブをクリックします。「定義」ペインが表示されます。

b. 「定義」ペインで**「新規」**ボタンをクリックして、プロンプト・タイプの選択リストにアクセスします。リストから**「列プロンプト」**を選択します。分析の選択された列が、「列プロンプト」選択アイテムの隣のカスケード・メニューに表示されます。

   適切な列がリストにない場合、カスケード・リストで**「列を増やす」**オプションをクリックし、「列の選択」ダイアログから適切な列を選択します。

c. 列を選択します。「新規プロンプト」ダイアログが表示されます。

   - 列リストに表示されていない列に対してプロンプトを作成する場合、**「列を増やす」**オプションを選択します。「列の選択」ダイアログが表示され、列を参照して選択できます。
   - リポジトリが二重列用に構成されている場合、適切な表示列を選択していることを確認します。二重列機能の理解を参照してください。
   - プロンプトに含める列の数は、パフォーマンスに影響します。通常、列の数は、可能なかぎり少なくします。
   - ダッシュボード・プロンプトを作成し、関連するサブジェクト領域を追加または削除する必要がある場合、「列の選択」ダイアログで**「サブジェクト領域の選択」**ボタンをクリックし、「サブジェクト領域の追加/削除」ダイアログを表示します。

3. (オプション)**「式の編集」**ボタンをクリックして「列式の編集」ダイアログの「列式」タブを表示し、列の式を変更できます。

4. **「ラベル」**フィールドに、必要に応じて列フィルタ・プロンプトのキャプションを入力し、デフォルト・ラベルを変更します。キャプションは、プロンプトのフィールド・ラベルとして表示されます。

5. **「≪説明 | Description | Bifndn≫」**フィールドに、プロンプトの短い説明を入力します。この説明はツールチップ・テキストとして表示され、ユーザーがダッシュボードまたは分析でプロンプトのラベルにマウス・ポインタを合せると表示されます。

6. **「演算子」**リストから、使用する演算子を選択します。

7. **「ユーザー入力」**フィールドで、プロンプト・インタフェースでユーザーに入力を要求する方法(ラジオ・ボタンを使用してプロンプト値を 1 つのみ選択するようユーザーに要求するなど)を選択します。列のタイプによって、選択できるユーザー入力オプションが決まります。

8. 「オプション」セクションでプロンプト・オプションを選択し、リスト値のユーザーへの表示方法やユーザーのプロンプトとの対話方法などを指定します。プロンプト・オプションは、ユーザー入力タイプと、選択したリスト値のタイプによって異なります。個々のプロンプト・オプションの詳細は、「新規プロンプト」ダイアログを参照してください。

9. **「デフォルトの選択」**フィールドで、ユーザーに最初に表示するプロンプト値を選択します。デフォルト・タイプを選択する場合、値はサーバー変数から生成され、毎回選択(特定の値の選択、またはデフォルト値の決定方法の指定)を表示するように構成される必要があります。たとえば、**「SQL の結果」**を選択した場合、値のリストを生成する SQL 文を指定する必要があります。SQL 文は次のようになります。

   ```
   SELECT "Products"."Product", DESCRIPTOR_IDOF("Products"."Product") FROM "Sample
   Sales Lite" WHERE "Products"."Product"= VALUEOF(NQ_SESSION."username") FETCH
   FIRST 65001 ROWS ONLY]
   ```

10. **「OK」**をクリックします。プロンプトが、「定義」ペインに表示されます。

11. プロンプトを保存します。

    - ダッシュボード・プロンプトを作成する場合は、「プロンプト」エディタの**「プロンプトの保存」**ボタンをクリックし、プロンプトの保存先のフォルダを指定し、プロンプトを説明する名前を指定します。個人フォルダに保存されているダッシュボード・プロンプトは、本人のみが使用できます。共有フォルダに保存されているダッシュボード・プロンプトは、オブジェクトにアクセスする権限を持つ他のユーザーも使用できます。
    - SQL 問合せから Oracle BI サーバー、Oracle Database またはその他の JDBC ソースに対してデータを受け取る Oracle BI Publisher レポートに使用するダッシュボード・プロンプトを保存する場合、ダッシュボード・プロンプトの名前は、レポートのパラメータの名前と一致する必要があります。
    - インライン・プロンプトを作成する場合、分析を保存します。

12. 「定義」ペインの矢印ボタンを使用して、選択したプロンプトを並べ替えます。プロンプトの並替えによって、実行時に選択肢が表示される順序が制御されるため、制約付きプロンプトを作成する場合は特に、順序が論理的であるようにします。

13. 「定義」ペインのツールバーにある**「新規行」**ボタンまたは**「新規列」**ボタンをクリックして、プロンプト・ページに適用するレイアウトのタイプを選択します。「定義」表で、新しい行または列に表示するプロンプト項目に対応するチェック・ボックスをクリックします。

14. ダッシュボードでプロンプトがどのように表示されるかをプレビューするには、**「表示」ペイン**を使用してサンプル・データでプロンプトをプレビューするか、「定義」ペインのツールバーの**「プレビュー」**ボタン(使用可能な場合)をクリックして実際のプロンプト値でプロンプトを表示します。

    「≪プレビュー | Preview | Bifndn≫」ボタンが使用可能でない場合、表示されないよう管理者によって設定されています。

列プロンプトによる選択ステップのオーバーライド

次の手順を使用して、列プロンプト・オーバーライド付きの選択ステップを作成します。

選択ステップをダッシュボード・プロンプトまたは分析プロンプトでオーバーライドできます。たとえば、Products.Brand 選択ステップを BizTech および FunPod メンバーが指定された列プロンプトでオーバーライドするように指定できます。

次のリストに、ユーザーがグループまたは列メンバーを選択したときに、プロンプトを使用して選択ステップをオーバーライドする例を示します。

- 1 つ以上のグループ(My Regions と My Cities など)は、追加タイプの選択ステップのみオーバーライドできます。
- 1 つ以上のメンバー(Central と Eastern など)は任意のタイプの選択ステップをオーバーライドできます。
- 1 つ以上のグループおよび 1 つ以上のメンバー(My Regions と Central など)は、任意のタイプの選択ステップをオーバーライドできます。ただし、グループは無視され、メンバーはサポートされます。

列プロンプトを使用した選択ステップのオーバーライドの詳細は、次のトピックを参照してください。

- 他のプロンプト・タイプ
- フィルタおよび選択ステップとは

- データの選択の使用

1. 選択ステップをオーバーライドする列プロンプトを作成または編集する必要がある分析で、「選択ステップ」ペインにナビゲートして選択ステップを指定します。
2. 列プロンプトでオーバーライドする選択ステップを決め、その**「編集」**ボタンをクリックします。
3. 「メンバー・ステップの編集」ダイアログで、**「次でオーバーライド」**ボックスを選択し、**「プロンプト」**を選択します。
4. **「OK」**をクリックし、分析を保存します。
5. 必要に応じて、名前付きプロンプトまたはインライン・プロンプトのいずれかを作成します。

イメージ・プロンプトの作成

イメージ・プロンプトは、ユーザーがクリックして特定のプロンプト値を選択できるセクションまたは領域を含むイメージをユーザーに提供します。

たとえば、イメージ・プロンプトは、北部、南部、東部、西部、中部の各営業部を表すセクションを含む米国の地図の場合があります。ユーザーは、ダッシュボードまたは分析に表示する販売情報に対応する部署をクリックできます。

イメージ・プロンプトは 1 つ以上のダッシュボードに適用したり、分析に埋め込むことができます。次の手順を使用して、イメージ・プロンプトを作成または編集します。プロンプトの編集を参照してください。

1. 名前付きイメージ・プロンプトを作成するには:
   a. Oracle BI Enterprise Edition ホームページに移動し、グローバル・ヘッダーでマウス・ポインタを**「新規」**メニューに合せてメニューにアクセスし、**「ダッシュボード・プロンプト」**を選択します。「サブジェクト領域の選択」メニューが表示されます
   b. 「≪サブジェクト領域の選択 | Select Subject Area | Bifndn≫」メニューから、プロンプトの作成対象のサブジェクト領域を選択します。「定義」ペインが表示されます。
2. インライン・プロンプトを作成する場合、分析を作成するか、プロンプトの作成対象の既存の分析にアクセスします。「分析」エディタで**「プロンプト」**タブをクリックします。「定義」ペインが表示されます。
3. 「定義」ペインで**「新規」**ボタンをクリックします。リストから**「イメージ・プロンプト」**を選択します。
4. 「イメージ・マップ・プロンプトのプロパティ」ダイアログで、イメージ・プロンプトのキャプションを**「キャプション」**フィールドに入力します。キャプションは、プロンプトのフィールド・ラベルとして表示されます。
5. **「≪説明 | Description | Bifndn≫」**フィールドに、プロンプトの短い説明を入力します。この説明はツールチップ・テキストとして表示され、ユーザーがダッシュボードまたは分析でプロンプトのラベルにマウス・ポインタを合せると表示されます。

   管理者が、格納されているプロンプト・オブジェクトをカタログ・マネージャから表示した場合にも、説明は表示されます。
6. **「イメージ URL」**フィールドに、イメージの場所と名前を入力します。

   イメージ・ファイルは Web サーバー上にあることが必要です。すべての Web リソース・ファイルが含まれているディレクトリ(例: `app\res\region3.jpg`)にイメ

ージ・ファイルを配置することをお薦めします。イメージ・ファイルを Web リソース・ファイルと一緒に配置すると、ユーザーがダッシュボードまたは分析からイメージにアクセスした場合にセキュリティ警告メッセージが表示されるのを回避できます。

ただし、リソース・ファイルがデプロイ・ディレクトリに置かれる WebLogic などの Web サーバーを使用する場合、デプロイ・ディレクトリと、すべての Web リソース・ファイルが含まれているディレクトリにイメージ・ファイルを置く必要があります。

7. **「HTML」**フィールドに、適切な HTML <map>タグとデータを入力します。マップ・タグで、マップ領域の形状、X 座標、Y 座標および領域名を指定します。例:

```
<MAP Name="mymap">
<AREA Shape="poly" Coords="70,84,51,300,455"
   Href="http://www.map.com/region1.html">
<AREA Shape="poly" Coords="25,180,125,280,485,668"
   Href="http://www.map.com/region2.html">
<AREA Shape="poly" Coords="152,106,186,225,340,193"
   Href="http://www.map.com/region3.html">
<AREA Shape="poly" Coords="675,763,929,286,10,908"
   Href="http://www.map.com/region43.html">
</MAP>
<IMG Src="../images/imagemap.gif" Width="500" Height="300"
   Alt="Image Map" Usemap="#mymap" Ismap>
```

8. HTML からイメージ・マップ情報を抽出するには、**「HTML からイメージ・マップを抽出」**をクリックします。

「イメージ・マップ・プロンプトのプロパティ」ダイアログが拡張されて、**「HTML」**フィールドに入力した領域タイトル、形状および座標が表示されます。

- 領域ごとに、**「列」**フィールドに、ユーザーがクリックしたときに渡される列の名前と、使用する値を入力します。列は、Folder.Column Name の形式の完全修飾列名である必要があります。
- 空白を含む列名は二重引用符で囲みます。例:
  - `"Country name"`
  - `"Units shipped"`

9. **「OK」**をクリックします。プロンプトが、「定義」ペインに表示されます。

10. プロンプトを保存します。

- ダッシュボード・プロンプトを作成する場合、プロンプトのエディタの**「保存」**ボタンをクリックし、プロンプトの保存先のフォルダを指定して、プロンプトを説明する名前を指定します。個人フォルダに保存されているダッシュボード・プロンプトは、本人のみが使用できます。共有フォルダに保存されているダッシュボード・プロンプトは、オブジェクトにアクセスする権限を持つ他のユーザーも使用できます。
- SQL 問合せから Oracle BI サーバー、Oracle Database またはその他の JDBC ソースに対してデータを受け取る Oracle BI Publisher レポートに使用するダッシュボード・プロンプトを保存する場合、ダッシュボード・プロンプトの名前は、レポートのパラメータの名前と一致する必要があります。
- インライン・プロンプトを作成する場合、分析を保存します。

11. 「定義」ペインの矢印ボタンを使用して、選択したプロンプトを並べ替えます。プロンプトの並替えによって、実行時に選択肢が表示される順序が制御されるため、制約付きプロンプトを作成する場合は特に、順序が論理的であるようにします。

12. 新しい行または列をプロンプト・ページに追加する場合は、「≪定義 | Definition | Bifndn≫」ペインのツールバーにある**「≪新規行 | New Row | Bifndn≫」**ボタンまたは**「≪新規列 | New column | Bifndn≫」**ボタンをクリックします。「定義」表で、新しい行または列に表示するプロンプトに対応するチェック・ボックスをクリックします。

13. ダッシュボードでプロンプトがどのように表示されるかをプレビューするには、「表示」ペインを使用してサンプル・データでプロンプトをプレビューするか、「定義」ペインのツールバーの**「プレビュー」**ボタン(使用可能な場合)をクリックして、実際のプロンプト値でプロンプトを表示します。

    「≪プレビュー | Preview | Bifndn≫」ボタンが使用可能でない場合、表示されないよう管理者によって設定されています。

通貨プロンプトの作成

通貨プロンプトを使用すると、ユーザーは、ダッシュボードまたは分析に表示されている通貨タイプを変更できます。

プロンプトをダッシュボードに適用したり、分析に埋め込むと、通貨を選択できるリストがユーザーに提供されます。リスト内の通貨タイプは、管理者によって`userpref_currencies.xml`に指定されています。同じ通貨リストが、「マイ・アカウント」ダイアログの「プリファレンス」タブに表示されます。

次の手順を使用して、1 つ以上のダッシュボードに適用できる通貨プロンプトを作成したり、分析に埋め込まれる通貨プロンプトを作成します。プロンプトの編集を参照してください。

1. 名前付き通貨プロンプトを作成する場合、次の手順を使用します。

    a. Oracle BI Enterprise Edition ホームページに移動し、グローバル・ヘッダーでマウス・ポインタを**「新規」**メニューに合せてメニューにアクセスし、**「ダッシュボード・プロンプト」**を選択します。

    b. 「≪サブジェクト領域の選択 | Select Subject Area | Bifndn≫」メニューから、プロンプトの作成対象のサブジェクト領域を選択します。「定義」ペインが表示されます。

2. インライン・プロンプトを作成する場合、分析を作成するか、プロンプトの作成対象の既存の分析にアクセスします。「分析」エディタで**「プロンプト」**タブをクリックします。

3. 「≪定義 | Definition | Bifndn≫」ペインで、**「≪新規 | New | Bifndn≫」**をクリックします。リストから、**「≪通貨プロンプト | Currency Prompt | Bifndn≫」**を選択します。

    「≪通貨プロンプト | Currency Prompt | Bifndn≫」オプションは、管理者が`userpref_currencies.xml`ファイルを構成した場合のみ使用できます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*の通貨オプションの構成を参照してください。

4. 「新規プロンプト」ダイアログで、**「ラベル」**フィールドに、通貨プロンプトのラベルを入力します。ラベルは、プロンプトのフィールド・ラベルとして表示されます。

5. **「≪説明 | Description | Bifndn≫」**フィールドに、プロンプトの短い説明を入力します。この説明はツールチップ・テキストとして表示され、ユーザーがダッシュボードまたは分析でプロンプトのラベルにマウス・ポインタを合せると表示されま

す。管理者が、格納されているプロンプト・オブジェクトをカタログ・マネージャから表示した場合にも、説明は表示されます。

6. **「OK」**をクリックします。「≪定義 | Definition | Bifndn≫」ペインにプロンプトが表示されます。

7. プロンプトを保存します。

   - ダッシュボード・プロンプトを作成する場合、プロンプトのエディタの**「保存」**ボタンをクリックし、プロンプトの保存先のフォルダを指定して、プロンプトを説明する名前を指定します。個人フォルダに保存されているダッシュボード・プロンプトは、本人のみが使用できます。共有フォルダに保存されているダッシュボード・プロンプトは、オブジェクトにアクセスする権限を持つ他のユーザーも使用できます。

   - SQL 問合せから Oracle BI サーバー、Oracle Database またはその他の JDBC ソースに対してデータを受け取る Oracle BI Publisher レポートに使用するダッシュボード・プロンプトを保存する場合、ダッシュボード・プロンプトの名前は、レポートのパラメータの名前と一致する必要があります。

   - インライン・プロンプトを作成する場合、分析を保存します。

8. 「定義」ペインの矢印ボタンを使用して、選択したプロンプトを並べ替えます。プロンプトの並替えによって、実行時に選択肢が表示される順序が制御されるため、制約付きプロンプトを作成する場合は特に、順序が論理的であるようにします。

9. 新しい行または列をプロンプト・ページに追加する場合は、「≪定義 | Definition | Bifndn≫」ペインのツールバーで**「≪新規行 | New Row | Bifndn≫」**または**「≪新規列 | New Column | Bifndn≫」**をクリックします。「定義」表で、新しい行または列に表示するプロンプトに対応するチェック・ボックスをクリックします。

10. ダッシュボードでプロンプトがどのように表示されるかをプレビューするには、「≪表示 | Display | Bifndn≫」ペインを使用してサンプル・データでプロンプトをプレビューするか、「≪定義 | Definition | Bifndn≫」ペインのツールバーの**「≪プレビュー | Preview | Bifndn≫」**ボタン(使用可能な場合)をクリックして実際のプロンプト値でプロンプトを表示します。

    「≪プレビュー | Preview | Bifndn≫」ボタンが使用可能でない場合、表示されないよう管理者によって設定されています。

変数プロンプトの作成

1 つ以上のダッシュボードに適用できる変数プロンプトの作成や、分析に埋め込まれる変数プロンプトの作成が可能です。

変数プロンプトは列に依存しませんが、列を使用することはできます。たとえば、変数プロンプトを使用して、ユーザーが既存のデータを指定して販売予測を実行できるようにします。販売予測という変数プロンプトを作成し、変数プロンプトの値に 10 パーセント、20 パーセントおよび 30 パーセントを指定できます。地域と売上金額の列を含む分析を作成します。売上金額の列式に乗算の演算子を選択し、販売予測変数を挿入します。ユーザーは、この分析を実行する際、売上金額の列の再計算に使用するパーセンテージを選択します。

他のプロンプト・タイプ、変数の使用およびプロンプトの編集を参照してください。

1. 名前付き変数プロンプトを作成するには:

   a. Oracle BI Enterprise Edition ホームページに移動し、グローバル・ヘッダーでマウス・ポインタを**「新規」**メニューに合せてメニューにアクセスし、メニューから**「ダッシュボード・プロンプト」**を選択します。

b. 「≪サブジェクト領域の選択 | Select Subject Area | Bifndn≫」メニューから、プロンプトの作成対象のサブジェクト領域を選択します。

2. インライン・プロンプトを作成する場合、分析を作成するか、プロンプトの作成対象の既存の分析にアクセスします。「分析」エディタで**「プロンプト」**タブをクリックします。

3. 「定義」ペインで**「新規」**ボタンをクリックし、リストから**「変数プロンプト」**を選択します。

4. 「新規プロンプト」ダイアログの**「プロンプト対象」**ボックスで、作成する変数のタイプを選択し、変数の名前を入力します。

5. **「ラベル」**フィールドに、変数フィルタ・プロンプトのキャプションを入力します。キャプションは、プロンプトのフィールド・ラベルとして表示されます。

6. **「≪説明 | Description | Bifndn≫」**フィールドに、プロンプトの短い説明を入力します。この説明はツールチップ・テキストとして表示され、ユーザーがダッシュボードまたは分析でプロンプトのラベルにマウス・ポインタを合せると表示されます。管理者が、格納されているプロンプト・オブジェクトをカタログ・マネージャから表示した場合にも、説明は表示されます。

7. **「ユーザー入力」**フィールドで、プロンプト・インタフェースでユーザーに入力を要求する方法を選択します。たとえば、ラジオ・ボタンを使用してプロンプト値を1つのみ選択するようユーザーに要求します。

8. **「選択リスト」**、**「チェック・ボックス」**、**「ラジオ・ボタン」**、**「リスト・ボックス」**のいずれかのユーザー入力タイプを選択した場合、プロンプトの値のリストも指定する必要があります。

9. 「オプション」セクションでプロンプト・オプションを選択します。プロンプト・オプションは、選択したユーザー入力タイプによって異なります。プロンプト・オプションによって、ユーザーとプロンプトの対話方法(ユーザー入力が必須かどうかなど)をさらに指定できます。

10. **「デフォルトの選択」**フィールドで、ユーザーに最初に表示するプロンプト値を選択します。特定の値を選択すると、**「デフォルト値」**フィールドが表示され、値を入力できます。

11. プロンプトを保存します。

    - ダッシュボード・プロンプトを作成する場合、プロンプトのエディタの**「保存」**ボタンをクリックし、プロンプトの保存先のフォルダを指定して、プロンプトを説明する名前を指定します。個人フォルダに保存されているダッシュボード・プロンプトは、本人のみが使用できます。共有フォルダに保存されているダッシュボード・プロンプトは、オブジェクトにアクセスする権限を持つ他のユーザーも使用できます。

    - SQL 問合せから Oracle BI サーバー、Oracle Database またはその他の JDBC ソースに対してデータを受け取る Oracle BI Publisher レポートに使用するダッシュボード・プロンプトを保存する場合、ダッシュボード・プロンプトの名前は、レポートのパラメータの名前と一致する必要があります。

    - インライン・プロンプトを作成する場合、分析を保存します。

12. 「定義」ペインの矢印ボタンを使用して、選択したプロンプトを並べ替えます。プロンプトの並替えによって、実行時に選択肢が表示される順序が制御されるため、制約付きプロンプトを作成する場合は特に、順序が論理的であるようにします。

13. 新しい行または列をプロンプト・ページに追加する場合は、「≪定義 | Definition | Bifndn≫」ペインのツールバーにある**「≪新規行 | New Row | Bifndn≫」**ボタ

ンまたは「**≪新規列 | New column | Bifndn≫**」ボタンをクリックします。「定義」表で、新しい行または列に表示するプロンプトに対応するチェック・ボックスをクリックします。

14. ダッシュボードでプロンプトがどのように表示されるかをプレビューするには、「表示」ペインを使用してサンプル・データでプロンプトをプレビューするか、「定義」ペインのツールバーの「**プレビュー**」ボタン(使用可能な場合)をクリックして、実際のプロンプト値でプロンプトを表示します。

    「**≪プレビュー | Preview | Bifndn≫**」ボタンが使用可能でない場合、表示されないよう管理者によって設定されています。

プロンプトの編集

保存済のダッシュボード・プロンプトまたはインライン・プロンプトを編集して、プロンプトが使用される場所にその変更を伝播できます。

たとえば、「Brand」列のプロンプトを編集して、選択リストへのユーザー入力を変更できます。この変更は、プロンプトが使用されるブランド売上分析に伝播されます

名前付きプロンプトを編集して保存した場合は、プロンプトが使用される場所にプロンプトに対する変更が伝播されます。

1. ダッシュボード・プロンプトを開くには:
    a. グローバル・ヘッダーで、「**カタログ**」をクリックします。
    b. カタログ・ページで編集対象のプロンプトに移動し、「**編集**」リンクをクリックします。プロンプト・エディタが表示されます。
2. インライン・プロンプトを開くには:
    a. 分析で「**プロンプト**」タブをクリックします。
    b. 「定義」ペインで、編集対象のプロンプトを強調表示して、「**編集**」ボタンをクリックします。プロンプト・エディタが表示されます。
3. 必要な変更を行います。
4. プロンプトを保存します。

ダッシュボードまたはダッシュボード・ページへのダッシュボード・プロンプトの追加

ダッシュボードまたはダッシュボード・ページにダッシュボード・プロンプトを追加すると、ユーザーはダッシュボードと対話できるようになります。

インライン・プロンプトとダッシュボード・プロンプトとはを参照してください

1. 新規ダッシュボードを作成するか、既存のダッシュボードを開いて「**ダッシュボードの編集**」ボタンをクリックします。

    ヒント: ダッシュボードに列オブジェクトを追加するときに、列をドラッグ・アンド・ドロップしてダッシュボード上に垂直に表示することができます。その後、この列にダッシュボード・プロンプトを追加すると、実行時にそのダッシュボードのプロンプトがダッシュボードの横のペインに表示されます。

2. ダッシュボード・ビルダーの「カタログ」ペインで、分析やKPIウォッチリストなどのオブジェクトを特定し、ダッシュボードのセクションにドラッグ・アンド・ドロップします。

3. ダッシュボード・ビルダーの「カタログ」ペインでダッシュボード・プロンプトを特定し、ダッシュボードのセクションにドラッグ・アンド・ドロップします。

   ヒント: ユーザーによるプロンプト値の選択後に新規ブラウザ・ウィンドウが開かないようにする場合、ダッシュボード・セクションの**「詳細オプション」**ボタンをクリックし、**「その場でドリル」**を選択します。

4. ページ・レイアウト領域でプロンプト・オブジェクトにマウス・ポインタを合せてオブジェクトのツールバーを表示し、**「プロパティ」**ボタンをクリックして、**「有効範囲」**を選択してオプションを選択します。

   - **「ダッシュボード」**を選択すると、プロンプトは、プロンプトを含むすべてのダッシュボード・ページに作用します。ユーザーがダッシュボード・レベルのプロンプトに対して選択したプロンプト値によって、ページ・レベルのダッシュボード・プロンプトの値がオーバーライドされます。
   - **「ページ」**を選択すると、ダッシュボード・プロンプトは、プロンプトの追加先のページにのみ作用します。

5. ページ・レイアウト領域でプロンプト・オブジェクトにマウス・ポインタを合せてオブジェクトのツールバーを表示し、**「プロパティ」**ボタンをクリックして、**「プロンプト・リンク...」**を選択します。「プロンプト・リンク」ダイアログで、実行時にプロンプトと一緒に**「編集」**リンクと**「コピー」**リンクを表示するかどうかを指定します。

ダッシュボードまたはダッシュボード・ページへの非表示のダッシュボード・プロンプトの追加

ダッシュボードまたはダッシュボード・ページに非表示ダッシュボード・プロンプトを追加できます。

実行時、非表示のダッシュボード・プロンプトによって、ダッシュボードまたはダッシュボード・ページのすべての該当するプロンプト、およびダッシュボードまたはダッシュボード・ページの分析に配置されている、保護されていないインライン・プロンプトにデフォルト値が設定されます。1 つ以上の非表示のダッシュボード・プロンプトをダッシュボードまたはダッシュボード・ページに追加できます。

1. 非表示のプロンプトとして使用する、特定のデータ値を含むダッシュボード・プロンプトを作成して保存します。
2. 新規ダッシュボードを作成するか、既存のダッシュボードを開いて**「ダッシュボードの編集」**ボタンをクリックします。
3. ダッシュボード・ビルダーで、**「ツール」**ボタンをクリックし、**「ダッシュボードのプロパティ」**を選択します。「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログが表示されます。
4. 非表示のプロンプトをダッシュボード全体に追加する場合、**フィルタと変数の編集**ボタンをクリックします。「ダッシュボードのフィルタと変数」ダイアログが表示されます。

   非表示のプロンプトをダッシュボード・ページに追加する場合、「ダッシュボード・ページ」表からページを選択し、「ダッシュボード・ページ」表の上にある**「デフォルトのフィルタと変数を取得するためのプロンプトの選択」**ボタンをクリックします。「フィルタと変数 - ページ」ダイアログが表示されます。

5. **「新規非表示ダッシュボード・プロンプトの埋込み」**ボタンをクリックし、ダッシュボード・プロンプトを検索して選択します。**「OK」**をクリックします。
6. ダッシュボードのプロパティ・ページで**「OK」**をクリックして、ダッシュボードのプロパティを保存します。

8

分析、ビューおよびダッシュボード・ページの書式設定

この章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition で、分析、ビューおよびダッシュボード・ページに書式設定を適用する方法を説明します。ここでは、装飾的な書式設定、条件付き書式設定、カスタム書式設定マスクおよびカスタム書式設定文字列について説明します。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- 書式設定可能なもの
- 分析の列の書式設定
- 装飾的な書式とは
- 表、ピボット表、パフォーマンス・タイル、グラフ、ヒート・マトリックスおよびトレリスへの条件付き書式の適用
- カスタム・ファイルをローカルに格納し fmap 関数を使用して参照する方法
- カスタム書式設定マスク
- カスタム書式設定文字列

書式設定可能なもの

分析を作成して実行すると、デフォルトの書式設定ルールが分析の結果に適用されます。

デフォルトの書式設定ルールは、カスケーディング・スタイル・シートと XML メッセージ・ファイルに基づきます。追加の書式設定を作成し、特定の結果に適用できます。追加の書式設定は、関連する情報のブロックを強調表示したり、特定のデータ要素に注意を促す場合に便利です。追加の書式設定を使用して、分析やダッシュボードの外観をカスタマイズすることもできます。

書式は次のものに適用できます。

- 分析内の列。分析の列への書式の適用を参照してください
- ビュー。ビューへの書式の適用を参照してください
- ダッシュボード・ページ。ダッシュボード・ページへの書式の適用を参照してください

分析の列への書式の適用

分析の列の操作時、書式設定を指定できます。

適用する書式は、表およびピボット表などのビューに列が表示されたときに確認できます。分析の列の書式設定を参照してください。

ビューへの書式の適用

ビューに書式を適用する方法は複数あります。

ビューへの書式の適用は、次の方法で行えます。

- 「ビュー」エディタ: ビューをエディタで編集する場合、通常、様々なダイアログを表示して、ビュー自体またはビューのコンポーネントのいずれか必要な方を書式設定します。書式設定オプションは、ビューのタイプに固有のものです。ビュー・エディタで指定した書式設定は、列に指定されている書式設定をオーバーライドします。
- 複合レイアウト: 複合レイアウトを使用する場合、各ビューのコンテナのツールバーのボタンをクリックし、書式設定ダイアログを表示できます。そのダイアログを使用してビューのコンテナに書式(表のコンテナの背景色を緑にするなど)を適用します。

ダッシュボード・ページへの書式の適用

書式設定は、ダッシュボード・ページのページ・レイアウト列とセクションに適用できます。

ダッシュボード・ページを編集する際、列とセクションのプロパティを編集し、装飾的な書式を適用できます。詳細は、装飾的な書式とはおよびダッシュボードの作成と使用を参照してください。

分析の列の書式設定

列に特定の書式を適用すると、基準を満たすデータに注意を向けることができます。

分析を作成する際、列のプロパティを編集して外観とレイアウトを制御できます。列のコンテンツが特定の条件を満たす場合のみ、適用する書式を指定することもできます。デフォルトでは、列に対する指定は、現在の分析にのみ適用されます。

アカウントに適切な権限がある場合、その列または特定のデータ型の列からのデータが結果に表示されるたびに使用するシステム全体のデフォルト設定として、ユーザー指定の列プロパティを保存できます。デフォルトとして保存できるプロパティには、書式設定のプロパティや、相互作用やデータのライトバックに影響を与えるその他のプロパティなどがあります。

グループと計算項目は、単にそれぞれの列のメンバーであるだけなので、グループまたは計算項目に特に書式を適用しないかぎり、列から書式設定を継承し、他のメンバーと同じ優先順序に従います。

この項は次のトピックで構成されています。

- 適用可能な書式設定の種類
- 書式の列への適用
- 書式設定のデフォルトの保存

適用可能な書式設定の種類

「列のプロパティ」ダイアログのタブを使用して、列のコンテンツがビューにどのように表示されるかをカスタマイズできます。階層レベルによって、詳細な書式設定を階層列に使用できます。

次のリストに、適用可能な書式設定の種類の例を示します。

- フォント・ファミリやサイズなどの装飾的な書式設定を列または階層レベルに適用します。
- 代替フォルダや列の見出しに名前を割り当て、カスタム書式を適用します。
- 列ラベルの繰返しなどの重複するデータの表示を制御します。
- 列とデータ値のデフォルト書式設定をカスタム書式設定でオーバーライドします。
- 値に基づいて異なる書式を適用できる条件付き書式を列または階層レベルに適用します。たとえば、$1 百万より大きい値に緑色の書式を設定します。

書式の列への適用

列のデフォルトの書式を設定できます。

デフォルトの設定は、表などのデータ・ビューのエディタで列を書式設定することで、オーバーライドできます。

1. 分析エディタの「基準」タブで書式設定と動作の編集対象の分析を開き、次のようにします。
2. 変更する列または階層列を追加または特定します。(階層レベルを表示するには、列を展開します。)
3. 「選択された列」ペインで列名または階層レベル名の右にある**「オプション」**ボタンをクリックし、**「列のプロパティ」**または**「階層レベル・プロパティ」**をクリックします。
4. 「列のプロパティ」ダイアログで**「スタイル」**タブをクリックし、各セルとコンテンツを分析で表示する方法を指定します。たとえば、セルの枠を赤に変更し、セルのコンテンツを 14 ポイントの Arial フォントで表示するよう変更します。
5. 「列のプロパティ」ダイアログで**「列書式」**タブをクリックして、見出しの名前や値の抑制などの様々なプロパティを指定します。
6. **「データ書式」**タブをクリックし、データのデフォルトの表示特性をどのようにオーバーライドするかを指定します。このタブに表示されるオプションは、データ型(テキスト、日付と時間のゾーン、数値など)によって異なります。
7. **「条件付き書式」**タブをクリックし、条件付き書式を列または階層レベルに追加します。
8. 「基準」タブから「列のプロパティ」ダイアログにアクセスした場合は、適切な権限がある場合に、オプションで**「デフォルトとして保存」**をクリックしてデフォルトを復元したり、保存するための適切なオプションをクリックできます。
9. **「OK」**をクリックし、変更を保存します。

書式設定のデフォルトの保存

用意されているスタイル・シートを使用して列の書式設定のデフォルトを上書きできます。

「列のプロパティ」ダイアログのタブを使用して、列のコンテンツがビューでどのように表示されるかをカスタマイズすると、Oracle Business Intelligence スタイル・シートおよび列または階層レベルのシステム・デフォルトがオーバーライドされます。

変更したプロパティをその分析内のその列または階層レベルに対してのみ保存することも、そのデータ型に対するシステム全体のデフォルトとしてプロパティを保存することも、その列または階層レベルに対するシステム全体のデフォルトとしてプロパティを保存し、どの分析に表示されても書式と動作が同じになるようにすることもでき

ます。その結果、後続の分析で、この列または階層レベル、あるいはこのデータ型の列または階層レベルを使用するユーザーには、「列のプロパティ」ダイアログの設定がデフォルトで使用されます。システム全体のプロパティを保存するには、適切な権限を持っている必要があります。

システム全体のデフォルトを設定する機能を使用すれば、組織内で一貫性を保ちながら時間を節約できます。たとえば、組織で、すべての分析のすべてのテキスト列のフォント・ファミリとして Arial を使用することを決定していたとします。その後、すべてのテキスト列を Times New Roman に切り替えることを決定したとします。この場合、テキスト列に対するシステム全体のデフォルトとして Times New Roman を保存すれば簡単に対応できます。フォント・ファミリがデフォルト(Arial)に指定されているテキスト列を含むすべての既存の分析が自動的に更新されます。

装飾的な書式とは

装飾的な書式は、列と階層レベルのデータ、ビューおよびダッシュボード・ページの列とセクションの外観に影響を与えます。

装飾的な書式を適用したり、装飾的な書式属性をコピーして貼り付けたり、書式設定した分析を保存して他の分析の列に使用できます。

様々なダイアログを表示して、様々な装飾的属性にアクセスしたり、制御できます。書式設定するオブジェクトに応じて、異なるオプション(フォント、セル、枠のコントロール、背景色や、セルのパディング、HTML のカスタム CSS スタイル・オプションなどのその他の書式設定オプション)がダイアログに表示されます。

保存済分析を使用した他の分析の外観の変更

保存済分析からその他の分析に書式設定をインポートできます。

「基準」タブと「結果」タブを使用して分析の外観をカスタマイズし、保存すると、保存済分析とそのビューから新規分析または既存の分析に書式設定をインポートできます。ゲージ、グラフ、ヒート・マトリックス、パフォーマンス・タイル、ツリーマップなどの一部のビューでは、インポートによる書式設定はサポートされていません。この項は次のトピックで構成されています。

- 「別の分析から書式設定をインポート」ボタンの場所
- インポートされた書式設定がサポートされるビューのタイプ
- インポートされた書式の適用方法
- 保存済分析を使用した書式設定のインポート

「別の分析から書式設定をインポート」ボタンの場所

「別の分析から書式設定をインポート」ボタンをクリックすると、保存済分析を使用して、他のビューの外観を変更できます。

このボタンは、次のツールバーにあります。

- 複合レイアウトのツールバー - このボタンをクリックすると、レイアウト内の該当するすべてのビューに書式が適用されます。コンテナからの書式の適用を参照してください。
- ビュー・エディタのツールバー - このボタンをクリックすると、編集中のビューにのみ書式が適用されます。インポートされた書式設定がサポートされるビューのタイプを参照してください。

インポートされた書式設定がサポートされるビューのタイプ

一部のビュー・タイプでは、他のビューからインポートされた書式設定がサポートされています。

次のリストに、保存済分析を使用した他のビューの書式設定がサポートされるコンポーネントを示します。

- **ビュー・タイプ** - 次のビュー・タイプから書式設定をインポートできます。
  - 凡例 - 凡例タイトル、キャプションおよび凡例コンテナの書式設定をインポートします。テキストのコンテンツはインポートされません。
  - ナレーティブ - テキストのフォント色のみインポートします。接頭辞、接尾辞、ナレーティブ・テキストなどのテキストのプロパティはインポートされません。
  - ピボット表、表およびトレリス: 列、緑に塗りつぶす指定、小計および合計の書式設定とセクションのプロパティをインポートします。
  - 静的テキスト - テキストのフォント色のみインポートします。テキストのコンテンツはインポートされません。
  - タイトル: タイトル、ロゴ、サブタイトル、開始時間およびヘルプ URL をインポートします。
  - ビュー・セレクタ - キャプションの書式設定のみをインポートします。
- **複合レイアウト** - 複合レイアウトのビューの**「コンテナのフォーマット」**ボタンをクリックした後に指定した書式設定をインポートできます。

インポートされた書式の適用方法

インポートされた書式はローカルの書式と適用方法が異なります。

列に適用された書式をインポートするか、ビューに適用された書式をインポートするか、複合レイアウトのビューのコンテナに適用された書式をインポートするかによって、書式の適用方法が異なります。

列からの書式の適用

この機能は、属性、メジャーまたは階層の列番号が正確に配置されている場合、またはすべての列に適用可能な単一列テンプレートの場合、ビューに最適です。

単一列が保存済分析にある場合、ターゲットの分析の表、ピボット表およびトレリスのすべての列に、その書式が適用されます。

複数列の場合、書式は、列見出しおよび値に対して位置で(左から右に)適用されます。保存済分析内の列の数を超える列には、最も近い列の書式が繰り返されます。たとえば、保存済分析に、赤、緑、青、黄の順に書式設定された 4 個の列が含まれているとします。ターゲットの分析の 6 個の列には、赤、緑、青、黄、黄、黄の順に色が付けられます。

ビューからの書式の適用

ビューに書式が適用されるのは、そのタイプのビューがターゲットの分析にある場合のみです。

インポートされた書式は、ターゲットの分析内のそのタイプのすべてのビューに適用されます。たとえば、保存済分析に、書式設定をカスタマイズした凡例が含まれているとします。その書式設定を、3 個の凡例が含まれたターゲットの分析にインポートすると、3 個の凡例すべてがその書式設定を継承します。

コンテナからの書式の適用

複合レイアウトで、ビューのコンテナに書式設定プロパティ(背景色、枠、パディングなど)を指定できます。

保存済分析を使用して、そのコンテナの書式設定をインポートすると、ターゲットの分析のビューは、保存済分析のビューのコンテナの書式設定プロパティをそのまま継承します。

2 つの分析のビューのレイアウトがまったく同じでなくても、コンテナの書式設定は適切に作用します。ターゲットの分析にソースの分析以上のビューが含まれている場合、余剰分のビューは、インポートされた書式設定を継承します。たとえば、複合レイアウト内に重なり合った 2 つの表が保存済分析に含まれているとします。ターゲットの分析には、2 つずつレイアウトされた 4 個の表が含まれているとします。ソースの分析には、2 つの表ビューのレイアウト列が 1 つのみあります。ターゲットの分析の 1 つ目と 2 つ目の各レイアウト列の 2 つの表は、適用された書式を継承します。

保存済分析を使用した書式設定のインポート

保存済分析を使用して書式設定をインポートすると、分析間の整合性を確保するのに役立ちます。

保存済分析の書式をテンプレートのように使用できます。

1. 「分析」エディタの「結果」タブで、書式設定をインポートする分析を表示するか、エディタにビューを表示します。
2. **「別の分析から書式設定をインポート」**ボタンをクリックします。
3. 「分析の選択」ダイアログで、保存済分析に移動し、**「OK」**をクリックします。

表、ピボット表、パフォーマンス・タイル、グラフ、ヒート・マトリックスおよびトレリスへの条件付き書式の適用

表、ピボット表、パフォーマンス・タイル、グラフ、ヒート・マトリックスおよびトレリスの条件付き書式は、特定の条件を満たすデータ要素に注意を向けるのに役立ちます。

たとえば、ノルマに満たない売上を特定の色で表示したり、特定のパーセント以上ノルマを達成した営業スタッフの横にトロフィなどのイメージを表示します。

この項では、表、ピボット表、パフォーマンス・タイル、ヒート・マトリックスおよびトレリスで条件付き書式を適用する方法について説明します。列に基づいたグラフの書式設定を参照してください。この項は次のトピックで構成されています。

- 条件付き書式の適用方法
- 別の列に基づく条件付き書式
- 条件付き書式に影響を及ぼす要因
- 条件付き書式の適用
- ランキングに対する条件付き書式設定の例

条件付き書式の適用方法

条件付き書式は、使用する分析内の列または階層レベルを 1 つ以上選択して満たすべき条件を指定し、条件を満たす場合に適用するフォント、セル、枠、スタイル・シートの各オプションを指定して適用します。

条件付き書式には、データおよびデータを含むセルに対する色、フォント、イメージなどを含めることができます。指定は、操作をしている分析の表およびピボット表内の列または階層レベルのコンテンツにのみ適用されます。

複数の条件を追加し、データの値に基づいて、複数の書式のうちの 1 つを使用してデータを表示できます。たとえば、ノルマに満たない売上をある色で表示し、ノルマを超えた売上を別の色で表すことができます。複数の条件を指定すると、すべての条件が検証され、真の条件について書式がマージされます。複数の書式をマージしようとして競合があった場合、最後に真と検証された条件によって、表示される書式が影響を受けます。

条件付き書式設定は、直接データベース・リクエストではサポートされていません。

別の列に基づく条件付き書式

表、ピボット表およびトレリスに表示する場合、別の列の値に基づいて列に適用する条件付き書式を作成できます。

たとえば、次に示すように、「1 - Revenue」列の値が 9 百万ドルより大きい場合に「D50 Region」列を緑にする条件付き書式を作成できます。

Table

T05 Per Name Year	D50 Region	1- Revenue
2010	AMERICAS	6,958,556
	APAC	7,092,042
	EMEA	9,449,403
2011	AMERICAS	6,767,910
	APAC	6,985,977
	EMEA	9,246,113
2012	AMERICAS	6,918,876
	APAC	7,221,563
	EMEA	9,359,560

「列のプロパティ」ダイアログの「列書式」タブの**「非表示」**オプションを使用すると、分析のビューに表示されない列を使用して条件を作成できます。「レイアウト」ペインの「除外」ドロップ・ターゲットに列を置くと、その列を使用して条件を作成できません。

「レイアウト」ペインで**「データを次として表示」**オプションを選択してパーセンテージまたは指数でデータを表示する場合でも、条件付き書式は、ベースの値に基づいて適用されます。

パフォーマンス・タイルでは、別の列に基づいて条件付き書式設定を継承したり、パフォーマンス・タイルで「除外」ドロップ・ターゲットを使用することはできません。

条件付き書式に影響を及ぼす要因

条件付き書式は様々な要素による影響を受けます。

条件付き書式の列への適用方法は、次のリストに示す要因によって異なります。

- レイアウト、順序と条件付き書式

- 値の抑制と条件付き書式

レイアウト、順序と条件付き書式

ある列の値の条件付き書式は、条件付き書式が別の列に基づく場合、ビュー内の列のレイアウトの影響を受けます。

ビュー内の列のレイアウトを変更すると、条件付き書式の表示を変更できます。たとえば、T05 Per Name Year が 2009 の D50 Region 列に条件付き書式を指定するとします。ピボット表で D50 Region と T05 Per Name Year が反対のエッジにある場合、条件付き書式は表示されません。

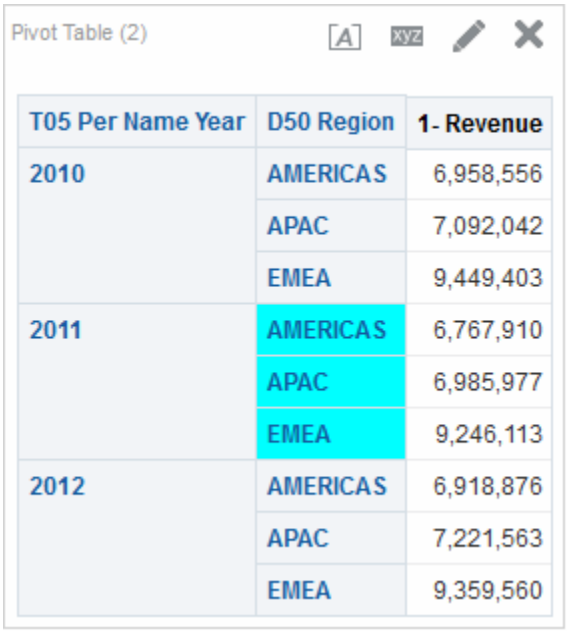
ビューに表示される列の順序も条件付き書式設定に影響を及ぼします。ビュー内の順序は、値が表示される粒度に影響します。粒度は、集計のレベルのことです。書式設定する列が、書式がベースにしている列より詳細な粒度、あるいはそれと同じ粒度で表示される場合、条件付き書式が適用されます。書式設定される列の粒度が、書式がベースにしている列より高い場合、条件がメジャー列に基づく場合のみ書式が適用されます。書式が属性列に基づき、書式設定する列が高いレベルの粒度で表示される場合、条件付き書式は適用されません。

たとえば、下の図に含まれる表について考えてみます。T05 Per Name Year が 2011 の場合に D50 Region に色を設定する条件付き書式が指定されています。D50 Region が T05 Per Name Year とは異なるエッジにあるため、明るい青色が表示されていないことに注意してください。値の抑制と条件付き書式を参照してください。

Pivot Table

	2010	2011	2012
D50 Region	1- Revenue	1- Revenue	1- Revenue
AMERICAS	6,958,556	6,767,910	6,918,876
APAC	7,092,042	6,985,977	7,221,563
EMEA	9,449,403	9,246,113	9,359,560

T05 Per Name Year が表内の最初の列になるよう列の順序を変更するとします。T05 Per Name Year 列が高いレベルの粒度で表示され、適切な条件付き書式が D50 Region 列に適用されます。下の図は、適切な条件付き書式設定が適用されたピボット表を示しています。



T05 Per Name Year	D50 Region	1- Revenue
2010	AMERICAS	6,958,556
	APAC	7,092,042
	EMEA	9,449,403
2011	AMERICAS	6,767,910
	APAC	6,985,977
	EMEA	9,246,113
2012	AMERICAS	6,918,876
	APAC	7,221,563
	EMEA	9,359,560

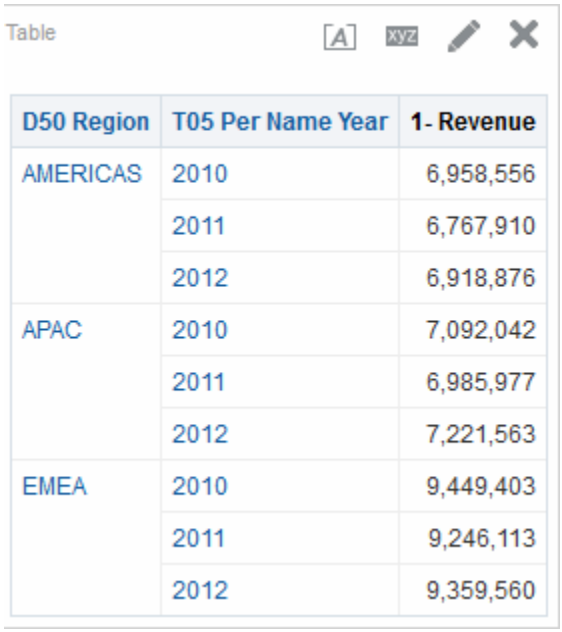
条件付き書式は、表、ピボット表またはトレリスの任意のエッジで表示できます。プロンプト・ドロップ・ターゲット(ページ・エッジとも呼ばれる)では、条件付き書式は、そのターゲットに対して現在選択されている列メンバーにのみ適用されます。たとえば、AMERICAS、APAC、EMEA のメンバーを持つ D50 Region 列があるとします。D50 Region 列がピボット表のプロンプト・ドロップ・ターゲットにあり、1 - Revenue が$6.5 百万より多い場合に地域名を緑色にする条件付き書式が設定されているとします。AMERICAS のみがその条件を満たす地域の場合、AMERICAS がプロンプト・ドロップ・ターゲットとして選択された場合のみ緑に色付けされます。

値の抑制と条件付き書式

表では、「列のプロパティ」ダイアログの「列書式」タブでの値の抑制の設定によって、条件付き書式が影響を受けます。

値の抑制を**「繰返し」**に設定すると、書式設定される列は、ビューの詳細レベルの粒度で表示されます。条件付き書式を適用するためのベースとなる列には、集計は必要ありません。

たとえば、最初の図の表について考えてみましょう。T05 Per Name Year が 2011 の場合に D50 Region 列を明るい青色にする条件付き書式が適用されています。値の抑制が**「抑制」**に設定され、D50 Region のメンバーに対して列値の繰返しが許可されていないため、明るい青色が表示されていないことに注意してください。



Table

D50 Region	T05 Per Name Year	1- Revenue
AMERICAS	2010	6,958,556
	2011	6,767,910
	2012	6,918,876
APAC	2010	7,092,042
	2011	6,985,977
	2012	7,221,563
EMEA	2010	9,449,403
	2011	9,246,113
	2012	9,359,560

値の抑制が**「繰返し」**に設定されている場合、列メンバーが繰り返され、適切な条件付き書式が適用されます。次の図は、値の抑制が繰返しに設定された表を示します。

Table

D50 Region	T05 Per Name Year	1- Revenue
AMERICAS	2010	6,958,556
AMERICAS	2011	6,767,910
AMERICAS	2012	6,918,876
APAC	2010	7,092,042
APAC	2011	6,985,977
APAC	2012	7,221,563
EMEA	2010	9,449,403
EMEA	2011	9,246,113
EMEA	2012	9,359,560

条件付き書式の適用

指定のプロパティを、特定の条件が満たされたときに分析に適用できます。

条件付き書式では、マイナスの数字を赤い太字にするなど、特定の条件に基づいてデータに注意を引くことができます。

1. 「分析」エディタの「基準」タブで書式設定と動作の編集対象の分析を開きます。

   また、「結果」タブの「パフォーマンス・タイル」エディタからパフォーマンス・タイルに条件付き書式を適用するには、「パフォーマンス・タイルのプロパティ」ダイアログの**「条件付き書式設定の編集」**リンクをクリックします。これにより、「条件付き書式設定」ダイアログが開きます。その後、次の手順 4 から 6 を実行し

て、タイルに条件付き書式設定を追加します。「スタイル」ペインでは条件付き書式は反映されません。

2. 変更する列または階層列を追加または特定します。「選択された列」ペインで列名の右にある**「オプション」**ボタンをクリックし、**「列のプロパティ」**または**「階層レベル・プロパティ」**をクリックします。「列のプロパティ」ダイアログが表示されます。

3. 「列のプロパティ」ダイアログの**「条件付き書式」**タブをクリックします。

   ヒート・マトリックスでは、データ・セルの背景やフォント色に条件付き書式を適用できません。

4. **「条件の追加」**をクリックし、条件を適用する列を選択します。

5. 「新規条件」ダイアログを完成させます。条件名の右にある**「条件の編集」**ボタンをクリックし、「条件の編集」ダイアログを表示します。

   「条件付き書式」タブから「新規条件」ダイアログにアクセスすると、条件付き書式に当てはまるオプションのみがダイアログに表示されます。たとえば、「演算子」リストに、条件付き書式で使用される演算子のサブセットが表示され、プレゼンテーション変数のみ適用できます。

6. 「書式の編集」ダイアログを完成させ、条件に対する書式を適用します。

ランキングに対する条件付き書式設定の例

次の例で、ランキングを表示する結果に条件付き書式を適用する方法について説明します。

分析に 10 個のランキング・カテゴリが含まれ、列の値が 1 の場合は最低のランキングを、値 10 は最高のランキングを表すとします。次のものを表示する 3 つの条件付き書式を作成します。

- 1、2 または 3 を含む列に対する、ランクが低いことを表す 1 つのイメージ。
- 4、5、6 または 7 を含む列に対する、平均のランクを表す別のイメージ。
- 8、9 または 10 を含む列に対する、ランクが高いことを表す 3 つ目のイメージ。

「グラフィック」ダイアログで**「イメージのみ」**イメージ配置オプションを選択すると、ランキングの数字ではなく、イメージのみで列が結果に表示されます。

カスタム・ファイルをローカルに格納し fmap 関数を使用して参照する方法

イメージやヘルプ・ファイルなどのカスタム・ファイルを Oracle Business Intelligence 環境でローカルに格納し、fmap 関数を使用して参照することができます。

たとえば、タイトル・ビューに表示するイメージをローカルに格納できます。そして、「タイトル」エディタでタイトル・ビューに対してそのイメージを指定する場合は、fmap 関数を使用してイメージを参照できます。

カスタム・ファイルをローカルに格納するには、次のディレクトリを使用して、組織で使用している HTTP サーバーの説明に従ってファイルを公開する必要があります。

ORACLE_HOME\bi\bifoundation\web\appv2

方法 2: 共有フォルダを使用したデプロイメントを参照してください。

ファイルはこのディレクトリまたはそのサブディレクトリに直接格納できます。移入されたインスタンスごとに analyticsRes ディレクトリがレプリケートされるため、

各インスタンスでカスタム・ファイルをレプリケートする必要があります。fmap 構文を使用して参照するカスタム・ファイルの名前には、ASCII 文字を使用することを強くお薦めします。

> **ノート:** 格納されたロゴ・イメージおよびグラフィックは、同じフォルダの `analyticsRes` ディレクトリに置かれます。

`analyticsRes` ディレクトリに格納されたカスタム・ファイルを参照するには、次の fmap 構文を使用します。

`fmap:`*`location/file_name`*

ここで:

- *location/*は、(カスタム・ファイルが `analyticsRes` ディレクトリのサブディレクトリにある場合の)カスタム・ファイルがあるサブディレクトリのパスです(例: `Images/`)。
- *file_name* はカスタム・ファイルの名前です(例: `newlogo.gif`)。

次に、fmap コマンドの例を示します。

```
fmap:mylogo.gif
fmap:Images/newlogo.gif
```

fmap 構文を使用するオブジェクトを保存しようとしている場合、「≪HTML マークアップを含むコンテンツの保存 | Save Content with HTML Markup | Bifndn≫」権限が必要です。権限の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*を参照してください。

カスタム書式設定マスク

カスタム書式設定マスクには、数値データ(収益や請求済数量など)を含む書式設定列に対する追加オプションが用意されています。

数値データが含まれる列に対してカスタム書式設定マスクを設定するには、**「数値の取扱い」**フィールドを**カスタムの数値**フィールドと組み合せて使用します。詳細は、「列のプロパティ」ダイアログの「データ書式」タブを参照してください。

次の表は、マスク文字列および説明を示します。3 番目の列は、米国用のマスクを英語の言語ベースで使用した数値フィールドの具体的な例を示しています。

マスク文字列	説明	例
#	オプションの桁にはシャープ記号を使用します(前後のゼロは削除されます)	`#,###,##0.##`を 12345.67 のマスクとして指定すると `12,345.67` と表示されます。
0	必須桁にはゼロを使用します	`#0.##0` を 12.34 のマスクとして指定すると `12.340` と表示されます。

マスク文字列	説明	例
""	そのまま表示するには二重引用符を使用します。 Excel では二重引用符のマスク文字を変換できないため、このマスク文字を使用して数値データを表す場合は、分析結果を Excel にエクスポートする前に、この明示的なマスク文字を削除する必要があります。	"++++"をマスクの一部として指定すると、++++と表示されます。
;	整数、負数および null の書式を区切るにはセミコロンを使用します	"+"#0.000;"-"#0.000;"nulls"を 467482.18 のマスクとして指定すると、+467482.18 と表示されます。下の図を参照してください。
[$]	ロケール固有の通貨記号として使用します	[$]#,##0.##を 5000.48 のマスクとして指定すると、英語-米国のロケールが選択されているユーザーには$5,000.48 と表示され、英語-英国のロケールが選択されている場合は£5,000.48 と表示されます。

カスタムの数値フィールドで書式設定マスクを定義するために使用する小数点区切り記号文字および桁区切り記号文字は、常に次のようになります。

- **ピリオド** - 数値の整数部分と小数部分を区切るために使用します
- **カンマ** - 3 桁ごとに区切るために使用します

ただし、分析およびダッシュボードに実際に表示される区切り記号文字は、Oracle BI EE を実行している国および言語によって異なります。

次の表に、特定の国と言語の組合せの例を示します。この表に示されている例がすべてではなく、またこの例は執筆時点において正しいものです。

表示される書式	BI EE で使用する書式設定マスク	事前に定義されている国(言語)の区切り文字	この設定が通常使用される国(言語)
小数点: 123,45 桁区切り: 6.789	小数点: ###.## 桁区切り: #,###	小数点: , (カンマ) 桁区切り: . (ピリオド)	アルゼンチン(スペイン語)、デンマーク(デンマーク語)、エクアドル(スペイン語)、ドイツ(ドイツ語)、ギリシャ(ギリシャ語)、イタリア(イタリア語)およびリヒテンシュタイン(ドイツ語)
小数点: 123.45 桁区切り: 6,789	小数点: ###.## 桁区切り: #,###	小数点: . (ピリオド) 桁区切り: , (カンマ)	オーストラリア(英語)、エジプト(アラビア語)、グアテマラ(スペイン語)、イスラエル(ヘブライ語)、日本(日本語)、シンガポール(中国語)および米国(英語)

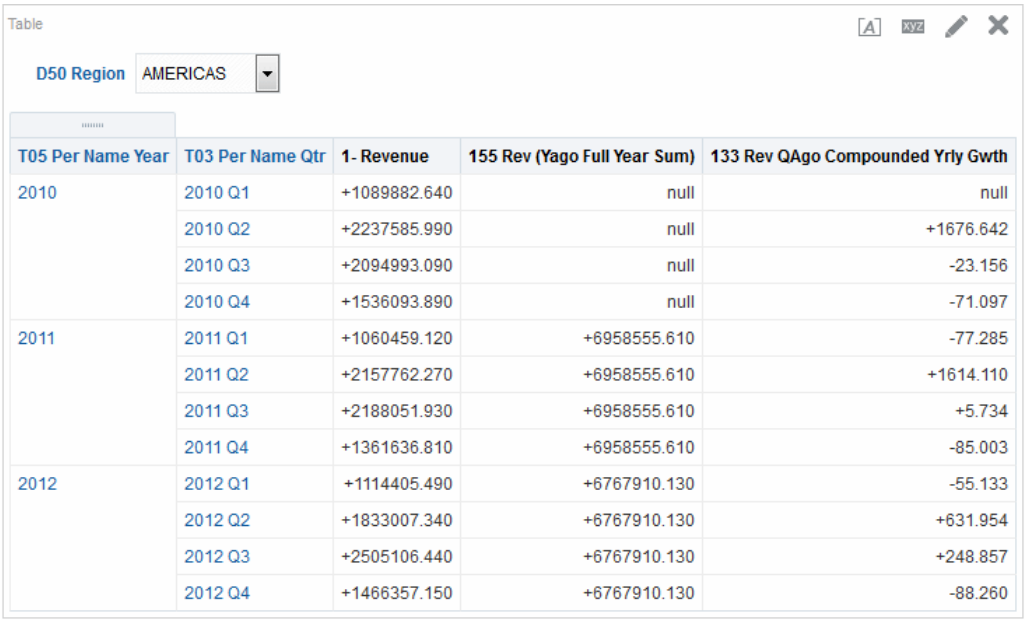
表示される書式	BI EE で使用する書式設定マスク	事前に定義されている国(言語)の区切り文字	この設定が通常使用される国(言語)
小数点: 123.45 桁区切り: 6'789	小数点: ###.## 桁区切り: #,###	小数点: . (ピリオド) 桁区切り: ' (アポストロフィ)	スイス(フランス語、ドイツ語およびイタリア語)
小数点: 123,45 桁区切り: 6 789	小数点: ###.## 桁区切り: #,###	小数点: , (カンマ) 桁区切り: (空白)	フィンランド(フィンランド語)、ポーランド(ポーランド語)およびスウェーデン(スウェーデン語)

セミコロンで区切られた個別のマスクをカスタム書式設定マスクに指定すれば、負と null の両方の書式をオーバーライドできます。すべてが定義されたマスクは、`positivemask;negativemask;nullmask` のようになります。例を参照してください。

- null マスクを省略すると、null 値に対して空白が表示されます。
- 負のマスクを省略すると、負のマスクに対して正のマスクが表示されます。
- null マスクを使用する場合は負のマスクを使用する必要があります。
- すべて#のマスクを使用すると、値ゼロ(0)は空白として表示されます。
- Excel では、すべてが定義されたマスクは、`positivemask;negativemask;zeromask;text` のようになります。null のマスクを使用する列をエクスポートした場合、null のマスクは Excel でサポートされないため除外されます。また、Oracle BI EE ではゼロのマスクがサポートされないため、Excel のゼロのマスクは使用されません。

例の図は、年と四半期ごとのアメリカの、前年収益の計算および四半期ごとの年平均成長の計算を含む収益の表を示しています。すべてのメジャー列には同じカスタム書式設定マスクが使用されており、メジャー計算に対してはテキスト `null` が表示されるように設定されています。Null 抑制の理解を参照してください。この表の 3 つの列で使用されたカスタム書式設定マスクは`"+"#0.000;"-"#0.000;"null"`です。

- 2 桁の整数部にプラス記号が付いたマスクによって正数が表示されます。
- 2 桁の整数部にマイナス記号が付いたマスクによって負数が表示されます。
- メジャーの値が null の場合、`null` という単語が表示されます。



Table

D50 Region AMERICAS

T05 Per Name Year	T03 Per Name Qtr	1- Revenue	155 Rev (Yago Full Year Sum)	133 Rev QAgo Compounded Yrly Gwth
2010	2010 Q1	+1089882.640	null	null
	2010 Q2	+2237585.990	null	+1676.642
	2010 Q3	+2094993.090	null	-23.156
	2010 Q4	+1536093.890	null	-71.097
2011	2011 Q1	+1060459.120	+6958555.610	-77.285
	2011 Q2	+2157762.270	+6958555.610	+1614.110
	2011 Q3	+2188051.930	+6958555.610	+5.734
	2011 Q4	+1361636.810	+6958555.610	-85.003
2012	2012 Q1	+1114405.490	+6767910.130	-55.133
	2012 Q2	+1833007.340	+6767910.130	+631.954
	2012 Q3	+2505106.440	+6767910.130	+248.857
	2012 Q4	+1466357.150	+6767910.130	-88.260

1. 分析エディタの「基準」タブで書式設定の編集対象の分析を開きます。
2. 変更する列を追加するか見つけます。
3. 「選択された列」ペインの列名の右にある**「オプション」**ボタンをクリックします。
4. **「列のプロパティ」**をクリックします。「列のプロパティ」ダイアログが表示されます。
5. 「列のプロパティ」ダイアログの**「データ書式」**タブをクリックします。
6. **「デフォルトのデータ書式のオーバーライド」**チェック・ボックスを選択します。
7. **「数値の取扱い」**リストから**「カスタム」**を選択します。
8. **「カスタムの数値書式」**テキスト・ボックスの数値フィールドにマスクを入力して、**「OK」**ボタンをクリックします。

カスタム書式設定文字列

日付と時間のカスタム書式設定文字列は、タイムスタンプ、日付および時間を含む列または階層レベルを書式設定する追加オプションです。

カスタム書式設定文字列を列または階層レベルに設定するには、「列のプロパティ」ダイアログの「データ書式」タブの**「カスタムの日付書式」**フィールドを使用するか(日付と時間フィールドの場合)、**「カスタムの数値書式」**フィールドを使用します(数値フィールドの場合)。

この項は次のトピックで構成されています。

- 日付と時間フィールドに対するカスタム書式設定文字列
- 数値フィールドに対するカスタム書式設定文字列

日付と時間フィールドに対するカスタム書式設定文字列

「列のプロパティ」ダイアログの「データ書式」タブの**「カスタムの日付書式」**フィールドに、列または階層レベルのカスタム書式設定文字列を設定することができます。

この項は次のトピックで構成されています。

- 一般的なカスタム書式設定文字列
- ODBC カスタム書式設定文字列

一般的なカスタム書式設定文字列

これらの文字列を使用してカスタムの時間または日付の書式設定を作成できます。

表に、一般的なカスタム書式設定文字列と、それによって表示される結果を示します。これらによって、日付と時間のフィールドをユーザーのロケールで表示できます。

一般的な書式設定文字列	結果
[FMT:dateShort]	ロケールの短い日付書式で日付を書式設定します。`[FMT:date]`とも入力できます。
[FMT:dateLong]	ロケールの長い日付書式で日付を書式設定します。
[FMT:dateInput]	システムで入力に対して許容される書式で日付を書式設定します。
[FMT:time]	ロケールの時間書式で時間を書式設定します。
[FMT:timeHourMin]	ロケールの時間書式で時間を書式設定しますが、秒を省略します。
[FMT:timeInput]	システムで入力に対して許容される書式で時間を書式設定します。
[FMT:timeInputHourMin]	システムで入力に対して許容される書式で時間を書式設定しますが、秒を省略します。
[FMT:timeStampShort]	`[FMT:dateShort] [FMT:time]`と入力するのと同じです。ロケールの短い日付書式で日付を書式設定し、ロケールの時間書式で時間を書式設定します。`[FMT:timeStamp]`とも入力できます。
[FMT:timeStampLong]	`[FMT:dateLong] [FMT:time]`と入力するのと同じです。ロケールの長い日付書式で日付を書式設定し、ロケールの時間書式で時間を書式設定します。
[FMT:timeStampInput]	`[FMT:dateInput] [FMT:timeInput]`と同じです。システムで入力に対して許容される書式で日付と時間を書式設定します。
[FMT:timeHour]	ロケールの書式で時間フィールドのみを書式設定します(8 PM など)。
YY または yy	必要に応じて左側にゼロ詰めをして、年の最後の 2 桁を表示します(たとえば、2001 の場合、`01`)。
YYY または yyy	必要に応じて左側にゼロ詰めをして、年を 4 桁で表示します(たとえば、`0523`)。
YYYY または yyyy	年を 4 桁で表示します(たとえば、`2011`)。

一般的な書式設定文字列	結果
M	月の数値を表示します(たとえば、2 月の場合、2)。
MM	1 桁の月の場合は左側にゼロ詰めをして、月の数値を表示します(たとえば、2 月の場合、02)。
MMM	ユーザーのロケールで月の略称を表示します(たとえば、Feb)。
MMMM	ユーザーのロケールで月のフルネームを表示します(たとえば、February)。
D または d	月の通算日を表示します(たとえば、1)。
DD または dd	通算日が 1 桁の場合は左側にゼロ詰めをして、月の通算日を表示します(たとえば、01)。
DDD または ddd	ユーザーのロケールで曜日の略称を表示します(たとえば、Thursday の Thu)。
DDDD または dddd	ユーザーのロケールで曜日のフルネームを表示します(たとえば、Thursday)。
DDDDD または ddddd	ユーザーのロケールで曜日の最初の文字を表示します(たとえば、Thursday の T)。
h	時間を 12 時間制で表示します(たとえば、2)。
H	時間を 24 時間制で表示します(たとえば、23)。
hh	時間が 1 桁の場合は左側にゼロ詰めをして、時間を 12 時間制で表示します(たとえば、01)。
HH	時間が 1 桁の場合は左側にゼロ詰めをして、時間を 24 時間制で表示します(たとえば、23)。
m	分を表示します(たとえば、7)。
mm	分が 1 桁の場合は左側にゼロ詰めをして、分を表示します(たとえば、07)。
s	秒を表示します(たとえば、2)。 文字列に、s.#や s.00 などのように、小数点を含めることができます(#はオプションの桁数を示し、0 は必須桁数を示します)。
ss	秒が 1 桁の場合は左側にゼロ詰めをして、秒を表示します(たとえば、02)。 文字列に、ss.#や ss.00 などのように、小数点を含めることができます(#はオプションの桁数を示し、0 は必須桁数を示します)。
t	ユーザーのロケールで午前または午後を表す略語の最初の文字を表示します(たとえば、a)。
tt	ユーザーのロケールで午前または午後を表す略語を表示します(たとえば、pm)。
gg	ユーザーのロケールで年代を表示します。

ODBC カスタム書式設定文字列

ODBC を使用してカスタム書式設定文字列を作成できます。

表に、ODBC の標準タイプのカスタム書式設定文字列と、それによって表示される結果を示します。これらの文字列では、ODBC 標準に従って日付と時間のフィールドを表示します。

ODBC 書式設定文字列	結果
[FMT:dateODBC]	標準的な ODBC の yyyy-mm-dd 書式(4 桁の年、2 桁の月、2 桁の日)で日付を書式設定します。
[FMT:timeODBC]	標準的な ODBC の hh:mm:ss 書式(2 桁の時間、2 桁の分、2 桁の秒)で時間を書式設定します。
[FMT:timeStampODBC]	[FMT:dateODBC] [FMT:timeStampODBC]と入力するのと同じです。日付を yyyy-mm-dd 書式で書式設定し、時間を hh:mm:ss 書式で書式設定します。
[FMT:dateTyped]	*date* という語を表示し、次に標準的な ODBC の yyyy-mm-dd 書式で日付を表示します。日付は、一重引用符文字(')内に表示されます。
[FMT:timeTyped]	*time* という語を表示し、次に標準的な ODBC の hh:mm:ss 書式で時間を表示します。時間は、一重引用符文字(')内に表示されます。
[FMT:timeStampTyped]	*timestamp* という語を表示し、次に標準的な ODBC の yyyy-mm-dd hh:mm:ss 書式でタイムスタンプを表示します。タイムスタンプは、一重引用符文字(')内に表示されます。

数値フィールドに対するカスタム書式設定文字列

数値フィールドに対してカスタム書式設定文字列を設定することで、データが正しく解釈されるようになります。

「列のプロパティ」ダイアログの「データ書式」タブの**「カスタムの数値書式」**フィールドに、列または階層レベルのカスタム書式設定文字列を設定できます。

異なるデータ型から書式を適用する場合(たとえば、数値フィールドに日付型の書式を適用する場合)、実際の値が範囲を超えていた場合は書式は適用されず、かわりに元の値が表示されます。例として、書式[MMMM]を考えます。変換対象の元の値が 13 の場合、1 年は 12 か月しかないので、この値は範囲外となります。元の値の 13 が表示され、月の名前には変換されません。しかし、元の値が 12 である場合は、カスタム書式の適用によって値は 12 番目の月(つまり「12 月」)に変換されます。

この項は次のトピックで構成されています。

- 整数フィールドに対するカスタム書式設定文字列
- 時間への変換用のカスタム書式設定文字列
- 時間と分への変換用のカスタム書式設定文字列
- 時間、分および秒への変換用のカスタム書式設定文字列
- 期間の表示用のカスタム書式設定文字列

整数フィールドに対するカスタム書式設定文字列

カスタム書式設定文字列を使用して月および曜日の値を表示できます。

表に、整数フィールドを扱う際に使用できるカスタム書式設定文字列を示します。これらによって、月の名前と曜日をユーザーのロケールで表示できます。

整数フィールドには、月または曜日を表す整数が含まれています。月の場合、1 は 1 月を表し、2 は 2 月を、12 は 12 月を表します。曜日の場合、1 は日曜日を表し、2 は月曜日を、7 は土曜日を表します。

整数フィールドの書式設定文字列	結果
[MMM]	ユーザーのロケールで月の略称を表示します。
[MMMM]	ユーザーのロケールで月のフルネームを表示します。
[DDD]	ユーザーのロケールで曜日の略称を表示します。
[DDDD]	ユーザーのロケールで曜日のフルネームを表示します。

時間への変換用のカスタム書式設定文字列

様々な期間を時間書式に変換できます。

表に、データを時間に書式設定するのに使用できるカスタム書式設定文字列を示します。これらの文字列は、次の種類のフィールドに使用できます。

- 1 日の始まり(午前 0 時)からの経過時間を表す整数または実数を含むフィールド。
- 出力の書式設定が[FMT:timeHour]のフィールド。(この書式では、ロケールの書式で時間フィールドのみが書式設定されます(8 PM など)。)

データ変換書式設定文字列	結果
[FMT:timeHour]	値が 1 日の始まりからの経過時間数を表すと見なし、時間数を hh 表示(hh は時間数)に書式設定します。端数は値から除外されます。たとえば、2 という値は 2 AM と書式設定され、12.24 という値は 12 PM と書式設定されます。
[FMT:timeHour(min)]	値が 1 日の始まりからの経過分数を表すと見なし、分数を hh 表示(hh は時間数)に書式設定します。端数は値から除外されます。たとえば、2 という値は 12 AM と書式設定され、363.10 という値は 06 AM と書式設定されます。
[FMT:timeHour(sec)]	値が 1 日の始まりからの経過秒数を表すと見なし、秒数を hh 表示(hh は時間数)に書式設定します。端数の時間は値から除外されます。たとえば、600 という値は 12 AM と書式設定され、3600 は 1 AM、61214.30 は 5 PM と書式設定されます。

時間と分への変換用のカスタム書式設定文字列

様々な期間を時間と分の書式に変換できます。

次の表に、データを時間と分に書式設定するために使用できるカスタム書式設定文字列を示します。これらの文字列は、1 日の始まり(午前 0 時)からの経過時間を表す整数または実数を含むフィールドに使用できます。

それらは、次の表に示されている[FMT:timeHourMin]書式での出力にも使用できます。(この書式では、ロケールの時間書式で時間が表示されますが、秒が省略されます。)

データ変換書式設定文字列	結果
[FMT:timeHourMin]	値が 1 日の始まりからの経過分数を表すと見なし、値を hh:mm 表示(hh は時間数、mm は分数)に変換します。端数は値から除外されます。たとえば、12 という値は 12:12 AM と書式設定され、73 は 1:13 AM、750 は 12:30 PM と書式設定されます。
[FMT:timeHourMin(sec)]	値が 1 日の始まりからの経過秒数を表すと見なし、値を hh:mm 表示(hh は時間数、mm は分数)に変換します。端数は値から除外されます。たとえば、60 という値は 12:01 AM と書式設定され、120 は 12:02 AM、43200 は 12:00 PM と書式設定されます。
[FMT:timeHourMin(hour)]	値が 1 日の始まりからの経過時間数を表すと見なし、時間数を hh:mm 表示(hh は時間数、mm は残りの分数)に書式設定します。たとえば、0 という値は 12:00 AM と書式設定され、1.5 は 1:30 AM、13.75 は 1:45 PM と書式設定されます。

時間、分および秒への変換用のカスタム書式設定文字列

様々な期間を時間、分および秒の書式に変換できます。

表に、データの時間、分および秒への書式設定に使用できるカスタム書式設定文字列を示します。これらの文字列は、時間を表す整数または実数を含むフィールドに使用できます。

[FMT:time]書式での出力にも使用できます。一般的なカスタム書式設定文字列を参照してください。(この書式では、ロケールの時間書式で時間が表示されます。)

データ変換書式設定文字列	結果
[FMT:time]	値が 1 日の始まりからの経過秒数を表すと見なし、値を hh:mm:ss 表示(hh は時間数、mm は分数、ss は秒数)に変換します。たとえば、60 という値は 12:01:00 AM と書式設定され、126 は 12:02:06 AM、43200 は 12:00:00 PM と書式設定されます。
[FMT:time(min)]	値が 1 日の始まりからの経過分数を表すと見なし、値を hh:mm:ss 表示(hh は時間数、mm は分数、ss は秒数)に変換します。たとえば、60 という値は 1:00:00 AM と書式設定され、126 は 2:06:00 AM、1400 は 11:20:00 PM と書式設定されます。
[FMT:time(hour)]	値が 1 日の始まりからの経過時間数を表すと見なし、値を hh:mm:ss 表示(hh は時間数、mm は分数、ss は秒数)に変換します。たとえば、6.5 という値は 6:30:00 AM と書式設定され、12 という値は 12:00:00 PM と書式設定されます。

期間の表示用のカスタム書式設定文字列

様々な期間を変換して継続時間を示すことができます。

次の表では、期間データを日、時間、分および秒に書式設定するために使用できる、カスタム書式設定文字列を示します。これらの文字列は、時間を表す整数または実数を含むフィールドに使用できます。

これにより、通話の時間など、期間を表示できるようになります。数値フィールドはDD:HH:MM:SS として書式設定できます。

次の例に示すように、リテラル値を文字列に追加して、出力をさらにわかりやすくできます:

[duration][opt:dd"d":][opt:hh"h":]mm"m":ss"s"
入力が 15000 の場合、出力は 04h:10m:00s

この方法では、*hours(時)*、*minutes(分)*および *seconds(秒)*を表すリテラル値 *h*、*m* および *s* が出力に表示されます。

[opt:...]は、文字列のどこに指定してもそのフィールドがオプションになり、値がない場合は表示されません。上記の例では、[opt:dd]は日の値を意味しますが、値がないので表示されていません。

データ変換書式設定文字列	結果
[duration(sec)][opt:dd]:hh:mm:ss	合計秒数を期間として書式設定します。たとえば、期間の値 16500.00 は、04:35:00 (4 時間 35 分 0 秒の期間)と表示されます。 *opt*:*dd* は日数を表示しますが、*opt* に値がない場合は表示されません。 秒がデフォルトの時間単位です。
[duration(min)][opt:dd]:hh:mm:ss	合計分数を期間として書式設定します。たとえば、期間の値 275.00 は、04:35:00 (4 時間 35 分 0 秒の期間)と表示されます。 *opt*:*dd* は日数を表示しますが、*opt* に値がない場合は表示されません。
[duration(hour)][opt:dd]:hh:mm:ss	合計時間数を期間として書式設定します。たとえば、期間の値 4.58 は、04:35:00 (4 時間 34 分 48 秒の期間)と表示されます。 *opt*:*dd* は日数を表示しますが、*opt* に値がない場合は表示されません。
[duration(day)][opt:dd]:hh:mm:ss	合計日数を期間として書式設定します。たとえば、期間の値 2.13 は、02:03:07:12 (2 日 3 時間 7 分 12 秒の期間)と表示されます。 *opt*:*dd* は日数を表示しますが、*opt* に値がない場合は表示されません。

9

コンテンツの配信

この章では、パーソナライズかつアクショナブルなコンテンツを Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のユーザーに配信する方法を説明します。ここでは、エージェントの作成方法、エージェントのサブスクライブ方法、およびデバイスと配信プロファイルの構成方法を説明します。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- エージェントとは
- アラートとは
- エージェントの仕組み
- 「エージェント」エディタとは
- エージェントへのアクセスの制御について
- エージェントでのカスタマイズの使用について
- エージェントの作成
- エージェントの設定のサマリーの表示
- エージェントの保存
- エージェントのサブスクライブ
- サブスクライブまたは所有するエージェントのリストの表示
- エージェントからのサブスクライブ解除
- エージェント・サブスクライブのカスタマイズ
- エージェントのスケジュールの無効化と有効化
- デバイスと配信プロファイルとは
- デバイスと配信プロファイルの構成
- アラートへのアクセスおよび管理
- アラート用の RSS フィードのサブスクライブ

エージェントとは

エージェントによって、ビジネス・プロセスを自動化できます。

エージェントを使用して、イベント駆動型アラート、スケジュールされたコンテンツの公開および条件付きイベント駆動型アクションの実行を行えます。

次の選択が可能です:

- エージェントの稼動スケジュール
- エージェントが何を行うかを決めるデータ条件
- 配布される分析
- データ条件を満たすかどうかによって自動的に実行されるアクション

エージェントは、情報ベースで問題と機会を動的に検出し、通知する必要がある適切なユーザーを判断し、そのユーザーに様々なデバイス(電子メール、電話など)で情報を配信します。

エージェントの配信コンテンツは、受信者の優先ロケールに従ってローカライズされます。(ユーザーは、「マイ・アカウント」ダイアログの「プリファレンス」タブで優先ロケールを指定します。)

アラートとは

アラートは、パーソナライズされ、アクショナブルなコンテンツを、指定された受信者およびエージェントのサブスクライブ者に配信するエージェントによって生成される通知です。

配信されたアラートは、Oracle BI Enterprise Edition 内の次のような場所で表示できます。

- ホーム・ページの「アラート」セクション。
- マイ・ダッシュボードの最初のページ。(手動で配置しない場合、「アラート」セクションがマイ・ダッシュボードの最初のページに自動的に追加されます。)
- ダッシュボード・ページ(コンテンツ設計者が「アラート」セクションをページに追加している場合)。ダッシュボードへのコンテンツの追加を参照してください
- グローバル・ヘッダーの**「アラート」**ボタンから表示される「アラート」ダイアログ。
- 電話などの指定された配信デバイス。デバイスと配信プロファイルとはを参照してください

アラートへのアクセスおよび管理を参照してください。

エージェントの仕組み

最も単純なケースでは、エージェントは、定義されたスケジュールに基づいて指定されたカタログ分析を自動的に行い、特定の問題や機会がないか結果を確認します。

指定された問題や機会が結果で検出されると、アラートが生成され、指定された受信者、およびエージェントのサブスクライブ者に、各ユーザーに対して指定されている配信オプションを使用して配信されます。

アラートとはおよびデバイスと配信プロファイルとはを参照してください

より複雑な要件に対処する場合、エージェントは、他のエージェント、スクリプト、Java プロフラムまたはアプリケーションをトリガーするアクションを起動します。結果は、XML、HTML またはプレーン・テキストでエージェント間および他のアプリケーションやサービスに渡すことができます。たとえば、エージェントで分析を実行し、地域の倉庫では応じることができない、指定した金額を超える現在の全製品の注文を特定します。その結果は、これらの製品の代替ソースを見つける分析を実行する他の

エージェントに渡すことができます。最終エージェントがトリガーされて、企業のCRM システムに情報が送られ、代替ソースの適切な担当者に通知されます。

ユーザーは、一部のエージェントによって生成されるアラートの受信者に自動的になっている場合があり、また、他のユーザーによって作成されたエージェントをサブスクライブできる場合があります。適切な権限および職責がある場合、独自のエージェントを作成することもできます。権限のレベルによっては、選択的に他のユーザーとエージェントを共有したり、全ユーザーが使用できるエージェントを作成できます。

「エージェント」エディタとは

「エージェント」エディタでは、パーソナライズされ、アクショナブルなコンテンツをユーザーに配信するエージェントを作成できます。エージェントの現在の設定のサマリーを表示することもできます。

「エージェント」エディタには、次のタブがあります。

- **一般** - エージェントが配信するコンテンツの優先度と配信コンテンツの生成方法(ユーザーの問合せの実行方法)を指定できます。
- **スケジュール** - エージェントをスケジュールに基づいて実行するかどうか、実行する頻度および実行の開始時間と終了時間を指定できます。
- **条件** - エージェントが常にコンテンツを配信し、アクションを実行するか、あるいは条件下でコンテンツを配信し、アクションを実行するかを指定できます。
- **配信コンテンツ** - エージェントを使用して配信するコンテンツ(ダッシュボード・ページ、保存済分析など)を指定できます。
- **受信者** - エージェントの配信コンテンツの受信者およびエージェントのサブスクライブを許可するユーザーを指定できます。
- **送信先** - コンテンツの配信先を指定できます。
- **アクション** - エージェントの終了時に実行する 1 つ以上のアクションを指定できます。

「エージェント」エディタには、エージェントの作成または編集時にアクセスします。エージェントの作成を参照してください。

エージェントへのアクセスの制御について

エージェントには、すべての Oracle BI EE ユーザーがアクセスできます。

特定のエージェントへのアクセス権を付与する機能は、権限の管理ページから実行します。適切な権限がある場合、様々なエージェント機能に対する明示的なアクセス権を付与したり、取り消したりでき、これには、次のようなアクションを実行する権限も含まれます。

- エージェントの作成
- サブスクリプション用にエージェントを公開
- 特定のユーザーまたは動的に決定されるユーザーにエージェントを配信
- エージェントの結合
- エージェントの現在のサブスクリプションの変更

権限の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のプレゼンテーション・サービス権限の管理を参照してください。

エージェントでのカスタマイズの使用について

エージェントでのカスタマイズの使用によって、複数の状況に使用できる汎用エージェントを作成できます。

エージェントでのカスタマイズの使用により、組織で作成する必要のあるエージェントと条件の数を削減できます。これは、特定の状況に必要な特定のアラートを提供することもできます。

エージェントでのカスタマイズは、エージェントで使用されている分析に関連付けられているプロンプト・フィルタの演算子と値のオーバーライドによって実現されます。(プロンプト・フィルタは、演算子が「プロンプトで使用」に設定されているフィルタです。列フィルタの作成を参照してください。)

エージェントが次の処理を行うよう指定する場合、エージェントで分析を使用します。

- 分析に基づいた条件(名前付きまたはインライン)を使用して、条件付きでコンテンツを配信し、アクションを実行します。条件の操作を参照してください。
- コンテンツとして分析を配信します。

プロンプト・フィルタは、関連付けられている分析の使用方法に応じて、様々な時点でカスタマイズできます。

- 分析が名前付き条件のベースとして使用される場合、カスタマイズのチェーンは次のようになります。
  1. 分析内
  2. 名前付き条件内
  3. 条件のエージェント・カスタマイズ内
  4. エージェント条件のサブスクリプション・カスタマイズ内
- 分析が、エージェントで作成されたインライン条件のベースとして使用される場合、カスタマイズのチェーンは次のようになります:
  1. 分析内
  2. 条件のエージェント・カスタマイズ内
  3. エージェント条件のサブスクリプション・カスタマイズ内
- 分析がエージェントの配信コンテンツとして指定されている場合、カスタマイズのチェーンは次のようになります。
  1. 分析内
  2. 配信コンテンツのエージェント・カスタマイズ内
  3. 配信コンテンツのサブスクリプション・カスタマイズ内

エージェントでカスタマイズを使用する場合、次の点に注意してください。

- フィルタをいったんオーバーライドしたら、カスタマイズ・チェーンでさらにオーバーライドすることはできません。たとえば、配信コンテンツのエージェント・カスタマイズでフィルタをオーバーライドした場合、サブスクライブ者が後で、配信コンテンツのサブスクリプション・カスタマイズでオーバーライドすることはできません。

- 分析内のフィルタが結合(AND および OR を使用して作成)されている場合、この AND と OR の構造はカスタマイズに表示されません。
- 同一フィルタがエージェント内で複数回使用される場合、フィルタの一意のセットのみがカスタマイズ用に表示されます。指定したカスタマイズ値は、繰返しのフィルタのすべてのインスタンスに適用されます。

  例外: 分析が union 演算子に基づいて 2 つ以上の分析を結合した結果の場合、union の各部分から一意のフィルタがカスタマイズ用に表示されます。集合演算を使用した列の結合を参照してください。
- チェーンに参加しているエージェント間で渡されるフィルタでは(外部システムで操作、関数またはプロセスを起動するアクションで「エージェントの起動」アクションを参照)、カスタマイズはサポートされていません。親エージェントから渡されるフィルタは、サブスクライブ者のカスタマイズなしのフィルタです。子エージェントに渡されたフィルタによって、サブスクライブ者のカスタマイズが適用される前に、各プロンプト・フィルタが置き換えられます。

エージェントの作成

エージェントを作成および使用して、ビジネス・プロセスを自動化できます。

次のガイドラインに留意してください。

- ホーム・ページの**「作成」**領域から**「エージェント」**を選択することでも、エージェント・エディタを表示できます。
- 分析からエージェントを作成することもできます。分析からのエージェントの作成を参照してください。

次の手順を使用して、エージェントを作成します。

1. グローバル・ヘッダーで、**「新規」**をクリックし、**「エージェント」**を選択します。
2. エージェント・エディタの「一般」タブで、エージェントが配信するコンテンツの優先度と配信コンテンツの生成方法(ユーザーの問合せの実行方法)を指定します。
3. エージェント・エディタの「スケジュール」タブで、エージェントをスケジュールに基づいて実行するかどうか、実行する頻度および実行の開始時間と終了時間を指定します。

   夏時間が適用されるタイム・ゾーンの日時を選択した場合は、タイム・ゾーンにより夏時間が反映されます。たとえば、夏時間が適用される月に**「(GMT) グリニッチ標準時間: ダブリン、エジンバラ、リスボン、ロンドン」**を選択した場合、これは BST (イギリス夏時間)を意味します。
4. エージェント・エディタの「条件」タブで、エージェントが常にコンテンツを配信し、アクションを実行するか、あるいは条件下でコンテンツを配信し、アクションを実行するかを指定します。
5. エージェント・エディタの「配信コンテンツ」タブで、エージェントを使用して配信するコンテンツ(ダッシュボード・ページ、保存済分析など)を指定します。
6. エージェント・エディタの「受信者」タブで、エージェントの配信コンテンツの受信者およびエージェントのサブスクライブが許可されたユーザーを指定します。
7. エージェント・エディタの「送信先」タブで、コンテンツの配信先を指定します。
8. エージェント・エディタの「アクション」タブで、エージェントの終了時に実行する 1 つ以上のアクションを指定します。
9. エージェントを保存します。エージェントの保存を参照してください。

エージェントの保存後、**「エージェントを今すぐ実行」**ボタンをクリックしてエージェントを実行できます。これは、エージェントをテストする場合などに便利です。

エージェントの設定のサマリーの表示

エージェントの現在の設定のサマリーを表示できます。

サマリーはエージェント・エディタに表示され、展開したり、縮小できます。デフォルトでは、サマリーは展開されています。

次のガイドラインに留意してください。

- エージェントの設定のサマリーは、カタログ・ページの「プレビュー」ペインでも表示できます。
- 「エージェント」エディタの**「概要」**という見出しの左にある次のものをクリックします。
  - サマリーを展開する場合は**「プラス記号」**ボタン。
  - サマリーを縮小する場合は**「マイナス」**ボタン。

エージェントの保存

エージェントを保存することでそれらを再利用できます。

- エージェントをサブスクリプションに使用できる場合、`/Shared Folders` のサブフォルダに保存する(`/Shared Folders/Shared Agents/Sales/Agent1` など)必要があります。`/Shared Folders/Agent1` などのようにエージェントを`/Shared Folders` に直接保存することはできません。
- エージェントをサブスクリプションに使用できない場合、`/Shared Folders` のサブフォルダ、`/My Folders` または`/My Folders` のサブフォルダに保存(`/My Folders/Sales/Agent1` など)できます。`/Shared Folders/Agent1` などのようにエージェントを`/Shared Folders` に直接保存することはできません。

エージェントは、既存のフォルダまたは新たに作成したフォルダに次のようにして保存できます。

エージェントのサブスクライブを参照してください。

1. 「エージェント」エディタのツールバーで、次のいずれかのボタンをクリックします。
   - 新規エージェントを保存する場合または既存のエージェントを同じフォルダに同じ名前で保存する場合、**「このエージェントの保存」**ボタンをクリックします。
   - 既存のエージェントを別のフォルダに別の名前で保存する場合、**「このエージェントに名前を付けて保存」**ボタンをクリックします。
2. 「エージェントの保存」ダイアログが表示されたら、そのすべての入力内容を入力し、**「OK」**をクリックします。

エージェントのサブスクライブ

所有者によってサブスクリプション可能になっているエージェントをサブスクライブできます。

エージェントにサブスクライブすると、エージェントに関する最新の情報を受信できるようになります。

1. グローバル・ヘッダーで**「カタログ」**をクリックし、サブスクライブするエージェントに移動します。
2. エージェントの**「詳細」**リンクをクリックし、**「サブスクライブ」**を選択します。

エージェントをサブスクリプション可能にするには、「エージェント」エディタの「受信者」タブで**「サブスクリプション用にエージェントを公開」**オプションを選択し、サブスクライブを許可するユーザー、カタログ・グループおよびアプリケーション・ロールを指定する必要があります。

サブスクライブまたは所有するエージェントのリストの表示

サブスクライブまたは所有する(個人フォルダ(My Folders)に保存した)エージェントのリストを表示できます。

サブスクライブ先または所有するエージェントにアクセスして、エージェントの動作を変更できます。

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。
2. カタログ・ページで、**「検索」**をクリックします。
3. 「検索」領域で、エージェントの名前または名前の一部を**「検索」**フィールドに入力し、**「場所」**を選択して、「タイプ」リストから**「≪エージェント | Agent | Bifndn≫」**を選択します。

   ワイルドカード検索として* (アスタリスク)を使用して、指定された場所のすべてのエージェント・タイプを返すことができます。
4. **「検索」**をクリックします。

エージェントからのサブスクライブ解除

現在サブスクライブしているエージェントをサブスクライブ解除できます。

エージェントからサブスクライブ解除すると、そのエージェントからの出力は表示されなくなります。

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。
2. カタログ・ページで、**「検索」**をクリックします。
3. 「検索」領域で、エージェントの名前または名前の一部を**「検索」**フィールドに入力し、**「場所」**を選択して、「タイプ」リストから**「≪エージェント | Agent | Bifndn≫」**を選択します。
4. **「検索」**をクリックします。
5. サブスクライブ解除するエージェントに移動します。
6. エージェントの**「詳細」**リンクをクリックし、**「サブスクライブ解除」**を選択します。

エージェント・サブスクライブのカスタマイズ

ユーザーによるサブスクリプションのカスタマイズを許可するようエージェントが設定されていて、条件または配信コンテンツのいずれか、あるいはその両方に対するプロンプト・フィルタを含む分析をエージェントで使用するとします。

条件分析または配信コンテンツ分析、あるいはその両方に対するフィルタ値をニーズに合せてカスタマイズできます。

ユーザーによるエージェント・サブスクライブのカスタマイズを許可するには、エージェントが**「受信者」**として実行されている必要があり、エージェント・エディタの

「受信者」タブで**「サブスクライブ者によるエージェントのカスタマイズを許可」**オプションを選択する必要があります。

1. グローバル・ヘッダーで、**「ホーム」**をクリックします。ホーム・ページが表示されます。
2. **「参照/管理」**領域で**「マイ・エージェント・サブスクライブ」**をクリックします。

   現在サブスクライブしているエージェントのリストが表示されます。(受信者として指定されているエージェントはこのリストに含まれません。)
3. サブスクリプションをカスタマイズするエージェントに移動します。
4. エージェントの**「詳細」**リンクをクリックし、**「サブスクリプションのカスタマイズ」**を選択します。
5. 「エージェントのサブスクライブのカスタマイズ」ダイアログで、必要に応じて、プロンプト・フィルタまたはパラメータをカスタマイズします。(エージェントの設定方法に応じて、条件または配信コンテンツ、あるいはその両方に対するプロンプト・フィルタまたはパラメータをカスタマイズします。)

   a. プロンプト・フィルタまたはパラメータをカスタマイズするには、**「このパラメータの演算子/値を変更」**ボタンをクリックします。

   b. 「パラメータ・フィルタの編集」ダイアログで、必要に応じて値を編集します。

   c. **「OK」**をクリックします。
6. 「エージェントのサブスクライブのカスタマイズ」ダイアログで**「OK」**をクリックします。

   前述の手順でカスタマイズしたフィルタ値は、エージェントの結果に自動的に表示されません。カスタマイズしたフィルタ値のエージェントの結果での表示を参照してください。

カスタマイズしたフィルタ値のエージェントの結果での表示

エージェント・サブスクライブのフィルタ値をカスタマイズし、エージェントの結果にフィルタ値を表示する場合、分析にフィルタ・ビューを追加する必要があります。

フィルタ値をカスタマイズすると、エージェント経由の最も重要な情報を表示できます。

1. カスタマイズする分析を編集します。
2. 分析エディタの「結果」タブを表示します。
3. フィルタ・ビューを分析に追加します。

エージェントのスケジュールの無効化と有効化

エージェントのスケジュールを一時的に無効に(し、再び有効に)することができます。

エージェントのスケジュールを無効にすると、定義されたスケジュールでエージェントが実行されません。これは、「エージェント」エディタの**「エージェントを今すぐ実行」**ボタンなどの他の方法で実行することはできます。

エージェントのスケジュールの無効化は、エージェントに対して定義したスケジュールを一定期間停止する必要がある場合に便利です。

また、エージェントのスケジュールは、デフォルトで一時的に無効になっている場合があります。たとえば、1 つ以上のエージェントを含むフォルダをコピーした場合、各

エージェントのコピーのスケジュールはデフォルトで無効になっており、有効にするまで、定義されたスケジュールでエージェントは実行されません。

エージェントのスケジュールを無効にし、再度有効にするには:

1. グローバル・ヘッダーで**「カタログ」**をクリックし、スケジュールを無効または有効にするエージェントに移動します。
2. エージェントの**「詳細」**リンクをクリックし、次のいずれかのオプションを選択します。
   - エージェントのスケジュールを無効にするには、**「スケジュールの無効化」**
   - エージェントが再びスケジュールどおりに実行されるようにするには、**「スケジュールの有効化」**

「エージェント」エディタの「スケジュール」タブの**「有効」**ボックスを使用して、エージェントのスケジュールを無効にしたり、有効にすることもできます。

デバイスと配信プロファイルとは

デバイスと配信プロファイルを介してコンテンツについての通知を受信できます。

デバイスと配信プロファイルは、エージェントによってアラートが生成された場合の連絡方法と、コンテンツを受信するデバイスを制御します。

- **デバイス** - デバイスはコンテンツの配信に使用される手段です。エージェントのコンテンツは、電子メールや SMS メッセージなどの様々なデバイスに配信されます。
- **配信プロファイル** - 配信プロファイルは、コンテンツの優先度に基づいてコンテンツの配信に使用されるデバイスを指定します。ニーズに合せていくつかの配信プロファイルを定義し、切り替えて使用することができます。ただし、一度にアクティブにできるプロファイルは 1 つのみです。

  たとえば、情報の優先度に応じて、会社の電子メールにコンテンツを配信する**社内**配信プロファイルと、携帯電話にコンテンツを配信する**移動中**プロファイルを持つことができます。

「≪マイ・アカウント | My Account | Bifndn≫」ダイアログの「≪配信オプション | Delivery Options | Bifndn≫」タブから、デバイスおよび配信プロファイルを構成します。デバイスと配信プロファイルの構成を参照してください。(管理者は、ユーザーが使用できるデバイスのタイプを管理します。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のエージェントのデバイス・タイプの管理を参照してください。)

組織によっては、次のようにシステムの配信デバイスと配信プロファイルを自動的に生成している場合があります。

- SA システム・サブジェクト領域を使用する場合、組織は、ユーザーの電子メール・アドレスと他のデバイス情報(携帯電話の番号など)に基づいて、SA システム・サブジェクト領域からシステム配信デバイスを生成し、各ユーザーのシステム配信デバイスを使用してそのユーザーのシステム配信プロファイルを生成できます。
- LDAP サーバーを使用する場合(配信デバイスとプロファイルが SA システム・サブジェクト領域から生成されていない場合のみ)、組織は、各ユーザーの電子メール・アドレスに基づいて LDAP サーバーからシステム配信デバイスを生成し、各ユーザーのシステム配信デバイスを使用してそのユーザーのシステム配信プロファイルを生成できます。

デバイスまたはプロファイルを構成しない場合、生成されたシステム配信プロファイルがデフォルトとして使用されます。他のプロファイルを定義する場合でも、システム・プロファイルをデフォルト・プロファイルとして構成できます。配信プロファイルを定義する場合は、このプロファイルにシステム・デバイスを含めて、この配信デバイスが使用される優先度レベルを設定できます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition スケジューリング・ジョブ・ガイド*の SA システム・サブジェクト領域の設定を参照してください。

エージェントに対して指定された配信先に応じて、コンテンツは次の宛先に配信されます。

- ホーム・ページおよびダッシュボード。アラートとはを参照してください
- アクティブな配信プロファイルまたは特定のデバイス。

  配信先が特定のデバイスの場合、コンテンツは、アクティブな配信プロファイル内のデバイスではなく、構成されたデバイスに配信されます。たとえば、電子メール・デバイスに配信するようエージェントが定義されている場合、アクティブな配信プロファイルで構成された電子メール・デバイスではなく、構成されているデフォルトの電子メール・デバイスが使用されます。

配信コンテンツには特定の優先度が割り当てられます。デフォルトの優先度は「標準」です。アクティブなプロファイルに対するデバイスを選択する際、どの優先度のコンテンツをそのデバイスに送信するかを指定できます。たとえば、携帯電話を配信プロファイルに追加した場合、優先度の高いコンテンツのみを関連付けます。社内にいない場合が多く、電子メールを受信できないことがわかっている場合、会社の電子メールでは優先度の低いコンテンツのみを受信するよう選択できます。

デバイスと配信プロファイルの構成

「マイ・アカウント」ダイアログの「配信オプション」タブを使用して、エージェントによってアラートが生成された場合に連絡に使用されるデバイスと配信プロファイルを構成します。

デバイスと配信プロファイルとはを参照してください

1. グローバル・ヘッダーで、**「次としてサインインの *username*」**(*username* は Oracle BI Enterprise Edition へのログインに使用した名前)をクリックし、**「マイ・アカウント」**を選択して「マイ・アカウント」ダイアログを表示します。
2. **「配信オプション」**タブをクリックします。
3. 「デバイス」領域で、適切なデバイスを追加または編集します。
   a. 追加するデバイスのデバイス・カテゴリ・ボタン(**「電子メール」**など)を選択します。
   b. **「デバイスの作成」**ボタンをクリックして「デバイスの作成」ダイアログを表示します。

      エージェント用に指定した配信先が特定のデバイスの場合、アクティブな配信プロファイルのデバイスは、ここで指定したデフォルト・デバイスによってオーバーライドされます。たとえば、電子メール・デバイスに配信されるようにエージェントが定義されている場合は、アクティブな配信プロファイルで指定した電子メール・デバイスはいずれも使用されず、ここで指定したデフォルトの電子メール・デバイスが使用されます。(エージェントの配信先は、「エージェント」エディタの「送信先」タブで指定されます。)

   c. **「名前」**フィールドに、デバイスの名前(Work Email など)を入力します。
   d. **「カテゴリ」**ボックスで、デバイス・カテゴリを選択します。

e. **「デバイス・タイプ」**ボックスで、デバイスのタイプを選択します。

f. **「アドレス/番号」**フィールドに、デバイスのアドレス(電子メール・アドレスなど)を入力します。デバイス用に電話番号を入力する際は、スペース、ダッシュ、カッコなどの記号を使用しないでください。

g. **「OK」**をクリックして「マイ・アカウント」ダイアログの「配信オプション」タブに戻ります。

適切なカテゴリ(**「電子メール」**など)の「デバイス」リストにデバイスが表示されます。

h. このデバイスをデフォルト・デバイスにする場合、デバイス名の右にある**「デフォルト」**オプションを選択します。

4. デバイスを編集するには、次の手順を実行します。

a. リストでデバイスを選択します。

b. **「デバイスの編集」**ボタンをクリックして「デバイスの編集」ダイアログを表示します。

c. 編集を行い、**「OK」**をクリックして「マイ・アカウント」ダイアログの「配信オプション」タブに戻ります。

5. 適切な配信プロファイルを追加または編集します。

a. **「配信プロファイルの作成」**ボタンをクリックして「配信プロファイルの作成」ダイアログを表示します。

b. **「名前」**フィールドに、配信プロファイル名を入力します。

c. このプロファイルがアクティブなプロファイルの場合に使用する各配信デバイスの右で、優先度オプション(**「高」**、**「標準」**または**「低」**)を1つ以上選択します。これらの優先度は配信コンテンツの優先度とともに使用され、配信コンテンツの配信先を決定します。配信コンテンツの優先度の詳細は、「エージェント」エディタの「一般」タブを参照してください。

使用しないデバイスには優先度を設定しないでください。優先度が選択されていないデバイスは、プロファイルで使用されません。

d. **「OK」**をクリックして「マイ・アカウント」ダイアログの「配信オプション」タブに戻ります。

プロファイルが、「配信プロファイル」リストに表示されます。

e. 配信プロファイルをアクティブなプロファイルにする場合、プロファイル名の右にある**「アクティブ」**オプションを選択します。

6. 配信プロファイルを編集するには、次の手順を実行します。

a. リストで配信プロファイルを選択します。

b. **「プロファイルの編集」**ボタンをクリックして「配信プロファイルの編集」ダイアログを表示します。

c. 編集を行い、**「OK」**をクリックして「マイ・アカウント」ダイアログの「配信オプション」タブに戻ります。

7. **「OK」**をクリックします。

アラートへのアクセスおよび管理

アラートのリストにアクセスできます。

リストには、各アラートの名前と配信日時、繰返しの数が表示されます。このリストを使用して、次のことが可能です。

- アラートの内容を確認します。
- アラートとその繰返しのすべてをクリアします。
- エージェントを変更する権限がある場合、アラートを生成したエージェントを編集します。
- エージェントを実行する権限がある場合、アラートを生成したエージェントを実行します。
- Oracle BI アラート・フィードをサブスクライブします。アラート用の RSS フィードのサブスクライブを参照してください。
- すべてのアラートとその繰返しのすべてをクリアします。

アラートとはを参照してください

1. グローバル・ヘッダーで、**「アラート」**をクリックします。
2. 「アラート」ダイアログでは、必要に応じてアラートを確認および管理します。

ホーム・ページの「アラート」セクションからアラートにアクセスすることや、管理することもできます。

アラート用の RSS フィードのサブスクライブ

HTTP Basic 認証をサポートする RSS 2.0 準拠のリーダーを使用して、アラートを受信できます。

Oracle BI Presentation Services で HTTPS プロトコルが使用されている場合は、使用する RSS リーダーでも HTTPS プロトコルがサポートされている必要があります。

アラート用に RSS フィードをサブスクライブするには、管理者によって「RSS フィードへのアクセス」権限が付与されている必要があります。

1. **「アラート」**リンクをクリックして「アラート」ダイアログを表示します。
2. **「RSS フィードのサブスクライブ」**ボタン(**「すべてクリア」**ボタンの左にある)をクリックします。

   RSS フィードをサブスクライブするブラウザのページが表示されます。
3. ブラウザのページの指示に従って Oracle BI アラートをサブスクライブします。

10

条件の操作

この章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の条件の操作方法について説明します。条件を使用して、エージェントがコンテンツを配信してアクションを実行するかどうか、アクション・リンクをダッシュボード・ページに表示するかどうか、セクションとそのコンテンツをダッシュボード・ページに表示するかどうかを決める方法を説明します。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- 条件とは
- 条件の使用目的
- 条件の要素とは
- 名前付き条件とは
- インライン条件とは
- 条件の作成者
- 名前付き条件の作成
- エージェントがコンテンツを配信するか、アクションを実行するかを決定するための条件の使用
- アクション・リンクをダッシュボード・ページに表示するかどうかを決定するための条件の使用
- セクションをダッシュボード・ページに表示するかどうかを決定するための条件の使用
- 条件の設定の指定
- 名前付き条件の編集
- エージェントで使用される条件の編集、カスタマイズ、テスト、保存および無効化
- ダッシュボード・ページのアクション・リンクで使用される条件の編集、テスト、保存および削除
- ダッシュボード・ページのセクションで使用される条件の編集、テスト、保存および削除

条件とは

条件とは、分析またはキー・パフォーマンス・インディケータ(KPI)の評価に基づいて単一ブール値を返すオブジェクトです。

条件の評価内容は、分析に基づいているのか、KPI に基づいているのかによって、次のように異なります。

- 分析の場合、分析の行数を評価します。
- KPI の場合、KPI のステータスを評価します。

たとえば、条件は、次のように分析の結果で 0 より大きい行数が返されるかどうかで判断されます。

- 分析により 1 行以上返された場合、条件は true と判断されます。
- 分析により 1 行も返されなかった場合、条件は false と判断されます。

条件の使用目的

特定の情報は条件でフィルタするのが最善です。

次のことを実行するかどうかを決定するために条件を使用します。

- エージェントはコンテンツを配信してアクションを実行します。
- (クリックされたときにアクションを実行する)アクション・リンクをダッシュボード・ページに表示します。
- セクションおよびそのコンテンツをダッシュボード・ページに表示します。

たとえば、販売マネージャは、売上が$2 百万を下回る場合のみ、直属の部下に月次販売レポートを配信します。$2 百万を下回る売上を示す分析に基づいた条件を作成し、配信コンテンツが月次販売レポートであるエージェントに追加します。条件が true と判断される(つまり、分析には$2 百万を下回る行が含まれている)と、エージェントは月次販売レポートを配信するようトリガーされます。

また、分析でアクション・リンクが有効になっているかどうかを判断するために様々な種類の条件を使用することができます。分析に追加されたアクションの条件による有効化についてを参照してください。

条件の要素とは

条件は複数の要素で構成されています。

条件は次の要素から構成されています。

- 分析または KPI。
- 次の条件の評価時に使用する基準。
  - 分析の場合の基準は、行数と行数に適用する演算子(行数は 100 と等しいなど)および分析に関連付けられたプロンプト・フィルタの値です。
  - KPI の場合の基準は、KPI ステータス(KPI ステータスが OK など)および KPI で**「プロンプトで使用」**に設定された KPI ディメンションの値です。これは条件の作成時には「≪未設定 | `Not Set` | `Bifndn`≫」として表示されます。

名前付き条件とは

名前付き条件とは、エージェントおよびダッシュボード・ページで再利用できるように、定義してプレゼンテーション・カタログに名前で保存する条件です。

次から条件を作成する場合に、名前付き条件を作成します:

- グローバル・ヘッダーの新規メニュー(「**分析およびインタラクティブ・レポート**」の下の「**条件**」を選択)
- ホームページ(「作成」エリアで「**分析およびインタラクティブ・レポート**」の下の「**詳細**」リンクをクリックして、「**条件**」を選択)

また、カタログにインライン条件を保存する場合に、「エージェント」エディタの「条件」タブから名前付き条件を作成します。インライン条件とはを参照してください

インライン条件とは

インライン条件とは、使用する時点で定義し、カタログに名前で保存しない条件です。かわりに、ダッシュボード・ページまたはエージェントの一部として保存されます。

インライン条件は、この条件を含むダッシュボード・ページまたはエージェントが削除される際に、自動的に削除されます。このことで、特定の Oracle BI コンテンツ内でのみ意味がある条件のカタログ管理が簡易化されます。

次のような場合に、インライン条件を作成できます。

- エージェントを作成または編集、およびエージェントが条件付きでコンテンツを配信し、関連付けられているアクションを実行することを(エージェント・エディタの「条件」タブで)指定します。エージェントがコンテンツを配信するか、アクションを実行するかを決定するための条件の使用を参照してください。

  エージェントの作成を参照してください。

- ダッシュボードにアクション・リンクを追加して、アクション・リンクを条件付きで表示することを指定します。アクション・リンクをダッシュボード・ページに表示するかどうかを決定するための条件の使用を参照してください。

  ダッシュボード・ページへのアクションの追加についてを参照してください。

- ダッシュボードにセクションを追加して、セクションを条件付きで表示することを指定します。セクションをダッシュボード・ページに表示するかどうかを決定するための条件の使用を参照してください。

  ダッシュボードへのコンテンツの追加を参照してください。

条件の作成者

条件は特定のユーザーが作成します。

一般的に:

- 管理者が作成した組織の名前付き条件は、その後、ダッシュボードおよびエージェントの作成時にコンテンツ設計者によって使用されます(条件または条件が保存されているフォルダに対する適切な権限を持っている場合)。

  名前付き条件を作成または編集できる機能は、管理者が管理している「条件の作成」権限によって制御されます。

- コンテンツ設計者は、インライン条件を作成します。

権限の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のプレゼンテーション・サービス権限の管理を参照してください。

許可の詳細は、Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトの管理を参照してください。

名前付き条件の作成

エージェントおよびダッシュボード・ページで再利用可能な名前付き条件を作成できます。

名前付き条件の詳細は、名前付き条件とは を参照してください。

1. グローバル・ヘッダーで、**「新規」**をクリックして**「条件」**を選択します。
2. 「新規条件」ダイアログを完成させます。条件の設定の指定を参照してください。

エージェントがコンテンツを配信するか、アクションを実行するかを決定するための条件の使用

エージェントがコンテンツを配信するか、アクションを実行するかを決定するために条件を使用できます。

コンテンツの配信を参照してください。

1. エージェントを編集します。
2. 「エージェント」エディタで**「条件」**タブをクリックします。
3. **「条件を使用」**ボックスを選択します。
4. 必要に応じて、次のことを行います:
   - 新規条件を作成し、**「作成」**をクリックして「条件の作成」ダイアログを表示して、ダイアログを完了します。条件の設定の指定を参照してください。
   - 既存の条件を選択し、**「参照」**をクリックして「条件の選択」ダイアログを表示して、ダイアログを完了します。
5. エージェントを保存します。

アクション・リンクをダッシュボード・ページに表示するかどうかを決定するための条件の使用

アクション・リンクをダッシュボード・ページに表示するかどうかを決定するために条件を使用できます。

ダッシュボード・ページへのアクションの追加についてを参照してください。

1. ダッシュボードを編集します。
2. 条件付きで表示するアクション・リンクを含むページのタブをクリックします。
3. ページ・レイアウト・エリアのアクション・リンク・オブジェクトにカーソルを合せてアクション・リンク・オブジェクトのツールバーを表示し、**「プロパティ」**ボタンをクリックするか、アクション・リンクがアクション・リンク・メニュー内にある場合は、次のことを行います。
   a. ページ・レイアウト・エリアのアクション・リンク・メニュー・オブジェクトにカーソルを合せてアクション・リンク・メニュー・オブジェクトのツールバーを表示し、**「プロパティ」**ボタンをクリックします。
   b. 「アクション・リンク・メニューのプロパティ」ダイアログで、条件付けするアクション・リンクを選択して**「編集」**ボタンをクリックします。
4. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログの**「リンクの表示」**コンポーネントで、**「条件付き」**ボックスをクリックします。
5. 次を行う場合は、 **「条件」**コンポーネントをクリックします。
   a. 新規条件を作成し、**「新規条件」**ボタンをクリックして「新規条件」ダイアログを表示して、ダイアログを完了します。

条件の設定の指定を参照してください。

b. 既存の条件を選択し、**「条件の選択」**ボタンをクリックして「条件の選択」ダイアログを表示して、ダイアログを完了します。

6. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログで**「OK」**をクリックします。

7. アクション・リンクがアクション・リンク・メニュー内にある場合は、「アクション・リンク・メニューのプロパティ」ダイアログで**「OK」**をクリックします。

8. ダッシュボードを保存します。

セクションをダッシュボード・ページに表示するかどうかを決定するための条件の使用

セクションをダッシュボード・ページに表示するかどうかを決定するために条件を使用できます。

ダッシュボードへのコンテンツの追加を参照してください。

1. ダッシュボードを編集します。

2. 条件付きで表示するセクションを含むページのタブをクリックします。

3. ページ・レイアウト・エリアのセクションにカーソルを合せてセクションのツールバーを表示し、セクションの**「プロパティ」**ボタンをクリックして**「条件」**を選択します。「セクション条件」ダイアログが表示されます。

4. 必要に応じて、次のことを行います:

   - 新規条件を作成し、**「≪新規条件 | New Condition | Bifndn≫」**ボタンをクリックして「≪条件の作成 | Create Condition | Bifndn≫」ダイアログを表示してから、ダイアログに入力します。条件の設定の指定を参照してください。

   - 既存の条件を選択し、**「条件の選択」**ボタンをクリックして「条件の選択」ダイアログを表示して、ダイアログを完了します。

5. 「セクション条件」ダイアログで**「OK」**をクリックします。

6. ダッシュボードを保存します。

条件の設定の指定

一部の条件では設定の指定が必要です。

条件を作成または編集する際に、「≪新規条件 | New Condition | Bifndn≫」、「≪条件の作成 | Create Condition | Bifndn≫」または「≪条件の編集 | Edit Condition | Bifndn≫」ダイアログのいずれかで、条件の設定を指定する必要があります。プロンプト・フィルタの値を指定した場合、これらの値は使用時にオーバーライドできません。

1. **「次に基づいて条件を作成」**ボックスで、条件が**分析**か **KPI** のどちらに基づいているかを選択します。

2. それぞれ次のことを行います:

   - (オプション)分析の場合、必要に応じてプロンプト・フィルタを編集します。

   - KPI の場合、KPI ディメンションの値を指定します。条件を作成するときに KPI ディメンションに複数の値を固定することはできません。

3. 次のように評価基準を指定します。
   - 分析の場合、**行数が次の場合は条件が true** エリアで、次のことを行います。
     - ***「演算子」*** ボックスで、行数に適用する演算子を選択します。
     - ***「行数」*** ボックスで、評価される行数を指定します。
   - KPI の場合、**「KPI が次の場合は条件が true」** ボックスで KPI ステータスを選択します。
4. (オプション)**「テスト」**をクリックして条件をテストします。
5. 条件を保存する場合、次のようにします。
   - インライン条件として保存する場合は、**「OK」**をクリックします。
   - 名前付き条件として保存する場合は、**「保存」**をクリックして、条件をカタログに名前で保存できる「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。条件が、プライベートである分析または KPI に基づいている場合、`/Shared Folders` フォルダに保存することはできません。

名前付き条件の編集

名前付き条件は編集可能です。

名前付き条件を編集すると、名前付き条件を最新状態に保つことができます。条件の設定の指定を参照してください。

1. カタログ内の条件をナビゲートします。
2. **「編集」**リンクをクリックします。
3. 「条件の編集」ダイアログで、必要な変更を行います。

エージェントで使用される条件の編集、カスタマイズ、テスト、保存および無効化

エージェントで使用される条件について、複数のアクションを実行できます。

次のことができます:

- インライン条件を編集
- プロンプト・フィルタを編集して名前付き条件をカスタマイズします。
- 条件の判断が true か、false かを確認するために条件をテストする
- インライン条件をカタログに名前付き条件として保存します。
- 条件を削除する

1. エージェントを編集します。
2. エージェント・エディタの**「条件」**タブをクリックします。
3. 使用方法:
   - インライン条件を編集するには、**「条件の編集」**をクリックして「条件の編集」ダイアログを表示し、必要な変更を行います。条件の設定の指定を参照してください。

- 名前付き条件のプロンプト・フィルタをカスタマイズするには、**「カスタマイズ」**をクリックして「条件のカスタマイズ」ダイアログを表示し、必要なカスタマイズを行います。
- 条件をテストするには、**「テスト」**をクリックします。評価結果が表示されます。
- インライン条件をカタログに名前付き条件として保存するには、**「カタログに保存」**をクリックして「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。
- 条件を無効にするには、**「条件を使用しない(常にコンテンツを配送してアクションを実行)」**をクリックします。

4. エージェントを保存します。

ダッシュボード・ページのアクション・リンクで使用される条件の編集、テスト、保存および削除

条件について複数のタスクを実行できます。

ダッシュボード・ページのアクション・リンクに使用される条件に対して、次のタスクを実行できます。

- 条件を編集する
- 条件の判断が true か、false かを確認するために条件をテストする
- インライン条件をカタログに名前付き条件として保存し、名前付き条件をカタログに別の名前で保存する
- 条件を削除する

1. アクション・リンクを含むダッシュボード・ページを編集します。
2. ページ・レイアウト・エリアのアクション・リンク・オブジェクトにカーソルを合せてアクション・リンク・オブジェクトのツールバーを表示し、**「プロパティ」**ボタンをクリックするか、アクション・リンクがアクション・リンク・メニュー内にある場合は、次のことを行います。
   a. ページ・レイアウト・エリアのアクション・リンク・メニュー・オブジェクトにカーソルを合せてアクション・リンク・メニュー・オブジェクトのツールバーを表示し、**「プロパティ」**ボタンをクリックします。
   b. 「アクション・リンク・メニューのプロパティ」ダイアログで、条件を含むアクション・リンクを選択して**「編集」**ボタンをクリックします。
3. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログで、**「条件」**フィールドの右側の**「詳細」**ボタンをクリックしてから、次を行います。
   - 条件を編集するには、**「条件の編集」**を選択して「条件の編集」ダイアログを表示し、必要な変更を行います。条件の設定の指定を参照してください。
   - 条件をテストするには、**「条件のテスト」**を選択します。評価結果が表示されます。
   - インライン条件をカタログに名前付き条件として保存するには、**「条件に名前を付けて保存」**を選択して「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。
   - 条件を削除するには、**「条件の削除」**を選択します。
4. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログで**「OK」**をクリックします。

5. アクション・リンクがアクション・リンク・メニュー内にある場合は、「アクション・リンク・メニューのプロパティ」ダイアログで「**OK**」をクリックします。

6. ダッシュボードを保存します。

ダッシュボード・ページのセクションで使用される条件の編集、テスト、保存および削除

セクション内の条件について複数のタスクを実行できます。

ダッシュボード・ページのセクションに使用される条件に対して、次のタスクを実行できます。

- 条件を編集する
- 条件の判断が true か、false かを確認するために条件をテストする
- インライン条件をカタログに名前付き条件として保存し、名前付き条件をカタログに別の名前で保存する
- 条件を削除する

1. セクションを含むダッシュボード・ページを編集します。
2. ページ・レイアウト・エリアのセクションにカーソルを合せてセクションのツールバーを表示し、セクションの「**プロパティ**」ボタンをクリックして「**条件**」を選択します。
3. 「セクション条件」ダイアログで、「**条件**」フィールドの右側の「**詳細**」ボタンをクリックしてから、次を行います。
   - 条件を編集するには、「**条件の編集**」を選択して「条件の編集」ダイアログを表示し、必要な変更を行います。条件の設定の指定を参照してください。
   - 条件をテストするには、「**条件のテスト**」を選択します。評価結果が表示されます。
   - インライン条件をカタログに名前付き条件として保存するには、「**条件に名前を付けて保存**」を選択して「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。
   - 条件を削除するには、「**条件の削除**」を選択します。
4. ダッシュボードを保存します。

11

アクションの操作

この章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のアクションの操作方法について説明します。ここでは、アクションを使用して、関連コンテンツにナビゲートする方法、外部システムの操作、機能またはプロセスを起動する方法を説明し、分析、ダッシュボード・ページ、エージェント、KPI、およびスコアカードのイニシアチブと目標にアクションを追加する方法を説明します。

ビデオ

トピック

この章は次の項で構成されています。

- アクションとは
- アクション・リンクとアクション・リンク・メニューとは
- 使用可能なアクション・タイプ
- アクションを作成できるユーザー
- アクションを追加できる場所
- 名前付きアクションとは
- インライン・アクションとは
- アクション・パラメータとは
- アクションの条件による有効化について
- アクションの実行時にユーザーに表示される情報のカスタマイズについて
- 名前付きアクションの作成
- 新規アクションの設定の指定
- 分析へのアクションの追加
- ダッシュボード・ページへのアクションの追加について
- アクション・リンクを使用したダッシュボード・ページへのアクションの追加
- アクション・リンク・メニューを使用したダッシュボード・ページへのアクションの追加
- エージェントへのアクションの追加
- KPI へのアクションの追加
- スコアカードのイニシアチブおよび目標へのアクションの追加

- 既存の名前付きアクションに基づいた新規アクションの作成
- 名前付きアクションの編集
- 分析に追加されたアクションまたはアクション・リンクの編集
- ダッシュボード・ページに追加されたアクション、アクション・リンクおよびアクション・リンク・メニューの編集
- エージェントに追加されたアクションの編集
- KPI に追加されたアクションまたはアクション・リンクの編集
- スコアカードのイニシアチブおよび目標に追加されたアクションおよびアクション・リンクの編集
- 分析内のインライン・アクションのカタログへの保存
- ダッシュボード内のインライン・アクションのカタログへの保存
- 名前付きアクションの実行によるテスト

アクションとは

アクションにより、データと計算をインタラクティブにすることができます。

アクションによって次の機能が提供されます:

- 関連するコンテンツへの移動
- 外部システムでの操作、関数またはプロセスの起動

アクションは、分析、ダッシュボード・ページ、エージェント、スコアカードの目標、スコアカードのイニシアチブおよび KPI に含めることができます。

アクションは、次のように実行できます:

- 次のものに埋め込まれているアクション・リンクをクリックしたエンド・ユーザーによって明示的に:
  - 分析の列見出し、列値、階層レベル値、特定のビュー(グラフなど)、表とピボット表内の合計と総計
  - ダッシュボード・ページ
  - エージェントによって配信されるコンテンツ
  - 原因と結果マップ、カスタム・ビュー、戦略ツリー・ビュー、戦略マップ、KPI および KPI ウォッチリストのスコアカード
  - KPI 分析
- エージェントの最終ステップとして自動的に
- ホーム・ページまたはカタログ・ページから直接

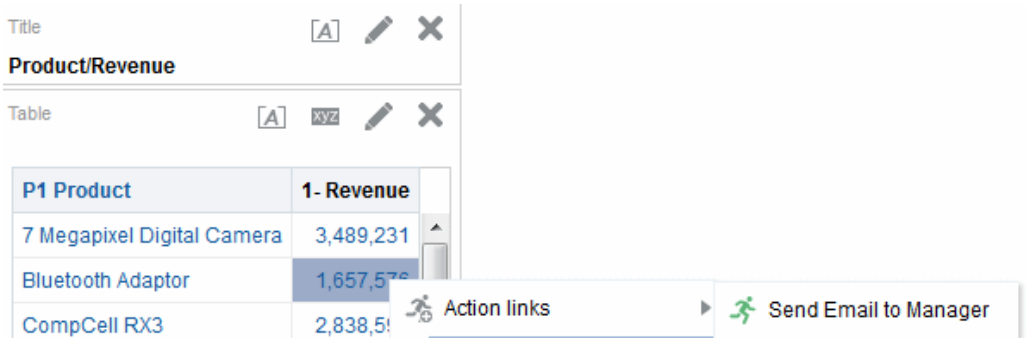
たとえば、営業本部長が、特定のしきい値以下に売上が落ちた地域の営業部長に会いたいとします。営業本部長のダッシュボードにアクション・オブジェクトを埋め込み、営業部長がリンクをクリックするだけでミーティングをスケジュールできるようにします。あるいは、エージェントを使用して、売上しきい値を超えたら自動的にミーティングがスケジュールされるようすることもできます。

アクション・リンクとアクション・リンク・メニューとは

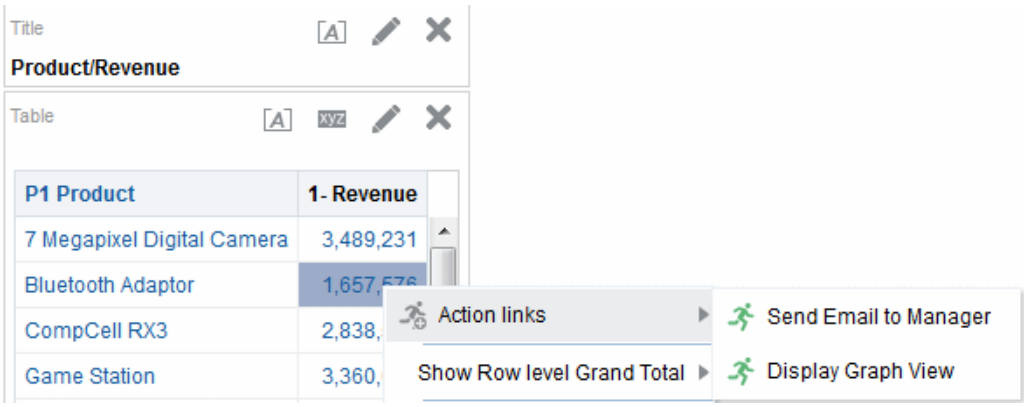
アクション・リンクとアクション・リンク・メニューにより、インタラクティブにデータを表示できます。

アクション・リンクは、分析、ダッシュボード・ページ、スコアカードの目標、スコアカードのイニシアチブまたは KPI に埋め込まれたアクションへのリンクで、クリックすると、関連付けられているアクションが実行されます。

次の図に、アクション・リンクが列値に追加された分析を示します。マウス・ポインタを列値(この図の Bluetooth Adaptor の収益など)に合せると、列値がリンクとして表示されます。列リンクをクリックすると関連付けられているアクション・リンクが表示され、そのアクション・リンクをクリックすると関連付けられているアクションが実行されます。



分析、KPI、スコアカードの目標およびスコアカードのイニシアチブでは、複数のアクション・リンクはリストに表示されます。図は、アクション・リンク(マネージャへの電子メールの送信およびグラフ・ビューの表示)のリストが列値に追加されている分析を示しています。マウス・ポインタを列値(この図の Bluetooth Adaptor の収益など)に合せると、列値がリンクとして表示されます。列値のリンクをクリックすると、アクションのリストが表示されます。リスト内のアクションをクリックすると、関連付けられているアクションが実行されます。



ダッシュボード・ページで、アクション・リンクをスタンドアロン・リンクとして追加したり、複数のアクション・リンクをまとめてアクション・リンク・メニューにすることができます。アクション・リンク・メニューで、ユーザーは、データから得られたビジネスの見通しに基づいて、実行するアクションをアクション・リンクのリストから選択できます。

また、条件を使用し、データに応じて各アクション・リンクを表示することもできます。この強力な機能によって、表示されているデータに応じて適切な次のステップをユーザーに示す、状況依存メニューを設定できます。アクションの条件による有効化についてを参照してください。

Excel や PDF などのエクスポートされたフォーマットにはアクション・リンクは含まれません。

分析に追加したアクション・リンクは、次のビューに表示されます:

- ファンネル・グラフ
- ゲージ
- グラフ
- ヒート・マトリックス
- マップ・ビュー
- パフォーマンス・タイル
- ピボット表
- 表
- トレリス
- ツリーマップ

ダッシュボードでの表示用のビューの追加を参照してください。

スコアカードの目標およびスコアカードのイニシアチブに追加したアクション・リンクは、次のスコアカード・ビューに表示されます:

- 原因と結果マップ
- カスタム・ビュー
- 戦略ツリー
- 戦略マップ
- KPI ウォッチリスト

KPI に追加したアクション・リンクは、KPI 分析に表示されます。

使用可能なアクション・タイプ

使用可能なアクションのタイプは、関連するコンテンツへの*移動*と、外部システムでの操作、関数またはプロセスの*起動*の 2 つのグループに分類されます。

権限によって、作成できるアクションのタイプが制御されます。移動タイプのアクションのみ、起動タイプのアクションのみ、または移動タイプおよび起動タイプの両方のアクションを作成できる可能性があります。あるいは、アクションの実行のみが可能である可能性があります(これらのアクションが共有オブジェクトとしてカタログに存在しているか、あるいはダッシュボードまたは分析などの共有オブジェクトに存在している場合)。アクションを作成できるユーザーを参照してください。

さらに、アクションを追加できる場所はアクションのタイプによって異なります。アクションを追加できる場所を参照してください。

開発者が Oracle BI EE オブジェクトを Oracle ADF アプリケーションに追加する際に使用できるコンテキスト・イベント・アクション・タイプの詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 開発者ガイド*の Oracle BI EE コンテキスト・イベント・アクションでのビジネス・インテリジェンス・コンテンツの引渡しを参照してください。

関連するコンテンツに移動するアクション

役立つコンテンツへのナビゲーションを用意できます。

次のリストに、関連するコンテンツに移動するタイプのアクションを示し、説明します:

- **BI コンテンツにナビゲート** - 分析、特定のダッシュボード・ページまたはダッシュボードに移動します。
- **Web ページにナビゲート** - 指定された URL に移動します。
- **EPM コンテンツにナビゲート** - Financial Reporting のコンテンツに移動します。

  このアクション・タイプを使用可能にするには、いくつかの構成が必要です。必要な構成の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレータ・ガイド*の EPM コンテンツにナビゲートを参照してください。

- **E-Business Suite にナビゲート** - Oracle E-Business Suite のページまたはフォームに移動します。このアクション・タイプによって、ユーザーは、まず Oracle E-Business Suite にログインして、Oracle BI EE にアクセスした後で、Oracle E-Business Suite のページまたはフォームに戻ることができます。

  このアクション・タイプを使用可能にするには、いくつかの構成が必要です。必要な構成の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレータ・ガイド*の E-Business Suite にナビゲートを参照してください。

- **Siebel CRM にナビゲート** - Siebel CRM アプリケーションのビュー(機会など)にナビゲートします。このアクション・タイプによって、ユーザーは、Siebel CRM アプリケーションに埋め込まれたダッシュボードから、CRM アプリケーションのビュー内のレコードにナビゲートできます。

  このアクション・タイプを使用可能にするには、いくつかの構成が必要です。必要な構成の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレータ・ガイド*の Siebel CRM にナビゲートを参照してください。

外部システムで操作、関数またはプロセスを起動するアクション

外部システムに接続されるアクションを設定できます。

次のリストに、外部システムで操作、関数またはプロセスを起動するタイプのアクションを示し、説明します:

- **Web サービスの起動** - Web サービス操作または Web サービスとして公開されている SOA サービス(Web サービスとして構成されている Oracle SOA Suite の Business Process Execution Language(BPEL)プロセスなど)を起動します。

  このアクション・タイプを使用するには、いくつかの構成が必要です。必要な構成の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレータ・ガイド*の Web サービスの起動を参照してください。

- **Java メソッドの起動** - Enterprise Java Bean(EJB)の Java メソッドを起動します。

  このアクション・タイプを使用するには、いくつかの構成が必要です。必要な構成の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレータ・ガイド*の Java メソッド(EJB)の起動を参照してください。

- **ブラウザ・スクリプトの起動:** クライアント Web ブラウザから JavaScript 関数を起動します。

このアクション・タイプを使用するには、いくつかの構成が必要です。必要な構成の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレータ・ガイド*のブラウザ・スクリプトの起動を参照してください。

- **サーバー・スクリプトの起動** - 現在のエージェントの完了時、カスタム・スクリプトを実行します。カスタム・スクリプトのタイプは、Javascript または VBScript のいずれかです。

  このアクションでは、サーバーが Microsoft Windows で稼働している場合、カスタム・スクリプト・アクションがサポートされます。他のプラットフォーム(Windows を含む)の場合、Java メソッド(EJB)の起動アクションまたは Web サービスの起動アクションを使用することを検討してください。

- **HTTP リクエストの起動** - サーバーを介してターゲット URL に HTTP リクエストが送信されます。このアクション・タイプは、URL API によって公開されている外部システムの起動に使用されます。

- **エージェントの起動** - 別のエージェントを起動します。このアクション・タイプでは、エージェントを連鎖させることができます。たとえば、エージェント A にエージェント B を起動させ、エージェント B にエージェント C を起動させることができます。

アクションを作成できるユーザー

デフォルトでは、これらのアクション権限は管理者に付与されています。

アクションを作成できるかどうかは、管理者によって管理される、次のアクション権限で制御されます:

- **ナビゲート・アクションの作成** - 関連するコンテンツに移動するアクションを作成する権限を付与します。
- **起動アクションの作成** - 外部システムで操作、関数またはプロセスを起動するアクションを作成する権限を付与します。
- **埋込み HTML が含まれるアクションの保存** - 起動アクションの作成権限と組み合せて使用し、Web サービスの起動アクションの結果のカスタマイズに HTML コードを埋め込む権限を付与します。

*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のプレゼンテーション・サービス権限の管理およびOracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトの管理を参照してください。

アクションを追加できる場所

アクションを追加できる場所は、アクションのタイプによって異なります。

分析、ダッシュボード・ページ、エージェント、スコアカードの目標、スコアカードのイニシアチブおよび KPI に追加できるタイプもあれば、エージェントのみ、あるいは分析、ダッシュボード・ページ、スコアカードの目標、スコアカードのイニシアチブおよび KPI のみに追加できるタイプもあります。次の表では、アクションのタイプ、および各タイプを追加できる場所を示します。

アクション・タイプ	分析、ダッシュボード・ページ、スコアカードの目標、スコアカードのイニシアチブおよび KPI への追加	エージェントへの追加
EPM コンテンツにナビゲート	はい	いいえ

アクション・タイプ	分析、ダッシュボード・ページ、スコアカードの目標、スコアカードのイニシアチブおよび KPI への追加	エージェントへの追加
BI コンテンツにナビゲート	はい	いいえ
Web ページにナビゲート	はい	いいえ
E-Business Suite にナビゲート	はい	いいえ
Siebel CRM にナビゲート	はい	いいえ
Web サービスの起動	はい	はい
Java メソッドの起動	はい	はい
ブラウザ・スクリプトの起動	はい	いいえ
HTTP リクエストの起動	はい	はい
エージェントの起動	いいえ	はい
サーバー・スクリプトの起動	いいえ	はい **注意:** このアクション・タイプでは、サーバーは Microsoft Windows で稼働している必要があります。
Java ジョブの起動	いいえ	はい

オブジェクトへのアクションの追加の詳細は、次を参照してください:

- 分析へのアクションの追加
- ダッシュボード・ページへのアクションの追加について、アクション・リンクを使用したダッシュボード・ページへのアクションの追加、およびアクション・リンク・メニューを使用したダッシュボード・ページへのアクションの追加
- エージェントへのアクションの追加
- KPI へのアクションの追加
- スコアカードのイニシアチブおよび目標へのアクションの追加

名前付きアクションとは

名前付きアクションは、定義し、再利用できるように名前を付けて Oracle BI プレゼンテーション・カタログに保存するアクションです。名前付きアクションをテンプレートとして再利用し、別の名前付きアクションを作成することもできます。

カタログには、次のタイプを除くすべてのアクション・タイプを保存できます。

- エージェントの起動
- サーバー・スクリプトの起動

- Java ジョブの起動

たとえば、設計中の分析やダッシュボード・ページに、組織の Web サイトへのナビゲーションを含めることが頻繁にあるとします。その URL に移動するアクションを作成し、カタログに保存できます。そうすると、分析やダッシュボード・ページを作成する際、この名前付きアクションを追加できます。

次からアクションを作成して、名前付きアクションを作成します:

- グローバル・ヘッダーの**「新規」**メニューにアクセスするには、**「アクション」**をクリックし、いずれかのアクション・タイプ(**「Web ページにナビゲート」**など)を選択します。
- ホーム・ページにアクセスするには、「作成」領域で**「アクション」**をクリックし、いずれかのアクション・タイプ(**「BI コンテンツにナビゲート」**など)を選択します。

ダッシュボード、分析または KPI からも名前付きアクションを作成できます。これは、インライン・アクションを作成し、カタログに保存して保持することで可能です。インライン・アクションとはを参照してください

インライン・アクションとは

インライン・アクションは、使用時に定義し、名前を付けてカタログに保存しないアクションです。かわりに、分析、ダッシュボード・ページ、エージェント、スコアカードの目標、スコアカードのイニシアチブまたは KPI の一部として保存されます。

インライン・アクションは、それを含む分析、ダッシュボード・ページ、エージェント、スコアカードの目標、スコアカードのイニシアチブまたは KPI が削除されると、自動的に削除されます。これによって、特定の BI コンテンツ内でのみ意味をなすアクションのカタログ管理が簡単になります。

たとえば、ダッシュボード・ページを設計し、一度のみ使用する予定の EJB を起動するとします。その時点で EJB を起動するアクションを作成し、ページに追加します。ダッシュボードを保存すると、ダッシュボードとともにアクションが保存されます。

インライン・アクションは、次の場合に作成します:

- エージェントを作成または編集し、エージェントの終了時に実行する新規アクションを追加します。エージェントへのアクションの追加を参照してください。
- ダッシュボード・ページを編集し、アクション・リンクまたはアクション・リンク・メニューを使用して、新規アクションをページに追加します。ダッシュボード・ページへのアクションの追加についてを参照してください。
- 分析を作成または編集し、アクション・リンクを使用して、新規アクションを列見出し、列値または階層レベル値に追加します。分析へのアクションの追加を参照してください。
- KPI を作成または編集し、アクション・リンクを使用して、新規アクションを KPI に追加します。KPI へのアクションの追加を参照してください。
- スコアカードでイニシアチブまたは目標を作成または編集し、アクション・リンクを使用して、新規アクションをイニシアチブまたは目標に追加します。スコアカードのイニシアチブおよび目標へのアクションの追加を参照してください。

アクション・パラメータとは

アクション・パラメータにより、アクションからのデータを操作またはプロセスにおいて示すことができます。

アクション・パラメータは、アクションによって表される操作またはプロセスに Oracle BI EE からデータを渡すのに使用されます:

- Web サービス操作を起動するアクションの場合、パラメータは、属性として定義される単純なタイプおよび Web サービス操作の入力メッセージ内の単純な要素(または単純なタイプのコンポーネントに分解される複雑な要素)に相当し、操作と、操作のパラメータを定義する Web Service Definition Language (WSDL)から読み取られます。
- Java メソッド、ブラウザ・スクリプトまたはサーバー・スクリプトを起動するアクションの場合、パラメータは、メソッドの引数に相当します。
- Web ページに移動するアクションまたは HTTP リクエストを起動するアクションの場合、パラメータは、URL を介して渡されるパラメータに相当します。
- BI コンテンツにナビゲートするアクションの場合、パラメータは自動的にソースからターゲットに渡されます。ある分析から別の分析にナビゲートする際、ターゲット分析のフィルタで使用されるフィールドと同じ論理名のフィールドがデータのソース行に含まれている場合は、このフィールドの値がパラメータとして渡されます。フィルタの演算子を**「プロンプトで使用」**または**「次と等しい/次に存在する」**に設定する必要があります。

名前付きアクションを作成する際、またはアクションをオブジェクト(分析の列など)に関連付ける際、パラメータが次のいずれであるかを指定できます:

- **固定** - 固定パラメータは表示できますが、ユーザーは値を設定できません。
- **非表示** - 非表示パラメータは表示不可であり、ユーザーはその値を設定できません。非表示であることは、パラメータがセキュアであることではありません。
- **オプション** - オプション・パラメータは、アクションの実行に値を必要としません。

表示された合計または総計上のアクション・リンクまたは条件付きアクション・リンクの場合、パラメータの届く範囲は関連する BI コンテンツ内に限られます。

アクションの条件による有効化について

条件により有効化されるアクションを特定の要素に追加できます。

次のものに追加されているアクションは、条件によって有効にすることができます:

- 分析。分析に追加されたアクションの条件による有効化についてを参照してください。
- ダッシュボード・ページ。ダッシュボード・ページに追加されたアクションの条件による有効化についてを参照してください。
- エージェント。エージェントに追加されたアクションの条件による有効化についてを参照してください。

KPI に追加されているアクションは KPI の範囲に関連付けられているため、定義に基づいた条件によって有効になります。同様に、スコアカードに追加されているアクションはイニシアチブと目標の状況に関連付けられているため、条件によって有効になります。

分析に追加されたアクションの条件による有効化について

分析に追加されたアクション・リンクは、指定条件下でのみ表示されます。

アクションを分析に追加する際、1 つ以上の条件を満たす場合にのみ、関連付けられているアクション・リンクが表示されるよう指定できます。これは、使用する分析の列を 1 つ以上選択し、満たすべき条件を指定して行います。(条件を指定する手順は、条件付き書式設定に使用される手順と非常によく似ています。)

たとえば、地域ごとの売上を示す分析で、売上が特定の金額以下になった場合にのみ、地域担当マネージャに電子メールを送信するアクション・リンクが表示されるよう指定できます。

ダッシュボード・ページに追加されたアクションの条件による有効化について

ダッシュボード・ページに追加されたアクションを、指定された条件下においてのみ表示されるようにできます。

アクションをダッシュボード・ページに追加する際、特定の条件を満たす場合にのみ、関連付けられているアクション・リンクが表示されるよう指定できます。これは、満たすべき条件(名前付きまたはインライン)を指定して行います。

たとえば、製品の在庫レベルを示すダッシュボード・ページで、特定の製品の在庫レベルが低い場合にのみ、在庫を注文するアクション・リンクが表示されるよう指定できます。

アクション・リンク・メニューで条件付きアクション・リンクを使用すると、ダッシュボード・ページのデータに応じて異なるアクションのセットを表示できます。たとえば、製品の在庫レベルを示すダッシュボード・ページに、次のアクション・リンクを含むアクション・リンク・メニューを追加できます:

- 特定の製品の在庫がゼロの場合、在庫の注文と宣伝の中止
- 特定の製品の在庫レベルが低い場合、在庫の注文
- 特定の製品の在庫レベルが十分な場合、アクションなし

アクション・リンクとアクション・リンク・メニューとはおよび条件の操作を参照してください。

エージェントに追加されたアクションの条件による有効化について

エージェント・アクションを実行するための条件を使用できます。

エージェントの条件は、主に、エージェントがコンテンツを配信するかどうかの決定に使用しますが、エージェントがアクションを実行するかどうかの決定にも使用できます。

アクションをエージェントに追加する際、特定の条件を満たす場合にのみ、アクションが実行されるよう指定できます。これは、条件(インラインまたは名前付き)をエージェントに追加し、次の場合にアクションを実行するかどうかを指定して行います:

- エージェントの条件が true と評価される場合のみ
- エージェントの条件が false と評価される場合のみ

一部のアクションでは、条件によって返される行ごとにアクションを実行するかどうかも指定できます。サーバー・スクリプトの起動アクションとエージェントの起動アクションは、結果セットの行ごとには実行できません。また、アクション・パラメータの 1 つが結果セット・マッピングの場合も、行ごとに実行できません。

たとえば、新規マーケティング・キャンペーンを自動的に開始するアクションをエージェントに追加し、地域の売上が$2,000,000 以下かどうかを評価する条件が true の場合にのみ実行されるよう指定できます。

条件の操作を参照してください。

アクションの実行時にユーザーに表示される情報のカスタマイズについて

アクションの実行時にユーザーに表示される情報をカスタマイズできます。

具体的には、次のことができます。

- アクションの実行時に、確認プロンプトをユーザーに表示するかどうかを指定します。
- アクションを実行する前にユーザーがアクション・パラメータを指定する必要がある場合に、ユーザーに表示されるダイアログをカスタマイズします。
- ユーザーに表示される正常起動メッセージをカスタマイズするか、Web サービスの起動アクションの場合には、アクションの結果に関する情報を表示するダイアログをカスタマイズできます。
- ユーザーに表示される起動失敗メッセージをカスタマイズします。

アクションの作成または編集時に「アクションのオプション」ダイアログを使用して、この情報をカスタマイズします。新規アクションの設定の指定を参照してください。

名前付きアクションの作成

コンテンツ設計者は分析、ダッシュボード・ページ、エージェント、スコアカードの目標、スコアカードのイニシアチブおよび KPI に追加できる名前付きアクションを作成できます(適切な権限がある場合)。

名前付きアクションとはを参照してください

1. グローバル・ヘッダーで**「新規」**をクリックし、**「アクショナブル・インテリジェンス」**の下の**「アクション」**を選択して、作成するアクションのタイプを選択します。
2. 「新規アクション」ダイアログを完成させます。

新規アクションの設定の指定

作成するアクションごとに設定を指定する必要があります。

次のいずれかのタスクを実行する場合、「新規アクションの作成」ダイアログ(エージェントおよびダッシュボードでは「新規アクション」ダイアログとして、またスコアカードでは「新規アクションの追加」ダイアログとして表示されます)で、新規アクションの設定を指定します。

- 名前付きアクションの作成
- 分析へのアクションの追加
- ダッシュボード・ページへのアクションの追加について
- エージェントへのアクションの追加
- KPI へのアクションの追加
- スコアカードのイニシアチブおよび目標へのアクションの追加

1. **「≪新規アクションの作成｜ Create New Action ｜ Bifndn≫」**(エージェントでは**「≪新規アクションの追加｜ Add New Action ｜ Bifndn≫」**、ダッシュボードでは**「≪新規アクション｜ New Action ｜ Bifndn≫」**と表示されます)をクリックしてか

ら、作成するアクションのタイプを選択します。選択内容により、次のようになります:

- **「BI コンテンツにナビゲート」**では、最初に「アクションの BI コンテンツの選択」ダイアログが表示され、ここでナビゲート先 Oracle BI EE コンテンツを選択すると、「新規アクションの作成」ダイアログが表示されます。
- **「EPM コンテンツにナビゲート」**では、最初に「このアクションで起動する Hyperion Resource を選択します。」ダイアログが表示され、ここでナビゲート先の Hyperion リソースを選択すると、「新規アクションの作成」ダイアログが表示されます。
- **「Web サービスの起動」**では、「Web サービス操作の選択」ダイアログが表示されますが、ここで、起動する Web サービス操作を選択するか、Web サービスがあらかじめ構成されていない場合は WSDL の URL を入力すると、「新規アクションの作成」ダイアログが表示されます。
  - **Web サービス**
    - このリストを使用して、起動する Web サービス操作を選択します。
    - このリストに初期表示されるのは、管理者が事前構成した Web サービスです。**WSDL URL** コンポーネントを使用すると他の Web サービスを表示できます。
  - **WSDL URL**
    - **「Web サービス」**リストで選択した Web サービス操作の Web Services Description Language (WSDL)が表示されます。
    - 事前構成されていない WSDL URL から使用できる Web サービス操作をリストに表示するには、このフィールドを使用して WSDL URL(例: `http://<server>:8888/default/10?WSDL`)を入力し、**「開く」**をクリックします。
  - **Web サービス** — 選択した操作の Web サービスが表示されます
  - **操作** — 選択した操作を表示します
  - Oracle BI 管理者が事前構成した Web サービスのリストの**リストア** — 「Web サービス」リストに初期表示されていた Web サービス(つまり、管理者が事前構成した Web サービス)のリストを表示します。
  - 選択したフォルダの**リフレッシュ** — フォルダが選択されている場合のみ使用できます。このボタンを使用して、選択したフォルダをリフレッシュします。
- **「Java メソッドの起動」**では、「Java メソッドの選択」ダイアログが表示され、ここで起動する Java メソッドを選択すると、「新規アクションの作成」ダイアログが表示されます。
- その他のアクション・タイプを選択した場合は、「新規アクションの作成」ダイアログが表示されます。

2. 作成または編集するアクションのタイプに応じて、次のいずれかの手順を実行します。

アクション・タイプ	操作
Web ページにナビゲート または HTTP リクエストの起動	「**URL**」フィールドに、Web ページの URL を入力します。 ブラウザで URL を強調表示して、「**URL**」フィールドにコピー・アンド・ペーストできます。
ブラウザ・スクリプトの起動	「**関数名**」フィールドに、実行する関数の名前を入力するか、「**参照**」をクリックして「スクリプト関数の選択」ダイアログにすべて入力します。 スクリプトにパラメータが定義されていて、「スクリプト関数の選択」ダイアログで関数を選択した場合、「**パラメータの定義**」リストにパラメータが表示されます。手動で関数名を入力した場合、手動でパラメータを追加する必要があります。
サーバー・スクリプトの起動	「**言語**」ボックスで、「**JavaScript**」または「**VBScript**」を選択し、「**スクリプト・パス**」フィールドに、実行するスクリプトのパスを入力します。 デフォルトで、スクリプトは *`ORACLE_INSTANCE`*`\bifoundation\OracleBISchedulerComponent\coreapplication_obisch`*n*`\scripts\common` ディレクトリに保存されます。たとえば、`D:\OBI11g\instances\instance1\bifoundation\OracleBISchedulerComponent\coreapplication_obisch1\scripts\common` などです。 管理者はスクリプトが保存されるデフォルト・ディレクトリを変更できます。
エージェントの起動	「**参照**」をクリックして「既存のエージェントの選択」ダイアログにすべて入力します。
E-Business Suite にナビゲート	「**パラメータの定義**」リストで、次の必須パラメータを定義します: • **FunctionCode** - ターゲットの E-Business Suite フォームに関連する関数の名前 (*GLXIQJRN* など) • **ConnectionPool** - Oracle BI リポジトリでの Oracle E-Business Suite データベースの接続プールの名前(*EBS12* など) オプションのパラメータを定義して、Oracle Business Intelligence から EBS のフォームへコンテキストを渡すこともできます。 パラメータの定義の詳細は、この手順のパラメータの定義のステップを参照してください。 Oracle E-Business Suite セキュリティとの統合の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition インテグレータ・ガイド*の Oracle E-Business Suite セキュリティとの統合を参照してください。
Siebel CRM にナビゲート	「**パラメータの定義**」リストで、次の必須パラメータを定義します: • **ビュー** - ナビゲート先のレコードを含むビューの名前(機会リスト・ビューなど)。 • **アプレット** - ナビゲート先のレコードを含むビュー内の親アプレットの名前(機会リスト・アプレットなど)。 • **値を渡す** - ナビゲート先のレコードの行番号(3SIA-2O5VU など)。 一般的に、このタイプのアクションをインライン・アクションとして分析に追加している場合は、分析基準内の列を使用して、「**値を渡す**」の値を設定します。これには、「**値のタイプの変更**」ボタンをクリックし、「**列値**」を選択してから、「**列値**」ボタンをクリックして列を選択します。 ビュー名、アプレット名およびレコードの行番号の決定方法については、Siebel CRM アプリケーションのドキュメントを参照してください。 パラメータの定義の詳細は、この手順のパラメータの定義のステップを参照してください。

3. (「HTTP リクエストの起動」のみ)「**リクエスト**」ボックスで、次のいずれかのオプションを選択します:

   • **GET** - HTTP GET リクエストとして URL を起動します。

- **POST** - HTTP POST リクエストとして URL を起動します。

4. (エージェントの起動アクションのみ)**「実行対象受信者」**ボックスで、受信者の範囲を選択します。たとえば、選択されたエージェントの受信者と同じ受信者の場合、**「指定のエージェントに存在」**を選択します。

5. (「Web ページにナビゲート」または「HTTP リクエストの起動」アクションについてはオプション)アクションに対するパラメータを定義するには、**「パラメータの定義」**をクリックして**「パラメータの定義」**リストを表示します。

6. 必要に応じてパラメータを定義します:

   - パラメータを追加するには、**「パラメータの追加」**ボタンをクリックします。新規パラメータ行が**「パラメータの定義」**リストに追加されます。**「パラメータの追加」**ボタンは一部のアクション・タイプでは使用できません。

   - (サーバー・スクリプトの起動アクションのみ)エージェント条件のベースとなっている配信コンテンツまたは分析結果をスクリプトに渡すには、**「ドキュメント・パラメータの追加」**ボタンをクリックします。新規ドキュメント・パラメータ行が**「パラメータの定義」**リストに追加されます。

   - 各パラメータの列値を指定します:

     – 新規パラメータを作成する場合、**「名前」**列にパラメータの名前を入力します。アクション内で一意の名前を使用します。

       この列が使用可能でないアクション・タイプもあります。

     – ユーザーにパラメータ値を指定させる場合、**「プロンプト」**列に、ユーザーに表示するプロンプトを入力します。

     – パラメータ値を指定する場合、**「値」**列に値を入力するか、値を選択します。ユーザーに値を指定させる場合、このフィールドはそのままにします。

     – **「固定」**列で、ユーザーが表示できるが、パラメータを設定できないかどうかを指定します。この列が使用可能でないアクション・タイプもあります。

     – **「非表示」**列で、パラメータを非表示にするかどうかを指定します。この列が使用可能でないアクション・タイプもあります。

     – **「オプション」**列で、アクションの実行前にパラメータに値が必要かどうかを指定します。

7. (オプション)アクションの実行時にユーザーに表示される情報をカスタマイズします:

   a. **「オプション」**をクリックして「アクションのオプション」ダイアログを表示します。

   b. カスタマイズを指定します。

   c. **「OK」**をクリックします。

   この機能は、ユーザーに情報を表示するのに適したアクションにのみ使用できます。

8. **「OK」**をクリックします。

   名前付きアクションを作成する場合、アクションを保存するための情報を指定するダイアログが表示されます。

分析へのアクションの追加

1 つ以上のアクションを分析の列見出し、列値または階層レベル値に追加できます。

アクションを列見出し、列値または階層レベル値に追加する場合、アクション・リンクを使用してアクションを追加します。

1 つ以上のアクション・リンクを含む分析が、ピボット表、表、マップ、グラフ、トレリスまたはゲージでユーザーに表示される場合、ユーザーはリンクをクリックして関連付けられているアクションを実行できます。アクション・リンクとアクション・リンク・メニューとはを参照してください

1. 1 つ以上のアクションの追加先の分析を編集します。
2. 1 つ以上のアクションの追加先の列または階層レベルの**「オプション」**ボタンの上にマウス・ポインタを移動し、**「列のプロパティ」**または**「階層レベル・プロパティ」**を選択します。

   「列のプロパティ」ダイアログには「分析」エディタの「結果」タブからもアクセスできます。関連するビューを選択して**「ビューの編集」**ボタンをクリックします。「レイアウト」ペインで適切な列を見つけ、**「詳細オプション」**ボタンをクリックして、それから**「列のプロパティ」**を選択します。
3. 「列のプロパティ」ダイアログで、「列のプロパティ」ダイアログの**「相互作用」**タブをクリックします。
4. **「列見出し」**領域(1 つ以上のアクションを列見出しに追加する場合)または**「値」**領域(1 つ以上のアクションを列値または階層レベル値に追加する場合)の**「プライマリ相互作用」**ボックスで、**「アクション・リンク」**を選択して**「アクション・リンク」**領域を表示します。
5. **「アクション・リンクの追加」**ボタンをクリックします。
6. 「新しいアクション・リンク」ダイアログの**「リンク・テキスト」**フィールドに、関連付けられているアクションを実行するリンクとして表示されるテキストを入力します。
7. アクション(インライン・アクション)を作成するには、**「新規アクションの作成」**ボタンをクリックし、新規アクションの設定を指定します。詳細は、新規アクションの設定の指定を参照してください。
8. 既存のアクション(名前付きアクション)を追加するには:

   a. **「既存のアクションの選択」**ボタンをクリックします。

   b. 「アクションの選択」ダイアログを完成させます。

   c. アクションに関連付けられているパラメータがある場合、表示される「パラメータ・マッピングの編集」ダイアログに入力します。
9. アクション・リンクを値に追加する場合、「新規アクション・リンク」ダイアログの**「リンクの表示」**コンポーネントで、次のいずれかのオプションを選択します:

   - **常時** - アクション・リンクが常に有効であることを指定します。
   - **条件付き** - アクション・リンクが特定の条件下で有効になることを指定します。このオプションを選択すると、**「条件」**領域が表示されます。

     アクション・リンクを列見出しに追加する場合、**「条件付き」**オプションは使用できません。

10. **「条件付き」**を選択した場合、アクション・リンクを有効にするのに使用する 1 つ以上の条件を追加します。追加する条件ごとに:

    a. **「新規条件」**ボタンをクリックして、使用する列を選択します。

    b. 「新規条件」ダイアログを完成させます。

11. 「新規アクション・リンク」ダイアログで**「OK」**をクリックし、アクション・リンクを「相互作用」タブの「アクション・リンク」領域に追加します。

12. 追加するアクション・リンクごとに、ステップ 5 から 12 を繰り返します。

13. 実行時に使用可能なアクション・リンクが 1 つのみの場合に、選択用のメニューに表示するのではなく、アクション・リンクをただちに実行するよう指定するには、**「実行時に使用可能なアクション・リンクが 1 つのみの場合はポップアップに表示しない」**を選択します。

14. 分析に合計または総計が含まれていて、関連する属性列またはメジャー列にアクション・リンクや条件付きアクション・リンクが含まれており、そのアクション・リンク(または条件付きアクション・リンク)をその列と、合計または総計の両方に適用する場合は、**「合計に対して有効化」**チェック・ボックスを選択します。これは列見出しアクション・リンクには適用されず、デフォルトではこの動作はオフになっています。

15. **「OK」**をクリックして「列のプロパティ」ダイアログを閉じます。

16. 「分析」エディタの**「分析の保存」**ボタンをクリックし、分析を保存します。

ダッシュボード・ページへのアクションの追加について

ダッシュボード・ページを強化するには、アクションを追加します。

次の 2 つの方法のいずれかで、アクションをダッシュボード・ページに追加できます:

- ダッシュボード・ページのセクションに、アクションの追加先のアクション・リンク・オブジェクトを追加する。

  1 つ以上のアクション・リンクが含まれるダッシュボード・ページがユーザーに表示される場合、ユーザーはリンクをクリックして、関連付けられているアクションを実行できます。

- ダッシュボード・ページのセクションに、アクション・リンクの追加先のアクション・リンク・メニュー・オブジェクトを追加する。

  アクション・リンク・メニューが含まれるダッシュボード・ページがユーザーに表示される場合、ユーザーはアクション・リンク・メニューからリンクを選択して、関連付けられているアクションを実行できます。

アクション・リンクとアクション・リンク・メニューとはを参照してください

アクション・リンクを使用したダッシュボード・ページへのアクションの追加

アクション・リンクを使用してアクションをダッシュボード・ページに追加し、ダッシュボード・ページを対話型にすることができます。

1. アクションの追加先のダッシュボード・ページを編集します。

2. 「ダッシュボード・オブジェクト」ペインからダッシュボード・ページに「アクション・リンク」オブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップします。

3. 「アクション・リンク」オブジェクトの**「プロパティ」**ボタンをクリックし、「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログを表示します。
4. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログを完成させます。「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログの完了を参照してください。
5. ダッシュボード・ビルダーの**「保存」**ボタンをクリックして、ダッシュボード・ページを保存します。

「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログの完了

アクション・リンクまたはアクション・リンク・メニューを使用して、アクションをダッシュボード・ページに追加する際、「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログを完成させて、アクション・リンクを作成します。

「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログでは、書式および機能を設定できます。

1. アクション(インライン・アクション)を作成する場合、**「新規アクション」**ボタンをクリックし、新規アクションの設定を指定します。
2. 既存のアクション(名前付きアクション)を追加するには:
   a. **「既存のアクションの選択」**ボタンをクリックします。
   b. 「開く」ダイアログを完成させます。
   c. アクションに関連付けられているパラメータがある場合、表示される「パラメータ・マッピングの編集」ダイアログに入力します。
3. **「リンク・テキスト」**ボックスに、関連付けられているアクションを実行するリンクとして表示されるテキストを入力します。

   既存アクションの追加やアクションの作成を行う前に**「リンク・テキスト」**ボックスに入力した情報は、アクション・リンクの名前で上書きされます。
4. アクション・リンク・メニューに表示されないアクション・リンクを作成する場合、**「キャプション」**ボックスに、リンク・テキストの上に表示されるキャプションを入力します。
5. (URL または他の BI コンテンツに移動するアクション・リンクの場合)「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログの**「リンクを新規ウィンドウで開く」**ボックスを使用して、リンクを新規ブラウザ・ウィンドウまたはタブで開くかどうかを指定します。
6. (BI コンテンツにナビゲート・アクションの場合のみ)**「ブリーフィング・ブックへの追加」**ボックスを使用して、アクション・リンクに関連付けられているアクションをブリーフィング・ブックで実行できるようにするかどうかを指定しますが、たどるブリーフィング・ブック・ナビゲーション・リンクの数が 0 より多い場合のみが対象になります。
7. **「リンクの表示」**コンポーネントで、次のいずれかのオプションを選択します:
   - **常時** - アクション・リンクが常に有効であることを指定します。
   - **条件付き** - 関連付けられている条件を満たす場合にのみ、アクション・リンクが有効になることを指定します。
8. **「条件付き」**を選択した場合、次のように条件を指定します:
   a. 条件を作成するには、**「新規条件」**ボタンをクリックし、「新規条件」ダイアログを表示してダイアログを完成させます。

b. 既存の条件を選択するには、**「条件の選択」**をクリックし、「条件の選択」ダイアログを表示してダイアログを完成させます。

9. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログで**「OK」**をクリックします。

アクション・リンク・メニューを使用したダッシュボード・ページへのアクションの追加

アクションを追加してダッシュボード・ページをインタラクティブにできます。

アクション・リンク・メニューを使用して、1 つ以上のアクションをダッシュボード・ページに追加できます。

1. 1 つ以上のアクションの追加先のダッシュボード・ページを編集します。
2. 「ダッシュボード・オブジェクト」ペインからダッシュボード・ページに「アクション・リンク・メニュー」オブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップします。
3. アクション・リンク・メニュー・オブジェクトの**「プロパティ」**ボタンをクリックし、「アクション・リンク・メニューのプロパティ」ダイアログを表示します。
4. **「メニュー・ラベル」**ボックスに、メニューに表示する名前を入力します。
5. **「キャプション」**ボックスに、アクション・リンク・メニュー・テキストの上に表示されるキャプションを入力します。
6. 次のようにしてアクション・リンクをメニューに追加します:
   - ページにすでにあるアクション・リンクを追加するには、既存のアクション・リンク・オブジェクトをアクション・リンク・メニュー・オブジェクトにドラッグ・アンド・ドロップします。
   - 新規アクション・リンクを追加するには、**「追加」**ボタンをクリックし、「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログを表示してダイアログを完成させます。

   ノート: アクション・リンク・メニュー・オブジェクトからアクション・リンク・オブジェクトをドラッグして、スタンドアロン・アクション・リンクを作成することもできます。

   ---
7. 「アクション・リンク・メニューのプロパティ」ダイアログで**「OK」**をクリックします。
8. ダッシュボード・ビルダーの**「保存」**ボタンをクリックして、ダッシュボード・ページを保存します。

エージェントへのアクションの追加

1 つ以上のアクションをエージェントに追加できます。

関連するコンテンツへ移動する既存のアクション(BI コンテンツにナビゲートなど)や既存のブラウザ・スクリプトの起動アクションは、エージェントに追加できません。

1. アクションの追加先のエージェントを編集します。
2. エージェント・エディタの**「アクション」**タブをクリックします。
3. 次のとおり、アクションを**「エージェント条件が True または条件が存在しない」**領域に追加するか、**「エージェント条件が False」**領域に追加するかを決めます:

- エージェントに関連付けられている条件がない場合、またはエージェントに関連付けられている条件があり、条件が true と評価される場合にのみアクションを実行する場合、**「エージェント条件が True または条件が存在しない」**領域を使用します。
- エージェントに関連付けられている条件があり、条件が false と評価される場合にのみアクションを実行する場合、**「エージェント条件が False」**領域を使用します。

4. アクション(インライン・アクション)を作成するには、**「新規アクションの追加」**ボタンをクリックし、新規アクションの設定を指定します。
5. 既存のアクション(名前付きアクション)を追加するには、**「既存のアクションの追加」**ボタンをクリックし、「既存のアクションの選択」ダイアログにすべて入力します。

   アクションに関連付けられているパラメータがある場合、「既存のアクションの追加」ダイアログが表示されます。
6. (サーバー・スクリプトの起動アクション、エージェントの起動アクションまたはパラメータの 1 つが結果セット・マッピングのアクションには使用できません)エージェントの条件を指定し、条件によって返される行ごとにアクションを実行する場合、**「行ごとの起動」**オプションを選択します。
7. 「エージェント」エディタで**「このエージェントの保存」**ボタンをクリックしてエージェントを保存します。

KPI へのアクションの追加

1 つ以上のアクションを KPI に追加できます。アクションを KPI に追加する場合、アクション・リンクを使用してアクションを追加します。

1 つ以上のアクション・リンクを含む KPI が、エンド・ユーザーに表示される(通常、スコアカードまたは KPI ウォッチリスト)場合、ユーザーはリンクをクリックして関連付けられているアクションを実行できます。

1. 1 つ以上のアクションの追加先の KPI を編集します。
2. KPI エディタの**状態**ページをクリックします。
3. **「このステータスのアクション・リンクを定義します。」**ボタンをクリックして、「アクション・リンク」ダイアログを表示します。
4. 追加されているアクションを KPI の別の範囲に追加するには、**「アクション・リンクの追加」**ボタンをクリックし、アクションを選択します。
5. 新規アクションを追加するには:
   - 1 つ以上のアクションが KPI の別の範囲に追加されている場合、**「アクション・リンクの追加」**ボタンをクリックし、**「新規アクション・リンク」**を選択します。
   - KPI の別の範囲にアクションが追加されていない場合、**「アクション・リンクの追加」**ボタンをクリックします。
6. 「新規アクション・リンク」ダイアログの**「リンク・テキスト」**フィールドに、関連付けられているアクションを実行するリンクとして表示されるテキストを入力します。
7. アクション(インライン・アクション)を作成するには、**「新規アクションの作成」**ボタンをクリックし、新規アクションの設定を指定します。

8. 既存のアクション(名前付きアクション)を追加するには:
   a. **「既存のアクションの選択」**ボタンをクリックします。
   b. 「開く」ダイアログを完成させます。
   c. アクションに関連付けられているパラメータがある場合、「パラメータ・マッピングの編集」ダイアログを完成させます(表示された場合)。
9. 「新規アクション・リンク」ダイアログで**「OK」**をクリックします。
10. 追加するアクション・リンクごとに、ステップ 5 から 9 を繰り返します。
11. **「OK」**をクリックして「アクション・リンク」ダイアログを閉じます。
12. 「KPI」エディタの**「KPI に名前を付けて保存」**ボタンをクリックし、KPI を保存します。

スコアカードのイニシアチブおよび目標へのアクションの追加

1 つ以上のアクションをスコアカードのイニシアチブまたは目標に追加できます。

アクションをイニシアチブまたは目標に追加する場合、アクション・リンクを使用します。

1. イニシアチブまたは目標を含むスコアカードを編集します。
2. 次のようにして、アクションの追加先のイニシアチブまたは目標に移動します:
   - アクションをイニシアチブに追加する場合、「イニシアチブ」ペインでイニシアチブをダブルクリックします。
   - アクションを目標に追加する場合、「戦略」ペインで目標をダブルクリックします。
3. 「分析」ペインの「アクション・リンク」領域で、**「新規行」**ボタンをクリックします。
4. 「アクション・リンク」ダイアログの**「状況」**ボックスで、アクション・リンクを有効にする際のイニシアチブまたは目標の状態を選択します。
5. アクション(インライン・アクション)を作成するには、**「新規アクションの作成」**ボタンをクリックし、新規アクションの設定を指定します。
6. 既存のアクション(名前付きアクション)を追加するには:
   a. **「既存のアクションの選択」**ボタンをクリックします。
   b. 「開く」ダイアログで**「OK」**をクリックします。
7. **「リンク・テキスト」**フィールドに、関連付けられているアクションを実行するリンクとして表示されるテキストを入力します。
8. 「アクション・リンク」ダイアログで**「OK」**をクリックして、アクション・リンクを追加します。
9. 目標またはイニシアチブを保存します。

既存の名前付きアクションに基づいた新規アクションの作成

既存の名前付きアクションに基づいてアクションを作成できます。

たとえば、組織に、「メッセージの送信」という電子メール・メッセージを送信する既存の名前付きアクションがあるとします。パラメータは、受信者、件名、メッセージおよび優先度です。この「メッセージの送信」アクションに基づいて、優先度の高いメッセージを送信するアクションを作成できます。これを行うには、優先度パラメータに大きい値を指定し、「高優先度メッセージの送信」などの新しい名前で新規アクションを保存します。

1. 新規アクションのベースとする既存の名前付きアクションを編集します。
2. 「アクションの編集」ダイアログで、必要な変更を指定します。
3. **「名前を付けて保存」**をクリックし、ダイアログで保存基準を指定します。

名前付きアクションの編集

名前付きアクションは編集できます。

名前付きアクションを編集すると、名前付きアクションを最新状態に保つことができます。

1. カタログ内のアクションに移動します。
2. **「編集」**リンクをクリックします。
3. 「アクションの編集」ダイアログで、アクションを編集して、**「OK」**をクリックします。
4. **「アクションの保存」**をクリックします。

分析に追加されたアクションまたはアクション・リンクの編集

分析の列見出し、列値または階層レベル値の 1 つ以上のアクションまたはアクション・リンクを編集できます。

分析のアクションまたはアクション・リンクを変更すると、アクションまたはアクション・リンクが使用されているすべての場所に変更が表示されます。

1. アクションおよびアクション・リンクが追加されている分析を編集します。
2. アクションが追加されている列または階層レベルの**「オプション」**メニューの上にマウス・ポインタを移動し、**「列のプロパティ」**または**「階層レベル・プロパティ」**を選択します。

   「列のプロパティ」ダイアログには「分析」エディタの「結果」タブからもアクセスできます。関連するビューを選択して**「ビューの編集」**ボタンをクリックします。「レイアウト」ペインで適切な列を見つけ、**「詳細オプション」**ボタンをクリックして、それから**「列のプロパティ」**を選択します。
3. 「列のプロパティ」ダイアログで、**「相互作用」**タブをクリックします。
4. 「アクション・リンク」領域で、編集するアクションを選択し、**「アクション・リンクの編集」**ボタンをクリックして「アクション・リンクの編集」ダイアログを表示します。
5. アクション・リンクに適切な変更を加えます。
6. **「詳細」**ボタンをクリックし、**「アクションの編集」**を選択します。
7. 「アクションの編集」ダイアログで、アクションを編集して、**「OK」**をクリックします。
8. 「アクション・リンクの編集」ダイアログで、**「OK」**をクリックします。

9. 「列のプロパティ」ダイアログで、**「OK」**をクリックします。

10. **「分析の保存」**をクリックします。

ダッシュボード・ページに追加されたアクション、アクション・リンクおよびアクション・リンク・メニューの編集

ダッシュボード・ページのアクション、アクション・リンクまたはアクション・リンク・メニューについて、エラーを訂正したり更新を加えることができます。

アクション、アクション・リンクまたはアクション・リンク・メニューを編集して、ダッシュボード・ページを最新状態に保ちます。

1. ダッシュボード・ページを編集します。
2. アクションおよびアクション・リンクがアクション・リンク・メニューに関連付けられている場合:
   a. アクション・リンク・メニュー・オブジェクトの**「プロパティ」**ボタンをクリックします。
   b. 「アクション・リンク・メニューのプロパティ」ダイアログで、メニュー・ラベルおよびキャプションに適切な変更を加えます。
   c. 「アクション・リンク」領域で、編集するアクションを選択し、**「編集」**ボタンをクリックします。
3. アクションおよびアクション・リンクがスタンドアロンの場合、アクションが関連付けられているアクション・リンク・オブジェクトの**「プロパティ」**ボタンをクリックします。
4. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログで、アクション・リンクに適切な変更を加えます。
5. **「詳細」**ボタンをクリックし、**「アクションの編集」**を選択します。
6. 「アクションの編集」ダイアログで、アクションを編集して、**「OK」**をクリックします。
7. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログおよび「アクション・リンク・メニューのプロパティ」ダイアログ(表示された場合)で**「OK」**をクリックします。
8. **「保存」**をクリックしてダッシュボードを保存します。

エージェントに追加されたアクションの編集

エージェントに追加されているアクションを編集できます。

アクションがインライン・アクションの場合、アクション全体を編集できます。アクションが名前付きアクションの場合、パラメータ値のみを編集できます。

1. エージェントを開きます。
2. エージェント・エディタの**「アクション」**タブをクリックします。
3. アクションを選択し、**「パラメータの編集」**ボタンをクリックします。
4. 「アクションの編集」ダイアログで、アクションを編集して、**「OK」**をクリックします。

KPI に追加されたアクションまたはアクション・リンクの編集

KPI に追加されているアクションまたはアクション・リンクを変更できます。

アクションおよびアクション・リンクを編集すると、情報を最新に保てます。

1. アクションおよびアクション・リンクが追加されている KPI を編集します。
2. KPI エディタの**状態**ページをクリックします。
3. **「このステータスのアクション・リンクを定義します。」**ボタンをクリックして、「アクション・リンク」ダイアログを表示します。
4. 「アクション・リンク」領域で、編集するアクションを選択し、**「アクション・リンクの編集」**ボタンをクリックして「アクション・リンクの編集」ダイアログを表示します。
5. アクション・リンクに適切な変更を加えます。
6. **「詳細」**ボタンをクリックし、**「アクションの編集」**を選択します。
7. 「アクションの編集」ダイアログで、アクションを編集して、**「OK」**をクリックします。
8. 「アクション・リンクの編集」ダイアログで**「OK」**をクリックします。
9. 「アクション・リンク」ダイアログで**「OK」**をクリックします。
10. **「KPI に名前を付けて保存」**をクリックします。

スコアカードのイニシアチブおよび目標に追加されたアクションおよびアクション・リンクの編集

イニシアチブおよび目標のアクションおよびアクション・リンクを編集することにより、それを常に最新および関連のあるものに保つことができます。

アクションおよびアクション・リンクの編集は簡単なプロセスです。

1. イニシアチブまたは目標を含むスコアカードを編集します。
2. 次のようにして、イニシアチブまたは目標に移動します:
   - イニシアチブの場合、「イニシアチブ」ペインでイニシアチブをダブルクリックします。
   - 目標の場合、「戦略」ペインで目標をダブルクリックします。
3. 「分析」ペインの「アクション・リンク」領域で、**「行の編集」**ボタンをクリックします。
4. 「アクション・リンク」ダイアログで、必要な変更を加えて**「OK」**をクリックします。
5. 目標またはイニシアチブを保存します。

分析内のインライン・アクションのカタログへの保存

複数の分析で使用できるよう、カタログにインライン・アクションを保存できます。

カタログに保存する分析内のインライン・アクションを選択できます。たとえば、ブランド売上分析で、インライン・アクションをカタログに保存できます。アクションをカタログに保存するとき、販売業績ダッシュボードの他の分析やダッシュボード・ページにそのアクションを含めることができます。

分析内のインライン・アクションを保存するには:

1. アクションが追加されている分析を編集します。
2. アクションが追加されている列または階層レベルの**「オプション」**メニューの上にマウス・ポインタを移動し、**「列のプロパティ」**または**「階層レベル・プロパティ」**を選択します。

   「列のプロパティ」ダイアログには「分析」エディタの「結果」タブからもアクセスできます。関連するビューを選択して**「ビューの編集」**ボタンをクリックします。「レイアウト」ペインで適切な列を見つけ、**「詳細オプション」**ボタンをクリックして、それから**「列のプロパティ」**を選択します。
3. 「列のプロパティ」ダイアログで、**「相互作用」**タブをクリックします。
4. 「アクション・リンク」領域で、保存するアクションを選択し、**「アクション・リンクの編集」**ボタンをクリックします。
5. 「アクション・リンクの編集」ダイアログで**「詳細」**ボタンをクリックし、**「アクションに名前を付けて保存」**を選択して、保存基準を指定する「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。
6. 保存基準を指定して**「OK」**をクリックします。

   現在のアクションへの参照を保存済アクションで置き換える場合、**「現在のアクションを保存済アクションへの参照に置き換えます。」**ボックスを選択します。
7. 「アクション・リンクの編集」ダイアログで**「OK」**をクリックします。
8. 「列のプロパティ」ダイアログで**「OK」**をクリックします。

ダッシュボード内のインライン・アクションのカタログへの保存

ダッシュボード内のインライン・アクションをカタログに保存するように選択できます。

たとえば、販売業績ダッシュボードで、インライン・アクションをカタログに保存できます。アクションをカタログに保存するとき、ダッシュボードに含まれていないブランド売上分析にそのアクションを含めることができます。

1. ダッシュボード・ページを編集します。
2. アクションおよびアクション・リンクがアクション・リンク・メニューに関連付けられている場合:
   a. アクション・リンク・メニュー・オブジェクトの**「プロパティ」**をクリックします。
   b. 「プロパティ」ダイアログで、メニュー・ラベルおよびキャプションに適切な変更を加えます。
   c. 「アクション・リンク」領域で、編集するアクションを選択し、**「編集」**をクリックします。
3. アクションおよびアクション・リンクがスタンドアロンの場合、アクションが関連付けられているアクション・リンク・オブジェクトの**「プロパティ」**ボタンをクリックします。
4. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログで、**「追加」**ボタンをクリックして**「アクションに名前を付けて保存」**を選択します。「名前を付けて保存」ダイアログが表示されます。
5. 「名前を付けて保存」ダイアログで、アクションを編集して**「OK」**をクリックします。

6. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログおよび「アクション・リンク・メニューのプロパティ」ダイアログ(表示された場合)で**「OK」**をクリックします。

7. **「保存」**をクリックしてダッシュボードを保存します。

8. **「詳細」**ボタンをクリックし、**「アクションに名前を付けて保存」**を選択します。

9. 保存基準を指定して**「OK」**をクリックします。

   ヒント: 現在のアクションへの参照を保存済アクションで置き換える場合、**「現在のアクションを保存済アクションへの参照に置き換えます。」**ボックスを選択します。

10. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログおよび「アクション・リンク・メニューのプロパティ」ダイアログ(表示された場合)で**「OK」**をクリックします。

11. **「保存」**をクリックしてダッシュボードを保存します。

名前付きアクションの実行によるテスト

名前付きアクションの作成後、アクションが適切に実行されるかどうかをテストして確認できます。

たとえば、「Navigate to Brand Revenue」アクションをテストできます。アクションをテストし、ユーザーに対して期待どおりの値がプロンプト表示されることを確認します。また、「Brand Revenue」ダッシュボード・ページにナビゲートされ、適切なデータが表示されることもテストして確認します。

1. カタログ内の名前付きアクションに移動します。

2. **「実行」**リンクをクリックします。

3. 詳細のリクエストまたは確認プロンプトが表示されたら、応答します。

   正常起動メッセージは、アクション自体が正常に実行されたことのみを示しています。そのアクションが表すプロセスや操作が正常に実行されたことを示すものではありません。

12

KPI と KPI ウォッチリストの使用

この章では、キー・パフォーマンス・インディケータ(KPI)および KPI ウォッチリストを Oracle Business Intelligence Enterprise Edition で使用する方法を説明します。また、KPI の評価、ディメンション、固定されたディメンション値およびターゲット設定についても説明します。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- KPI とは
- KPI の評価方法
- KPI の使用方法
- ディメンションおよび固定されたディメンション値とは
- KPI の権限と許可について
- KPI の作成方法
- KPI の作成
- KPI の編集
- ターゲット設定とは
- KPI からの分析の生成
- KPI からのエージェントの作成
- KPI のビジネス所有者への連絡
- KPI のステータスのオーバーライドについて
- KPI へのコメントの追加について
- KPI ウォッチリストとは
- KPI ウォッチリストの作成
- KPI ウォッチリストの編集

KPI とは

キー・パフォーマンス・インジケータつまり KPI は、モニタリング、改善および評価が必要な、より大きい組織の戦略へとつながる特定のビジネスのゴールや目標を定義および追跡する計量法です。

KPI には、通常時間とともに変わる計量可能な値や、スコアとパフォーマンス・ステータスを決定するためのターゲット、詳細な分析を可能にするディメンションがあり、トレンド用およびパフォーマンス・パターンの特定のために経時的な比較を行えます。

次のリストで、Oracle BI EE での KPI の特定の使用法について確認してください。

- ターゲットに対するメトリックを評価し、ターゲットが達成されていない場合にエージェントを使用して適切なユーザーにアラートを送信します。
- KPI から分析を作成し、その分析をダッシュボードに追加します。KPI から作成される分析では、ユーザーは、KPI のディメンションに基づいて、様々な詳細レベルにドリルできます。

  たとえば、製品の売上という KPI に、地域と会計時間のディメンションを追加し、地域ごと、および会計四半期などの期間ごとの製品の売上値を表示できます。この追加によって、データの多次元のサブセットを収集し、ディメンション・メトリックの異なるターゲット値に対して、KPI で測る目標とイニシアチブのパフォーマンスを評価できます。
- Oracle Scorecard and Strategy Management では、KPI を使用して、戦略を形成する目標と、目標の達成に必要なイニシアチブ(タスクまたはプロジェクト)のパフォーマンスを評価したり、モニターします。スコアカードを参照してください。

  たとえば、顧客満足度調査の平均スコアと再注文の KPI を使用して、顧客満足度の改善という目標のパフォーマンスを測ります。

KPI の評価方法

KPI のステータスとスコアは、実際の値と定義されたしきい値との比較によって決まります。

KPI のパフォーマンス・ステータスは、各範囲に割り当てられたステータス・アイコンで示されます。

たとえば、製品の売上 KPI(値が大きい方が望ましい)の場合、表に示す範囲を定義します。しきい値は、範囲の区切りとなる数値です。

評価範囲ルール	しきい値	名前	ステータス・アイコン
125 を超える(125 < x)値は、パフォーマンスが申し分ないことを表します	126 以上	優	青の四角
100 から 125 まで(100 < x <= 125)の値は、パフォーマンスがよいことを表します	125	良	緑の四角
80 から 100 まで(80 < x <= 100)の値は、パフォーマンスがまずまずであることを表します	100	可	黄色の四角
50 から 80 まで(50 < x < = 80)の値は、パフォーマンスが悪いという警告を表します	80	警告	明るい赤色の四角
50 より小さい(x <= 50)値は、パフォーマンスがクリティカルなことを表します	50 以下	クリティカル	濃い赤色の四角

KPI の使用方法

KPI は KPI エディタを使用して作成され、KPI エディタはスタンドアロンのエディタとしても、スコアカード・エディタ内からもアクセスできます。

KPI を作成して保存すると、これらの KPI を次のように使用できます。

- スコアカードの基礎的要素 - KPI を作成して割り当て、組織の戦略の進捗とパフォーマンスを測ることができます。スコアカード内に、進捗とパフォーマンスを測るために KPI に割り当てる*目標*(運用コストの削減などのゴール)および*イニシアチブ*(コスト最小化チームの結成などのプロセスまたはタスク)を定義できます。目標とはおよびイニシアチブとはを参照してください。

- 分析として: 分析を KPI から生成できます。この場合、Oracle BI EE は分析をカタログに保存します。分析をダッシュボードに含めたり、関連ドキュメントとしてスコアカード、KPI ウォッチリストまたは KPI に含めることができます。分析として出力する前に KPI に固定したディメンション値は、分析に含められます。固定では、1 つ以上の値をディメンションに割り当てることで、ユーザーに表示されるデータを制限またはフィルタ処理します。分析でドリルダウンを使用できます。ユーザーが分析を開くたびに、Oracle BI EE で分析のデータがリフレッシュされます。

- KPI ウォッチリストに含める - KPI のグループを含むウォッチリストや、固定のディメンション値を使用して 1 つの KPI を複数回表示するウォッチリストを作成できます。ウォッチリストは、保存後、カタログ・オブジェクトとして使用でき、ダッシュボードやスコアカードに追加できます。ユーザーはウォッチリストにアクセスし、ウォッチリストに含まれている KPI のディメンション値を変更できます。スコアカードには、「イニシアチブと KPI」ウォッチリスト、「目標と KPI」ウォッチリスト、ブレークダウン・ウォッチリストなど、他のタイプのウォッチリストを含めることができます。ウォッチリストの理解を参照してください。

- ユーザーの対話の促進 - KPI が、KPI ウォッチリストに追加された場合、またはスコアカード内の目標やイニシアチブに追加された場合、KPI にコメントを追加したり、他のユーザーのコメントを読んだり、返信することができます。質問やコメントを使用して KPI のビジネス所有者に連絡し、KPI について尋ねることもできます。また、ビジネス所有者は、KPI のステータスをオーバーライドできます。

- アクションの開始 - KPI 内でクリックされると関連付けられているアクションを実行するアクション・リンクを追加できます。たとえば、内部支出の KPI のパフォーマンスが非常に高く、支出が過度なことを示している場合、クリックされると適切な従業員に電子メールを送信するアクション・リンクを作成できます。

- エージェントのトリガー: KPI の値、パフォーマンス・レベルおよびステータスを使用して、エージェント・アラートを開始する条件をトリガーできます。たとえば、内部コスト KPI の値が特定の金額を超えたときに通知するエージェントを定義できます。

ディメンションおよび固定されたディメンション値とは

ディメンションはデータの分類で、分類には、ビジネス・アナリストのデータの分析方法が反映されます。

アナリストが、ある単位で、あるいはあるものと比較して数値を表示する場合、データのディメンションを指定します。一般的なディメンションは、地理、製品、顧客および時間です。

KPI の場合、サブジェクト領域から属性列をディメンションとして選択できます。KPI を設計する際、1 つ以上のディメンションに 1 つ以上のデータ値を固定する(`Region` = *Central* など)か、KPI のウォッチリストまたはスコアカードへの追加時やウォッチリストまたはスコアカードのダッシュボードへの追加時に、すべてまたは一部のディメンション値を固定するよう指定できます。設計者によって値が固定されると、ユーザーは値を変更できません。

あらかじめ固定された値を持たない KPI をウォッチリストに追加する場合、設計者は 1 つ以上の値を固定したり、セッション変数、リポジトリ変数またはグローバル変数を指定してディメンション値を設定できます。設計者がディメンションに値または変数

を固定しない場合、KPI のユーザーは実行時に、KPI ウォッチリストまたは KPI を含むスコアカードの視点領域、ダッシュボードの変数プロンプトまたはダッシュボードの列プロンプトから 1 つ以上の値を選択できます。

- KPI ウォッチリストまたは KPI を含むスコアカード・オブジェクトがプロンプト付きでダッシュボードに追加され、KPI 定義の特定のプロンプトのディメンションで KPI にディメンションが設定されていない場合は、そのプロンプトが無視されます。さらに、KPI がその定義の特定のディメンション値に固定されている場合は、そのディメンションのプロンプトが無視されます。KPI ウォッチリストまたは KPI を含むスコアカード・オブジェクトをプロンプトを含むダッシュボードに追加する際には、ダッシュボードまたはダッシュボード・ページへのダッシュボード・プロンプトの追加および「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログを参照してください。
- ディメンションを含む KPI が分析に出力される場合、ディメンションは列およびドリルとして表示されます。ディメンション値が固定されている場合、分析は、固定された値によって決定されるデータに限定されます。ディメンションに複数の値が固定されている場合、固定された値ごとに行が表示されます。

KPI には複数のディメンションを定義しますが、KPI 定義自体の中でディメンションを固定しないでください。これによって、ユーザーは KPI を再利用して、スコアカードの戦略ツリー、ウォッチリストまたはダッシュボード・プロンプト内に固定できます。たとえば、ディメンションを固定する非常に特殊な KPI (北米の地域など)を作成する場合、その KPI の使用は制限される可能性があります。ディメンションを固定しないでおいた場合は、ユーザーが固定する領域を決定します。この KPI の使用を使用すると柔軟性と再利用性が向上するため、非常に特殊な KPI の作成および管理が不要になります。

KPI の権限と許可について

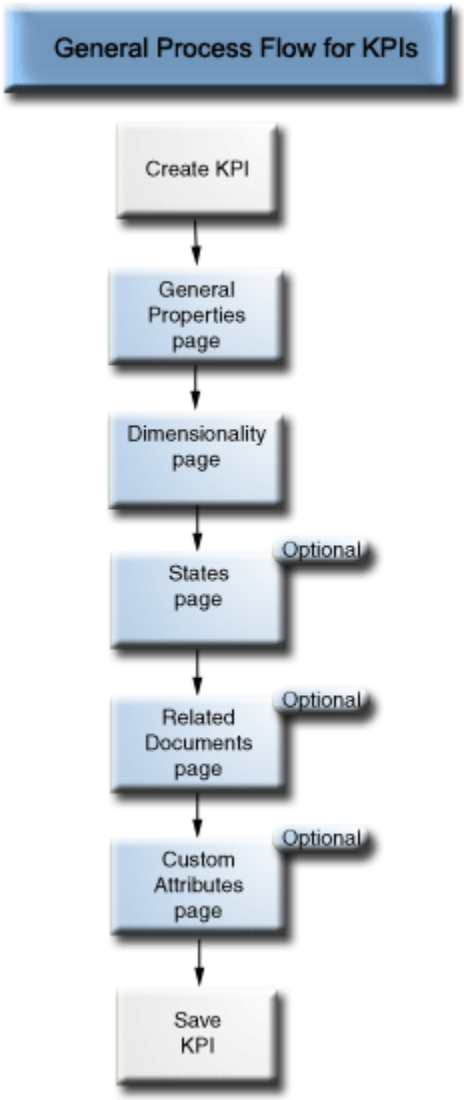
KPI および KPI ウォッチリストの作成時に特定のタスクを実行できるかどうかは、権限によって制御されています。

スコアカードの権限と許可についてを参照してください。

KPI の作成方法

コンテンツ設計者が KPI の作成に使用できるいくつかのページがあります。

これらのページを図に示します。KPI の作成を参照してください。



KPI エディタのディメンション・ページおよび一般プロパティ・ページにすべて入力する必要があります。

ページ間をナビゲートするには、「**次**」および「**戻る**」ボタンを選択するか、ナビゲーション・トレインに従ってページ名をクリックします。次の図に、ナビゲーション・トレインを示します。

KPI の作成

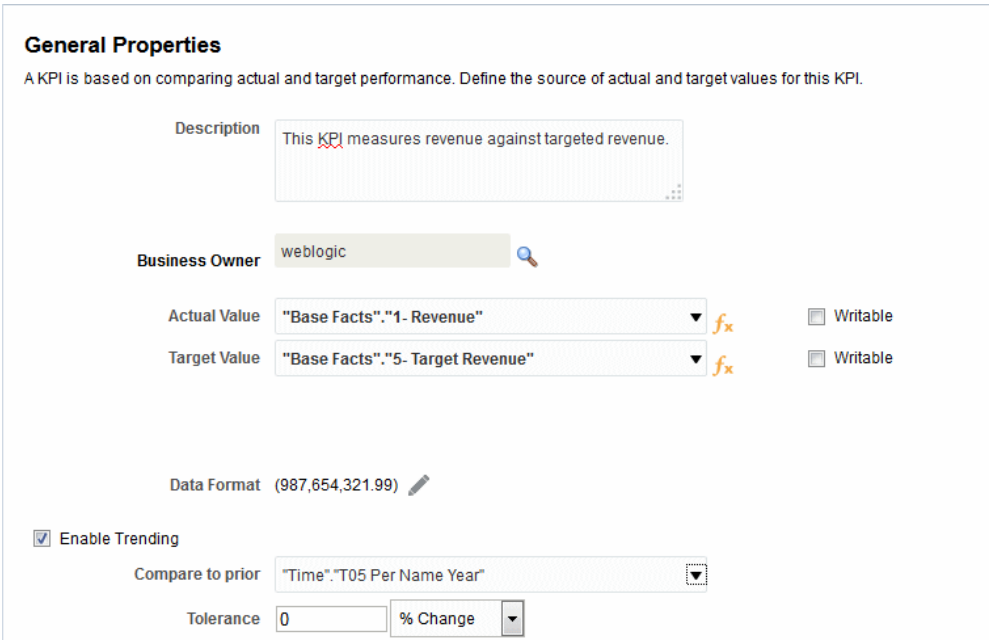
KPI は、グローバル・ヘッダー、ホーム・ページ、またはスコアカードから作成できます。

KPI を作成するには、次の手順に従います。KPI の編集を参照してください。

1. KPI を作成するには、次のいずれかを実行します。

- グローバル・ヘッダーで、**「新規」**をクリックし、**「KPI」**を選択します。「サブジェクト領域の選択」ダイアログから、KPI のサブジェクト領域を選択します。「KPI」エディタが表示されます。
- スコアカードから「スコアカードのドキュメント」ペインに移動し、**「オブジェクトの作成」**ボタンをクリックします。または「カタログ」ペインで、**「新規オブジェクト」**ボタンをクリックします。**「KPI」**を選択し、「サブジェクト領域の選択」ダイアログから KPI のサブジェクト領域を選択します。「KPI」エディタが表示されます。

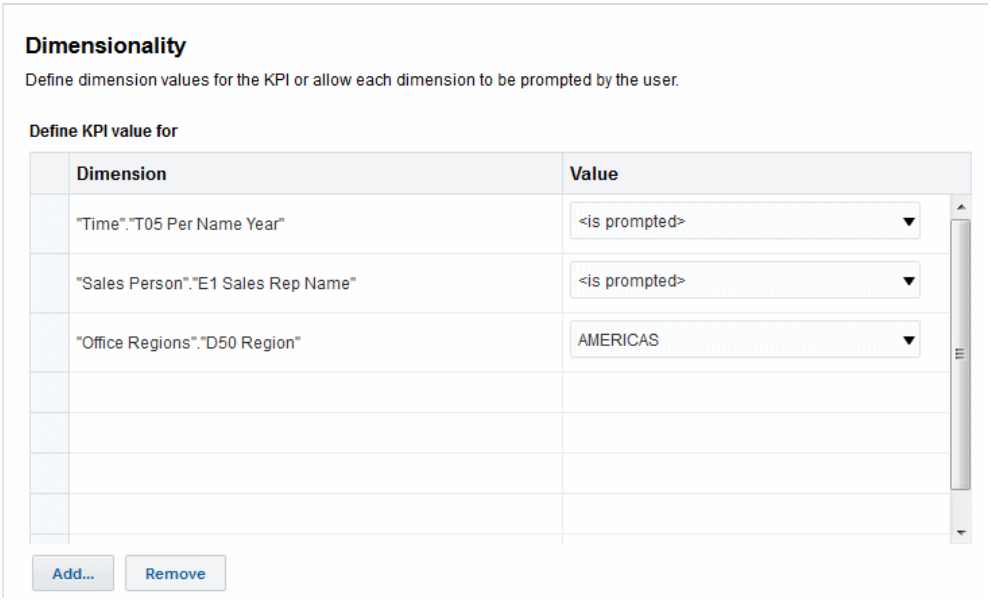
2. 「KPI」エディタの一般プロパティ・ページで、ビジネス所有者、実際の値およびターゲット値を指定し、値を書込み可能にするかどうかを指定して、データ書式を定義し、パフォーマンス・パターンを特定するためにトレンドを有効にするかどうかを指定します。トレンドを使用すると、スコアカードに履歴トレンド・チャートが自動的に表示されるため、トレンドを有効にすることをお薦めします。図に、Revenue KPI の一般プロパティ・ページの例を示します。



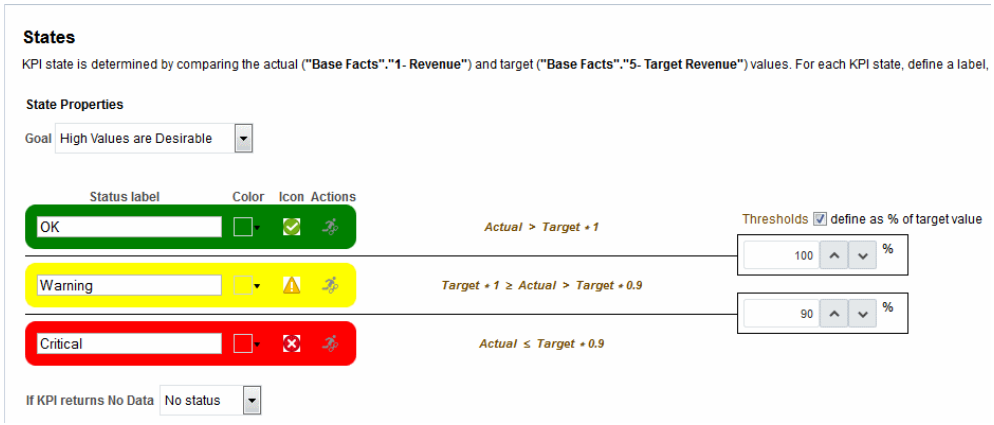
トレンドを有効にする場合、時間ディメンションも「KPI」エディタのディメンション・ページに含める必要があります。時間ディメンションが**「前のものと比較」**オプションから選択されている場合、同じ時間ディメンションをディメンション・ページに追加する必要があります。時間階層レベルが**「前のものと比較」**オプションから選択されている場合、その階層レベルが属する階層をディメンション・ページに追加する必要があります。

スコアカードで KPI を使用する場合、ビジネス所有者を割り当てる必要があります。ビジネス所有者を割り当てずに KPI ステータスをオーバーライドすることはできません。ステータスのオーバーライドの操作を参照してください。

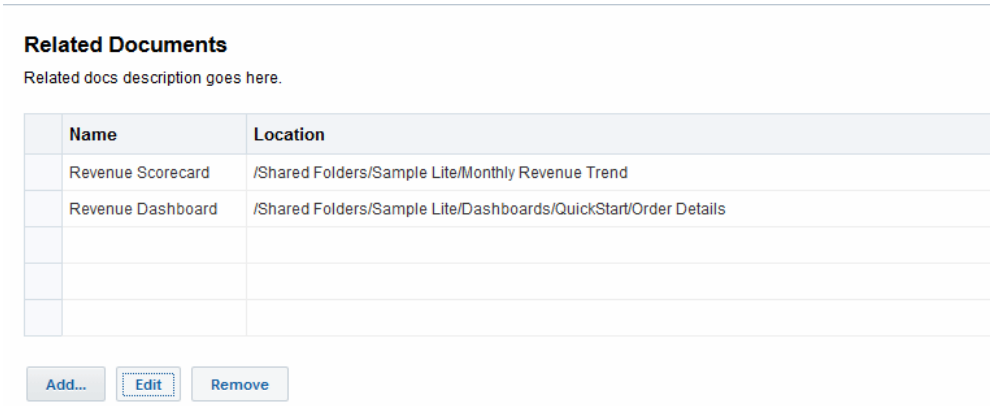
3. ディメンション・ページで、KPI の実際の値とターゲット値の集計に使用するディメンション(地域ごとの売上や会計四半期ごとの売上など)を選択し、ディメンションを固定するかどうかを決定します。大抵の KPI には時間ディメンションを含める必要があります。例外は、保有在庫や電話サポートの現在の待ち時間などの現在のスナップショットとして定義される定数やメトリックなどです。図に、ディメンション・ページの例を示します。この例では、**"Cust Regions"."D50 Region"**ディメンションが AMERICAS に固定されています。



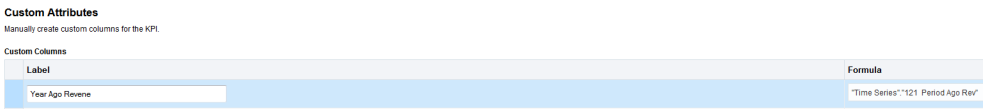
4. 状態ページで、KPI 値に基づいた望ましい目標(値が高い方が望ましい、など)を指定し、パフォーマンス・ステータスおよびスコアを判断するために KPI 値を評価する範囲を定義して、パフォーマンス・レベルとアクションを関連付け、KPI にデータが返されなかった場合の処理方法を指定して、しきい値をターゲット値のパーセントとして関連付けます。図に、状態ページの例を示します。



5. 関連ドキュメント・ページで、外部リンクまたはビジネス・インテリジェンス・オブジェクトを KPI に追加します。図に、「KPI」エディタの関連ドキュメント・ページの例を示します。



6. カスタム属性ページで、カスタム列を 5 つまで含めます。各カスタム列は数値に評価される必要があります。実績、ターゲット、差分および変更式とは異なる関連の計算を表示したい場合に、カスタム列を使用すると便利です。たとえば、一致する期間の売上 KPI の横に表示される前年売上のカスタム列を追加できます。図に、カスタム属性ページの例を示します。



7. KPI を保存します。

   - スタンドアロン KPI を作成する場合、**「終了」**をクリックして KPI を保存します。
   - 新規 KPI を作成する場合、KPI の名前を指定し、KPI を保存する「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。KPI をスコアカードの「スコアカードのドキュメント」ペイン内に表示する場合、カタログ内のスコアカード・オブジェクトのフォルダに KPI を保存します。
   - スコアカードから KPI を作成する場合、「スコアカード」エディタで**「保存」**をクリックします。

KPI の編集

KPI を編集する方法は複数あります。

保存済 KPI をオープンおよび編集する手順は、次のとおりです。KPI はカタログに格納されていますが、KPI ウォッチリスト、スコアカードおよびダッシュボードに追加できます。KPI を編集して保存すると、KPI の表示箇所に変更が伝播されます。

カタログからの KPI の編集

次の手順を使用して、カタログから KPI を編集します。

カタログを使用して KPI にアクセスして編集できます。

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。
2. カタログ・ページで、編集する KPI にナビゲートして、オブジェクトの**「編集」**リンクをクリックします。
3. KPI エディタで、必要な変更を行います。

4. KPI を保存します。

KPI ウォッチリストからの KPI の編集

次の手順を使用して、KPI ウォッチリストから KPI を編集します。

KPI ウォッチリストから 1 つの KPI にアクセスして KPI を編集できます。

1. KPI ウォッチリストで、オープンする KPI を右クリックします。
2. **「KPI 定義を開く」**を選択します。
3. KPI エディタで、必要な変更を行います。
4. KPI を保存します。

ターゲット設定とは

ターゲット設定では、適切な権限とセキュリティ設定を備えたユーザーが KPI の実際の値やターゲット値を変更できます。

一度変更すると、値はリポジトリに送信されて格納されます。次に、Oracle BI EE では、これらの変更された値を使用して、集計値の再計算、キャッシュのリフレッシュ、および KPI ウォッチリストまたは KPI の追加先スコアカードのリフレッシュが実行されます。ターゲット設定は、現在、Essbase データ・ソースにのみ使用できます。スコアカードの権限と許可についてを参照してください。

KPI のターゲット設定を設定するための前提条件

KPI でターゲット設定を使用するために実行する必要がある複数のステップがあります。

コンテンツ設計者がターゲット設定を備えた KPI を作成するには、管理者が、次の前提条件タスクを実行しておく必要があります:

- **■ターゲット設定用のリポジトリの構成｜ Configure the repository for target settings□** - Oracle BI EE のリポジトリ管理者は、Oracle BI リポジトリの≪物理｜ Physical ｜ Bifndn≫、≪ビジネス・モデルとマッピング｜ Business Model and Mapping ｜ Bifndn≫および≪プレゼンテーション｜ Presentation ｜ Bifndn≫の各レイヤーに Oracle Essbase データ・ソースをマップして、ターゲット設定機能を有効にする必要があります。管理者は、論理列に対して**「≪書込み可能｜ Writeable ｜ Bifndn≫」**オプションを選択した後、対応するプレゼンテーション列に対して**「≪読取り/書込み｜ Read/Write ｜ Bifndn≫」**権限を有効にして、ターゲット設定が有効になっているリポジトリの列に対してライトバックを有効にする必要があります。詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*の列でのライトバックの有効化を参照してください。
- **計算スクリプトの作成** - Oracle BI EE のリポジトリ管理者は、Oracle Essbase を使用して、データ・ソースの計算スクリプトを作成します。計算スクリプトを作成すると、Oracle BI EE の KPI エディタの一般プロパティ・ページにある**「更新後ビジネス・ルール」**リストに計算スクリプトが表示されるようになります。設計時には、コンテンツ設計者が計算スクリプトを選択します。実行時には、指定した計算スクリプトが Oracle BI EE で使用されて、KPI の実際の値とターゲット値をユーザーが変更して保存した後にデータが再計算されます。

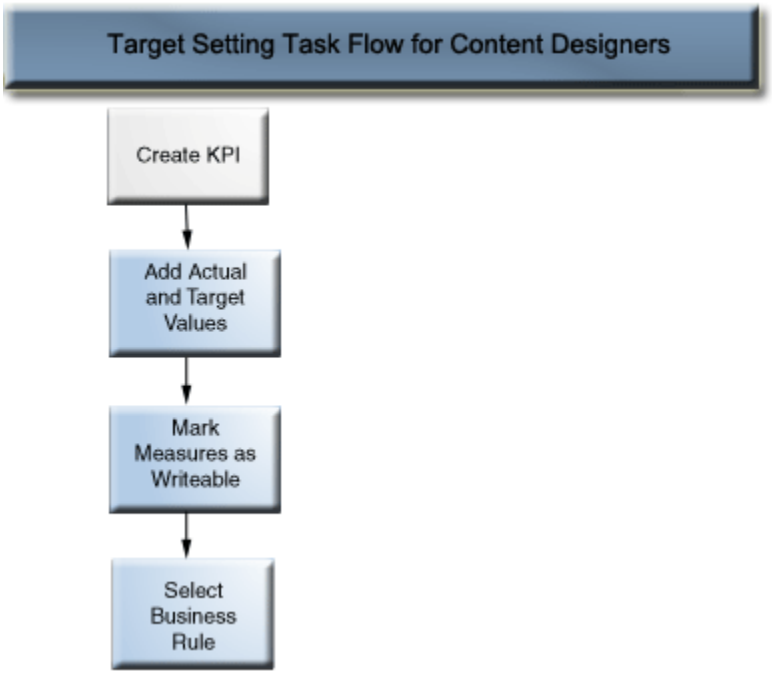
  詳細は、*Oracle Essbase データベース管理者ガイド*のブロック・ストレージ・データベースの計算スクリプトの開発を参照してください。

- **■ユーザー権限の割当 | Assign user privileges□** - ユーザーによる KPI の実際の値およびターゲット値の変更を許可するには、Oracle BI EE システム管理者がユーザー固有の権限を割り当てる必要があります。プレゼンテーション・サービス権限の詳細は、スコアカードの権限と許可についてを参照してください。

KPI のターゲット設定の設定に関する概要

ユーザーが実行時に更新できる実際の値とターゲット値が指定された KPI を作成するために、コンテンツ設計者が実行する必要がある手順がいくつかあります。

図に、プロセスで必要な各ステップを示します。ターゲット設定タスク・フローのステップの説明および KPI の作成を参照してください。



ターゲット設定タスク・フローのステップの説明

次のリストで、KPI のターゲット設定を設定するために実行する必要がある各ステップを説明します。

- KPI に対する実際の値とターゲット値の追加 - 「KPI」エディタの一般プロパティ・ページで、**「実際の値」**および**「ターゲット値」**フィールドを使用して、KPI のステータスとスコアを決定するために使用する値を指定します。現在は、Essbase データ・ソースごとに 1 つの KPI のみを作成できます。

- 実際の値とターゲット値をユーザーが更新できるようにメジャーを書込み可能としてマーク - 「KPI」エディタの一般プロパティ・ページで、**「書込み可能」**チェック・ボックスを使用して、どの値をユーザーが変更できるようにするかを指定します。1 つまたは両方の値を書込み可能として選択できます。

- ビジネス・ルールの選択 - KPI エディタの一般プロパティ・ページで、**「更新後ビジネス・ルール」**リストを使用して、計算スクリプトを指定します。計算スクリプトが Oracle BI EE で使用されて、ユーザーが値を変更した後にデータが再計算されます。リポジトリ管理者は Oracle Essbase を使用して、設計時に表示されるデータ・ソースおよび計算スクリプトを作成します。KPI のターゲット設定を設定するための前提条件を参照してください。

ターゲット設定とのユーザー相互作用

コンテンツ設計者は、ターゲット設定が有効な KPI を、KPI ウォッチリスト、目的およびイニシアチブなどのウォッチリストに含めることができます。

ウォッチリストの理解を参照してください。

正しい権限が付与されているユーザーは、書込み可能な実際の値やターゲット値を実行時に変更および保存できます。ユーザーが値を入力および保存すると、Oracle BI EE では、リポジトリへの値の送信、集計値の再計算、およびウォッチリストのリフレッシュが実行されます。スコアカードの権限と許可についてを参照してください。

KPI からの分析の生成

KPI を使用して、KPI ウォッチリスト、スコアカードまたはスコアカード図に基づいて分析を生成できます。

次の手順を使用して、分析を KPI から生成します。分析は、組織のデータに対する問合せで、ビジネスに関する質問(特定の飲料の地域の年間売上はいくらかなど)の解答を得ることができます。分析の作成を参照してください。

分析は、KPI ウォッチリスト、スコアカードまたはダッシュボード内のスコアカード図ビューに含まれた KPI から生成できます。分析を生成すると、カタログの Drills フォルダ(`/My Folders/Drills`)に格納されます。`My Folders/Drills` フォルダは一時的な格納用に使用されるため、セッションの終了後、分析が残っていない可能性があります。分析を保持するには、別のディレクトリにコピーします。たとえば、共有ダッシュボードで使用する分析を保持するには、`/Shared Folders` のフォルダにコピーします。

分析の生成後、分析はダッシュボードに配置したり、分析としてカタログから開いたり、関連ドキュメントとしてスコアカード、KPI ウォッチリストまたは KPI にアタッチできます。ユーザーが分析を開くたびに、データはリフレッシュされます。

KPI ディメンションに複数の値が固定されている場合は、各値が個別の行として分析に表示されます。

ウォッチリストの KPI から分析を生成するには:

1. KPI ウォッチリストを含むカタログ、スコアカードまたはダッシュボードから KPI ウォッチリストを特定し、開きます。
2. **「パフォーマンス」**タブに移動し、「KPI ウォッチリスト」表内で、分析に出力する KPI を含む列を選択します。
3. **「オブジェクト」**をクリックし、**「分析」**を選択します。新規ブラウザ・タブが開いて分析が表示され、Oracle BI EE によって、分析がカタログの Drills フォルダ(`/My Folders/Drills`)に保存されます。

スコアカードの KPI から分析を出力するには:

1. スコアカードの戦略ツリー、イニシアチブ・ツリー、「スコアカードのドキュメント」ペインまたは「カタログ」ペインを展開し、KPI を選択します。
2. KPI を右クリックし、**「分析」**を選択します。新規ブラウザ・タブが開いて分析が表示され、Oracle BI EE によって、分析がカタログに保存されます。

KPI からのエージェントの作成

「エージェントの作成」オプションを使用することで、KPI からエージェントを作成できます。

このオプションは、カタログ・ページの**「詳細」**リスト、および「スコアカード」エディタの「カタログ」ペインの**「新規オブジェクト」**リストにあります。この方法でエージェントを作成する場合の Oracle BI EE の処理は次のとおりです:

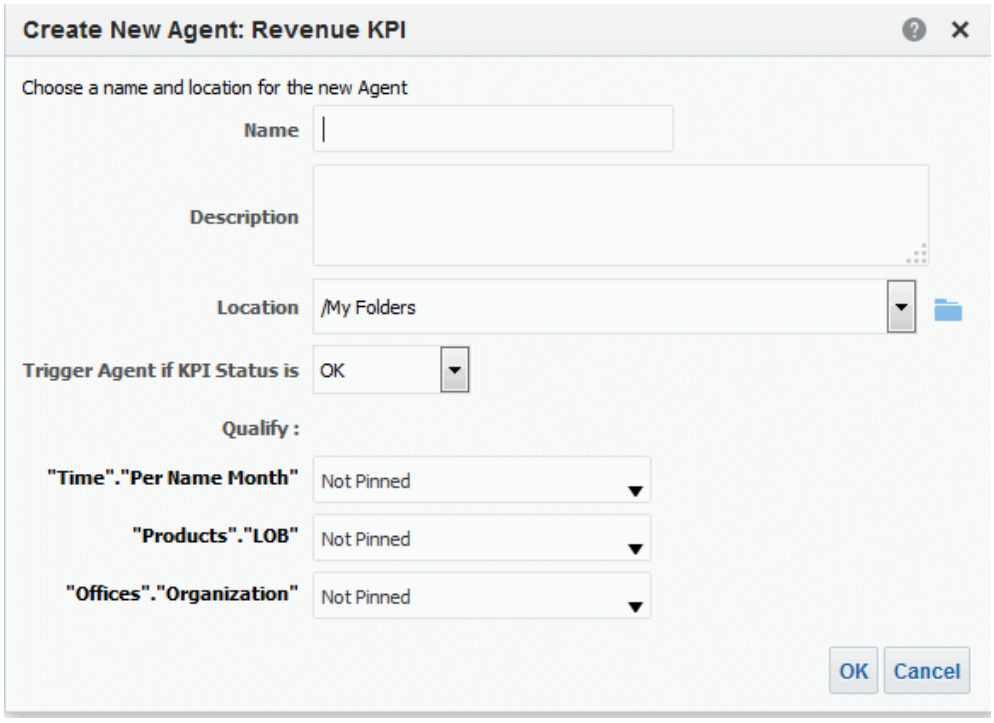
- KPI ディメンション、指定したディメンション値、およびステータスを使用して、KPI に基づいた条件を作成し、その条件を「エージェント」エディタの「条件」タブに追加します。
- KPI を分析として出力し、分析をカタログに保存して、分析を「エージェント」エディタの「配信コンテンツ」タブに添付します。

パフォーマンス、継続的フィードバックおよびリアルタイム・アラートをモニターするには、KPI およびスコアカードのエージェントを使用します。日常的な決定を企業戦略に沿ったものにして、普通ではない結果に対してアラートをトリガするには、アクションを使用します。

コンテンツの配信を参照してください。

1. 次のいずれかの方法を使用して、エージェントの作成元の KPI を特定します。
   - カタログ・ページから KPI を参照して特定します。「カタログ」領域で、KPI の**「詳細」**リストをクリックし、**「エージェントの作成」**を選択します。
   - スコアカードの任意の場所(「戦略」ペイン、「イニシアチブ」ペイン、「スコアカードのドキュメント」ペイン、「カタログ」ペインまたは「スコアカード」エディタ内の任意のタブ)から KPI を選択して右クリックし、**「エージェントの作成」**を選択します。

   次に示すような、「新規エージェントの作成」ダイアログが表示されます。



2. **「名前」**フィールドに、エージェントの名前を入力します。

   「エージェント」エディタが表示され、「新規エージェントの作成」ダイアログで指定した情報が「エージェント」エディタの「条件」タブと「配信コンテンツ」タブにデフォルト設定されます。

3. (オプション)**「説明」**フィールドに説明を指定します。
4. 新規エージェントの保存先の場所を選択します。
5. **「KPI ステータスが次の場合にエージェントをトリガー」**リストから、エージェントを開始してエージェントのコンテンツを配信し、アクションを実行するステータスを選択します。
6. (オプション)ディメンションの値を選択します。エージェントには、複数の値がある KPI ディメンションを設定できません。
7. **「OK」**をクリックします。
8. エージェントを完成させ、保存します。

KPI のビジネス所有者への連絡

KPI のビジネス所有者にメッセージを送信できます。

ビジネス所有者は、KPI の管理の責任を負うユーザーです。KPI の作成または変更時、コンテンツ設計者は Oracle BI EE ユーザー・リストからビジネス所有者を選択します。

Oracle BI EE では、ビジネス所有者が「マイ・アカウント」ダイアログの「配信オプション」タブで指定した配信デバイスとプロファイルを使用して、メッセージの配信先(電子メール、電話、ページャなど)を決定します。

KPI ウォッチリストから KPI のビジネス所有者に連絡するには:

1. カタログから KPI ウォッチリストを特定して開くか、KPI ウォッチリストを含むダッシュボードを開くか、KPI ウォッチリストを含むスコアカードを開きます。
2. **「パフォーマンス」**タブに移動し、「KPI ウォッチリスト」表内で、連絡相手が所有する KPI を含む行を選択します。
3. **「オブジェクト」**をクリックし、**「所有者への連絡」**を選択します。「所有者への連絡」ダイアログが表示されます。
4. **「件名」**フィールドに、意味のある件名を入力します。
5. **「優先度」**リストから、このメッセージを送信する優先度を選択します。
6. **「メッセージ」**フィールドに、KPI の所有者へのメッセージを入力します。
7. **「送信」**をクリックします。

スコアカードから KPI のビジネス所有者に連絡するには:

1. スコアカードの戦略ツリー、イニシアチブ・ツリーまたはスコアカードのドキュメント・フォルダを展開し、KPI を選択します。
2. KPI を右クリックし、**「所有者への連絡」**を選択します。「所有者への連絡」ダイアログが表示されます。
3. **「件名」**フィールドに、意味のある件名を入力します。
4. **「優先度」**リストから、このメッセージを送信する優先度を選択します。
5. **「メッセージ」**フィールドに、KPI の所有者へのメッセージを入力します。
6. **「送信」**をクリックします。

KPI のステータスのオーバーライドについて

KPI のステータスは、ビジネス所有者のみがオーバーライドできます。

ビジネス所有者は、KPI の管理の責任を負うユーザーです。KPI の作成または変更時、コンテンツ設計者は Oracle BI EE ユーザー・リストからビジネス所有者を選択します。

ビジネス所有者は、KPI の値が古い場合や使用できない場合、あるいは KPI の計量対象のステータスを正確に反映していない場合に、ステータスをオーバーライドできます。KPI のステータスは、ビジネス所有者がオーバーライド・ステータスを削除するまで、オーバーライドされたままになります。たとえば、店舗の売上を測る KPI を含むスコアカードがあるケースで、火事によって店舗が焼かれ、営業できなくなった場合、ビジネス所有者は KPI のステータスをオーバーライドして、スコアカードがアンバランスにならないようにします。ビジネス所有者は、店舗の営業が再開されるまで、このオーバーライドを続けます。

ステータスのオーバーライドの操作を参照してください。

KPI へのコメントの追加について

KPI へのコメントの追加は、利害関係者が対象項目について話し合う手段となります。

KPI の利害関係者は、KPI の列にコメントを追加できます。利害関係者は、他のユーザーが入力したコメントをレビューしたり、これに応答することもできます。KPI のコメントにアクセスすると、時系列に累積されたコメントのリストが表示されます。

コメントの操作を参照してください。

KPI ウォッチリストとは

KPI ウォッチリストは、カタログに格納されている KPI を追加して作成した KPI の集まりです。

KPI ウォッチリストを作成して保存すると、カタログ・オブジェクトとして格納され、ダッシュボードやスコアカードに追加できます。ユーザーはカタログから KPI を直接表示できないため、KPI ウォッチリストは、KPI を分析に出力したり、KPI をスコアカードに含めたりすることと並ぶ、KPI をユーザーに配布する方法の 1 つです。

KPI ウォッチリストでは、次の KPI パフォーマンス情報が提供されます。

- KPI を識別するラベル
- 現行のステータス
- パフォーマンスが向上しているか、低下している、同じかを示したり、変更を加えた方がよいかどうかを示すトレンド・ステータス
- 実際の値とターゲット値。これらの値は、コンテンツ設計者が書込み可能に設定できます。ターゲット設定とはを参照してください
- 現在の値がターゲットとどれだけ異なるかの差異の値とパーセント
- 現在の値がその前の期間とどれだけ異なるかを示す変化の値とパーセント

KPI ウォッチリストは、特定の使用法および特定のユーザーに対する正式または非正式なリストを簡単に作成できたり、ユーザーに適切な権限がある場合、情報に関する特定のニーズを満たす独自の KPI ウォッチリストを作成できるため、便利です。たとえば、KPI ウォッチリスト設計者が、特定のスコアカードの戦略とイニシアチブをサポートする KPI を含む KPI ウォッチリストを作成します。あるいは、ユーザーが、個々の目標をモニターする KPI ウォッチリストを作成します。たとえば、営業担当者が、

特定の地域内の四半期の売上合計をモニターする KPI を含む KPI ウォッチリストを作成できます。スコアカードの権限と許可についてを参照してください。

KPI ウォッチリスト設計者は、KPI を追加するたびに異なるディメンション値を固定して、1 つの KPI を KPI ウォッチリストに複数回追加し、ユーザーが、ディメンションを指定して KPI を再ロードしなくても、簡単に全体像を把握できるようにすることができます。

KPI ウォッチリストによって、ユーザーは、ウォッチリストから KPI を選択して分析に出力したり、KPI のビジネス所有者に連絡する機能を得ることもできます。

KPI ウォッチリストの作成

KPI ウォッチリストの作成により、ユーザーが 1 つ以上の KPI を追跡および更新するための場所を作成できます。

KPI ウォッチリストを作成するには、次の手順に従います。KPI ウォッチリストの編集を参照してください。

1. KPI ウォッチリストを作成するには、次のいずれかを行います:

   - ホーム・ページのグローバル・ヘッダーで、**「新規」**をクリックして**「KPI ウォッチリスト」**を選択します。「KPI ウォッチリスト」エディタが表示されます。
   - スコアカードから「スコアカードのドキュメント」ペインに移動し、**「オブジェクトの作成」**ツールバー・ボタンをクリックして**「KPI ウォッチリスト」**を選択します。「KPI ウォッチリスト」エディタが表示されます。

2. グローバル・ヘッダーから KPI ウォッチリストを作成する場合、「カタログ」ペインから KPI を選択し、ウォッチリスト表にドラッグします。

   「スコアカード」エディタ内で KPI ウォッチリストを作成する場合、「スコアカード」エディタ内の任意のペインから KPI を選択し、ウォッチリスト表にドラッグします。「KPI の追加」ダイアログが表示されます。

3. KPI のラベルを入力し、KPI がディメンションを含む場合は、必要に応じて値をディメンションに固定します。**「OK」**をクリックします。

4. ウォッチリストに含まれた KPI を編集する場合、KPI のウォッチリスト・エントリを編集する場合、KPI をウォッチリストから削除する場合、KPI を分析する場合、KPI 定義を開く場合、または KPI の所有者に連絡する場合、KPI を表から選択し、**「オブジェクト」**をクリックしてオプションを選択します。

5. ウォッチリスト表に列を追加したり、表から列を削除するには、**「表示」**をクリックして**「他の列も表示」**を選択します。「他の列も表示」ダイアログが表示されます。

6. 「KPI ウォッチリスト」エディタの**「詳細」**タブをクリックして、ウォッチリストの説明を入力したり、ビジネス所有者を特定したり、関連するビジネス・インテリジェンス・オブジェクトへのリンクや外部リンクを追加します。

7. **「保存」**をクリックします。

   新規 KPI ウォッチリストを作成する場合は、「名前を付けて保存」ダイアログが表示されます。ここで、KPI ウォッチリストの名前を指定し、ウォッチリストを保存します。

   ウォッチリストをスコアカードの「スコアカードのドキュメント」ペイン内に表示する場合は、カタログ内のスコアカード・オブジェクトのフォルダにウォッチリストを保存します。

KPI ウォッチリストの編集

KPI ウォッチリストを編集するには、次の手順に従います。

KPI ウォッチリストを編集すると、KPI 情報を最新かつユーザーに関連するものにできます。

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。
2. カタログ・ページで、編集する KPI ウォッチリストにナビゲートして、オブジェクトの**「編集」**リンクをクリックします。
3. KPI ウォッチリスト・エディタで、必要な変更を行います。
4. KPI ウォッチリストを保存します。

13

スコアカード

この章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の Oracle Scorecard and Strategy Management について説明します。ここでは、スコアカードについて説明し、スコアカードを使用して、ビジネス戦略を説明および通知する方法を説明します。ここでは、ビジョン・ステートメントおよびミッション・ステートメント、パースペクティブ、目標、イニシアチブ、戦略ツリー、戦略マップ、原因と結果マップ、カスタム・ビュー、ウォッチリストなど、操作するスコアカード・オブジェクトの詳細を説明します。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- Oracle Scorecard and Strategy Management とは
- バランス・スコアカードとは
- 「スコアカード」エディタとは
- スコアカード・オブジェクトとは
- スコアカードの作成方法
- スコアカードの権限と許可について
- 「スコアカード」エディタでの編集モードと表示モードの使用
- スコアカードの作成
- スコアカードのオープンと編集
- 概要情報の表示
- 視点領域について
- 視点コントロールの設定
- ビジョン・ステートメントとは
- ビジョン・ステートメントの定義
- ミッション・ステートメントとは
- ミッション・ステートメントの定義
- パースペクティブとは
- カスタム・パースペクティブの作成
- キー・パフォーマンス・インディケータ(KPI)とは

- 目標とは
- 目標の作成
- イニシアチブとは
- イニシアチブの作成
- ビジネス所有者への連絡
- コメントについて
- コメントの操作
- イニシアチブや目標のパフォーマンス・アセスメントの理解
- スコアカードに対するアセスメント・マッピングの定義
- 子の目標、イニシアチブおよび KPI への重みの割当て
- ステータスのオーバーライドについて
- ステータスのオーバーライドの操作
- 戦略ツリーとは
- 戦略ツリーの作成
- 戦略マップとは
- 戦略マップの作成
- 原因と結果マップとは
- 原因と結果マップの作成
- ウォッチリストの理解
- ウォッチリストのカスタマイズ
- KPI ウォッチリストとは
- KPI 詳細の使用
- スマート・ウォッチリストとは
- スマート・ウォッチリストの作成
- カスタム・ビューとは
- カスタム・ビューの作成
- スコアカード・オブジェクトのオープン
- スコアカード・オブジェクトの編集
- スコアカード・オブジェクトの削除
- ダッシュボードへのスコアカード・オブジェクトの追加
- トラブルシューティング

Oracle Scorecard and Strategy Management とは

Oracle Scorecard and Strategy Management は、ビジネス戦略を説明および表現するためのパフォーマンス管理ツールです。

企業の戦略や業績をトップ・ダウンまたはボトム・アップで推進したり評価できます。

また、Oracle Scorecard and Strategy Management では、従来のバランス・スコアカード・パースペクティブを使用して目標およびイニシアチブを配置するか、独自に作成して基本的なビジネス能力を反映することができます。バランス・スコアカードとはを参照してください

Oracle Scorecard and Strategy Management の用途は次のとおりです。

- 目標(運転コスト削減などの目標)とイニシアチブ(コスト最小化チーム結成などの処理やタスク)を同時に定義し、形成される戦略に KPI を割り当てることで、進行状況とパフォーマンスを測定する。詳細は次の項を参照してください。
  - 目標については、目標とはを参照してください。
  - イニシアチブについては、イニシアチブとはを参照してください。
  - KPI については、KPI と KPI ウォッチリストの使用を参照してください。
- 目標およびイニシアチブを、カスタマイズした、または従来のパースペクティブ(財務や顧客関係などの基本的なビジネス能力および分野)を使用して配置する。これにより、企業戦略によるパースペクティブの支援範囲を描画できるようになります。パースペクティブとはを参照してください
- 企業または部門レベルの目標およびイニシアチブの中で、KPI の値を評価するためのターゲット数値範囲を定義します。スコアカードに対するアセスメント・マッピングの定義を参照してください
- 戦略マップ、原因と結果マップ、カスタム・ビューおよび戦略ツリーを使用して、戦略および戦略力学を図で表現します。次を参照してください。
  - 戦略ツリーとは
  - 戦略マップとは
  - 原因と結果マップとは
  - カスタム・ビューとは
- コメントの追加、読取りおよび返信によって、目標とイニシアチブの実装およびステータスについて議論する。コメントについてを参照してください。

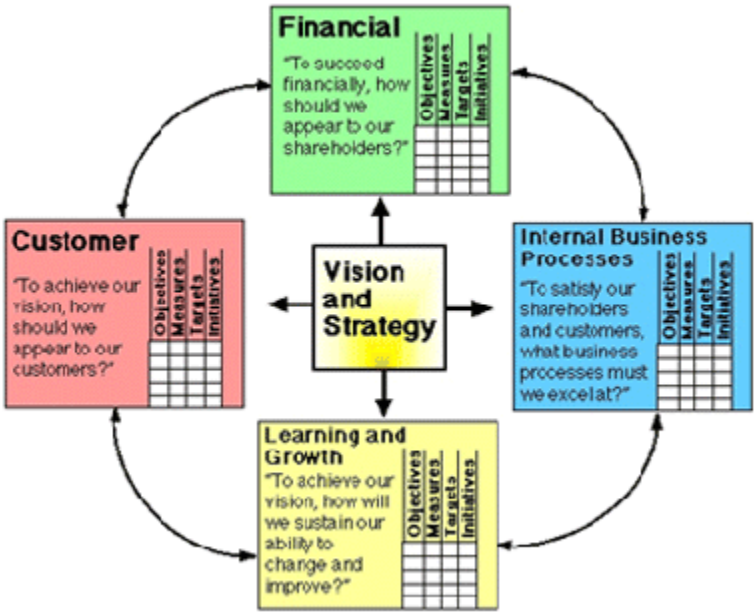
スコアカードでは、KPI を使用して進行状況およびパフォーマンスを長期にわたって測定するため、スコアカード内で使用する KPI を定義する際には、適切な時間ディメンションを含める必要があります。時間ディメンションの情報は、管理者に問い合せてください。

バランス・スコアカードとは

バランス・スコアカードを作成することで、組織の様々な側面が明らかとなります。

企業では、従来より、財務的な観点からの戦略に重きが置かれ、他の視点は十分に考慮されていません。財務上の目標は、通常、遡及的で、過去の数値に対する成長という観点から定義される傾向にあるため、将来の市場の状況やレバレッジ目標は考慮されません。バランス・スコアカードは、4 つのパースペクティブ(財務、顧客、内部ビジネス・プロセス、学習と成長)で構成される明確な目標、メジャー、ターゲットおよ

びイニシアチブに組織の戦略をマップする、戦略的な管理システムです。これらのパースペクティブには通常、「ビジョンを達成するためには、顧客にどう配慮すべきか」、「財務的に成功するためには、株主にどう配慮すべきか」などの質問が伴います。1 つの方法として、バランス・スコアカードは、複数の関連するパースペクティブを満たす戦略を定義するための言語を企業に提供します。財務諸表(損益計算書、キャッシュ・フロー計算書および貸借対照表)が組織の経営状態を示すのと同じように、バランス・スコアカードは洞察に満ちた一貫した方法で戦略を伝達するための枠組みを提供します。次の図に、これらの 4 つのパースペクティブを示します。



「スコアカードの 4 つのパースペクティブにより、短期目標と長期目標、望ましい結果とその結果のパフォーマンス・ドライバ、信頼できる客観的なメジャーとより主観的なメジャーの間のバランスを取ることが可能になる。」(Robert S.Kaplan、David P.Norton 共著『Linking the Balanced Scorecard to Strategy』、California Management Review Reprint Series (1996 年)、Regents of the University of California CMR、第 39 巻、1 号(1996 年秋))。

Oracle Scorecard and Strategy Management では、デフォルトで用意されている 4 つのパースペクティブを使用して、関係のあるすべての視点を網羅する戦略を定義し、あらゆる視点から安定と成功を保証する戦略構造を定義します。

Robert Kaplan 博士および David Norton 博士により考案されたバランス・スコアカード手法に基づく 4 つのデフォルトのパースペクティブは、次のとおりです。

- 財務 -「株主にどう配慮するか」という質問への解答に役立つ財務上の施策の特定に使用されます。
- 顧客 -「自分たちは顧客からどのように見られているか」という質問への解答に役立つ施策の特定に使用されます。
- 内部プロセス -「どのプロセスに秀でるべきか」という質問への解答に役立つ施策の特定に使用されます。
- 学習と成長 -「どのようにしたら改善と価値の創出を続けることができるか」という質問への解答に役立つ施策の特定に使用されます。

目標、主要なイニシアチブおよび KPI を業務能力に合致させるために、提供されたパースペクティブをカスタマイズするか、独自のパースペクティブを作成できます。

Kaplan および Norton の 4 つのパースペクティブは、特定の組織の戦略を表しています。これらのパースペクティブおよび戦略は、政府、公共部門または非営利組織に必ずしも適しているわけではないため、目的の戦略を獲得するために、目標および重要な質問を修正および補完する必要があります。

バランス・スコアカードを生きた文書として扱います。目標、イニシアチブなどを評価するプロセスは反復的です。プロセスでは、量的のみでなく質的にも組織の状態を洞察し、目的の結果を得られるように適切なタイミングで組織を導く必要があります。

Oracle Scorecard and Strategy Management とはを参照してください

「スコアカード」エディタとは

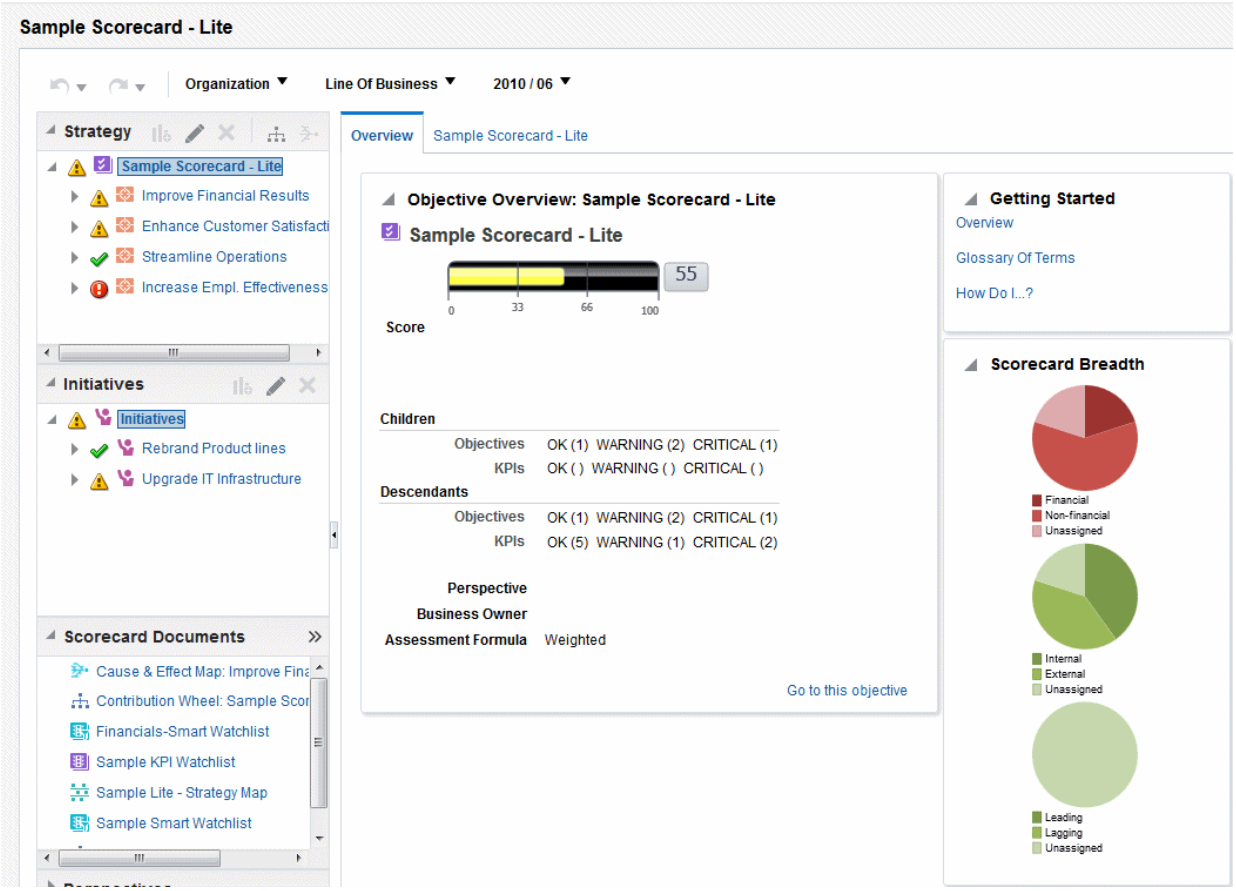
「スコアカード」エディタを使用して、組織全体のスコアカードや各部門のスコアカードを作成できます。

「スコアカード」エディタは多数のパネルおよびタブで構成されています。

- エディタの左側には、スコアカードを構成するオブジェクトの作成に使用されるペインがあります。たとえば、評価対象の企業エンティティ(部門など)の戦略構造(戦略ツリーとも呼ばれる)を構成する目標の作成、編成および強化に使用する「戦略」ペインが含まれています。
- エディタの右側には、タブ領域があります。初めてスコアカードを作成する場合、「概要」タブが表示されます。このタブには、選択したイニシアチブ、目標または KPI のサマリー情報が表示されます。

  スコアカード・オブジェクトを作成すると、各オブジェクトに対する詳細なタブが動的に生成されます。たとえば、目標を作成すると、その目標に対するタブが生成されます。このタブを使用して、目標を定義したり、目標の詳細な情報(目標の評価にどの KPI が使用されるか、どのイニシアチブによって推進されるかなど)を表示します。
- エディタの最上部にはツールバー・ボタンと視点領域があります。視点領域には、イニシアチブと目標の進捗とパフォーマンスを測定するためにスコアカードで使用される KPI のディメンションが表示されます。この領域を使用して、ディメンションの値を固定(設定)します。ディメンションを固定すると、スコアカードのデータがフィルタされ、新たな視点(データの新たなビュー)が得られます。視点領域についてを参照してください。

図に、Sample Scorecard-Lite の「スコアカード」エディタの例を示します。



スコアカード・オブジェクトとは

スコアカード・オブジェクトは様々な機能を実行できます。

スコアカードの目標は、次の目的で作成または準備する項目です。

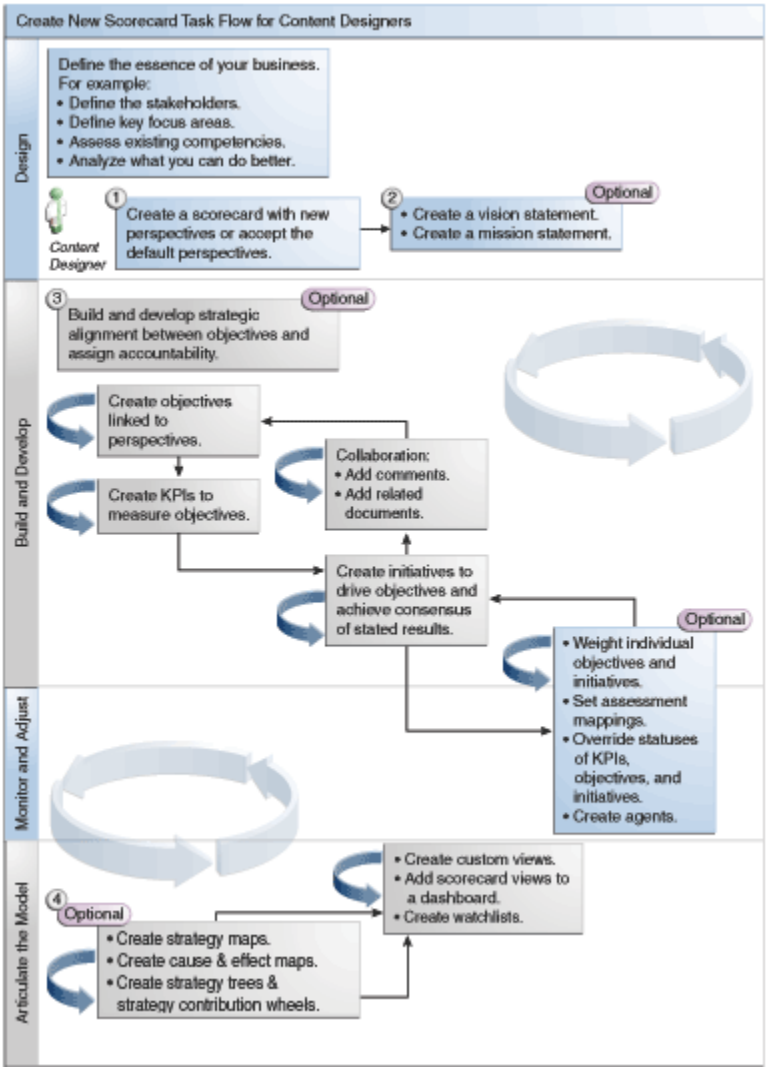
- 企業の戦略を表して評価するもので、次のものがあります。
  - 目標。目標とはを参照してください
  - イニシアチブ。イニシアチブとはを参照してください
  - パースペクティブ。パースペクティブとはを参照してください
  - KPI。キー・パフォーマンス・インディケータ(KPI)とはを参照してください
- 企業の戦略を示して分析するもので、次のものがあります。
  - ビジョン・ステートメント。ビジョン・ステートメントとはを参照してください
  - ミッション・ステートメント。ミッション・ステートメントとはを参照してください
  - 戦略ツリー。戦略ツリーとはを参照してください
  - 戦略マップ。戦略マップとはを参照してください
  - 原因と結果マップ。原因と結果マップとはを参照してください

- カスタム・ビュー。カスタム・ビューとはを参照してください
- KPI ウォッチリスト。KPI ウォッチリストとはを参照してください
- スマート・ウォッチリスト。スマート・ウォッチリストとはを参照してください
- エージェント。KPI からのエージェントの作成を参照してください

スコアカードの作成方法

Oracle Scorecard and Strategy Management には、スコアカードの作成に使用できる豊富なスコアカード・オブジェクトが用意されているため、全体的なプロセス・フローについて順を追って説明します。

プロセス・フロー内の各タスクを順番に実行することをお薦めします。図に、スコアカードを作成するための全体的なプロセス・フローを示します。



1. 企業戦略を表現、評価、表示および分析するために選択したスコアカード・オブジェクト(目標、イニシアチブ、パースペクティブなど)を含む新規スコアカードを作成します。

スコアカードを作成する際には、4 つのデフォルトのパースペクティブを使用することも、独自のパースペクティブを作成することもできます。パースペクティブは、イニシアチブおよび目標を関係付けるのに使用できる主要なビジネス能力(研究開発や財務など)を表します。

2. ビジョン・ステートメントおよびミッション・ステートメントを定義することで、企業の方向性を包括的な戦略的テーマおよび推進力に変換し、後で目標を作成してこれらを支援します。
3. 組織全体または 1 つの部門の目標(達成目標または望ましい結果)を作成して準備し、目標間の戦略的関係付けや因果関係を策定します。これには、目標の進行状況およびパフォーマンスを測定する KPI の割当ても含まれます。「戦略」ペインの最上位の目標(ルート目標)は、スコアカードの対象となる企業体(組織全体または 1 つの部門)を表します。
4. 中核的ビジネス・データ(例: 製品売上)を収集する KPI を作成し、KPI ターゲット、ターゲット範囲およびアクションを指定します。
5. KPI のモニターに使用する KPI ウォッチリストを作成します。
6. 目標の達成に必要なイニシアチブを作成し、配置します。イニシアチブに KPI を割り当てることもできます。
7. コメント(注釈)を使用して、特定のディメンション値セットの KPI、目標またはイニシアチブの値に、説明的テキストを関連付けます。
8. 目標およびイニシアチブを繰り返し練り直します。
   a. 個々の目標およびイニシアチブに加重して、スコアカードの対象となる企業体の全体的なパフォーマンスに与える影響を指定します。
   b. アセスメント・マッピングを設定します。
   c. 適切な場合は、KPI、イニシアチブおよび目標のステータスをオーバーライドします。
   d. KPI からエージェントを作成します。(エージェントを使用すると、ビジネス・プロセスを自動化できます。)
9. 戦略マップ、原因と結果マップおよび戦略ツリーを使用して、目標間の関係を描写し、モデルを明確に示します。
10. カスタム・ビューを作成して、戦略をさらに練り直し、ビジネスの本質を簡単にとらえられるようにします。
11. スマート・ウォッチリストを作成して指定する基準に基づいて、スコアカードにビューを作成します。
12. スコアカード・ビューをダッシュボードに追加します。

スコアカードの権限と許可について

KPI および KPI ウォッチリストの作成時または Oracle Scorecard and Strategy Management 内の、特定のタスクを実行する機能(スコアカードの作成や所有者への連絡など)は、権限によって制御されます。

権限は管理者によって管理されます。一般情報は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のプレゼンテーション・サービス権限の管理を参照してください。

多くのタスクでは権限の組合せが必要です。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*に、3 つの表 KPI タスクに必要な権限およびスコアカードおよびスコアカード・オブジェクト・タスクに必要な権限があります:

- タスク・オブジェクト(たとえば、アクション・リンクまたは関連ドキュメント)がリストされています。
- 自分が管理できるタスクおよび関連する権限がリストされています。
- 必要なカタログ・オブジェクトおよびフォルダに対する読取りまたは書込みの権限を、自分の ID またはグループに管理者が付与しているものと見なすことができます。

> **ノート:** これらの表は権限に対応していません。スコアカードまたはスコアカード内の要素に対する権限(つまり、スコアカードまたはスコアカード内の要素にアクセスできるユーザー)を変更するには、スコアカードに対して≪フル・コントロール | Full Control | Bifndn≫の権限が必要です。Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトの管理を参照してください。

次のことを行う必要があります。

- KPI タスクに必要な権限および *Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のスコアカードおよびスコアカード・オブジェクト・タスクに必要な権限を参照して、タスクを実行するために十分な権限があることを確認し、必要に応じて、追加権限の付与について管理者に問い合せてください。
- カタログ・ブラウザを使用して、スコアカード、KPI ウォッチリストまたは KPI オブジェクトを削除するには、Oracle BI プレゼンテーション・サービス・レイヤー・オブジェクトに対する適切な権限が必要です。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*のプレゼンテーション・レイヤー・オブジェクトに対する権限の設定を参照してください。

「スコアカード」エディタでの編集モードと表示モードの使用

「スコアカード」エディタで編集モードを使用するかは、何をしたいかによって決まります。

「スコアカード」エディタには 2 つのモードがあります。

- **「編集」モード** - ミッション・ステートメント、ビジョン・ステートメント、イニシアチブ、パースペクティブ、目標、KPI、KPI ウォッチリスト、スマート・ウォッチリストおよびビューの作成や編集、および KPI からのエージェントの作成を行えます。

  スコアカードの問題が発生する可能性があるため、スコアカードの目標、イニシアチブまたはパースペクティブを「スコアカード」エディタ以外から削除しないでください。

- **「表示」モード** - ミッション・ステートメント、ビジョン・ステートメント、イニシアチブ、パースペクティブ、目標、KPI、KPI ウォッチリストおよびビューへの移動や表示はできますが、追加や変更はできません。コメントの追加、ステータスのオーバーライド、KPI からのエージェントの作成およびスマート・ウォッチリストの操作を行うこともできます。

また、これらのモードでアクセスできる情報と実行できるタスクは、次のものによって異なります。

- アカウントに割り当てられている権限

- 個々のスコアカード・オブジェクトとフォルダに関連付けられている権限

スコアカードの権限と許可についてを参照してください。

スコアカードの作成

スコアカードは、データ分析を表示してビジネス戦略を説明および通知するのに役立ちます。

スコアカードを作成すると、パフォーマンスと目標が相互にどのように関係しているかを参加者が理解しやすくなります。

1. グローバル・ヘッダーで、**「新規」**をクリックし、**「スコアカード」**を選択します。
2. 「新規スコアカード」ダイアログで、スコアカードの名前を指定します。
3. (オプション)スコアカードの説明を指定します。
4. スコアカードの保存先の場所を選択します。
5. デフォルトのバランス・スコアカード・パースペクティブを使用するかどうかを指定します。**「デフォルトのパースペクティブを使用しますか。」**チェック・ボックスを選択解除する場合、イニシアチブおよび目標を関連付ける独自のカスタム・パースペクティブを作成する必要があります。
6. **「OK」**をクリックして、新規スコアカードを作成します。

スコアカードのオープンと編集

スコアカードを開く手順や編集する手順は同じです。

スコアカードを編集すると、その情報を最新に保てます。

メタデータに対する変更(たとえば、ディメンションの名前変更やサブジェクト領域の削除)を管理者が行う必要がある場合は、管理者に連絡する前に、KPI およびスコアカード内のオブジェクトに対するすべての参照を削除します。

「スコアカード」エディタでの編集モードと表示モードの使用を参照してください。

1. グローバル・ヘッダーで**「カタログ」**をクリックし、カタログ・ページを表示します。
2. オープンまたは編集するスコアカードに移動し、次のいずれかのリンクをクリックします。
   - **開く** - スコアカードが「スコアカード」エディタに表示モードで表示されます。
   - **編集** - スコアカードが「スコアカード」エディタに編集モードで表示されます。
3. 必要な変更を行います。
4. スコアカードを保存します。

概要情報の表示

イニシアチブ、目標または KPI のサマリー情報を表示できます。

表示される要約情報は、「イニシアチブ」ペインまたは「戦略」ペインで最後に選択したオブジェクトによって異なります。次を最後に選択した場合:

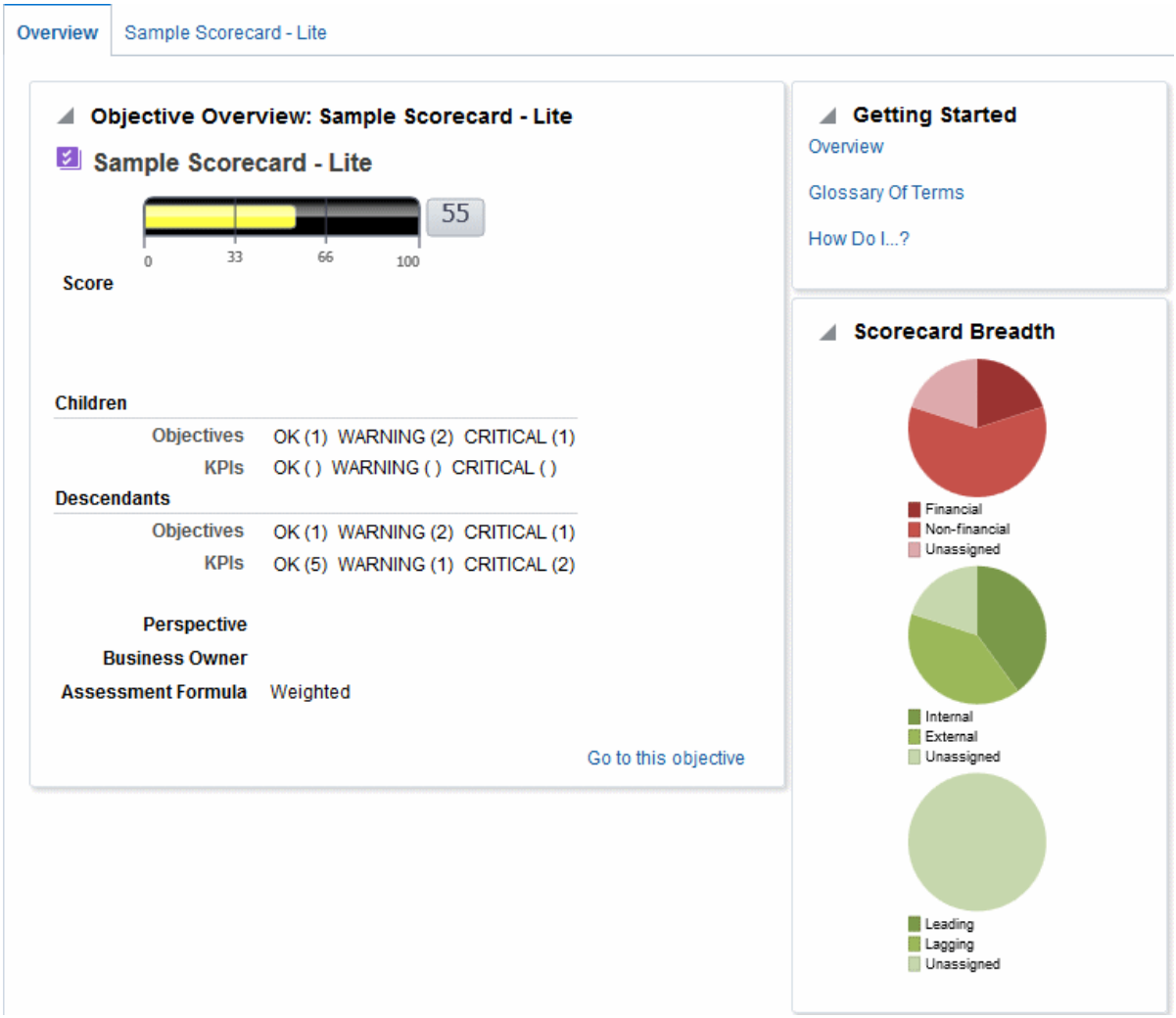
- イニシアチブまたは目標の場合は、イニシアチブまたは目標の基本設定(ステータス、ビジネス所有者など)、およびステータスの要約(各パフォーマンス・アセスメント範囲で進行状況を評価する、KPI とイニシアチブ、または KPI と目標の数)が表示されます。

子または子孫である目標、イニシアチブまたは KPI が特定のステータス値に対して 1 つでも存在する場合、そのステータス名は子または子孫である目標、イニシアチブおよび KPI を示す「スコアカード」エディタ: ブレークダウン・タブを表示するハイパーリンクになります。

- KPI の場合は、KPI の基本設定(ステータス、ビジネス所有者など)、およびパフォーマンスのデータとグラフが表示されます。

1. スコアカードを開くか、編集します。

   スコアカード・エディタの「概要」タブが表示されます。この図は、目標の「概要」タブの例を示します。



「概要」タブには、スコアカードの対象のエンティティ(組織全体または部門)を表すルート目標のサマリー情報が表示されます。

2. 次のサマリー情報を表示するには:

   - KPI の場合、「イニシアチブ」ペインまたは「戦略」ペインで KPI をクリックします。
   - イニシアチブの場合、「イニシアチブ」ペインでイニシアチブをクリックします。

- 目標の場合、「戦略」ペインで目標をクリックします。

視点領域について

「スコアカード」エディタの視点領域には、イニシアチブと目標の進捗とパフォーマンスを測定するためにスコアカードで使用される KPI のディメンションのコントロールが表示されます。

ディメンションおよび固定されたディメンション値とはを参照してください

コントロールは、表示されないよう明示的に指定されているもの以外、スコアカードで参照されている KPI ディメンションごとに表示されます。同一のディメンションが複数の KPI で参照されている場合、KPI 間でコントロールを共有できます。視点コントロールの設定を参照してください。

この図に、Region 階層、顧客セグメント、Offices 階層、Products 階層および 2010/Q3 ディメンションの視点領域を示します。

各コントロールには、ラベルおよび選択できるディメンション値のリストが表示される下向き矢印、および**「検索」**リンクが含まれています(詳細は、「メンバーの検索」ダイアログを参照してください)。ラベルは、ディメンションのデータベース名(デフォルト)、ユーザーにわかりやすい名前(コントロールに対して指定されている場合)、1 つ以上の値(ディメンションが特定の値または複数の値に固定されている場合)のいずれかです。

この領域を使用して、ディメンションの値を一時的に固定または設定します。ディメンションを固定すると、スコアカードのデータがフィルタされ、新たな視点(データの新たなビュー)が得られます。これによって、担当しているビジネス分野など、対象とする特定のデータに的を絞ることができます。

視点領域設定は一時的であり、スコアカードの保存時に維持されません。固定の永続化は、次の場所で行えます。

- 「設定」ダイアログの「ディメンション設定」タブは、スコアカード内のすべての KPI 使用箇所に設定を適用します。
- スコアカード・エディタの KPI の詳細タブの「分析」ペインの**「ディメンション」**領域は、特定の KPI 使用箇所に対する値を固定します。
- 「KPI ウォッチリスト」エディタの「KPI の追加」ダイアログ(「ウォッチリスト・エントリの編集」ダイアログとしても表示されます)は、個々の KPI に対する値を固定します。
- 「ディメンション固定」ダイアログは、ダッシュボードに追加されたビュー内の値を固定します。
- KPI エディタのディメンション・ページ(スコアカード・エディタの「KPI」タブとしても表示されます)は、KPI の定義内の値を固定します。この方法は、KPI の定義を様々なコンテキストで再利用可能にする場合と比べて柔軟性が低く、KPI を参照するビュー内でのみ値を固定します。

「スコアカード」エディタには、**「戻る」**ボタンと**「前へ」**ボタンも含まれ、視点履歴間を移動して以前の視点や開始時の視点を選択できます。

ディメンションを一時的に固定するには:

1. ディメンションの右にある下向きの矢印ボタンをクリックします。

2. 使用方法:

   - 特定の 1 つの値を選択するには、値をクリックします。
   - 複数の値を選択するには、**「検索」**リンクをクリックして「メンバーの検索」ダイアログを表示し、値を選択して**「OK」**ボタンをクリックします。[Ctrl]キーを押したまま必要な値をクリックして、複数の値を選択することもできます。
   - 値が階層列の場合は、横向きの三角形ボタンをクリックするとレベルが展開されます。[Ctrl]キーを押したまま必要な値をクリックします。

3. 下向き矢印またはダイアログ・ボックスの外側をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

データがフィルタされ、新たな視点が表示されます。

視点コントロールの設定

「設定」ダイアログの「ディメンション設定」タブを使用して、スコアカードの視点領域にあるディメンションのコントロールを設定します。

具体的には次の内容を指定できます。

- ディメンションの 1 つ以上のデフォルト値
- ディメンション・コントロールを視点領域に表示するかどうか
- 視点領域に表示するディメンションのラベル
- 視点領域についてを参照してください。

1. 視点コントロールの設定対象のスコアカードを編集します。スコアカードのオープンと編集を参照してください。
2. 「スコアカード」エディタで**「スコアカードの設定」**ボタンをクリックします。
3. 「設定」ダイアログの「アセスメント・マッピング」タブで、**「ディメンション設定」**タブをクリックします。
4. 必要に応じてディメンションごとにコントロールを設定します。ディメンションのコントロールを設定するには:
   a. ディメンションを選択してから、**「行の編集」**ボタンをクリックします。
   b. 「ディメンション設定の編集」ダイアログで目的の設定を指定し、**「OK」**をクリックします。
5. **「OK」**をクリックします。

ビジョン・ステートメントとは

ビジョン・ステートメントは、組織が将来的にどうありたいかを簡潔に表したものです。

ビジョン・ステートメントの例として、南米ポリプロピレン市場で最も成功した企業になるなどがあります。(ビジョン・ステートメントはオプションです。)

このステートメントから、ミッション・ステートメントを構成する主要なゴールと優先度を定義することがしばしばあります。ミッション・ステートメントとはおよびビジョン・ステートメントの定義を参照してください。

ビジョン・ステートメントおよびミッション・ステートメントの作成には、非常に特殊な権限セットが必要です。ビジョン・ステートメントまたはミッション・ステート

メントのツールバー・ボタンが無効である場合、管理者に連絡してください。詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*の KPI、KPI ウォッチリストおよびスコアカード作成の権限の特定を参照してください。

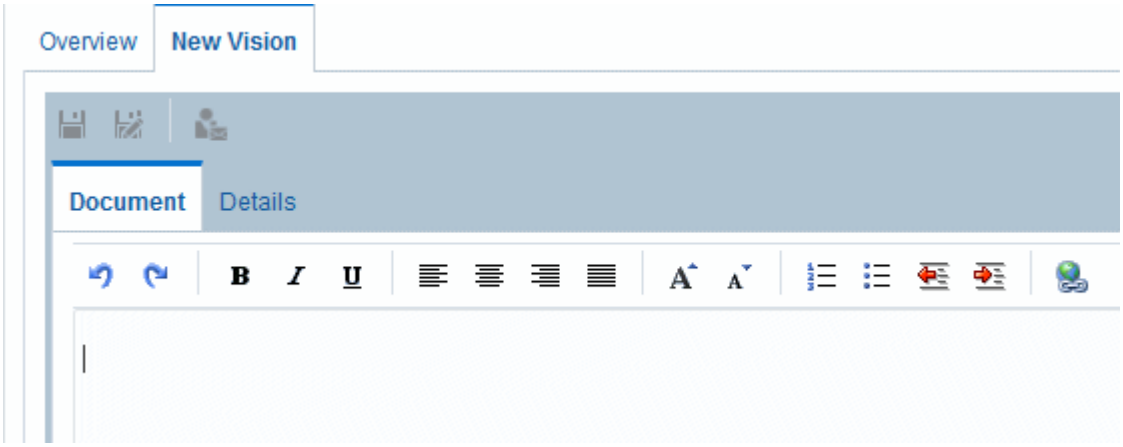
ビジョン・ステートメントの定義

ビジョン・ステートメントは、組織が将来的にどうありたいかを簡潔に表したものです。

ビジョン・ステートメントを定義すると、データの結果と組織の目標の関連付けに役立ちます。

1. ビジョン・ステートメントの定義対象のスコアカードを編集します。スコアカードのオープンと編集を参照してください。
2. 「スコアカードのドキュメント」ペインで**「目標の作成」**ボタンをクリックし、**「ビジョンの作成」**を選択します。

   「ビジョン」タブの「ドキュメント」タブが表示されます。図は、「新規ビジョン」タブを示しています。



3. ビジョン・ステートメントを入力し、書式設定します。太字、斜体、下線、インデント、位置合せやフォント・サイズの変更などの書式設定オプションを適用できます。
4. **「詳細」**タブをクリックします。
5. ビジネス所有者を割り当て、必要に応じて関連ドキュメントを指定します。
6. **「保存」**をクリックして「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。「名前を付けて保存」ダイアログで、デフォルトの名前を使用せず、ビジョン・ステートメントの名前を変更できます。

ミッション・ステートメントとは

ミッション・ステートメントには、ビジョンを達成するために必要な主要なビジネス・ゴールと優先度を指定します。

ミッション・ステートメントはオプションです。ミッション・ステートメントの定義を参照してください。

ビジョンはビジョン・ステートメントで定義します。ビジョン・ステートメントとはを参照してください

ミッション・ステートメントの定義

ミッション・ステートメントを定義すると、データ分析と比較する全体目標ができます。

ミッション・ステートメントを作成し、ユーザーを組織の全体的な目標に連携させることができます。

1. ミッション・ステートメントの定義対象のスコアカードを編集します。
2. 「スコアカードのドキュメント」ペインで**「目標の作成」**ツールバー・ボタンをクリックし、**「ミッションの作成」**を選択します。

   図に、ミッション・ステートメントの例を示します。

3. ミッション・ステートメントを入力し、書式設定します。太字、斜体、下線、インデント、位置合せやフォント・サイズの変更などの書式設定オプションを適用できます。
4. **「詳細」**タブをクリックします。
5. ビジネス所有者を割り当て、必要に応じて関連ドキュメントを指定します。
6. **「保存」**をクリックして「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。「名前を付けて保存」ダイアログで、デフォルトの名前を使用せず、ミッション・ステートメントの名前を変更できます。

パースペクティブとは

パースペクティブは、イニシアチブ、目標および KPI に関連付ける組織内のカテゴリです。

パースペクティブでは、主な利害関係者(顧客、従業員、株主/財務関係者など)や主なコンピテンシー分野(時間、コスト、品質など)を表すことができます。

イニシアチブや目標の作成時、イニシアチブや目標とパースペクティブを関連付けます。イニシアチブの作成および目標の作成を参照してください。KPI の詳細を編集する際、KPI とパースペクティブを関連付けます。KPI 詳細の使用を参照してください。

たとえば、顧客応答時間の改善という目標を作成する場合、この目標では、顧客関連の処理が行われたり、サポートされるため、顧客パースペクティブに関連付けます。

バランス・スコアカードの手法では、標準のパースペクティブが 4 つ定義されています。

- **財務** - 財務上の健全性および組織の発展に関連するか、これらをサポートする目標、イニシアチブおよび KPI をグループ化します。

- **顧客** - 顧客ベースに関係するか、これをサポートする目標、イニシアチブおよびKPIをグループ化します。
- **内部プロセス** - 企業の内部ポリシーや手続きを分類し、サポートする目標、イニシアチブおよびKPIをグループ化します。
- **学習と成長** - 従業員のトレーニングや成長に関連するか、これらをサポートする目標、イニシアチブおよびKPIをグループ化します。

また、スコアカードにカスタムのパースペクティブを作成することもできます。

カスタム・パースペクティブの作成を参照してください。

カスタム・パースペクティブの作成

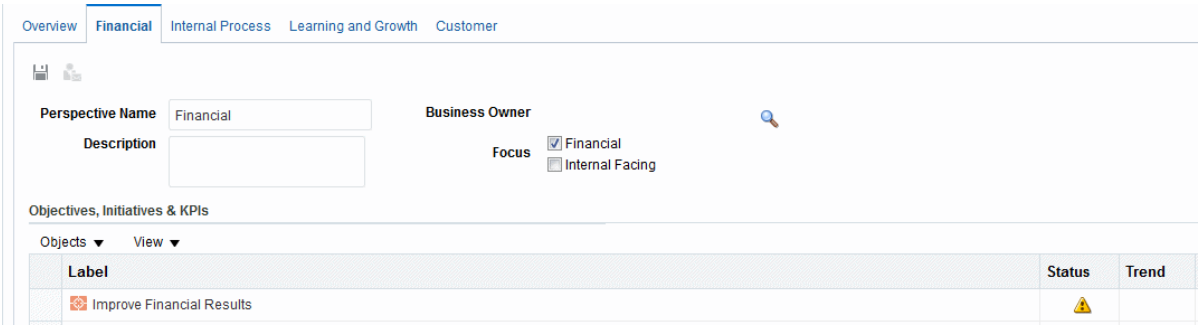
スコアカードを作成する場合は、**「デフォルトのパースペクティブを使用しますか。」**チェック・ボックスを使用して、バランス・スコアカードの手法で定義されているデフォルトのパースペクティブを使用するかどうかを指定します。

次の場合:

- デフォルト・パースペクティブを使用しない場合、独自のカスタム・パースペクティブを作成する必要があります。
- デフォルト・パースペクティブを使用する場合、デフォルト・パースペクティブとともに使用するカスタム・パースペクティブを1つ以上作成できます。

1. カスタム・パースペクティブの作成対象のスコアカードを編集します。
2. 「パースペクティブ」ペインで**「新規パースペクティブ」**ボタンをクリックします。

   「スコアカード」エディタの「パースペクティブ」タブが表示されます。図に、「パースペクティブ」タブに表示される財務パースペクティブの例を示します。



3. **「パースペクティブ名」**フィールドに、パースペクティブの名前を入力します。
4. (オプション)**「説明」**フィールドに、パースペクティブの説明を入力します。
5. **「ユーザーの設定」**ボタンをクリックして「ビジネス所有者の選択」ダイアログを表示し、ビジネス所有者を選択します。(デフォルトでは、ビジネス所有者は、スコアカードの作成者です。)
6. **「フォーカス」**領域で、パースペクティブのフォーカスが財務であるか、内部向けであるかを指定します。詳細は、「スコアカード」エディタの「パースペクティブ」タブを参照してください。
7. 必要に応じて、関連ドキュメントを追加します。詳細は、「関連ドキュメント」領域を参照してください。
8. **「保存」**をクリックします。

パースペクティブが、「パースペクティブ」ペインに表示されます。

これで、イニシアチブ、目標および KPI とカスタム・パースペクティブを関連付けることができます。イニシアチブや目標の作成時、イニシアチブや目標とパースペクティブを関連付けます。KPI の詳細を編集する際、KPI とパースペクティブを関連付けます。

キー・パフォーマンス・インディケータ(KPI)とは

KPI は、ターゲットに対してビジネス上の尺度(製品の売上や運用コストなど)を評価した結果を表します。

KPI を使用して、組織の様々なレベルの戦略を構成する目標やイニシアチブの進捗を評価できます。

次のように KPI を作成できます。

- スコアカード内。この場合、スコアカードの作成または編集時に KPI を作成します。
- スコアカード外。この場合、スコアカードの作成または編集前に KPI を作成します。

KPI と KPI ウォッチリストの使用を参照してください。

目標とは

目標は、企業の戦略を構成する、要求される成果あるいは望ましい結果のことです。

次のものに対して目標を作成できます。

- 組織全体(オラクル社など)
- 部門(営業部など)

目標を作成する際、進捗とパフォーマンスの測定に使用する KPI を 1 つ以上割り当てます。たとえば、次の KPI を割り当てることで、顧客満足度の改善という目標の進捗とパフォーマンスを測定することができます。

- 顧客満足度調査の平均スコア
- 顧客からのクレーム数の KPI

KPI と KPI ウォッチリストの使用を参照してください。

スコアカード内に、目標の達成に必要なイニシアチブを作成することもできます。イニシアチブとはを参照してください

作成した目標は、「戦略」ペインに階層状に表示されます。ルート目標は、スコアカードの対象のエンティティ(つまり、組織全体または部門)を表します。目標のパフォーマンスを評価するために割り当てられる KPI は、「戦略」ペインで目標の下に表示されます。

「戦略」ペインには、アセスメント・マッピングに指定した適切な色とアイコンを使用して、目標と KPI のステータスも表示されます。スコアカードに対するアセスメント・マッピングの定義を参照してください。

目標を作成する際には、可能であれば、KPI で測定されるサブ目標を使用して結果をモニターしてください。増分的、反復的に修正処理が行えるようになり、目標を達成しやすくなります。たとえば、財務結果の向上という目標には、売上の増大、コストの削減、従業員有効性の増大および業務の効率化というサブ目標を使用できます。関連ドキュメントを使用して、目標、イニシアチブなどのサポート情報を提供してください。

目標の作成を参照してください。

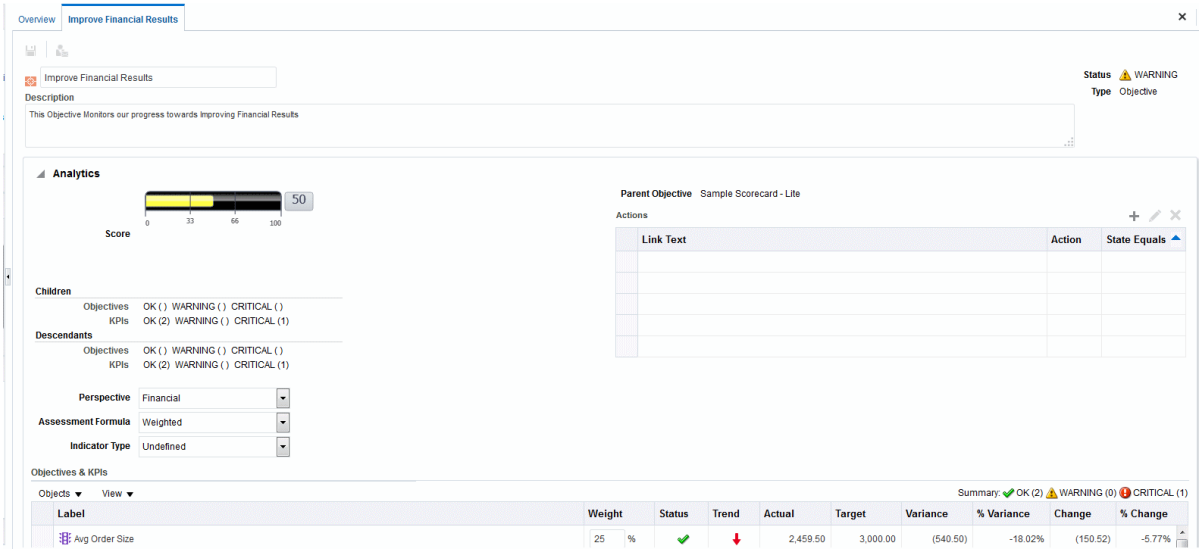
目標の作成

1 つ以上の目標を作成できます。

作成する目標は、戦略上妥当であり、KPI を使用して測定できる必要があります。目標とはを参照してください

1. 目標の作成対象のスコアカードを編集します。
2. 「戦略」ペインで次のようにします。
   - 作成する目標が単独で達成可能な場合、ルート目標を選択します。
   - 作成する目標の達成に、それより上位の目標が必要な場合、上位レベルの目標を選択します。
3. **「目標の作成」**ボタンをクリックするか、右クリックして**「目標の作成」**を選択します。

   図に、目標の詳細タブに表示される目標の例を示します。



4. 左上隅のデフォルトの目標名を強調表示し、目標の新しい名前を入力します。
5. **「説明」**フィールドに、目標の説明を入力します。
6. 「分析」ペインを完成させることで、分析に関する情報(目標の進捗とパフォーマンスの測定に使用する KPI など)を指定します。
7. 「コラボレーション」ペインに次のように入力します。
   a. (オプション)**「コメントの追加」**ボタンをクリックして「コメントの追加」ダイアログを表示し、コメントを追加します。
   b. **「ユーザーの設定」**ボタンをクリックして「ビジネス所有者の選択」ダイアログを表示し、ユーザーが連絡をとることができるビジネス所有者を指定します。(デフォルトでは、ビジネス所有者は、スコアカードの作成者です。)
   c. (オプション)**「新規行」**ボタンをクリックして「新規関連ドキュメント」ダイアログを表示し、関連ドキュメントを追加します。詳細は、「関連ドキュメント」領域を参照してください。

8. 「関連アイテム」ペインに次のように入力します。

   a. この目標に影響を及ぼしたり、サポートする(つまり、目標の達成に役立つか、進捗の妨げとなる)目標を 1 つ以上追加します。これを行うには、「戦略」ペインから目標をドラッグし、**「原因」**表にドロップします。

      「因果関係」ダイアログで、目標間の関連性の深さと、因果関係にある目標の値の変更によってこの目標がプラスの影響を受けるか、マイナスの影響を受けるかを指定します。たとえば、顧客からの照会の増加という目標の場合、顧客応答時間の削減や顧客の問題の解決の増加などの原因となる(助けまたは妨げとなる)目標をドラッグ・アンド・ドロップします。

   b. イニシアチブ(目標の達成に必要なタスク)を 1 つ以上追加します。イニシアチブを追加するには、「イニシアチブ」ペインからイニシアチブをドラッグし、**「この目標を後押しするイニシアチブ」**表にドロップします。

      「イニシアチブの関連」ダイアログで、イニシアチブと目標の関連性の深さと、このイニシアチブの値の変更によってこの目標がプラスの影響を受けるか、マイナスの影響を受けるかを指定します。

   c. この目標が影響を及ぼしたり、サポートする目標を 1 つ以上追加します。これを行うには、「戦略」ペインから目標をドラッグし、**「結果」**表にドロップします。

      「因果関係」ダイアログで、目標間の関連性の深さと、因果関係にある目標の値の変更によってこの目標がプラスの影響を受けるか、マイナスの影響を受けるかを指定します。

9. **「保存」**をクリックします。

目標またはイニシアチブの「分析」ペインの完了

目標またはイニシアチブを作成する際、「分析」ペインにすべて入力し、目標またはイニシアチブに対する分析を指定する必要があります。

「分析」ペインを使用して、目標またはイニシアチブの様々なパラメータを指定します。

1. **「パースペクティブ」**ボックスで、目標またはイニシアチブに関係付けるパースペクティブを選択します。

   目標またはイニシアチブごとにパースペクティブを割り当てます。これにより、戦略マップの作成時に因果関係を定義しやすくなります。

2. **「アセスメント式」**ボックスで、イニシアチブまたは目標の全体的なパフォーマンスの評価に使用するルールを選択します。たとえば、**「最悪ケース」**を選択して、最もパフォーマンスの低い子 KPI または目標のステータスを使用するよう指定します。

3. (目標の場合のみ)**「インディケータ・タイプ」**ボックスで、目標のパフォーマンスが、他の目標に影響を及ぼすか、他の目標のパフォーマンスまたは他のデータやプロセスの影響を受けるかを指定します(先行、遅行など)。

4. **「優先度」**ボックスで、イニシアチブの重要度と緊急度を示す優先度を選択します。

5. (イニシアチブの場合のみ)開始日、期日および完了日を指定します。

6. **「アクション」**領域で、目標またはイニシアチブのステータスに関連するアクションをユーザーが実行できるように表示する、アクション・リンクを追加します。

7. **「目標と KPI」**または**「イニシアチブと KPI」**ウォッチリストで、目標またはイニシアチブの進捗またはパフォーマンスの測定に使用する KPI を追加します。

KPI が定義されていない場合、または必要に合せて別の KPI を定義する場合、「スコアカード」エディタ内から KPI を作成できます。

> ヒント: 「**目標と KPI**」または「**イニシアチブと KPI**」ウォッチリストに表示されている列を変更できます。「**表示**」、「**他の列も表示**」の順に選択して、列の追加や削除を行える「他の列も表示」ダイアログを表示します。

8. KPI を追加するには:

   a. 「**保存**」をクリックします。KPI を追加する前に新しい目標またはイニシアチブを保存する必要があります。

   b. 「**目標と KPI**」または「**イニシアチブと KPI**」ウォッチリストで「**オブジェクト**」をクリックし、「**KPI の追加**」を選択します。「KPI の選択」ダイアログが表示されます。

      スコアカードの「カタログ」ペイン、または「スコアカードのドキュメント」ペイン(KPI が現在のスコアカード・フォルダに保存されている場合)から KPI をドラッグし、ウォッチリストにドロップします。この方法を選択した場合、「KPI の追加」ダイアログが表示されます。

   c. KPI を選択し、「**OK**」をクリックします。「KPI の追加」ダイアログが表示されます。

   d. KPI にディメンションが設定されている場合、ディメンションごとに 1 つ以上の値を指定し、「**変数の使用**」を選択して変数を指定するか、「**視点の使用**」を選択して視点領域で選択された 1 つ以上の値を使用します。

   e. 「**ラベル**」フィールドに、「戦略」ペインで KPI に対して表示される名前を入力します。

   f. 「**OK**」をクリックします。

「戦略」ペインまたは「イニシアチブ」ペインに追加した KPI は、KPI エディタで初めに定義された際、ベース KPI から多くのプロパティを引き継ぎます。ベース KPI の一部のプロパティをオーバーライドし、スコアカード内で使用するためにカスタマイズできます。オーバーライドできる KPI のプロパティは、ラベル、説明およびビジネス所有者です。パースペクティブとインディケータ・タイプを割り当てることができます。KPI 定義で固定されていないディメンションのディメンション固定を設定することもできます。

イニシアチブとは

イニシアチブは、目標の達成に必要な、時間に固有のタスクまたはプロジェクトです。

目標をサポートするイニシアチブを、戦略ターゲットに対する進捗を示すマイルストンとして使用できます。たとえば、顧客満足度の改善という目標を実現するために、次のイニシアチブを作成します。

- オンライン・フィードバック・フォーラムの作成
- レスポンス・チームの結成

一般的に、1 つのイニシアチブで複数の目標がサポートされます。

イニシアチブを作成する際、進捗の測定に使用する KPI を割り当てます。KPI と KPI ウォッチリストの使用を参照してください。

作成したイニシアチブは、「イニシアチブ」ペインに階層状に表示されます。ルート・イニシアチブは、目標やゴールを達成するために実装するすべてのイニシアチブを表

します。イニシアチブに割り当てられている KPI は、「イニシアチブ」ペインでイニシアチブの下に表示されます。

「イニシアチブ」ペインには、アセスメント・マッピングに指定した適切な色とアイコンを使用して、イニシアチブと KPI のステータスも表示されます。スコアカードに対するアセスメント・マッピングの定義およびイニシアチブの作成を参照してください。

イニシアチブの作成

1 つ以上のイニシアチブを作成できます。

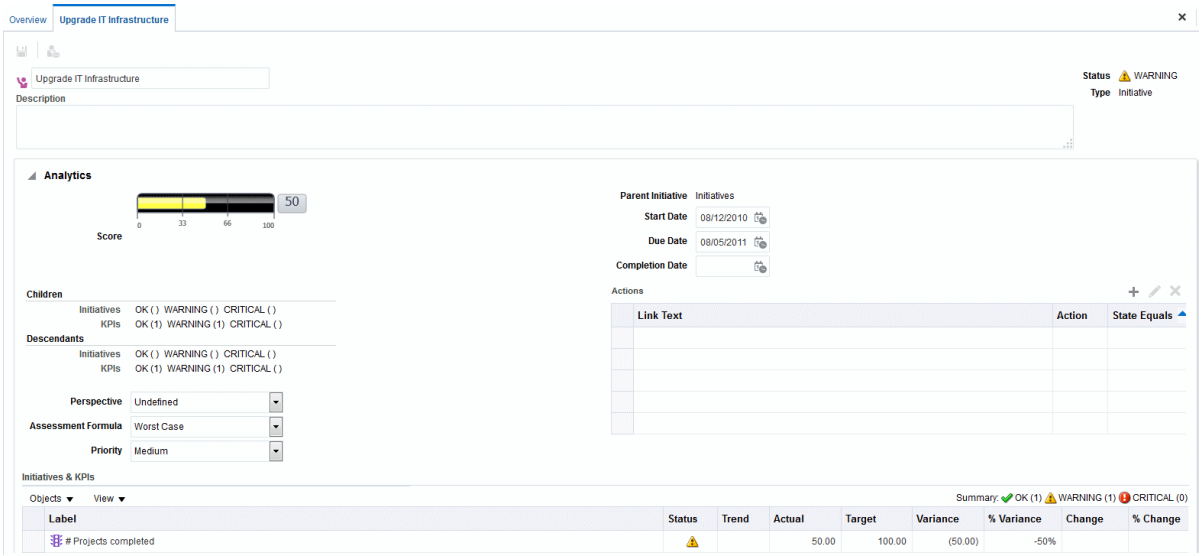
イニシアチブを使用して、閉じたループとして主なマイルストーンを追跡します。そのために、戦略的目標を割り当て、KPI ターゲットおよびメトリックの結果をモニタリングして解決のための措置をとり、注釈および関連ドキュメントを使用してコラボレーションを促進します。

作成するイニシアチブは、KPI を使用して測定でき、戦略上妥当である必要があります。

イニシアチブとはを参照してください

1. イニシアチブの作成対象のスコアカードを編集します。
2. 「イニシアチブ」ペインで次のようにします。
   - 作成するイニシアチブが単独で実現可能な場合、ルート・イニシアチブを選択します。
   - 作成するイニシアチブの達成に、それより上位のイニシアチブが必要な場合、上位レベルのイニシアチブを選択します。
3. **「イニシアチブの作成」**ボタンをクリックするか、右クリックして**「イニシアチブの作成」**を選択します。

   イニシアチブの詳細タブが表示されます。図に、イニシアチブの詳細タブに表示されるイニシアチブの例を示します。



4. タブの左上隅でデフォルトのイニシアチブ名を強調表示し、イニシアチブの新しい名前を入力します。
5. **「説明」**フィールドに、イニシアチブの説明を入力します。

6. 「分析」ペインを完成させることで、分析に関する情報(イニシアチブの進捗の測定に使用する KPI など)を指定します。

7. 次のように「コラボレーション」ペインを完成させることで、コラボレーション情報を指定します。

   a. (オプション)**「コメントの追加」**ボタンをクリックして「コメントの追加」ダイアログを表示し、コメントを追加します。

   b. **「ユーザーの設定」**ボタンをクリックしてダイアログを表示し、ユーザーが連絡をとることができるビジネス所有者を指定します。(デフォルトでは、ビジネス所有者は、スコアカードの作成者です。)

   c. (オプション)「関連ドキュメント」ツールバーで**「新規行」**ボタンをクリックして「新規関連ドキュメント」ダイアログを表示し、関連ドキュメントを追加します。詳細は、「関連ドキュメント」領域も参照してください。

   d. (オプション)「キー・リソース」ツールバーで**「新規行」**ボタンをクリックして「キー・リソース」ダイアログを表示し、キー・リソースを追加します。

8. **「関連アイテム」ペイン**で、成功するためにこのイニシアチブが必要な目標を 1 つ以上指定します。

   目標を追加するには、「戦略」ペインから目標をドラッグし、**「目標」**表にドロップします。「目標の関連」ダイアログが表示され、イニシアチブと目標の関連性の深さと、このイニシアチブの値の変更によってこの目標がプラスの影響を受けるか、マイナスの影響を受けるかを指定します。

9. **「保存」**をクリックします。

ビジネス所有者への連絡

スコアカード・オブジェクトのビジネス所有者にメッセージを送信できます。

ビジネス所有者は、ビジネスの値とスコアカード・オブジェクトのパフォーマンスの管理と向上の責任を負うユーザーです。(ビジネス所有者は、スコアカードまたは KPI の作成者と同じ場合もあれば、違う場合もあります。)オブジェクトのビジネス所有者は、作成時に指定します。

「所有者への連絡」ボタンまたはメニュー・オプションを使用して、ビジネス所有者に連絡します。このボタンはスコアカードの様々な場所にあり、「スコアカード」エディタの目標の詳細タブなどの大部分のタブのツールバーにあります。

Oracle BI EE では、エージェントおよびビジネス所有者が「マイ・アカウント」ダイアログの「配信オプション」タブで指定した配信デバイスとプロファイルを使用して、メッセージの配信先(電子メール、電話、ポケットベルなど)を決定します。

1. **「所有者への連絡」**ボタンまたはメニュー・オプションをクリックします。

2. 「所有者への連絡」ダイアログの**「件名」**フィールドにメッセージの件名を入力します。

3. **「優先度」**フィールドで、メッセージの優先度を選択します。

4. **「メッセージ」**フィールドに、ビジネス所有者に送信するメッセージを入力します。

5. **「送信」**をクリックします。

コメントについて

コメントは、ユーザーがイニシアチブ、目標または KPI について話し合う手段となります。

規定した望ましい結果を得るために合意を得ることは、ユーザー間のコラボレーションには不可欠です。コメント(注釈とも呼ばれる)を使用すると、イニシアチブや目標のパフォーマンスや進捗または特定のディメンション値のセット(特定の視点)の KPI の変更について議論できます。注釈およびオーバーライドを使用して、従業員のコラボレーション、参加および責任の明確化を促し、特定された問題が将来発生するのを防ぎます。

コメントは、スコアカード内の様々な場所で追加、表示および返信することができます。たとえば、「スコアカード」エディタ: 目標の詳細タブで、コメントを目標に直接追加できます。また、目標が参照されているビュー、スマート・ウォッチリストおよびパースペクティブの「図」タブで目標にコメントを追加することもできます。KPI の注釈は削除できません。

コメントは次のものに関連付けられています。

- イニシアチブ、目標、またはイニシアチブと目標の進捗を測定する KPI。

  コメントが関連付けられているイニシアチブ、目標または KPI がスコアカード内の別の場所で参照されており、表示されている視点がコメントの視点と一致する場合、コメント・インジケータが次の箇所に表示されます。

  – ウォッチリストでは、イニシアチブ、目標または KPI を含む行に青い三角形が表示されます。

  – ビューの「図」タブ内のノードでは、ノードの右上隅に**「コメント」**ボタンが表示されます。

- 特定の列。

  コメントは、トレンドや差分などの他の列に追加されていないかぎり(KPI の場合のみ)、通常は、目標、イニシアチブまたは KPI の「ステータス」列に関連付けられています。

- 特定の視点。

  コメントは、表示されているオブジェクトに対して現在有効な、「スコアカード」エディタの視点領域の値でフィルタされます。その結果、東部地域の売上に対するコメントと西部地域の売上に対するコメントを異なるものにすることができます。視点領域についてを参照してください。

- KPI の任意のディメンション固定。

  コメントは、(KPI、スコアカード、スコアカード図、ダッシュボード・プロンプトまたは KPI ウォッチリストで)有効な他のディメンション固定でフィルタされます。

コメントを操作するには、管理者がこの機能を有効にする必要があります。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*の Oracle Scorecard and Strategy Management のリポジトリの構成を参照してください。

コメントの操作を参照してください。

コメントの操作

コメントにより、アイテムに関するコメントをスコアカードに追加できます。

コメントは、次のようなスコアカード内の様々な場所で操作できます。

- イニシアチブの詳細タブの「コラボレーション」ペイン、目標の詳細タブ、およびスコアカード・エディタの KPI の詳細タブ。「コラボレーション」ペインでのコメントの操作を参照してください。

- ウォッチリスト。ウォッチリストでのコメントの操作を参照してください

- ビューの「図」タブ。ビューの「図」タブでのコメントの操作を参照してください。

> **ノート:** イニシアチブまたは目標にコメントを追加するには、イニシアチブまたは目標に最低 1 つの KPI が割り当てられている必要があります。

コメントの操作時には、コメントは特定の視点に関連付けられていることを忘れないでください。視点領域についておよびコメントについてを参照してください。

「コラボレーション」ペインでのコメントの操作

コメントは「コラボレーション」ペインで追加および編集できます。

「スコアカード」エディタのイニシアチブの詳細タブ、目標の詳細タブおよび KPI の詳細タブの「コラボレーション」ペインでは、その特定のイニシアチブ、目標または KPI のコメントに対して、表示、追加または返信を実行できます。

1. スコアカードを開くか、編集します。
2. イニシアチブ、目標または KPI を開き、「コラボレーション」ペインに移動します。
3. 視点領域に表示されている値が、適切なコメントのコンテキストを反映していることを確認します。(たとえば、東部地域の KPI のステータスについてコメントします。)
4. 次のいずれかを実行します:
   - 新規コメントを追加するには、**「新規コメント」**ボタンをクリックします。「新規コメント」ダイアログが表示されます。**「新規コメント」**ボタンをクリックして追加したコメントには、目標、イニシアチブまたは KPI のステータス(「ステータス」列)が関連付けられます。
   - KPI の場合のみ、コメントを「トレンド」、「ターゲット」、「差分」などの他の列に関連付けることもできます。これを行うには、親オブジェクトを編集し、ウォッチリストの関連するセルを右クリックして、**「コメントの追加」**を選択します。
   - コメントに返信するには、返信するコメントを特定し、**「返信」**をクリックします。「返信」ダイアログが表示されます。
5. コメントの件名(新規コメントの場合のみ)とコメントのテキストを入力します。
6. **「OK」**をクリックします。

ウォッチリストでのコメントの操作

ウォッチリストでは、ウォッチリストに表示されるイニシアチブ、目標および KPI のコメントに対して表示、追加および返信を実行できます。

西部地域の KPI ステータスなど、ウォッチリストの特定の領域にコメントを追加できます。

1. スコアカードを開くか、編集します。
2. コメントを操作するオブジェクトを開き、適切なペインまたはタブに移動します。
3. 視点領域に表示されている値が、適切なコメントのコンテキストを反映していることを確認します。(たとえば、東部地域の KPI のステータスについてコメントします。)

4. 新しいコメントを追加するには:

   a. ウォッチリストで、コメントの追加の対象にする**「ステータス」**セルを右クリックして、**「コメントの追加」**を選択します。

   b.「コメントの追加」ダイアログを完成させ、**「OK」**をクリックします。

5. オブジェクトに以前に追加されたコメントを操作するには、マウス・ポインタを「ステータス」列(KPI の場合はいずれかの列)内のセルの右上隅にある**青い三角形**に合せます。「ステータス」ウィンドウで次のことを行います。

   - 以前に追加されたコメントを読みます。
   - **「新規コメント」**をクリックして「新規コメント」ダイアログを表示し、新しいコメントを追加します。
   - **「返信」**リンクをクリックして「返信」ダイアログを表示し、コメントに返信します。
   - **「固定」**ボタンをクリックして、ウィンドウを固定し、ウィンドウが開いたままになるようにします。

ビューの「図」タブでのコメントの操作

ビューの「図」タブでは、ビューに表示されている目標および KPI のコメントに対して、表示、追加および返信を実行できます。

たとえば、「戦略ツリー」タブの「図」タブでコメントを操作できます。

ビューがダッシュボード内に図として表示されている場合にも、同じ方法でコメントを操作できます。

1. スコアカードを開くか、編集します。
2. コメントを操作するビューを開き、「図」タブに移動します。
3. 視点領域に表示されている値が、適切なコメントのコンテキストを反映していることを確認します。(たとえば、東部地域の KPI のステータスについてコメントします。)
4. 新しいコメントを追加するには:

   a. コメントを追加するノードの右側にある**「オプション」**ボタンをクリックし、ノード・オプション・メニューから**「コメントの追加」**を選択します。

   b.「コメントの追加」ダイアログを完成させ、**「OK」**をクリックします。

5. オブジェクトに以前に追加されたコメントを操作するには、マウス・ポインタをノードの右上隅にある**「コメント」**ボタンに合せます。イニシアチブ、目標または KPI に付けられたコメントがすべて表示された「ステータス」ウィンドウが表示されます。このウィンドウでは次の操作を実行できます。

   - 以前に追加されたコメントを読みます。
   - **「新規コメント」**をクリックして「新規コメント」ダイアログを表示し、新しいコメントを追加します。
   - **「返信」**リンクをクリックして「返信」ダイアログを表示し、コメントに返信します。
   - **「固定」**ボタンをクリックして、ウィンドウを固定し、ウィンドウが開いたままになるようにします。

イニシアチブや目標のパフォーマンス・アセスメントの理解

イニシアチブや目標のパフォーマンス・アセスメントを表示すると、イニシアチブや目標のファミリの全体ビューを確認できます。

Oracle Business Intelligence では、イニシアチブや目標のパフォーマンスの評価は、子の評価を集約することによって行われます。この過程で次のものが使用されます。

- 定義されたスコアカード・アセスメント・マッピング。アセスメント・マッピングについてを参照してください。
- すべての目標およびイニシアチブに割り当てられたアセスメント式(**「重み付け」**や**「最良ケース」**など)。アセスメント式には次のものが含まれます。
  - **最悪ケース:** パフォーマンスが最悪の子 KPI または子目標のステータスを使用することを指定します。
  - **最良ケース:** パフォーマンスが最良の子 KPI または子目標のステータスを使用することを指定します。
  - **最も頻度の高い(最悪ケース):** 子 KPI および子目標の半数はパフォーマンスが高く、半数は低い場合に、パフォーマンスが最悪の子 KPI または子目標のステータスを使用することを指定します。
  - **最も頻度の高い(最良ケース):** 子 KPI および子目標の半数はパフォーマンスが高く、半数は低い場合に、パフォーマンスが最良の子 KPI または子目標のステータスを使用することを指定します。
  - **重み付け:** 子 KPI および子目標に割り当てた重みに基づいて重み付けされた平均を使用することを指定します。子の目標、イニシアチブおよび KPI への重みの割当てを参照してください。

    子 KPI にデータがない場合は、集計に含められません。かわりに、重みが他の子 KPI および目標の間で分散されます。

  アセスメント式は目標またはイニシアチブの作成時に割り当てます。目標の作成またはイニシアチブの作成を参照してください。
- 各子目標が親目標の全体的なパフォーマンスにどの程度寄与するかを示す、子イニシアチブ、目標および KPI に割り当てられている重み(親目標のアセスメント・ルールが**「重み付け」**に設定されている場合のみ)。子の目標、イニシアチブおよび KPI への重みの割当てを参照してください。

子目標に基づく目標のパフォーマンス・アセスメントの決定例および子 KPI に基づく目標のパフォーマンス・アセスメントの決定例を参照してください。

アセスメント・マッピングについて

アセスメント・マッピングとは、Oracle Business Intelligence で目標およびイニシアチブのパフォーマンスの評価に使用される、スコアしきい値およびアセスメント範囲です。

Oracle Business Intelligence では、これらのスコアしきい値およびアセスメント範囲は次の目的で使用されます。

- 子のアセスメントの集約に基づいて、目標またはイニシアチブのステータスおよびスコアを決定します。

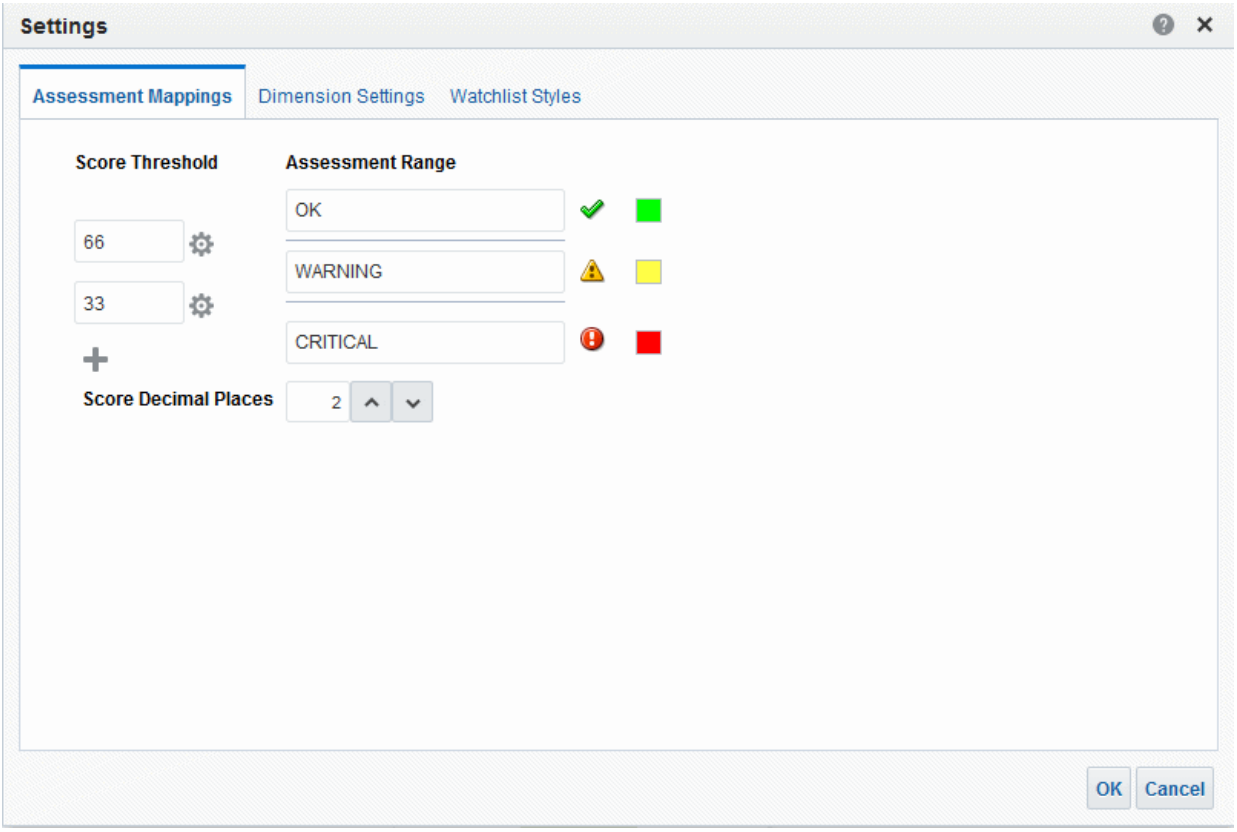
  目標またはイニシアチブのアセスメント式が、「最良ケース」、「最悪ケース」、「最も頻度の高い(最良ケース)」または「最も頻度の高い(最悪ケース)」である場合、

スコアは定義されているスコアしきい値のいずれか(0、33 または 66 など)になります。アセスメント式が「重み付け」の場合は、スコアは子に割り当てられた重みに基づいて計算されます。

- 目標またはイニシアチブのパフォーマンスの測定に使用できるように、イニシアチブおよび目標の進捗の測定に使用される KPI の KPI スコアを、スコアカード・スコアにマップします。

図に、特定のアセスメント範囲に入るスコアしきい値の例を示します。アセスメント範囲は次のように定義されます。

- 67 から 100 は「**OK**」アセスメント範囲に入ります
- 34 から 66 は「**警告**」アセスメント範囲に入ります
- 0 から 33 は「**クリティカル**」アセスメント範囲に入ります



イニシアチブおよび目標のパフォーマンス・アセスメントの詳細は、イニシアチブや目標のパフォーマンス・アセスメントの理解を参照してください。

アセスメント・マッピングを定義する方法は、スコアカードに対するアセスメント・マッピングの定義を参照してください。

子目標に基づく目標のパフォーマンス・アセスメントの決定例

子目標はパフォーマンス・アセスメントを計算するのに役立ちます。

Improve Financial Results という名前の次のような目標を例にあげます。

- 「最悪ケース」のアセスメント・ルールを持ちます。

- 目標を含むスコアカードに対して定義されているアセスメント・マッピングは、アセスメント・マッピングについてのものと同じです。
- 次の 2 つの子目標を持ちます。
  - Increase Sales、ステータスはクリティカルで、スコアは 0 です。
  - Reduce Cost、ステータスは警告で、スコアは 50 です。

この場合、Improve Financial Results 目標のパフォーマンス・アセスメントは、最悪のステータスとスコアを持つ子のステータスとスコアになりますが、言い換えると、スコアカード・ステータスがクリティカルで、スコアが 0 の Increase Sales のステータスとスコアになるということです。

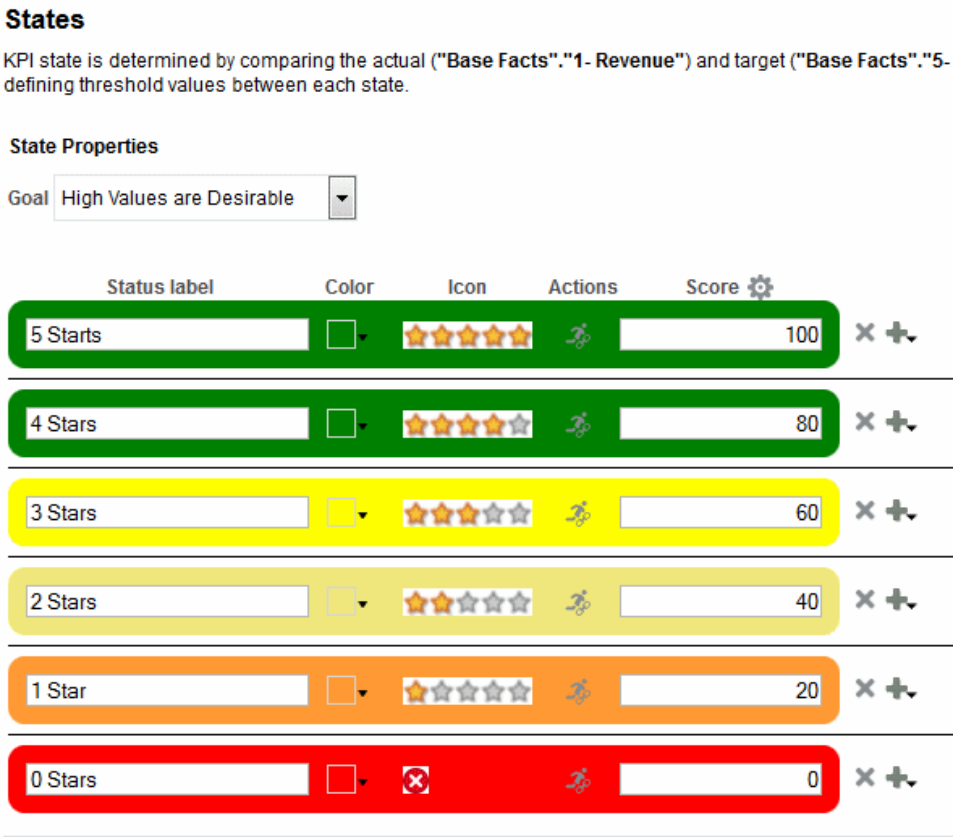
子 KPI に基づく目標のパフォーマンス・アセスメントの決定例

子 KPI を使用して、パフォーマンスを評価できます。

Enhance Stockholder Satisfaction という名前の次のような目標を例にあげます。

- 「最良ケース」のアセスメント式を持ちます。
- 目標を含むスコアカードに対して定義されているアセスメント・マッピングは、図のものと同じです。
- Revenue KPI という子 KPI を持ち、そのスコアカード・ステータスは OK で、スコアは 66 です。

  Revenue KPI は、図に表示されている次の KPI しきい値とスコアに基づき、星 4 つおよびスコア 80 の KPI ステータスを持ちます。



Revenue KPI を Enhance Stockholder Satisfaction 目標に追加した際に、目標のパフォーマンス測定に使用できるように、Oracle Business Intelligence によって KPI スコアがスコアカード・スコアにマップされました。KPI スコア 80 は、66 から 100 のスコアカード・アセスメント範囲内にあるため、スコアカード・スコア 66 および OK ステータスにマップされています。

この場合、Enhanced Stockholder Satisfaction 目標のパフォーマンス・アセスメントは、最良のステータスとスコアを持つ子のステータスとスコアになりますが、言い換えると、スコアカード・ステータスが OK で、スコアが 66 の Revenue KPI(この場合は唯一の子)のステータスとスコアになるということです。

スコアカードに対するアセスメント・マッピングの定義

「設定」ダイアログの「アセスメント・マッピング」タブを使用して、スコアカードに対するアセスメント・マッピングを定義します。

イニシアチブや目標のパフォーマンス・アセスメントの理解を参照してください。

1. アセスメント・マッピングの定義対象のスコアカードを編集します。
2. 「スコアカード」エディタで**「スコアカードの設定」**ボタンをクリックします。

   「設定」ダイアログの「アセスメント・マッピング」タブが表示されます。
3. **「スコアしきい値」**フィールドに、アセスメント範囲の境界を設定する数値を入力します。

   しきい値の数字に基づいて KPI エディタで自動的に割り当てられるスコアを受け入れます。

   たとえば、クリティカル、警告、OK という 3 つのアセスメント範囲の境界を設定するために 33 と 66 を入力したとします。0 から 33 の KPI スコアは「クリティカル」アセスメント範囲、34 から 66 の KPI スコアは「警告」アセスメント範囲、66 から 100 の KPI スコアは「OK」アセスメント範囲に入ります。
4. 範囲ごとに**「アセスメント範囲」**ボックスに各アセスメント範囲の名前(クリティカルなど)を指定し、範囲を表すために使用するアイコンと色を指定します。
5. **「OK」**をクリックします。

子の目標、イニシアチブおよび KPI への重みの割当て

目標またはイニシアチブの子の目標、イニシアチブおよび KPI に重みを割り当て、親目標のパフォーマンスにどの程度影響を与えるかを指定します。

子の目標、イニシアチブおよび KPI に重みを割り当てるには、親の目標またはイニシアチブのアセスメント・ルールが**「重み付け」**に設定されている必要があります。

イニシアチブや目標のパフォーマンス・アセスメントの理解を参照してください。

1. 重みを割り当てる目標、イニシアチブおよび KPI の親の目標またはイニシアチブを含むスコアカードを編集します。
2. 「戦略」ペインで目標をダブルクリックするか、「イニシアチブ」ペインでイニシアチブをダブルクリックします。
3. 「分析」ペインの**「目標と KPI」**または**「イニシアチブと KPI」**ウォッチリストで、各子の目標、イニシアチブまたは KPI に対する重みを入力します。

   たとえば、スコアカードのルート目標の 4 つの子の目標に次の目標を割り当てます。

- Improve Financial Results: 50%
- Enhance Customer Satisfaction: 25%
- Streamline Operations: 15%
- Increase Empl Effectiveness: 10%

4. **「保存」**をクリックします。

ステータスのオーバーライドについて

イニシアチブ、目標またはイニシアチブと目標のパフォーマンスを測定する KPI のステータスをオーバーライドできます。

ステータスをオーバーライドするには、イニシアチブ、目標または KPI のビジネス所有者である必要があります。オーバーライドを取り消すこともできます。

ステータスのオーバーライドを使用するには、管理者がこの機能を有効にする必要があります。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*の Oracle Scorecard and Strategy Management のリポジトリの構成を参照してください。

ステータスのオーバーライドは、スコアカード内の様々な場所で行うことができます。たとえば、「スコアカード」エディタの目標の詳細タブで、目標にステータスのオーバーライドを適用できます。また、目標が参照されているビュー、スマート・ウォッチリストおよびパースペクティブの「図」タブで目標にステータスのオーバーライドを適用することもできます。

ステータスのオーバーライドは次のものに関連付けられています。

- イニシアチブ、目標、またはイニシアチブと目標の進捗を測定する KPI。

  ステータスのオーバーライドが関連付けられているイニシアチブ、目標または KPI がスコアカード内の別の場所で参照されており、表示されている視点がステータスのオーバーライドの視点と一致する場合、ステータスのオーバーライド・インジケータである赤いアスタリスク(*)が次の箇所に表示されます。

  - ウォッチリストでは、イニシアチブ、目標または KPI を含む行のステータス記号の右側に表示されます。
  - ビューの「図」タブ内のノードでは、ノードの左下隅のステータス記号の右側に表示されます。

- 目標、イニシアチブまたは KPI のステータス列。
- 特定の視点。

  ステータスのオーバーライドは、表示されているオブジェクトに対して現在有効な、「スコアカード」エディタの視点領域の値でフィルタされます。その結果、東部地域の売上に対するステータスのオーバーライドと西部地域の売上に対するステータスのオーバーライドを異なるものにすることができます。視点領域についてを参照してください。

- KPI の任意のディメンション固定。

  ステータスのオーバーライドは、(KPI、スコアカード、スコアカード図、ダッシュボード・プロンプトまたは KPI ウォッチリストで)有効な他のディメンション固定でフィルタされます。

ステータスのオーバーライドの操作を参照してください。

ステータスのオーバーライドの操作

特定領域内のステータスをオーバーライドできます。

ステータスのオーバーライドは、次のようなスコアカード内の様々な場所で操作できます。

- ウォッチリスト。ウォッチリストでのコメントの操作を参照してください。
- ビューの「図」タブ。ビューの「図」タブでのステータスのオーバーライドの操作を参照してください。

ステータスのオーバーライドの操作時には、ステータスのオーバーライドは特定の視点に関連付けられていることを忘れないでください。視点領域についてを参照してください。

> **ヒント:** ステータスをオーバーライドする前に、KPI、イニシアチブまたは目標にビジネス所有者が設定されていることを確認します。KPI の作成を参照してください。

ステータスのオーバーライドについてを参照してください。

ウォッチリストのステータスのオーバーライドの操作

ステータスのオーバーライドを保守することで、適切に適用されることを保証できます。

ウォッチリストでは、以前に適用されたステータスのオーバーライドおよびオーバーライドの取消しを表示し、ウォッチリストに表示されたイニシアチブまたは目標および KPI に対してステータスの新規オーバーライドおよびオーバーライドの取消しを適用できます。

1. スコアカードを開くか、編集します。
2. ステータスのオーバーライドを操作するオブジェクトを開き、適切なペインまたはタブに移動します。
3. 視点領域に表示されている値が、適切なステータスのオーバーライドのコンテキストを反映していることを確認します。(たとえば、東部地域の KPI のステータスをオーバーライドします。)
4. ステータスのオーバーライドまたはオーバーライドを取り消すには:
   a. ウォッチリストで、ステータスのオーバーライドまたはオーバーライドの取消しの対象にする**「ステータス」**セルを右クリックして、**「ステータスのオーバーライド」**を選択します。
   b. 「ステータスのオーバーライド」ダイアログを完成させ、**「OK」**をクリックします。
5. オブジェクトに以前に適用されたステータスのオーバーライドまたはオーバーライドの取消しを表示するには、マウス・ポインタをステータス記号の右側の赤いアスタリスクに合せます。「ステータス」ウィンドウでは、次を実行できます。
   - 以前に適用されたステータスのオーバーライドまたはオーバーライドの取消しを表示します。
   - **「新しいオーバーライド」**をクリックして「ステータスのオーバーライド」ダイアログを表示し、新しいオーバーライドを適用するかオーバーライドを取り消します。

- **「固定」**ボタンをクリックして、ウィンドウを固定し、ウィンドウが開いたままになるようにします。

ビューの「図」タブでのステータスのオーバーライドの操作

ステータスのオーバーライドは、ステータスが必ず元のステータスに関係なく表示されるように重ねることができます。

ビューの「図」タブで、以前に適用されたステータス・オーバーライドおよびオーバーライド取消しを表示し、ビューに表示される目標および KPI に新規のオーバーライドおよびオーバーライド取消しを適用できます。たとえば、「戦略ツリー」タブの「図」タブでステータスのオーバーライドを操作できます。

1. スコアカードを開くか、編集します。
2. ステータスのオーバーライドを操作するビューを開き、「図」タブに移動します。
3. 視点領域に表示されている値が、適切なステータスのオーバーライドのコンテキストを反映していることを確認します。(たとえば、東部地域の KPI のステータスをオーバーライドします。)
4. 新規のステータスのオーバーライドを適用するには:
   a. ステータスのオーバーライドを適用するノードの右側にある**「オプション」**ボタンをクリックし、ノード・オプション・メニューから**「ステータスのオーバーライド」**を選択します。
   b. 「ステータスのオーバーライド」ダイアログを完成させ、**「OK」**をクリックします。
5. オブジェクトに以前に適用されたステータスのオーバーライドを表示するには、マウス・ポインタをステータス記号の右側の赤いアスタリスクに合せます。「ステータス」ウィンドウでは、次を実行できます。
   - 以前に適用されたステータスのオーバーライドを表示します。
   - **「新しいオーバーライド」**をクリックすることで、「ステータスのオーバーライド」ダイアログを表示して新規のオーバーライドを適用します。
   - **「固定」**ボタンをクリックして、ウィンドウを固定し、ウィンドウが開いたままになるようにします。

戦略ツリーとは

戦略ツリーでは、目標とこれをサポートする子目標、KPI が階層状に表示されます。

戦略ツリーには、ビジネス所有者と関連ドキュメントなどの目標をサポートする情報も示されます。

戦略ツリーでは探索やナビゲートが行えます:

- ABC 社などのスコアカード全体(ルート目標)に対する戦略
- サポート所要時間の削減などの個々の目標に対する戦略

戦略ツリーには、次の 2 つのタイプの図があります:

- 戦略ツリー図。戦略ツリー図の理解を参照してください。
- 戦略貢献ホイール図。戦略貢献ホイール図の理解を参照してください。

戦略ツリーの作成を参照してください。

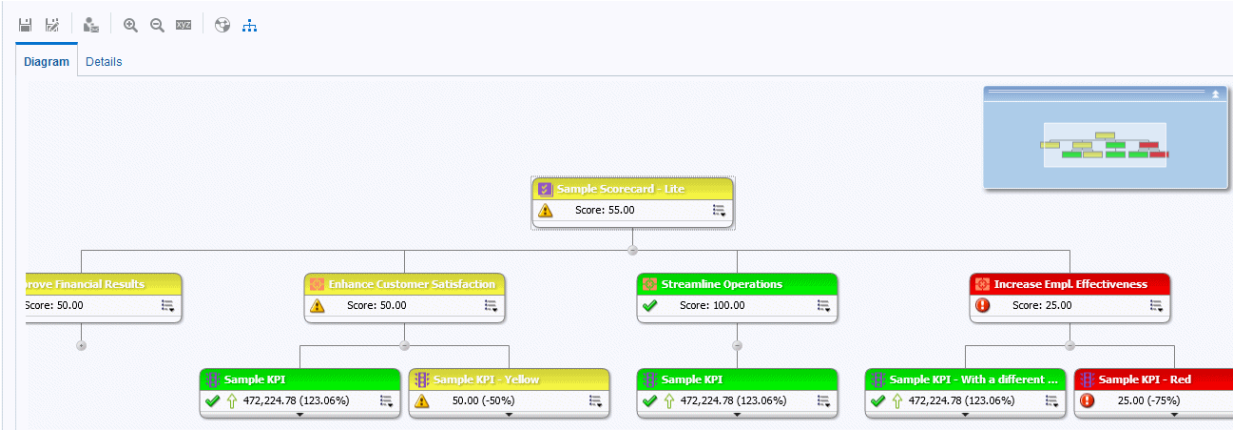
戦略ツリー図の理解

戦略ツリー図を使用して、目標、その目標をサポートする子目標、および KPI の階層をツリー図に表示します。

戦略ツリー図には次のコンポーネントが含まれます:

- **ツリー図** - 目標、その目標をサポートする目標および KPI を表すノードで構成されます。各ノードには、アイコンおよびアセスメント範囲を表す色が表示され、目標または KPI のステータスを示します。KPI ノードには、KPI の実際の値およびターゲットとの差分率も表示されます。
- **鳥瞰図** - ツリー図を上からみた様子が表示されます。

この図は、戦略ツリー図の例を示します。



戦略貢献ホイール図の理解

戦略貢献ホイール図を使用して、目標、その目標をサポートする子目標、および KPI を、戦略貢献ホイール図と呼ばれる循環図に階層的に表示します。

戦略貢献ホイール図では、親目標に対する特定の目標または KPI の貢献度(または影響)を簡単に確認できます。次のコンポーネントが含まれます。

- 戦略貢献ホイール - 図の開始目標を表す 1 つの中央の円(フォーカス・ノード)で構成されます。セクターに分かれた同心円で囲まれています。各セクターは子目標または KPI を表すノードです。

  セクターのサイズは、親の重み付けアセスメント・ルールの、セクターが表している目標や KPI に割り当てられた重み付けによって判断されます。子の目標、イニシアチブおよび KPI への重みの割当てを参照してください。親に重み付けアセスメント・ルールがない場合、その親の子セクターはすべて同じサイズになります。

- 情報ペイン - 現在のノードに関する次の情報が表示されます。
  - ステータス・アイコンと、スコア(目標の場合)または実際の値と差異率(KPI の場合)
  - 子のステータス
  - 親の重み付けアセスメント・ルールで割り当てられた重み付け

- フォーカス軌跡 - 戦略貢献ホイールの中央にあるノード、および図に表示されているその祖先を表す一群の小さい円で構成されます。各円には、対応するノードのステータス色が表示されます。

図に、Improve Financial Results 目標の戦略貢献ホイール図の例を示します。Reduce Cost サブ目標が強調表示されます。

戦略ツリーの作成

戦略ツリーでは、目標とこれをサポートする子目標、KPI が階層状に表示されます。

戦略ツリーは、次のとおり、スコアカード全体に対しても、特定の目標に対しても作成できます。

- 編集モードでは、スコアカード全体または特定の目標に対して戦略ツリーを作成し、保存できます。
- 表示モードでは、特定の目標に対してのみ一時的な読取り専用の戦略ツリーを作成できます。戦略ツリーの保存は行えません。

  「スコアカード」エディタでの編集モードと表示モードの使用を参照してください。

1. 必要に応じて、次のことを行います:
   - スコアカード全体または特定の目標に対する戦略ツリーを作成して保存する場合、戦略ツリーを作成するスコアカードを編集します。
   - 特定の目標のみに対して一時的な読取り専用の戦略ツリーを作成するが、保存しない場合、スコアカードを開きます。
2. 次の戦略ツリーを作成するには:
   - スコアカード全体(ルート目標)の場合、「スコアカードのドキュメント」ペインで**「新規オブジェクト」**ボタンをクリックし、**「戦略ツリーの作成」**を選択します。
   - 特定の目標の場合、「戦略」ペインで目標を右クリックし、**「戦略ツリーの表示」**を選択します。

   「戦略ツリー」タブの「図」タブが表示され、目標とそれをサポートする子目標、KPI が図に階層状に表示されます。
3. 戦略ツリー図で次を実行します。

- ノードの操作を行うオプションを表示するには、**「オプション」**ボタン(ノードの右側)をクリックしてノード・オプション・メニューを表示します。
- ターゲット値や差異などの KPI の他のパフォーマンス・データを表示するには、ノードの下部中央にある下向きの矢印をクリックします。このデータを縮小するには、上向き矢印をクリックします。
- ノードを展開したり、縮小するには、ノードの下にあるプラス(+)またはマイナス(-)のアイコンをクリックします。
- 図でズーム・インまたはズーム・アウトを行うには、「スコアカード」エディタの「戦略ツリー」タブのツールバー・ボタンを使用します。
- コメントの操作:
  - ノードの右上隅の**「コメント」**ボタンにマウス・ポインタを合せ、「ステータス」ウィンドウを表示すると、以前に追加されたコメントを読んだり、別のコメントを追加したり、コメントに返信できます。
  - コメントを追加するノードの右側にある**「オプション」**ボタンをクリックし、ノード・オプション・メニューから**「コメントの追加」**を選択します。「新規コメント」ダイアログが表示され、コメントを追加したり、以前に追加されたコメントを読むことができます。
- 自分がビジネス所有者であるノードのステータスのオーバーライドを操作するには、次のようにします。
  - ノードの赤のアスタリスク(表示されている場合)にマウスを合せ、「ステータス」ウィンドウを表示すると、以前に適用されたオーバーライドを表示したり、別のオーバーライドを適用できます。
  - ステータスのオーバーライドを適用するノードの右側にある**「オプション」**ボタンをクリックし、ノード・オプション・メニューから**「ステータスのオーバーライド」**を選択します。「ステータスのオーバーライド」ダイアログが表示され、別のオーバーライドを適用したり、以前に適用されたオーバーライドを表示することができます。

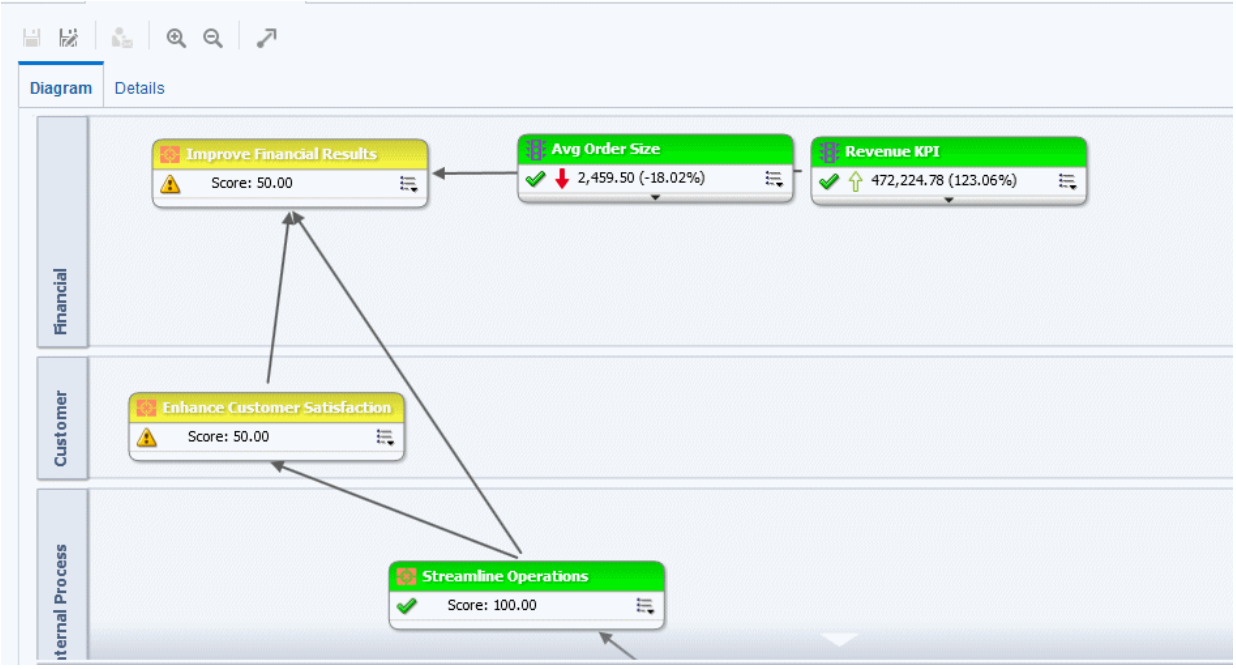
4. 図の外観を決定するプロパティを設定するには、「スコアカード」エディタの「戦略ツリー」タブの**「プロパティ」**ボタンをクリックします。
5. 「戦略ツリー・ビューのプロパティ」ダイアログで、目的の外観になるようにプロパティ設定を指定して、**「OK」**をクリックします。
6. 「戦略ツリー」タブの**「詳細」**タブをクリックします。
7. 必要に応じて、説明を指定し、ビジネス所有者を割り当て、関連ドキュメントを指定します。(デフォルトでは、ビジネス所有者は、スコアカードの作成者です。)
8. **「保存」**をクリックして「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。「名前を付けて保存」ダイアログで、デフォルトの名前を使用せず、戦略ツリーの名前を変更できます。

戦略マップとは

戦略マップには、スコアカードに定義されている目標およびその進捗を測定する KPI とパースペクティブとの関係が示されます。

戦略マップには、目標と他の目標または KPI の因果関係も線で結ばれて示されます。因果関係は、目標の作成または編集(目標の作成を参照)時または KPI 詳細の操作(KPI 詳細の使用を参照)時に作成します。因果関係は、戦略マップで作成することもできます。

この図は、戦略マップの例を示しています。



組織の様々な分野の戦略を表すために、複数の戦略マップを作成することができます。

戦略マップは、編集モードでのみ作成できます。「スコアカード」エディタでの編集モードと表示モードの使用を参照してください。

関連付けられた目標および KPI が互いに関連し、因果関係を識別できるようにします。この関係を定期的に確認し、コラボレーションおよび通信を増加させることで既存の目標および KPI に影響を及ぼす改善が必要な領域を識別します。

戦略マップの作成を参照してください。

戦略マップの作成

戦略マップには、スコアカードに定義されている目標およびその進捗を測定する KPI とパースペクティブとの関係が示されます。

戦略マップは、ユーザーが実際の結果と目標を比較するのに便利です。

1. 戦略マップを作成するスコアカードを編集します。
2. 「スコアカードのドキュメント」ペインで**「新規オブジェクト」**ボタンをクリックし、**「戦略マップの作成」**を選択します。
3. 「図」タブで、次のようにマップを作成します。
   - 次のとおり、進捗を測定する目標および KPI を「戦略」ペインから図にドラッグ・アンド・ドロップして追加します。
     - 目標または KPI が特定のパースペクティブに関係付けられている場合、図の任意の場所にそれをドロップします。それは、目標または KPI が関連付けられているパースペクティブのセクションに自動的に表示されます。

       目標または KPI は、作成(または編集)時にパースペクティブと関係付けます。
     - 目標または KPI にのパースペクティブが関連付けられていない場合、目標または KPI を関連付けるのパースペクティブのセクションにそれをドロ

ップします。この場合の、目標または KPI へのパースペクティブの割当ては永続的ではありません。

- (オプション)右クリックして**「関連戦略ノードの追加」**を選択し、選択されたノード(目標または KPI を表す)と直接因果関係にあるオブジェクトを図に追加します。
- 必要に応じて因果関係を追加します。
  - 因果関係を追加するには、**「戦略マップ」タブ**のツールバーで**「2 つの目標間の因果関係の描画」**ボタンをクリックして一方のノードを選択し、次に他方のノードを選択します。ノードを結ぶ線が表示されます。
  - マップからノードを削除するには、ノードを右クリックして**「ダイアグラムから削除」**を選択します。

4. 使用方法:
   - ノードの操作を行うオプションを表示するには、**「オプション」**ボタン(ノードの右側)をクリックしてノード・オプション・メニューを表示します。
   - 因果関係を編集するには、関係線を右クリックし、**「因果関係の編集」**を選択します。「因果関係」ダイアログが表示されます。
   - 因果関係を削除するには、関係線を右クリックし、**「因果関係の削除」**を選択します。
   - ターゲット値や差異などの KPI の他のパフォーマンス・データを表示するには、表示の下部中央にある下向きの矢印をクリックします。このデータを縮小するには、上向き矢印をクリックします。
   - 図でズーム・インまたはズーム・アウトを行うには、スコアカード・エディタ: 「戦略マップ」タブのツールバー・ボタンを使用します。
   - コメントの操作:
     - ノードの右上隅の**「コメント」**ボタンにマウス・ポインタを合せ、「ステータス」ウィンドウを表示すると、以前に追加されたコメントを読んだり、別のコメントを追加したり、コメントに返信できます。
     - コメントを追加するノードの右側にある**「オプション」**ボタンをクリックし、ノード・オプション・メニューから**「コメントの追加」**を選択します。「新規コメント」ダイアログが表示され、コメントを追加したり、以前に追加されたコメントを読むことができます。
   - 自分がビジネス所有者であるノードのステータスのオーバーライドを操作するには、次のようにします。
     - ノードの赤のアスタリスク(表示されている場合)にマウスを合せ、「ステータス」ウィンドウを表示すると、以前に適用されたオーバーライドを表示したり、別のオーバーライドを適用できます。
     - ステータスのオーバーライドを適用するノードの右側にある**「オプション」**ボタンをクリックし、ノード・オプション・メニューから**「ステータスのオーバーライド」**を選択します。「ステータスのオーバーライド」ダイアログが表示され、別のオーバーライドを適用したり、以前に適用されたオーバーライドを表示することができます。
5. 「戦略マップ」タブの**「詳細」**タブをクリックします。

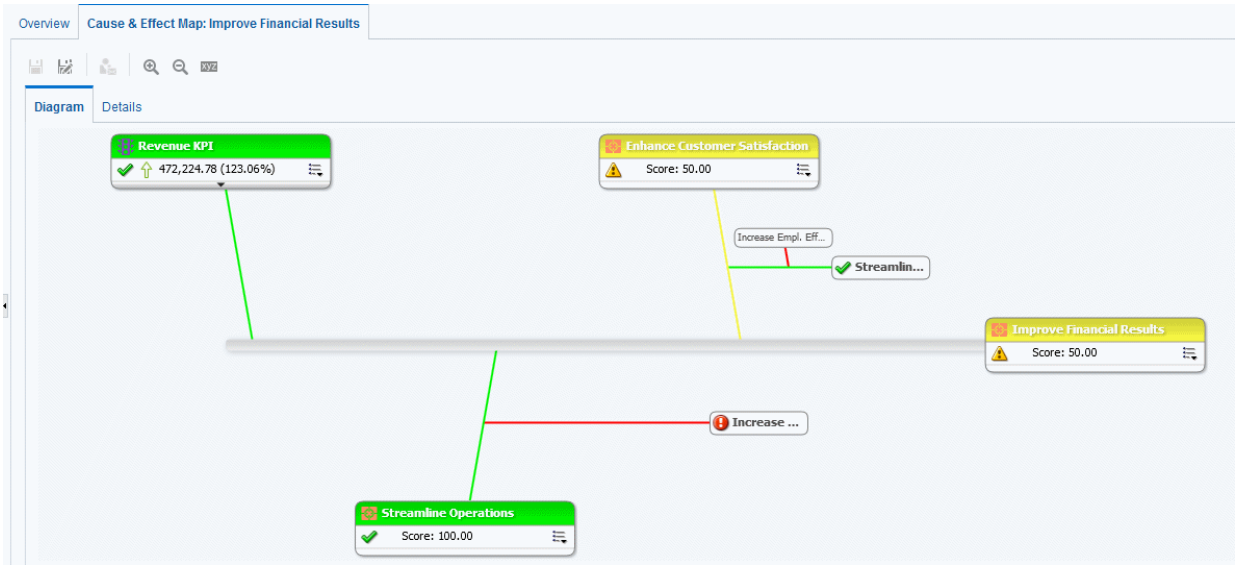
6. 必要に応じて、説明を指定し、ビジネス所有者を割り当て、関連ドキュメントを指定します。(デフォルトでは、ビジネス所有者は、スコアカードの作成者です。)

7. **「保存」**をクリックして「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。「名前を付けて保存」ダイアログで、デフォルトの名前を使用せず、戦略マップの名前を変更できます。

原因と結果マップとは

原因と結果マップでは、「戦略」ペインに表示されている目標または KPI の因果関係を表すことができます。原因と結果マップはスコアカードで使用される図で、マップ・ビューとは関係がありません。ダッシュボードでの表示用のビューの追加を参照してください。

図に、Improve Financial Results 目標の原因と結果マップの例を示します。



次の因果関係を作成します。

- 目標(目標の作成または編集時に次を確認する場合):
  - 目標に影響を及ぼしたり、目標をサポートする他の目標または KPI(原因)
  - この目標が影響を及ぼしたり、サポートする他の目標または KPI(結果)

  目標の作成を参照してください。
- KPI(KPI の詳細の操作時)
  - KPI に影響を及ぼしたり、KPI をサポートする他の目標または KPI(原因)
  - この KPI が影響を及ぼしたり、サポートする他の目標または KPI(結果)

  KPI 詳細の使用を参照してください。

原因と結果マップでは、因果関係の比例(因果関係のパフォーマンスまたは値の変化が正比例するか(直接)、反比例するか(逆)と因果関係の強さ(強い、中程度、弱い)も記号を使用して示されます。

原因と結果マップは、将来的な戦略の変更の影響に関する理解を深めるのに役立ちます。

原因と結果関連を作成して、運用メトリックと依存関係が自動的に表示されるようにします。

原因と結果マップは、編集モードでも表示モードでも作成できます。

- 編集モードでは、原因と結果マップを作成して保存できます。
- 表示モードでは、一時的な読取り専用の原因と結果マップを作成できます。保存はできません。

  「スコアカード」エディタでの編集モードと表示モードの使用を参照してください。

原因と結果マップの作成を参照してください。

原因と結果マップの作成

原因と結果マップは、「戦略」ペインに表示されているいずれの目標または KPI に対しても作成できます。

原因と結果マップとはを参照してください

1. 必要に応じて、次のことを行います:
   - 原因と結果マップを作成して保存するには、原因と結果マップを作成するスコアカードを編集します。
   - 一時的な読取り専用の原因と結果マップを作成するが保存しない場合は、原因と結果マップを作成するスコアカードを開きます。
2. 「戦略」ペインで目標または KPI を右クリックし、**「原因と結果マップの表示」**を選択します。

   「原因と結果マップ」タブの「図」タブが表示されます。
3. 使用方法:
   - ノードの操作を行うオプションを表示するには、ノードを右クリックするか、**「オプション」**ボタン(ノードの右側)をクリックしてノード・オプション・メニューを表示します。
   - ターゲット値や差異などの KPI の他のパフォーマンス・データを表示するには、ノードの下部中央にある下向きの矢印をクリックします。このデータを縮小するには、上向き矢印をクリックします。
   - 因果関係を編集するには、関係線を右クリックし、**「因果関係の編集」**を選択します。「因果関係」ダイアログが表示されます。
   - 因果関係を削除するには、関係線を右クリックし、**「因果関係の削除」**を選択します。
   - 図のズーム・インおよびズーム・アウト、またはプリファレンスの設定は、スコアカード・エディタの「原因と結果マップ」タブのツールバー・ボタンを使用して行います。
   - コメントの操作:
     - ノードの右上隅の**「コメント」**ボタンにマウス・ポインタを合せ、「ステータス」ウィンドウを表示すると、以前に追加されたコメントを読んだり、別のコメントを追加したり、コメントに返信できます。
     - コメントを追加するノードの右側にある**「オプション」**ボタンをクリックし、ノード・オプション・メニューから**「コメントの追加」**を選択します。

「新規コメント」ダイアログが表示され、コメントを追加したり、以前に追加されたコメントを読むことができます。

- 自分がビジネス所有者であるノードのステータスのオーバーライドを操作するには、次のようにします。
  - ノードの赤のアスタリスク(表示されている場合)にマウスを合せ、「ステータス」ウィンドウを表示すると、以前に適用されたオーバーライドを表示したり、別のオーバーライドを適用できます。
  - ステータスのオーバーライドを適用するノードの右側にある**「オプション」**ボタンをクリックし、ノード・オプション・メニューから**「ステータスのオーバーライド」**を選択します。「ステータスのオーバーライド」ダイアログが表示され、別のオーバーライドを適用したり、以前に適用されたオーバーライドを表示することができます。

4. 原因と結果マップでの因果関係の表示方法を指定するには、スコアカード・エディタの「原因と結果マップ」タブで**「原因と結果マップ・プリファレンス」**ボタンをクリックします。
5. 「原因と結果マップ・プリファレンス」ダイアログの**「一般」**タブで、因果関係の表示方法を指定し、**「OK」**をクリックします。
6. **「詳細」**タブをクリックします。
7. 必要に応じて、説明を指定し、ビジネス所有者を割り当て、関連ドキュメントを指定します。(デフォルトでは、ビジネス所有者は、スコアカードの作成者です。)
8. **「保存」**をクリックして「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。「名前を付けて保存」ダイアログで、デフォルトの名前を使用せず、原因と結果マップの名前を変更できます。

ウォッチリストの理解

ウォッチリストとは、スコアカードの特定の観点に関係し、特定の目的のためにグループ化された、スコアカード・オブジェクト(つまり、イニシアチブ、目標および KPI)をリストする表です。

一部のウォッチリストはスコアカード・オブジェクトのコンポーネントです。これらには、次のウォッチリストが含まれます。

- **「イニシアチブと KPI」ウォッチリスト** - イニシアチブのパフォーマンスを評価するために使用する子イニシアチブおよび KPI がリストされます。

  このウォッチリストは、イニシアチブの詳細タブの「分析」ペインに表示されます。

- **「目標と KPI」ウォッチリスト** - 目標のパフォーマンス評価に使用されるか、ビュー(つまり、原因と結果マップ、カスタム・ビュー、戦略ツリーまたは戦略マップ)に表示される、子目標と KPI がリストされます。

  このウォッチリストは次のタブに表示されます。

  - 「スコアカード」エディタの目標の詳細タブの「分析」ペイン
  - 「原因と結果マップ」タブの「詳細」タブ
  - 「カスタム・ビュー」タブの「詳細」タブ
  - 「戦略マップ」タブの「詳細」タブ
  - 「戦略ツリー」タブの「詳細」タブ

- **「目標、イニシアチブ、KPI」ウォッチリスト** - パースペクティブに関連付けられているイニシアチブ、目標および KPI がリストされます。

  このウォッチリストは、「スコアカード」エディタの「パースペクティブ」タブに表示されます。

特定の目的に利用するために作成する他のウォッチリストです。これらには、次のウォッチリストが含まれます。

- **「KPI」ウォッチリスト** - パフォーマンスがモニター対象になっている KPI がリストされます。

  このウォッチリストは、「KPI ウォッチリスト」エディタの「パフォーマンス」タブに表示されます。KPI ウォッチリストとはを参照してください。

- **スマート・ウォッチリスト** - 指定した基準を満たすスコアカード内のイニシアチブ、目標および KPI がリストされます。

  このウォッチリストは、「スコアカード」エディタの「スマート・ウォッチリスト」タブに表示されます。スマート・ウォッチリストとはを参照してください。

- **ブレークダウン・ウォッチリスト** - イニシアチブまたは目標のパフォーマンスを評価するために使用される子または子孫のイニシアチブまたは目標および KPI がリストされます。

  このウォッチリストは、「スコアカード」エディタのブレークダウン・タブに表示されます。

ウォッチリストには、これらのオブジェクトを表示および管理できるようにする、スコアカード・オブジェクト(ステータス、差分率(%)など)およびコンポーネント(**ビュー**や**サマリー**など)が含まれています。

たとえば、Enhance Customer Satisfaction という名前の目標のパフォーマンスの評価に使用される、% Early Shipped と Fulfillment Days という 2 つの目標で構成される「目標と KPI」ウォッチリストを作成できます。

ウォッチリストのカスタマイズ

「スコアカードの設定」ダイアログの「ウォッチリストのスタイル」タブを使用して、スコアカード、目標、イニシアチブ、パースペクティブ、スマート・ウォッチリスト、カスタム・ビュー、戦略ツリー・ビュー、戦略マップおよび原因結果マップで使用されるウォッチリストをカスタマイズすることができます。

スコアカード内の各ウォッチリストで、次のレベルのウォッチリスト・スタイルのカスタマイズ、列の順序の変更、列の表示/非表示の切替え、および列のラベルの変更を行えます。

- スコアカード: スコアカードのウォッチリストで、それ専用の個別のスタイルや列のカスタマイズが設定されていないすべてのウォッチリストに適用されます。
- 個別のウォッチリスト: 個別のウォッチリストに適用されます。個別のウォッチリスト・スタイルはスコアカード・レベルのスタイルを上書きします。

ウォッチリストのスタイルが設定されていない場合は、デフォルトのスタイルが使用されます。

次の書式設定オプションを含めて、ウォッチリストをカスタマイズすることができます。

- フォント名 - フォント名は手動で入力する必要があります。使用環境で使用されている Web ブラウザでサポートされているフォント名にする必要があります。
- 太字 - 「はい」または「いいえ」または「デフォルト」

- 斜体 - 「はい」または「いいえ」または「デフォルト」
- 境界スタイル
- 境界色
- フォントの色
- 背景色

個々のセル(行および列)タイプに前述の書式を別々に設定したり、ウォッチリストの代替行に別のスタイルを適用することができます。

あるセルから別のセルにスタイルをコピーして貼り付けたり、あるセルのスタイルをワン・クリックで行全体に適用することができます。また、ヘッダー行や選択した(クリックした)行にスタイルを設定することもできます。

ウォッチリストをカスタマイズするには:

1. ウォッチリストをカスタマイズするスコアカードを編集します。
2. 「スコアカード」エディタで**「スコアカードの設定」**ボタンをクリックします。
3. **「ウォッチリストのスタイル」**タブをクリックします。

   「ウォッチリストのスタイル」タブが表示されます。
4. オプション: 「プリセット・スタイル」リストから、自分の組織用のスタイルを選択します。
5. オプション: **「オブジェクト・タイプ・アイコンの表示」**を選択して、「KPI」、「目標」または「イニシアチブ」ノード・タイプのアイコンをウォッチリスト行に表示します。
6. オプション: 代替行のスタイルをカスタマイズする場合は**「代替行スタイル設定の有効化」**を選択します。
7. 「表示」リストを使用して、列の表示/非表示を切り替えたり、列の名前を変更します。

   同様に、各ウォッチリストの上にある「表示」リストを使用して、個別のウォッチリストをカスタマイズできます。
8. 編集アイコンを使用して、次のセル(行または列)タイプの書式を設定します。
   - サマリー - ウォッチリスト表の上に表示される情報
   - 列のヘッダー行の各列
   - ボディ行の各列
   - 代替ボディ行の各列
   - 選択された(クリックされた)行
9. 各セル(行または列)タイプで、次を選択します。
   - フォント名 - ブラウザでサポートされているフォント名を手動で入力します
   - 太字 - 「はい」または「いいえ」または「デフォルト」
   - 斜体 - 「はい」または「いいえ」または「デフォルト」

- 境界スタイル
- フォントの色
- 背景色
- 境界色

10.「**スタイルの適用**」をクリックし、「**OK**」をクリックします。

KPI ウォッチリストとは

KPI ウォッチリストは、パフォーマンスのモニター対象の KPI のコレクションです。

KPI ウォッチリストを作成できます:

- スコアカード内。スコアカード内に KPI ウォッチリストを作成し、目標やイニシアチブの進捗の表示や確認に役立てます。スコアカード内に作成する KPI ウォッチリストは、スコアカードの一部として保存されます。スマート・ウォッチリストとはを参照してください
- スコアカード外。この場合、スコアカードの作成または編集前に KPI ウォッチリストを作成します。スコアカード外に作成する KPI ウォッチリストは、スタンドアロン・オブジェクトとして Oracle BI プレゼンテーション・カタログに保存されます。

KPI と KPI ウォッチリストの使用を参照してください。

KPI 詳細の使用

イニシアチブまたは目標を作成する際、その進捗とパフォーマンスを測定する KPI を割り当てることができます。

スコアカード内の KPI は、「スコアカード」エディタの KPI の詳細タブを使用して操作できます。

具体的には、次のことができます。

- 基本的な KPI の設定および実際の値とターゲット値を示すグラフを表示します。
- KPI に定義されているラベル、説明およびビジネス所有者をオーバーライドします。
- ディメンションを固定します。ディメンションおよび固定されたディメンション値とはを参照してください
- KPI の補足情報を含むドキュメントを表示します。
- KPI に関連付けられているアクションを実行します。
- KPI にパースペクティブを関連付けます。
- インディケータ・タイプ(先行など)を指定し、KPI のパフォーマンスが、他の KPI に影響を及ぼすか、他の KPI のパフォーマンスまたは他のデータやプロセスの影響を受けるかを示します。
- コメントの表示、追加または返信を行います。
- KPI の原因であるか KPI に影響を及ぼす、イニシアチブと KPI(「イニシアチブ」ペインに表示されている KPI の場合)、または目標と KPI(「戦略」ペインに表示されている KPI の場合)を指定します。

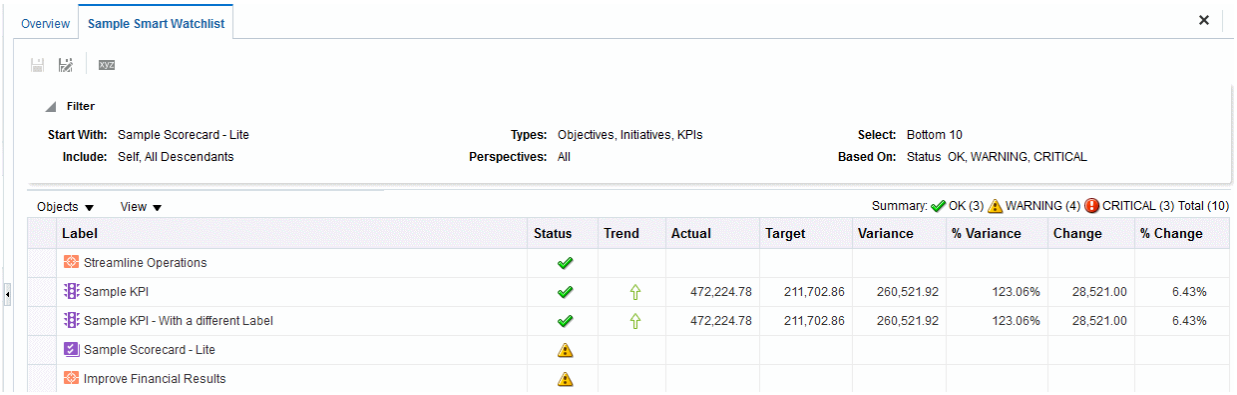
1. KPI を含むスコアカードを編集します。
2. KPI の割当て先に応じて、次のようにします。
   - イニシアチブの場合、「イニシアチブ」ペインで KPI をダブルクリックします。
   - 目標の場合、「戦略」ペインで KPI をダブルクリックします。
3. KPI の詳細タブで、次のタスクを実行できます。
   - 次のいずれかの項目をオーバーライドします。
     - ラベル(*「ラベル」* フィールドを使用)
     - 説明(**「説明」** フィールドを使用)
     - ビジネス所有者(「コラボレーション」ペインの **「ビジネス所有者」** フィールドを使用)
   - 「分析」ペインの **「ディメンション」** 領域を使用してディメンションを固定します。
   - 「分析」ペインの **「アクション」** 領域のアクション・リンクを使用して、KPI に関連付けられているアクションを実行します。
   - 「分析」ペインの **「パースペクティブ」** フィールドを使用して、KPI とパースペクティブを関連付けます。
   - 「分析」ペインの **「インディケータ・タイプ」** フィールドを使用して、インディケータ・タイプを指定します。
   - 「コラボレーション」ペインを使用して、コメントの表示、追加または返信を行います。
   - 「コラボレーション」ペインの **「関連ドキュメント」** 領域を使用して、KPI の補足情報を含むドキュメントを表示します。
   - 「関連アイテム」ペインを使用して、KPI の原因または結果の目標を指定します。
4. 変更したら、**「保存」** をクリックします。

スマート・ウォッチリストとは

スマート・ウォッチリストとは、指定した基準に基づいた、特定のスコアカードに対するビューのことです。

たとえば、スマート・ウォッチリストには、スコアカードのパフォーマンス上位 10 位までの KPI、または特定のビジネス所有者が所有するスコアカードのすべての目標、イニシアチブおよび KPI などを表示できます。

図に、Improve Financial Results 目標とそのすべての子孫のスマート・ウォッチリストの例を示します。



スマート・ウォッチリストは、次のコンポーネントで構成されます。

- **「フィルタ」ペイン** - このペインは、「スマート・ウォッチリスト・プロパティ」ダイアログの**「フィルタ基準表示」**コンポーネントの設定によって、コントロール・パネルまたテキスト・サマリーとして表示されるか、非表示になります。表示方法が次の場合:
  - コントロール・パネル。スマート・ウォッチリストをフィルタするために使用する条件を指定できるタブが表示されます。オブジェクト関係、オブジェクト・タイプ、パースペクティブのアソシエーション、パフォーマンス、およびビジネス所有者の割当てでフィルタできます。
  - テキスト・サマリー。現在のフィルタ基準の読取り専用のテキスト・サマリーが表示されます。
- **スマート・ウォッチリスト** - 「フィルタ」ペインに指定した基準を満たす、スコアカード内の目標、イニシアチブおよびKPIがリストされます。
- **スマート・ウォッチリスト・ツールバー** - スマート・ウォッチリストを保存したり、「フィルタ」ペインの表示方法(つまり、コントロール・パネル、読取り専用のテキスト・サマリーまたは非表示)などのスマート・ウォッチリストのプロパティを指定できるボタンが含まれています。

適切なビジネス所有者を指定してパフォーマンスを後押しするもの(目標およびイニシアチブ)を適切に関係付け、規定した望ましい結果を得られるように目標およびターゲット設定を進めることを確約する合意に利害関係者間で達するためのルートとして、スマート・ウォッチリストを作成します。

スマート・ウォッチリストを作成できるのは、「編集」モードのみです。

「表示」モードでは、スマート・ウォッチリストを表示でき、コントロール・パネルとして表示される「フィルタ」ペインとしてスマート・ウォッチリストが保存された場合は、フィルタ基準を指定して、スマート・ウォッチリストに表示される内容を動的に変更できます。

「スコアカード」エディタでの編集モードと表示モードの使用を参照してください。

スマート・ウォッチリストをダッシュボードに追加することもできます。コントロール・パネルとして表示される「フィルタ」ペインとしてスマート・ウォッチリストが保存された場合は、エンド・ユーザーがフィルタ基準を指定して、スマート・ウォッチリストに表示される内容を動的に変更できます。

スマート・ウォッチリストの作成を参照してください。

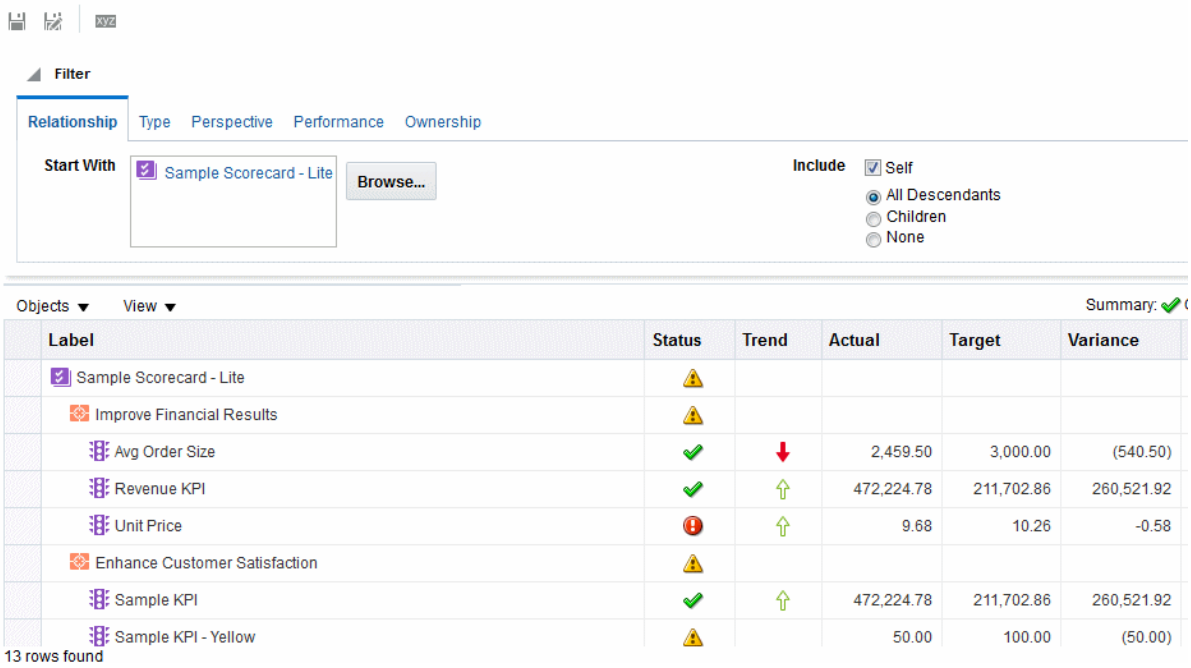
スマート・ウォッチリストの作成

スマート・ウォッチリストとは、指定した基準に基づいた、特定のスコアカードに対するビューのことです。

スマート・ウォッチリストでは、データの重要な変更があるとユーザーにアラートが表示されます。

1. スマート・ウォッチリストの作成対象のスコアカードを編集します。
2. 「スコアカードのドキュメント」ペインで**「新規オブジェクト」**ボタンをクリックし、**「スマート・ウォッチリストの作成」**を選択します。

   図に、スマート・ウォッチリストの例を示します。



3. 「フィルタ」ペインで、フィルタ基準を指定します。
   a. 「関係」タブで、スコアカード・オブジェクトをフィルタするオブジェクト関係を指定します。「戦略」ペインおよび「イニシアチブ」ペインからオブジェクトを「関係」タブにドラッグ・アンド・ドロップして、目標、イニシアチブまたはKPIを追加できます。
   b. 「タイプ」タブで、スコアカード・オブジェクトをフィルタするオブジェクト・タイプを指定します。
   c. 「パースペクティブ」タブで、スコアカード・オブジェクトをフィルタするパースペクティブのアソシエーションを指定します。
   d. 「パフォーマンス」タブで、スコアカード・オブジェクトをフィルタするパフォーマンス基準(ステータス、スコアまたはランキング)を指定します。
   e. 「所有権」タブで、スコアカード・オブジェクトをフィルタするビジネス所有者の割当てを指定します。
4. スマート・ウォッチリストのプロパティを設定します。これを行うには、**「プロパティ」**ボタンをクリックして「スマート・ウォッチリスト・プロパティ」ダイアログを表示します。
5. 必要に応じて、スマート・ウォッチリストを管理します。
6. **「保存」**をクリックして「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。「名前を付けて保存」ダイアログで、デフォルトの名前を使用せず、スマート・ウォッチリストの名前を変更できます。

カスタム・ビューとは

カスタム・ビューでは、ビジネスと戦略のデータのカスタマイズされたビューが表示されます。

たとえば、会社のロゴなどの選択した背景イメージに、目標と KPI に関する情報を表示できます。カスタム・ビューの作成を参照してください。

カスタム・ビューは、編集モードでのみ作成できます。「スコアカード」エディタでの編集モードと表示モードの使用を参照してください。

カスタム・ビューの作成

スコアカードには、データ分析の表示方法を変更するためにカスタム・ビューを含めることができます。

参加者用にカスタマイズされたスコアカードのビューを作成できます。

1. カスタム・ビューを作成するスコアカードを編集します。
2. 「スコアカードのドキュメント」ペインで**「新規オブジェクト」**ボタンをクリックし、**「カスタム・ビューの作成」**を選択します。
3. 「図」タブで、目標と KPI を「戦略」ペインから図にドラッグ・アンド・ドロップします。
4. 各目標または KPI の図での表示方法を指定します。各目標または KPI を図上で選択し、次のいずれかの表示方法を指定します:
   - 完全バージョン。これを行うには、**「全体」**ボタンをクリックします。
   - 簡易バージョン。これを行うには、**「単純」**ボタンをクリックします。
   - プロパティの 1 つ。これを行うには、***「プロパティ」***ボタンをクリックし、プロパティを選択します。
5. (オプション)**「プロパティ」**ボタンをクリックして「カスタム・ビューのプロパティ」ダイアログを表示し、背景イメージまたは背景色あるいはその両方を指定します。
6. 使用方法:
   - ノードの操作を行うオプションを表示するには、**「オプション」**ボタン(ノードの右側)をクリックしてノード・オプション・メニューを表示します。
   - ターゲット値や差異などの KPI の他のパフォーマンス・データを表示するには、ノードの下部中央にある下向きの矢印をクリックします。このデータを縮小するには、上向き矢印をクリックします。
   - 図でズーム・インまたはズーム・アウトを行うには、「カスタム・ビュー」タブのツールバー・ボタンを使用します。
   - コメントの操作:
     - ノードの右上隅の**「コメント」**ボタンにマウス・ポインタを合せ、「ステータス」ウィンドウを表示すると、以前に追加されたコメントを読んだり、別のコメントを追加したり、コメントに返信できます。
     - コメントを追加するノードの右側にある**「オプション」**ボタンをクリックし、ノード・オプション・メニューから**「コメントの追加」**を選択します。「新規コメント」ダイアログが表示され、コメントを追加したり、以前に追加されたコメントを読むことができます。

- 自分がビジネス所有者であるノードのステータスのオーバーライドを操作するには、次のようにします。
  - ノードの赤のアスタリスク(表示されている場合)にマウスを合せ、「ステータス」ウィンドウを表示すると、以前に適用されたオーバーライドを表示したり、別のオーバーライドを適用できます。
  - ステータスのオーバーライドを適用するノードの右側にある**「オプション」**ボタンをクリックし、ノード・オプション・メニューから**「ステータスのオーバーライド」**を選択します。「ステータスのオーバーライド」ダイアログが表示され、別のオーバーライドを適用したり、以前に適用されたオーバーライドを表示することができます。

7. **「詳細」**タブをクリックします。
8. 必要に応じて、説明を指定し、ビジネス所有者を割り当て、関連ドキュメントを指定します。(デフォルトでは、ビジネス所有者は、スコアカードの作成者です。)
9. **「保存」**をクリックして「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。「名前を付けて保存」ダイアログで、デフォルトの名前を使用せず、原因と結果マップの名前を変更できます。

スコアカード・オブジェクトのオープン

スコアカード・オブジェクトを開いているときにはいくつかのオプションが利用可能です。

スコアカード・オブジェクトを開くには:

1. オブジェクトを含むスコアカードを開くか、編集します。
2. 開くには:
   - 目標の場合、「戦略」ペインでダブルクリックすると、目標の詳細タブが表示されます。
   - イニシアチブの場合、「イニシアチブ」ペインでダブルクリックすると、イニシアチブの詳細タブが表示されます。
   - ビュー(戦略マップなど)、ミッション・ステートメントやビジョン・ステートメント、KPI ウォッチリストまたはスマート・ウォッチリストの場合、「スコアカードのドキュメント」ペインで対象をダブルクリックします。ダブルクリックしたオブジェクトに応じて、次のいずれかのタブが表示されます。
     - 「原因と結果マップ」タブ
     - 「カスタム・ビュー」タブ
     - 「戦略マップ」タブ
     - 「戦略ツリー」タブ
     - 「KPI ウォッチリスト」タブ
     - 「スマート・ウォッチリスト」タブ
     - 「ミッション」タブ
     - 「ビジョン」タブ
   - パースペクティブの場合、「パースペクティブ」ペインでダブルクリックすると、「パースペクティブ」タブが表示されます。

- KPI の場合、次で KPI をダブルクリックします:
  - 「戦略」ペインまたは「イニシアチブペイン。KPI の詳細タブが表示されます。
  - 「スコアカード」の「カタログ」ペイン「KPI」タブが表示されます。
- オブジェクトの場合、オブジェクトを選択し、タブのツールバーの**「開く」**ボタンをクリックするか、イニシアチブまたは目標を右クリックして**「開く」**オプションを選択することもできます。

スコアカード・オブジェクトの編集

スコアカード・オブジェクトは、「スコアカード」エディタで編集できます。

スコアカード・オブジェクトは、「カタログ」ペインでも編集できます。Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトの管理を参照してください。

1. 編集対象のスコアカード・オブジェクトを含むスコアカードを開きます。
2. オブジェクトをダブルクリックします。たとえば、目標を編集するには、「戦略」ペインで目標をダブルクリックし、戦略マップを編集するには、「スコアカードのドキュメント」ペインで戦略マップをダブルクリックします。

   戦略ツリーの場合、戦略ツリーの詳細のみ編集でき、図は編集できません。
3. 変更を加えます。
4. **「保存」**をクリックします。

スコアカード・オブジェクトの削除

スコアカード・オブジェクトは、「スコアカード」エディタから削除できます。

スコアカード・オブジェクトは、カタログ・ページから削除することもできます。Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトの管理を参照してください。

注意: イニシアチブを削除する前に、イニシアチブが完了していることや目標の達成に必要ないことを確認してください。目標を削除する前に、子目標またはリンクされている他の目標がないかを調べ、削除によってこれらの目標にマイナスの影響がないことを確認してください。

---

1. 削除対象のスコアカード・オブジェクトを含むスコアカードを開きます。
2. オブジェクトを右クリックし、**「削除」**を選択します。たとえば、戦略マップを削除するには、「スコアカードのドキュメント」ペインで戦略マップを右クリックし、**「削除」**を選択します。
3. 確認ダイアログで、オブジェクトの削除を確定します。

ダッシュボードへのスコアカード・オブジェクトの追加

特定のタイプのスコアカード・オブジェクトはダッシュボードに追加できます。

次のスコアカード・オブジェクトをダッシュボードに追加できます。

- 原因と結果マップ。原因と結果マップとはを参照してください
- カスタム・ビュー。カスタム・ビューとはを参照してください
- 戦略マップ。戦略マップとはを参照してください

- 戦略ツリー。戦略ツリーとはを参照してください
- KPI ウォッチリスト。KPI ウォッチリストとはを参照してください
- スマート・ウォッチリスト。スマート・ウォッチリストとはを参照してください

ノート: スコアカードのビジュアライゼーション(たとえば、スマート・ウォッチリストや原因と結果マップ)をダッシュボードに組み込むと、インタラクティブな分析をしやすくなります。

追加情報は、ダッシュボードへのコンテンツの追加を参照してください。

トラブルシューティング

様々なソースでトラブルシューティング情報を検索できます。

Oracle Scorecard and Strategy Management の使用時に発生する問題の解決には、次の情報が役立ちます。

- ロギングの詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*の Oracle Business Intelligence の問題の診断および解決を参照してください。
- コメントの追加およびステータスのオーバーライド機能が有効でない場合、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition メタデータ・リポジトリ作成者ガイド*の Oracle Scorecard and Strategy Management のリポジトリの構成を参照してください。
- スコアカード・オブジェクトの作成またはアクセス機能の問題については、Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトの管理および *Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のプレゼンテーション・サービス権限の管理にある権限および許可に関する情報を参照してください。

14

Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトの管理

この章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の Oracle BI プレゼンテーション・カタログを使用して、ビジネス・インテリジェンス・オブジェクトを保存および管理する方法を説明します。ここでは、オブジェクトの検索、お気に入りの使用、オブジェクトへの権限の割当て、オブジェクトの所有権の割当てまたは取得、およびオブジェクトのアーカイブを実行する方法を説明します。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- Oracle BI プレゼンテーション・カタログとは
- カタログの使用者
- ビジネス・インテリジェンス・オブジェクトの保存
- オブジェクトの検索方法
- カタログ内のオブジェクトの検索
- オブジェクト固有のタスク
- お気に入りとは
- お気に入りへのオブジェクトの追加
- お気に入りオブジェクトへのアクセス
- お気に入りの編成
- お気に入りからのオブジェクトの削除
- 分析、KPI および分析プロンプト・データのエクスポート
- プロパティへのアクセス
- Oracle BI EE のセキュリティのレベル
- 権限とは
- オブジェクトの権限の割当て方法
- アクセス制御リストと権限
- 権限定義
- オブジェクト・タイプごとに使用可能な権限

- 権限の設定に関する推奨事項
- 権限の割当て
- オブジェクトの所有者とは
- オブジェクトの所有権の割当て
- オブジェクトの所有権の取得
- アーカイブとは
- オブジェクトのアーカイブ

Oracle BI プレゼンテーション・カタログとは

Oracle BI プレゼンテーション・カタログ(カタログ)にはビジネス・インテリジェンス・オブジェクトが格納され、ユーザーがオブジェクトの作成、アクセスおよび管理を行ったり、特定のオブジェクト・ベースのタスク(エクスポート、印刷、編集など)を実行するインタフェースを提供します。カタログは、共有または個人のいずれかのフォルダに編成されます。

Oracle BI EE が Oracle アプリケーションと統合されている場合、アプリケーション内に作成されたオブジェクトはカタログ内にも格納されます。たとえば、Oracle BI Publisher が Oracle BI EE と統合されている場合、データ・モデル、レポートおよびスタイル・テンプレートとサブテンプレートはカタログにも格納され、カタログからもアクセスできます。

Oracle BI プレゼンテーション・カタログで実行できる操作の多くは、Oracle BI プレゼンテーション・サービスの外部にあるカタログ・マネージャでも実行できます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のカタログ・マネージャでのオブジェクトの操作を参照してください。

カタログの使用者

様々なユーザーがカタログにアクセスできます。

Oracle BI EE には、3 つの主なユーザーであるコンテンツ・コンシューマ、コンテンツ設計者およびカタログ管理者があります。各ユーザーのカタログ内でのタスクは異なるため、各ユーザーに表示されるカタログのインタフェースも異なります。あるユーザーが使用できる機能を、他のユーザーが使用できないことがあります。また、ユーザーが使用できるカタログの機能とオブジェクトは、プレゼンテーション・サービス管理者によって指定された権限と、コンテンツ設計者によって通常設定されるオブジェクトの個々の権限によって異なります。

コンテンツ・コンシューマはカタログ・ページを使用して、日常の業務を行うのに必要なビジネス・インテリジェンス・オブジェクトを表示します。たとえば、営業部長は、中部地区および東部地区での特定ブランドの飲料の週単位の売上をモニターする分析にアクセスする必要があります。コンテンツ設計者とカタログ管理者が設定した権限によって、コンテンツ・コンシューマが個々のコンテンツおよびカタログ内で実行できるタスクが決まります。たとえば、企業 A のコンテンツ・コンシューマは、割り当てられたオブジェクトのみ検索、表示および操作できますが、企業 B のコンテンツ・コンシューマは、コンテンツの検索と操作およびコンテンツの作成と個人フォルダへの格納も行えます。

コンテンツ設計者は、コンテンツ・コンシューマ向けにコンテンツを作成する個々のユーザーです。コンテンツ設計者がオブジェクトの作成、編集、テストおよびトラブルシューティングを効率よく行うには、カタログへの広範なアクセスが必要です。彼らがアクセスするカタログの機能は、コンテンツ・コンシューマがアクセスする機能よりも広範です。ただし、コンテンツ・コンシューマ同様、コンテンツ設計者の権限は管理者によって設定されます。たとえば、あるコンテンツ設計者は、営業機能エリアのパブリック・フォルダに対してコンテンツを格納したり、取得する必要がありま

すが、業務機能エリアに対してはこの操作は必要ありません。また、あるコンテンツ設計者は、プレゼンテーション・サービスに別のユーザーとしてサイン・インして新規コンテンツや改訂したコンテンツをテストできるよう、いくつかのグループに割り当てられる必要があります。

管理者は、カタログへの最も広範なアクセスを必要としますが、ただし、彼らのアクセスも、プレゼンテーション・サービス管理者がロールに割り当てた権限によって決まります。通常、管理者が行うカタログのタスクには、カタログ・オブジェクトとフォルダへの権限の設定、カタログのアーカイブ、ディレクトリ構造の作成と管理、システム・データとユーザー・データの管理などがあります。

ノート: 時間の経過とともに、リンク切れ、ユーザーの削除またはNFSファイル・システムの問題発生により、カタログに不整合が生じる可能性があります。カタログを定期的に検証し、不整合について通知を受け取って修正処理を行うことができます。検証の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のカタログ・マネージャの使用によるカタログの検証を参照してください。

ビジネス・インテリジェンス・オブジェクトの保存

作成したオブジェクトをカタログのフォルダに保存することができます。

命名規則の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のオブジェクト名のガイドラインを参照してください。

1. ビジネス・インテリジェンス・オブジェクトを作成または編集し、エディタのツールバーで**「保存」**または**「名前を付けて保存」**をクリックします。
2. 「名前を付けて保存」ダイアログで、オブジェクトの保存先のカタログの場所を選択します。

   - `My Folders`フォルダ内、または変更の権限を持つシステム・フォルダ内に格納用のサブフォルダを作成できます。
   - Oracle BI EEでは、任意のタイプのビジネス・インテリジェンス・オブジェクトをカタログ内の任意の場所に保存できます。ただし、Oracle BI EEの「名前を付けて保存」ダイアログに、提案されるカタログの場所が表示されるオブジェクト・タイプもあります。たとえば、名前付きフィルタを作成する場合は、同じサブジェクト領域を使用して分析を作成して、これに保存したフィルタを追加する場合に使用できるよう、サブジェクト領域フォルダ(`/My Folders/Subject Area Contents/Paint`)に保存する必要があります。
   - アクション、エージェント、分析、BI Publisherオブジェクト、ブリーフィング・ブック、条件、KPI、プロンプトの各オブジェクトは、カタログ内の任意の場所に保存できます。
   - 計算項目、カスタム・グループ、フィルタの各オブジェクトは、サブジェクト領域フォルダに保存することをお薦めします。サブジェクト領域フォルダが`/My Folders`フォルダまたは`/Shared Folders`フォルダ内にない場合、Oracle BI EEによってサブジェクト領域フォルダが作成され、「名前を付けて保存」ダイアログのデフォルトの保存パスが`/My Folders/Subject Area Contents/<subject area>`に設定されます。サブジェクト領域フォルダに保存することで、同じサブジェクト領域から分析を作成する際、これらのオブジェクトを使用できるようになります。
   - ダッシュボードは任意のカタログの場所に保存できます。ただし、ダッシュボードをグローバル・ヘッダーの「≪ダッシュボード | Dashboards | Bifndn ≫」メニューに表示する場合は、ダッシュボードを第1レベルのダッシュボード・フォルダに保存する必要があります。たとえば、「≪ダッシュボード |

Dashboards ｜ Bifndn≫」メニューにダッシュボードを含めるには、次の場所にダッシュボードを保存します: `/Shared Folders/Sales Projections/Dashboards`。「≪ダッシュボード ｜ Dashboards ｜ Bifndn ≫」メニューからダッシュボードを除外するには、次の場所にダッシュボードを保存します: `/Shared Folders/Sales Projections/Dashboards/Design Time`。ダッシュボードの保存の詳細は、他の名前と他の場所でのダッシュボードの保存を参照してください。

3. 「**OK**」をクリックします。

次の手順を使用して、My Folders 内にサブフォルダを作成したり、必要な権限がある場合はサブフォルダを作成します。

1. カタログ・ページで、「フォルダ」ペイン内の適切な場所に移動します。
2. カタログ・ツールバーで、「**新規**」をクリックし、「**フォルダ**」を選択します。
3. 「新規フォルダ」ダイアログでフォルダ名を入力し、「**OK**」をクリックします。

オブジェクトの検索方法

BI 検索のクロールの構成を使用するようにシステムが構成されているかどうかに応じて、基本カタログ検索または全文カタログ検索を使用して、Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のオブジェクトを検索できます。

カタログには、ユーザーまたは他のユーザーが定義して、将来使用するために保存した内容(分析やダッシュボードなど)が含まれています。カタログを検索して、使用または変更する内容を見つけることができます。たとえば、先週作成したブランド売上分析を検索できます。このようにして、その分析のグラフを棒グラフから折れ線グラフに変更できます。

カタログ・ページを使用して、日常の業務を行うのに必要なビジネス・インテリジェンス・オブジェクトを表示します。たとえば、営業アナリストは、中部地区および東部地区での特定ブランドの飲料の週単位の売上をモニターする分析にアクセスする必要があります。カタログ管理者が設定した権限によって、アナリストがコンテンツに対して、およびカタログ内で実行できるタスクが決まります。

- **基本カタログ検索** - これは標準の検索オプションです。この検索タイプでは、完全名、説明、場所およびオブジェクト・タイプのみを指定してオブジェクトを検索できます。基本カタログ検索を参照してください。
- **全文カタログ検索** - 全文カタログ検索を可能にするには、管理者が BI 検索の索引付け(クロール)を構成して有効にする必要があります。この検索タイプでは、完全名、説明、場所、オブジェクト・タイプ、オブジェクト属性、データ列名およびデータ列値などを指定してオブジェクトを検索できます。全文カタログ検索を参照してください。

基本カタログ検索

基本カタログ検索では、適切な権限を持つユーザーがグローバル・ヘッダーまたはカタログ・ページからオブジェクトを検索できます。

カタログ・ページでは、基本カタログ検索を使用して、オブジェクトの完全名、説明、場所およびタイプのみを指定してオブジェクトを検索できます。適切な権限のあるオブジェクトのみ検出できます。目的のオブジェクトが見つかったら、権限に応じてオブジェクトをクリックして表示し、確認または編集できます。

全文カタログ検索

全文検索を使用して、名前、説明、作成者、オブジェクトが参照する列の名前や値など、様々な検索値を入力してオブジェクトを検索できます。

全文カタログ検索では、適切な権限を持つユーザーがオブジェクトを拡張検索できます。この拡張検索機能は、管理者が BI 検索の構成クロールを構成して有効にした場合にのみ使用できます。構成されると、全文カタログ検索は、基本カタログ検索と同様に、グローバル・ヘッダーまたはカタログ・ページから使用できます。

ユーザーが全文カタログ検索を実行すると、クロールおよび索引付けが実行されたそれらのオブジェクトで、個別のユーザーが適切な権限を持つものが特定されます。ダッシュボードやレポートなどのオブジェクトで**「索引付けしない」**属性が選択されたものは、索引付けされません。

全文検索の結果のリストには、基準に合い、最低でもユーザーが**「開く」**権限を持つオブジェクトが含まれます。オブジェクトがフォルダに格納されている場合、ユーザーは「トラバース」フォルダ権限と**「開く」**オブジェクト権限を持っている必要があります。**「アクセス権なし」**権限のオブジェクトは使用できません。

全文検索に関する次の情報に注意してください。

- キーワードを使用して検索しても、検索結果にはデータとメタデータの両方が含まれます。各カタログ・オブジェクトについて、メタデータ(名前、パス、作成者、変更日、最終アクセス日、タイプおよび説明など)とデータ(列名、ヘッダー名、列値、プロンプト式、列式、プロンプト値など)の両方が索引付けされ、検索結果として使用できるようになります。
- デフォルトの検索演算子は **OR** です。検索用語は複数指定でき、検索用語が含まれる数が最も多いものが最も高い検索ヒットとなります。

マーケティング・セグメンテーション・オブジェクトおよび階層列などのいくつかの例外以外、Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内のほぼすべてのタイプのオブジェクトを検索できます。

カタログ内のオブジェクトの検索

カタログ内のオブジェクトを検索するのに、検索機能の構成レベルを使用できます。

システムの構成に応じて、基本検索または全文検索の機能を使用します。オブジェクトの検索方法を参照してください

全文検索を実行する際、新しく作成されて索引に含められたオブジェクトはクロールが実行されるまでは検出されません。

グローバル・ヘッダーを使用して検索を実行できます。

1. グローバル・ヘッダーの**「検索」**フィールドで、下向きの矢印をクリックし、検索対象のオブジェクト・タイプを選択します。
2. **「検索」**フィールドの隣のフィールドにカーソルを置き、オブジェクトの名前または説明の一部または全部を入力します。
3. **「検索」**をクリックして、検索を開始します。検索基準に合う結果が含まれたカタログ・ページが表示されます。検索方法の詳細は、「検索」ペインを参照してください。

カタログ・ページの機能を使用して、検索基準を指定します。この検索方法は、オブジェクトの名前、場所またはタイプがわかっている場合に便利です。次のタスクを使用して、基本検索および完全統合型全文検索を実行します。

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。
2. カタログ・ページで、**「検索」**ボタンをクリックします。
3. 「検索」ペインで検索基準を指定します。次のオプションを検討してください:
   - **検索**: 入力した文字が名前に含まれるすべてのオブジェクトとフォルダが表示されます。

- **場所**: このオプションは基本検索にのみ使用できます。検索するフォルダを選択します。管理者と管理権限のあるユーザーは、カタログのルート・フォルダを検索できます。ただし、ルート・フォルダを検索するには、管理ビューにいる必要があります。
- **タイプ**: このオプションは基本検索にのみ使用できます。検索対象のオブジェクトの種類(KPI、スコアカード、フィルタなど)を選択します。

4. 非表示の項目を検索するには、カタログ・ページのヘッダーにある**「非表示項目の表示」**ボックスを選択します。
5. **「検索」**をクリックします。

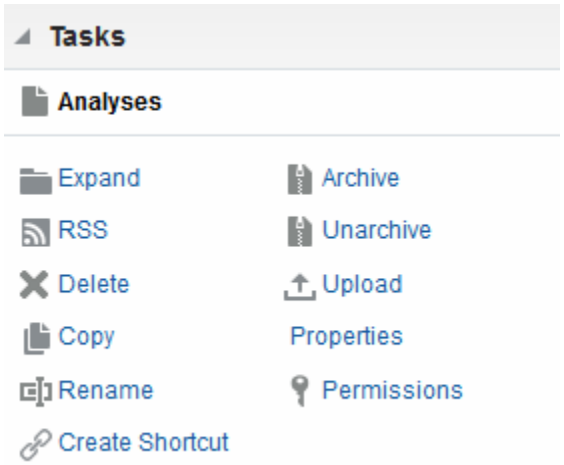
   検索基準を満たすフォルダまたはオブジェクトが「カタログ」領域に表示されます。

オブジェクト固有のタスク

オブジェクトで実行できる固有のタスクがあります。

「カタログ」ペインから選択したオブジェクトに対して実行できるタスクは、選択したオブジェクトのタイプ(ダッシュボード、KPI など)とオブジェクトに設定された権限によって決まります。実行できるタスクのリストは、カタログ・ページ内にあるか、オブジェクトの**「詳細」**リンクからアクセスする「タスク」ペインに表示されます。

図に、カタログから選択された分析に使用できるタスクを示します。この図には、オブジェクトの使用可能なタスク(展開、RSS、削除、コピー、名前変更、ショートカットの作成、アーカイブ、アンアーカイブ、アップロード、プロパティおよび権限)が表示されています。



ほとんどの場合、オブジェクトを開いたり、コピーできます。ただし、分析を選択した場合、分析に対してエージェントを作成したり、分析をエクスポートできます。ダッシュボードを選択した場合、オブジェクトに割り当てられた権限に応じて、ダッシュボードの公開またはアーカイブを行えます。

ノート: 新しいバージョンの Oracle Business Intelligence にアップグレードし、カタログ内のオブジェクトを操作する場合、特定のオブジェクトに旧リリースほど素早くアクセスできない可能性があります。この変化は、オブジェクトが正しくアップグレードされなかった場合に生じることがあります。オブジェクトのアップグレードの詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のカタログ・オブジェクトの更新を参照してください。

お気に入りとは

お気に入り機能を使用すると、定期的に表示したり、別の機会に再度表示するカタログ・オブジェクトをお気に入りとしてブックマークできます。

複数のオブジェクトをお気に入りとして設定した後は、「お気に入りの管理」ダイアログを使用して、カタログを作成し、直観的にわかるようにお気に入りを再配置して編成します。お気に入りとしてマークしたオブジェクトや作成したカテゴリのリストは、グローバル・ヘッダーの**「お気に入り」**をクリックしてアクセスできます。

お気に入りのリストにアクセスしたり、お気に入りリストに対してオブジェクトを追加および削除するには、Oracle Business Intelligence Mobile を使用できます。ただし、Oracle BI Mobile からお気に入りを編成したり、管理することはできません。Oracle BI EE デスクトップおよび Oracle BI Mobile のお気に入りリストは、いずれかの Oracle BI EE インスタンスにログインすると、変更内容が同期されます。

お気に入りへのオブジェクトの追加

オブジェクトをお気に入りリストに追加する方法は複数あります。

定期的に表示したり、別の機会に再度表示するカタログ・オブジェクトはお気に入りとしてブックマークできます。たとえば、カタログのロイヤル顧客分析を定期的に表示する場合があります。分析をお気に入りとしてフラグを付けます。オブジェクトをお気に入りリストに追加すると、そのオブジェクトのアイコンが更新されて金色の星が組み込まれます。

ホーム・ページまたはカタログ・ページを使用してオブジェクトをお気に入りリストに追加するには:

1. ホーム・ページまたはカタログ・ページに移動し、お気に入りリストに追加するオブジェクトを参照します。
2. **「詳細」**リンクをクリックし、次に**「お気に入りに追加」**をクリックします。オブジェクトがお気に入りリストに追加されます。

表示中または編集中のオブジェクトをお気に入りリストに追加するには:

1. オブジェクトを指定のビューアまたはエディタで開きます。
2. グローバル・ヘッダーで**「お気に入り」**にマウスを移動し、**「お気に入りに追加」**をクリックします。オブジェクトがお気に入りリストに追加されます。

お気に入りオブジェクトへのアクセス

オブジェクトをお気に入りとして設定した後は、グローバル・ヘッダーの**「お気に入り」**メニューを使用してお気に入りのリストを表示し、お気に入りオブジェクトを参照して選択できます。

お気に入りへのオブジェクトの追加を参照してください。

Oracle Business Intelligence Mobile を使用して、お気に入りリストにアクセスすることもできます。お気に入りとはを参照してください

1. グローバル・ヘッダーで**「お気に入り」**メニューにマウスを合せます。お気に入りのマークを設定したオブジェクトのリストが表示されます。
2. オブジェクトおよびカテゴリのリストをスクロールし、オブジェクトをクリックして選択します。

お気に入りの編成

次のタスクを使用して、お気に入りリストの項目を編成します。

お気に入りの編成は、Oracle BI EE デスクトップでのみ操作できます。お気に入りリストに対する変更内容は、モバイル・デバイスからログインすると、Oracle Business Intelligence Mobile のお気に入りリストに対して同期されます。

お気に入りカテゴリを作成するには:

1. グローバル・ヘッダーで**「お気に入り」**メニューにマウスを合せます。お気に入りのマークを設定したオブジェクトのリストが表示されます。
2. **「お気に入りの管理」**をクリックします。「お気に入りの管理」ダイアログが表示されます。
3. カテゴリ・ツリーまたは選択カテゴリ領域で、新規カテゴリを追加する場所を参照および選択します。
4. ツールバーで、**「新規カテゴリ」**をクリックします。「新規カテゴリ」ダイアログが表示されます。
5. カテゴリの一意の名前を指定します。**「OK」**をクリックします。
6. 新規カテゴリが表示されます。

お気に入りオブジェクトを再配置するには:

1. グローバル・ヘッダーで**「お気に入り」**メニューにマウスを合せます。お気に入りのマークを設定したオブジェクトのリストが表示されます。
2. **「お気に入りの管理」**をクリックします。「お気に入りの管理」ダイアログが表示されます。
3. カテゴリ・ツリーまたは選択カテゴリ領域で、再配置するカテゴリまたはオブジェクトの場所を参照します。次の操作を実行して、お気に入りを再配置することができます。
   - オブジェクトまたはカテゴリを選択し、移動ボタンをクリックしてオブジェクトをお気に入りリストで上下に移動します。
   - オブジェクトをカテゴリにドラッグ・アンド・ドロップします。カテゴリを別のカテゴリにドラッグ・アンド・ドロップして、カテゴリをネストします。
   - ある場所からオブジェクトまたはカテゴリをコピーし、別の場所に貼り付けます。
   - カテゴリの名前を変更します。
   - 選択したカテゴリまたはカテゴリ内のオブジェクトを、アルファベットの昇順または降順でソートします。

   「お気に入りの管理」ダイアログを参照してください。
4. **「OK」**をクリックします。再配置されたオブジェクトとカテゴリがお気に入りリストに保存され、表示されます。

お気に入りからのオブジェクトの削除

項目をお気に入りリストから削除できます。

定期的にアクセスする必要がなくなったオブジェクトをお気に入りリストから削除できます。たとえば、定期的にアクセスする必要がなくなった、前年のロイヤル顧客分析をお気に入りリストから削除できます。

Oracle Business Intelligence Mobile を使用して、オブジェクトをお気に入りリストから削除することもできます。

お気に入りリストからオブジェクトを削除した後、金色の星が付いたアイコンから、オブジェクトの標準アイコンにオブジェクトのアイコンが変更されます。

ホーム・ページまたはカタログ・ページを使用してオブジェクトをお気に入りリストから削除するには:

1. ホーム・ページまたはカタログ・ページに移動し、お気に入りリストから削除するオブジェクトを参照します。
2. **「詳細」**リンクをクリックし、次に**「お気に入りから削除」**をクリックします。お気に入りリストからオブジェクトが削除されます。

表示中または編集中のオブジェクトをお気に入りリストから削除するには:

1. オブジェクトを指定のビューアまたはエディタで開きます。
2. グローバル・ヘッダーで**「お気に入り」**メニューにマウスを合せます。お気に入りのマークを設定したオブジェクトのリストが表示されます。
3. **「お気に入りから削除」**をクリックします。お気に入りリストからオブジェクトが削除されます。

「お気に入りの管理」ダイアログを使用してオブジェクトをお気に入りリストから削除するには:

1. グローバル・ヘッダーで**「お気に入り」**メニューにマウスを合せます。お気に入りのマークを設定したオブジェクトのリストが表示されます。
2. **「お気に入りの管理」**をクリックします。「お気に入りの管理」ダイアログが表示されます。
3. 削除するオブジェクトを参照して選択します。
4. **「削除」**をクリックします。
5. **「OK」**をクリックします。リストからオブジェクトが削除されます。

分析、KPI および分析プロンプト・データのエクスポート

データを流用して他のアプリケーションで使用するために、分析、KPI、分析のプロンプト値とデータをエクスポートできます。

PDF、Web アーカイブ、スプレッドシート、PowerPoint プレゼンテーション、データ・ファイルなどの様々な形式にエクスポートできます。たとえば、サプライヤが在庫管理分析の結果を Microsoft Excel で確認できるように、この分析をエクスポートできます。

Oracle Business Intelligence Publisher レポートは、ダッシュボードまたはダッシュボード・ページに埋め込まれている場合、エクスポートすることができます。

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。
2. カタログ・ページで、エクスポートするオブジェクトを検索します。
3. 「フォルダ」ペインで、エクスポートするオブジェクトを選択します。
4. オブジェクトを選択してタスクを実行します。
   - ドキュメントの下で、**「詳細」**、**「エクスポート」**の順に選択します。
   - 「タスク」ペインで**「エクスポート」**ボタンを選択します。
5. 形式を選択します。**「データ」**リストには、**「CSV 形式」**、**「タブ区切り形式」**および**「XML 形式」**オプションが含まれています。

プロパティへのアクセス

管理ユーザーは、任意のオブジェクトまたはフォルダのプロパティにアクセスして、システム情報の表示やアクセス・レベルの変更などのタスクを実行できます。

ユーザーは、自分が作成または所有するオブジェクトのプロパティへのアクセスや変更を行えます。たとえば、他のユーザーが変更できないように、ブランド売上分析を読取り専用に変更する場合です。

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。
2. カタログ・ページで、プロパティを割り当てるオブジェクトを検索します。
3. 「フォルダ」ペインで、オブジェクトまたはフォルダを選択します。
   - ドキュメントの下で、**「詳細」**、**「プロパティ」**の順に選択します。
   - 「タスク」ペインで**「プロパティ」**ボタンをクリックします。
4. 「プロパティ」ダイアログに表示された設定を確認するか変更します。

Oracle BI EE のセキュリティのレベル

Oracle BI EE では、許可されているデータにのみユーザーがアクセスできるセキュリティ・メカニズムがサポートされます。

セキュリティの設定および保守に関する具体的な情報は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*の Oracle Business Intelligence のセキュリティの概要を参照してください。一般的なものとして、次のタイプのセキュリティがあります:

- **サブジェクト領域セキュリティ。**このセキュリティ・メカニズムでは、サブジェクト領域、フォルダおよび列などのオブジェクトへのアクセスが制御されます。たとえば、特定の部門のコンテンツ設計者は、分析エディタの使用時に自分の部門に属するサブジェクト領域のみ表示できます。
- **カタログ・オブジェクト・セキュリティ。**このセキュリティ・メカニズムは、ダッシュボード、ダッシュボード・ページ、フォルダおよび分析など、Oracle BI プレゼンテーション・カタログに格納されたオブジェクトのセキュリティを実現します。ユーザーは、許可されているオブジェクトのみ表示できます。たとえば、ミドル・マネージャには、部門全体のサマリー情報が含まれるダッシュボードへのアクセス権が付与されていない可能性があります。権限とはを参照してください
- **データ・レベル・セキュリティ。** このセキュリティ・メカニズムでは、分析で使用できるデータのタイプと量が制御されます。複数のユーザーが同じ分析を実行した場合、アクセス権と社内での役職によって各ユーザーに返される結果は異なります。たとえば、営業担当副社長は全地域の結果を表示できますが、ある地域の営業担当は、その地域のデータのみ表示できます。

Oracle Business Intelligence のセキュリティ・メカニズムでは、Siebel CRM アプリケーションなどの運用アプリケーションで定義されたセキュリティ階層を使用して、管理者が複数のセキュリティ・システムを管理する必要性を最小限にします。セキュリティ・メカニズムでは、Oracle Business Intelligence アプリケーション内の要素へのアクセスを詳細に制御することもできます。

権限とは

オブジェクトの所有者または適切な権限や許可が付与されているユーザーは、カタログ・オブジェクトに権限を割り当てることができます。

権限は、ユーザーまたはロールに付与する、特定のアクションまたはアクションのグループをカタログ・オブジェクトに対して実行する許可です。たとえば、営業部門に所属し、四半期の売上予測を含むダッシュボードを作成した場合、このダッシュボードの読取りアクセス権を全営業部員に付与し、読取り、書込み、削除の各アクセス権を営業本部長と副社長に付与します。

権限は Oracle BI EE のセキュリティ・モデルの一部であり、権限の最初の割当て方法は、ユーザー、ロールおよびグループのシステムでの設定と、Oracle BI EE 管理者がユーザー、ロールおよびグループに付与した権限に基づきます。

オブジェクトの権限の割当て方法

オブジェクト権限は様々なユーザーが割り当てることができます。

フォルダ、Oracle BI Publisher オブジェクトまたはその他のオブジェクトの権限は、オブジェクト所有者、コンテンツ設計者またはカタログの管理者のいずれかによって割り当てられます。コンテンツ設計者以外のユーザーがオブジェクトに権限を割り当てるには、そのユーザーにオブジェクトの所有権が与えられ、プレゼンテーション・サービス管理者によって「≪権限の変更｜ Change Permissions ｜ Bifndn≫」権限が付与され、さらに「≪カスタム権限｜ Custom Permissions ｜ Bifndn≫」ダイアログにリストされた「≪権限の変更｜ Change Permissions ｜ Bifndn≫」オブジェクト権限が与えられている必要があります。「≪カスタム権限｜ Custom Permissions ｜ Bifndn≫」権限の設定方法の詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*のプレゼンテーション・サービス権限の管理を参照してください。

コンテンツ設計者がオブジェクトを作成してフォルダに保存すると、オブジェクトは、フォルダに設定された権限を継承します。オブジェクトの保存後、コンテンツ設計者は、カタログの「タスク」ペインまたはオブジェクトの**「詳細」**リンクを表示してオブジェクトを特定し、「権限」ダイアログにアクセスしてオブジェクトの権限を変更できます。オブジェクトの「読取り専用」プロパティ(「プロパティ」ダイアログで設定)が選択されている場合、所有者以外はオブジェクトの権限を変更できません。この読取り専用設定は、「権限」ダイアログで設定されたどの権限より基本的に優先されます。

オブジェクトを使用する場合、「権限」ダイアログを使用して、次のようにユーザーにオブジェクト権限を割り当てます。

- **アプリケーション・ロールに:** これが、推奨される権限の割当て方法です。アプリケーション・ロールによって、ユーザーとその割当ての保守が簡単になります。アプリケーション・ロールでは、システムのアイデンティティ・ストアにそのロールを持つユーザーまたはグループに付与される権限のセットが定義されます。アプリケーション・ロールは、特定の条件に応じて割り当てられます。このため、アプリケーション・ロールは、認証が発生した時点の条件に基づいて動的に付与されます。

  アプリケーション・ロールの詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*の Fusion Middleware Control を使用したアプリケーション・ロールおよびアプリケーション・ポリシーの管理を参照してください。

- **個々のユーザーに** - 許可と権限を特定のユーザーに付与できますが、そのような割当ての保守は難しいため、この方法は推奨されません。

アクセス制御リストと権限

アクセス制御リストには、アカウントが Oracle BI プレゼンテーション・カタログ内の共有オブジェクトにアクセスできるかどうかが定義されます。

アカウントは、アプリケーション・ロールまたは個々のユーザーです。権限は、アカウントに許可されているオブジェクトへのアクセスのタイプを表します。たとえば、「開く」や「フル・コントロール」です。

各カタログ・オブジェクトには、どのアカウントがオブジェクトにアクセスするためのどの権限を持っているかが定義されたアクセス制御リストが設定されています。アクセス制御リストは、オブジェクトの対応する属性(.atr)ファイルに格納されています。アクセス制御リストは通常、この表に示すような形式です。

アカウント	権限
ApplicationRole1	開く
ApplicationRole4	フル・コントロール
ApplicationRole3	開く
ユーザー 4	開く
ユーザー 9	フル・コントロール
ユーザー 11	フル・コントロール

権限定義

オブジェクト(カタログ内のフォルダやダッシュボード内のセクションなど)へのアクセスを制御するには、アプリケーション・ロールおよびユーザーに権限を割り当てます。

割り当てることのできる権限は、対象のオブジェクトのタイプによって異なります。

「権限」ダイアログで使用可能な権限は、通常は親権限であり、これは、各親権限に複数の子権限があることを意味します(たとえば、「開く」権限がフォルダに適用されている場合、そのフォルダのユーザーは、そのフォルダに格納されている Oracle BI Publisher レポートの読取りやトラバースが可能で、そのレポートを実行することもできます)。各オブジェクトに対してカスタム権限を作成せずに、親権限を適用することは、権限を一貫して割り当てて保持する簡単な方法です。使用可能な親権限は、操作するオブジェクト・タイプ(フォルダ、BI Publisher オブジェクトまたはビジネス・インテリジェンス・オブジェクト)によって異なります。BI Publisher オブジェクトには、レポート、データ・モデル、サブ・テンプレートおよびスタイル・テンプレートが含まれています。ビジネス・インテリジェンス・オブジェクトには、分析、ダッシュボード、KPI、スコアカードおよびプロンプトが含まれています。

「権限」ダイアログで「カスタム」権限を選択すると、「カスタム権限」ダイアログが表示され、オブジェクトに適用する権限を選択できます。たとえば、フォルダ・オブジェクトの場合、「移動」、「読取り」および「削除」権限を選択できます。

次の表では、各権限の名前と定義を示します。オブジェクト・タイプごとに使用可能な権限を参照してください。

権限	説明
読取り	このオプションを使用して、オブジェクトへのアクセスを許可しますが、変更は許可しません。
書込み	このオプションを使用して、オブジェクトの編集を許可します。
削除	このオプションを使用して、オブジェクトの削除を許可します。

権限	説明
トラバース	このオプションを使用して、選択されたフォルダに対する権限がユーザーにない場合に、選択されたフォルダ内のオブジェクトへのアクセスを許可します。これらのオブジェクトへのアクセスが必要なのは、フォルダ内のオブジェクト(分析など)が、ユーザーのアクセスが許可されているダッシュボードまたは WebCenter Portal アプリケーションのページに埋め込まれている場合です。 たとえば、/Shared Folders/Test フォルダへの**「移動」**権限をユーザーに付与した場合、ユーザーは、`/Shared Folders/Test` フォルダに格納されているオブジェクト、およびそのサブフォルダ(`/Shared Folders/Test/Guest` フォルダなど)に格納されているオブジェクトに、カタログ、埋込みダッシュボードまたは WebCenter Portal アプリケーション・ページからアクセスできます。ただし、ユーザーは、カタログからフォルダおよびサブフォルダ自体にアクセス(表示、展開または参照)することはできません。
Publisher レポートの実行	このオプションを使用して、読取り、オブジェクトを含むフォルダのトラバース、および最新のデータを含めるためのレポートの再生成を許可します。
Publisher レポートのスケジュール	このオプションを使用して、読取り、オブジェクトを含むフォルダのトラバース、およびレポートのスケジュールを許可します。
Publisher レポートの表示	このオプションを使用して、読取り、オブジェクトを含むフォルダのトラバース、および表示を許可しますが、レポートの再生成は許可しません。
実行	このオプションを使用して、アクション、エージェント、ブリーフィング・ブックなどのオブジェクトの実行を許可します。
権限の変更	このオプションを使用して、オブジェクトの権限の変更を許可します。
所有権の設定	このオプションを使用して、オブジェクトの所有権の再割当てを許可します。
フル・コントロール	このオプションを使用して、オブジェクトに対するすべてのタスク(変更や削除など)の実行を許可します。
アクセス権なし	このオプションを使用して、オブジェクトへのアクセスを拒否します。明示的なアクセスの拒否は、他の権限より優先されます。
変更	このオプションを使用して、オブジェクトの読取り、書込みおよび削除を許可します。
開く	このオプションを使用して、オブジェクトへのアクセスを許可しますが、変更は許可しません。Oracle BI Publisher オブジェクトを使用する場合、このオプションによって、オブジェクトを含むフォルダをトラバースできます。
カスタム	このオプションを使用して「カスタム権限」ダイアログを表示し、読取り、書込み、実行および削除権限を付与します。
権限付与	このオプションを使用して、ダッシュボード内のセクションへのアクセスを許可します。この権限は、ダッシュボードにのみ設定できます。この権限は、セクションのオブジェクトに設定された、該当するロールおよびユーザーからアクセスされないようにするカタログ権限(アクセス権なしなど)をオーバーライドします。ダッシュボードとそのページのプロパティの変更を参照してください。

権限	説明
拒否	このオプションを使用して、ダッシュボード内のセクションへのアクセスを拒否します。この権限は、ダッシュボードにのみ設定できます。この権限は、セクションのオブジェクトに設定された、該当するロールおよびユーザーにアクセスを許可するカタログ権限(表示など)をオーバーライドします。ダッシュボードとそのページのプロパティの変更を参照してください。

オブジェクト・タイプごとに使用可能な権限

「権限」ダイアログで使用可能な権限は、通常は親権限であり、これは、各親権限に複数の子権限があることを意味します。

たとえば、「開く」権限がフォルダに適用されている場合、そのフォルダのユーザーは、そのフォルダに格納されている BI Publisher レポートの読取りやトラバースが可能で、そのレポートを実行することもできます。使用可能な親権限は、操作するオブジェクトによって異なります。

次の表に、親権限と、オブジェクト・タイプ別の対応する子権限のリストを示します。各権限の詳細は、権限定義を参照してください。

親権限	フォルダ	Oracle BI Publisher オブジェクト	オブジェクト
フル・コントロール	すべての権限が含まれます	すべての権限が含まれます	すべての権限が含まれます
変更	読取り、書込みおよび削除	読取り、書込みおよび削除	読取り、書込みおよび削除
開く	読取り、トラバース、BI Publisher レポートの実行	Oracle BI Publisher レポートの実行	読取り
Oracle BI Publisher レポートのスケジュール	フォルダに含まれる BI Publisher レポートのスケジュール、読取りおよびトラバース	Oracle BI Publisher レポートのスケジュール	使用不可
Oracle BI Publisher 出力の表示	フォルダに含まれる BI Publisher レポートの表示、読取りおよびトラバース	Oracle BI Publisher レポートの表示	使用不可
トラバース	フォルダのトラバース	使用不可	使用不可
アクセス権なし	オブジェクトにアクセスできません	オブジェクトにアクセスできません	オブジェクトにアクセスできません

権限の設定に関する推奨事項

管理者がユーザーに対してアクセス権限を設定する際は、特定のガイドラインに従う必要があります。

権限を設定する際、次の推奨事項に従ってください。

- 権限を割り当てる際、自分や管理者、他のユーザーがオブジェクトを変更しないようにすることでオブジェクトがロックされないよう注意してください。
- 単一ユーザーに権限を割り当てる必要がある場合でも、アプリケーション・ロールを使用して権限を割り当てます。アプリケーション・ロールは Oracle BI EE の中核です。

アプリケーション・ロールの詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition セキュリティ・ガイド*の Fusion Middleware Control を使用したアプリケーション・ロールおよびアプリケーション・ポリシーの管理を参照してください。

- アクセス可能なダッシュボードおよびダッシュボード・コンテンツを変更するアプリケーション・ロール(または必要に応じてユーザー)の場合、ロールの権限を「フル・コントロール」に設定します。フル・コントロールでは、変更や削除の他に、指定されたロールが権限を設定したり、オブジェクト、フォルダまたはダッシュボードを削除することもできます。

  多数の様々なユーザーが特定のグループに対するダッシュボード・コンテンツの作成や変更を行う場合、対応する**作成者**のロールを別途作成し、プライマリ・ロールのバックエンド権限をすべて設定して別の名前を付けます。たとえば、Sales ロールと SalesBuilder ロールを作成します。Oracle BI プレゼンテーション・カタログに対する適切な権限を SalesBuilder ロールに付与することで、ダッシュボードとコンテンツに対する変更を行えるユーザーの制御と変更を行えます。セッション変数セキュリティが使用されている場合、セキュリティ情報が含まれているデータベース表でユーザーのロールを **Sales** から **SalesBuilder** に変更することで、ユーザーをダッシュボード作成者またはコンテンツ作成者にすることができます。

- サブジェクト領域ごとに、AuthenticatedUser ロールに、サブジェクト領域フォルダに対する「アクセス権なし」権限が付与されていることを確認します。

- 公開して使用する分析を特定のサブジェクト領域に保存する必要があるロールには、そのサブジェクト領域フォルダとフォルダに含まれるオブジェクトおよび共通フォルダに対してフル・コントロールを付与します。

- 指定されたロールのメンバーのみが、Oracle BI プレゼンテーション・カタログのフォルダ、フォルダ・コンテンツおよびダッシュボードへのアクセス権を持つようにするには、AuthenticatedUser ロールに権限を明示的に設定しないでください。

  ヒント: アプリケーション・ロール内のすべてのユーザーが他のユーザーと分析を共有する場を提供するには、サブジェクト領域フォルダの下に Share や Publish などの名前のフォルダを作成し、そのフォルダのみに対する「変更と削除」権限をロール全体に付与します。

権限の割当て

権限によって、フォルダ、BI Publisher オブジェクトやその他のカタログ・オブジェクトにアクセスできるユーザーが決まります。

フォルダやその他のカタログ・オブジェクトにアクセスできるユーザーを決定するための権限を割り当てることができます。割り当てることのできる権限は、対象のオブジェクトのタイプによって異なります。権限を変更するには、「権限の変更」権限が付与されている必要があります。たとえば、「権限の変更」権限を別の営業コンサルタントに付与する場合があります。これによって、そのユーザーは権限を販売予測分析に割り当てることができます。

カタログのオブジェクトにアクセスするには、ユーザーがそのオブジェクトに対して適切な ACL (アクセス制御リスト)エントリに含まれている必要があります。カタログ内のアラートを除くすべてのオブジェクトで ACL エントリが使用されます。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のカタログ・マネージャでのオブジェクトの操作を参照してください。

次の手順を使用して、オブジェクトに権限を割り当てます。権限定義、オブジェクト・タイプごとに使用可能な権限および権限の設定に関する推奨事項を参照してください。

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。
2. カタログ・ページで、権限を割り当てるオブジェクトを検索します。
3. 「カタログ」領域に移動し、オブジェクトまたはフォルダを特定します。
4. **「詳細」**、**「権限」**の順に選択するか、または「タスク」ペインに移動し、**「権限」**をクリックします。
5. 「権限」ダイアログで、**「ユーザー/ロールの追加」**ボタンをクリックして「アプリケーション・ロールおよびユーザーの追加」ダイアログにアクセスし、必要なアカウントを追加します。
6. 「権限」ダイアログで**「権限」**リストをクリックして権限を選択します。リストに表示される項目のほとんどは親権限で、いくつかの子権限が含まれています。特定の権限のリストを作成するには、**「カスタム」**をクリックします。
7. 「カスタム権限」ダイアログで、**「サブフォルダに権限を適用します。」**、**「フォルダ内の項目に権限を適用します。」**または**「すべての子孫に権限を適用」**オプションを使用して、権限を適用する方法を指定します。
8. **「置換オプション」**リストで、アクセス制御リスト(ACL)のエントリをオブジェクトに対して置換する方法を指定しますが、オブジェクトの子には、**「サブフォルダに権限を適用します。」**、**「フォルダ内の項目に権限を適用します。」**、**「すべての子孫に権限を適用」**のオプションが 1 つ以上選択されている場合にのみ適用されます。

   「リストされたアカウントの置換」または**「リストされたアカウントの削除」**のどちらかを選択した場合は、変更しないエントリを「権限」領域のリストからも必ず削除してください。
9. **「OK」**をクリックします。

オブジェクトの所有者とは

オブジェクト所有者には、オブジェクトを操作するためのすべての権限がある場合やそうでない場合があります。

オブジェクトの所有権は、オブジェクトを作成したユーザーによって付与されるか、または適切な権限を付与されているユーザーによって取得されるかのいずれかです。オブジェクトまたはフォルダの所有者が、そのオブジェクトまたはフォルダに自動的にアクセスできるわけではありません。オブジェクトにアクセスするには、オブジェクトまたはフォルダの「権限」ダイアログで適切な権限が割り当てられている必要があります。

デフォルトでは、カタログ・オブジェクトを作成して、マイ・フォルダと共有フォルダのいずれかに保存したユーザーがオブジェクトを所有します。マイ・フォルダのオブジェクトは、別の所有者に割り当てることはできませんが、共有フォルダに移動して、所有権の再割当てを所有者に許可する権限が管理者によって割り当てられた場合は可能です。この権限が付与されると、オブジェクトの所有権を、「権限」ダイアログに表示される別のユーザーまたはロールに割り当てることができます。たとえば、従業員 A がコンテンツ設計者でマーケティング部門用のダッシュボードを作成したとします。従業員 A はダッシュボードを完成して、マーケティング部門の共有フォルダに保存し、そのダッシュボードの所有権を、マーケティング・マネージャでありダッシュボードの更新を担当する従業員 B に割り当てます。オブジェクトの所有権の割当てを参照してください。

状況によっては、ロールのユーザーまたはメンバーが、共有フォルダにあるオブジェクトの所有権を得る必要があります。この場合、所有権を必要とするユーザーには、このタスクを完了するための適切な権限が割り当てられている必要があります。これらの権限が付与されると、このユーザーの「プロパティ」ダイアログには、**この項目の所有権を取得**オプションと**この項目とすべてのサブ項目の所有権を取得**オプションが表示されるようになります。たとえば、従業員 A に、オブジェクトおよびフォルダ

の所有権を取得する適切な権限が付与されているとします。いくつかのカタログ・オブジェクトを所有する従業員 B が退職した場合、従業員 A は、これらのオブジェクトについて「プロパティ」ダイアログにアクセスし、オブジェクトの所有権を取得し、オブジェクトの所有権を従業員 C に再割当てできるようになります。オブジェクトの所有権の取得を参照してください。

オブジェクトの所有権の割当て

共有フォルダに保存されるオブジェクトまたはフォルダの所有権を割り当てることができます。

オブジェクトの所有権は、そのオブジェクトを作成したユーザーによって付与されます。また、オブジェクトの所有権は、適切な権限を付与されているユーザーによって取得されます。たとえば、ブランド収益分析を作成して、地域の販売アナリストに所有権を付与できます。オブジェクトまたはフォルダの所有権を割り当てることができる「権限」ダイアログにアクセスするための適切な権限が必要です。

オブジェクトの所有者とはおよびオブジェクトの所有権の取得を参照してください。

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。
2. カタログ・ページで、所有権を割り当てるオブジェクトを検索します。
3. 「カタログ」領域に移動し、オブジェクトまたはフォルダを特定します。
4. **「詳細」**、**「権限」**の順に選択するか、または「タスク」ペインに移動し、**「権限」**をクリックします。
5. 「権限」表で、**「所有者」**列に移動し、所有者を指定します。
6. **「OK」**をクリックします。

オブジェクトの所有権の取得

次の手順に従って、共有フォルダに保存されるオブジェクトまたはフォルダの所有権を取得します。

ロールのユーザーまたはメンバーは、そのユーザーまたはメンバーが BIAdministrator ロールに割り当てられている場合、共有フォルダ内のオブジェクトの所有権を取得できます。たとえば、販売グループのメンバーであるユーザーとして、販売予測分析にプロパティを割り当て、自分自身をオブジェクトの所有者としてマーク付けできます。所有権の取得オプションを「プロパティ」ダイアログに表示するには、適切な権限が必要です。

オブジェクトの所有者とはおよびオブジェクトの所有権の割当てを参照してください。

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。
2. カタログ・ページで、所有権を割り当てるオブジェクトを検索します。
3. 「カタログ」領域に移動し、オブジェクトまたはフォルダを特定します。
4. **「詳細」**、**「プロパティ」**の順に選択、または「タスク」ペインに移動し、**「プロパティ」**をクリックします。
5. 「プロパティ」ダイアログの「所有権」領域で、次のいずれかを行います。
   - オブジェクトを操作している場合は、**「この項目の所有権を設定」**リンクをクリックします。
   - フォルダまたはサブオブジェクトを含むオブジェクトを操作している場合は(たとえば、ダッシュボードまたはスコアカード)、**「この項目の所有権を設定」**

リンクをクリックして、オブジェクトのみの所有権を取得します。または**「この項目とすべてのサブ項目の所有権を設定」**をクリックして、オブジェクトおよびサブオブジェクトの所有権を取得します。

6. **「OK」**をクリックします。

アーカイブとは

アーカイブを使用して長期利用や保管のためにデータのグループを保存できます。

アーカイブを使用すると、カタログ全体、特定のフォルダ、またはマルチコンポーネント・オブジェクト(スコアカードなど)を`.catalog`ファイルにまとめ、その`.catalog`ファイルをアップロードして、カタログ内のデータを別の場所にアンアーカイブできます。この処理によって、特定のデータをある環境から別の環境へ転送することができます。たとえば、この機能を使用して、開発環境から本番環境へデータを転送できます。

必要な権限がある場合は、Oracle BI EE カタログ・マネージャを使用して、カタログ・オブジェクトをアーカイブおよびアンアーカイブし、他のカタログ保守タスクを実行できます。カタログ・マネージャの詳細は、*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition システム管理者ガイド*のカタログ・マネージャでのオブジェクトの操作を参照してください。

オブジェクトのアーカイブ

適切なユーザー権限があれば、後で使用するためにオブジェクトをアーカイブできます。

アーカイブを行うには、適切な権限が付与されている必要があります。

アーカイブ・ファイルを作成するには:

1. グローバル・ヘッダーで、**「カタログ」**をクリックします。カタログ・ページが表示されます。
2. アーカイブするオブジェクトを検索します。
3. 「フォルダ」ペインに移動し、オブジェクトを選択します。
4. オブジェクトの下で**「詳細」**、**「アーカイブ」**の順に選択します。「アーカイブ」ダイアログが表示されます。
5. フォルダまたはオブジェクトの権限およびタイムスタンプを保持するか、削除するかを指定します。「アーカイブ」ダイアログを参照してください。
6. **「OK」**をクリックします。

アーカイブ・ファイルをアンアーカイブするには:

1. アップロードするアーカイブ・ファイルを特定します。アーカイブ・ファイルには、`.catalog`拡張子(`_portal.catalog`など)が付けられています。
2. 「フォルダ」ペインに移動し、アーカイブ・ファイルのアップロード先を選択します。
3. 「タスク」ペインに移動し、**「アンアーカイブ」**をクリックします。「アンアーカイブ」ダイアログが表示されます。
4. アーカイブ・ファイルの名前を入力するか、アーカイブ・ファイルを参照します。アーカイブ・ファイルを選択します。
5. **「OK」**をクリックします。

15

BI コンポーザを使用した分析操作

この章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の BI コンポーザについて説明します。ここでは、BI コンポーザを使用して、簡単かつ容易に分析を作成、編集および表示する方法を説明します。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- BI コンポーザとは
- BI コンポーザを使用できる場所
- 分析エディタと BI コンポーザの比較
- BI コンポーザでの分析の作成または編集の手順
- BI コンポーザを使用した分析の作成
- BI コンポーザを使用した分析の編集
- BI コンポーザでの分析の表示
- 分析エディタを使用して作成した分析の編集

BI コンポーザとは

BI コンポーザは操作が容易なウィザードで、これを使用すると、分析の作成、編集または表示を行うことができます。「分析」エディタの複雑さはありません。

ノート:

BI コンポーザは BI Publisher 用のレポート・エディタではありません。

(Oracle BI EE などの)アプリケーションで BI コンポーザを使用できる 2 つのモード、標準モードとアクセシビリティ・モードがあります。アクセシビリティ・モードには通常モードと同じ機能がありますが、JAWS などのスクリーン・リーダー・アプリケーションと併用できるように最適化されています。これにより、視覚障害などアクセシビリティ問題を抱えているユーザーにとって、分析の作成、編集および表示がより容易になります。

ノート: アクセシビリティ・モードのウィザード・ページに表示される、アイコンやチェック・ボックスなどの視覚的な手がかりは、標準モードでの表示と同じです。もしアクセシビリティ・モードのウィザード・ページにテキストベースのウィザード・ページ・リンクのリストが表示されていなくても、JAWS などのスクリーン・リーダー・アプリケーションではそれらを読み取ることができます。

BI コンポーザ・ウィザードのメイン・コンポーネントは次のとおりです。

- ウィザードの最上部には、ウィザード内の各手順のボタンを含む BI コンポーザ・トレインがあります。BI コンポーザでの分析の作成または編集の手順を参照してください
- 左側には「カタログ」タブおよび「サブジェクト領域」タブがあります。(これらのタブは、BI コンポーザが ADF アプリケーション、Oracle WebCenter Portal Framework アプリケーションまたは WebCenter Portal の一部である場合にのみ使用できます。Oracle BI EE の一部である場合は使用できません。)
- タブの右側にはパネル領域があり、ここに各手順でのコンポーネントが表示されます。
- 右端には、「**戻る**」、「**次へ**」、「**終了**」、「**取消**」の各ボタンがあります。

BI コンポーザを使用できる場所を参照してください

BI コンポーザを使用できる場所

BI コンポーザにはいくつかの領域でアクセスできます。

BI コンポーザは、次の場所で使用できます。

- Oracle BI Enterprise Edition(組織にインストールされ構成済の場合)。Oracle BI Enterprise Edition での BI コンポーザの可用性を参照してください。
- Oracle BI Enterprise Edition と統合するために変更された ADF アプリケーション。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 開発者ガイド*の ADF アプリケーションへの BI コンポーザの追加を参照してください。
- Oracle BI Enterprise Edition と統合するために変更された Oracle WebCenter Portal Framework アプリケーションまたは WebCenter Portal。*Oracle Business Intelligence Enterprise Edition 開発者ガイド*の WebCenter Portal Application や WebCenter Portal: Spaces への BI コンポーザの追加を参照してください。

BI コンポーザとはを参照してください。

Oracle BI Enterprise Edition での BI コンポーザの可用性

ユーザーが Oracle BI EE で分析作業を行う場合、次のようにユーザーの選択に応じて、分析エディタのかわりに BI コンポーザが表示される可能性があります。

- ユーザーが分析エディタとして BI コンポーザ・ウィザードを使用することを指定し、Oracle BI EE でアクセシビリティ・モードをオフにしている場合、「分析」エディタのかわりに標準モードの BI コンポーザが表示されます。
- ユーザーが Oracle BI EE でアクセシビリティ・モードをオンにしている場合、「分析」エディタのかわりにアクセシビリティ・モードの BI コンポーザが表示されます。

ユーザー:

- 分析エディタとして BI コンポーザ・ウィザードを使用することを指定するには、「マイ・アカウント」ダイアログの「プリファレンス」タブで**分析エディタ**・コンポーネントの**「ウィザード(制限付き機能)」**オプションを選択します。
- アクセシビリティ・モードのオン/オフを切り替えるには、サインイン・ページで**「アクセシビリティ・モード」**ボックスを選択または選択解除するか、「マイ・アカウント」ダイアログの「プリファレンス」タブで**「アクセシビリティ・モード」**コンポーネントの**「オン」**または**「オフ」**を選択します。

分析エディタと BI コンポーザの比較

分析エディタは、BI コンポーザの分析機能がより単純であるのに対して、追加の編集ツールが備わっています。

分析エディタおよび BI コンポーザはどちらも、ビジネス・プロセスの高度な意思決定を支援する分析コンポーネントとして、同じような目的で使用されます。探索、分析、共有およびビジュアライゼーションによるコラボレーションの向上により、すべてのレベルのビジネス・ユーザーがデータへの洞察力を得ることができます。BI コンポーザと分析エディタには異なる点もあります。計算項目、選択ステップ、複数条件など高度な分析機能を含まない簡易な分析には、BI コンポーザのほうが適しているという点です。洗練され高度に構造化された分析は、分析エディタを使用して編集する必要があります。

BI コンポーザで作業可能なビューのタイプ

BI コンポーザでは、分析を短時間で簡単に作成または編集できます。

次の表では、BI コンポーザで分析を強化するときに使用できるビューとオプションを示します。

ビューまたはオプション	説明
表	表、サマリー表、ピボット表またはサマリー・ピボット表を使用できます。 表ではプロンプトとセクションを使用できます。 詳細は、BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: 表の編集」パネルを参照してください。
≪グラフ｜Graph｜Bifndn≫	次のような様々なタイプのグラフを使用できます。 • 棒 - 縦、横、縦積上げ、横積上げ、100%縦積上げまたは 100%横積上げ • 折れ線 • 散布 • 円 • 折れ線-棒 グラフでは次のような様々なセクションを使用できます。 • プロンプト • セクション • グループ化基準 • 色変更基準 • スライス(円グラフの場合) • 点(散布図の場合) 詳細は、BI コンポーザ・ウィザードの「分析の作成: グラフの編集」パネルを参照してください。

ビューまたはオプション	説明
条件付き書式設定	詳細は、BI コンポーザ・ウィザードの「分析の作成: 強調表示」パネルを参照してください。
列式	詳細は、BI コンポーザ・ウィザードの「分析の作成: 列の選択」パネルを参照してください。
フィルタ	詳細は、BI コンポーザ・ウィザードの「分析の作成: ソートおよびフィルタ」パネルを参照してください。
相互作用	値をクリックしたときに何が起こるかを指定できます。ドリル、トランザクションへのナビゲート、または「なし」の指定により何も行わないようにすることができます。 詳細は、BI コンポーザ・ウィザードの「分析の作成: 列の選択」パネルを参照してください。
ソート	詳細は、BI コンポーザ・ウィザードの「分析の作成: ソートおよびフィルタ」パネルを参照してください。

BI コンポーザでの分析の作成または編集の手順

BI コンポーザで分析を設定または変更するにはいくつかのステップが必要です。

BI コンポーザで分析を作成または編集する手順は次のとおりです。

- **列の選択** - この手順では、分析に含める列を選択します。次のことも可能です:
  - 列の相互作用の指定
  - 列式の指定
  - 列名の変更
  - 列の非表示

  詳細は、BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: 列の選択」パネルを参照してください。
- **ビューの選択** - この手順では、タイトル、表、ピボット表、棒グラフなど、分析に含めるビューを選択します。(BI コンポーザでは、Oracle BI Enterprise Edition で使用できるビューのすべてがサポートされているわけではありません。)結果をプレビューし、関連する XML コードを表示することもできます。詳細は、BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: ビューの選択」パネルを参照してください。
- **表の編集** - この手順では、表形式ビューのレイアウトを編集します(表形式ビューを含めた場合)。たとえば、プロンプトの作成、分析を区分するための列の使用、および特定の列の表形式ビューからの除外ができます。結果のプレビューもできます。詳細は、BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: 表の編集」パネルを参照してください。
- **グラフの編集** - この手順では、グラフのプロパティおよびレイアウトを編集します(グラフ・ビューを含めた場合)。たとえば、プロンプトの作成、分析を区分するための列の使用、グラフからの特定の列の除外ができます。結果のプレビューもできます。詳細は、BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: グラフの編集」パネルを参照してください。

- **ソートおよびフィルタ** - この手順では、ビューにソートおよびフィルタを適用します。結果のプレビューもできます。詳細は、BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: ソートおよびフィルタ」パネルを参照してください。
- **強調表示** - この手順では、表形式ビューに条件付き書式を適用します(表形式ビューを含めた場合)。結果のプレビューもできます。詳細は、BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: 強調表示」パネルを参照してください。
- **保存** - この手順では、分析を同じ名前または別の名前で保存します。次のことも可能です:
  - 分析を保存するための新規フォルダを作成します。
  - フォルダおよび分析の名前を変更します。
  - フォルダおよび分析を削除します。
  - フォルダを展開または縮小します。

詳細は、BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: 保存」パネルを参照してください。

BI コンポーザを使用した分析の作成

Oracle BI EE で、BI コンポーザを使用して分析を作成するには、グローバル・ヘッダーの**「新規」**メニューで**「分析」**オプションを選択するか、またはホーム・ページの**「作成」**領域を選択します。

BI コンポーザとはを参照してください。

1. Oracle BI EE の場合:
   a. グローバル・ヘッダーで「**新規**」、「**分析**」の順にクリックします。
   b. サブジェクト領域を選択します。BI コンポーザ・ウィザードが新規ウィンドウに表示されます。
2. 他のアプリケーション(ADF アプリケーションなど)の場合:
   a. **「サブジェクト領域」**タブをクリックします。
   b. サブジェクト領域を選択します。
   c. **「作成」**をクリックします。
3. 「列の選択」パネルで、分析に含める列を選択します。追加する各列に対して次を行います。
   a. 「サブジェクト領域」リストにある列を選択します。
   b. 「**追加**」をクリックして、これを「選択された列」リストに移動します。

   列を選択するサブジェクト領域を追加または削除するには、「サブジェクト領域」: *Subject_Area_Name* 領域で**「追加」**ボタンをクリックし、「サブジェクト領域の追加/削除」ダイアログを表示します。「選択された列」リストの列に対して、次を行います。

   - 列名を変更するか列の式を指定するには、列を選択して**「列のプロパティ」**をクリックし、BI コンポーザの「列のプロパティ」ダイアログを表示します。

- 列見出し、または列または階層レベルの値をクリックしたときに何が起こるかを指定するには、列の「**相互作用**」リストで次のオプションのいずれかを選択します。
- ビューの列を非表示にするには、列の「**非表示**」ボックスを選択します。
- リストから列を削除するには、列を選択して「**削除**」をクリックします。
- リストからすべての列を削除するには、「**すべて削除**」をクリックします。

4. ウィザードの最上部にある BI コンポーザ・トレインの「**ビューの選択**」ボタンをクリックします。
5. BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: ビューの選択」パネルで、含めるビューを指定します。
   - (オプション) 分析に表形式ビューを含めた場合は、BI コンポーザ・トレインの「**表の編集**」ボタンをクリックします。
   - (オプション) BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: 表の編集」パネルで、表形式ビューのレイアウトを編集します。
   - (オプション) 分析にグラフ・ビューを含めた場合は、BI コンポーザ・トレインの「**グラフの編集**」ボタンをクリックします。
   - (オプション) BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: グラフの編集」パネルで、グラフのプロパティおよびレイアウトを編集します。
   - (オプション) BI コンポーザ・トレインの「**ソートおよびフィルタ**」ボタンをクリックします。
   - (オプション) BI コンポーザ・ウィザードの「分析の作成: ソートとフィルタ」パネルで、ソートおよびフィルタをビューに適用します。
   - (オプション) 分析に表形式ビューを含めた場合は、BI コンポーザ・トレインの「**強調表示**」ボタンをクリックします。「**強調表示**」パネルはメジャー列を書式設定するときにのみ使用してください。
   - (オプション) BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: 強調表示」パネルで、条件付き書式を表形式ビューに適用します。
6. BI コンポーザ・トレインの「**保存**」ボタンをクリックします。
7. BI コンポーザ・ウィザード - 「分析の作成: 保存」パネルで、保存基準を指定し、分析を同じ名前または別の名前で保存します。「**送信**」ボタンをクリックします。

BI コンポーザ・セッションに未保存の分析が残っているときに、Oracle WebLogic Scripting Tool の現在の管理対象サーバーが停止し、別の管理対象サーバーへのフェイルオーバーが発生したとします。この場合、既存の BI コンポーザ・セッションの分析は保存できません。BI コンポーザ・セッションを新たにオープンすると元の分析を取り戻すことができるので、そこから分析を保存してください。

BI コンポーザを使用した分析の編集

BI コンポーザは操作が容易なウィザードで、これを使用すると、分析の作成、編集または表示を行うことができます。

次の場合は、Oracle BI EE で BI コンポーザを使用して分析を編集します。

- カタログ・ページから、またはホーム・ページの「**最近**」セクションまたは「**最もポピュラー**」セクションから分析を編集

- ダッシュボード内から分析を編集

他のアプリケーション(ADF アプリケーションなど)では、分析を選択して BI コンポーザ・ウィザードから直接編集します。BI コンポーザとはを参照してください

1. 次のいずれかの方法で、分析を編集します。
   - Oracle BI EE のカタログ・ページまたはホーム・ページから、分析に移動して**「編集」**をクリックします。BI コンポーザ・ウィザードが表示されます。
   - BI コンポーザ・ウィザードから**「カタログ」**タブをクリックして分析を選択し、**「編集」**をクリックします。
2. ウィザードの最上部にある BI コンポーザ・トレインの各ボタンを使用して、ウィザードの各手順をたどって分析に変更を加えます。
3. BI コンポーザ・トレインの「**保存**」ボタンをクリックします。BI コンポーザ・ウィザード -- 「分析の作成: 保存」パネルが表示されます。
4. 「保存」パネルを使用して保存基準を指定し、編集した分析を同じ名前または別の名前で保存します。**「送信」**ボタンをクリックします。

BI コンポーザでの分析の表示

BI コンポーザ用に最適化されるよう、分析を書式設定できます。

Oracle BI EE 以外のアプリケーション(ADF アプリケーションなど)で BI コンポーザを操作している場合、BI コンポーザに表示するための分析を表示できます(Oracle BI EE では、「分析」エディタを使用して作成した分析と同じ方法で分析を表示します。)

BI コンポーザとはを参照してください

1. **「カタログ」**タブをクリックします。
2. 分析を選択します。
3. **「表示」**をクリックします。確認のための分析が「カタログ」タブの右側に表示されます。

分析エディタを使用して作成した分析の編集

分析エディタは、データの探索およびやり取りのための単純なインタフェースを提供します。

BI コンポーザで作業可能なビューのタイプで説明したように、BI コンポーザでは特定のビュー・タイプを編集できます。分析エディタで作成した分析を編集するときには、次のリストに示す多数のオブジェクトおよび属性を使用できます。

- 条件付き書式 - 分析の各列に定義された最初の条件付き書式が適用されます。
- 除外列
- フィルタ
- プロンプト
- セクション
- 円グラフのスライス
- ソート

- タイトル
- 散布図でメジャーを色と点で区別

これらの分析の 1 つを BI コンポーザで編集した場合、分析内の非互換要素を指摘するエラー・メッセージが表示されることがあります。

このメッセージが表示される原因は様々です。例:

- 緑にする書式設定が分析に適用されました。
- ゲージやパフォーマンス・タイルなど非互換のグラフ・ビューが分析に含まれています。
- 選択ステップやフィルタなど非互換のビューが分析に含まれています。
- ビュー・タイプが重複しています。たとえば、分析に表、ピボット表、円グラフおよび棒グラフが含まれている場合、BI コンポーザで変換されるのは 1 つの表と 1 つのグラフのみです。表とピボット表のいずれかがサマリー表に変換され、互換性のある分析内の最初のグラフ・タイプがグラフのデフォルトになります。

非互換エラーのメッセージを受け取ったときの BI コンポーザでの分析の編集方法:

1. **「詳細の表示」**をクリックして、メッセージを表示します。
2. メッセージを確認します。
3. 続行するには、**「はい」**をクリックします。BI コンポーザ・ウィザードの「分析の作成: グラフの編集」パネルが表示されます。

   編集を中止するには、**「いいえ」**をクリックします。

A

エンド・ユーザーに必要な基本情報

この付録では、結果のエクスポート、結果のドリル、値のソート、アクションの実行、マップ・ビュー、グラフ、BI Publisher レポート、スコアカード・オブジェクトおよび KPI の操作など、ほとんどのエンド・ユーザーが Oracle Business Intelligence Enterprise Edition で使用する主な機能を説明します。

トピック

この付録には次の項が含まれています。

- 結果のエクスポートについて
- ダッシュボードおよびダッシュボード・ページのエクスポートについて
- ヒート・マトリックス・ビュー、表ビュー、ピボット表ビュー、トレリス・ビューでの値のソートについて
- ビュー内の行および列のサイズ変更について
- 結果のドリルについて
- 分析およびダッシュボードのアクション・リンクやアクション・リンク・メニューを使用したアクションの実行
- 分析およびダッシュボードのアクション・リンクに関連付けられているアクションの実行について
- グラフ、ゲージおよびファンネルでのセクション・スライダの使用方法
- ダッシュボード・ページのマップ・ビューでの作業について
- グラフのズームおよびスクロール
- マスター詳細関係でリンクされているビューでの作業について
- ダッシュボード・ページまたは分析の表ビューに表示されるデータの変更
- ダッシュボードでの Oracle BI Publisher レポートへのアクセス
- ブレッドクラムを使用したナビゲートについて
- ダッシュボード・ページの印刷
- スコアカード・オブジェクトの操作について
- KPI の実際の値とターゲット値の変更

結果のエクスポートについて

分析結果を様々な形式にエクスポートします。

分析の操作では、Excel や PowerPoint などの様々な書式へのエクスポートが必要になる場合があります。

結果のエクスポート

分析結果は、様々な形式でエクスポートできます。

Microsoft Excel や PowerPoint へのエクスポートなど、分析結果をエクスポートするための様々なオプションが用意されています。これらのオプションは、分析とともにダッシュボードに表示される**「エクスポート」**リンクから使用できますが、コンテンツ設計者がダッシュボードにこのリンクを含めなかった場合は表示されません。

1. 分析にナビゲートします。
2. **「エクスポート」** リンクをクリックして適切なエクスポート・オプションを選択します。

ダッシュボードおよびダッシュボード・ページのエクスポートについて

ダッシュボードおよびダッシュボード・ページを Microsoft Excel 2007 以上にエクスポートできます。

ダッシュボード・ページで使用可能なエクスポート・オプションに応じて、次のものをエクスポートできます。

- 標準エクスポート・レイアウトを使用したダッシュボード全体。

  ダッシュボード全体をエクスポートすると、各ページは Excel ワークブックの個々のシートに含められ、各シートにはそれに対応するダッシュボード・ページの名前が付けられます。

- 標準エクスポート・レイアウトを使用した 1 つのダッシュボード・ページ。
- カスタム・エクスポート・レイアウトを使用した 1 つのダッシュボード・ページ。

  ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトの作成についてを参照してください。

ダッシュボードおよびダッシュボード・ページをエクスポートする場合、ダッシュボードまたはダッシュボード・ページ上のすべてのカスタマイズおよびビューがエクスポートに対応しているとは限らないので注意してください。(たとえば、BI Publisher レポートやティッカ・ビューはサポートされていません。)サポートされていない項目は無視されて空のセルに置換されます。

1. エクスポートするダッシュボードまたはダッシュボード・ページを表示します。
2. 「ダッシュボード・ページ」ツールバーの**「ページ・オプション」**をクリックして、**「Excel にエクスポート」**を選択し、**「現在のページのエクスポート」**、**「ダッシュボード全体のエクスポート」**、(使用可能なオプションによっては)カスタム・エクスポート・レイアウトのいずれかを選択します。

   ファイル・ダウンロード・ダイアログで、ダッシュボードまたはダッシュボード・ページをスプレッドシート・ファイルとして開くか保存できます。

3. 表見出しのデフォルトの折返し設定を変更するには、次の手順を実行します。

   a. 「タイトル」で**「ビューの編集」**をクリックします。

   b. 「タイトル」フィールドの右側にある**「タイトル」**をクリックします

c.「テキストの折返し」の選択を解除し、「OK」をクリックします。

ヒート・マトリックス・ビュー、表ビュー、ピボット表ビュー、トレリス・ビューでの値のソートについて

ヒート・マトリックス・ビュー、表ビュー、ピボット表ビュー、トレリス・ビューでは、値をソートすることができます。

ソートは、(横向きの三角形が表示されている)メンバー、メジャーおよび行で行うことができ、さらにプロンプトおよびセクションでも行えます。ビューでのデータのソートを参照してください。

ビュー内の行および列のサイズ変更について

表ビュー、ピボット表ビューおよび拡張トレリス・ビューの行エッジおよび列エッジのサイズを変更できます。

表ビュー、ピボット表ビューおよび拡張トレリス・ビューでの行および列のサイズ変更を参照してください。

結果のドリルについて

ビューのデータの階層はドリルすることで探索できます。

ビューに表示される結果の多くは、データの階層構造を表します。メタデータはこれらの階層を指定するもので、階層内の異なる詳細レベルへのアクセスを可能にします。たとえば、売上グラフの情報を地域ごとに分類できます。グラフ上の地域をクリックすると、その地域の国が表示されます(この場合、国はメタデータ階層内の次のレベルに位置します)。このようなクリック操作をドリルと呼びます。

ビューがドリル用に設定されている場合、ダッシュボードでビュー内をドリルできます。

ドリルとは

ドリルによってデータの詳細を表示できます。

ドリルは、ビュー内のデータ間を移動する方法です。

- ドリルダウンして詳細なデータを表示すると、より多くのメンバーが表示されます。

  データベースに含まれる実際の項目までドリルダウンできます。たとえば、販売担当者は、販売分析内で都市レベルまでドリルダウンして、パリで大量の販売が保留されていることを確認できます。Oracle Siebel 業務アプリケーションを使用している場合は、さらに保留中の販売をドリルダウンして、Oracle BI アプリケーションの該当する販売機会に直接移動できます。

- 階層列をドリルアップすると、より大まかなデータが表示されます。

  たとえば、月を示す値からドリルアップして年間のサマリーを表示できます。現在の階層のドリルアップは、ヘッダー・レベルの列全体または個々のメンバーに対して実行できます。たとえば、「地区」から「地域」へドリルアップできます。ドリルアップすると現在のレベル(「地区」など)が非表示になり、より高いレベル(「地域」など)は引き続き表示されます。

ドリルできる場所

特定のビュー・タイプでは、データにドリルできます。

ドリルは次のタイプのビューで実行できます。

- ヒート・マトリックス、表、ピボット表およびトレリス - ヒート・マトリックス、表、ピボット表およびトレリスのドリルを参照
- グラフ - グラフのドリルを参照
- マップ - マップ・ビューのドリルを参照

ヒート・マトリックス、表、ピボット表およびトレリスのドリル

ヒート・マトリックス、表、ピボット表またはトレリスでドリルダウンすると、現在のデータに詳細レベルのデータが追加されます。

たとえば、1 つの大陸からドリルした場合、その大陸および大陸にある国のデータが表示されます。

ヒート・マトリックス、表、ピボット表およびトレリスをドリルする方法は、列タイプによって異なります。

属性列のドリル

ドリルは、ビュー内のデータ間を素早く簡単に移動する方法です。

属性列をドリルするには、ドリルするヘディングまたはメンバーをクリックします。クリックするためにカーソルを値の上に移動すると、値に下線が表示され、クリックしてドリルできることを示します。

属性列をドリルすると、下位のレベルがビューに追加されます。属性列のドリルは、フィルタ・ドリルと同様にすべてのビューに影響します。値をクリックすると分析に列が追加され、自動的にフィルタが作成されて「基準」タブに表示されます。

属性列のグループはドリルできません。属性列のグループの定義を表示するには、「選択ステップ」ペインで対応するステップを編集します。

属性列のドリルには、データ・ビューの右クリック・メニューも使用できます。

階層列のドリル

ドリルは、ビュー内のデータ間を移動する方法です。

階層列をドリルするには、メンバーの横にある**「展開」**アイコンおよび**「縮小」**アイコンをクリックします。クリックすると、レベルが 1 つ展開または縮小します。たとえば、「製品全体」から「製品」へ展開すると、「製品全体」の値を表示したまま「製品」のメンバーが挿入されます。

階層列をドリルすると、ビューに含まれているデータのノードが展開および縮小します。階層列のドリルは特定のビューのみに影響します。その他のビューには影響しません。

レベル・ベースの階層のドリルと値ベースの階層のドリルは、同様に機能します。階層をドリルするたびに、レベルが 1 つ展開または縮小します。たとえば、階層に「大陸」、「地域」および「都市」の各レベルが含まれており、ビューに大陸のデータが表示されている場合、「オーストラリア」から 1 つ下のレベルを展開してオーストラリアに含まれる地域を表示できます。さらに、地域から 1 レベル展開して都市を表示するか、1 レベル縮小して大陸に戻ることができます。

ドリルの際にはドリルの状態が保持されます。上位レベルで縮小し再び展開すると、メンバーは同じドリル・ポイントで再表示されます。

「縮小」アイコンをクリックすると、分析に含まれる階層内のすべてのレベルで、ドリルダウンによって追加されたか「サブジェクト領域」ペインから追加されたかにかかわらず、縮小されて現在のレベルに戻ります。

非対称ドリルを実行すると、様々なメンバーを異なるレベルまでドリルできます。たとえば、「世界」を展開すると各大陸の第 2 レベルに「アメリカ」「アジア」「オーストラリア」が表示されるとします。さらに「アメリカ」をドリルして展開するとアメリカの地域が表示されますが、「アジア」および「オーストラリア」は展開しません。

階層列のグループのメンバーを展開および縮小できます。たとえば、都市を含むグループがビューに表示されている場合、そのグループ名をクリックすると都市が表示されます。

階層列の展開および縮小には、データ・ビューの右クリック・メニューも使用できます。

グラフのドリル

グラフをドリルダウンすると、現在のデータが詳細レベルのデータに置き換えられます。

たとえば、1 つの大陸からドリルダウンした場合、その大陸に含まれる国のデータは表示されますが、大陸自体のデータは表示されません。

ドリルダウンは次の方法で実行できます:

- 任意の軸または凡例の(ドリル可能な)ラベルをクリックします。(ドリル可能な場合はマウス・ポインタが変化します。)
- 属性列とメジャー列のみがグラフに含まれている場合は、データ・ポイントをクリックしてすべての列をドリルできます。
- 1 つ以上の階層列を含む複数の列が含まれている場合は、ラベルまたはデータ・ポイントをクリックするとメニューが表示され、ドリルダウンする列を選択できます。アクション・リンクが使用可能な場合は、これらのリンクも表示されます。
- データ・マーカー、凡例またはグループレベル(X 軸)項目を右クリックして、メニューから**「ドリル」**を選択できます。ビューの右クリック相互作用を参照してください。

グラフがダッシュボードに埋め込まれた方法によって、ブレッドクラム機能、ブラウザの**「戻る」**ボタン、ダッシュボードの**カスタマイズのクリア**・オプション(すべてのビュー)などを使用して前のグラフに戻ることができます。

ノート: 時系列折れ線グラフでは、データまたは日時ではないデータ型が使用された時間列のドリルダウンはサポートされていません。

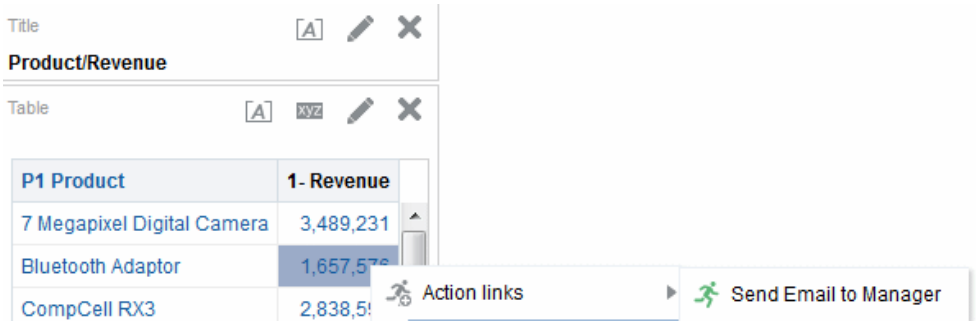
分析およびダッシュボードのアクション・リンクやアクション・リンク・メニューを使用したアクションの実行

アクション・リンクおよびアクション・リンク・メニューを使用して、分析およびダッシュボードのデータを変更できます。

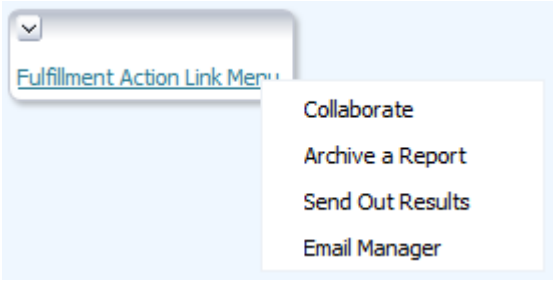
分析でデータを分析する、ダッシュボードを表示する、またはエージェントによって配信されたコンテンツを表示するなどの作業を行うと、データからビジネスの実態を把握できるため、結果としてなんらかのアクションを実行することになります。アクション・リンクおよびアクション・リンク・メニューが使用可能であれば、これらを使用してアクションを実行できます。

- アクション・リンクは分析の列ヘッダーまたはデータ値、もしくはダッシュボード・ページに埋め込まれており、クリックすると関連付けられているアクションが実行されます。

  たとえば、分析のデータ値に、指定された電子メール・アドレスへ分析を送信するアクション・リンクが含まれているとします。データの分析後、それを上司に見せる必要があると判断した場合は、このアクション・リンクをクリックして分析から上司へ直接送信できます。次の図に、電子メールを送信するアクション・リンクの例を示します。



- アクション・リンク・メニューはダッシュボード・ページに埋め込まれたメニューで、複数のアクション・リンクがメニューのオプションとしてグループ化されています。アクション・リンク・メニューを使用すると、アクション・リンク・オプションのリストから正しいアクションを選択して実行できます。次の図に、アクション・リンク・メニューの例を示します。



分析およびダッシュボードのアクション・リンクに関連付けられているアクションの実行について

アクション・リンクに関連付けられているアクションを複数の方法で実行できます。

1. 次のいずれかを実行します:
   - そのアクションがスタンドアロン・アクション・リンクに関連付けられている場合は、アクション・リンクをクリックします。
   - そのアクションがアクション・リンク・メニューのアクション・リンクに関連付けられている場合は、アクション・リンク・メニューをクリックしてアクション・リンク・オプションを選択します。
2. 詳細のリクエストまたは確認プロンプトが表示されたら、応答します。

   正常起動メッセージはは、アクション・リンクに関連付けられているアクションが正しく実行されたことのみを示しています。そのアクションが表すプロセスや操作が正常に実行されたことを示すものではありません。

グラフ、ゲージおよびファンネルでのセクション・スライダの使用方法

グラフ、ゲージおよびファンネルにはセクション・スライダが含まれている場合があります。

セクション・スライダを使用すると、グラフ、ゲージまたはファンネルに表示されるデータを制限できます。グラフ、ゲージおよびファンネルのセクション・スライダの定義を参照してください。

- セクション・スライダのコンポーネントを使用して、次のように値を選択します。

- 特定の値を選択するには、スライダのつまみを値に移動します。
- 現在の値より左にある値にスライダのつまみを移動するには、「**減少**」ボタン(スライダの左から 2 番目のボタン)をクリックします。
- 現在の値より右にある値にスライダのつまみを移動するには、「**増加**」ボタン(スライダの右端にあるボタン)をクリックします。
- 連続して値全体にスライダのつまみを移動するには、**再生**ボタン(スライダの左端にあるボタン)をクリックします。**再生**ボタンは「**一時停止**」ボタンに変化するため、特定の値で停止できます。

グラフ、ゲージまたはファンネルに表示されるデータは、スライダのつまみで示した現在の値によって制限されます。

ダッシュボード・ページのマップ・ビューでの作業について

コンテンツ設計者は、ダッシュボード・ページにマップ・ビューを含めることができます。

マップ・ビューはデータを空間形式で表します。マップ・ビューでは、場所に関する情報を介して、表やグラフでは分かりづらい地域間の傾向やトランザクションを把握できます。たとえば、アメリカ合衆国の地図を表示する場合に、販売実績ごとに州を色分けできます。

この項では、ダッシュボード・ページ上のマップでの作業に関する、次の情報を提供します。

- マップ・ビューのパン
- マップ・ビューのズーム
- マップ・ビューのドリル
- マップ・ビューでのフォーマットのしきい値の変更
- マップ・ビューでのフォーマットの表示および非表示

マップ・ビューの編集を参照してください。

マップ・ビューを操作する際には、次の点に注意してください。

- Microsoft PowerPoint ドキュメントにマップ・ビューをダウンロードすると、一部のマップ・フォーマット・イメージおよびスライダが正しく(もしくは完全に)ダウンロードされない場合があります。
- マップ・ビューには、Google Maps などの外部プロバイダのタイルをフェッチするように構成された背景マップを含めることができます。タイルとは、マップ・レイヤー全体の限定された部分を表示するイメージのことです。このようなマップ・ビューを印刷すると、出力には背景マップ以外の適用されたフォーマットが含まれます。
- マップ・ビュー・エラーを受信したとき、適切な権限がある場合は、マップを編集して問題の修正を試みることができます。マップ・ビューの編集を参照してください。

マップ・ビューのパン

マップでパンするとビューを変更して様々な領域を表示できます。

マップ・ビューでパンするには、マウスをクリックしてドラッグします。メイン・マップまたは概要マップでパンすることができます。概要マップでは十字線を使用して全体を移動することもできます。パンしても新規問合せは発行されません。

いずれかのズーム・モードになっていない場合は、常にパン・モードになっています。

パン・モードでは、次の操作を実行できます。

- マップの背景をクリックしてドラッグします。
- マップ上の地域にカーソルを移動して情報ウィンドウを表示し、カーソル直下の地域のデータを表示します。
- クリックして情報ウィンドウを表示します。情報ウィンドウを使用すると、詳細ビューをドリルまたは更新できます。マスター詳細関係でリンクされているビューでの作業についてを参照してください。
- マップをダブルクリックしてズームします。

パンはマップ・ビューのデフォルト・モードで、交差した矢印のカーソルはパン・モードであることを示します。

1. **「ズーム・イン」**ボタンおよび**「ズーム・アウト」**ボタンが選択されていないことを確認します。
2. マップの背景をクリックしてドラッグし、目的の場所にドロップします。

マップ・ビューのズーム

マップをズームすると、マップに表示される地理データの詳細が調整されます。

たとえば、国レベルからズーム・インすると州や市区町村の詳細が表示されます。道レベルのビューからズーム・アウトすると、道レベルの情報は非表示になり、市区町村が表示されます。マスター詳細リンクの場合、マップ・ビューでは、マスター・ビューで選択された詳細機能にフォーカスされます。

ズームでは次の操作を実行できます。

- マップの背景をクリックする。クリックでズームするには、まずツールバーからズーム・モードを選択する必要があります。デフォルト・モードはパンで、これは手型カーソルで示されます。ズーム・モードになるとマウス・ポインタは拡大鏡に変わり、マップ上で直接クリックしてズームできます。

  ズームインしているときに、1回クリックするか、クリックしてドラッグすることで、マーキー・ズームを使用できます。ズームするエリアを描くボックスを描画できます。
- マップ上の地域にカーソルを移動して情報ウィンドウを表示し、カーソル直下の地域のデータを表示します。
- クリックしてズーム・インおよびズーム・アウトする。クリックすると、その場所を中心点として増分1のズーム・インが実行されます。

ズームとドリルは同じではありません。ズームしてもドリルは実行されません(つまり、新規問合せは発行されません)。ただし、マップ・レイヤー上でドリルし、新規レイヤーがマップに追加された場合は、結果として新規ズーム・レベルが表示される可能性があります。新規レイヤーが追加されない場合、ズーム・レベルは変りません。

ズームはツールバーのボタンまたはズーム・スライダを使用して実行できます。ズーム・スライダを使用した場合、ズーム・インまたはズーム・アウトは現在表示されている状態で実行されます。ズーム・スライダにカーソルを移動すると、マップ・レイヤーの名前が中程度のズーム・レベルの横に表示されます。名前をクリックすると、そのレベルまでマップがズームされます。ズームしても新規問合せは発行されません。

1. ズーム・インおよびズーム・アウトのツールを使用したズームの手順:

- ツールバーの「**ズーム・イン**」または「**ズーム・アウト**」ボタンをクリックします。
- マップの背景をクリックして、その場所をズーム・インします。ズームインしている場合、クリックしてドラッグすると、四角形を描画してズームするエリアを指定できます。

2. ズーム・スライダのボタンを使用したズームの手順:

- スライダのどちらかの端にあるプラス記号またはマイナス記号をクリックします。
- スライダにカーソルを移動して、ズーム先レベルの名前をクリックします。

マップ・ビューのドリル

マップをドリルするとデータ全体をナビゲートできます。

ドリルは、手型カーソルで示されるパン・ツールが選択されている場合でも実行できます。マップ・データにカーソルを移動すると情報ウィンドウが表示され、その場所に関する様々な情報が表示されます。

マップ上のリージョンまたはポイントをクリックすると、次のいずれかが実行されます。

- 列が別のビューのマスターとして構成されている場合は、そのビューが最新の情報を使用して更新されます。
- 列またはマップの構成により、列のドリルまたは単一アクションが実行される場合は、ドリル操作またはアクションがただちに開始されます。
- 複数のアクションを実行するように列が構成されている場合や複数のドリルが可能な場合は、表示される情報ウィンドウに複数の列に対するアクションやリンクのリストが表示されます。

情報ウィンドウにはドリル可能なすべての列がリンク・テキストとして表示されます。単純なドリルを行うためのリンクをクリックすると、データがドリルされ、別のレイヤーでマップが再描画された後、情報ウィンドウが閉じます。アクション・リンクが定義されている場合は、ポップアップ・ウィンドウ表示され、追加のリンクが表示されます。分析およびダッシュボードのアクション・リンクに関連付けられているアクションの実行についてを参照してください。

ドリルすると、新たにドリルされたデータを反映してマップ・フォーマットが更新されます。一部のドリル操作(州をドリルする場合など)では、指定した地域にマップがズームされると同時にフォーマットが更新されます。表示される内容は、ズーム方法、およびマップに含まれるフォーマットと地理レベルによって異なります。フォーマットには特定のズーム範囲があり、異なるズーム・レベルで表示されます。ドリルしたフォーマットのズーム・レベルを超えて急激にズーム・アウトした場合は、新規フォーマットが表示される可能性があります。

ドリルダウン後にドリルアップして戻るには、ズーム・スライダを使用します。ドリル開始前のズームまたはドリル・レベルで元のマップ・ビューを表示するには、ダッシュボード・ページの「**戻る**」ボタンを使用します。

マップ・ビューでのフォーマットのしきい値の変更

コンテンツ設計者は、マップ・ビューでフォーマットを表示するためのしきい値の変更権限をユーザーに付与できます。

「マップ・フォーマット」ペインに含まれるフォーマット名の下にスライダが表示されている場合、ユーザーはこの機能を使用できます。しきい値の変更は一種のデータのビジュアル分析であり、「What-If 分析」とも呼ばれます。

フォーマットの範囲はスライダの背景の色の塗りつぶしとして表示され、各しきい値に対して、編集可能なつまみが表示されます。独自のしきい値を指定するには、スライダを次のように操作します。

- カーソルをつまみの上に置くと、つまみの下の値が表示されます。
- つまみをドラッグするとしきい値が調整されます。
- スライダのセクションをクリックすると、そのセクションにつまみが移動します。
- スライダを右クリックすると、次のオプションを含むメニューが表示されます。
  - **色の編集** - しきい値の(事前定義済またはカスタムの)色を選択できるダイアログが表示されます。
  - **しきい値の追加** - 別のしきい値およびしきい値を示すつまみがスライダに追加されます。これにより、新規フォーマットのビンが新規の色で作成されます。たとえば、3 つのビン(赤、黄、緑の色)が存在しており、1 つのしきい値を作成した場合、ビンが 4 つになります。サポートされるビンの最大数は 12 です。
  - **しきい値の削除** - 右クリックした場所より上のしきい値が削除されます。スライダのつまみとフォーマット・ビンも削除されます。
- スライダのつまみの数値をクリックすると、しきい値に対応する数値を編集できるテキスト・ボックスが表示されます。[Enter]キーを押すかボックスの外をクリックすると、しきい値およびつまみの位置が更新されます。

マップ・ビューでのフォーマットの表示および非表示

コンテンツ設計者は、情報の複数のレイヤー(テーマとも呼ぶ)を単一のマップ・ビュー上で重ねることができます。

コンテンツ設計者は、フォーマットを作成してレイヤーを拡張できます。マップのフォーマットは、表示または非表示にすることができます。

- 「マップ・フォーマット」ペインの「表示」メニューから**「すべてのフォーマットの表示」**または**「表示可能なフォーマットの表示」**を選択します。
- 「マップ・フォーマット」ペインでフォーマット名の横のボックスを選択解除します。

グラフのズームおよびスクロール

グラフのズームおよびスクロールが有効な場合は、グラフにズーム・アイコンが含まれています。

ズーム・アイコンを使用すると、グラフの描画エリアで軸を使用してズーム・インおよびズーム・アウトを実行できます。軸でズーム・インすると、その軸をスクロールできるようになります。

コンテンツ設計者がグラフのズームおよびスクロールを有効にするには、「グラフのプロパティ」ダイアログの「一般」タブでズームおよびスクロールのプロパティを設定します。

軸にズーム・インすると、ズームとスクロールのスライダが表示されます。次の図に、ズームとスクロールのスライダの例を示します。

ズームとスクロールのスライダには次のコンポーネントで構成されています:

- **左または下ボタン** - X 軸の左または Y 軸の下へスクロールし、グラフの表示されていない部分を表示します。
- **右または上ボタン** - X 軸の右または Y 軸の上へスクロールし、グラフの表示されていない部分を表示します。
- **スクロールのつまみ** - グラフ全体に対するグラフの表示部分を表します。スクロールのつまみをドラッグしてグラフを動的にスクロールすると、グラフの表示されていない部分が表示されます。
- **サイズ変更ハンドル** - カーソルをスクロールのつまみの上に置くと、これらがつまみの両端に表示されます。サイズ変更ハンドルは、軸へのズーム・インおよびズーム・アウトに使用します。
- **ツールチップ** - つまみまたはサイズ変更ハンドルにカーソルを置いたときのみ表示され、現在スクロールのつまみに表示されているデータを説明します。

1. カーソルをグラフに移動して**「ズーム」**ボタンを表示します。
2. **「ズーム」**アイコンをクリックして次のようにします。
   - ズームとスクロールが 1 つの軸でのみ有効な場合は、**「ズーム・イン」**または**「ズーム・アウト」**を選択します。
   - ズームとスクロールが両方の軸で有効な場合:
     - ズーム・イン、ズーム・アウトおよびスクロールを X 軸で行う場合は、**「横軸」**を選択して**「ズーム・イン」**または**「ズーム・アウト」**を選択します。ズームとスクロールのスライダが X 軸に表示されます。

       X 軸のズームを解除して実際のグラフ・サイズを表示するには、**実際のサイズ**を選択します。
     - ズーム・イン、ズーム・アウトおよびスクロールを Y 軸で行う場合は、**「縦軸」**を選択して**「ズーム・イン」**または**「ズーム・アウト」**を選択します。ズームとスクロールのバーが Y 軸に表示されます。

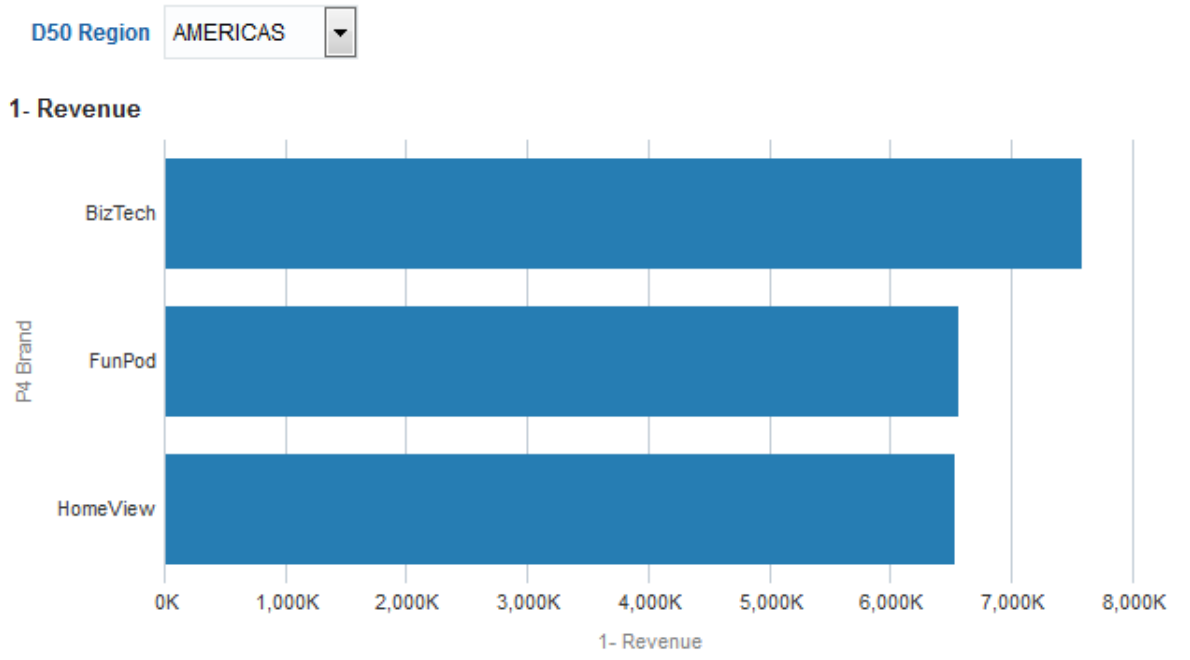
       Y 軸のズームを解除して実際のグラフ・サイズを表示するには、**実際のサイズ**を選択します。
   - X 軸と Y 軸の両方のズームを解除して実際のグラフ・サイズを表示するには、**実際のサイズ**を選択します。
3. ズーム・インまたはズーム・アウトした後は、目的に応じて次のようにズームおよびスクロールします。
   - **「ズーム」**ボタンを使用して徐々にズーム・インおよびズーム・アウトする。
   - 軸上のスクロールのつまみをドラッグしてグラフを動的にスクロールし、グラフの表示されていない部分を表示する。
   - 軸上のスクロール・ボタンをクリックして、左右(X 軸)または上下(Y 軸)にスクロールする。
   - サイズ変更ハンドルを使用して、軸上でズーム・インおよびズーム・アウトする。

マスター詳細関係でリンクされているビューでの作業について

ビューはマスター詳細関係でリンクされる場合があります。

この関係でビューがリンクされている場合、1 つのビュー(マスター・ビューと呼ぶ)の指定された列の値をクリックすると、別のビュー(詳細ビューと呼ぶ)でデータが変更されます。ビューのマスター詳細リンクとはおよびマスター詳細関係でのビューのリンクを参照してください。

次の図では、Regional Sales Master View のドルの値をクリックすると Regional Sales Detail View のデータが変更されるように、Regional Sales Master View と Regional Sales Detail View がマスター詳細関係でリンクされています。たとえば、Regional Sales Master View の Eastern Region のドル値をクリックすると、Regional Sales Detail View の Region プロンプトが EASTERN REGION に更新され、ビュー全体がリフレッシュされます。



D50 Region	1- Revenue
AMERICAS	20,645,342
APAC	21,299,582
EMEA	28,055,076

ダッシュボード・ページまたは分析の表ビューに表示されるデータの変更

ダッシュボード・ページのユーザーが、表ビューに表示されるデータを変更できる場合があります。

データを変更する機能はライトバックとも呼ばれ、ユーザーに適切な権限があり、管理者によって構成されている場合に使用できます。ビューの値を更新すると、データ・ソースのレコードにライトバックされます。

ユーザー名に適切な権限が付与されており、データ値を変更するための構成が管理者によって行われている場合は、ライトバック・ボタン(通常のラベルは「**更新**」)が表ビューに表示されます。このボタンをクリックした後、更新つまりデータ・ソースへの

書込みを行えます。たとえば、現四半期の売上目標を売上ダッシュボードに入力できます。ライトバック・ボタンに表示される名前は、コンテンツ設計者がライトバックに関してビューをどのように準備したかによって異なります。

1. 値を変更するダッシュボードおよびビューを表示します。
2. **「更新」**とラベル付けされたボタン、またはライトバック有効を示す似た名前のボタンをクリックして、値を変更できる編集モードに切り替えます。

   ビューの値を変更できるはずのユーザーに対して「**更新**」ボタンや類似するボタンが表示されない場合、そのビューは常に編集モードで表示されるよう指定されています。そのため、ユーザーはただちに値の変更を開始でき、「**更新**」ボタンや類似するボタンが表示されることはありません。

   この更新機能は階層列には使用できません。
3. 編集モードでは、適切なフィールドに値を入力できます。ライトバック可能なフィールドは、ダイアログのテキスト・ボックスのような外観をしています。
4. 値の変更後、次のいずれかのボタン(または似た名前のボタン)をクリックします。

   - **適用**: このボタンをクリックすると、データ・ソースの値が変更され、編集モードのままのビューに変更後の値が表示されます。
   - **元に戻す**:**「適用」**または**「完了」**をクリックして変更を保存する前にこのボタンをクリックすると、データを元の値に戻すことができます。変更したデータをデータ・ソースにライトバックした後で元の値に戻すことはできません。
   - **完了**: このボタンをクリックするとデータ・ソースの値が変更され、ビューが表示モードに戻ります(ビューが常に編集モードになるように指定されていない場合)。

   「適用」または**「完了」**ボタンをクリックすると、ダッシュボード上にある他の分析がそのデータに依存する可能性があるため、ダッシュボード全体がデータ・ソースからリフレッシュされます。

   表ビューでフィルタが有効になっている場合にフィルタの影響を受けるレコードに値を入力すると、データ・ソースからデータをリフレッシュした後にそのレコードがビューに表示されなくなる可能性があります。

ライトバックのエラーの処理について

ライトバック中にエラーが発生した場合、メッセージが表示されます。

データ値を変更する際には、様々なエラーが発生する可能性があります。たとえば、フィールドに無効な値を入力してそれをデータ・ソースにライトバックしようとした場合や、管理者によって指定されたライトバック用テンプレートが不正な場合などです。問題が発生すると、基本的なエラー・メッセージが表示されます。管理者は、セッションのログ・レベルを上げて詳細なログ・ファイルを作成することで、問題に関する追加情報を入手できます。また、プレゼンテーション・サービスに関するログ・ファイルで「`saw.writeback.action.executeimpl`」などの文字列を検索できます。

複数の値を同時にライトバックしようとして誤って不正な値を入力した場合は、影響を受ける行によって結果が異なります。

- 同じ行の複数の値を更新しようとして1つ以上の値が不正だった場合、データベースへの値の書込みは一切行われません。
- 複数行の値を変更しようとして複数の値が不正だった場合、一部の値が正常にライトバックされ、それ以外の値がライトバックされない可能性があります。

ダッシュボードでの Oracle BI Publisher レポートへのアクセス

ダッシュボード・ページのユーザーは、Oracle BI Publisher で作成されたレポートにアクセスできます。

レポートがダッシュボード・ページに埋め込まれているか、もしくは Oracle BI Publisher 内のレポートを開くリンクが表示されます。

1. アクセスするレポートが含まれているダッシュボード・ページを表示します。
2. 次のタスクを実行します。
   - レポートがそのページに埋め込まれている場合は、レポートに作用する Oracle BI Publisher ツールバーの機能を使用します。

     ダッシュボードにプロンプトが含まれている場合は、これらのプロンプトを使用してレポートのデータ表示に作用するパラメータを指定します。レポートの設計によっては、レポートのデータ表示に作用しないプロンプトも含まれます。
   - ページにレポートへのリンクが含まれている場合は、リンクをクリックして Oracle BI Publisher でレポートを開きます。

ダッシュボード・ページの Oracle BI Publisher ツールバーの使用方法

ダッシュボード・ページのツールバーは、ユーザー権限に基づいて変わります。

Oracle BI Publisher ツールバーは、BI Publisher レポートを含むダッシュボードに表示されます。表示されるオプションは、付与されている権限によって異なります。ツールバーの機能は表を参照してください。

機能	説明
テンプレート	複数のレポート・テンプレートが使用可能な場合に「テンプレート」リストに表示されます。新規テンプレートを選択して**「表示」**をクリックします。
出力タイプ	複数の出力タイプが使用可能な場合は、目的の出力タイプ(HTML、PDF、RTF、Excel、データ)をリストから選択して**「表示」**をクリックします。出力がブラウザにレンダリングされます。
ビュー	テンプレートの選択または出力タイプの指定後にこのボタンをクリックすると、BI Publisher レポートが表示されます。
エクスポート	このボタンをクリックすると、BI Publisher レポートを保存するか、出力タイプに適したアプリケーションを開くことを求められます。
送信	このボタンをクリックすると「移動先」ダイアログが表示されます。この画面で配信先(電子メール、プリンタ、FAX、FTP または Web フォルダ)を選択し、適切な情報を入力します。配信先は複数選択できます。
スケジュール	このボタンをクリックすると、BI Publisher レポートがスケジュールされます。*Oracle Business Intelligence Publisher ユーザーズ・ガイド*のレポート・ジョブの作成を参照してください。

ブレッドクラムを使用したナビゲートについて

Oracle BI コンテンツ内での現在の場所と Oracle BI コンテンツをナビゲートするのにユーザーがたどったパスは、ブレッドクラムで確認できます。

ブレッドクラムとは、クリックすると移動前の場所および移動前のコンテンツの状態に戻ることができるアクティブ・リンクのことです。

ブレッドクラムは、プレゼンテーション・サービスの、または Fusion Applications からのページの下部にあるブレッドクラム軌跡に表示されます。この付録を読むユーザーがブレッドクラム軌跡を効率的にナビゲートできるようにするには、これらの書式を理解しておく必要があります。

ツリーマップ・ブレッドクラムの動作は、ページ・エッジの場合とは若干異なります。ツリーマップ・ビューの編集を参照してください。

書式	説明
... (青の省略記号)	これはブレッドクラムのオーバーフロー・ボタンです。ブレッドクラム軌跡に多数のブレッドクラムがあり、すべてのブレッドクラムを表示するために十分な幅がページにない場合に、このボタンが表示されます。クリックすると、このボタンによってページ下部の軌跡に表示されていないブレッドクラムのリストが表示されます。 このボタンをクリックして、ブレッドクラムのリストを表示し、場所を選択します。
青のテキスト	この書式は、訪問済みの場所へのリンクを示します。
青の斜体テキスト	この書式は、訪問済みのエディタへのリンクを示します。たとえば、「分析」エディタなどです。
黒のテキスト	この書式は、現在の位置を示します。
黒の斜体テキスト	この書式は、エディタ内の現在の位置を示します。たとえば、「分析」エディタなどです。

ダッシュボード・ページの印刷

ダッシュボード・ページの印刷には複数の方法があります。

ダッシュボード・ページで使用可能な印刷オプションに応じて、次のものを使用してダッシュボード・ページを印刷できます。

- 標準印刷レイアウト(**「印刷可能 HTML」**または**「印刷可能 PDF」**)。
- カスタム印刷レイアウト。

  カスタム印刷レイアウトを使用すると、ダッシュボード・コンテンツの高品質な印刷ができるようになります。ダッシュボード・ページを印刷およびエクスポートするためのカスタム・レイアウトの作成についてを参照してください。

1. 印刷するダッシュボード・ページを表示します。
2. 「ダッシュボード・ページ」ツールバーの**「ページ・オプション」**ボタンをクリックして、**「印刷可能 HTML」**、**「印刷可能 PDF」**、(使用可能なオプションによっては)カスタム印刷レイアウトのいずれかを選択します。
   - **「印刷可能 HTML」**を選択した場合は、新しいウィンドウに印刷するダッシュボード・ページが表示されます。**「ファイル」**メニューから**「印刷」**を選択します。
   - **「印刷可能 PDF」**またはカスタム印刷レイアウトを選択した場合は、Adobe PDF ウィンドウに印刷するダッシュボード・ページが表示されます。Adobe PDF ウィンドウで使用できるオプションを使用して、ファイルを保存または印刷します。ダッシュボード・ページの列プロパティを設定して**「印刷可能 PDF」**オプションを選択する場合は、**「幅」**フィールドが 100%を超えないようにしてください。

スコアカード・オブジェクトの操作について

様々なスコアカード・オブジェクトがダッシュボード・ページでの情報の伝達に役立ちます。

コンテンツ設計者は、次のスコアカード・オブジェクトをダッシュボードを追加できます。

- 原因と結果マップ。原因と結果マップとはを参照してください
- カスタム・ビュー。カスタム・ビューとはを参照してください
- 戦略マップ。戦略マップとはを参照してください
- 戦略ツリー。戦略ツリーとはを参照してください
- KPI ウォッチリスト。KPI ウォッチリストとはを参照してください
- スマート・ウォッチリスト。スマート・ウォッチリストとはを参照してください

ダッシュボードへのスコアカード・オブジェクトの追加の詳細は、ダッシュボードへのコンテンツの追加を参照してください。

スコアカード・オブジェクトを操作する際には、次の点に注意してください:

- ディメンションが固定されていない場合に、プロンプトが用意されている場合は、プロンプトを使用してディメンションに値を設定できます。ディメンションおよび固定されたディメンション値とはを参照してください
- 戦略ツリーには、次の 2 つのタイプの図があります:
  - 戦略ツリー図。戦略ツリー図の理解を参照してください。
  - 戦略貢献ホイール図。戦略貢献ホイール図の理解を参照してください。

  戦略ツリーの背景領域を右クリックして、**「ツリー図として表示」**または**「ホイール図として表示」**のどちらかを選択すれば、これら 2 つを切り替えることができます。
- コンテンツ設計者が、「フィルタ」ペインが次として表示されるスマート・ウォッチリストを保存した場合:
  - コントロール・パネル。フィルタ条件を指定して、スマート・ウォッチリストの表示内容を動的に変更できます。
  - テキスト・サマリー。現在のフィルタ基準の読取り専用のサマリーを表示できます。

  コンテンツ設計者は、「フィルタ」ペインを非表示にすることもできます。
- アクセシビリティ・モードでは:
  - ビュー(つまり、原因と結果マップ、カスタム・ビュー、戦略マップおよび戦略ツリー)は、ウォッチリストとして表示されます。
  - 印刷機能は無効になります。

KPI の実際の値とターゲット値の変更

KPI によってはターゲット設定が含まれる場合があります。

たとえば、コンテンツ設計者は、ターゲットが設定された KPI を目標に含める場合があります。ターゲット設定が含まれる KPI では、KPI の実際の値とターゲット値を更新および保存できます。KPI にターゲット設定が含まれているかどうかを判断するには、実際とターゲットの設定フィールドを見て、黒い線のボックスで囲まれている場合は、書込み可能です。フィールドが黒い線のボックスで囲まれていない場合は、書込み可能ではありません。

実際の値のフィールドまたはターゲット値のフィールドのみにコンテンツ設計者がターゲット設定を作成している場合もあれば、実際の値のフィールドとターゲット値のフィールドの両方に作成している場合もあります。ターゲット設定が KPI に追加されていて、黒い線のボックスでフィールドが表示されている場合でも、値を変更して保存する権限がない場合があります。

ターゲット設定とのユーザー相互作用を参照してください。

1. 実際の値とターゲット値を変更する KPI が含まれるウォッチリスト、目標またはイニシアチブにナビゲートします。
2. 変更する必要がある、黒い線のボックスで囲まれた**「実際」**および**「ターゲット」**フィールドごとに、フィールドにカーソルを置いて新しい値を入力します。
3. ウォッチリスト、目標またはイニシアチブを保存します。

   値を変更するために必要な権限がない場合、Oracle BI EE では、**「実際」**または**「ターゲット」**フィールドの色が白から赤に変わり、「ディメンション値を持つスライスのディメンション・スライス・セキュリティが不十分です」というエラー・メッセージが表示され、変更した値は保存されません。

B

アクセシビリティ機能

この章では、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のアクセシビリティ機能を構成および使用する方法を説明します。ここでは、キーボード・ショートカットおよびアクセシビリティに対応した設計方法を説明します。

トピック

この章は次の項で構成されています。

- アクセシビリティ機能の使用
- キーボード・ショートカット
- アクセシビリティに対応した設計
- アクセシビリティを高めるオブジェクトの使用

アクセシビリティ機能の使用

アクセシビリティ機能は、アクセシビリティ・ツールを使用するユーザーが情報にアクセスするのに役立ちます。

この項は次のトピックで構成されています。

- アクセシビリティ機能とは
- キーストロークを使用したサイン・イン
- アクセシビリティ・モードの変更

アクセシビリティ機能とは

Oracle BI EE のアクセシビリティ機能は、障害者や高齢者による製品内のナビゲートや使用を容易にするためのものです。

アクセシビリティ機能では、標準ベースの支援技術ハードウェアおよびソフトウェア(Freedom Scientific JAWS または Microsoft Narrator など)の使用がサポートされます。アクセシビリティ機能は、次の一般カテゴリにグループ化できます:

- サードパーティ支援技術製品を使用した機能。これらの機能は、サードパーティ支援技術製品で解釈できる、標準の HTML 要素から構成されるユーザー・インタフェースの提供に重点が置かれています。
- アクセシビリティ・モード。アクセシビリティ・モードの変更を参照してください。
- マウスの使用が困難であったり、マウスを使用できないユーザーのコンテンツ内の移動を簡単にするキーボード・ショートカット。キーボード・ショートカットを参照してください。

- コンテンツの作成者が、アクセシビリティを必要とするユーザーをサポートするコンテンツを作成できるようにするコンテンツ設計機能。Oracle BI EE には、様々な機能を自動的に提供するアクセシビリティ・モードが用意されていますが、設計者は、ユーザー・コミュニティのアクセシビリティ要件を満たすコンテンツを作成する必要があります。アクセシビリティに対応した設計およびアクセシビリティを高めるオブジェクトの使用を参照してください。

キーストロークを使用したサイン・イン

キーボードを使用したサイン・インが可能であり、マウスを使用するより速く、またはアクセスしやすくなる場合があります。

次の手順を使用して、マウスではなく、キーストロークを使用して Oracle BI EE にサイン・インします。

キーストロークを使用して Oracle BI EE にサイン・インするには:

1. ブラウザに Oracle BI EE のサインイン・ページを表示します。
2. Oracle BI EE で使用する言語を変更する場合は、[Tab]キーを押して挿入ポイントを**「言語」**フィールドに置き、矢印キーを使用して目的の言語を選択します。次に、挿入ポイントは**「ユーザー ID」**フィールドに置かれます。
3. ID を入力して[Tab]キーを押し、**「パスワード」**フィールドに挿入ポイントを置きます。
4. パスワードを入力します。
5. 次のアクションのいずれかを実行します。
   - スクリーン・リーダーの使用を容易にする方法で、Oracle BI EE のコンテンツをブラウザでレンダリングする場合、または Oracle BI EE で使用する言語を変更する場合は、[Tab]キーを 2 回押して**「アクセシビリティ・モード」**ボックスに挿入ポイントを置きます。
   - サイン・イン処理を完了させる場合、[Enter]キーを押して**「サイン・イン」**ボタンをアクティブにします。
6. スクリーン・リーダーの使用を容易にする方法で、Oracle BI EE のコンテンツをブラウザでレンダリングする場合は、スペース・キーを押して**「アクセシビリティ・モード」**ボックスを選択します。
7. [Shift]キーを押しながら[Tab]キーを 2 回押して、**「サイン・イン」**ボタンに挿入ポイントを置いた後、[Enter]キーを押して**「サイン・イン」**ボタンをアクティブにします。

アクセシビリティ・モードの変更

Oracle BI EE のアクセシビリティ・モードでは、障害を持つユーザー向けにサポートされている機能のみが表示され、スクリーン・リーダーに適したユーザー・インタフェースがレンダリングされます。

次のリストで、アクセシビリティ・モードについて説明します:

- 分析エディタのかわりに BI コンポーザ・ウィザードが表示されます。BI コンポーザを使用した分析操作を参照してください。
- 「ホーム」ページには、「管理」ページへのアクセスや、ダッシュボードの編集などの編集機能を実行するためのリンクは含まれていません。

- グラフ・ビューとマップ・ビューが表示されないかわりに、1 つ以上の注釈付きの表に変換されます。
- 表およびピボット表は、スクリーン・リーダーがセルの内容を読み上げることができるよう適切な内部用注釈を付けてレンダリングされます。

  すべての該当する表のナビゲーション・ショートカットについては、支援技術のドキュメントを参照してください。
- 表またはピボット表のレイアウトの変更にマウスは使用できません。
- パフォーマンス・タイル、ヒート・マトリックスおよびツリーマップは、ピボット表としてレンダリングされます。
- ダッシュボード・ビルダーでセクションが縮小不可とマークされている場合でも、ダッシュボード・ページのセクションの左上隅に縮小アイコンが含まれます。ダッシュボード・ページでの移動にキーボードを使用する場合、これによって、アイコンがフォーカスを得る最初の要素になります。
- ページ・オプションのメニューが表示されるダッシュボード・ページの**「ページ・オプション」**ボタンは使用できません。
- ダッシュボード・ページがリフレッシュされると、別のページに移動した場合でも、フォーカスの場所は保持されません。[Tab]キーを押して、フォーカス可能な項目間を移動する必要があります。
- トレリス・ビューは、ダッシュボードに表示するとピボット表ビューに変換され、その際に次の変更を伴います。
  - 内部グラフの属性列は、ピボット表ビューには含まれません。
  - メジャー値はピボット表ビューの新しい粒度に集計されます。

デフォルトでは、Oracle BI EE はアクセシビリティ・モードを使用しません。各ユーザーは、サイン・インするとき(キーストロークを使用したサイン・インを参照)、またはサイン・イン後に次の手順を使用することによって、アクセシビリティ・モードを有効にするかどうかを決定できます。

1. **「次としてサインイン」**領域の自分のユーザー名がフォーカスされるまで、[Tab]キーを押してグローバル・ヘッダーを移動します。
2. [Enter]キーを押して[Tab]キーを押し、**「マイ・アカウント」**リンクを強調表示します。
3. [Enter]を押して、「マイ・アカウント」ダイアログを表示します。
4. [Tab]キーを押して、「プリファレンス」タブを選択します。
5. **「アクセシビリティ・モード」**オプションに達するまで[Tab]キーを押し、タブのフィールドを移動します。
6. 矢印キーを使用して**「オン」**オプションを選択します。
7. [Enter]キーを押して変更を保存し、ダイアログを閉じます。
8. ページをリフレッシュし、ページがアクセシビリティ・モードで表示されることを確認します。

キーボード・ショートカット

アプリケーションのキーボード・ショートカットについての複数のトピックがあります。

この項では、ショートカットに関する次の情報について説明します:

- Oracle BI EE と Oracle BI Publisher のキーボード・ショートカット
- Oracle Business Intelligence ダッシュボードでの移動

Oracle BI EE と Oracle BI Publisher のキーボード・ショートカット

キーボード・ショートカットを使用すると、アプリケーションでの作業速度が速くなります。

Oracle BI EE でも BI Publisher でも、ソフトウェア・アプリケーションの多くで使用されている標準的なキーボード・ショートカットがサポートされます。また、両コンポーネントとも、コンポーネントに固有のタスクを実行するショートカットを用意しています。次の表に、Oracle BI EE と BI Publisher で使用する一般的なキーボード・ショートカットを示します。

Freedom Scientific JAWS または他のスクリーン・リーダー・プログラムを使用する場合、キーストロークの組合せを使用してダッシュボードを移動するには、まず、仮想 PC カーソルを無効にする必要があります。ダッシュボードの表オブジェクト内の移動などでは仮想 PC カーソルを有効にする必要があります。

キーボード・ショートカット	結果
[Ctrl]+[Alt]+[G]	グローバル・ヘッダー内の最初のフォーカス可能な要素(「コンテンツにスキップ」リンク)に移動します。このリンクによって、グローバル・ヘッダーで使用可能なオプションを無視し、「ホーム」ページのメインの部分で使用できる機能に移動できます。
[Ctrl]+[Alt]+[D]	グローバル・ヘッダーのダッシュボードのポップアップ・メニューに移動します。[Enter]キーを押して、表示するダッシュボードを選択するメニューを表示できます。
[Ctrl]+[Alt]+[P]	タブが表示されている場合、現在のダッシュボード・ページ・タブに移動します。ダッシュボードのページが 1 つのみの場合、ページ・タブは表示されません。
[Ctrl]+[Shift]+[S]	次のセクションの最初のフォーカス可能な要素に移動します。ダッシュボード・ページの場合、最初の要素は縮小アイコンです。
[Ctrl]+[Shift]+[U]	前のセクションの最初のフォーカス可能な要素に移動します。ダッシュボード・ページの場合、最初の要素は縮小アイコンです。
[Tab]	フォーカス可能な次の要素に移動します。
[Shift] + [Tab]	フォーカス可能な 1 つ前の要素に移動します。
[↓]	次のメニュー・オプションに移動します。
[↑]	1 つ前のメニュー・オプションに移動します。
[Enter]	URL またはアクティビティが関連付けられているリンク、イメージまたはボタンにすでにフォーカスがある場合、アクティビティをトリガーします。
[Esc]	フォーカスが置かれているメニューを閉じます。

次の表に、Oracle BI EE のダッシュボードおよび BI Publisher のレポート内を移動するキーボード・ショートカットを示します。

キーボード・ショートカット	結果
[Alt] + 上向きまたは下向き矢印	ドロップダウンまたはコンボ・ボックスを開きます。
[Ctrl] + 上向きまたは下向き矢印	コンボ・ボックス内の次の項目または 1 つ前の項目を表示します。

次の表に、BI コンポーザ・ウィザードをナビゲートするキーボード・ショートカットを示します。BI コンポーザを使用した分析操作を参照してください。

ノート: BI コンポーザ・ウィザードの「カタログ」タブに表示されているカタログ・ツリーは、表として解釈されます。ツリーをナビゲートするには、ご使用のスクリーン・リーダー・プログラムのテーブル・キーストロークを使用してください。

キーボード・ショートカット	結果
[Alt]+[Shift]+[B]	「**戻る**」ボタンに移動します。
[Alt]+[Shift]+[C]	「**取消**」ボタンに移動します。
[Alt]+[Shift]+[L]	「**終了**」ボタンに移動します。
[Alt]+[Shift]+[X]	「**次へ**」ボタンに移動します。
[Alt]+[Shift]+[M]	コンテキスト・メニューに移動します。たとえば、カタログ・ツリーでアイテムを選択して、[Alt]、[Ctrl]、[M]の各キーを同時に押すと、メニュー・アイテムを展開および縮小するオプションが付いたメニューが表示されます。
[Alt]+[↓]	ポップアップ・ウィンドウで一つずつメッセージを読み取ります。

ホーム・ページでの移動

キーボードを使用してホーム・ページをナビゲートできます。

Oracle BI EE へのサイン・イン後または Oracle BI EE の他の場所から移動してホーム・ページを表示した場合、[Ctrl]+[Alt]+[G]を押して、ホーム・ページの左上隅の**「コンテンツにスキップ」**リンクにフォーカスを置きます。

1. Oracle BI EE へのサイン・イン。
2. [Ctrl]+[Alt]+[G]を押して、ホーム・ページの左上隅の**「コンテンツにスキップ」**リンクを表示します。
3. 次のいずれかを押します:
   - ホーム・ページのデフォルトの開始位置である、グローバル・ヘッダーの下の左上隅にある最初のリンクに移動するには、このリンクで[Enter]キー。
   - グローバル・ヘッダーの最初のフォーカス可能な要素に移動するには、[Tab]キー。
4. [Tab]キーを押して、ホーム・ページの要素間を移動します。

Oracle Business Intelligence ダッシュボードでの移動

キーボード・ショートカットの使用は、アプリケーションを素早くナビゲートするのに役立ちます。

キーボード・ショートカットをいくつかの方法で使用して、ダッシュボードをナビゲートできます。次の手順は、キーボード・ショートカットを使用して、ナビゲートする 1 つの方法の例です。

1. Oracle BI EE へのサイン・イン。
   - 最初にホーム・ページが表示されたら、キーストロークを使用してダッシュボードを表示します。[Alt]、[Ctrl]、[D]の各キーを同時に押してグローバル・ヘッダーの「ダッシュボード」メニューに移動し、[Enter]キーを押してメニューを表示し、[Tab]キーまたは矢印キーを押してダッシュボード名を移動してから、表示するダッシュボードの名前で[Enter]キーを押します。
   - ダッシュボードが表示されたら、次のステップに進みます。
2. 目的のダッシュボード・ページにナビゲートします。
   a. [Ctrl]+[Alt]+[G]を押して、**「コンテンツにスキップ」**リンクを表示します。
   b. [Tab]キーを押してグローバル・ヘッダーを移動し、ダッシュボードの最初のページに相当するタブに移動します。

      ページ・タブがない場合、ダッシュボード・ページの最初のフォーカス可能な要素に移動します。
   c. [Tab]キーを押してダッシュボード・ページ間を移動します。最後のページで[Tab]キーを押すと、ダッシュボード・ページ・メニューにフォーカスが移ります。
   d. 適切なページ・タブにフォーカスがある状態で[Enter]キーを押し、ダッシュボードのそのページを開きます。
3. [Ctrl]+[Shift]+[S]を押して、次のセクションの最初のフォーカス可能な要素(縮小アイコン)に移動します。
4. [Tab]キーを押して、現在のセクション内の次のフォーカス可能な要素に移動します。
5. [Ctrl]+[Shift]+[S]を押して、次のセクションの最初のフォーカス可能な要素に移動します。
6. セクションの縮小および展開アイコンにフォーカスがある状態で[Enter]キーを押し、現在のセクションを縮小します。
7. 表またはピボット表でナビゲートするには:
   a. [Tab]キーで表を選択します。
   b. [Tab]キーで表のヘッダーを移動し、そこにあるメニューを選択します。
   c. 表にフォーカスがある状態で矢印キーを押し、表の列および本体のセルの間を移動します。
   d. 本体のセルにフォーカスがある状態でヘッダー行のドロップダウン・メニューにアクセスするには、[Tab]キーを押してから[Enter]キーを押し、最初のヘッダー行のメニュー・オプションを表示します。[Tab]キーを押して、矢印キーでメニ

ュー内のオプションを強調表示し、[Enter]キーを押してオプションを選択します。

アクセシビリティに対応した設計

様々なユーザーが消費するコンテンツを作成する場合、障害を持つユーザーへのサポートを提供できるように設計する必要があります。

アクセシビリティ・サポートは、世界中のいたる所で法的要件となっています。

異なる障害を持つ様々なユーザーが消費するコンテンツを設計する際に使用できる一般的なガイドラインがいくつかあります。これらのガイドラインを、Oracle BI EE やその他のアプリケーション用に作成するコンテンツに適用します。Oracle BI EE に固有の機能にも注意し、作成するコンテンツがアクセシビリティ要件を必ずサポートするようにする必要があります。

この項には、アクセシビリティに対応した設計に関する次のトピックが含まれています:

- 一般的な情報の入手
- よくある誤解の回避
- 推奨されるベスト・プラクティスの踏襲
- アクセシブルなコンテンツに関する一般的なガイドラインの準拠
- アクセシブルなダッシュボードの設計

一般的な情報の入手

アプリケーションについての情報は様々なドキュメントにあります。

IT 産業におけるアクセシビリティに関する情報は、出版されている様々な書籍から得ることができます。このガイドでは、それらの情報を繰り返すつもりはありません。様々な規格や法律(特に World Wide Web Consortium(W3C)や米国リハビリテーション法第 508 条)がドキュメントになっています。

よくある誤解の回避

テクノロジとアクセシビリティについて特定の想定をしている設計者が多くいます。

よくある誤解には次のようなものがあります:

- HTML のコンテンツは自動的にアクセシブルなコンテンツになります。
- アクセシブルなツールは自動的にアクセシブルなコンテンツを作成します。
- 自動化されたテスティング・ツールは、アクセシビリティを確実に判断できます。

しかし、これらの想定はいずれも正しくありません。開発者は、HTML を使用してアクセシブルでないコンテンツを作成できます。アクセシブルなコンテンツを生成できるツールがデフォルトではそのように動作しない場合もあれば、既存のアクセシブルなコンテンツ内でアクセシビリティ機能を無効にするオプションを開発者が選択できる場合もあります。自動化されたテスティング・ツールは、必ずしもエンド・ユーザーが行うのと同じようにコンテンツと対話するわけではありません。その結果、アクセシブルな要素をアクセシブルでないと誤ってレポートする可能性があります。したがって、アクセシビリティは、最終的にはコンテンツ設計者が責任を負います。コンテンツの作成時、設計者はよく行われる特定の操作に注意し、コンテンツがすべてのユーザーにアクセシブルであるようにします。

推奨されるベスト・プラクティスの踏襲

ダッシュボードを最も有効に使用するためには、次の基本ガイドラインに従ってください。

ダッシュボード・ページのコンテンツを構成または作成する場合、推奨される次のベスト・プラクティスについて考慮してください:

- ティッカはサポートされていないため、使用を控えます。
- ダッシュボードを保存する場合は、ユーザーがアクセスしやすい適切な場所に必ず保存してください。他の名前と他の場所でのダッシュボードの保存を参照してください。
- ページの双方向性と複雑性を減らします。たとえば、プロンプトやドロップダウン・メニューの数を制限したり、セクションのドリル・インライン機能の使用や多数の行を表示する表の構成を避けます。

アクセシブルなコンテンツに関する一般的なガイドラインの準拠

障害には様々なものがあるという事実および1人の人間が複数の障害を持っている場合があるという事実を常に考慮に入れてください。

様々な障害の程度(様々な色覚異常のタイプなど)があるということにも注意する必要があります。設計の際、これらの可能性をすべて考慮に入れる必要があります。

この項には、次の設計の一般的な分野に関するガイドラインが含まれます:

- フォントの選択
- 色の選択
- 色のコントラスト

フォントの選択

表示に最適なフォントを選択すると、ユーザーが情報を理解するのに役立ちます。

視力の弱いユーザーは、多くの場合、画面拡大ソフトウェアを使用して画面を読み易くします。使用するフォントは、アクセシビリティ・ツールで20倍に拡大されても判読可能である必要があります。フォントには、拡大すると適切に表示されないものと、適切に表示されるものがあります。

Oracle BI EEのダッシュボードでは、スタイル・シートを使用して標準的な表示定義を設定します。これらのスタイル・シートで、適切に拡大されるフォントが常に選択されているようにします。そのようにすると、コンテンツの作成者によって、アクセス可能なフォントを使用するよう自動的にデフォルト設定されます。

色の選択

色覚欠損のユーザーがデータを正しく解釈できるよう、データ出力の色を慎重に選択します。

色覚異常には、赤と緑などのような一般的な2つの色の区別がつきにくいもの(最も一般的な色覚異常)から、灰色と黒の濃淡のみがわかる全色覚異常まで様々なタイプがあります。重要な情報の伝達に色のみを使用すると、特定のユーザーが関連するすべての情報に完全には気付かない可能性があります。視覚障害者は、色によって伝達される情報を代替テキストの形式で示される必要があることは言うまでもありません。

開発者としては、重要な情報を色のみで示すコンテンツを作成しないでください。アクセスできないデザインの1つの例に、テキストを赤に色付けすることでのみ負の数値を表すことがあります。もう1つの例には、コンテキスト情報が色のみで示される

(よい場合は緑、悪い場合は赤)、典型的なストップライト・スタイルのインジケータがあります。

色とテキストの使用

色分けされたテキストにより、表示されるデータがいっそうわかりやすくなります。

同じ情報を表す別の方法が含まれている場合、デザインに色を使用できます。たとえば、マイナス記号やカッコを使用して表やピボット表で負の数値を表すことができます。ストップライト表示の場合、色以外に説明テキストや異なる形状のアイコンを追加できます。「ステータス: 良」などのテキストを含めることができます。「よい」を表す緑色の円、「警告」を表す黄色の三角、「悪い」を表す赤色の八角形を含めることができます。

色のコントラスト

同系色の微妙な濃淡を区別できない色覚異常もあるため、すべての画面要素の全体的な色彩設計では、色の対比を大きくする必要があります。

色の明度のコントラスト比が最低でも 4.5:1 になるようにする必要があります。たとえば、薄い灰色の背景に濃い灰色のテキストを使用するのではなく、白い背景に黒のテキストを使用します。

支援のための次の Web サイトを活用できます:

- このサイトには、コントラストが適切なレベルかどうかをテストできるツールがあります:

  `http://www.paciellogroup.com/resources/contrast-analyser.html`

- このサイトには、様々なタイプの色覚障害のユーザーに Web サイトがどのように見えるかを確認するためのツールがあります:

  `http://colorfilter.wickline.org/`

アクセシブルなダッシュボードの設計

ダッシュボードは大量の情報を伝達するための主要なフォーマットであるため、最大限に理解できるよう設計することが重要です。

アクセス可能なダッシュボードを設計するには、次の項のガイドラインを使用します:

- 一貫した構造の奨励
- ダッシュボード・ページの単純化
- 画面上のコンテンツの機能強化
- 代替表示の提供
- 禁止されている機能の回避

一貫した構造の奨励

ダッシュボードに一貫した構造を使用することで、ユーザーには見慣れた形式でデータが表示されます。

次のガイドラインを使用して、ダッシュボードに一貫した構造を使用するよう努めます:

- 複数のダッシュボードに同様の機能やコンテンツが含まれる場合、それらのリンクやフォームをすべてのダッシュボードで同じ位置に配置します。

- 同じ機能やリンク先のボタンやリンクには同じテキストとラベルを使用します。グラフィック要素を使用して、コントロール、ステータス・インジケータまたは他のプログラム要素が表されている場合、各グラフィック要素に割り当てられている意味が、ダッシュボードの全ページで一貫しているようにします。
- 同じ機能に使用されているアイコンや他のグラフィックに同じテキストを関連付けます。グラフィックは支援技術では読み取ることができず、弱視のユーザーはグラフィックの意味を認識できない可能性があります。したがって、すべてのグラフィックに、機能を表す追加テキストを付ける必要があります。

  グラフィックには ALT テキスト(グラフィックに関連付けられている、用途を適切に説明するテキスト)を付ける必要があります。この代替テキストは、HTML コードの要素の ALT 属性で指定されます。グラフィックが美術的な目的のために存在し、機能上意味がない場合でも、要素に null の ALT テキスト(`alt=""`)を指定し、テキストをスキップする必要があることをスクリーン・リーダーが認識できるようにします。

  ALT テキストの作成がサポートされない他のグラフィック要素の場合、上部または横に機能を表すテキスト・フィールド(「下の表示ビューを選択」など)を含めます。

ダッシュボード・ページの単純化

ダッシュボード・ページを単純にしておくなら、ユーザーにわかりやすくなります。

ダッシュボード・ページが単純になるよう努めます。1 つのページに多数のオブジェクトを含めないようにします。複雑でナビゲートが難しい 1 つのページではなく、ナビゲートが簡単な複数のページを含めます。

画面上のコンテンツの機能強化

ダッシュボード様々な方法で機能強化できます。

次のガイドラインを使用して、ダッシュボードの画面上のコンテンツを機能強化します:

- グラフで色の明度差が大きくなるようにするのと同様に、ダッシュボード・ページに色付きまたはパターン付きの背景を使用しません。
- ダッシュボードのヘッダー領域および複数ページのダッシュボードのタブに、背景とテキストとの高コントラストをサポートするスタイルを使用します。
- 最も重要なコンテンツをページの最上部に配置し、スクリーン・リーダーのユーザーが画面全体を移動しなくてもコンテンツにアクセスできるようにします。

代替表示の提供

アクセシビリティ・ツールを使用するユーザーにアクセス可能なデータを提供することは、すべてのユーザーが同じ情報を受け取れるようにするために重要な方法です。

インタラクティブな GIS マップやオーディオ・ビデオ・フィードなどの元来視覚的な表示の場合、これらの要素を直接アクセス可能にする方法はありません。この種のコンテンツをデプロイする場合、同様の相互作用機能を持った、同じ情報をテキスト・ベースで表したものも用意する必要があります。通常、これは、関連するデータ(ある場合)で対応する表またはピボット表を作成するか、オーディオビジュアル・コンテンツに対してはキャプションとテキストの説明を付けることを意味します。

分析の説明の付加

ダッシュボード・ページでは、説明フィールドに基づいてオブジェクトに説明テキストが生成されます。

作成する各分析に、機能の短い説明が含まれていることを確認します。この説明は、分析の「保存」ダイアログの**「説明」**フィールドに指定します。

ダッシュボードへのスタイルの使用

Oracle BI EE システムで使用できるスタイルおよびスキンのセットにより、ダッシュボードの全体的なルック・アンド・フィールが制御されます。スタイルおよびスキンをアクセシビリティのために使用できます:

- カスタムのスタイルとスキンの作成
- ダッシュボードへのスタイルの適用

カスタムのスタイルとスキンの作成

カスタムのスタイルとスキンを作成して、デフォルトのフォント選択、高コントラスト色スキームなどのアクセシビリティをサポートする標準設定を実装できます。

デフォルトのスタイルをコピーして修正することで開始できます。これらのファイルを修正することによって、特定の障害をお持ちのユーザーに役立つデフォルトの色、コントラストおよびフォントを選択できます。

ダッシュボードへのスタイルの適用

すべてのダッシュボードに対するデフォルト・スタイルを設定することも、個々のダッシュボードに適用するスタイルを選択することもできます。

アクセシビリティの必要なユーザー向けに特に最適化されたコンテンツを含むダッシュボードのセットを作成できます。必要なユーザー用に、1 つ以上の個々のダッシュボードに特別なアクセシビリティ用スタイルを適用することもできます。

特定のダッシュボードのダッシュボードのプロパティ・ページでスタイルを指定します。

禁止されている機能の回避

2Hz から 55Hz までの周波数で点滅する要素やアニメーションを過度に使用する要素(証券ティッカ表示ウィジェットなど)などの特定の機能は絶対に使用しないでください。

法律で規定されたデザインの禁止事項に精通し、それらの要素をダッシュボード・ページに含めないようにします。

アクセシビリティを高めるオブジェクトの使用

オブジェクトを使用することで、データ・プレゼンテーションをより利用しやすくすることができます。

この項には、アクセシビリティを高めるオブジェクトの使用例を示す次のトピックが含まれています:

- ビュー・セレクタを使用したコンテンツの切替え
- カスタム HTML マークアップ用の静的テキスト・オブジェクトの使用

ビュー・セレクタを使用したコンテンツの切替え

アクセシビリティの必要なユーザー向けに特に最適化された追加コンテンツの作成が必要な場合があります。

すべてのユーザー・コミュニティに最も機能に富んだコンテンツを提供する場合、ビュー・セレクタが便利です。

たとえば、色を使用してスライス内の仕事のカテゴリを示す、HR 円グラフという名前のビューがあるとします。このグラフが、ダッシュボード・ページのデフォルトのビューとします。ページにビュー・セレクタを含めて、データの表示に色ではなくクロスハッチングを使用する表またはグラフをユーザーが選択できるようにします。グラフに、各スライスが表す実際の値を示すテキスト要素を追加したり、背景グリッドを単純にしたり、説明的なタイトルを含めたりできます。

カスタム HTML マークアップ用の静的テキスト・オブジェクトの使用

デフォルトの HTML 出力を変更することで、ユーザーのアクセシビリティを向上させることができます。

スクリーン・リーダーは通常、標準 HTML マークアップを使用して、ページのナビゲートに関する情報を指定します。最も一般的に使用されているマークアップ・タグの 1 つは、ヘッダー・タグです。アクセシビリティ・モードが有効な場合、Oracle BI EE ダッシュボードのデフォルトのタイトル・ビューには、Title タグが含まれます。ただし、タイトル・ビューの設計に他のタグを追加することはできません。

静的テキスト・ビューを使用してタイトル・ビューを置き換え、同時に必要な HTML タグを指定します。「結果」タブの「静的テキスト」エディタの**「HTML マークアップを含む」**ボックスを選択し、適切な HTML コードを入力します。Oracle BI EE システムのスタイル・シートに含まれているスタイルにアクセスし、残りのダッシュボードに一貫性を持たせるようにします。

たとえば、ダッシュボードにヘッダーを作成し、H3 タグでマークされたタイトルを入力して、その下に横罫線を挿入できます。静的テキスト・ビューに対して次の HTML コードを入力します:

```
<H3>My HR Report</H3><HR WIDTH=650 ALIGN=LEFT>
```